



AC            Zoku Gunsho ruiju  
145  
G856  
1923  
v.19  
pt.2

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---







# 續羣書類從

第拾九輯中

東京  
續羣書類從完成會



AC  
145  
G856  
1923  
v. 19  
pt. 2

續群書類從第拾九輯中目次

蹴鞠部

卷第五百三十六

内外三時抄

蹴鞠條々大概〔蹴鞠十箇條〕

卷第五百三十七

晚學抄

蹴鞠百首和歌

卷第五百三十八

蹴鞠百五十箇條

卷第五百三十九

蹴鞠之目錄九十九箇條

卷第五百四十

松下十卷抄

鷹部

卷第五百四十一

鷹經辨疑論上

同 上中 ..... 二〇八  
同 上下 ..... 二三四

卷第五百四十二

小倉問答〔定家問答〕

基成朝臣鷹狩記

卷第五百四十三

鷹口傳

鷹聞書

卷第五百四十四

鷹秘抄

卷第五百四十五

養鷹秘抄

卷第五百四十六

責鷹似鳩拙抄

齋藤朝倉兩家鷹書

卷第五百四十七

根津家鷹書〔根津松陽軒記〕〔省略〕

卷第五百四十八

荒井流鷹書

卷第五百四十九

龍山公鷹百首〔東求院殿龍山公鷹百首〕

一八八

三七八

四五九

卷第五百五十

後普光院殿鷹百韻連歌	四九三
梵燈菴鷹詞百韻連歌	四九六
客鷹和歌文字抄	四九九

續群書類從第拾九輯中目次終

續群書類從卷第五百三十六

總檢校保己一集

男源忠寶校

蹴鞠部一

内外三時抄目錄并序

諫議大夫開國縣公藤原朝臣雅有撰

夫蹴鞠者三國翫好の藝。万機安寧の術なり。是に依て聖帝明王もこれをすてず。忠臣賢士もみな用う。この故にかみ禁中洞裏よりはじめて。宸遊代々すたれず。下民間洛外にいたるまで。興宴家々にさかり也。こゝに拾遺亞相といふ人あり。この道に獨歩し此藝に尊長たり。このありわざ古今にこえ。其德神明に通ぜり。ふかく未萌をてらして。我跡のつくべからざる事をかぐみ。とをく未兆を察て。他家のつたふ

べきことを存す。しかるに高祖父刑部尙書幸に此藝に達して。ついて其譽をあらはす。亞相これを感じて譜第の跡とし。これを推して聖皇の師とす。夫よりこのかた。當家相續してほと／＼國師たり。予はじめて五歳にて早く此道にたづさはり。七歳にして天骨の名かりて柳營の歡宴に接し。十二にしてしらく代及の業をうけて茨岫の勅喚に應ず。自爾このかた猶數ヶ年。廿五才の冬にいたるまで。もはら嚴君に事こと晨昏にをこたらず。枕を扇ぎ席をあたいむる事。こゝろざしかの純孝におよばず



といへども。造次顛沛にあひしたがひて。其勤勞をわすれずといふ事なし。しづかに學窓にむかふ時は。ひとりこの藝をさぐりとふらひ。廣く宴筵にまじはる日は。人と此道を談ずることをさく。日夜に嚴旨をうけ。旦暮に教訓をかうぶる。其詞ふかく神に約してわすれざれば。其說猶筆を執ても未記。しかるに年々に子孫に災して。日々に心肝をなやます。たゞ綿々たる悲涙の不休のみにあらず。また恨らくば代々の秘傳のまさに絶なむとすることを。こゝに一子を養育して。吾道を付屬せむとするに。彼猶幼稚にして我已に老たり。仍書記の外に一期にうくる所の口傳を記して。三十卷の秘書をつくる。名て内外三時抄といふ。内外に嫡庶をわかち子弟をへだつ。三時には初中後の分を定て次第梯登を辨ふ。しかりといへども事多は三時にわたりて三卷にわかれ。説少

は三時におよばずして一兩卷に檢す。内後は嫡家一人これを存し。外初中は庶弟おなじくこれをさづくべし。しかれども志したがひ。器によりて猶淺深あるべし。又庶子弟子たりといふとも。器瑚璉にかなひ。心ざし金石に類せば。後分内篇たりとも。少し是をさづけよ。凡これは假令の大綱なり。未及再話。たゞそらに思案して次第にこれを記す。内外の分猶錯亂をいたし。三時の別また前後せしめむ歟。いかにいはむや。崑玉つくることなく酈金餘あり。漏脱さだめておほく。廢忘又しるさをや。但内外の篇を存し。三時の分を勘て。幽微の類をばすべからく可准知事はことを盡さず。ことばはこゝろをつくすことあたはず。是舊典の所載なり。只心情をみがきて先達の心を得よ。筏をすてゝ岸につき。指をわすれて月を見るは。内教の所談なり。ふかく義理に本づきて。一端の



文にとゞこほることなかれ。文非文。々々文な  
ることを存せよ。其年首尾前後なけれども。書  
記には首尾前後あり。如此のたぐひ。ねむごろ  
に思量すべしといふことしかり。目錄略之。  
不抄出。

鞠場篇

庭作

塞縁下

石壘

傍前裁

懸樹

葭

明障子

網

鋪設

日隠

竿

鞠屋

鞠足屋

縁

庭作

朝云。鞠場之廣狹は定分なし。屋により所にし  
たがふ。先高下なく平地なるべし。いたく堅は  
わろし。石なきを能とす。砂ふかき沓入て惡  
し。もとの土をすこし取のけて。能土を砂にま  
ぜて。よくく突かたむべし。繩を引。水はか

りにて高下なくすべし。さて雨の下時水のた  
まりたるを見て。くぼき所をうむべし。其上に  
あらからずこまかならず。よき程なる砂を一  
重まくべし。砂は川河海濱かはれり。其を計べ  
し。凡庭作はよき程して先可立木。庭作しおほ  
せてのちに木をたつれば庭損。懸をうへおほ  
せてのち治定すべし。木のもと昔はすこし  
こうもりて尻をとりを蹴けり。今はむかひつ  
めによりにくしとて平地にす。人のこゝろに  
よるべし。

晝云。鞠場は家に隨て心に任せずといへども。  
むねと庭を結構すべくば。四方なるを能とす  
べし。其故體書云。圓鞠方場云々。然者四方なる  
べし。分量は屋にしたがへば無力ことなり。  
夕云。庭に廣略二あり。式の寸法はわざと懸を  
本として屋を立さしむ。外には更に不可有其  
分。又懸の寸法によりてまた増減あるべし。然

而先式の寸法二丈三尺ならば。惣じて鞠場の略は堅横五丈六尺なり。廣は四方八丈九尺なり。木の間若二丈五尺。若二丈一二尺ならば。其に隨て増減すべし。是家秘説なり。この寸法の子細は。懸のところにてこれをしるべし。

塞縁下事

朝云。外塞なからむ所は不及子細。さならぬ大床若縁下鞠ころび入ぬれば煩也。ふたぐべし。竹を二にわりて。籬の様に二ふちに柱をも二にてすべし。又ひきゝ縁には一にてもす。また竹をまろながら。木をも四方に作りてもす。縁の高下に隨ひて一も二も三もすべし。如此事は大綱を存ぬれば見能様に計ふべし。さりとて先例なき今案はすべからず。此一段のみにかぎらず。自余もみな此義存べし。

石疊

朝云。溜の石疊は庭廣く懸遠くは取のくべか

らず。檐ちかき懸ならば可取去。但し五六尺ならばのくべし。七八尺ばかりならば。庭のかたばかりをとるべし。又二ならべあるは一巡をとることもあり。庭に隨て計べし。

鞠場之傍之前栽

朝云。庭廣からむには取のくべからず。口傳集にも前栽を不損して鞠と有。されば有無庭の様によるべし。宗教卿白河宿所にぞ朝芝をふせたりと聞。未見先例。かたゝゝ其謂なし。朝鞠雨後の會に露ありて鞠しめる。人の居ためもわろし。木外鞠延などするにもすべりて返ゝゝ無用事なり。但懸遠く前栽など有て。野に山などにふせたらむを取のくべからん。

懸樹

朝云。式の懸とは櫻柳松蛙手といふ。是兒女士の説也。また説。櫻柳松かへと云へり。此説に付て。宗教卿于時殿上人。去安貞二年四月廿四日將軍

家<sup>大納言入道</sup>今御所也。南庭に切立の事有き。下官相共に

奉行を承る。然に彼の所行をみむがために。一

向彼卿に打任せて一義をも不出。前修理權大

夫<sup>時房</sup>臣。むねとさたせしむ。此説に在之。良櫻。

巽柳。坤松。乾鷄冠木なり。後に羽林<sup>教詔</sup>朝臣。京に

てさゝて以外難之。しかるに其後一卷書とい

ふものを作出て。件説とてまた改て。良柳。巽

櫻。坤蛙手。乾松。如斯立て種々の才學をいふと

かや。今按。新儀之條顯然歟。前後相違勿論な

り。自元相傳之説ならば。何ぞ將軍家の南庭晴

儀にしかのごとく立ざらむや。以て可知々々。

當流には良櫻。巽柳。坤蛙手。乾松なり。是南庭

の植様なり。また同木若大小各二本あらば角

ちがへにたつべし。また同木四本又同木三本

常事なり。雜木は榎棕梨槻。これみな有先例。

公庭に猶被立。况私所哉。式木雜木植まざる

事また常事なり。木之間二丈貳三尺。まめやか

の大木などは四尺にも可植。また庭せばく木  
少くば二丈にも可植。二丈の内は未見聞。但如  
法の好士の庭せばくて。さりとはなど頻に  
懇望せば沙汰の限なり。植もすべし。木の面裏  
を見ることよく／＼沙汰すべし。やすくみゆ  
るもあり。又見わきがたきもあるなり。枝のい  
だきたるかたを面とす。枝一切つればはたと  
面かはりする事あり。よく／＼木を廻て案計  
べし。木よりのきなく。繩にて寸法を取。ゆがみ  
をも直べし。木すがたは大様犬の居たる様な  
るべし。本と梢とかはりたる木あり。様に隨て  
本につきこずゑに付て可立。またよく切成ば  
なをる事もあり。是等は練習にて被知なり。檐  
の寸法は定出る事なし。庭の廣狭による。いか  
さまにもすこしはのきによせて立也。凡庭の  
様。木の寸法。穴を堀こと。人に問ことあるべ  
からず。但一流の宿老もしは可然上手故實の

人などあらば相談すべし。木を透事は。われ達すとおもふとも。人々に相談して可透。是故實なり。木を透ことは上手の所爲なり。然ば我も卑下し又人をも賞するよしなり。最下の枝は寸法定たり。立烏帽子のうへ一尺余に可計。假令七尺余ばかりなり。後枝は切べし。其も様によるべし。ひきくとも木にそひておいのぼらばくるしからず。若屋の上檐の下に指入。よこさまなる枝は尤可切なり。木を透はむねと鞠の道あらせむため也。こすべきところ。ながすべき所。つたはすべきところ。はしらすべき所。いかすべき所。はねさすべき所。鞠になへかゝらすべき所。加様の所を存て可透なり。何となくしげきところ同様にて。かさなりまた並たる枝。さか枝。若はみにくき枝。ゑぼしにさはる枝等を切べし。凡枝一切不切に善惡出來物なり。よく／＼可思惟。又切かぶの口。

皮のはげたる所などに。壁をぬり芝をふせたるなどすること。間々近來出來。これ鞠方の故實にはあらず。樹植方の才學也。所詮これら雨露におかされて朽損すれば。からせじとする事なり。まことにさるべし。但切立の松などに壁ぬることぞ心得ね。是はひがごとなり。箒柱に膠する風情か。

予云。數十年懸を植かへ／＼して見るに。古木の大柳を切かぶにして立れば。其切口より雨水入て中朽。虫食て不幾損ず。切口に枝を打付て。そばよりも雨不入やうにして。蠣灰の壁をぬりたるは。はるかに久しく不朽なり。能々水入ぬやうにすべし。

自餘三方の懸事。いまだ式の木植たる先例をうかゞはす。然ばいづれにても同木四本若は兩三本を植。又雜木を立さすべき歟。凡當道の法義分口傳あれども。先規不分明の事をば常



にはせぬ事なり。可得心云々。

晝云。樹は安宅の術。懸は鎮屋の方なり。然ば懸は尤可植物也。されば昔より蹴鞠の家ならねども皆植なり。凡懸は四面に立れども。南庭を以て式木とす。其植様初段にいふがごとし。南面を本とする儀に付て。當流に才學たつる。是心法師今案の説に。南方は鬼國なり。其故に怖魔鎮護の爲に懸を植云々。此義内典はしらず。外書には不可然。其故は書云。聖人南面治天下と云り。南方は朱雀火明の方也。内典には南方灌頂智の方とて宗とすとかや。然ば禁裏仙洞よりはじめて。式屋等皆南面なり。是を恐て木を植たる事なし。左近櫻などは中古より出來歟。其も鎮護の故にはあらずや。大極殿になし如何。又南方には寶生佛の淨土若は補陀落山觀音の淨土云々。必しも鬼國とばかりいふべからず。四神相應の儀にも。南には池を堀

水をながせり。池水なき代には椿を九本植と云々。其も四方に植木あれば。南方の恐に植といふべからずや。又四條流には安貞には良に櫻を立。今は柳を立。異に櫻を植云々。傳聞。柳は卯の木と書たれば春の木とすべし。春は卯の方也云々又良は鬼門の方なり。柳は内典に號魔怖木云々。然ば鬼門の方に立て。鬼魔等を防べしとかや。是誠に一往其謂あるに似たれ共方々難あり。懸は四本を四方四季にかたどること勿論なり。柳の字は誠に

### 冠

朝云。鞠の裝束とて別に無殊事。只尋常之裝束に聊用意計をするなり。冠は不落様によくくしたゝむべし。冠懸は紫糸にてかた手かへしと云組の中の中程に。穴をくみわけて巾子を入なり。さておとがひの下に結也。近來は紙捻にてしあひたり。時儀によるべし。されど

も家には組を本とする也。綏は衛府の人行幸の後朝御會若は警固之時懸之。但警固之比も禁裏の外にては卷纓計にて不懸之。おとなしき公卿は衛府なれども卷纓計にて不綏。是禁裏御會事也。人の心によるべし。

夕云。冠は烏帽子よりは落やすきもの也。よく用意すべし。其様。冠の巾子の本の前に。細き穴を二ならべて開て。紺のいとをよりて本鳥に結つけて。件之穴よりとほして。前にま結にして切也。人に不可見。揚馬に乗人も如此するとかや。冠懸は紫勿論也。但依年齢初中後によりて色に淺深あり。若はふかく。壯は中。老はあさし。又五句以後などには。紺糸にてよつくみ。但紺は汗こき人は顔よごれてわろし。宿老は馬尾をより合てす。故大刑部所被用也。わかきより次第に老者になれば細くなる也。狩衣の袖の結などもさこそあれ。又次第に大きくすべしと云説あり。其

故は若壯之人は本鳥もふとく。額もあながちにはげず。されば細とも可足。老者は髪もなく額もはげあがりて憑なければ。太してつよく結也。細はつよくするにはいたくてわろしと云々。所詮兩説たるべし。太刀二三分計也。管絃せん人は琵琶の三絃箏并和琴の絃を用ゆべし。此三絃のを紙捻はわななし。冠の巾子の本に。前よりつのをこしてかく。(お眼)組はわな有ばわなのうちへ巾子を入れてす。年闌て額はげたる人は。わなのうしろを二二寸ばかりのべて。前のかたをいそびたひの上にかけてすればあぶなからす。俄なる御會に無用意なるには。會者の中に親類弟子若は下人之狩衣水干直垂などの袖括の組を取て懸べし。凡冠懸は初蒔繪弓に卷たる組を取てし出たる也云々。色の淺深大さの程など誠にさりとあぼゆ。

予如法及暮天參東宮御方たりしに。御跣蹴

ありき。冠あやうく覺しかば。下人の烏帽子懸をとりてしたりき。是雖無先例。俄なりしかば懸たりき。有興よし人へ申さ。

### 束帶

朝云。只如尋常聊高く可着之。前のふくらの下をすこし帯にはさむ也。直衣々々冠同之。下襲の裾をばふまれぬほどに。うはてに懸て。不落之様に計べし。有口傳。

劔は撤して鞠場に出べし。笏檜扇同之。襪は常時の絹襪なるべし。又鞠襪をも用事恒のこと也。結緒は例革なり。無用意之時は。車の後の簾のあげ皮を可用。

夕云。大底初に畢。(同前)

但下襲裾に有秘曲。帯につ

よく下うらをはさむ也。人に不可見。爲不落也。襪同初段。但絹襪もまりの襪の形にたちて。うらに白革を付也。絹ばかりはすべりて惡也。白革の襪は束帶之時着べしと云説あれど。

大臣の可令着之由。既に庭訓抄に書れぬれば。たはやすく難用歟。又相公は無苦之様に被記畢。可有時儀。且申入などして着せん事勿論也。結緒も白革云々。但實尋が記には。諒闇也と難じたる事あり。凡諸事吉凶通用のことのみて歟。常の結緒また更若なし。

### 直衣

朝云。禁中后宮春宮坊常事也。仙洞にもまゝ着之。行幸御逗留日。若朝覲又警固之時御會等。皆可着人は直衣卷纓。若綏有人兵衛府事也。凡直衣禁裏にてはゆりたる外は凡人の公卿は無左右着事なし。然而當家には公卿の後又未昇殿の時も。御鞠之時は着直衣也。衣冠は鞠にあつくらはしき故也。

予以此法公卿之後推而可着之由。申談花山院前内府之處。家例雖然。諸事古今異也。無左右着之者。若及御沙汰者。爲後不可宜。可

伺歟云々。仍奏聞之處。所 勅許にて着之。基長侍從爲未昇殿。禁裏御會着之。爲先規註之。

衣冠

朝云。直衣不着人は禁裏の御會等着涿之。(脱字アラン)無別子細。只如直衣。凡直衣々冠の下には冬春は袍。夏秋は單帷等如常。若き人は四月始は若かえての衣。秋は生の衣など着べし。但鞠に生の衣いたく先規少歟。又雖着何有難乎。猶あつくらはしくやあらん。凡束帶直衣々冠等は。皆はた袖ひろくして。布衣などにはにず。然しはた袖と大袖との縫目をとる也。衣文は束帶はいふにおよばず。直衣々冠は始はかきてかがむとて。起座之時引ぬきて出べし。衣文かきたるまゝにて蹴はみにくし。又責伏ればいかにも亂るゝ也。さればみだす也。されども老人の威儀どく若は上さまのいたくをれこたれずして。やがて可入

人などは。衣文引やぶるなどさてはすべからず。着單事依時人に隨べし。委は布布衣所。又警固之時。武官は卷纓綾如右。

布衣

朝云。布衣は尋常の服。當道に所執也。其も只よのつねにたがふことなし。但香の色をぞ長老の用る色にて。荒涼には不着。若重代若さるべき人の此道も相傳たしかに故實ぞむじためる人着べし。こき引のりうらなど汗にわろき間。右のみ用ざる歟。其外ことなる事なし。口傳集等のごとく。尻は常よりはみじかく。四句以前指貫より一寸ばかりみじかく。強仕已後はさしぬきと同分なるべし。指貫は口傳集には恒よりはすこし廣くみじかくあるべしと云々。されど近來短くする人なき也。故相公ぞ短を用意有けると聞し。長をば或腰を折反。或は括さしを折反。又くりあげなどすくりあげと



いふは。わきへをし下て。括にてまさ上て。指貫をもをしあげて括也。小俣必縫べし。不縫ば延足などの時和のすそ出ことあり。括たる指貫の長さは。足のくびより一寸半許たかゝるべし。指貫足くびにしかれて鞠あたるをば。指貫のまりけると云て見苦事也。さればとてあまりたかくて。襪と指貫との間赤脛みゆる殊に見ぐるし。只見よく蹴よき程を計べし。右の方のしたぎをばうしろへをしやりて。ひざにまりのさはるに。あやまりなき程にすべし。又股立はさみ上事常家にはせず。四條の流にし出たり。成平拾遺亞相以下さる事なし。子細口傳集分明也。故宗長卿雅賢卿に習てしはじめたり。又説は彼の佐々木野の家の説也。且親任入道語しは。故四條入道後刑部承元に召出されて見證時。被のそはたさまれたるをみて歸て之後。是は誰説を傳たるぞとて大に被申き。即

親任が又親教入道まさしく承之きと云々。凡此外も彼卿雅賢卿より相傳事少々有之由。世以所知也。故宗長卿は一期にそはたらざる事一度云々。然に宗教卿は常不取之。父子不問。（謂卿）是當流の兼尊律師に宗教卿は傳受之。故上手人執心者絹上めしき。

### 水干

朝云。是又無殊子細。能くびを折付べし。頸紙の肩よりすそを直に折付れば能也。布の單水干などはすきて。わろく折ぬればみにくし。すぐに折付ぬれば。透か四ほそにて能也。紐を結に三説あり。尋常にはうちむすびて。うはかへの下へ入なり。是はまりの時はむねあく也。一には右の紐はうしろなれば。前へ引くだして。うはかへの紐は下なれば。下より左の方より引いだして。むねの上に結之。一には右の紐をば右の下かへの内へ入て。左へ引廻てたもと

より引出て。又左の紐をば右のたもとより引出て。兩方よりむねの上にもろわなに結也。又片わなにも結。三説ながら同也。後説を能とす。これあら馬などへのるも如此するとかや。葛袴常には白き葛也。刷時はすそごととにそめ。或股立腰ぎはなどに繪書事もあり。又練貫の袴是も只白く。又必先繪などもかく。袴をば革にて閉也。我はく韃の革の分也。鞠の取革のごとし。四條流には不開。これもあら馬などに乗人は閉とぞ申。股立前の縫目を閉也。前の膝よりうへを閉也。さがりぬれば延足の時膝に當ていたさなり。冬春は粕。夏秋は帷は白又地白淺黄藍摺などを着也。幼稚人又童形などは水干上下を着也。

(押紙)書云。狩衣は白襖二藍常物也。香は宜物也。

老者若人皆用之。但此道に我はと思人着之。香は共裏又白裏。布單狩衣皆然るべし。柳櫻

等若人尤有興。刷之時は白襖。布衣には冬の帶を裏がへしてする也。是裝束方にも所執也。花田に優の物也。縹白裏おとなしき人用之如此。うらまさりの狩衣をば。端袖と吹反とを折事あり。又夏二藍の布の單狩衣に。白き生の帶をする事あり。是等も裝束の方執する事也。三月はうりより帷を着たる事も有。四月の十日比迄着粕事もあり。可依時之寒暑也。若人は夏白單を着。又四月上旬若かえてとて萌粕(諸説無)を着す。宿老は鞠には冬も帷を用と云説もあり。されど可斟酌。予云。當世皆冬夏用帷。赤汗取帷着用尤有興有例。予云。當世每人帷着用之。古は免後着之。

色布衣のなべらかなるを臨刻限着改事有例。尤可執事也。

直衣

朝云。是殊無別義。京都には如法内々私會之外

不可有事也。承元にぞ故成勝寺にて直垂の御會として上下結構事ありき。革羽記にみえたり。是にも葛袴。狩袴。張裏袴。侍などは襖袴などを着也。直垂上下は袴しあつかふ物也。結を上ばみじかく。たゞはながし。或は腰を折反。或はそばをはさむ。革羽記にも勅定如若。仍御股立をはさまる。仍故相公夾之。今は其を例として。當家にも直垂の時はさむ。何事あらんや云々。又常色を弟子二人などにさする事あり。承元に御弟子二人醫王寧王着之。賀茂松下露掃者。當家爲弟子蹴之。

### 烏帽子

朝云。只やはらかなるをよしとす。こはきは鞠あたればやれ損じ。歸足の時も鞠を走しきて。かたぐゝわろき物也。うすぬりぞよけれど。若人は當時の風儀にそむくべし。油塗とかや云物にてぬらすべし。やはらかなる也。引入事は

可斟酌。古くはわざとも有其興けり。又常にしければ無苦。承元のころ有雅卿は毎度に引入けり。たゞあるよりは能見ければにや好けり。當世は人わらふ作法なればとて。すれば嘲哂の基也。猶豫すべし。只不落之様に能々したゝひべし。老者は馬尾にて烏帽子懸をす。幸平が所行也。革羽にみえたり。烏帽子を引折てもかく。又額留に結てもかく。是はみにくき也。

### 扇

朝云。鞠にはいつも夏扇を持也。當家には束帶の時も夏の扇を持也。彫骨尤爲宜。ことに指ためよき也。細骨勿論也。骨多かさなりたる扇は。指時まろびてわろし。此道の長老ことに年関ては檜骨に檀紙をはりて持之有例。かゝる振舞はいかさまにも五旬以後事也。仍荒涼に不可持之。扇仕事は。初參又極信之時などは。いかに炎暑なりともたやすく仕べからず。を

のづから仕時は左にてつかふべし。凡扇は身をはなつべからず。座などに打置ことせぬこと也。但懷中も煩し。指もことごとくしければ。近來每人座にかくしをく。非例のよしは存ながら。誰々もさてもある也。是よき事にはあらず。指事は彼篇に載之。

夕云。直衣々冠に指扇事。普通には無其儀といふ也。然而實には有也。如刀左腰に可指。在扇篇。努々人に不可見云々。

疊紙

朝云。疊紙は能々用意あるべし。落しぬれば失禮也。不持にはしかじ。不持して難澁の事あらば能々懷中すべし。時に取出てたかくかむみぐるし。かた／＼にむかひて用意してかむべし。木に立て疊紙取出てかむ事なし。若はなたりし。衲ベナなど常にたる人は。ふかく懷中にはさみて持べし。それもあらはにてかみなどすべ

きにあらず。木の後に立かくれ。もしは便宜の所に、げいでゝすべし。疊紙は廣くはせず。檀紙を四に折てすべし。三に折人あり。それは餘にひろくてわろし。

予云。宗繼朝臣相州之亭會に。常に木に立ながら不憚高聲にかむ。諸人難之。歸聞歎之間後々止之云々。比興事也。

手巾

朝云。老者若は肥滿の人。わかき人もことの外に汗多たる人などは。無力事なれば。持こと何條事有哉。あらはにひろげひらめかしなどすべからず。

夕云。若は老者若は肥滿の人は可持之。さればとて露顯しひらめかしなどすべからず。且由緒有。應和二年四月廿八日。御仁壽殿。侍臣蹴鞠。昌子親王以汗巾令賜侍臣等云々。於鞠先例殊に殊勝也。可秘之。



啓

朝云。履は堅柔人の好によるべし。古も然あり。又庭の様によるべし。筵道若はいたくかたき庭の然も小石まじりたるには。かたき履わろし。あやまり有。やはらかなるよしとても。やがてひらみぬるもわろし。平みぬる沓は延足もわろく。又ぬけやすき也。普通の沓よりはちと廣くて。はなすこしながきが能也。はなながきは平に見ゆる也。それを近來の人鞠の沓はく。なをひらむるとて。わざと押平めなどけしからずする事あり。不可然。きびすは淺がよき也。深が内へまくりたるなどは。いかにもきびすの上のほどくはれてわろし。淺ければとて落やすきことなし。よくしつくべし。凡履は縫目よりとく損ずる物なれば。先ぬらぬさきにとりよせて見て。ねりくりの糸をもて縫直さするがよき也。白木にてみるが第一の事也。

こゝかしこつぎなどえせず。さて思さまに精好してぬらするが能也。履は思々なれども。何をもして試たるに。只蒲を一寸ばかりに切入て。其上に長をはなに折反して亂入て。筵を堅様に三四枚一重づゝかさねてとぢて。紙をまきて。これも鼻に折反てしたるがよき也。ふみならず隨て。足におもひ合てよし。又左右取かへてはくにも。又足のかたにふみなをされて思樣也。自余の或かまをくみ或木履。如此類は足に隨てとなりかくなる事なくてわろき也。履は如常法指貫の切にてする事もあれども。鞠にはいかに厚紙がよき也。されば上さまにも紙也。猫搔カキ若すべる庭雨の後などは沓の用意あるべし。新しくりたかきわろし。すこし平みかゝりたるはよき也。沓は極て輕有べし。

襪

朝云。鞆は古くは口傳故實おほかりき。承元の  
程品以後任彼又無別子細。但件式云。有文燠革  
鞆。不論尊卑。不謂緇素。三十以後可着之云々。

此文然而故實に無左右不着之。凡稽古の物と  
も世にも聞。人にもさる好士としられ。師説も  
たしかに受たる物。長者の免を蒙てはく也。任  
雅意て着する事なし。是を習とす。藍白地のぢ  
をこく燠たる。故相公申請云。我等子孫紫色は  
未聽之程。平民に混じて藍革藍白地を着用無  
念也。然ば此色を白後はり候べきよしを申  
て。勅使をかぶりたりし也。其後漸弟子の宗と  
あるにはかせなどしたりしをみて。行忠入道  
行景が嫡子  
法名寂縁故少將致雅  
朝臣に懇望してゆりたりしよ  
り流布したる也。今はかへりて無念也。藍革藍  
白地は同位の色なれども。藍革をむねとする  
也。初參ごとの時もはくべし。鞆の形四條の  
流は装束のごとし。沓はかて鞆計にては。あゆ

む時などはまことによりかりぬべし。くつにて  
は御まりてわろき也。當流の形は鼻ひろくこ  
ゝかしこ足よりはくつろぎて。はきにくかり  
ぬべけれど。沓をつめてしかも足はつまらで  
よき也。はきて試べし。只うちみたるもよし。  
かたぐ徳有様也。黃白地は好用べからず。地  
燠革に混ず。文も赤く錦革にも混亂する也。禁  
色ゆりたらん人は不可有苦。鞆はうらを付也。  
上さまには顯文紗などを付れども。いかに  
も不宜。只白革を付也。面を内になして。うらあ  
はせに付べし。切入の鞆は禁色事也。とのかへ  
る時は燠革以下にも切入事も又不及別。鞆は  
文も色も可存年齢。燠皮の色は若はふかく老  
はあさし。中年又折中を好よ。文は若は滋く。  
老は一文などを可用。隨齡可相計也。鞆をば  
何足とは不言。量と云べき也。結緒は當家有文  
無文ともに用也。四條方には無文許を用云々。

依之兄弟相論及勸例。故相公之說被用之畢。已後鳥羽院有文を令用御畢。其後當代同前也。切様口傳集のごとし。鞆と同文異文同色不同色皆用之。藍革。あゐしらぢ。むらさきがは。錦革。鞆と混亂しても結也。いづれも苦なし。結様着沓篇在之。

晝云。白皮の鞆大臣の可令着云々。束帶之時は凡人も有何事哉。無文藍皮は廷尉又如法の宿老。若は法師。或諒闇之時などに可用。故相公重服之時令着賜也。其時の記。白革。件革事被載之。如此事吉凶共に通用之。准例不可勝計云々。又伏組縫物等貴人のめすべき物也。但當家にも可着之。且有先例。見革羽記。鞆なくて結緒ばかりにて蹴事あり。革羽記にみえたり。又堂上の鞠の時。鞆ばかりにて足を左右同結之。結て立事あり。大刑部の所行也。雪朝の南庭鞠云々。夕云。程品の次第に猶有奥儀。初位に藍革藍白

地云々。所詮以藍色爲本。藍色は蒼也。ミドリ蒼は五行大義云。東方の木之色。萬物發生。第葉之色云々。四季の始四方之首也。依之初之色とす。第二有文煙革也。煙革本煙之色也。則陽炎之赤色也。第二之夏の色に當之。第三錦革紫白地也。同書云。西方金色。白秋爲煞氣。白露爲霜云々。錦革も紫白地も本之地は白色也。然に赤色を白色に混ず。以南方之間色西方の正色に次ぐ。白色之間色也。第四有文紫革は北方之間色也。同書云。以南方之赤色北方之黒色に合云々。是有文之至極也。第五無文煙革は中央之黄色也。これ君王の位也。尤道之長老に付べし。專若之貴服に被定。其色雖同第二これ金體大常也。仍其色自第二聊可薄。彼は赤色により是は黄色なるべし。第六無文紫革は是又雖同有文。金輓各別なり。紫を賞する故程品にのせ畢。賀茂人有文無文煙革紫革不着也。

小袖

書云。鞠足は小袖に用意すべし。只出仕といへども可用意。寒天にはあまた重きるに。鞠俄にあるに。其まゝにてければあつし。かねてぬげば始つかたはさむし。このあはひ尤大事也。常の小袖を俄にぬげば煩し。されば小袖の帶する程より切たるを着たれば。俄にぬぐにわづらひなし。可用意。又春の季つかたあたかなるには。すゝしうらの小袖を用也。はるかにすゝしくも又た汗たるにも。身につかずして宜物也。

拔袖結

夕云。狩衣水干直垂等の袖の活をぬく事あり。若は勝負若は人に争。又袖忠節之時事也。其作法。木の後に立入て或蹲踞。或は突膝。如指扇作法。又等輩之時は。乍立木の方の袖之結を拔也。此作法を用時は兼可令用意。結は常は閉付。續飯付

にする物也。この時は不然。拔やすき様にすべし。必非木平れども。木の近邊。或中門。或垣際。如此便宜の所に立よりてぬくべし。拔様。片手にて袖の下の縫目を取て。結目をときて。うへの折目の結を取て可拔出。若澁などして不拔ば。何ともして目安く拔とりて。ふかく可懷中。不可落之。如此拔て後忠をぬき曲を盡べし。ゆめ〔か敷〕のさなるべからず。端袖を折反も如右。〔押紙〕

單

夕云。初に重て着事あり。宗長卿度々着之。後鳥羽院又着御あり。相摸次郎時村數相公の弟子として院參之時着之。大底下括て宗々臣。臨御會刻限て上結之時着之。自宿所上結て着たる例は少也。

予云。宗繼朝臣自兼日上結着事度々。結句卅余にて紅單を重たりとて諸人嘲哂也。主上御裝束



書云。御冠懸は未見先規。但御冠難澁の御事ならば。縦雖無先例不可有子細。紙捻は無下也。組もあまり下ざまの心地して。にくひけやせん。弦あそばされば尤可優。又くみも何條ことあらんや。御直衣に御大口はさみ上らる。又御指貫建久八年に諸卿に御たづね有てはじめてめす。帳臺試夜着用ありとて被准。其節御沓めさる。後堀河院御時。御沓に錦を押。御草鞋のやうにせられけり。誰が計申たりとは不聞覽。建久より御履を被用上は不可然歟。御襪は有文紫革錦革以下。藍白地藍革如恒。伏組縫物等あるべし。うらは顯文紗美絹也。但絹はいかにも御足にまつはれてわろし。白革能物也。主上などは御檜扇尤よろしかるべし。下ざまこそ不持故はあれ。所詮扇はまりをかき入れし仕はん折扇を差む折也。しかあれば上ざまなどはかやうの御事あるべからず。御檜扇なり

とも何事かあらん。又可爲歎慮。

予云。新院御在位。當今刷之時。令着御赤御袴。御結を入られて被上。是若自禪林寺殿御在位之時始此事不審也。元無御結。仍始て鞠之時計被入て哉。(之歟)且當今御沙汰之時。予申出此事之處勅定候。誠無其謂。雖然御袴者不混俗之間被用之云々。

上皇

書云。御直衣。冠御烏帽  
子隨節。御布衣。若内々會之時。

御小直衣御狩衣等也。無殊儀。後鳥羽院は御直垂御葛袴御狩袴。是は別儀也。筵道建保之比被用之。予云。其比行幸之比也。即御會有之。其時筵道後被用。其上非故儀。

春宮

書云。先例希歟。大底同先段。

親王

書云。是又無殊儀。同上皇。能宗記云。後白河院親王御時。被用筵道云々。是不審。

攝關付大臣

書云。只如尋常之法。小直衣小狩衣皆有例有謂。其外無別儀。但常の出仕も下結らるゝ事なれば。俄御會之時。乍下袴上結て。右下袴の前をばほころばして。後へ押やりて令立賜先例あり。後鳥羽院後御宇。賴實公如此。古くは指貫を脊にふみ入て立。これ其の時は裝束なへくくと有ける時なればこそ然らめ。當時如木いかでかけらるべきや。襪。むかしは禁色を着する人は襪も禁色也き。然而程品之後は上下ゆるゝ事なれば。公宴には不可叶。私會には有何事哉。當家だにも初度の襪始には錦革を用事也。况執柄家哉。

大理

付殿上地下廷尉。

書云。大理以下廷尉。於鞠會者上結更無憚者也。忠信卿。有雅卿大理之時上之。重輔一藤判官之時上之。又後白河院御時。仲賴。知康上之。

更不可憚者也。

予云。先年與宗教卿依此事及訴陳了。然勅判有當流。又爲方卿廷尉佐之時。一白赤衣襖袴（向儀）上結事。大理之時近習之間。朝夕上結祗候勿論事也。當家紅袴用之。

鞠時可持夏扇也。襪は何革も雖無苦。大滑尤可宜。忠信卿大理之時着之。然御弟子也。無文藍革も可然。地下廷尉足袋に無文燵革不用之。鞠之時不可着之。引入烏帽子。廷尉作法に未見先規。此外裝束如恒。松下有文無文燵革襪袴不着也。

地下侍

書云。是も無殊事。只公宴には一向布衣也。行景所行如此。雖直垂御會猶獨布衣也。革羽記有之。禁裏猶然。况仙洞乎。主上立御時被召。立時は前に非足の六位などを立て其後に仕也。是棧代々號革羽に見へたり。賀茂松下絹上色袴

不着。弟子取事無之儀也。

### 童

書公。狩衣水干尋常之法也。直垂に袴(勿敷)又論也。

革羽記に。但狩衣はいたく不着歟。然而尋常之人尤宜。又恒出仕さこそあれ。御前に禮候の童部は。直垂上下にかみを上。頭髮搔上之。僧坊より參

する童部は髪をあげず水干袴也。又直垂常事也。醫王寧王布之。同色に而同括をぬきなどしき。賀茂人童時は絹上不着。

### 僧

書云。僧は昔沓はく事なし。尻切に疊紙をあてて結てき。始て着沓事は。保元四年五月三日。實尋自院賜沓轡着之しより今は沓なり。源九入道は花園左大臣より沓を賜て始てはく。是入道の始例也。又僧は鼻高をもはきけり。法眼は打任ては有べからず。但御持僧若は公請に參たる名僧などを俄被召立之時。無力其まゝ

にて立こと有先例也。袈裟はぬぐべし。法衣也。されど承元三條座主の坊に御幸の時。仰頻なるによりて。座主あからさまに立たまふ。不及撤袈裟。又沓轡にをよばず。依人境べし。是は只如法如形たち賜へば。撤さては猶ことくしきによりて。うるはしく蹴べき僧はとるべき也。僧裝束も別事なし。常法也。法服の時。轡は絹勿論也。結緒ばかり革なるべし。取あへぬ事なくば。車のうしろの上革又常をも可尋上。銀色の裝束恒事也。指貫を着之時裳をば撤也。是結所にて可撤て。ことごとくとひらめかさずして可取にやすき様に。かねて衣のうへに着之參べし。刻限にとるべし。新制裝束は裳をとらず。されど後鳥羽院御時。裳ひらめきてうるさしとて。可着指貫よし仰下さる。袈袋絹衣これ着指貫事。荒涼の所爲にあらず。可隨人。布ころもにさしぬき。兼尊律師院參之時常

用てき。衣袴常服也。下袴の用意如俗このなり  
 は何所にも可通用也。但參内には除之。可然所  
 には無左右不可用。是等つねのごとし。衣には  
 大口なりど如法藝服なるを。院參の僧用たる  
 例多し。雖然非尋常法歟。香帷は卅以後可着用  
 之。蹴鞠之日此色を重ずる事如俗之法。縦卅以  
 後なりとも。荒涼に不可着之。ぬの衣に絹蕉の  
 袴又は袴常事也。侍僧は等身衣に指貫之外  
 無例。仁後法橋（後德）後鳥羽院御時百足也。次々會合  
 は別事也。可依時儀。勝圓法橋（後德）聖王。二條關白家  
 にて布衣衣袴を着て參たりけるを。人々と  
 がめて止たりけり。されど後々には蒙御免て  
 又着けり云々。彼院御時増圓法印薄墨絹衣袴に  
 て御會に參りたりけるをば。法印以上の房官  
 などは。さてもありなんと御汰沙云々。是房官  
 は不可准侍。仍衣袴着用不及子細者也。  
 予云。行誓法橋院參には布の衣袴也。

侍僧も當道名譽あり。好士に成て年久く世に  
 しられたらば。中程の晴などには。長淨衣に括  
 上などしたらん有何事哉。鞠日不嫌時節用帷  
 事通例也。是宿德之所爲也。僧又同前。

遁世人

書云。中墨染衣袴。練色のうらまさりのきぬ可  
 重帷。白香隨人。衣の頸を折也。仍たゞ人の頸折事は  
 せぬ也。襪は廉革蝶丸。遁世の襪に用によりて。  
 俗人は不用之。件革は凡何にも不用之。仍弃世  
 しるしと也。其外は如俗人いかさまにもはな  
 やかに装束事事不可然也。源九入道は花園左  
 府會に沓襪葛袴をさせられたりけり。此なり  
 ふるさまは如侍入道は諸事に引入烏帽子に布  
 狩衣葛袴なりけりと云々。是有識人説也。

予後嵯峨法皇御時。干時建長二三年也。予幼少にて御會  
 に參仕之時。小野宮侍從入道。禪信。俗名俊平。資雅三  
 位入道。皆薄墨染衣袴なりき。三位入道は着



用錦革き。

諒闇

書云。不可違出仕之法。彼識者に訪べし。出仕する人々は猶しゝら烏帽子を着也。庶品絹狩衣。平絹指貫。生白帶。沓は黒赤可隨時。後烏羽院御時。故相公并故刑部宗長卿共に黒沓也。範茂卿相公に弟子也。朱漆の沓のうへを一はりぬりかへして着之。襪は故相公無文藍革也。宗長卿は或うらがへし或又有文を用に。有文をば相公難ありけり。革羽に見へたり。束帶直衣々冠等只如出仕之法。冠は纓を卷也。季服之時は纓をたまひて如六位之纓する也。諒闇之時はたゞの卷纓也。此作法尋常の人不知。平家の人ゝに訪て可存事也。且又可尋先規也。爲不吉事之間。每人委不沙汰也。冠懸淺黄糸可然。扇淺黄也。凡此不吉作法は普通の人は不知。其識者の人ゝにたづね訪べし。

〔右内外三時抄目錄以内記關錄課本校合〕

蹴鞠條々大概

一名蹴鞠十ヶ條

身體事

書云。凡人のうけたるところ。性に利鈍賢愚あり。體に好惡大少あり。父よけれども子かならずうけず。師妙なれども弟子又まなぶ事かたし。人の心同からざる事其面のごとし。面々各々也。かならず一様を執し一隅をまもるべからず。たゞ生得のすぢを存べし。但不得方をも好て直せば。たゞ打すてたるには似ず。はるかによくする也。

身體といふに。先くせなきを吉とす。目おそろしく見なさず。顔持うなつきかるゝしかるべからず。手持ひきからずみにくからず。たをやかにこはく持すくみ。手ひろげず。腰ひざく

まず。むね出ず。足のくびよはくして。鞠けるに内外へふらず。足ひきくあるべし。想相身はいさゝか立ちほひたるやうにて。頭すゝみ足ころなる様に立ならぶべし。けはじめにひろき所にてけあげむとおひありきて。けならふべからず。しかればいかにものけはり。あしたかくひざかゝまりくせ出来也。こしより上はたはやかにて。腰より下すぐにつよく有べし。凡以自心難量。借他眼可知云々。

## 鞠の庭に可立事

人数さだまりて後着座も。上首よりすゝむことなれば。木の本へより侍ることも。庭に廣略二あり。凡木と木の間は二丈一尺二尺までに可植。但庭廣によりては此分可然也。又せきば庭にをきては二丈よき程也。猶つまりたる庭ならば。たゞ略義にて二丈より内一丈八九尺にも可植歟。そうじて木より外方も垣と木の

間一丈ばかりなくてけ見ぐるしかるべし。能々はからふべき也。軒の母屋の柱より木の間一丈三四尺なり。無子細。但それも向の庭ひろくば可相計也。

懸は先南向を本とす。但今は家に隨てさだまるべからず。懸うしとら方に櫻。ひつじさる楓。たつみに柳。いぬゐに松也。猶色々の植様有べし。可隨口傳なり。

## 道仕事

凡懸の中をばたゞの時もとをる事可斟酌。いはんや會之時覺悟すべき也。貴人の御前御後をもたやすくはとをるべからず。とをらて不叶時は。いかにもとをくのきて。垣のきは見物衆のそばへつめよりてとをるべし。鞠をつめよる時。かゝりの中半分過ば。木の外へいで。我木のもとへ歸るべき也。かやうの進退は大分の法をだにも心みぬれば。時に隨て見よ

さ様にふる舞事。此道に限べからざる也。

### 鞠長事

人の鞠長は。弓の精兵に兵のごとくに。すべてたしなむにもよらず。生得なることあり。但大かたまりたけは一丈四五尺の物なれば大が心うべし。さればとて鞠ごとくに此丈數をならでけぬ事にはすべからず。時により所によりて甲乙有べし。其に隨べし。立所のことは。其身の心よせ便宜に隨てすゝみよるべし。但軒懸の方は主人上方なればさうなくよるべからず。それも便宜に隨てしだひすべきにあらず。又時の堪能又上首主人などもはからひたつる事あり。

### 自他分事

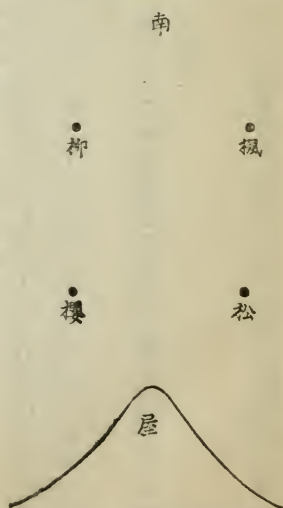
鞠庭にをきて自他分事肝要なり。八境箇にみえたり。

### 懸の枝にとゞまる鞠落事

竿にておとすに。鞠をつきおとすべからず。枝のあはひへさほを入れてかきおとすべし。いかにひきゝ枝なりとも。木をゆふる事あるべからず。手のをよぶ所ならば。たゞ手にてかきおとして。さてとりてあぐべし。縁の上にあがりたる鞠も同前たるべし。

### 三段事

鞠に序破急の三段あるべし。はじめは我木の下ふかくたちて。分にしたがひて。まり長のび



やかに。ことさら自他分よく見わけてけるべし。是は序分なり。破分にはいさゝか木の下を立いづる様にて。鞠長ひかへて。時々曲をもまじへてけるべし。晩景に及て急分にならば。いかにも數をもはげみ。木にかけず。猶まりたけをもつめて。たがひに忠をつくし興をもよほすべし。しきりに自他分あざやかにこひ。とりくこゑの色をそへて進退みだれぬ物から。にぎはしくけなすべき也。

### 扇事

鞠場にいで。さうなく初心の人など。心にまかせて扇つかふ事有べからず。極暑などにつかはで難治の時は。左の手にて三四間ばかりひろげて。身に引そへてつかふべし。座にをきて立時は。左の方に疊圓座などの下にをきてたつ也。むかしはあふぎをさして立事あり。いまもはれの時はさす事あり。色々口傳ある事

也。

文章博士成光申云。蹴鞠は軍陣より出來たる事なり。武士を練せさせむと也。心はやく身かろく足きゝて。しかも無病の術也。

歸足 延足 傍身鞠

歸あしは左にかけて右にかへり。又右にかけて左に歸る。いづれも大事の足なり。

延足はとをく行鞠に身をなげてのべかゝりて。猶又遠く人つかずばかさねて延る也。これをつくね延とはいふ也。

身にそふ鞠は。身にかたより。むねはらしまでものだかにしづかになかくかけてけいだすなり。

此三いづれも肝要の足也。能々けならふべき也。

右一卷者所授案東次郎兵衛尉道俊也。努々



不可有聊爾者也。  
永正五年重陽

宋世(華押)

續群書類從卷第五百三十七

總檢校保己一集

男源忠寶校

蹴鞠部二

晩學抄

嚴命云。最初にやがて庭鞠を蹴は。いかにも身  
によせ有。先無鞠とてよくく姿を作ためつ  
けて。空鞠を日ごとに何十度ともなくけさせ  
て。其後鞠を細繩にて釣さ<sup>自板敷一寸計成べし</sup>げて。  
一足づゝ蹴て。姿を能々たゝしうせよ。身體と  
いふは顔。預仕。目。口。手。胸。腹。腰。膝足等也。  
顔持はかるからず。うなづかず。あふのかず。  
ゆがまず。をもらかにうらゝかにて。くせ有べ  
からず。預仕はなへずゆがまず。すこしかまく  
び有に似たるべし。さればとてこはく目だい

しく有べからず。目はおもふさまにはたけ。さ  
らくくととやき見めぐらすべからず。用意  
して見よ。每人目のおそろしくみゆるくせの  
有也。第一にみにくし。見あげ見おろす目ばか  
りにて不仰俯。うらゝかにみるべし。左右をみ  
るも長閑に心を持て。先其程を思ひはかりて  
後。目にて見さだむる也。顔持預仕の善惡は。  
目の見やうに隨て。よくあしくなる也。よく  
く其心をうべし。口くせ有べからず。手持は  
臂つよからずよはからず。次第ひぢかいなこ  
ぶしまで難なくみにくからず。内外出入ゆが

みねぢず。無高下平等になし。下たをやかに持べし。下に持もいやし。高もことくしく。又依人有善惡。一偏に不可好左様に。鷹を居て鞭を打様。いかにも右計後へふりていやし。大樹を抱様。又あまりゆがまずしてしなゝし。成平が様。左右之手几帳之手のごとしといへるもことくし。是は彼古賢をそしるにはあらず。上手達者は諸道に置いて何としたるもよきを。無骨の者彼をまなべば。をのが本の失よりもはるかにわろくみゆる也。西施が隣女のごとし。すべて人のまねをするが諸事に惡事也。大方何となきやうに持て。蹴時聊たはやかに持て。目だゝしからぬぞよき。手をふり又蹴ぬ時も持すくみ。或臂かゞまり。又そりうて仰俯し。拳をつよくにぎり。又手をひろげ指をさし出。手前にすゝみ後にゝげ。銅拍子などをつくやうにしかある皆以わろし。只肝要抄の文の

ごとし。以自身難量。借他眼知云々。是眞實肝要也。凡身體よく立おほひて立人は。いかにも手持は高さ也。のけはりて立人は。手身にそひ。膀胱のもとに左右の手すはる也。身體は父祖にも似ず。何にもよらず。只我身のこなりに隨てよきやうに可持。身持立おほはり又腹腰膝足等を定圖にて人によりてよける事なきなり。胸腹はえりたる様にて。内ほらに有べし。腰をすふるとは腹をまきいるゝ也。腰を居てこしをかゞめずとは是也。口傳なき人は腹をよきすふる事をしらで。腰を居ては尻を出し。或は腰をにがして膝をすゝむ。是第一の僻事なり。膝すゝみぬるはいかにもかゞまる也。腰より下は殊更すぐに立おほひて。腹をまきかゞむれば。腰はたをやかにてよき也。尤秘事は腹也。ゆめくかるくしく不可露顯。凡何事も其宜によりて其形有べし。懸は犬居に可

立と云々。然者其木に立人も。隨て立おほひて可立也。人の身は頭に過てをもきはなし。頭のき足すゝみぬれば。いかにおもへども次の足かなはず。はやき事なく。頭すゝみ足にげぬれば。次の足はやすくはやすき也。老人も頭をすゝむる也。されば式にも大木の本よるといへども猶よられず。得其心腰をかがめてよれと云々。これも頭をすゝめむためなり。式にも唐丸のさかくひしたるがごとし。是又立かゝりたる姿也。膝をそらすは只是そらず。足の大ゆびをそらせば必ずぐに成也。ひざ足のくびよはければ。鞠を見當といへども。足ふりめきてちがふ也。さればとて足の大指あまりそらしはぬれば。鞠つまさきにあたりてわろき也。鞠高もひさく又まりがつかるなり。足のくび延ぬれば。鞠の音はよきにゝたれども。うるはしきにはあらず。わろくまりものく也。よきはすこし

指をそらして。沓と足くびと兩方半分に當るが。音もしだらかながら。やはらかに丸く聞ゆる也。又鞠色もよき也。能々蹴て氣味を知べし。膝足のくびよはきは。或は内へちがひて。鞠は足の外のかたに當りて右へのく也。或は外へちがひて。足の内かどにあたりて。まりは左へきるる也。足を持あぐる程は。鞠の目ほどをすぐる時。足をあぐる也。足高はみぐるし。失錯も出來也。鞠の失は所詮足のはやすきより出來也。足のひさくて失はなし。但あまりひさは物氣なくぞみゆるを。ひえ足も時々出來にや。只足ごとに心を入力を入。つよくねばくはねて。やがておこたらず。足をかるめ腰をぬきて踏かふる也。走等は一度に用意する事なれ。とかくになればケ様に前後出くる也。足踏は所々によりてふむ事なれども。大吉は同事也。右の足に付て左は必ふみかふる也。鞠をけ



たる足をば本所にはをかす。構にすゝめて置て。やがて左を猶すゝめまして。右足を置事きはめたる僻事也。努々有まじき事也。一寸一步をもすゝめむと思ふべし。右ばかりをすゝむれば片合になる也。左を頓而すゝむべき也。是は眞實事也。上手はたゞこれにあり。書云。一寸といふとしり足踏べからずと云々。能々蹴可心得よ。左足すりこそめかすこと下手の所行也。左足うかばずしてしかり。上手は左足うかびて。いかなる時も拍子合て踏よき也。ふみわろき事あらば。いまだ左足しつかうかばずかなはぬ分を可知。足踏は第一の大事也。拍子合不合も上手は別の事也。下手は拍子合はかたはらいたく。不合ば亂かまびすし。只あざやかにうかびて。大くれにしかも拍子合て面白也。入たゝぬ人の儀に膝をつよくすくめぬればこはくて惡と云々。是きはめたる僻事也。先達の

いはく。沓のきびすより踏て。はなにいたりいたり踏べしと云々。是膝のつよくてくつはかぬ故也。只人のあゆむは皆膝を折て歩也。鞠足は膝をすゝめて歩あいだ。沓にてあやつりて。きびすよりはなへ踏は此故也。態きびすよりはなへ踏とすづからず。只膝だにつよくたてゝくつろがさねば。自然にさふまるゝなり。膝をくつろげずして歩人は。俄に鞠膝にあたる時。くつろぐる隙なくて。えけぬ程におとす也。これはいつも膝をつよく持たれば。俄にあたる折も。本より用意したれば。ながれてよくけるゝ也。たゞ鞠は膝のかゝまらて。すぐにつよきが。いかなる鞠もけられて。尤第一の秘術也。身にそふまり自在也。人は多少遠き鞠はけれども。身にそふまりかなはぬ也。膝だにすくなれば。身にかゝるまり相違なし。當家には殊に身にそふ鞠をよくけるは。只膝によりて也。

如此心得身體をつよくしつけて踏習べし。釣下たる鞠最初に尤よし。後々もなへ枝にもたれよとむ鞠時足踏大事也。それをし習には。枝にてはさのみさやうには心にまかせねば練しがたし。鞠を釣てければ。あちこちふらめきてよどむを。彼枝に准じて拍子を合てふみならふ也。尤秘事也。

釣鞠にて身體足踏等能々しつけて。後すみの員鞠を蹴べし。或胸或腰之程膝之程なるに鞠をけるべし。角に向て一方に立ふさがりて。手をさしひろげ立ちおほひて。物にけかくれば。其鞠かへりて身にかゝるを。いそがずして足を踏かへて。足本までながしかけて。はねくすれば。身にそふ鞠自在也。姿も立ちおほはれて習なり。立ちおほふ程は。柱に後を當てたちそひて。頭身踵等を柱に付て其程をしつくる也。これは全く立ちおほふ程にはあらず。只すしに立分な

し。さて其よりはおほはんとおもふべし。さびすをふみつむべからず。たちうかふべし。身にそふ鞠のはしりながれぬは。皆くせの有と知べし。鞠にて身をため直す也。矢細工のゝためといふものにて。のゝゆがみをば直すやうに。鞠にてたむる也。胸の程より腹腰も、膝はぎ足のくびまで。うつくしく身にそひながれ落る也。腰かゝまりぬれば腰にはなれて。鞠のきて弓の張が本のやうにある也。膝かゝみぬれば膝につかれて。鞠にこよりながれすはしかりのく也。いづくにも鞠をつけんとおもふ所にては。鞠のすひつくなり。されば自在に見て人にこと也。歸足の時ことに大切事也。すこしも相違なく思ふ程にし習べし。鞠をすいつくる人は様々に有故實由をいへども。腹などこそ鞠あたる所をばたはめて下をさしふくらかしなどもすれ。残所はいかてか如此事あらん。只心

にとどめむとおもへば。切入ぬればとどまるなり。常にしならふべし。かなはずとて物うくする事なかれ。すいつくを期とすべし。數は千にならばたりぬべし。但角の小鞠も只なをざりにすくくとかやはらかに蹴て。身につよくかゝらずば。縦何方をけるとも。身にそふ鞠は自在なるべからず。一二百にてもよく蹴て。何に當る鞠も我物に覺て。たゞの鞠よりは身にそふはやすく有べし。身にそふ鞠不叶のけはるくせあらば。膝の下のまり角にて好べし。次第に立ちおほはるゝ也。此事返々なをざりにすべからず。中の小鞠は我身を懸にて。身に蹴かけくしてけるべし。さしのけてける人あれども。それはわるき也。風の吹日くらき夜などけるにわろし。身をばかゝふとしてこそ分際はおぼゆる物なれば。時々は懸をむすび。時々は遠く蹴ゆき。縁の上に蹴のぼり蹴くだり。或

は障子やり戸など蹴てあけたて。家の中を蹴ゆき。みすすだれなどけて卷おろし。ごすご六盤の上。圓座上。或輿之中。車の下。門のくわの木などの上をけてとをり。馬場弓場を行かへり。如此事どもをして可持。又ひきく天井につよく蹴當くして員鞠有。腰の切入事なり。大事也。能々しつくべし。是はひきく大枝の下料。又はつよく身にそふ鞠の料也。又鞠は長の數鞠このむべし。木の外の鞠中の鞠自在に覺ゆ。後鳥羽院の御書にもそのやうのせられたり。かやうの類多し。いづれをも練習して持べし。居ながら數鞠ける事有。延足若はゑんの下懸の邊に。橘柑子椿やうの枝しげくひきなる木など有所にて。件木にかゝりたる鞠の木づたい落るを。下へくゞりて膝つきながら蹴などする時大切事也。

又先段にいふがごとく。何足も練習内鞠に過



たる事なしと。每人に逢ていへども。しばしこ  
(おれ)それ。ことにくるしく倦ことなれば。これが  
 げに第一の練習にて有けりとまで蹴知人大か  
 たなし。たゞ萬の事はさりげなるとばかりに  
 て。眞實の骨髓の氣味を人はさぐりしらず。無  
 本意事なり。若は獨若はあまた立ても同事な  
 り。ひきゝ天井あらくければ。早歸身にかゝり。  
 身をうちけづり。おちつきてのくをば突延に  
 蹴つきて。かへるをばくゝり歸に蹴。急に當て  
 つよく落るをば。はやく枝の下に入。障子など  
 にそひおつるが。上はそひて下ははなれ。上は  
 のきて下はそひ。上下ともにはなれ。又上下と  
 もにそひおつるは木のそふ鞠の大事に准ずる  
 也。常に是を練習すれば。更に木の恐なし。身も  
 くるしく力も入事なれば。しつくるに庭の鞠  
 は無下にやすし。凡身たはやかに足ふみうさ  
 て。左足もたやすくなり。種々の曲等はにて蹴

習はる。第一の稽古これに有。懸はさのみ心に  
 任て。枝にあたりくせむる事有がたし。され  
 ど常にも練習せられず。内鞠は思ふ様に其足  
 此曲蹴らるゝ事也。能々この氣味をけしるべ  
 し。未此氣味をしらぬ人は。させることなしと  
 思へり。只身をかるく足をうかべて。虚空を歩  
 やうに心をかゝやく身は本所にて足計をさし  
 出て蹴事返々わろき事也。身のけはられをも  
 くもなる。かたぐゝ惡き事也。

一 木練習

嚴命云。内鞠も所詮は懸の料なり。木をよく  
 蹴習にはしかず。初分は只かくいふ計にて不  
 能委細。木一本に四五人も兩三人も立廻て。つ  
 ねに習べき也。一本に八分有。其分も見定てけ  
 習也。八分とは八人の儀也。又走所。流所。つく  
 所。そふ所。もたるゝ所。よどむ所。はぬる所。  
 さはる所。こす所。此等をよくく蹴知。自在

にけべし。いかなる木をみても。こゝはかゝる所。かしこはいかなるべしと兼て存に。蹴折も無相違たがはぬ程に可存知。依所用意有。足のまうけ。足踏蹴所。はぬる所。のする所。つよくあらく蹴所。やはらかにける所等あり。能々蹴知べし。兼ては教がたし。只木數をけて。いかなる木も不審なき程に兼て存べし。所詮只木をよく我物にしてしたゝむるに有。いかにも餘人は木を恐也。上手は我木にかけて自在に振舞也。依木面々各々にかはる也。多蹴てみるにはしかず。ながるゝまり。若木若枝。或縁ながれ落を普通のやうにければわろし。足にのせおほせて後はぬればよき也。突延はいかにもかねて存也。突て後初て延とおもへば。かはきて後井をほるがごとし。上に枝有てつよく蹴は。さだめてつくべき歟の用意ありて。しかも不恐してつよくける足を。やがて延んとす

る足のまうけにして。體をつゝめ心を急速にして。みゝをむなしくしてよけば。あたる音に付て。雖不見足。只身をすてゝ延也。鞠のおもむきは枝の様に隨て兼ておぼゆる也。只兼てあたれば延んとおもひて。兼て心にまうくる也。さればのびらるゝ也。延持は先拍子を合て踏ぎまに。右足を力にして地を踏放て。左足あがきて身をなげてのぶる也。けてゆく鞠枝に當て。なげ返して頭の上をこゆるをば。力足をつよくふみて。其力足にはじかれてとびかへる也。力足よはくけぬればおそく歸る也。木にそふ鞠は。もしは枝もしは節などのありて。鞠さはらんづらんと思ふ所を念すぐしてあしをあげよとて。上ば一定火打出來也。能々用意有べし。すゝなる木の木末より本まで。けつりさまにそひて。つよく落る鞠が大事の物也。さはるべき所なくば。いかにやくとも目をふさ

ぎ心を急にして。足を蹴かへてたゞつよくけよ。心中に猶用心有べし。恐るればたま／＼ある鞠なれども。そばへ蹴切す也。かやうの事は詞にも筆にもいはれぬ事也。大方の趣ばかりをこそ如斯いはるゝ事なれ。眞實の秘曲は心中に分明也。それまでいたらぬ足はちからなき事也。いはれぬ所を知ほどに成べし。急成大事は初心なるほどは似よく蹴出たりとも。何としてけつるとも不覺。達者は心中に分明なるのみにあらず。前後明に心にうかびてみるがごとし。只練習の功入なば。我とさとするなり。自覺も又有善惡。覺語(通)と所作也。玉理と相應するを實覺とすべし。但心に相應すとおもへども。人にゆるさずば所理にそむき實覺とすべからず。所詮は姿不亂。足踏拍子合て。たをやかにみにく／＼して。しかもつよくやはらかにえむにみえて。足ごとに思入てあちさる

が大事なり。一はよけれども一はわるく。かやうあらば猶不達と思ふべし。上は長閑にてはやくするがよき也。されば上手の鞠は淀河のごとしといへり。返々先達のいひたるをおほくもちて。常に案習すれば。をのづからさとり出し蹴出し。若は夢にも見うつゝにも了簡し出す也。心にかけてねば功なし。蹴ては案じ案じては蹴べし。凡此事の我はかなはぬといふ事はなきなり。たとひ遅速拔群不拔群こそあれども。眞實心に入てつねに練習すれば。かならずし習也。不叶打置事なかれ。諸法は心の所行なれば。せられずといふことなし。垂枝にかゝれば。枝の下に入て。鞠をいたゞきて。拍子を合て踏かへてまつ也。すぐに落るとはねのくと二を用意すべし。枝かゝる時は。先前に落るを宗として。又後へ越事を心にかけて待也。一方ばかりを存れば。ちがふ時かなはぬ也。又兩

方をかけて疑ば。おもはぬに落時えならぬ也。宗とあるかたへつよくおもひきて。しかも左右後を存ずる也。心は四方を明に察し。情は宗と趣方へ存ずる也。このちがひ様を能々存じて。一心に兩方をおもふべし。走枝は自梢卷て後などにこゆる鞠。又つよく走枝の本にてうたれて。はねこえむとする。迺あへこめがたく覺ば。むずと枝の本に立ふさがれば。まり身に當てよどむ時。足を蹴なをして靜に蹴也。身にそふまりかなはぬ人は此足を得ず。又わが立たる木にそひ落るなり。我は迺こめむと後へ迺時。鞠は内に落るを。人はよらぬをば木にそひてたはやかに木にそひなびきて。足ばかりを木にそへて。さしやりて一足けて。次の足に直て。人にゆづる事あり。品有たけやう也。かまへてなべて木にたはれしたがふべし。木にそひて足斗をやりてけばなさけなく。又平懷

にも見えてかたくわろし。かやうの事はかまへて品あり靜にえむにしなすべし。木にそひてながるゝまりをば。木を踏てけるなり。左足をたてよせて。頭をすゝめて立ば。左方へもちがひ落るに蹴よきなり。足の左右をならべてのけはりたてば。左右へちがひ落る時蹴にくき也。たとへ一兩足こそけらるれ。それより多く小鞠にて蹴からかふ時は。只のけはりになりて。えすくひあげられず。凡一方にむかは。餘の三方八分明に存べし。心と情との分也。先段にいふがごとし。又木の下に別としは流るゝ鞠をはね出さんとするにあがりやらぬを。こそゝと三四足もけばことに見苦也。心ざしつめて一足はつよくたかくけんとおもひ。次足はこしらへてすくひあげむと。おもひかへてけんとおもひければ。其こゝろをのづから色にあらはれて。おなじ蹴長の鞠もこせ



めかず。所存ありと見えてかさ出くる也。足ごと  
に上手下足のけぢめみゆる事也。唯諸足は  
所詮の大惡はのけはりて。足はすゝみ出。頭は  
よらぬ也。頭すゝみぬれば。いかなる難所もや  
すく次足けらるゝ也。是尤秘事也。かやうの難  
所等おほしとはいへども。さのみ書つくしが  
たし。是等の大旨をもちてぞ見に准知べし。

一 鞠長員鞠

嚴命云。是は秘事也。等閑の人には不可示。凡  
鞠は常すぐなるを可好也。上足下足各別に見。  
別大事の物也。萬人曲節をける時こそ人には  
すぐれてみゆれ。只すぐなる鞠の時は勝劣更  
になし。それは此鞠をおもひいれぬ故也。上手  
は一足なれども人にたがひて。まり上下ねば  
く。靜に降昇してふりめく事なし。ふりめくは  
鞠のあたまをけるゆへ也。腰革をみ定てけべ  
し。但鞠によりてかはるも有べし。足はもと

より力を入たれば。つよくしかもねばくはね  
あぐれば。後まで名残有心ちなるべし。然者其  
沓音も丸くしとやかにて。降昇數百色もぬれ  
くとして上下する也。膝足のくびつよくて。  
足にのせてあげよ。けやうは小鞠の所にて沙  
汰畢。所詮達者體一足の鞠に不拔群ば。更に  
長者のおもひをなす事なかれ。只上下身にそ  
ひて靜に落しあげよ。一段三足を中高に甲乙  
にけて。人請取きてゆづれ。ゆづるべき人をお  
もひ定てつねにゆづれ。其人或は上手或は可  
然人。或は又いたくあてつかぬ人に時々やる  
べし。是等口傳集にも見えたり。詮は練習也。  
鞠高の數鞠を常に好べし。

後鳥羽院勅定にも侍し。立部の内にて二三百  
もける程にてこそ上手とはいふべけれと云々。  
尤有其謂哉。さほどならずとも四五十もすぐ  
にちらさでけるほどにすべし。鞠高く數鞠は



殊に大事の物也。足踏思ふやうに蹴つくべし。晴に出とは必内鞠。此數鞠をかねても其日もけるべし。それが自在に覺て能蹴らるゝ也。又曰。勅定云。他人の鞠は名足の時人にことなれども。只よのつねの時は上足のかはりめなし。相公刑部兩人に平懷の一足他にことなりと仰有。是眞實の肝心鞠の精魂也。上鞠一足も人にかはりてかさあり氣味有のやうに蹴べし。上手の所行を見聞ては。わが及ざる事を歎べし。たゞ歎て何の益か有。蹴にはしかじ木四本の内にて。外へ出さずして三百程もけば。自在には覺ゆべし。古人も初ははしり廻て。一庭に損ずるまりをば我ものとおもひて。物さがしくも可蹴云々。尤可然。但兩方を相兼て蹴べし。急なる時は如電光暴風。又閑成時は鴻王之歩獅子之眠をおもふべし。急に振舞とも閑なる事を不忘。靜なれども急成事をおもへ。更

に一偏に練習することなかれ。又我不得方をばしばらく一偏にも可修也。雜亂して練習すれば。何足何曲こそ次第にあがれども。不覺一を宗として。余事をば忘れぬほどに。次第に梯登して稽古すべし。大文云。ひとへに日てゐる時は本草枯。ひとへに雨ふれば本草くち損ずといへり。然者五日の風十旬の雨。天下泰平之基也。練習も如然よく／＼おもふべし。

#### 一 足踏

鞠の一大事の至極は足踏也。初心にもしは得口傳。若は上手を見て足踏はかくしけりとて。假なまさかしくすれば。不具にて却てわるし。假令ば布に錦を立入たるがごとし。哥も又しかり。哥人之凡卑の詞の中に。先達の金句をとりたるに似たり。さればとおもひすつべきにあらず。常に心にかけて案習しながら。かれをまねばずして。さむ／＼に蹴ならふて。自然に

左足うかびて。踏あしき事なくなりて。次第に功入まゝに。心にかけし所はをのづから忽然とさとられしだいさるゝ事也。小鞠こ高の數鞠内鞠にしつけて。緩急折にかなひ。遲速時にしたがひて踏べし。鞠高さし延。ゆるく落る時は。蹴たる足をすくめてをく。やがて左足を蹴かへて。鞠のおちかゝる時。拍子を合てふみてけるべし。拍子といふも拍子不合といふも。只ふむ事は同時也。然而鞠と足相應して拍子のごとし。同足踏も拍子をふむ事は別の事也。とするもかく踏も只三拍子也。然而序分破分急分等を踏かへて。目にたゝず又聞よく踏也。ことに拍子を踏てきこえさせてよきは。突延の足踏。梢に當てなげかへす時。拍子を踏合。又まりしみたる時。兩三足ひかへて我物にけなしてこひながしたる一段などに拍子をあざやかに聞させて踏たるなど殊面白き物也。かゝ

る拍子は下足はかなはぬ事也。大木の本に制ながるゝをはね出すに。鞠沓のはなにのせ。かねて二三足もこせくりける事あり。そのとき上手はことに足踏合てこせめかず。下足は同様にこそゝとしてかしがまし。上手は同鞠長にひきけれど。一足はあしく一足はこしらへて甲乙をける。又枝につく鞠若足はいふに不及。拍子を合て延べし。老足などはえのびあはねども。上手は鞠のつく戸に拍子を合て踏たれば。延たるよりも面白くみゆる也。是は見知人なし。唯神と佛の境界也。足踏は所詮庭上にうかびてとゞこほる所なく。やすゝとしてしかも念有之。下足はやすければ念なく。念あればたしなめりとみゆ。如此類甚多けれど。さのみ書のぶべからず。以一察万。態踏とみゆる口惜事也。浮といふは水とりの浪上を往反し。鯉虫の池面を進退するがごとし。凡詞

にのべがたく筆に書がたし。拾遺亞相之鞠庭にたゝれたるは。物を上よりつりさげて。地のうへ五六寸ばかりあがりたるやうに見えけると同じ。普通歩は膝を折てあゆむ。鞠の歩は膝をすぐにて。左右の足同時にする／＼と進退するやうなり。彼鰻虫の水上に逍遙したるをみて可意得。所詮鞠は前後左右進退往還徘徊。或所により或は折により。無盡にかはれども。簡要足踏一なり。いづれの鞠も蹴よきやうに踏也。又三拍子を小躍といふも。先にいふがごとく拍子を合てふむ也。■傳集に三拍手と書。又三拍子の小躍と別の遍に有も。三拍子は惣相の大綱也。小躍ぞ最上手の踏曲也。一庭に兩三度に過て人めに立ほどに不可踏。只隨時依折。如斯事は可用捨。よく／＼練習して持べし。萎枝にもたれてよどむに。拍子を合てあどり踏てける。殊に面白き事也。

### 一 延足

嚴命云。延足あく足つよく地にかきて踏放て。左右の足虚空にとびあがりて。身をなげて延也。足だに土につきぬれば。遠く延られず。延足はたゞつき延が第一大事物也。兼而存じて突をとを待て。身をすてゝ延べし。突をとす。偏身の筋急速につゝまる。たとへば血取馬の針引するがごとし。口傳集にも是をのせたれどもくはしからず。尤秘事なるゆへ也。これ功入ぬれば自然にせらる。全我心に思はるにはあらず。心にさき立思にすゝみて突音をきけば。足が我にもあらずのぶるほどに練習すべし。是は師も教がたく我も習がたく。心にふかく約束し。功入に隨て足たましゐ出來て。心をまたず思にしたがはず。鞠について足自然に振舞也。これほどにいたらざらむ人は突延叶がたし。高枕して臥たるよりもやすしといふ

は。かく足りぬしをまたずふるまふゆへ也。針引は自然の所爲也。しつけぬれば見證の時も人の枝に蹴あぐる時は居ながらせらる。まして立合たるにはいふに及べからず。

### 一 歸足

歸足に混亂して人おもふまがふは。むきあふ足向直る足也。是等をよく可分別。先向合といふは籠鞠の事也。頭上を越て外に鞠出を走遮て。内へ向合さまに蹴之。向直足は大底歸足におなじき也。所詮歸足は鞠長烏帽子たけ以下也。鞠若は扇をこし。若はすぐに落せば。おとしたてゝくぐりとをりて。鞠或肩又背或は腰にかゝりて。身をよこさまに一たびうつりて。鞠は身をまといひ。身はまりをかゝみて。むかふさまに拍子を合て踏で。身にながしかけて。腰をよりてねばくはね出す也。えかなはぬ人々の少々を見とりて歸に。身に能かゝれども。

足踏なくてはねかへり。蹴さまにしりぬにたふれ。或は足踏よくふみたれども。まりのきて身ひとつめぐる。如此事相應尤難有。歸足に大事は左歸くゝり歸等なり。ひそかに歸は對縮の木の下也。常には一足けて次足歸を一足蹴ばもし鞠のきて木の外へいで。又軒の下へ入事其恐あれば。不蹴しておとしかけて。其下を身をかゝめてくゝりをとる也。是不蹴して歸る計はなちに物をするやうにて大事なる也。連歸は木の外の鞠に有もちて。入鞠枝にあたりてなげ返して肩をこすを。歸合は庭をそむくを。やがて次の足にかへりむきてゐるゝ也。是二足の連歸也。三足の連歸も有。是大事の足也。

### 一 傍身鞠

身にそふ鞠は。先達云。腰の功也云々。是によりて無口傳輩みな腰をやはらかにするとおぼし



くて。腰を持あつかふ也。大底腰かゝまる。所詮腹の功也。膝をそらずに足の指をそらすがごとし。はらをため。やはらかにしなひ合すれば。腰のすふる也。肝心抄に。胸をよせてむねをいささず。腰をすへてこしをかゝめずといふも。所詮はらをまぐる也。胸を寄ば腰そり尻出。腰を居れば膝かゝまり身のけはる。是自然の理也。さればすぐに立て。腹計をたはめくり入れば。胸出ずして腰膝かゝまらずして居也。かくてこそ胸よりながるるまり腹腰につたひ。もゝ膝足のくびまで。水の樋に流るゝごとく思合所有。能々これを心得てながし習べし。當世態胸を持合て。腰をかたそらしにひねりてはね。或はのけはりて胸腹までながして。腰より下ははなれ。或は足ばかりをながく指出して。腰より下流れて。足のくびにのる時。力を入てねばくはねよ。如此はねつる鞠はゆる

くゝとあがりて。たかくはあがらず。それを見しりて人よりてたすく。若たすくる人なくて落ば。無念なれどもはねつる足をやがて力を入てすゝめ踏て。身かろくぬきあげ。足を早踏よれば。をのづから蹴らるゝ也。なをざりにおもふべからず。これ等大事の足也。凡身のいづくにても。しばしまりをよどませむとおもふ所にては。よどまする程に練習すべし。これは故實なし。只功也。身にそふまりこゝろにまかせぬれば。歸足はやすき也。亞相之譜にも一段にかゝれたるは此義也。抑身に傍鞠とまり合は人思亂物也。能々分別すべし。肝心抄に又分明也。

右一卷努々不可有聊爾之儀者也。

飛鳥井雅康撰  
後醍醐天皇御宇

(花 押)

九里伊賀守殿



蹴鞠百首和歌

心持之大體

身をちかく足をばひきく上るとも先あたらぬ  
 は下手のうちなり  
 たちちゝふかたちといひてさのみまたかゝむ  
 もわろしのけそるもうし  
 ゑりよりも出いるさまにけなしつゝ苦しさも  
 なき鞠の上手さ  
 分足の數は三ツなりしぬていてけにはかへる鞠四まで  
 四ツ五ツなり  
 外よりもうけとる鞠とけはなして渡すまりを  
 ど他足とはいふ  
 我方にこぬまりとても立足はかへすゝもむ  
 やくなりけり  
 軒のまりよし落るとも身にかけてながさば流  
 せ軒の永きに

我まりはうばゝるゝとも人のまへたゞかりそ  
 めも斟酌をせよ  
 かなふべき鞠にあらずば中くくにけぬべきと  
 するふりもよしなし  
 ふきつたふながれはあまた難波江の鹽風より  
 もたゞ飛鳥かぜ

庭作大體

庭のうちは七間まなか四方なりかゝりの内は  
 二じやう三尺  
 桐生の松はいぬいの物なれば楓のかたはひつ  
 じさるなり  
 青柳は辰巳の角の物なればさくらの花は丑寅  
 ぞかし  
 我宿のおものはしらの程よりも植木のあひは  
 は八しやくぞかし  
 鞠かきは二丈なりけり横ぬきのあいだくくは  
 四寸五分なり

まり垣の柱は深く立るなりあいだくは間中なるべし

玉つばきかきほの垣や梅檜の木ゆるしあらてはいかゞ植べき

二もとも三本も松は我家のゆるしのなくば誰か植べき

たつ人のゑぼしにさわる枝ならば花も紅葉もをらん青柳

みな松の四本かゝりは位ある人のたてたる庭とこそさけ

### 鞠名所之大體

ましこきはましこ額やましこかたふくらまなこに上下ぞある

とり皮やこし皮のめやこしかわやもしりかたあるぬいめとぞいふ

天照す月日もよしや此鞠の人と我身のまへさきぞ有

とり皮は一寸貳分のものなれどさきさるさまは四季にかわれり

あいかはにさゝら波たつ水まきは只世の常のまりのぬい皮

こめむ皮またにしき皮むらさは以上のまりのけしやう皮なり

こいふすべ長者皮とて我家の外にはたれかまりにつけなん

### 上鞠之大概

若殿 谷輩の役に定る上まりを斟酌するは知ぬゆへ

かは

上鞠はふたりのわきと位くみあけて衆有人といふにはさらにけざりさ

あげまりの高さの程はいかならん一身半ぞおよそなりける

ふたつとも三ツともならば上鞠はあひみて禮にとりてけなをせ

木にさわり袂にかゝり身をこすもまづ上まりにけぬところ聞

我足の上よりおつる上まりを人のあけなば一禮をなせ

我手より渡して上るあげ鞠のわきへひそかばちぢよくならずや

聲入やよめいりなどの上まりは軒と向はゞさるにけぬもの

上方の役にあらざる上まりをとりてめされば禮義あるべし

枝の鞠わりこのまりの上まりは「缺字」

詰の大體

正分のつめといひしは面つめすみとくの人をいふなり

すみならでむかひて立る人をこそ次分のつめといふべかりけれ

上方の詰は是非なしあひかゝり木こしもよし

や斟酌をせよ

正分のあいてならぬぞ中つめは返すくもびろうなりけり

わきの人つめてゆくとも右左ふたりは跡に残るべきなり

正分に詰てもひまの明ならば「缺字」

詰のまりよしさわ數のおほく共身をはなれずばいかでけぬべき

わきつめや自分他分の鞠とてもかつてへ落ば乞てけぬべし

つめ過しかゝりをぬくる折にしも人と植木のあひはとをらず

い堺のさかいをこしてつめたらばかゝりの外を立歸るべし

三十三曲之大體 烏蹄香加返卅五曲

のべかゑり又のべしくも延あしもぬしなきまりの曲にぞ有ける

すり鞠や身にそふまりやながし鞠三ツの曲にはかず有もよし

おひまりや思ひ返しといふ足は主さだまれる曲とこそきけ

おほくなき足と聞なり貫足はたゞ一くれにひとつなりけり

ひんすりやうつぼ流しは曲足の中にもまりの大事なりけり

軒のきは御蘆のまへを折しくは馬路の足とこれをこそいへ

おひまりを受ながしつゝ折敷てけるをぞ三ツの曲あしといふ

順逆にまはりあひつゝける鞠を左右のかへりの足といふなり

順逆にその儘おいてけるをこそ左右のおくびの鞠といふなり

浪分の曲とは高くけあげつゝはづむをおひて

けるをいふなり

たかくあげ雲いるまりに目を付てけしむるをこそ上手とは見れ

軒よりも落くるまりを立まわりかゝりにむかひける他眼曲

けあげつゝ一ツやふたつまはりつゝ拍子をふみてけるも曲なり

身のたけにけ上てめぐりけるを社枕かへりといふべかりけれ

おり歸り又かけかへりわけ歸りはなちかへりといふも曲あし

かのこおり木の根まぐらの折歸りいづれも鞠の曲と聞也

猿はしりうけおひのまり追返し鬼神かへしといふも曲そく

ひさ渡し衛門ながらや瀧落しいやく見ゆるうつぼつげ哉

自まりをばけもせて曲にするを社まり拜言といふべかりけれ

むば玉のからすおとりといふ足はたゞ曲足のほかと知るべし

調伏の鞠にけぬべき沓かへし聞にもつらし見るもうるさし

曲足のかずはあまたに有明のつきなき時はけけるも由なし

自鞠さへすなをにならで曲たれはかへすくも無用成けり

禮法大體

軒のした用ありとても横さまにまりけぬをりもとほらざりけり

軒の方あがり成けり何事もかゝりによりてさがりもぞする

圓座をば中より一二三四五と左右に分ておく物ぞかし

沓はくもあしを包も傍に立よりてせよ庭の禮なり

沓の緒は七まとひして結びつゝうちつむふしの上にはさめり

鼻紙にあふぎをそへて砂の上なをる圓座の右にはさめり

わさざしも刀も抜て立時はなをる圓座の脇にをくなり

幾度もやすむといゝてのくおりも刀をさすは俗の法なり

茶を呑と酒をのむとも圓座をば少しくだりてつゝしみをなせ

鞠のうちよし茶はのむと庭の方手をあゝひつゝ呑物ぞかし

一丈も九尺もよしやまり掉の長さの程は二間なりけり

鞠掉の傍にさゝればかりそめも左を先へ持も



のぞかし

留りたるまりさへ落ば其儘にかゝりの方の手  
をつきてのせ

きつさしの竹は一丈二尺なり枝をば半に葉を  
しごくべし

節のうへ一寸五分のこしつゝたゞ一もじにき  
るものぞかし

きつさしの竹の下ふし地ぎわより一寸五分上  
におくなり

きつたてのさい下枝はすみちがへかゝりのう  
ちにむく物ぞかし

鴨沓もくずのはかまもゆるさずば誰かはさま  
し誰かはかまし

つゝ皮の五めむむらさき錦皮ゆるしのなくば  
いかにはくべき

懸緒にもかみのひにも紫はゆるしなくては  
更にせざりき

おもたかもともゑの丸も我家の紋としりては  
たれかつけまし

誤りて鞠をふみなば左あしのうへにをきつゝ  
馬路してのけ

まり扇子いつゝばかりもひらきつゝ身に引添  
てつかふべきなり

ありといふ聲より外にいふ事は鞠のかゝりに  
せぬところ聞け

ありやともありやあつともやくわん共ならひ  
なくてはいかと言べき

庭の中たかくあげつゝ手に受てつまりはやと  
て退散をせよ

數上るならひはやすし御數十御數廿と高い  
ふべし

忌中なるまりにはくべき白なめしたゞよのつ  
ねはみるもうるさし

見物も參る禮衆も鞠の庭立居につけてならひ

ある哉

足つゝむならひばかりはいわね共難波の事か  
君に残さむ

蹴鞠百首和歌之終。

右仁和寺御室御所様御所望從被成候。蹴鞠  
之大體を百首之哥につらね。永正三丙寅の  
歳彌生之中の五日に令御書上覽に備ふ。且  
は上意もだしがたきにより。且は一流の者  
後代の當論をやめつる爲に詠之侍りぬ。當  
家之門子遺葉之輩は。尤此道の至寶として。  
明鏡に守るべき者也。深く是を秘すべし。  
穴賢く。

飛鳥井二樂在判

天正十九閏正月下旬之比。和州宇多之郡井  
足殿に御坐候を申請候て書之寫畢。

越前之國吉田之郡田谷寺之住僧童齋

表紙云。

蹴鞠百首和歌。秘書也。

表紙袖云。

立よるも心にかけてかりそめも人の身につ  
く鞠はけざりき  
水の上にうきたる鳥をみても猶わが足ぶみ  
のみちをしぞおもふ

角ならで向ひにたてる人をこそ次分の縮と  
いふべかりけり  
みな松の四本かゝりは位有人のたてたる庭  
とこそきけ



續群書類從卷第五百三十八

總檢校保己一集

男源忠寶校

蹴鞠部三

蹴鞠百五十箇條

鞠の次第

目錄

- 一 足つゝむべきやうの事付足包紙やれたる時の事
- 二 座につくべきやうの事
- 三 懸へ入るやうの事
- 四 木の本に立様の事
- 五 懸に尊畏する事
- 六 座にて刀をく事
- 七 懸にて扇つかふやうの事

- 八 扇を座に置いて立事付扇さす様の事
- 九 扇を持て木の本へ行様の事
- 十 扇ぬくべき様之事
- 十一 鞠の人数たて入かへ蹴る時之事
- 十二 貴人と鞠ける時座に着様の事
- 十三 貴人とまり蹴るとき座にて刀をく事
- 十四 貴人と鞠ける時斟酌すべき立所の事
- 十五 貴人とまりける時尊畏するやうの事
- 十六 軒をとるべき様之事付縁をとる事
- 十七 懸の中をとる時の事
- 十八 軒を賞翫するの事

十九 帷子をさるべき事

二十 葛袴さるべき事

廿一 沓はきてけるときの事

廿二 あせぬぐふ様之事

廿三 鞠を庭に置やうの事

廿四 まりを庭に置てかへる様之事

廿五 鞠をつくる木の事

廿六 木の朶に鞠付る様之事

廿七 木の枝に付たる鞠持て出るやうの事

廿八 木の枝に付たる鞠その日蹴べきを見し  
る事

廿九 朶に付たるまりに短冊を付る事

三十 太刀にまりを付る様之事

卅一 枯木に鞠つくる事

卅二 上鞠する様之事

卅三 ふさほしの上鞠の事

卅四 上まり仕そんじたる時の事

卅五 あげまり仕かけまじき人の事

卅六 上鞠する時目つかひの事

卅七 貴人あげまり遊したる時の事

卅八 他家と參會の時鞠ける事

卅九 親などゝ鞠蹴る時之事

四十 兩分のつめといふ事

四十一 詰ひらきの事

四十二 ひらきの事

四十三 鞠ける様之事

四十四 身なりの事

四十五 立おほふ姿と云事

四十六 かほもちの事

四十七 目つかひの事

四十八 手持之事

四十九 足つかひの事

五十 あし出し様の事

五十一 左足之事



五十二 左足にて鞠蹴まじき事

五十三 鞠けるとき一だん三足の覺期と云事

五十四 序破急三段之事

五十五 鞠あらくけまじき事

五十六 初心の時はあらくけならへべき事

五十七 うきあしといふ事

五十八 まり色の事

五十九 つまざきの事

六十 こひ聲の事

六十一 ありやとこふまりの事

六十二 まりに手をつくまじき事

六十三 まりける時心づかひの事

六十四 烏帽子着てまりけるときの事

六十五 懸の外へ出て落たるまりの事

六十六 まりかきの外へ出たる時け入るゝや

六十七 うの事

六十七 枝にとゞまりたる時まり掉にて落す

やうの事

六十八 まり朶にたまりたる時の事

六十九 枝にまりあたりたる時の事

七十 貴人の御足よりまり落たるときの事

七十一 貴人の遠さまり遊しそんじたる時の

事

七十二 貴人の遊しそんじたるまりけるやう

の事

七十三 貴人御身にあたりたるまりの事

七十四 貴人御見物のときまりけるやうの事

七十五 會の時人數めしたてらるゝ時の事

七十六 貴人のけまり見物するやうの事

七十七 花の下にてまりけるやうの事

七十八 風ふく時けやうの事

七十九 縁よりころびあつるまりけやうの事

八十 えんのうへゝあがりたるまりの事

八十一 木にむかひてまり數けざる事

八十二 鞠すみへゆきたるときのこと

八十三 遠く落るまりけやうのこと

八十四 袖こしのまりのこと

八十五 軒にあがりたるまりけやうのこと

八十六 高きまりやねへあがりたる時のこと

八十七 いむまりのこと

八十八 露はらひのこと

八十九 ながしの事付左右左といふ事

九十 身にそふまりのこと

九十一 うつばながしといふ事

九十二 のべあしの事

九十三 のべあし仕ならふ様之事

九十四 つらねのべといふ事

九十五 かさねのべといふ事

九十六 つき延といふ事

九十七 のべかへりと云事

九十八 かへりのべと云事

九十九 歸りあしの事

百 軒かへりと云事

百一 半のべといふ事

百二 むきなをりといふ事

百三 かさねつめといふ事

百四 さりこゑと云事

百五 みをくりのあしといふ事

百六 いぬはしりといふ事

百七 沓かへしといふ事

百八 葉がゝりの鞠といふ事付いての鞠の

事

百九 いこくのまりといふ事

百十 葉がゝりのまりいごくのまりけやう

の事

百十一 からすおとりといふ足の事

百十二 びんずりといふ事

百十三 雲入のあしの事

百十四 おちたるまりけあげよといふ事  
 百十五 まりをば一足二足といふ事  
 百十六 よきまりを逸物と云事  
 百十七 夕べのまり今宵のまりといわぬ事  
 百十八 まりを人にいだすやうの事  
 百十九 まりを受取様之事  
 百二十 まりみやうの事  
 百廿一 まりのかた穴をぬふ數の事  
 百廿二 取皮付るやうの事  
 百廿三 鞠のなどころの事  
 百廿四 まりたけの事  
 百廿五 高さまり頭上に落る時けやうの事  
 百廿六 枝まりのけやうの事  
 百廿七 まり數取事  
 百廿八 懸のうへやうの事  
 百廿九 かゝりにうゆる木の事  
 百三十 懸の木ずへをさるまじき事付枝すか

百卅一 す事  
 百卅二 かゝりの木枝のなの事  
 百卅三 あみの仕やうの事  
 百卅四 あみはしらの立やうの事  
 百卅五 切たての事  
 百卅六 まり竿のこしらへやうの事  
 百卅七 庭はく事  
 百卅八 庭に水打事  
 百卅九 まりの場に立てものいふまじき事  
 百四十 膝にてまりとむる事  
 百四十一 肩をまはすまりの事  
 百四十二 曲足の時も懸にそむくまじき事  
 百四十三 まりをけはづしたる時の事  
 百四十四 のべたるまり膝の上へ落たる時之事  
 百四十五 ひざつきてけはづしたる時之事  
 百四十六 かたに付はづしたる時の事

百四十六 まりをみうしなひたるときのこと

百四十七 葛袴鴨沓之事

百四十八 庭の地こしらへやうの事

百四十九 兩分の圖

百五十 八陳の圖

一足つゝむ事。引合を四つにおりて。大ゆびよ

こにまくなり。先をうへゝ折返して。水こき  
したる紙よりにて二卷まくべし。扱ゆびの  
外にてまむすびにする也。用心のためふた  
むすび三むすびもむすぶべし。又別のゆび  
もいたむ所あらば。つゝみてくるしからず。  
もし又足つゝみたる紙やれたらん時は。懸  
の外へ出て。いくたびもつゝみなをすべし。  
主上の御あししたむるやうは。いさゝか口  
傳多き事なり。

二座につく時の事。左の手に扇を持て。柳ニ向

ひてつくばひ。座上の方を手をつきて。貴人  
のかたへあふぎをむけぬやうになをるべ  
し。左の足をうへにおくなり。扱貴人御立あ  
らば座の上をおるべし。貴人の御立ところ  
さだまらば。本の座になをるべし。他流には  
座につく時右の足をうへに置といふ。常流  
にはしらざる事なり。

三懸へ入時は。左の足あしより入なり。軒のか  
たより先へ足をふみ入ぬものなり。

四木の本に立事。貴人より御立ありて。次第次  
第に立べし。しきたいなきものなり。座につ  
く時。上首よりすゝむなれば。懸の本へより  
侍事もそれにしたがふべし。立所の事は。其  
身の心より便宜にしたがひてすゝむべし。  
松木のかたは貴人主人のかたなれば。さう  
なくよるべからず。それも貴人の命をうけ  
待らば。辭退すべきにあらず。凡立所におき



て上下はなし。貴人の立所を上とすべし。中比の事やらん。或家門邊の説に。人數の立所として一二三と次第して。八人の立所をさだめおかれ侍るとぞ。とかくはまり足の方によりはからふべし。未練の人のそば。或は老者などのかたはらには。はやきあし。さほうの人を立べきなり。

五懸に尊畏する事。木の方の手をつくなり。但貴人あひ懸に御立あらば。貴人のかたへ手をつくべし。

六座にて刀おく事。右の手にてはながみをとりに出し。左の手にて刀をぬき。ひとつに持て。はながみを下に成やうにして。刀のさきを我座より下の座のかたへなし。柄をわが身のかたへなしして置べし。刀のむねをわがかたへなるやうに置べし。

七懸にて扇つかふやうの事。初參の人などは

心にまかせて扇つかふべからず。一段の貴人などは御つかひあり。其次の人は二三間ひらきて。むねのあたりをそろ／＼とつかふべし。初參の人も極ねつなどにつかはでなんぎの時は。左の手にて二三間ばかりひろげ。身に行そへつかふべきなり。

八扇を座に置いて立事は。ちかき世よりおこれり。昔はかならず扇をさして立侍る也。今もさゝん事申におよばず。さしやうは。あふぎを左の手に持て座に付て。扱まりはじまる時座をうごきて。左の手にて刀さす處のはかまのおびをくつろげて。あふぎをさすなり。是を刀さしといふ也。又座をうごきて。えもんをひきくつろげて。左の手より右の手へ。すわうの袖の下より取わたして。やがて左の手にてはかまの帶をくつろげて。右の手にてさゝず。鞠さすやうにさすべし。こ

れをやなぐひさしといなり。あふぎのねこ  
まを身と帶とのかたへなるやうにさすべ  
し。又しやくさしといふは。うしろのはかま  
の帯にすぐにさすなり。是は公家かたにの  
み御さしある事なり。武家がたにはやは  
ぬとなり。又扇をさすとて懸の下へたちて  
さす事もあり。それは木の本一行間にさし  
合たるがよし。是は同輩の儀なり。貴人など  
の御かゝりにては。木の下に立かくるゝや  
うにして指べし。左のひざをつきて指て。木  
の下に立べし。刀さし。やなぐひさし。しや  
くさし。いづれも同事なり。

九扇を持て木の下へ行時。すわうの袖の下に  
かくるゝやうにもつべし。

十扇を木の本にて指たらば。木のもとにてぬ  
きてかへるべし。座にてさしたらば。座にか  
へりてぬくべし。

十一まりの人数多く入かへてける時。座にか  
へりてやすむ時。重てけん（も懸はこも）とありつゝ。あふ  
ぎばかりもちて。刀をもはな紙をも本のま  
ゝ置べし。かさねてけまじきならば。刀をも  
さすべし。左様なりとも貴人今一足と御所  
望あらば又けべし。

十二貴人とまりける時。座につきやうの事。貴  
人はや御付ありて後は。次第（しだい）に付也。若  
我より上に付べき人なくて。みな下てなり  
とも。何れにても座を一ツのきて付べし。是  
は若われより上たる人あらばとの氣遣な  
り。但しよく見合て付べし。

十三貴人とまりける時。座にて刀おく事。貴人  
左のかたに御座あらば。右のかたに刀おく  
べし。刀は少うしろよりにおくべし。あふぎ  
より下になるやうにおきたるよし。あふぎ  
と刀と別々におく時は。なかみはあふぎに

そへておくなり。

十四 貴人とまりける時。斟酌すべき立所の事。

貴人の御あひ手にまいる事。正分のつめのこと也。 貴人

とあひかゝりに立事。又木こしに立事。是三

ツを斟酌すべし。其外はくるしからず。御あ

ひかゝりよりも柁木こしはしんしやくすべ

し。貴人の御身にちかさいわれ也。こゝろへ

べし。

十五 貴人とまりける時尊畏の事。木こしとあ

ひかゝり。同程なる貴人御立あらば。あひか

ゝりのかたへ手をつくべし。

十六 軒はとをらぬものなり。但貴人よのかた

に御立ありて。軒かたあきたらばとほるべ

し。その謂は貴人の御うしろをとほる事は

じかりある故也。よくく見合て軒をとを

るべし。軒をとをりたくもなきときは。時宜

を見合。縁のうへをとほる事もあり。くるし

からず。

十七 凡かゝりの中をたゞの時もとほる事斟酌

すべし。況や會の時貴人の御前御後。并しか

るべき人の前後をも。たやすく通るべから

ず。貴人の御まへとほらて叶ざる時は。いか

にも遠くのきて。垣のきわ見物の人のそば

などへつめより。貴人の御かたを除てとほ

るべし。主上の御前後は申におよばず。家禮

の人の前後にてそんなとしてとほるべし。

十八 軒もわが家にては賞翫すべからず。おか

しき事なり。人の家にては賞翫するともあ

り。貴人の御にわなどにては。軒を賞翫仕る

べし。其外はさのみせうぐわんすべからず。

よくく心得べし。

十九 まりける時は冬も帷子をさるべし。雪霜

の中にもけるものなり。小袖または袷など

さるとも。はだにはあせとりとて帷子をさ

るなり。

廿葛はかまざる事。すわうをきずば葛袴をさべからず。

廿一沓をはきてける時も。すあしのときの如く。あしをつゝみてよし。沓をあまりにひきする事わろし。足ぶみしてあゆみたるよし。廿二あせぬぐひをばあちぬやうに懷に入て持べし。あせかきてぬぐひたき時は。かゝりの木よりはるかにのきて。かしこまりてうつむき。手のうちにみえぬやうに。ちいさくしてぬぐふべし。

廿三まりを庭におく事。取皮を人さしゆびと大ゆびとふたつにてとり。のこり三ツのゆびにて。まりのましてひたひをかゝへて。左の手をそへて。我目のとをりにさしあげて持て。軒のむかひに置べし。

廿四まりを懸にあきては。左へまはりて歸る

べし。たゞし貴人右に座時は。右へまはりて歸るべし。これは貴人へあとをむけまじきためなり。

廿五鞠を木の枝に付る事。櫻。柳。楓。松。いづれも付べし。さりながら松が本なり。よの木は枝のあふ様になき間。まつをもとゝするなり。

廿六木の朶に付るやう。まりの取皮のくみめより。水こさしたるかみよりを引とをして。さひの下枝のかたをそぎてつけるなり。



此枝の間を尺五寸又尺五寸あはるは五寸五分ゆびの長を貳寸貳分計也本より五寸貳分計也又二寸九分といふ也

此枝より尺五寸又尺五寸あはるは五寸五分ゆびの長を貳寸貳分計也本より五寸貳分計也又二寸九分といふ也

軒

木 木

此木のもとにてまりをときて此木にまり付たる木をよせかけてまりをかゝりの内へ持ていで真中に置てかへるなりやがて取人ありて本の座にかへるなり



廿七木の朶に付たるまり持ていづる事。ひだりの手にてまりを付たる木のゑだのうらをかゝへて。右の手にて木のもとをとらへたるがよし。

廿八鞠を木の枝に付て。いづくにもあけ。その日けべきまりをみる様。まりをゆひつけたる紙よりのさを一もんじにきりたらば。其日けまじきまりと思ふべし。又まりに付たるかみよりを。一方のかたながく切たらば。其日けんまりとこゝろ得べし。そのまりとく様あり。のきの正めんにはおかぬものなり。

廿九枝につけたるまりに短冊を付る事。例式の短冊にてはなし。うすやうをたんだくより少しせばく切てこしらへ。先をひねりてむすび付るなり。鞠付たる枝に付るなり。亦短冊のごとく。先にあなをあけて。かみより

にて付る事もあり。いづれもうすやうはたゝみたるかさねの紙なり。たゞなるかみにてすべからず。紙よりもはくかみなり。

卅太刀にまりを付る事。太刀のおびとりをむすびて。其あひへまりのこし皮を入。まわしてむすびて。花は何花にてもあれ。さしそへべし。人に出す時も。かやうにこしらへべし。

卅一かれ木にまりを付る事謂あり。たゞの時は付べからず。

卅二上まりするやうの事。下れる人。初參の人まりを懸におく時のごとくに持て。懸の本を立出。むねのほどにさし出し。少まへゝかたぶけてそとけべし。木などにあたらずやうにするものなり。上まりの事。例式のふさほうのまりとて本にあたらす。本上まりとて一段の子細ある事也。口傳あり。

卅三ふさほうの上まりは。懸におきたる人や  
がてまりを取。二足三足歸りまたあゆみ出  
て。あひてにかけべし。

卅四上まりしそんじたらば。まりをとり上げ。  
座にかへりて仕なをすべし。はしりけりな  
どしてはけぬものなり。

卅五上鞠を仕かけまじき人の事。あひかゝり  
に立たる人に。又木こしの人。此二人にせぬ  
ものなり。又貴人にせぬものなり。もしけか  
けまじき人にけかけたらば。ひざをつきて  
せきめんすべし。

卅六上まりするとき。あまりに目などを見合  
て。それといわぬばかりにはせぬものなり。  
其時は目など見合てけるときに。あげまり  
のよそへちる事あれば見にくきものなり。  
たゞ何となくしたるがよし。

卅七貴人もし上まりをあそばされ候とも。さ

のみしんしやくなくけべし。くるしからず。  
卅八他家と參會などのときまりあらば。御屋  
形様などの賞翫の人には同座する人もあ  
り。おふかたは同座すべからず。よく心  
得べし。

卅九貴人なくて親などゝまりける事あらば。  
親にも同座すべし。くるしからず。

四十正分の詰といふ事。すみとくあひ向ひ  
たる人を。正分のつめといふ。角なくてむか  
ひに立人を次分のつめといふ。正分のつめ  
は親子のごとし。次のあいては兄弟ほどの  
事なり。正分のあひてにまりを七足かけけ  
ば。次のあひてには三足ばかりかけべし。  
四十一詰つめひらきの事。つめてはまりをけ  
てもまたけずともすみやかにひらくべし。  
まりをふかくつめてけるとき。こつめうし  
ろへつめかけて。ひらかぬ事あらば。木のそ

とをひらくものなり。木と人との間をとを  
らぬものなり。人と人との間をとをるべし。  
それもしげくはをらぬ事なり。

四十二ひらさの事。木をまはりて詰たらば。ま  
はりて歸るべし。すぐにつめたらばすぐに  
かへるべし。大よそまりをつめよるとき。か  
へりの中半分にすぎ侍らば。木の外へいで  
ゝめぐるべし。木の外へいづるとき。人と木  
の間を破るべからず。つゝしむべし。但その  
木のともに立たる人のいまだ立なをして。  
幸にあきたらんときは。木の本へひしとよ  
りてとをるべし。又まり落て道ふさがらん  
時は。庭中をかへらんに子細もなき事なり。  
まり落たる時も。木のもとをめぐりてかへ  
る事。いかめしくみにくき事あり。所詮は大  
かたの法をだにも心得ぬれば。とさにした  
がひて見よきようにふるまうべし。

四十三まりのけやうの事。其しなおゝしとい  
へども。大ようあしのこうに一ぱいにあた  
るやうにけべし。つまさきにあたればとぶ  
ものなり。むねをほすべからず。折入るやう  
にすべし。子細ある事なり。ひざをそらし  
て。きびすより足をふみ。よくまりを見おろ  
してけべし。まりによわくゝとあたるとき  
は。わざとひざをかゞむることあり。

四十四身なりの事。先くせなきをよきとす。い  
さゝか立おゝひて。かしらすゝみ足うしろ  
へ成やうは立習べし。けはじめにひろきと  
ころ庭などにてけあげんと。おひありきて  
けならふべからず。のけばりて足たかくひ  
ざかゞまりくせ出来也。すみにてけならふ  
べし。こしより上はたをやかにて。こしより  
下はすぐにつよくあるべし。まりの左右へ  
さるゝ事。足のよはくて。あしくびの内外へ

ふるゆへなり。さて身のかどにてまりをけるやうにけるはわろし。けはなちて身もちのろくなるやうにけつくべし。

四十五立おほふ姿のと。先段にもいへるがごとく。立おほふひて立べし。懸を裁にも。いぬいにたてよといへるなり。したがひて人の立たる姿もすこしおほひかゝりたるやうにあるべし。さればとてうつぶさこしかゞみて立べきにあらず。凡人の身はかうべにすぎてもき所なし。かうべのき足すゝぬみれば。いかにも思へども。次のあしかなはず。かうべすゝみあしにげぬれば。次の足はやきなり。走人もかしらをすゝめてならでははしられず。心得べし。

四十六かほもちの事。あをのかずうつぶかずかたぶかずして。まろくにあるべし。かうべもたげうちなづきなどして。かるくし

かるべからず。目おそろしくみなすべからず。目のみやうにて。くせなきかほもくせのあるやうにみなさるゝ事あり。

四十七目づかひの事。あがるまりをも目ばかりにて見あげ。落るまりをも目ばかりにてみ下すべし。かほにてみあげみおろす事あしくみゆるなり。たかきまりの色のかはるときなどは。かほをすこしかたぶけてみるべし。一心二眼とて。心持第一の事なり。次てはまなこをかんようとす。されども心と眼とふたつなるべからず。心とまなことは二にしてひとつなるものなり。よく／＼たんれんすべし。

四十八手もちの事。何となくたへ／＼としたるがよし。こわくすくまず。手さきひろげず。こぶしにぎりかためず。たをやかにしてみにくからず。ひきからずもつべし。鞠の足



にあたるとき。すこし持あぐるやうにあるべし。凡身體よく立おほひて立人は。手持はたかく見ゆるなり。のけばりて立人は。手身にそひてものけなくみゆるなり。いかなるくせまりをけるときも。手持はゆるくとしてはたらかぬがよし。五尺のかつらに水をながすやうにあるべし。こぶしはもちてもたざれといふころへべし。

四十九足づかひの事。いかにもひきくて失なかるべし。まりの失は只あしの高きよりおこれり。まりをけたるあしをば。もとの所にはをかず。やがてすゝめて置て。左をもなをすゝめまして立べし。右ばかりすゝめぬれば。まりにかたあひになりてあしゝ。足くびにはちからを入るべし。つまさはひらかぬよし。

五十あしの出し様の事。つちふまずをすりて。

すくひあぐるやうにあるべし。まりの右へさるゝとてはあし。さを内の方へいだし。左へ切とては外のかたへ出すと。きはめてひがごとなり。いかにもくまろゝに出すべし。まりの左へさるゝは。あしのそとがはのうくゆへなり。右へさるゝは内のうく故也。先へゆくはさびすのあがるゆへなり。うしろへゆくは。つまさきのうくゆへなり。左足はひざがしらよりいだすべし。口傳有。

五十一左足の事。よくふみちがへくして立たるがよし。ふみかへずしておけば。たち足とて高足がけられぬものなり。人のけるとさも。わがころの内にてふむがよし。あまりにことくしきはわろし。なをつまさにちからを入べし。

五十二左のあしにてかりそめにもける事なかれ。精大明神のしんりよにもそむくと也。わ

すれてもけべからず。又ひだりにてまりをはねて右へうつせば。曲の内なり。かなはぬまりを左りにてすくひ。右にてけはなす。第一のめい足なり。一幕に一足とぞ。

五十三まりをけるとき。三足つゞける覺期をもつべし。謂は一だん三足とて。受取鞠壹足。手分のまり一足。人のかたへわたすまり一足なればなり。けられずともそのこゝろ得もつべし。足づかひにもこゝろ持あるべし。受取まりはやはらかにしのぶべし。手分のまりはするどにつよくあるべし。わたすまりは足をひかへてよはらすべし。

五十四まりをけるに序破急とて三ツの心づかひあるべし。まりはじまるときは。木のもとを立出す。分にしたがひ。まりをたかくゆふくくとけべし。こゝろにはゆだんあるべからず。これを序分といふなり。なかばにはち

いさきまりと大なるまりとまぜて。三足ばかりつづけべし。これ破分のときなり。晚氣におよび。くれもおしきときは。木の本をたちいで。まりのたけをひきくけて。數を持てあしぶみをしげくして。木にまりのあたらぬやうにけべし。これ急分なり。序破急三だんの心づかひといふ此事なり。

五十五 まりをあらく物にけつくる事仕まじきとなり。むやくのあしなり。たゞしあらくけかけて。そのまりのかへるところをおもしろくければしかるべし。中くあらくけてのちあしくければ比興なり。そのこゝろ得あるべし。またまりに氣をつけんとして。あらくけつくとあるべし。

五十六 初心のおりはしりちりてあらくけならふべし。しづかにやはらかにけんとなれば。しづみすぎて。あしはたらかぬものな

り。けそめしとき。ふつそうにけんは又わろし。時節によるべし。

五十七 うきあしといふ事。水鳥のあしぶみのごとくするとなり。いさゝか子細あるとなり。口傳をまつべし。大かた地にすはりつかぬやうにこゝろ得べし。

五十八 まりいろの事。いかにもけんそにつよくけて。まりはゆふ／＼とあるやうにける事なり。

五十九 つまさはそらさへぬものなり。又かゝむ事もすべからず。ちからを入れてけるべし。脊はきたるときとはだしと少しこゝろ得あるべし。

六十 まりのこい聲の事。ありやおう。かやうにこふなり。おうとこふ事は。初心のときはしんしやくすべし。口傳に在り。

六十一 ありやとこふまりのと。木のえだな

どにあたりて。興ありておつるまりの事なり。

六十二 まりは何ときれてゆくとも。手にていろふべからず。おゝよそ手をまりにあつる事あしき事なり。もしまたびんぎよくおしなをしなんどし候はんは。しなによりてくるしからず。又あまりの手にかゝり候を。つけじとするもわろし。をのれ也とまりにしたがふべし。

六十三 まりけるととき心づかひの事。かゝりにてけるに。外へ切て出るまりを。懸の内へけ入るゝやうにこゝろづかひあれば。まり落てころび入てもくるしからず。内より外へまり出たらば。段よきところにあたりても。きづかひあかしき事なるべし。

六十四 まりを人のえぼしなどにけあてぬやうにたしなむべし。又われも人にあてられ

ぬやうにきづかひすべし。ゑぼしはのきす  
ぎぬやうに。ふかくきなすべし。

六十五 かゝりの外へ出ておちたるまりの  
事。懸の内へ持て參。上まり仕りたるもよ  
し。又まりをかゝりの外へなげ入たるもよ  
し。禮などはなきものなり。もし又垣ごしに  
なげ入る事もあり。これはまりをはやくけ  
させんと儀なり。

六十六 まりかきの外へ出るとき。座に人あ  
らばけ入るべし。そのときありとこふ事あ  
るべからず。座に付とき。左の足をうへにを  
く謂は。まりの外へいでたるときは。内へけ  
入るゝためなり。

六十七 枝にまりのとゞまるを落す事。棹に  
てまりのたまりたる枝をわけて。まりに棹  
のあたりぬやうにおとすべし。つよき枝な  
どにまりとまりて。枝のわけられぬときは。

枝のあわひへ棹を入れてかきおとすべし。つ  
きおとすべからず。たとへひきゝ枝なりと  
も。木をゆふりて落す事不可有。手のおよぶ  
ところは手にてかきおとして。更にとりて  
あぐるなり。棹にておとしてはかしこまら  
ず。禮などもなきもの也。

六十七 枝にたまりたるまりを。下にてまは  
る事。中々おかしき事なり。

六十九 枝にあたりたるまりをば。かならず  
こふ事なり。但し木しげりてうちおほひ。枝  
ごとにまりしげく當て。落るまりをば度々  
にこふはわろし。

七十 貴人の御あしよりおちたるまりをばこ  
ふもの也。そのいわれはおちたれどもおち  
ぬとゆふこゝろづかひなり。

七十一 貴人遠まりをのべあしなどにてあそ  
ばされ候時。そのまりおち。又かゝりの外へ



出る事あらば。たとひけにくきまりとも。ありとこふてのべてみるべし。こゝろづかひなり。

七十二 貴人とをき御まり又能御足をもあそばされ候とも。そのまりよくあがる事なくば。はしりよりてつきてける事あり。貴人とわれとの間ちかき事あらば。ひざをつきたるよし。立ながらはわろし。

七十三 貴人の御身にあたりたるまりける事あるべからず。但し御身にあたり候とも。御足あがりてあそばしそんじたらばけべし。御足あがらずばけまじきなり。又同はいの人の身にあたりたりとも。そうじてけまじきなり。

七十四 貴人御見物もあれ。又座にもあれ。その御前ちかくゆくまりをばとをすべし。但し御座の間とをくばけべし。貴人の御座は

たいみ本也。また圓座もくるしからず。

七十五 まりの時御人數をめさるゝに。次第くゝにまいるべし。暮などおしきとき。さのみしきたひしておそくまいる事わろし。第一くわんたいの事なり。

七十六 貴人の御まりをみる事。えんの上よりみる事。所によりてくるしからぬ事なり。大かたは下にてみるなり。貴人の御まり。こゑをあげてほめぬ事なり。たゞかんじ入たる體にてみるべし。貴人のめい足をあそばしたらんときは。そのまりの内の宗匠たらん人。まりをとりていかにもかんじ申すべし。さあらば殘の人數も。そとしきたいあるべきなり。

七十七 花の下にてまりをけるとき。むげに花をちらすべからず。さよく足ならば華をいとふべからず。はなの枝又は花のふさな

どちたるをこしにはさみてける事あり。これもあもしろきとなれどもむ用の事なり。

七十八 風吹候ときは。まりだけひきゝて。たしかに人のもとへにわたすべし。沓さきまで見あはせて。ひざにちからを入れてけべし。上手をば風したにあくとなり。

七十九 椽よりころびおつるまりけまじきといふ事。さしてなけれども。貴人御見物あるとき。みすなどにあたりて。椽よりころびおつるをける事。あまりにぶこつなるにより。けまじきといふなり。たゞの時はくるしからず。

八十 椽の上にあがりたるまり。まづ手にてかきおとしてのちに。取てあぐべし。

八十一 木に向ひてまりかずをけぬやうにすべし。これはわが立たる木の事也。懸のうち

よりむかう事なり。

八十二 まりのすみへゆきたらんととき。すみやかにいだすべし。人数をうしろにしてける事。一足はゆるすべし。二足とはすべからず。かなはざらん時ははねべし。

八十三 とをくおつるまりは。かしらをさきだてゝとくよるべし。まりも身もちなくなる也。行懸て身にそふる事は一段わるき事なり。

八十四 袖こしとていむまりの事くるしからず。但し下品たるべし。

八十五 軒にあがりたるまりをける事。落るほどをはからひ軒へ立入て。かゝりにむきてけべし。のきにむきてけべからず。

八十六 軒にたちたるとき。高きまりの家のやねへあがりみへぬ時は。むかひの人のかほをみるべし。まりのあるかたへ目が行も

の也。それを心がけてけべし。

八十七 いむまりの事。あひおひ又は大なる木などのまたを。あひての人すぐに木のうしろへけ入るゝを。ひらきながら。あひてのかたへすぐにけ入を申也。心得あるべし。

八十八 雨の後露はらふ事。さほにておとすべし。又御會には露はらひとて。御まりあるべき前には。人してまづける事有り。

八十九 まりの身にあたりたる時は。こしを折てしなひあふべし。若竹にすずめのとまるやうにあるべし。これをながしといふ。左りの手を身にそへてながし。又右のかたをながし。又左りへながすを左右左といふ。

九十 身にそふまりといふも。むねよりあしの中へそろりと落るまりをけあぐる事也。

九十一 うつばながしといふ事。身を直にいかにもけんそにあつるまりをいふ。

九十二 のべあしとは。遠まりをけて。左のあしを折しき。すべるやうに行事なり。いかにも身をつよくもちて。こしをつきいだすべし。身をなぐるやうにすべからず。身のくゞまりたるはよし。むなそりたるはわるし。

九十三 のべあしを仕ならふ事。つねにたふれならふべし。まりはあしにあらずとも。かへりみずしてのべならふべし。足ぶみひやうしだによければ。なりやすきものなり。

九十四 のべて落るまりを。たちあがらでそのまゝのぶる事を。つらねのべといふなり。九十五 のべて遠ざかるまりを。たちあがりてのぶるを。かさねのべといふ。

九十六 つきのべといふ事。木の枝又は何にても。ものにあたりてきぶく遠くゆくまりを。のべてけるあしのと也。

九十七 のべかへりといふあしは。のべて行

足にまりのあたりて。そのまゝかたへかゝりて。かへり足になるとなり。

九十八 歸りのべのあしの事。かへりあしをけて。其まゝ遠く行まりをのぶる事也。

九十九 かへりあしの事。左よりかたにかけてまはるをば左がへりと云。右よりかたにかけてまはるを右がえりといふ也。惣じてつねの人はけぬあし也。しんしやくすべし。百 軒がへりといふあしの事。軒よりおつる鞠を。のきの下へくぐり入て。身にもかけよ。亦身にかけずとも。懸のうちへけ入をいふなり。

百一 のべあしはのべたほるゝがあながち本意にあらず。もろあしをそろへてのべ。左足をしかずにけるを半のべと云。左のあしをしきてのぶる時は。左の沓さきの内のかたのするゝやうにけべし。沓あとのすぐなる

をよしとす。

百二 かへりあしはいかほどもひきく。かたほどにけあげて。かへりあひてけべし。高きまり足ぶみをして。きびすをたてゝまはりてける事。むきなをりと云。

百三 かさねつめといふ事。ごづめの人の事も。

百四 きぶくおつるまりをきりこゑとて。きぶくこふものなり。

百五 我分足をすぐにあげて。又も我分足なれども。けまし體をして見をくり。まりおつればつとよりてけるを。みをくりのあしと云。ひきよくなり。

百六 ついじのきわ又ゑんの下などをはしりころぶまりをいぬばしりと云。いかにも沓さきにてそとはねべし。

百七 沓かへしといふあしはなき事也。但し



他流にいふか。

百八 懸の木しげりて。枝などもかさなり。まりのみへぬ様に落る事あり。それを葉がゝりのまりといふ。またいてのまり共いふ。

百九 いごくのまりといふ事。夏山のかりば青ばがちにて。鹿の出るをみわけにくきものなれば。木のはのゆるぐかたをみるなり。それにより茂りたる葉の内より出るまりをいごくのまりといふ。

百十 はがゝりのまり。いごくのまりと同前に。木のはのゆるぐかたをいよくこゝろにかけてけべし。

百十一 からすおどりといふあしの事。さしてもなきあしなれども。まりによりて足をふみちがへて。おどりよりてける事あり。そのあしをいふなり。

百十二 おひまり。びんずり。ひうちおりまり

などいふ事。ゆめ／＼といふべからず。ひまりと云事。他流に申よしなり。

百十三 雲入りのあしとて。大きなまりたけをける事暮にあり。たゞしむやくのあしなればけまじきなり。暮に一足のものなり。とに初心の人はしんしやくすべし。

百十四 おちたるまりをけあげよと云也。ほるといふ事。又すくふといふ事あるべからず。

百十五 まりをば一丈貳丈又一ツ二ツといふ也。一足二足といふ事わろし。まりを一足二足といふは。けるときのまりをいふなり。

百十六 まりのよきをば逸物といふなり。生物ならねども。まりにかざりていふ事也。いさゝか子細ある事なり。

百十七 人ごとに夕べのまり今宵のまりなど云事申まじきとなり。いわれぬとなり。昨日

のまり。昨夕のまり。今夕の御まり。今日の御まりなどいふべし。

百十八 まりを人にいだすやの事。取皮を上へなして。こし皮を左右へなるやうにして。

兩方の手にのせて出すべし。

百十九 まりをうけとるやうの事。右の手にて取皮をとり。ひだりの手をまりの下にあてうけとるべし。

百廿 まり見やうの事。右の手にて取皮をとりて。左の手をそへて。こし皮をみまして。左の手のひらにのせて。ふくらをたゝきてみるものなり。

百廿一 まりのかた穴をぬふ事。七。九。十一。十三。十五。二十一。

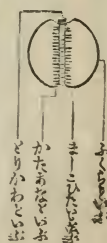
百廿二 まりの取かわのつけやうの事。こし皮のかへり二ツ三ツめに付るなり。

百廿三 まりの名所の事。

百廿四 まりたけの事。大概一丈六尺のもの

也。さればとてまりごとに此丈數ならてはけぬ事にあらず。時によりて甲乙あるべし。木の下簷の下などにては、いかにもつめてひきくべし。その外は長ののびたるよし。長のひきゝはかさもなくて。いやしくみゆるものなり。

百廿五 たかきまりの頭上にある時は。むきなをりてけべし。まりのほどをみはからふて。ものさはがしからぬやうにめぐみあふべし。あまりのどかにまはれば。おそくてまりおつる也。右へむくにはさびすをたてゝまはるべし。ひだりにむくには。さびすたてられぬものなり。



百廿六 かずまりのけやうは。つねより足を  
たかくあげて。數を本にけべし。

百廿七 まりの數とる事。五十までは口の内  
にてかぞへて。五十めにはじめてかぞふと  
云なり。かずの字をひきて。こゑをあぐるな  
り。御數とはいふべからず。其後は六十。七  
十。八十。九十。百。百十とあげべし。とをと  
はいわぬもの也。

百廿八 懸のうへやうの事。松はいぬる。楓は  
ひつじさる。柳はたつみ。櫻はうしとらな  
り。たゞし軒のかたをば北にとる也。木のう  
へやう。すこし内へふすやうにすべし。其謂  
は木の本に立人も。其なりにそふて。立おほ  
ふやうにあらんためなり。これは普通のう  
へ木なり。まづ四本は四季ともに用ゆ。位あ  
る人の庭なり。

百廿九 かゝりの木の事大かた定めり。こと

木などうへまじき事なり。人により梅椿な  
どうゆる事あり。梅四本は上位の庭なり。柿  
の木紅葉おもしろきとてうゆる事あり。つ  
ねにはうへべからず。又さくらをかゝりの  
木の余に。なみ木などにうゆる事有。くるし  
からず。

百卅 木をばそのまゝをくものなり。末をさ  
るべからず。あまりにながきは切ともあり。  
木のえだをすかす事。大事のものなり。すか  
さぬ枝あるによりての事也。れうじにすべ  
からず。

百卅一 かゝりの木の枝の事。さいの下枝は  
いづかたへも向ふべきなり。但うしろのさ  
いの下枝成をばいむなり。枝の末のあがり  
さがりはくるしからず。身木よりさし出た  
るを本とす。さいの下枝といふは。下より  
第一の枝の事なり。又身木よりなりとも。

又枝よりなりとも。さかさまに地へさし出たる枝をばいむなり。此えだの名はさか枝といふなり。但柳はくるしからず。九枝十二枝とて謂有り。口傳おし。よのつねの人のさかひの枝といふは。うしとらのかたの木  
の枝のひつじさるのかたへさし出たるを申なり。

百卅二 あみのめの事。四寸五分也。又四寸ともいふ。目はむすびたるよし。ひきよせてゆひたるはわろし。まりがきのあみの高さ。土より一丈六尺。のたけのぬきとをしのひろさ四寸也。

百卅三 あみぐしとはいふべからず。柱といふべし。立るほどらひ壹間計あきて立るものなり。

百卅四 切たての事。竹を末をさるもの也。  
百卅五 まりざほのこしらへ様の事。尺八竹

ほどなる竹を長さ壹丈五尺にきりて。上下にふしを置て。ふしより三分ばかりおきて切て。竹をあふなり。ふしに數はさだまらぬものなり。おきどころは座のうしろにおくべし。

百卅六 庭のはゞきめの事。色々さほう有りといへども。定まらぬものなり。其にわのな  
りにより。いかやうにもはくべし。くるしか  
らず。

百卅七 水をうつ事。春夏は水うちてはき。又  
けしやう水を打なり。秋冬はけしやう水を  
うたず。

百卅八 まりの場に出ては。こひごゑの外。う  
むの事いわぬものなり。

百卅九 まりをひざにてとむる事あり。其時  
ひざをもちあげてあつべからず。こしをす  
へてうくべし。されど下品の事なり。かなは



ぬときはけべし。つねにはすべからず。

百四十 肩をまはすまりの事。すこしそりめにして。しなよくすべし。あまりすぐに立て。まりばかりをまはしたるはみにくきもの也。

百卅一 曲足のときも。かゝりにそむかぬやうにすべし。歸りあし。むきなをりなども。かゝりのかたへむき候はんと心がけべし。

百卅二 まりをけはづしたるときは。しなによりたをるべし。たあるればのがるゝ也。

百卅三 遠まりをのべたるとき。わきへゆかて。ひざの上に落るときは。左のひざにてまりをそとはねこぼし。さて右にてけあぐべし。

百卅四 ひざつきてけはづしたるまり。わきへゆかぬときは。まりの上よりあしをこして。さびすにてけあぐべし。他流にては飛う

ちがへしのすくひといふ秘曲のうちなり。

百卅五 かたにつけはづすまりのそばへ落るとき。さびすにてけあげて扱けべし。そばあしといふ曲のうちなり。

百卅六 烏帽子のともうしろなど。思の外にかゝりて。見うしなひたるまりける事。いかにもこゝろをしづめてまつたし。(一巻)ものさはがしくゆきあふべからず。

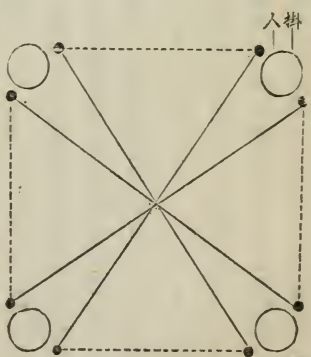
百卅七 くづばかまはくずぬのにてつくれるものなり。鴨沓は水鳥のはし(二巻)にたれば名とし侍り。かたぎぬのつゆ。沓のつゝ皮などは。ふすべ皮は用ぬものなり。その外は色くそのしなおゝし。まり足の上下にしたがひてさだむべき事なり。

百卅八 庭の地こしらふ様の事。五尺ばかりほりて。庭二尺ほどは土尾にてつき。水のぬくるやうにすべし。扱かゝりをうへ。なかほ

どにかめをうつぶせて。三ツばかりふすべし。沓をとひききて興あらんためなり。その上はこまかさ砂にやま土を三ツがひとつほどまぜてつくべし。まはりにいかにもくまろくにして。中は少高めにすべし。中ひきければ水たまりてあしく。其上中はすなゝがれてひきくなりやすきものあり。そのこゝろ得有べし。

百卅九 人の分のまりをあやまりてける事未練の義なり。これをばい足といふ。おほよそ自他分のさかへをしらざるゆへなり。圖をもちてよくくわきまふべし。もし我分を人にとられんとせば。かさねごひとて。我分のよし聲をかさねてこひもどすべし。なをももちひずば。ちからなくうばわれてのくべし。あひかまへて他の分をとる事不可有。

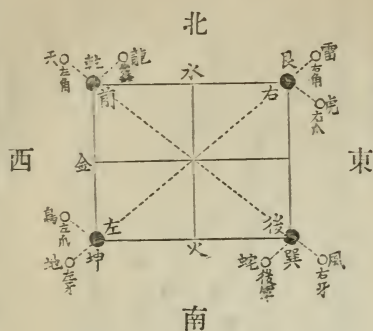
兩分之圖



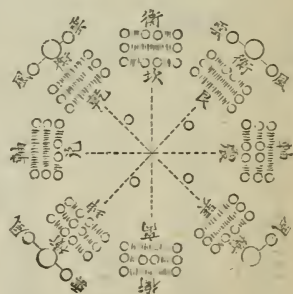
百五十 夫まりと云事。もろこし黄ていといひしみかどの蚩尤といふ逆臣をたくろくといふ所にて退治し給ひし後。武をならはしめんがため造れり。まりのかたちはしゆううがかうべにかたどれりと也。しかるゆへに魔障をはらい逆賊をしりぞけ。四海をたいらげ一天を治る器とし侍るとぞ。さればまりの庭に八人立ならぶ事も八陣の圖におこ

れり。八陣の圖といふは。むかし孔明といゝ  
 しかしこき人のつくれる軍法なり。此八陣  
 の圖はすなはち黃帝の臣下風后といゝし  
 人。握機の法といふをつくれしにもとづき  
 てはじめしと也。八陣の圖をみて。つめひら  
 きをよくくしるべきこと也。これ第一の  
 かんようなり。

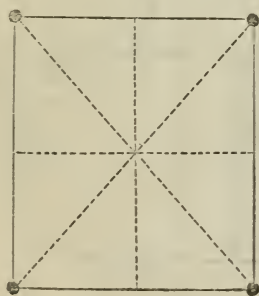
八陣之圖



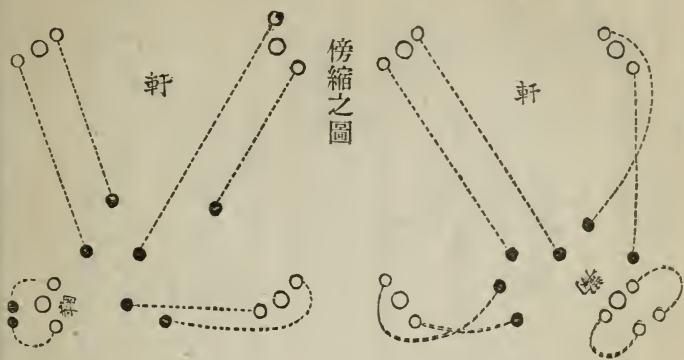
握機之圖



八境之圖

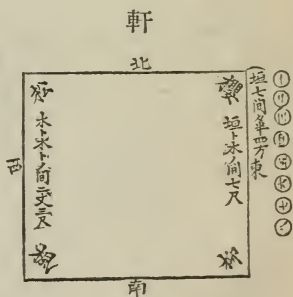


對縮之圖



鞠道三十首之和歌

身をちかく足をばひきく上る共まづあたらぬ  
 は下手の内なり  
 立おほふ姿といひてさのみ又かゝむもわろし  
 のけそるはうし  
 正分の縮といひしは向ひつめ角とくの人を  
 いふなり  
 角ならで向ひにたてる人をこそ次分の縮とい  
 ふべかりけれ





相生の松は戌亥の物なれば楓の本はひつじ申なり

青柳はたつみにたてる物なれば櫻の花はうし寅ぞかし

みな松の四本懸は位有人のたてたる庭とこそきけ

おひまりや思ひかへしといふまりは主定れる曲とこそきけ

分足の數は三ツなりしゐてけば反哥足とて四ツ五ツなり

軒まりはよし落る共身にかけてながさばながせ軒の禮なり

軒の方まりけぬ時も横さまに用有とてもとほらざりけり

軒の下あがりなりけり何方も懸によりてさがりもぞする

多くなき左足なりけりぬき足はたゞ一言に一

つなりけり

木にかゝり袂にさわり身を越もまづあげまりはけぬとこそきけ

有と云聲より外にいふ事はまりの庭にはせぬとこそきけ

立よるも心にかけばかりそめも人の身につくまりはけざりき

一丈も九尺もよしやまりさほの長さの程は二間なりけり

足つゝむ習ひ計はいわねどもなにはの事か君に残さん

水の上にうきたる鳥をみても猶わが足ぶみの道をしぞ思ふ

吹つたふ流れは二つなには江の鹽風よりもたゞ飛鳥か風

鴨沓も葛の袴もゆるさずば誰かはさましたれかはかまし

庭の中は七間まなか四方なり懸の中は貳丈三尺の大事なりけり

立人のゑぼしにさはる枝ならば花も紅葉も折ん青柳

縮過し懸をわくる折ふしも人とうへ木の間をとをらず

幾度もやすむといひてのく時は刀をさすは俗の法なり

はながみに扇をそへて砂の上なをる圓座の脇にはさめり

上鞠は二ツの脇とくみいあり人といふには更にせざりき

むば玉のからすをどりといふまりは只曲足の外とするべし

脇指も刀もぬきてたつ時はなをる圓座の脇にく也

びんずりやうつぼながしは曲足の中にもまり

這三十首飛鳥井家法名三樂中納言雅章述作也。以前大納言卿。本書寫校合矣。同作之和歌百首也。其内五十首或卅首書分之本有之。仍三通也。今二通追而可寫者也。

寛文六季林鐘九日 正三位藤實豐

五十首は寛永十一年比飛鳥井雅章卿自筆之本令懇望所持ス。然而先年焼失。仍又寫之者也。

右一冊以正親町中納言公通本。仰家僕令模寫。予加校合畢。

天和二年十月三日 虎賁中郎將藤(花押)

續群書類從卷第五百三十九

總檢校保己一集  
男 源 忠 寶 校

蹴鞠部四

蹴鞠之目錄九拾九條

第一

- 一懸の上下の事
- 一八境之圖事
- 一兩分圖の事
- 一對縮圖

第二

- 一さほひ鞠ひらき詰の事
- 一横詰の事
- 一棹を庭に置事
- 一足を包事

第三

- 一沓をはく事
- 一扇を持事
- 一圓座を敷事
- 一着座する事
- 一庭に鞠を置事
- 一扇帖紙置事
- 一懸に立事
- 一上鞠之事并請取事
- 一棹にて鞠落事
- 一鞠長の事

一 鞠棹の事

一 分足と云事

一 鞠を云事

一 幕の事  
庭の事

一 主人に沓を着せ奉事

一 足を包事  
沓をはく事

一 沓を人に出し參する事

一 襪の事

一 沓の事

一 鞠蹴時實禮の事

一 懸に立替る事

一 懸へ立人數配の事

一 鞠を落し候時禮義事

一 縁に上りて落ル鞠事

一 簾に當鞠事

一 軒より落る鞠の事

一 貴人へ上鞠すべからざる事

一 上鞠請取時曲蹴ス事

一 鞠をほす事

一 鞠を庭に置に四季事

#### 第四

一 鞠を人に見する時渡事

一 一枝に鞠を付る事

一 ふすべ鞠の事

一 一枝の鞠渡請取披露する事

一 一枝の鞠を軒に置事

一 一枝の鞠庭にて解事

一 軒の向木の間に枝の鞠とく事

一 一曲足名の事

#### 第五

一 懸を拵事

一 四本懸を植る方角の事并圖

一 木を植始納の事

一 木の間廣狹事



- 一 軒と木の間の事
- 一 鞠垣の高サの事
- 一 網の目大小の事
- 一 抜とをしの廣サの事
- 一 軒に網を張る事
- 一 竹切立の事
- 一 庭に水を打事
- 一 一本懸の事
- 一 二本懸の事
- 一 三本懸の事
- 一 六本懸の事
- 一 龜の甲の六本懸の事
- 一 八本懸の事
- 一 十二本懸の事
- 一 序破急三段蹴所の事
- 一 四本懸本尊の事
- 一 鞠の本尊の事

# 第六

- 一 懸木の枝名の事
- 一 枝をすかす事
- 一 庭を拵事
- 一 雨降しめり取事
- 一 鞠かまへの事
- 一 かたびやうしの事
- 一 三拍子の事
- 一 待拍子の事
- 一 千鳥足の事
- 一 はり引足の事
- 一 腰と膝との間鞠の事
- 一 抜あしの事
- 一 鞠の目つきの事
- 一 鞠を落し立事
- 一 鞠蹴所の事
- 一 鞠をひつ付蹴事

(耳記)

一 足の事

一 腰をすへてすへざる事

一 手持の事

一 あふひの日に向事

一 水鳥の浮事

一 左足の拍子事

一 鞠の三聲の事

一 序破急三段の事同鞠数の事

一 鞠を取事

一 鞠蹴納る事

一 鞠數とる事

第七

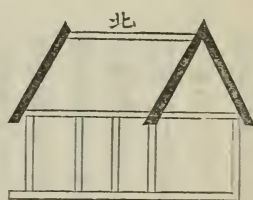
一 鞠之起事 天竺大  
唐日本

一 懸始る事

一 根本鞠足次第事

一 鞠の精與成道問答の事

第一 蹴鞠口傳之抄  
一 懸の上下の事



一 松 五

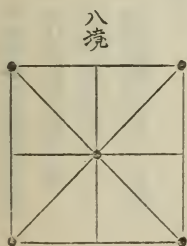
二 櫻 六

七 楓 四

八 柳 三

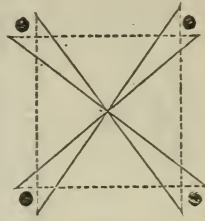
但貴人によりて一の向詰二になる事も有。  
口傳有之。

一 八境圖の事



我人の境の鞠はけかたへ任すべし。他分たらば袖を引てしりぞけ。自分たらば聲を出てすゝめ。さほひの鞠とて。身をはなれずば。四方へもけて行也。猶口傳有之。

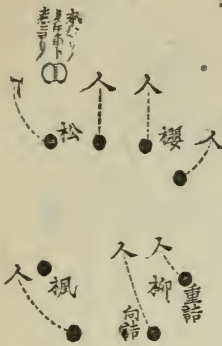
一兩分圖の事



一對縮圖

○以墨爲向詰

○以朱爲橫詰〔今用…〕



右令相傳候之處。不可有他言外見者也。賀茂流秘傳奧書。各別之卷在之。

右本書校合仕候。少茂相違無御座候。以上。

寛永八年

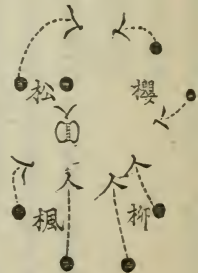
九月廿九日

松下掃部助

教久判

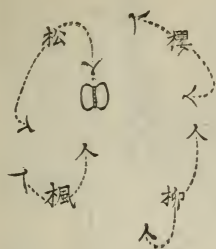
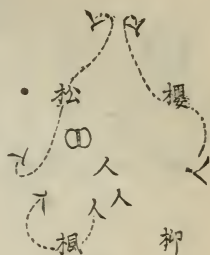
第二 蹴鞠秘傳之抄

一さほひの鞠ひらき詰事



かやうに身はなれずば。いづかたへもけて  
行時。一所に數をけはこび取べし。あゆむ間  
はいかほどもひらくべき也。猶口傳有之。

一横詰の事



かやうに各足をけ出候時。向つめ堪能にあ

らざる人と相かゝりにたゝむ時。向詰をさ  
し置て。よこつめして鞠をこひ取てける也。  
然共まりも不堪にて。此詰事有まじき也。其  
人數の内にて上手自然とつひる事あるべ  
し。但上手といふとも。細々はつひる事な  
れ。なを口傳有之。

一棹を庭に置事

塀中門の方へよせ。上座へ末をなしておく  
べし。なを口傳有之。

一足をつゝむ事。

杉原を一枚よこに折て。それを三分一ほど  
たつに折て。大指を三まきしておりかへし。  
かみよりを二ま<sup>三イ</sup>とひして。小指の方へよせ  
むすびて切べし。是に眞行草あり。結目に猶  
口傳有之。

一沓をはく事

右之足よりはきて。左のあしよりぬぐべし。



緒のとめやうに口傳有之。とめ様第三卷ニあり。

一扇をもつ事

左の手にふかくと持べし。口傳有。

一圓座を敷事



如此軒の左右に貴人の座をしく。平の座は貴人の座より一間半二間ほど置。それより次は圖座一ほど間を置敷べし。又軒の向の上座には。貴人より少さがりたる一廉ある

仁體を置様に敷也。圓座のとめばをうしろへなして敷べし。口傳。

一着座する事

庭へ出時。衣裳を刷て。塀中門の外にて貴人をうかひ。貴人着座あらば。塀中門をいらんと思ふ時。各へ目禮なして塀中門を入。貴人の方へ手をつき禮をして。我つくべき所へ行。圓座をいさゝか引さぐる様にして着座して。右の足を上に組也。軒の向を往還る人は。簾中の禮有べし。軒下又懸の内をとるべからず。かよふの人も同前也。但主人は通りてもくるしからざる也。是も貴人軒下に御座あらば用捨有べし。猶口傳有之。

一庭に鞠を置事。

つま戸のきはに有鞠を。右の手にて大指と人さしゆびにて取革をとり。左の手を扇のとをりにそへて。軒に向たるかゝりのまん

中のとをりにて。軒を見る様にして。左足よりふみ出て持て入。かゝりのまん中にて左のひざをつき。同手をつき。腰皮を軒に向。鳥の子を左右になして。とり皮を上になして可置。さて歸る時は左足より三足しりぞき。さてこして貴人の御座を前になして左右に向事。貴人の圓座により奉り。但むはぬやうに歸也。是落役のそなへなり。猶々口傳有之。

一 扇たいふがみ置事

各々目禮有て。紙を取出して。扇の下へ取そへて。左の圓座の下へ半分計入置也。貴人の左の御座あらば。右の方に可置也。口傳。

一 懸に立事

扇を置いていしやうかひつくろひ。懸へより袖の木にさはらぬほど。左のひざをつき。少貴人の方の手をつくべし。猶口傳。

貴人懸へよらせ給ふ時。平人は各圓座をはずす也。木の本に立給はゞ。やがて本座すべし。口傳有之。

一 上鞠之事并請取事。

八人立終て。若輩の人鞠を取木の本へ歸り。向詰を見左右を見廻候時。請取人立あがり候也。左右の人も其時見合て立候也。又上鞠の人三足ふみ出す時。請取人すゝみより。一間半ほど置てうけとるべし。殘の人も三足すゝみ出鞠かまへすべし。今一の上まりの様如前。八人立終て。上鞠の役人まりを取。そんこながら向詰を見て。三足しりぞきて一足ふみ出し渡す也。請取人はしりぞくを見て。則立より請取べし。殘の人もすゝみ。まりかまへすべし。猶口傳有之。

一 棹にて鞠落事

竿を右の手に持て行落す時。左の手にて棹

の本をにぎり。右の手を上にて成て。まりをはね落す也。さて三足しりぞき禮有て。棹の本を前になして。左の手にさげて歸。本のごとくになして可置也。口傳有之。

右賀茂流如斯。奥書別卷有之。

右本書校合仕候。少も相違無御座候。以上。

寛永八年

九月廿九日

松下掃部助

### 第三蹴鞠式法之秘傳

一鞠長の事

一丈五尺也。これよりたかく不可蹴。

一鞠棹の事

竹の二三寸よきほどなるをためて。一丈五尺に可切。すゑの節ぎはより三分計をさて。(り蹴蹴)笛がしらの様にかどをちろし拵也。さて本

をば節ぎはより一文字に切也。又末の節一そろゆる事も有之。又他説二節をへ切る事有。但そろへぬる能也。なを口傳有之。

一分足といふ事

三足けて渡すを云也。若四足けば。第四足目の時。必やの聲にて請かへすべし。

一鞠を腰はさみにかけておきたるを。一二とも一丸とも一果共云也。一足二足とは云べからず。蹴時は一足二足と云べし。

一幕とは其夕べを云。七日を云といふ事にあらず。

一鞠一庭とは。七日の稽古の内を云也。

一主人に沓をはかせまいらする事。

先筒を引立て。右の沓をまいらせ。さて左の沓をまいらすべし。緒のとめ所は外の方なるべし。左は上より下へはさむ也。右は下より上へはさむべし。

一 沓を人に出し參らす事

襪子は内へをし入て。緒をもわけて内へ入。左右の沓をそろへ。右の手にもちて參るとき。左の手にのせて渡す也。きびすのかたを人の前になして渡す也。下にも置也。請取人一足そろへたる中を右の手にて取べし。猶口傳有之。

一 襪子の事。賀茂沓に襪子をしつけて。是をつゝとも。たてあけ共。ひつたて共言也。根本は襪子と云也。

一 沓のつゝの高サの事四寸也。襪子の色々は紫皮也。ふすべ皮の無紋は主上の御襪子也。錦草紫の有紋は親王家様の御襪子也。黄皮。白皮。藍革。五めん皮。平人のしたふす也。さる故に紫。ふすべ皮。常の人着する事あるべからず。沓の緒の長さ三尺五寸也。但常には三尺よし。

一 鞠ける時實の禮儀の事。鞠を踏ひらむる事。

貴人の顔へけつくる事。此二ヶ條のけがは其目斟酌すべし。座へ歸り扇と疊帟を納べし。然ば其日の蹴まじき禮也。余入つよくあそばせなどゝ會釋有べからず。但人によりて善惡あそばせとて。又庭にたつる事も有べし。又貴人の身にあつる時。すいかんの紐のとくる事。袴の緒の解る事。指つゝみたる紙のぬくる事。すだれにけあつる事。木をける事。延ずしてころぶ事。鞠がきをけこす也。火を打事。あせぬぐい落事。加様のけが出来あらば。圓座へかへり。扇ばかりを取。余の人を立てけさするもの也。また人たちはあらば。其時やがて出て可蹴也。

一 懸に立易事

上八人より立蹴て。其内のひきなる人より氣遣有て座にかへり。餘の人を可立也。たゞ



し上手といふとも。失あらば座へかへるべし。また人數の多時。長立有べからず。其以後は次第くゝに立易也。また二八ともあらば。上八人立て後一段蹴て。其次の八人を一度立易べし。一人宛易時は。鞠外へ落たる時のくべし。鞠の數ある時に立易事なかれ。口傳有之。

一懸へ立人數配の事

主人または家の先達の人のほからひたるべし。

一着座の人數定や否の事。十人も廿人とけての有次第に着座する者也。人數不定。但勝負の鞠の時は。兼て人數を定て置。着座可有之。

一鞠を蹴落し候とき禮儀之事

我けをとしたる鞠を人取時に。二三足あゆみより。蹲踞して禮有べし。また取人も其禮

を見て。鞠を地に付禮をかへす。鞠を落したる人の禮を見ずば。禮やあるらんと思て。木の本にて鞠をおき。前に立よりて上鞠すべし。また鞠落したる人の禮なくば。まりを地につくべからず。

一縁にあがりて落る鞠の事

つくばひて可蹴。縁に留ば取て地に付て上鞠にすべし。またはかきをこして鞠を取上べし。

一簾に當鞠の事

かまへてけべからず。其故は高座の簾の内に。必貴人御座有べき氣色也。(禮儀)我け當てば膝を着捨る也。自然とつよく當て。遠くさりかへらば。請おひてければ無上の秘曲也。覺悟してはたしなむべし。五間も三間も簾のかゝりて。下つかたのみすなどにあたり來ば。けてもくるしからず。但用捨肝要なり。



一 軒より落る鞠の事

軒へふかく鞠のあがり。軒下よりみえぬ鞠をば。他眼をかり其下にて侍べし。さて廻てかはりの方へなをりてけ入なり。軒ひさくばつくばひてけべし。はやく落ば。身に引請て。懸に向て一足にて蹴入べし。ふぜいなくてはけぬ物也。猶口傳有之。

一 貴人へ上鞠をすべからず。其故は御顔身にもけあてはとおもふ用捨也。

一 上鞠たらずして我前に落共けべからず。中にて取べからず。落して上なをすべし。

一 上鞠請取とき。たらざるまりをのべ足にけべからず。身に當らでながしける事なし。後へこしたるとて。まはしてけまじき也。是は最初より曲にけぬものなれば。曲になさじとをもふ氣遣也。

一 鞠をほす事。

春夏は軒かゝり逆木にかけべし。秋冬軒にかけよ。空くもらねども時雨る事有。ぬらさじため也。軒にかくる事。時を不嫌。懸にかくる事なかれ。

一 鞠を庭に置に四季の置様



松冬

櫻春

楓秋

柳夏

加様に置事一段の秘事也。猶口傳有之。聊爾々不可置者也。

右賀茂流如斯。奥書爾別之卷有之。

右本能校合仕候。少茂相違無御座候。以上

寛永八年

松下掃部助

九月廿九日

教久判

進上イ 休齋様イ

#### 第四蹴鞠作法之事

一鞠を人に見する時渡事

箱に入たりとも。腰はさみに有鞠なり共。ま  
り計取出して。右の手にてとり皮を持。左の  
手をいさゝかそへて。さて渡す時。左の手に  
すへ。右の手を鳥の子にそへ。取皮を上にな  
して渡す也。請取人は左の手よりさし出て。  
鞠の下をかゝへ。右の手にて取皮を取べし。  
さて見る時はまじこの體を見て。しやうぞ  
くを見。又皮の善惡を見しりてほむる也。ま  
た貴人にとりてきづかひある時。御前に置  
かへる也。口傳有。  
一枝に鞠を付る事

枝四重有べし。一の枝より下三六寸也。一の  
枝に向て本を一刀にそぐ。わな二ふせ也。引  
かた三ふせ。長さかた四ふせなり。



かに結びといふ。是をとく節共とく日の節  
共云也。またはとんぼうむすびといふはと  
かぬ節也。近日括ざる鞠を枝に付て他所へ  
贈る時。とんぼう結びに可付。是かれざる鞠  
と心得させんため也。かまへてくけべか  
らざる者也。又花の時は櫻。夏は柳。秋は紅  
葉可付。但松と竹は四季にわたりて可然也。  
櫻柳紅葉はまりをのする枝より上には。枝  
二重も三重もあるべし。不論之。松竹には一  
付二付によりて枝の重定也。櫻柳紅葉は本  
の長一尺五寸計也。そぎ目は壹寸五分計也。

また壹尺二寸たらば。そぎ目も一寸二分計也。まつの枝最下のより上のふしに四方に枝さすべし。一付は枝數以上十三也。二付は枝數十四也。竹のうらは節より一寸置て。枝の向をそぐべし。枝數は一付は以上七なり。二付はえだ數八也。二付如此。繪圖あかす也。上はとんぼう結び也。下はかに結び也。



一ふすべ鞠の事

昔は日本に鞠大切也。さる故春のふるき鞠を送るかたを打なをして。四月初のころふすべ出して。五月中旬まで用。又秋は紅葉の時分。冬は雪のあした。春は花のころ賞翫して蹴也。但内々稽古の時ふすべまりけるに。何時も不苦。此二段の折節時分はづれて

は努々不可蹴。白鞠とふすべ鞠と枝に二付は。花の比夏は四月一日より五月中旬まで。秋は紅葉の比。冬は雪の朝の鞠に。ふすべ鞠を下に付也。正月一日人の本へつかふ時。八朔の時は白鞠下に付ル。五節の時は白鞠下に鞠賞翫也。あたらしき鞠をふすべたれども。他所へ送る時は。ふるき鞠の心得也。また白鞠を二付時も有。口傳在之。

一 枝の鞠を請取披露する事

えだの鞠を人に渡には。枝の末を右の方へなし。本を左へなして。右の手にて鞠をかへ。左の手をそぎ目のきはにふせて。左の膝をつき。鞠上に成て渡也。また請取人によりて手の禮可有之。次の枝の鞠を請取人は膝をつき。左の手にて枝の本を取。右の手を上になして。えだの末を右になす様に請取て。貴人の御前へ持て參。披露する時に。貴人の

右にまりのあるやうに。我左の手に取なをして。右の手をつき御目にかけ。押板角によせかけて置也。但花など有て押板さし合ば。便宜にしたがひ可置也。

一枝の鞠を軒に置事

まづ塀中門より侍枝の鞠持て庭へ出蹲踞。然所に着座の内。若役とて出て枝を請取て。縁の上に屏風をかまへて置。それへもよせかけて置。本座へ歸る也。又縁にもよせかけて置也。つま戸の方に可置也。枝の持やうは。右の手にて枝ごしに鞠を抱るやうにて。左の手にてそぎ目の上を手をふせて持て行。置時蹲踞してかゝりを前に成て歸べし。貴人の方を後にすべからず。猶口傳有。

一枝のまりを庭にて解事

縁にあるを蹲踞して右にあるごとくに持て。軒の本にて蹲踞して。枝より鞠の落ざる

様にしなをあらせ。枝の末を右の方へなし。紙よりの結び目を上に成て。左のひざにておさへ。右の手にて紙よりを引。左の手を副解て懷中して。さて鞠を右の方へなし置。次に枝にかかりによせかけ。また鞠を取て。庭のまん中に如常置て。歸さまにたちながら枝を取。塀中門のきはにて最前枝を持て出たる人に渡也。また軒の向木の間にてとく事も有之。筒を五六寸にして土へ打入。枝をさしてとくも有。木間又木の本に筒をさすなり。口傳。

本の本に有筒は如此そぐなり。



木の間立筒は。如此すぐに切て。土より少も出ざるやうに打入て置べし。



一軒の向木の間に枝の鞠解事

かねて筒をさし置たらば。軒に可置枝をすぐに軒の向へ持て行。其筒にさして置歸べし。さて解人其枝を取て。末を右へ本を左へなしてふせ。膝にておさへて。右の手かたかたにて。紙よりのみじかき方を引。左の手をよせ解て。帟よりを懷中して。鞠を右の方へなをし置て。枝を左の手にて左のかたの後へ其まゝ引なをして。また鞠を取。左足よりふみ出して。真中につねのごとく置て。左足より三足ふみのきて蹲踞して。歸さまに右の手にて枝を立ながら取。枝の本を前になしてかけて。其まゝ指出て。最前扉中の外より出たる人に渡す也。其枝を三足ほどまで。右の手にて鞠はさむやうにて持て。扉中門

を出。家内入。人の見ぬ所に枝を置べし。筒立ざる時も如此能也。猶口傳有之。

一曲足の名の事

歸足過去。身別足(曲蹴)現在。延足未來。是三曲足と云也。大籠足。小籠足。向直も足。左右のながし鞠。左右のかたをこして廻す。あかし櫻かさねとも云也。くゝり歸り。沓かへし。鴨の入くび。うつぼながし。延歸。新歸。かたの鞠たひ歸し。うけ歸。おひおもひ歸。衣紋流。逃籠。追籠。半廻籠可負。何の曲足の時も。左足の聲なくば。まり身にそはぬ者也。能々口傳有之。

右賀茂流如斯。奥書別之卷ニ在之。

右本書校合仕候。少茂相違無御座候。以上。

寛永八年

松下掃部助

九月廿九日

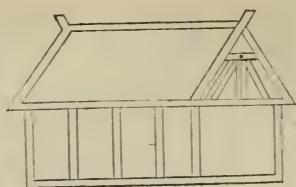
教久判



第五 懸を拵事

一南向にして七間々半四方なるが本なり。但一方へ長く共不苦。又軒も所によりていづかたへも向ふべし。猶口傳有之。

一四本懸を植る方角の事



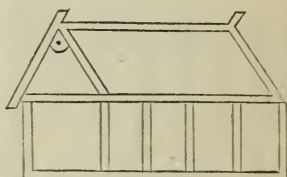
松  
西

松

楓  
西

東  
柳  
門  
柳

一北向の掛の事



松  
西

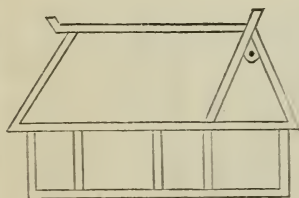
松  
柳

東  
柳  
門  
柳

北

松  
西

一西向の掛の圖



松  
櫻

松  
柳

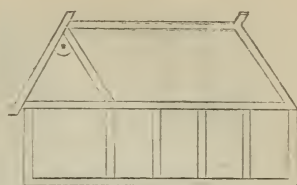
南  
柳  
門

松  
柳

西

松  
櫻

一 東向の掛の圖



北  
松  
櫻  
東  
柳  
南堀中門  
楓

何も堀中門の向軒の方上座也。軒はいづかたに有とも。かやうに方角を本に植也。猶口傳有之。

一 木を植始納方の事

良より植初て。巽の木を植。坤の木を植。乾の木にて植納之。木をすかすも同前なり。猶口傳有之。

一 木の間廣狹の事

掛の間二丈二尺本也。但庭せばくば二丈一尺。二丈。一尺九尺。一丈八尺。又は一丈五尺までも。一尺づゝひかへて。三合て植る也。猶口傳有之。

一 軒と木の間の事

一方の面屋の柱を請て木を植也。雨露露イより一丈五尺本也。但庭によりて一丈三尺。又縁のつか柱よりも一丈三尺。猶せばきはたゞ八尺までもつゝめて可用也。猶口傳有之。

一 鞠垣の高さの事

一丈四尺。一丈五尺。兩説。何も可用。

一 あみの目の大小之事

糸網のめ四寸にすぎて。あひにてそむる也。又繩網の目は五寸に編用之。網をはる柱は竹も木も可用。口傳有之。

一 ぬきとをしのひろさの事

一間ヅゝに柱をたて。一二寸の竹をよくた

めて。横にぬきとをす。其間四寸に可用。地ざわより四五尺斗は竹の五六寸なるを。四寸間を置。堅にひしとををして可用之。猶口傳有之。

一 軒に網をはる事

正面の縁にあみをはるには。折くぎをひしと打て。いさゝかそらしてはる也。

一 竹切立の事

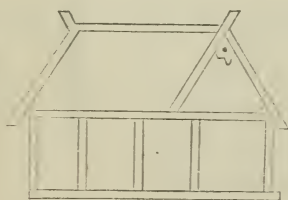
高さ壹丈五尺。すゑの節ざわより一寸計置て直に切也。最下の枝へゑぼしのさはらぬほどに置て。けかたへなすべし。あひをひに立時。お竹め竹と立也。最下枝一め竹と云也。一本づゝ四本立る時も。男竹女竹と陰陽を心得て可立也。枝數は九曜七曜を表する也。但數さだまらず共くるしからず。

一 庭に水をうつ事

夏の庭に晴の鞠の時は。砂を中へはきよせ

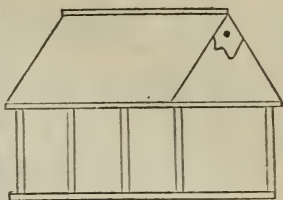
て中高にする也。鞠あらん時は。砂をはきちらして。高ひきもなきやうに用意すべし。はうきめは軒を横に後へしりぞきながら。これ〔足懸〕あと〔足懸〕のなきやうにはく也。掛の内は半にはくべし。何もさゞ波のよするごとくにはくべき也。

一 本掛の事

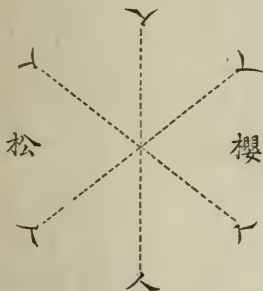
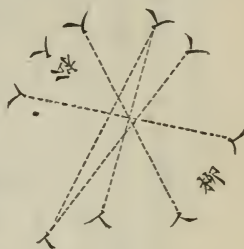
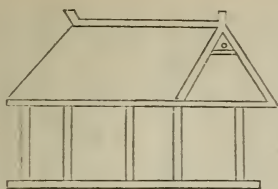


家の右に植也。立様は如此。九人も十人も十一人も。人數さだまらずける也。

一二本かゝりの事

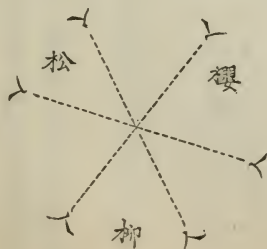
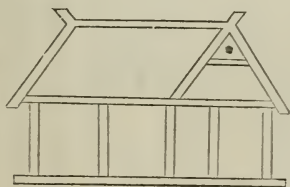


家の右一本角違がへて。一本立やう四本懸のごとし。



六人詰の時立様如此。八人の時は四本懸のごとく立也。  
四人詰の時は。兩人は木を後になしてたつ也。

一三本懸の事

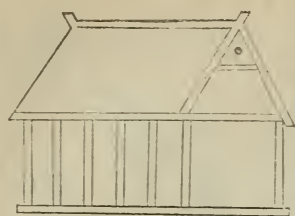


立様六人詰なるべし。



一六本懸の事

如此九人立也。木を後にして立人を野伏と云也。



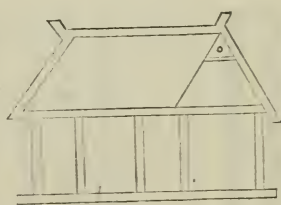
松 ヲ ヲ 櫻 人 人 人 人 柳 楓



松 ヲ 櫻 人 人 人 人 柳 楓

一八本懸の圖は苦煩惱也。

か様に拾二人立也。又十人立時は。野伏に立ごとく。木を後になして立べし。残りは常の立やう也。

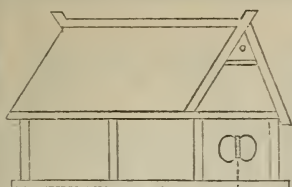


松 ヲ 櫻 人 人 人 人 柳 楓

立様常の四本かゝりのごとし。又にげ木のかたにてける時は。松楓二本をのぞき置也。一龜のかうの六本かゝりの事。五本かゝりのごとく寸を取植也。

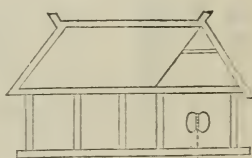


檜 松 櫻 棕  
後 初 中  
柳 楓 柳 榎



柳 棕  
柳 榎  
中  
軒中門  
鞠置入

序の時は中間。破の時家の左方。急の時は家の右にてける也。  
一十二本懸の圖者十二神。十二月。十二因縁也。

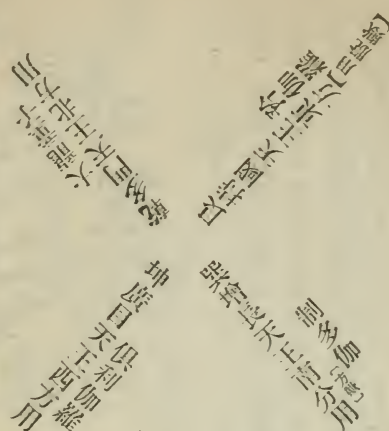


松 初 櫻  
楓 柳  
柿 柳  
松 破 松  
鞠置入

序の鞠は圓座を敷たる方にてける也。破のまりをば鞠を置たる懸にてける也。急のまりは松二本有懸歟。柳三本有かゝり。此兩所何のかたなりとも。其時にしたがひ用ける也。軒の方の懸も序分たるべし。此十二本の植やうは。まづおくの家本やゝに用之。軒の

かたに四季の木を植て。さて前後をかくる木をば。柳をもつてへだつべし。棕は櫻の代なり。榎は柳の代也。柿は楓の代也。檜は松の代なり。此心をたがへずしてうへる也。

一四本掛本尊の事



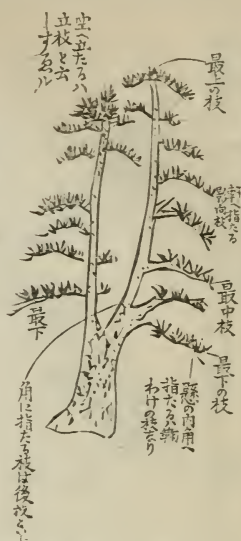
然則鞠の行者をば即身を不動明王と觀ずる心有。又云。艮櫻は藥師。東方春にかたどる

也。巽柳は觀音。南方夏にかた取。坤の楓は阿彌陀。西のかた秋にかたどる。乾の松は釋迦。北方冬にかたどる。是則生老病死也。春の梢の緑に立花のさく所を生に取也。夏の梢の茂り合たる所を老にとる也。秋は梢の一葉宛紅葉して。物あはれなるけしきの見ゆる所を病に取也。冬は梢の葉ことごとく落葉して。物すさまじき所を死と取。然ば世間に無定相。以不定爲定といへり。されば乾松を用植事。霜雪にも色不變所を金剛正體に用。無量壽佛祝言に用仰所なり。蓋さとりを可得者也。

一鞠の本尊の事

南無普賢菩薩也。口傳云。鞠の上は<sup>アガル</sup>一切衆生の生也。下るは一切衆生の死也。中間は人間也。鞠の體は六道輪廻也。腰皮は命根也。生死病死の四節也。甚深可思者也。

一懸の木の枝の名の事



一枝をすかす事

櫻は下枝鞠の留べき枝をすかし。梢はすかさず。花賞翫のため也。柳は空へのぼる枝を切。下へたるゝ枝を用。これも鞠留ざるやうにすかす也。楓は本木にそひたる小枝切。ふとき枝を貽し。鞠留ぬやうに透。餘にさびしくはせず。秋の紅葉を賞翫する也。松は上中下よくすかし。古葉を取也。但軒へさしたる枝の内に。小枝一ツふる葉をとらず。やうがうの枝に残す。何の木もしんをさす枝地を

さす枝を嫌也。松は切たき枝あれども。一方かれなんとすれば。木のすがたあしかるべきと。松もはゝもぢり枝なりとも置物也。たゞすがたのよきやうに。かゝりはすかすべし。後枝は最下の枝より上にあるべし。但同じとをりにても苦しからず。松は六月に古葉を取すかすべし。

一庭を拵事

まづ懸をうへて後。三尺ほど掘て石を取のけ。土に砂を合て鹽俵をうづみ。四方には坪を埋み置也。但中につば壹つうづみてもよし。さて土をよくくならして砂をまく也。また高ひくきをなをす事は。雨降天潦のたまりたる所にしるしをさし置て。水のひきたる以後。土を置ふみ付て。かゞみの面のどくに。すぐになをす也。砂を用意して縁の下に置。細々まくべし。雨降てながれうるも

の也。

一雨降て庭のしめりすぎたる時は。大鋸くづを  
用意して置。庭にまき。しめりを取。はき  
取べし。

右條々一段爲秘密間。聊爾不可有他人相  
傳者也。

右本書校合仕候。少茂相違無御座候。以  
上。

寛永八年

松下掃部助

九月廿九日

教久判

### 第六 蹴鞠秘傳之抄

#### 一 鞠かまへの事

左の足をさきにふみて。右の足を跡にひか  
へて。少前へかゝりて鞠にあふべし。かりそ  
めにもものける事なかれ。左はつまさき。右  
はきびすふす心にて。姿は直になるもの也。

猶口傳有之。

#### 一 かたびやうしの事

鞠かまへにして。右のつまさきをそらして  
鞠をかけて。また左足をすゝめて。道をあゆむ  
がごとし。

#### 一 三拍子の事

鞠かまへにして。右の足をふみ出し。左の足  
をふみ出し。次に右にて鞠をける也。大鼓が  
しらの拍子たるべし。高き鞠の時の拍子也。  
猶口傳有之。

#### 一 待拍子の事

一段と高き鞠の時と。又懸の枝にまり留り。  
ひやし(うぬ)をくれにならんとおもふ時に。三拍  
子に又三拍子をふみそへ。七足めに鞠をけ  
べし。但口傳有べし。

#### 一 千鳥足の事

鞠には拍子のあまりたるがよき也。いかに



もこまかにはやくふむ足也。延足籠足の拍子口傳有之。

一はり引足の事

鞠の上よりうるはしく下るには。胸出してむねを出さず。あたるを引。あたらぬを出す。こしよりむねの間の鞠の心得なるべし。曲足のごときも。此心得なくては。まりは身にそはぬ物也。猶口傳在之。

一腰と膝との間の鞠の事

こしとひざとの間へあたる鞠をば。いかほども心をしづめて請て。つよくあたらば。はづみさる所をけべき覺悟かんよう也。又よはく來あたらば。ながしかけてはねべし。木にそひ落る鞠もはね足成べし。猶口傳有之。

一ぬき足の事

ひざより下。すねうつ鞠來る時。左の足を後

へはね。右の足を後へぬきながら鞠を蹴也。又ひざのとをりへ向よりつよく來らば。飛あがり左の膝をつきける也。何も口傳有べし。

一鞠の目つきの事

掛の枝をぬけて上たる鞠を。おつる時に枝にとまるが。ぬけて來ると思ふとき。其あやしき枝の下五六寸を心にかけ守べし。大かたの人は枝より上鞠ばかりを心にかくるによりて。ぬくるまりをけはずなり。軒をすりて落る鞠。同心得なるべし。かやうの分別肝要秘事也。猶口傳有之。

一鞠を落し立事

たかき鞠を見あぐるころは。さきへのく歟。よきほどに來る歟。後へこすか。此三を心にかけてよく見て。その色にしたがひて拍子をふみそへ。さて鞠のおちかゝるとき。

かほのとをりより鞠を大事にかけて。足のつまさきまで見くだすを落し立といふ也。顔より上のまりを目にかけながら。足をあぐるによりて。いそがわしく足たかく成て鞠されのく也。但鞠あたりは足のたかきによらず。ひきゝによらず。足にまりのあたるしな。稽古の人に器用不器用ほど拍子の功夫有もの也。

### 一鞠を蹴所事

枝のひきゝ所。又は軒下懸の外也。行鞠。垣ぎはのまり。何も蹴取べし。是をひきゝ數まりの心持にける事をいふ也。かん所<sup>肝心</sup>を得ずして。かひに<sup>(我々)</sup>任せてければ。ふかく有もの。口傳在之。

### 一鞠をひつ付て蹴事

大略の人は大またげにして。およびこしに足をさし出して。のけそりてけるにより。鞠

身にとをくして數けられず。見苦き也。所詮まりにつまより。其所<sup>下</sup>に足をたて。つまさきの當る所。膝に力を入れて。つまさきよりあぐれば。鞠身にそふ也。まりのきさらば。ひつ付て足をあぐる事肝心也。鞠におくるゝ事なかれ。をくるゝといふは。鞠をけ上て。其足を其儘置て。まりの落下までさらぬ體にて。扱ける時についそぎゆく也。さあるによりて進退ふためきて。足當相違する者也。能く可心得也。

### 一耳家足の事。

鞠枝にかゝり。軒よりくだるまり。拍子ちがひ。大事の鞠出來の時に。膝を少くつろぐる也。枝のひきくして蹴にくき時此心得有べし。又體をつゝむる共さがるとも云也。是大事の秘足也。口傳有之。

### 一腰をすへてすゑざる事

腰をすゆるとは。むねを引入。ほかみをはる。まりたけたかく。まむきにくるまりをば。腰をすゑて鞠に逢べし。身にそふ足同前。聊心得有也。すゑざると云は。まり横にされ。急におふ時。千鳥足の時。又曲足の時。すゑずしてさしかゝりてける也。腰をすゆる鞠。すゑざるまりの色をよく見分蹴をもつて。堪能の足とは云也。腰をくづす事耳家あしなり。此兩條秘事也。口傳在之。

一手持の事

大指と人さし指をにぎりて。残りの指はからしを持ほどにかけて。握らてはなへず。又すくまず。たゞ何となくさげて持べし。もちてもたざれと云事口傳。

一あふひの日に向事

葵といふ物は日につきてまはるといへり。其ごとくに鞠に身をそむく事なかれ。

一水鳥の浮事

水鳥の水にうかぶるは。誠にゆふにみえ侍れども。足にて水をかく事はひまもなしといへり。其どく鞠に向て足をうごかすべし。立足して不可有油斷。

一左足の拍子の聲の事

まりの遠はゑいと云。〔近景〕進鞠はやつと請。何も曲足のときは。此聲なくてはまり身にそはぬ物也。口傳有之。

一鞠の三聲の事

やの聲は請取聲也。うかゞひ聲と云。ありの聲は自分の聲也。定聲。人に競望なさせじとて請聲也。應の聲は渡す聲也。名残の聲といふ。うれひのこゝろあるによりて。祝言の庭にては。細々おう聲呼べからず。當世の人此聲をさるゆへに。となへうしなひて不知事也。猶口傳有之。

一序破急三段の事

序の鞠の時は。いかにも進退をたしなみ。ま  
りを高足に蹴上。請聲はありの利の字をは  
りながく引。あの字をば口の中にてけてし  
て請てける也。され行鞠をしたひけべからず。  
たゞすぐなる鞠ばかりをけちがへぬやうに  
心にかくべし。分足をたがへずける也。は一  
段也。破の時に木にも軒にも鞠をけかけ。聊  
荒くけなし。切るまりを追延。姿惡共まりを  
落さじと馳走して曲をつくし。男足女足に  
はまりの色をもしろく聲をそふといへり。  
互に人に見じと心に懸。油斷有べからず。是  
二段也。急の時は鞠をひきくつめて。分足  
をひかへ。二足にて他分にわたし。一足をひ  
かへ。一足にてゆづり。八人おなじ心に有  
之。數を上みちて。興ありて鞠を納べし。又  
序破急の段を分ずしてけつくる時は。段の

うつり聲有べし。序より破のうつりはやお  
ふと請也。破より急になさんと思ふうつり  
には。ありをふと請也。かやうの聲をきゝし  
りて。三段の心を分別してけるべき也。此聲  
のしなをば。一葉を三に時分よく見はから  
ひて。先達の人か主人かこふ聲也。秘事也。  
口傳有之。

一時を三に分。序分に三百六十蹴候。取て圓座  
に歸り。又まりを置かへて。さて儀式有之。  
破の分に三百六十上みちて。又取て圓座に  
歸り。鞠をかへて置べし。急の時も三百六十  
あげて納る也。

一鞠を取る事。

主人振舞をいたすべきとおもふ時に。序分  
のまりをとり圓座に歸れば。各も心得て可  
然也。堪能先達貴人を任て可取。

一鞠を蹴納ル事



惣別始て鞠を庭に出したる人。後にも取可入事本儀也。されどもをさむべき時に立あはせずば主人納べし。又堪能先達の人。貴人より來るまりを。左の袖を右の手にてひろげて請取納ル本式也。但其まゝ手にても取べし。祝言の庭城寺などにて落してをさめぬ也。歸足おひ鞠にて可納。又只の時は天然余へ落たるまりを其儘おさむるもよし。又可置と思時。鞠をけあげて身ま近く落るを。足を引しりぞきて。まりをおとして。其儘おさむるもよし。木に留まりを其まゝおさむる事もあり。軒にとまりたる鞠を其まゝおさむべかず。とりて上みちておさむべし。口傳有之。

一鞠の數とる事

廿より初め又五十より初候事も在之。先廿迄は口の内にてよみて。廿に成たる時。御數

とあげ。いく度も小數をば口の内にて讀て。卅卅五十と讀て。六十をいくたびも口の内にて可讀。七十。八十。九十。百共讀也。又五十より以後百までを口の内にて讀也。百とあぐる也。百十をも口の内にて讀て。百二十とあぐる也。百の文字をばなさて。三百六十迄を右のごとく讀也。三百六十の時聲を高く上。十の字を引あぐる也。是を一足と云也。千も二千も如此よむべし。又實のよみとて。九八七までを十によみなす事有。大數を讀入事。百より後又は名足などあらん時に。九十。八十。七十をも貳百とよむべし。一段としたる名足ならば半足に入なり。三曲はさだまるあいだ。五十の内をよみ入也。猶口傳有之。

右賀茂流如斯。奥書等別之卷有之。

寛永八年

松下掃部助



九月廿九日

教久在判

進上

休齋様<sup>イ</sup>

第七 蹴鞠之起之事

一天竺に大曇王といふ惡王有之。さるほどに臣下大臣是をなげきかなしむ時。或人云。よきはかせの奇特なる事をうらなふ者有。かれをめて占はせ給へと申れければ。各同心ありて彼博士を召て。大曇王のほろび給はん事を問たまふ。彼相人占ていふ。鞠と云事を拵て。大曇のかふべと名づけて。足にて蹴て調伏あらば。ほどなくほろびうせ給はんと云。各ふしぎなるうらなひとて鞠を拵へ給ふ。又彼相人に問給ふ様は。鞠をけんにはいか様にあらんと尋させ給へば。庭を南向に七間々半に四天四本懸を植て。持國天

王。増長天王。廣目天王。多門天王。此大四天王を本尊にして。不動明王の八代童子と形取て。是を蹴させ給ひ候て。御望はかなひ候べしと申。各可然とて。はかせ申ごとく鞠を賞翫し給ふ。さる故大曇王ほどなくほろび給ひて。國土安穩にして世を治天佛法繁昌也。彼曇王は善事をそねみ惡事を祝。佛法をさまたげ國土をなやまし。萬事に惡事を好み給ふ惡王也。彼王ほろび給ふ事も。國家を治佛法をそだてんが爲の事なれば。鞠は佛法より出たりともいふ事有。

一大唐にて鞠の初。黃帝の御敵蚩尤が頭也。其故は惡魔の大將災難の家主也。<sup>(五藏)</sup>上天の爲に敵國をまて。人民の命を失。其身鐵にして却て矢太刀たゝず。思ひのまゝふるまふ。黃帝對治の術を失ひ給て。天に祈給ひしかば。無双の相人出來てうらなひて云。蚩尤が頭と

かたどり。鞠をあそびし給へと。大曇王のほ  
ろび給ふ様をとくく申上間。彼博士申ご  
とくに鞠を拵て翫給ふ。ほどなくたくろく  
の野にて蚩尤と合戦有しかば。天のせめを  
蒙て。鐵の身皆とけて。調伏のゆへにそこに  
てうたれほろびうせ畢。蚩尤は東より出て  
東へにげうたれぬる間。東の方に四本の外  
に植る木をばにげ木とも云。又草を分たる  
故にわけ木ともいふ也。黃帝は西の方より  
出給ひて待せ給ふ間。西の方の木を待懸と  
云。又西より追たるによりて追懸共おひ木  
とも云。鞠の三柏子は天地人の三才也。蚩尤  
が頭を鞠にして黃帝蹴給ひ。眼を的に立て  
射給ひて。國を治給事也。

一日本にて鞠の始は。皇極天皇の天下を治め  
給ひし時。甲申の歲申日。大唐より始て渡り  
侍る。然共女帝にて御座有間。天智天皇いま

だ皇子におはしし時。大職冠と相共に興福元興寺  
寺の砌にして始て蹴鞠御會執行なはるゝな  
り。甲申の日渡故に。甲申の日申の時あそび  
し始る也。然者歳の始のまりあそびに。必申  
の日申の刻を可用也。然間天智天皇より以  
來文武清和相續し。延喜天曆の帝此極を中  
興し給ふ。そのうち朱雀一條代に是を續。代  
々是を翫給ふ。順徳院は此藝を達し。人數八  
人にて御遊ありて。襪子の色を八品にさだ  
めらるゝ。せい魂を三けの井にとめ。松本  
の明神とあらはれ。當道の好士を守らんと  
誓ひまします也。依之日本にて鞠を翫ぶ心  
は。國を治るはかりどなれば。めてたきもの  
とて翫たまふ。また懸に立て鞠より外他念  
もなき故に。祈禱とも後世の縁とも成と云  
也。

一懸を植。蹴鞠の道を定ておかるゝ事は。後鳥

羽院の御宇に不殘定置給ふ也。天狗楓とて賀茂松下庭にいまだ有也。此懸は後鳥羽院始て植給ひしかゝり也。

一根本の鞠の足の次第の事

賀茂成平。其弟子成通卿。其弟子頼輔（諡アラン）。その弟子宗長雅經此人也。宗長は飛鳥井（飛鳥井）の雅經は弟也。自是難波流飛鳥井流と道をたてられけり。頼輔までは賀茂流也。「御子左の流足も後鳥羽院の御説をあづかり給ふゆへに賀茂流と同意也」成通卿始て成平に鞠相傳有るとき尋被申ける様は。成平はいかほど稽古ありて。かやうには上手と成給ひしぞとありければ。成平こたへていふ。されば常の稽古の事は不及申。日をかゝさず。百日稽古申て上候之由物語有しかば。成通卿我は一千日稽古有べきとて。三年日をかゝさず稽古ありて。天下無双の鞠足と成給ふ也。或時に

大内の御鞠ありしに。成通遲出仕有之。主上御氣色あしかりけり。鞠はじまりて出仕有ければ。其儘かゝりの本へ立たまふ時に。いかなる事ぞや。まりきれて七足のべたまひ。他へ入鞠をけかへし。わが身も後へ飛。まり懸へまりを蹴入ぬる。かゝる奇特なる事ぞと。主上もおぼしめして。御氣色よくなをらせたまひて。是をばとんぼうがへりと名付給ひ畢。關白を始め奉りて。かやうの名足は末代のためしにとて。名書留てをかれ侍と云々。種々の不思議共有之。鞠の明神となり給ふもの也。

一鞠精與成通問答の事

成通卿まりを好みけらるゝ事。いく千万と云事をしらず。其中に日をかゝずけらるゝ事一千日。満する日の鞠の時。賀茂の成平。小野忠資。次有。源九。この上手を集て。殊更引

相て鞠あり。三百六十上て。自鞠を取。各執事にて棚をニツまふけて。一にはまりを置。一には様々の供具を備て。一交の御弊を奉りけり。其弊を取て棚の鞠を拜す。種々にたなこゝろを合。觀念をこして。(ハ殿殿)其後各皆着座す。鞠の人數皆喰をすへて。三献して後各身の能を奉。五献之事訖て。鞠の人數に祿をあたへたまふ。さて各皆退出す。夜に入て。其日の鞠事。又一千日の間奇特共を一々に書付んとおもひて。燈臺を近くよせて。墨をすり筆を執處に。棚に置たる鞠其前にまろび來有様。あやしく思ひながら。是を見られけるほどに。顔は人にて手足身は猿に似たり。三四歳計の者の勢にてかぶろなるが一人。此鞠の括目にいだき付て。おしてきたる四人あり。成通卿不思議にあさましく思て。あらたに何者ぞと問給へば。我は是此程翫給ひし

鞠の精也。昔より鞠好み給ふ人はおほくましませども。かやうに御心に入て程に。(保勝)誠をいたさせ給ふ人未御座。千日の終に種々の供具を贈給を。いかで悦申侍らざらん。御悦の余に參り候。且は又我身のありさまをも申さん爲に今參りたりと申。さて在所を問給へば。我等は鞠を家とし。四本の懸を一人づゝ主付て住也。我等が名を御覽候へと。まゆにかゝりたる髪をかきあぐれば。一人の額には春陽花と云金色の文字有。一人には夏案林といふ文字あり。一人には秋色園と有。一人には冬庭殘と云文字あり。皆金色也。驚ながら又精に其故を尋給へば。重て申。我は是昔唐朝の黃帝に被退治たてまつりし蚩尤が頭也。天下を擁護したてまつる也。鞠好せおはします世は國さかへ。好人は司を執。來たる災難をはらふ病なし。福をあ



たへまつりて。命長く後世までもよかるべきといひければ。又云。余の事はさもあらん。後世までもといふは如何。又申曰く。誠にさも思召べき事なれ共。人の身に一日の中にいくらしらず懷念のみあり。それに鞠を好せ給ふ人は。懸の本に立たまふより。鞠の事より外に他念なし。謹而人を惡かれと思はぬ故に。自然に後世の縁と成候也。又鞠のおこり因縁も能御了簡候へ。鞠の時は我名を次第によばせたまへ。木傳來て宮仕すべきと申。今より後はかゝるものありと御心にかけてさせ給候て。鞠もあがり守りともなり侍べき也とて。形も見へず失にけり。又成通卿靜に此事を案ずるに。陽花と云聲。案林と云聲。皆鞠の精の名也。額にありつる文字也。尤故あり。成通卿既にかゝる覺を得たり。すべて鞠を好み懸を植。家中に鞠

を置は。鞠の精の其家を守護して。病患止。横死の難をはらふのみにあらず。三界天人。四海の興通。一切諸神。皆其人其家其國其里を守護したまふて。息災延命。增長福壽。滅罪生善の理たる者也。或經云。蹴鞠者は福德自在。現世安穩。當來作佛。好蹴鞠者此經文を讀誦すれば。諸佛照鑑。故拂災難者也。如此の文を見る時は。現世たのもしく後世も疑ふべからず。

凡蹴鞠の徳不可勝計之。誠に不遑注納。好まんと思はん人は。能達者子相傳爲肝要有也。右簡要有増記之訖。抑世俗犯言綺語何事歟。(狂歌)不歸第一茂成。况蹴鞠之業和漢世之根源在之者歟。今所令遊興面白云々。有爲轉變眼前之道理也。見物貴賤。共無他念。眞神明佛陀歸依。清以悉皆爲讚佛乘緣者也。可秘云々。

右本書校合仕候。少茂相違無御座候。以上。



寛永八年

松下掃部助

九月廿九日

教久在判

此書卷物七軸也。縮今一冊ニ書寫功終。

極意集八

一 八境は八人の領分なり。他分をば斟酌あるべし。但人油居のときは可請取。雖爲自分。人請ばゆづるべし。互に鞠を請あらずふときは。後の聲に可任なり。

一 正分次分は。正は本向詰。次は横詰也。ときによりて横詰してけるなり。

一 上鞠は貴人へと又木こしと。あひかいりの人にはわたすべからず。悉貴人のときは。其内にて末の人にけ可渡なり。

一 懸より外へいづる鞠の事。一足にて内へ後さまにけいるとは。マトイ足とてけぬもの

也。けとりてかいりへ向てけ入也。但落し候はんよりは。一足にてもはね入べし。とりてをとさぬやうにけべし。

一 鞠を陰陽にかた取事。ふすべ鞠陰。白鞠陽。春夏も陽。秋冬は陰。

一 鞠取は右の手大指人さし指にて取皮をとる。残りはかたのうへに置いて。ひだりの手をもかたにそへ。鳥の子を些<sup>スグシ</sup>上になして持者也。

一 鞠の庭にて。かりそめにも右の膝を付べからず。

一 のきの下をとをらぬ事は。家を賞翫の義也。主は通りても不苦。またみすの内に貴人御見物あるかとおもふ用捨も有。貴人無御座としりたらば。自然通事も有べし。

一 懸にて手を付事。貴人のかた付也。膝は貴人のうやまひなし。

一ゆびつゝむ紙やぶれたらば。何度もかへてくるしからず。

一座につくとき。貴人のかたを後になすべからず。

一上鞠は可然人するなり。常の上鞠は末の人なり。

一あせぬぐひはふところに持也。あせぬぐはゞ。かゝりにかへりて。かゝりをうしろになしてぬぐふ也。

一まりをわたすとき。あらくはなす事惡。うつくしくにじのたちたるやうにけ渡す也。たとひ余所へ行落候共。あらく渡人の落しに成候也。

一上鞠をけ渡は如常。鞠を持左の手をはなし。右の手より落かけ。うけ足にてつまさをさげ。ちとはぬるやうに。一足にてけ渡なり。

一上鞠請とりこらうべからず。

一座の事。疊は大もん小紋赤へりの圓座しく也。大紋は大臣。小紋は大中納言公卿。赤へりは殿上人。圓座は地下又すへくの者もくるしらず。自然ふとの御會のときは。疊しき皮などをもしかれ候。圓座は大臣も御着候。又下臈も座候而。上下候はで可然候。

一人數かわりて座にやすむとき。あふぎばかりをとりひだりに持べし。まり過ば扇疊紙を納て。末座よりしだいぐに一人づゝ退出。自然鞠半に用事ありて歸共如斯。

一鞠けるとき見る事。たけ高時は右のましりにて見るべし。但惡心得ばくびゆがむべし。ひきゝ時はまむかふに見るべし。頻にうなづくもあしゝ。縁の上より落るまりは。必縁をそばさまに左の膝を付ける者なり。又は縁に向ても。けるまりさうに落るときは。立

ながらもけて。後に膝付かしこまるもくるしからず。縁に留たる鞠を。手にてかき落しけまじき也。かき落して取上まりになすべし。縁に留たるをとり地に付上べし。

一人の身に當たる鞠は。我みにまたうけて蹴也。しからずば地に落して取てけべし。

一貴人のあそばし落したる鞠。木こしあひかゝりの人機遣ありて。ありとこうてすくひたすくべし。等輩のひと成とも。鞠數あがり候とき。油斷なくすくふべし。わがけ落したるは。我とはすくふべからず。但時によるべし。勝負の鞠のとき。心にかけすくひあぐる也。但聲なくばせんなし。

一正分の人まりけるに詰よりて候時。他分て渡り候て。まりのかたへ身遣なして。二足三足横さまになりて歸り。扱鞠來ば可蹴也。まり不來ば身をなをしすぐに歸る也。又詰よ

りたるに。向詰よそへ落たびは。後さまに三足のきて。由ありてすぐに歸る也。道ふさがらば。かゝりをまはりて歸るべし。木と人とのあひを通るべし。人と人との間を通べからず。

〔種取〕

一貴人の木こしあひかゝりには。初心のものは斟酌あるべし。

一冬なりといふとも。若輩はかたびら着すべし。老者あはせを可着也。

一鞠の當所は爪前。足のこう。三手所をかけてけべし。つまさきばかりに當れば。鞠色ふりて惡し。向へ行也。但暮のまり爪先にかけてふりめかしく蹴がよしとす。

一鞠さうにてあしがなびかぬは。向にあたる物あらば。け付ても他分に渡事心づかひ肝要也。たゞし所により斟酌あるべし。

一小袴にくゝり入る事。自然俄に鞠ありて。ま

り道不及ときは。くゝりを入る事くるしか  
らず。

一露はらひと云事。鞠にかぎりたる事也。大内  
の御まりのとき。加茂より鞠足をそくりて  
鞠を初る也。鞠を少あらくけて。えだにけ  
付て。色くまりのゆくふぜひを御覽ぜさ  
せて。其御心へなさしめんやうにける物也。  
一さう成まりをけ出事。心にも覺えず覺悟な  
きは。常にけいこのこうなき故也。心懸常に  
けいこすべし。

一鞠數之事。三百六十に定といへども。けいこ  
のとき百六十足。また百廿。二百八十。五百  
とも。數を定てける事あり。數取ひとは鞠の  
人數のうちにて取。またよみて一人さだ  
めて圓座に着しよむ也。

一歸りあし鞠のかゝりを背とき立廻なり。ひ  
だりのかたへかけては歸り。右のかたにか

けて左に歸也。膝を付歸る事もあり。

一軒歸り。軒よりころび落を。軒に向待て。落  
時むきなをりてかゝりの内へけ入也。

一身にそふまり。腰をすへて鞠をまちて。身に  
まりの添とき。腰をくつろげ。爪さきをそら  
し。さびすにて地をふみ。哥云。ければとぶ  
けねばあがらぬまりなれば踏て心のつよき  
をぞしる。大事の鞠也。猶口傳在之。

一まりふむとき進退の事。若ふみては必ころ  
ぶべし。膝を付て鞠のつぶれたるをなをし  
て。かゝりの内へころばし入て。足をくじか  
したる様にて座へ歸るべし。

一段三足のこと。まり數一段三足づゝ也。請  
とり一足。自分に一足。人にわたす一足是  
也。されども思ふやうにならねば別なり。ま  
た態一足にて人にわたす事もあり。三足よ  
り多ける事は。木のしたまたはかん所にて。



鞠をけなをして人にわたさんと也。三足以後のまり。人のこひけんとするをしたひて蹴ことひがごと也。

一木の外のまりかゝりより出てのかたき鞠。えだにつきて出るは木の隙より入べし。鞠をさき立て身を後にする也。但身をさき立て心を残す事。上手のわざ也。

一鞠を請聲のしな。自分にこふ聲。たかくあがり。ゆるく落ときは。聲を引長くこふ。ひさく付て俄に來には。さき聲にてこふ也。人とあらそふとき。人も我ももろごゑに請時は重請。有興に乗じてつらねこひあり。梢に留る鞠をあふぎてこひ。むなしく地に落るまりをおしみて猶こふ事あり。人により様によるべし。

一數鞠の事。勝負にもたゞもける事あり。其け様鞠たけをつめて引くすべし。足數をそん

じ樹えだにかけざる様にける也。足をば少高くすべし。鞠よはくせん爲也。

一鞠をやなひ箱又物のふたなどにすへて人渡事もあり。其ときは常の物を請とるやうに取也。物のふた共に受取べし。

一やなひ箱は柳の木を三角にけづり。紙よりにて十文字にあしに組付て用。ながさ一尺二寸なり。また六寸にも用也。廣さはすへ物の大小によりて也。木の數は五ツ七ツ九ツ十一半に用る。鞠にかぎらず用也。

一まりのとき。ゑぼしかけをつよくすべし。むらさきのかけは。ゆるしなきにはかけず。位有常は白かけ也。武士のゑぼしかけは。かる事なし。葛ばかま着せぬ人は。すほうの下着し。もゝたちとる時。内より紙を丸めても。石をはさみてもよし。

一かゝりへ鞠打入る事常の事也。或は籐の中



よりも。或は縁よりも。軒の向ひ木の間よりも。人數座に着せざる以前。庭のまん中に。とり皮の上になる様に打入也。まとをく鞠落。暮になせたるに持て行ば。遅しとおもふとさに。上鞠すべき人のかたへ打入也。貴人のそばへおとしたるを。貴人とりて上鞠にせよとて。ころばし入らるゝ事もあり。一寺などにてかゝりなき庭にてまりあらば。かゝりのあるときのごとくたつ也。

一常に延はつゞけて延をいふ也。

一鞠にまいりあふ事。鞠に目をはなさず。まりの落左ま井りあひ候と同程にあるべし。まり色によりゆうにもさうにもまいる也。

一鞠右のかたへゆくとき左へまいり。左の方へ行ば右の方へまはりてけるを。鞠にもむきて逢といへり。鞠の行ごとくに向候へば。大木なみ木にへだてられ候によりて。そむ

きて逢と也。

一しりおとりといふ足は。木の根高所。或は石さしの上など落時は。まりを地に落しつけ。一ツおどらかしてける也。

一木をふむ足といふは。鞠木をすりて落るとき。そのしたに足を木にすけてはねべし。

一うつぼながし。鞠のまへいかにもすぐにけ上て。むねよりけるなり。おのづから來るまりけてよし。

一とんぼうがへりと云足。堀などの上へまり行とき。中にて其まゝ後さまに歸るあし也。成通卿より外ける人なし。

一座に着たるとき來るまりをば必けべし。但聲をばかけまじき也。一足にてけ出べし。それも心にまかせずば。二三足にてもかゝりの内へけ入なり。扇持ながら也。

一貴人の御休のときも。御立のときも。鞠をけ

ずして御けしきをみて可然也。

一簾中に貴人又は女房など御座のとき。みすに鞠あたるを。内よりみすを扇などにてうたるゝ事有之。けよとのとなり。けしくべし。

一貴人にけ渡。また請取時は。いく度もけしくべし。但こゝろにまかせざれば。けしかぬもちからに不及候也。

一座して居前へころび來る鞠をば。持たる扇にておし出すべし。けよとの心也。されどもけまじき也。人によるべし。手にてはいろいろまじき也。

一扇をひらきつかふべからず。但人數によりつかひてもくるしからず。三間ほどひらきて。前にて少つかふべし。

一軒まりを初てけるをば沓ありと云。沓あるしなり。

一鞠の時庭にて茶まいるとき。貴人の座に御座候はゞ。それへ持てまいる也。かゝりに立て御座のとき。御圓座のきはまでもちて參て可待也。平人は茶どものむ事あるまじき也。ほしきときは立て門外にて含<sup>〔吞〕</sup>べし。また持て參るをも。塀中門の内のきわにて畏待べし。のむ人はそこまでゆきて含<sup>〔吞〕</sup>べし。何も趣によるべし。

一あひをひと又二本立の木の事。あひをひはねより二本立るを云也。二本たちとは地上にて二本立をいふ也。

一一足をけるとは。常に曲あしと云を申也。初心の人はけまじき也。

一かゝりうへ様の事。木は安宅ののき。かゝりは鎮宅の方也。南向の庭を專とす。しかれども東西北のかゝりまた常の事也。また南向のごとくに。軒の左に櫻。右に松を植。南向

の分に用事他流に有之。當流は只方角を本に可用也。

一懸の木之事。式々のかゝりとは櫻柳楓松なり。式木不足して同木二本植て不苦。又雜木をうへまざる事先例是あり。雜木には椶榎柳檜也。代の植様定なり。

一本の高さは一丈六尺ばかり。但不定。本年く大になるもの也。切立は松三本。柳一本。または柳三本。松一本。何も可然。二づゝも子細なし。雜木を栗の花時分に立なり。本をそぎ合。かすがひにて付る也。一所にあひをひのごとくに立也。竹をも可立也。高さ木も竹も一丈五尺也。竹の末をさりて立事本なり。自然またさらに立事も有之。

一えだにかゝりたるまり。我領分へ枝を分て來らば。必聲にてける也。またけはなすまり。えだにあたりてもどるは我鞠也。

一壘敷たるとき扇疊紙置事。たゝみの上の後の方に可置也。

### 蹴鞠之終五十七ヶ條。

#### 蹴鞠三流通抄 第九

一蹴鞠の簡要といつは是にすぐべからず。定足は初心にかへるべし。たけ候心もち候て。よろしき事不可有候。心付にしたがつて大せつと可心得。たやすく思ひなし。案のうちに心得候へば。鞠必あまるべし。定足のたしなみ朝夕無油斷。鞠を忘て稽古をおもふべし。足踏なども領人目にたち。かどく敷はよろしからず。唯何となくゆたかなるよしとせり。

一初心の心得。定足とはうら白と可心得。蹴鞠の御人數。蹴あても候へ。人を目の下にみて。心をゆるやかに持て庭に立べし。あひて

其外をかうちやうに思ひなし候はゞ。宵徒まり他立ゆるやか成べからず。心をば廣持。庭をばせばしと心得べし。定足も初心も庭をば此兩條を以可明。

一立やうの事。前よりみればけりたるやうに。(ノ無)

後よりみればたをやか成事本とせり。そりけるは鞠にあふ事とをしとて嫌候。またうつむきたるは。まり當り候へ共。ゆゝしからず候とて嫌候。唯すなほにちと腰すへて立べし。背をいだす事つよく(マ、)よはくつ

よく可心得。只一すじにあてがひ候はゞ。まりにつまるべき也。ゆるやかなる事肝要なり。

一鞠をみる事。あをのかずうつむかず。ゆるまずおどろかず。かほにて見べからず。目にてみるべし。第一木の下軒のしたにてふりあほのきてみる事不可叶。木葉また(マ、)のほ

とりなど目に入べし。其目のしつ也。またあをのきてみるまりは。みをとさずしてかなはねば。かほもちゆるやかならずして。身なり立やうまでのさはり也。定足初心にも朝夕可心懸也。

一は地のかた地といふ事。右とは曲也。地とは地たちの事也。地鞠思はしく候とても。曲たひがひ成を。右のけてといつるなり。地を蹴てと云事。地鞠大概無相違候得ども。曲にうとさけてを地のけていへる也。地鞠も曲も無相違事を天地和合といへる事。鞠筋をみて沓なをす事。是沓は目にあると也。また目は沓に有といふ事。是は沓の上より目付所をする也。是目は沓にありと。兩條不安候間。委敷事は口傳。目をば天といひ。沓をば地といへり。沓かうとしといへども。めをそふして不叶。鞠にはやく見つき候はゞ。沓の上



たどくしくて不叶候。目と沓と相應なる事。天地和合是なり。初心は是のみ事とすべし。

一鏡のまりといふ事。鏡に向て顔をみるどく也。鞠に向て形をみべし。鞠向へされ候はゞ。立やうそりたりと心得。やがて立やうかへ。こしをすへ立べし。

一鞠或むね或かほなどにあたり候はゞ。立やううつむつむきたりと可心得。腰おれたりと心へ。立やうをかへ。手持に心有て。ちとそる心にたつべし。

一鞠左へされ候はゞ。下足のつまさき左へ向と可心得。また沓のうちかどにあたると心得べし。右へされば。下足の爪さき必右へむくと心得べし。さなくしてされ候はゞ。沓の外かどへあたりたると心得べし。左右へされ候はゞ。鞠此兩條に不可過候。

一身にちかくすなをに鞠あがり候はゞ。立やうを忘る事不可有之候。萬惡き事をのけ。よき事をもとむる事。初心も定足も朝夕心得。けいこといつは是に過べからず。たゞかひくしく嗜なくして蹴候はん事。以後のけいこのさはり也。稽古なしとも。かたきなどみる事第一也。

一三段のゆひめといへる事。うへのゆひめかみをゆふ事也。中のゆひめ帶上下さる事。下のゆひめくゝりいふ事。是三段也。かみつめてゆふ事。必かほにくせ可有之候。惣而鞠をける事。ゑぼしをきてまりをける事本也。かみをゝりてゆふ事ゑぼし體也。去間鞠けるとき。けりにて蹴べからず。もとゆひをゆるくゝとかけ。おりかへしてゆふべき也。かみをつめて結べからず。

一上下をさる事。先下衣を（いんぎ）にかにもゆるく



と同前。後をもうしろこしにてちとしめべし。帶をつめてゆひ候へば。必すこしおれうつむく也。常に鞠かほにあたるべし。上下の大事是也。

一 したの結めくゝりゆふ事也。つめて結候得ば。まり左右へされ候。とくる事なきやうに候はゞ。いかやうにもゆるくゝとゆふ也。三段共につまり候得ば必くせあるべし。何もゆるやかに三段和合にいふべし。

一つはさみと云事初心の專也。はかまなく候はゞ。足たゞしからず。切々つまづくべし。紙をまろめて。ゆひめのしたよりはかまを引あげて。上下の帶の間に入べし。さなくしてつはさみと云事不可有之。いかにものはかまながくとも。もゝたち其外取事嫌候て。もちを本と心へ候へばとて。はかまとる事有まじく候。

一 十心といふ事。庭につき候より。まづかこひの様體を見合。鞠蹴べきやうをよくくゝ見べし。是かこひのこゝろ持をしる也。また立べき木のえだ葉さし出。こはさえだなどあるべき皮えだにあたり候鞠をば。いかやうにあてがひ候はんと。木の心をしる事是也。また鞠心智事(知略)。また七人のあひて。序のときは心しられず候とも。破のときはいづれのまりはいづかたへされ候とも。七人のかたき心をしる事は十心也。かれらをよくあきらめ候へば。一入まりのくつろぎ也。よくくゝ可心得。

一 四節によつて庭に可立。春秋は北南可立。夏冬は西東に可立。是かぜを靜るなり。たとへ目にみえず候とも。春は東風。秋は西風と吹也。去ほどに春秋は西東に不可立。夏は南。冬は北風に向て不可立。鞠多くそんずべし。

其をいとひてかぜ上に立事不可有。もつばらまりにあふとまれなるべし。常鞠は西東に立事。かぜをそばめる心也。常に沓をかぜにむかはせてをく心にけべし。足かぜをもらさる心もち也。庭につき候とき。此心もち第一とすべし。

一風上に立候心持。何よりも心をすへ。いかにもまりつまさをそひしてけるふる心に蹴べし。まり身にちかくあがり。かぜにさはれて。あひてのかたへよきほどに出べし。このころもちにてかぜのおもてに立べし。

一風下に立候事。惣てそりて立候事嫌候得ども。風下に立ときはそりて立べし。鞠常に向へ(マ)出べし。かぜに出合によつて。其まりあひてのかたへよきほどに出べし。又かぜ下へすゝませて。風にむかはせる心にもけべし。是はよくく口傳可有之。

一日にむかひ候事。是も風下同意也。目をそばめ沓を日にむかはせ。鞠をせく心に蹴べし。沓の上を本とすべし。鞠ばかりはやくみてそばたつべし。日にむかひ候て。必其まり何ときも右へも左へも沓をせく事第一也。

一網ぎはかこひにたかくつれてあがり候。鞠不安ふりもなく立て落し候事。鞠との外かひなく見候べし。よくく見合て。立のくやうに見しりぞきて。むきなをりてあふべし。あまり候者。曲のうへにて落したるはくろしからず。初しんも定足も此心もち朝夕に候者。かこひぎはあまるべからず候。

一そりてける大にきらひ候。左者折節によるべし。あひてのこを詰(マ)。かぜにむかふとき。ちとそりてけ候へば。必鞠とをく出るべし。此外そりて遣候事このむべからず。

一ひく沓に大に嫌候。左さかこひぎはうらわ

る鞠にけこめば。こひあし定て是より外へ  
けべからず。

一いそぐべしいそぐべからずといふ事。心を  
いそぎ身を急ぐべからず。人のけ候ときは。  
沓の上より鞠にみつゝ候事。朝夕にかけ候  
者。是にすぐべからず。

一鞠すじを知事。正分次分をよく心得べ  
し。木をもつて分すくなし。木なくて分おほ  
しといへる事口傳。

一たかくばかろく。ひきゝはおもくといへる  
事。鞠たけたかく候はゞ。さのみ沓下あらく  
ふまぬ事也。つまさをたてゝ待べし。

一ひきゝはまりには下足おもかるべし。和合  
のくつの心にけ候者。地たちつよかるべし。  
ひきく候鞠につまらぬ也。心がくべし。

一和合の沓といへる事。まりをけすてたるし  
たあしをつまさきにかゝり。左の沓をうけ

てまつべし。鞠まるとき沓をふみ候へば。  
鞠にあふべし。是和合の沓といふ。

一左足つめといへる事。鞠をけ捨候下足のつ  
まさきにかけ。前へ左の沓をすゝまする也。  
鞠いかやうにきたり候とも。少も驚くべか  
らず。まりを忘て〔志〕稽古を思へといへる事。此  
しめしを以てあきらむべし。朝夕心がけ候  
はゞ。第一まりゆゝしかるべし。初心も定足  
も不可過之候。

一地分の沓自分の沓といへる事。庭へつき候  
者。自分の時は鞠をけかふる心もち也。他  
分のときは沓をふりつめにけわたす也。是  
をいへり。此心もちを以鞠すじ知也。

一ちかくは遠く。とほくはちかくといへる事。  
かこひぎはの大事也。鞠かこひにちかく候  
者けつけ候とを。ちかくはとをくといへり。  
遠くはちかくといふ事。かこひに遠く候は

ゞ。沓のうへをたしかに身をそへてけ渡し  
て有之候。遠くはちかく。ちかくは遠くとし  
めす也。

一 三段のつめひらきといへる事。立様身なり  
の大事。序の時は開の身とて。常よりもそ  
る心にて。ありのまゝにあてがふべし。破の  
ときはちと腰をすへ身をつむゑにてあてが  
ふべし。詰のつめとて。いかにも腰マニ 蹴  
候へば。たとへ身に付候まりなりとも。すへ  
沓をすゝませけわたす事。つめのつめとへ  
り。秘事も。

一 つめの詰。ひらきの開と云事。詰開の大事  
也。詰にあらず開にあらずといへり。秘事  
也。

一 すつべしすつべからずといふと。よろしき  
まりなどをけ候得者。たとひ身に付るまり  
なりとも。惣じてあしきまりなどるける折

ふしは。まり色をけなをし渡すべし。

一 鞠をけ候とき。留メたき客人候はゞ。渡候と  
き人の方をみ合て。歸あしをけて。其儘庭分  
石の上に置。我木に歸一禮して罷可出也。其  
ときよろこび候やうを顯し。其日は留り候  
はて叶まじく候。

一 忘ても庭分いしを踏ぬ事也。若ふみ候へば  
となふる文あり。鞠の大事にしろす也。さな  
き人は沓ちがひの座替といふ曲あり。庭分  
石を延延席を候へば。鞠にとりあひ候はゞ。合て  
また延べし。たがひに手を取りちがへて立  
所を替也。不安曲也。口傳。

一 初心のほど沓身なりたしなむべからず。あ  
たるを本とすべし。鞠たんれんによつて。上  
手か蹴手歟相手たるべし。めづらしからぬ  
詞ながら。たんれんの二字おもつてとすべ  
し。



一百度のけいこをたんといひ。千度の學をれんと云々。

蹴鞠之終三十五條。

十

一網ノ事。天下治國をしづむる事にかたどる子細有之。尤目出義也。(度説賦)板屋には軒の上にもはる。(爲搦賦)辻の上。塀上。軒下。何かたにもはる。糸藍染なり。目は四寸。繩ならば五寸にすく也。

一蹴足高かるべからず。沓下の拍子を本に心がけぬれば。おのづから足のひきくなる也。寸法不及定。

一足をあぐるは。爪先よりあげて力を入。又□□ををし入てよし。

一鞠をけるく後へしざり。また人けかくるに。後へしざりてける。殊更惡き也。身にか

ゝらば奥あしのまうけたるべき也。又後へこさば籠てけべき理なり。

一沓をまさごにさらりくと音のたかく引する事あしき也。只足をかるく。沓下をさびすよりふみ落してよし。

一鞠たとひきるゝとも。手にてさへかくしてけべからず也。

一垣をこしたる鞠をば。外よりなげこす事はひきゝ垣の事也。本式の鞠垣を自然けこさば。もちてゆきころばし入也。またはしたにすき間あらば打入べき也。

一籠足の事。右のうしろに落ば左へかへり。左の後に落ば右に歸りてけべき也。おのづから前にをつるを。かへりてける事。其謂なき事也。

一鞠の扇の事。當流は八ほねなり。ねこまも惣のほねも常の扇より大也。くろ染にぬる也。

繪は家の紋をかく也。

一樹を植歌

うづみちく土は草木のいのちにてうごかす  
かぜや心なるらん

此歌をかきてえだにゆひ付ちく也。

一野伏之事。立人のぶしといふは。五本かゝり  
にして。まぢかゝりとて植。其木を後になし  
て立。色け曲足をつくしてける也。八人は伏  
ふしにけ渡しける也。野伏よりは鞠くばり  
を専とする也。こひ聲なし。いかにもく堪  
能達者の所作也。また立木野伏といふは。立  
所は或は年禮いひさして木の太に成。いか  
にもけにくきなどには。其木の外五尺計後  
に立也。また其領にも立木(足跡)のせいにも可隨  
也。或は幼年の足本不定に。其後に立事。是  
も五尺ばかり也。とかくかゝりの外のかた  
に可立也。野ふしの人木より内にいらす。殊

上鞠せず。外へさるゝ鞠を内へけ入て。たす  
けん爲ばかりの人の數なれば。尤堪能の衆  
の態也。必貴人も人の催促に可隨也。

一神祇の鞠の事

上鞠のあし。踏出す五足。あとへ三足。扱ま  
り構にして掌を合。觀念をなして。一丈五尺  
に鞠長をけ上て。未落間に我木の本へうし  
ろさまにはやく歸り。扱便宜の人鞠を取入  
にけわたすなり。神前へ向て足を不上。いさ  
ゝかふみちがへける也。上まりの人兩膝を  
付也。三曲の外さのみくるひ鞠などはけべ  
からず。請聲なし。又社のかゝりなりとも。法  
樂ならずば請聲もあり。上鞠も不定。猶口傳  
有之。

一私宅にて神祇の鞠をける事。塀中門にしめ  
をはり。のきに棚を二重まうけてしめを引。  
上の棚には五色の幣帛を立。供具を備。下の

棚には鞠を置て。扱ける人數は三日以前より精進をすべし。鞠あしの人塀中門をいるときに。祓の役人有之。一尺二寸の幣にて祓也。蹴ての人數は塀中門を入時に此哥を唱也。

ちはやふる神のいかさは我なれや出入いさは外宮内宮

夫より圓座に着す。人數悉如斯有之。上座より次第に。棚に有幣を取。二度拜す。扱此哥を唱。

般若經吾ガ心ヨリ成業ナ何神力餘所ニ見ルベキ。

二返よみて二度拜して圓座へ歸る。けやうは右の注するどく也。鞠蹴みちて圓座に歸り。また神をくわんぢやう申。棚に向て幣を取。如前に拜して着座して退出す。

一拂前のまりの事

上鞠兩狹をつきて鞠を取。左の手をいさゝ

かそへて諸手にて持。後へ三步しりぞき。扱鞠かまへに左足をなをし。無念無相にして諸手にて落かけて。三足け上て。落ぬさきに後さまに本の立どへかへりて。鞠落ば八人ながら袖をかき合てちと禮あるべし。其後たれなりとも。深足の人鞠をとり。常の上鞠にしてをのゝけべし。

一七夕の鞠の事。鞠を付えだは梶也。七度の上鞠のときは。上座よりしだいに手向也。とをくまり落行ば。上鞠したる人の本の所へ打入也。上鞠一人のときは。七足け上て落て。其以後常のどく各けべし。獨の上鞠のときは。八人かゝりにたち終ての事也。

一座さまさきの鞠の事

三八の人數にて。上衆よりしだいに立かわりく日暮までける事也。

一三時の鞠の事。朝は辰のとき序の鞠也。ひる

は午剋破のまり也。夕は申剋急の鞠也。かうはん置て時を可知也。休閒哥また色くくのあそび可有。

一老若の鞠。卅より上は老たると定。そめより〔れ歌〕下を若に定。二八にて老若あらそひてける也。

### 一勝負の鞠の事

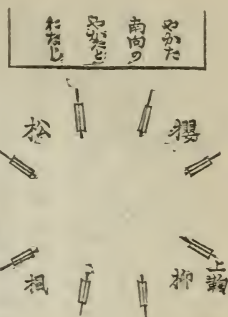
上鞠五度とも十度とも兼契約して數を付る也。二八の人數たれば二度。三八の人數たれば三度に分べし。鬪にても分べし。又其中にけるある人々を。或は左右。或は初中後。或は一二三に分て定る事もあり。紙を横に折て。勝負數まりの事とかきて。またちと引さげて。一共左共初共。扱あげまり十度共十五度共。如契約に最初の上まりより付もて行て。其期に終上鞠のとき。此度に及と人數〔マ、イ〕のまゝやうに書て付る也。鞠終て日記の以

上をかぞへ合て。過上たるを勝とする也。此鞠には土に落たるをけず。軒木などにかゝりたるをばけるべきと。兼て人數の中に申定ては可蹴也。土に落たるまりの事は。いさゝかもけべからず。但土に落たるをけかへすやうあり。よくければ數にも入也。落と同じ。ありとこひて則あがれば數とす。すくひあしくば上鞠になるべし。土に落す事堅制之。さる故此まりけいこの最上也。尤細々可有興行事也。みすに當まりのときはけべし。貴人御ざあるともくるしからず。

### 一扇鬪の鞠の事

上より次第に八人の扇を物のふたにうけて。軒の向ひのかゝりの間にて畏三度。扇をまぜて木の本に歸りて置。次第繪に有之。





貴人よりかゝりへたちて扇をさす。口傳しやうく。さしかたな。さしやなぐひ。法中は懷中する也。かゝりの上下なしに。我扇ある所へ行可立也。

### 一 軍陣の鞠の事

座に花敷を敷事如常。緒のかたを後へなし(毛敷)て。ものかたを地へなし。後を少上へ折返して敷也。皮ならば毛のかたを上へなす也。白も座下のかなへ可成也。かゝりによりてひざを不付。酌とりも同前也。盃一あらば取渡しく呑也。東のかたに一本かゝりを切立

にして取まはし。數人不足にける也。鞠のときにかぎりて。東のかたは(マ)る方に用也。子細有之。

### 一 ちうゐんの鞠の事

鞠の人數みな色をきてける。まりの取皮なし。たゞのときかりそめにも取皮なき鞠けぬ事也。かた穴はふすべ皮またくる皮にてぬふべし。上鞠は佛前の如し。聲をばおうのこゑよりこひはじむる也。

### 一 鞠の庭へ破子出事

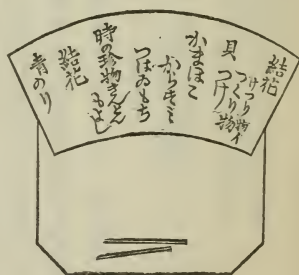
人數の前に悉出てすゆる也。扇のなり又はすはまかたなどに。だいを色くにして。足を高く付。いろくに繪かき色どり。中には種々の物をつみ。さんとんなどをつみ。飴花結び松などのもとには青のりをちらし。はくにて露をおき。座敷へ出に替事なし。また足付にあふぎの破籠をのせても出す。はし

は足付に置也。ちやうしをばひざをくみな  
 からはしを取。きんとんをいらくひ。廳而  
 はしを置也。盃を人の前に引也。扱さけをの  
 ひとき。右の手かた／＼にて盃をとり吞也。  
 三ばいより外は不可吞。目禮一禮也。座しき  
 のやうに禮をふかくあるべからず。庭の置  
 物には折にかうたてをして。まんぢうをつ  
 み出。又魚類にて六角につみて。まんぢうに  
 つかはせて上座に置也。酌はひざを不可着。  
 くわへは貴人の御前にてくわへべし。末座  
 は酒のつくるとき計くわへて。木ちかくか  
 へらぬ事也。酒は三返なり。ときによりてた  
 ど一返よし。鞠一だんすぎて出なり。かよふ  
 の人破籠可上。

大かた如此。いづれも肴は時の珍物を調  
 出べき也。必晴のには出る者也。はしは足  
 付に置也。

一鞠の庭にて酒あるとき。さかなに雪を硯の  
 ふたに入て。春物などには取出す事もあ  
 り。

一鞠場へ可出物之事。あまのり。たゝみ。つば  
 ゐもち。是は椿の葉につくりてのするもち  
 也。をもゆつけかわらけに入て出す也。常の  
 ゆつけもよし。其後は何かと出しても不苦。  
 一鞠の庭へ柿ひたしを取出す事



春夏の鞠の時に。へいしに柿ひたしを入れて。口をつゝみて出す事秘事也。其つゝみやうは。へいしに柿ひたしを入れて。紙のはし兩方を下へなす。酒をへいしに入れて出時は。包み番の兩方のはしを上へそらする也。男てう女てうにかたどる也。是秘事也。また柿ひたしと酒とをへいしに入。かたゝづゝ出事もあり。つゝみやうにて柿ひたしと酒とを心へ分べし。柿ひたし。酒さかな。盃をからびつのふたに入れて。塀重門の内へかき出す也。それより盃を壹ツづゝ人前に引。扱柿を一盃に入れて引。其後へいしの柿ひたしをてうしに入れて出す。次に梅ぼうし黒鹽を入。さんばうにつみて出して。其後色々のさかなを出すべき也。

一 柿ひたしを鞠の庭にて吞事

右の手かたゝにて盃をとりて。左の手を

ばいさゝかもそへずして。貴人の御下ため吞どくに。右の手かたゝ成べし。一はい吞人はうけたる柿ひたしばかりを吞て。盃に有柿をばとりてかけへすつる。二盃のむ人は。二はいの後にすつ。三はいのむ人は其後すつ。三はいより外は不可吞候。昔爲雅卿の時。人數八人にてまりの會有しとき。柿ひたしを吞に。彼道をしりたる人三人あり。残りのはのむ道をしらで失面目也。柿ひたしと酒と出す時は。柿ひたしよりすゝめて。酒は後に吞也。大成秘事也。他人に不可有相傳者也。

一 柿ひたし拵事

串柿をきざみ摺て水を入れて。布にてこして。すみたる酒を水と等分に入れて用也。古酒ならば水を三分一可入也。

一 柿ひたしからびつのふたにすへていだす事



梅ぼしくろ鹽かはら  
けに入。ふたをして。  
角ちがへておく也。  
盃をあまた重ておく  
也。

一柿ひたし飛鳥井流には絶也。柿ひたしをか  
もにはしるべきとて。有とき飛鳥井中納言  
雅安卿貞久に尋参らるゝといへども不申。  
よくく心得て可置也。晴の鞠のとき可出  
なり。

(頭書)

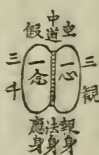
宗直考。貞久社務森神主。正四位上益久  
男。文明十五年十二月十日叙正四位上。長享  
二年三月朔日叙從三位。

極意集終九拾五ヶ條。

右依御所望相傳仕候訖。永爾不可有御他見  
者也。

# 十卷之外

鞠當位即妙表徳之事



一因三觀果三身ト尺ソ。凡衆生ハ一心ニ空假中

三觀明了ナルヲチ不レ知述レ之故ニ。三界流轉シ  
苦城沉輪ス。然今此見レ鞠。中ノ虛ナレバ虛空  
佛性トテ。我等ガ一心本源也。心本源ナレバ无  
色无形。非レ長非レ短。如ニ虛空ニ同ニ法界ニ正ク。  
如シ鞠中又如ニ此空ナル物ト言トスレバ。而一切  
萬法周備。森羅萬像歷々タル假體ナリ。爰有リ  
ト言トスレバ。万法悉ク飯空ニ无ニ一物。所詮空  
モ假ニ中道實相真如ナリ。サレバ佛身法身猶如  
虛空ノ眠チ打開レバ。空觀果徳顯ニ報身佛。假觀  
用ハ顯ニ應神佛。中道果徳ハ成ニ法身如來ト。猶  
是權門ノ心。似タリ圓頓實教ノ心。三諦一體。



非三非ナレバ一。三身即一佛性。一鞠ノ上見顯タル。柳ハ綠花紅ニシ。已々分々。一トソ。无シ爲レタル漏レ法性ニ物。是即鞠ノ當位即妙ノ心歟。猶更ニ可レ問レ之。

一鞠ノ庭寸法七間餘ノ表徳之事。佛家ニ付テハ號ニ過去七佛道場ト。神國ニ付テハ天神七代ノ形ニ取ル守護。或鞠ニ付テハ猿ノ日ノ會日トソ翫レ之。故ニ猿ハ即一乘鎮護。山王七社ノ爲ニ法體間。七社表寶前七間タルコト。代々口決タリ。七間餘ニ成ルコトハ世間ニ无ニ定相。以ニ不定爲レ定ト云ル深意有レ之故歟。勝云々。

一八本懸事。蜜教心ヲ以號ニ八大童子ト。八大童子ト者矜伽維。二制多伽。三俱利伽羅。四ニ大龍童子。是ニ四天ヲ加テ八大童子ト云々。然則鞠ノ行者ヲバ即身ヲ不動明王ト觀ズル心有レ之。不動明王无レ有所レ居。但住ニ衆生一念心中ニ矣。思レ可レ之。一代聖教ノ心ニ付テ八本懸

ヲチ即八境界トス。教ニ約束スル時ハ號ニ八教。八教トハ如ニ次手。三藏教。阿含。通教。方等。別教。花嚴。般若。圓教。法花。涅槃。頓教。花嚴。漸教。阿含。方等。般若。不定教。約ニ衆生機。秘密教。是亦約ニ衆生機。已上八教。是ヲ庭上ニ莊嚴ノ鞠ノ行者ノ一身即三身之佛陀ナリ。衆生爲メニ利益ニ流布ス。之言ル觀念有レ之云々。深旨有ニ口決。更問レ之。

(註釋)

一三足事過現未之三也。本法流轉還□□三ツ  
 一三身ノ表徳。三寶ノ表示。轉ニ三毒ニ顯ニ  
 三身。甚深沙汰有レ之云々。

一一切ノ諸道具。其外序破急表示。皆以非凡慮遊戲。月氏且我朝。其元由神明佛陀ノ内證ヨリ事起。故四智。五智。六佛。七佛。三身。三千三觀。八教。此等之深旨ヲ含メリ。懸聲ノ三聲。阿梨ヤ應ノ口傳。サル事アリト可レ得意。故ニ上始一人ノ天帝ヲ。下至ニ萬人地民。翫レ之賞レ之。

廻ニ佛神ハ守護。惡魔ハ退ニク遠方。最此謂歟。  
般若經吾ガ心ヨリ成ス業ヲ何レノ神カ余所ニ見  
ルベキ。

大日經云。

我本无有言。但爲利益說矣。

私云。

拜上

天竺靈山ニテハ金毘羅神トテ猿ノ形ニテ佛ノ說  
會ヲ守護シ。大唐ニテハ天台山ノ麓號ニ神僧。智  
者大師法花經會座ノ守護。於我朝者比叡山  
麓ニ號ニ山王。一乘御法ヲ守護シ玉フ。三國共  
ニ佛法ノ流布ハ猿ノ形ニテ守護シ玉フト見タリ。  
殊更日本神國申日チ會日ト定而鞠ヲ用事。最  
神慮之内證ニモ相叶者歟。申ヲ示ノ神トスト言  
ル意。尤其由在ル者歟。

蹴鞠條々

夫蹴鞠は皇帝蚩尤が亂を平げ。天竺大唐我  
朝三國之翫好家の式也。先第一天下を治。國  
をしづめ。神慮に叶子細あり。又皇帝此道を  
作りて武を陳ず。天地人をかたどり。則鞠は  
日月を表す子細あり。我朝翫事天智天皇の  
御時也。さて後鳥羽院の御とき。雅經卿撰之  
直之。子細有之。其時分迄は家々兄弟難波兩  
流なりしが。得ニ勅意道をきはむる事也。し  
かれば八境兩分定し口舌相乘之事專一也。  
また君臣合體之道といへり。君も人も袖を  
ふるゝ也。第一敵を平げまた身を安くす。葵  
藿の日にむかふが如し。精大明神と申也。長  
久の術。又鴨之水の上にうかぶがどくとい  
へり。かつをむしの水の上に往返するが如  
しといへり。猶口傳かんようたりといへり。  
一庭作の事

鞠庭の事。ひろさ家により所に隨べし。先高

下なく平地なるべし。かたき惡し。石なきをよしとす。もとの土わろくば取のけ。能つちを砂にまぜて置べし。惣別土をふるふこと可然。砂一度ふかく置ぬれば沓入てわろし。すくなくなる時。置そへたるが可然也。庭を作りおほせて樹をうふれば庭そんずる也。まづ樹をうへてしかるべし。また口傳あり。

一懸の樹の事

式の樹といふは。櫻。柳。蛙手。松也。又雜木をも植ことあり。榎。棕。柿。常の事也。賞翫の木には梅也。

一懸の植やうの事

木は安宅術。懸は鎮屋の方也。南向の庭をもてもつばらとす。しかれども東西北等のかゝりに。軒の左に櫻。右に松を植ることあり。當家の秘説なり。師匠の許なき人不可植。常の木は南角を本に植べき也。

蛙手 松  
柳 櫻

南  
柳 蛙手 松  
櫻 虚  
柳 蛙手 松  
櫻

蛙手 松  
柳 櫻

軒と木との間一丈四尺三寸ばかり。母屋の柱よりの事也。ひさしあらば。縁よりひろさをくはゑて丈數をうつべし。

木と木との間は二丈ばかりしかるべし。猶ひろく植たからむには。二丈一尺二尺にも植べし。又にはせばからん所には。一丈六尺七尺八尺九尺にも植べし。又口傳あり。

一切立の事

御厨子所預

享保十六年九月晦日 采女正紀宗直

宗直云。

難波宗建卿ニ相尋之處。松下掃部助教久作云々。寛永八年九月作之云々。

右宗直朝臣本令借得書寫訖。

安永三年二月

大和守大伴積興

〔右蹴鞠九十九ヶ條以野宮家本（外題松下十卷抄）校合〕



續群書類從卷第五百四十

總檢校保己一集

男 源 忠 寶 校

蹴鞠部五

松下十卷抄

蹴鞠條々

懸の樹事

式の懸とは櫻柳楓松也。此木不足して二本  
うふる事くるしからず。又雜木をも師の  
ゆるしを蒙る人植ますべし。雜木には椿榎  
棕柿これ植べし。椿。櫻の所。榎。柳の所。棕。同前。柿。  
楓の所。なるべし。

懸植事

本は宅宅〔安宅懸〕の術。懸は鎮屋の方也。何方にても  
櫻。うし。柳。み。楓。さる。松。いぬ。なるべし。軒

と木との間二丈なるべし。庭せばき所なら  
ば。一尺ばかり二丈のうちへもつゝむべし。  
しからば軒と木との間も一尺斗つゝむべ  
し。最下の枝は地より六尺五寸ばかり有べ  
し。高ささうへまで一丈五尺斗可然也。但う  
へて後年く高くなれば。一丈七八尺まで  
はくるしからず。猶高くなれば梢をつゝむ。  
最下の枝はわきへむくべし。兩方のつぎに  
ありてよし。むかいつめのかたにあふ事わ  
ろし。惣而枝のかすることなし。鞠さはりて  
見苦敷枝などつめ候べし。本木を見さる枝

など。つねに有ごとくつめ候べし。

### 切立の事

松三本柳一本。又は二本づゝも子細なし。又竹をも立とすべし。丈數はうへ木におなじ。竹はすへをふしのきわより切也。地より梢まで一丈五尺なり。竹は四本四所にも立る也。最下の枝も木におなじ。木のときは四本。同木はわろし。竹の時は四本ばかりよし。末を切事ことなる儀なし。ふしのきわより切まで也。

### 一段の事

三足づゝけて人にわたさむ事也。これ一段也。されど四足五足をける事は。鞠色よくけなして。人にゆづらんとてける也。又一足にても人にわたす事は。或はけがたき所をもけいだし。木の外の鞠などは。わざと一足にても人にわたすべし。三足の後人こはん鞠

を。なをしたひける事有べからず。けがたき所。軒の下。かきのきわなど。惣而懸の外の鞠など。上手にて有とも。一足又は二足□□にてけわたすべし。

### 三段の事

序破急の三段有べし。鞠始まる時は序分也。鞠長の鞠をけて。のびらかにのどやかにけ付すべし。破分は中ほどのけやうなり。鞠長に甲乙あひまぜて。高さといきゝとを同じほにけて。時々曲をもけるなり。急は晩景のけやうなり。ひきゝをけて。鞠たけの鞠を少々ける也。曲をもけ數をもはげみ。忠をつくし興をもよふし。いかににもぎやかにけなすべし。

### 鞠長の事

一丈五尺なり。それより高くける事詮なし。

### 網事

便宜にしたがひて。何方にもかくべし。芋を縄にして。あいにもめても用る也。又わらはも外にかくるはくるしからず。目のひろさ四寸也。高さ地より一丈六尺也。目の寸高さの尺まで也。ことなる儀なし。かけやうなど人のこのみたるべし。

鞠垣の事

高さ綱におなじ。ふちのあはひも四寸也。立竹のあはひも四寸。方四寸たるべし。ふちの數なし。いかほども結次第たるべし。家のやねなどのあはひゆひさる事。此ごとくたるべし。家のなりにつれべし。地よりあとへつるかきは。所ともなるはわろし。いかにもすくなくがよし。

あしつゝむ事

紙壹枚をふたつに折候て。又よこさまにちり。大ゆびのうへのそばよりほかさまにち

き。又上にてまきとゞめ。紙あまり候はゞ。うちへ入り入て。かみよりにてふたまき。ゆびのうへにてまむすびに二ツむすび。一文字に切也。鞠はて候はゞ。いかにもこまかにさぎみてすつべし。かみよりにて二まき卷。ゆびの上にて二ツむすびて切也。扱つゝみ紙のさきをあり返し一文字に切也。

鞠を庭に置事

先ふくらの方を上になし。兩の手にてかゝへ。中門より出て。軒のむかふより庭なかに持てより置時。左のひざ左手をつき。右の手にて取革をとり。よこさまにふくらの方を軒左右に成やうに。いかにもしづかに置て。左に歸るべし。又貴人など御座候いゞ。其御方を前になし歸るべし。鞠をかゝゆるは。人さしゆびと大ゆびにてとり革を取り。のこり三ツにてこしもとをかゝゆるやうにする

也。鞆はて候はゞ。いだしたる人取て歸るべし。まりいだす人は若輩の役たるべし。枝の時は替よろしく。鞆をかゝゆる様は。右の人さしゆびと大ゆびにて取革を取。殘三ツにて腰の本をかゝへ。左の手は左のこしのもへとそとそゆる也。

### けあげする事

軒のむかふよりも又何方へも仕候。先大方は軒のむかふと心得べく候。其上下たる人の役也。各（一重）□につかれ候て。そのうちけあげつかまつるべき人さしよりて。左のひざ左の手をつき。右にて取革をとり。又兩の手にてかゝへ立て。そのむかふに目合。一足も立さらずけるとき。左をはなし。右にてあしにおとしかけてける也。所とも手にて上てける事有べからず。我がまへにかゝり候へば。何度も仕なほし候べく候。又木こしにてだ

にもなく候へば。我ともに五人にはつかまつるべく候。又貴人などにはつかまつりかけぬ事にて候間。其時のけあげはそばへ仕べく候。自然貴人御むかふにまいり候はんずる時は。此心得肝要也。能々分別たるべく候。難波にも鞆置もすぢかへにを（三股）けあげも後に立たる人するといへり。けあげをする事。我むかふの人さしあふ時は。むかふの木をあゐ懸り。又わが相懸りの人にて仕候。此外三人の木こしの人には仕まじく候。一けあげを人よりかけられ候はゞ。うけ取て一ツもおとさぬ事にて候。そのまゝけべし。殊其鞆をけあげ候人に。一足にて又かけさぬ事にて候。

### 圓座しく事

其衆により候て。圓座多候はゞ兩人。すくなくば一人にて然るべく候。先鞆なきまへに。



庭の下のかたへ二所にかさねて置也。鞠有べきはじめに。鞠衆の分。かの兩人いて。彼圓座をかくへ。上座より一枚づゝうちをさく敷也。間をさのみせばく候はぬやうに。よきほどにみはからひ敷べし。かさねたる圓座我下のかたへ置。一枚づゝとりく敷也。又別にも敷やうあり。鞠衆十六人。又は十人十二三人もあらば。圓座二所に置。二人にて敷べし。八人計ならば一所に置。一人にて左右の間いづ方へも廣方へ敷べし。又別にも敷やう有之ば。先ならべて敷べし。一こしにさささまに取こしく敷也。ケ様に候へば。廣さざうさなくしかるゝ也。是はさのみこのみて敷まじく候。圓座の結の方後になすべし。

圓座敷べき所の事

軒の左右。能々軒の左右せばく候はゞ。何方

へもひろき所を用る也。又貴人御本所など御座候はん時は。軒の左に疊一帖敷べし。貴人あそばされ候時。疊敷べきやう。軒の左の方にたてさまに敷べし。

圓座につく次第の事

先中門にて次第を定て一人づゝつく也。扇を左に持。軒のとをりにて一禮候て。又圓座のもとにて蹲踞して。上首の方へ一禮にて。軒にうしろをなさて。手をも上首の方をつきて圓座に居べし。何時も左の足を上にかさね候べし。圓座につく時。軒の通りの禮は。左の方に着座候はゞ。軒のとをりにては左の手をつくべし。ひざはつきつかずによし。是も左のひざたるべし。圓座のもとにては。右の手をつき。左の足ふみ出しなをるべし。右の方に着座候はゞ。軒のとをりにて。右の手をつき候也。右のひざつきつかずた

るべし。圓座のもとにて。左の手をつき。右の足をふみ出し直るべし。刀。扇。はなかみ。取合たるを左に居候はゞ。右にてかゝへ。左の手を前より下さまに入てとり置べし也。右に居候はゞ。左にてかゝへ。手をさきより下さまに入て取。其まゝをく也。

### 刀たゝふがみ置事

扇を左に持ながら。右にてはなかみを取いだし。扇にかさね。左にて刀をぬき。はなかみにかさね。刀のさき軒にならぬやうに左に居て。我が左の方へつかの方を軒になし刀置也。軒のむかふに居候時も。大方其心得有べく候。

一かはりて圓座に付候ても。何時も扇を取て左に持て居べく候。あつく候はゞ。二三げんひろげてつかひ候べし。

一圓座に居候ても。鞠をちかゝり候はゞ。居な

がら一足を立つゝ。一足も可仕候。

### 鞠ふみ候ての事

一其時いかにも靜に鞠を取。たゝきふくらめ候て。ころばかし出し候て。やがて座になをるべし。自然貴人などめし出され候はゞまいるべく候。可秘く。

### 正二位

### 鞠條々

一鞠の庭をば當家には鞠庭と云。のゝ字をばいはぬなり。

一鞠を見物するに。我前にころびくるを。そのまゝにてをくもいかゞなれば。手にてはゆめくゝいろはで。左の手に持たる扇にておしやるが能候。扇にておしやるは。鞠衆かはりて座に有時も如斯し。又見物する人も如斯鞠衆ならば。おちかゝる鞠をば心蹴(音蹴)べき也。ころびきたるを扇にておしやるべし。見

物衆ならば。鞠かきのうちをひ。かゝりそとに居て蹴べし。鞠かきの外ならば。取てこるばかり可入なり。

一けて着座の事。公家武家ともにかはる事あり。公家には刀を御さしなく候間。扇を左に

もち。たゝふがみを取り出し。扇の下にかさね。

右は所によりて上首の方におく也

我が左の後の方の圓座の下に入て。扇のほ

ねを我まへになすやうに是を置也。武家は

刀をさす間。刀扇をはなかみに重ね。右の方

におかるゝ也。刀のささいさゝか我まへに

なるやうに置也。鞠けすゝしきと思ひ候へば。

たゝふがみをおさめ刀をさす也。かまへて

く刀のさき貴人の方へならぬやうに置

也。能々可心得もの也。出家は公家同前。公

家に扇たゝふがみかさねて圓座の下におか

るゝは。左の手にて右の方にさしこしてと

りて。かた手にて圓座の下におかれ候也。武

家には刀左座の衆は左に置也。

一立所の事能々分別たるべし。先圓座より次

第一に一人づゝ立候て。木には付候。其人々の

位により圓座にも付候間。木に付候時も。圓

座の上より被付候べし。又そのうち堪能の

人又は貴人など御下知有べし。下知なくし

て付候時は。先其内最前の人軒の左にも可

付候。其次よりは先懸の間くゝに立ふさぐ

べし。五人めより其心得可入候。又最前被付

候人のむかいつめくゝになるやうにも付候

也。それは所々もとの依體可爲分別。又貴人

などのむかひつめ。懸のさきはゝ可斟酌。必堪

能の人たるべく候。さりながら貴人などの

しきりにまいる候へと被仰候はゞ。さのみ

は斟酌すまじく候。懸の度々に立ふさぐべ

しといふは。最前の人軒に付候。其次より軒

の向にてもあれ。又左右の間どなたへも先

一人ヅ、付べし。軒に御付候て。其後の衆軒の左右軒のむかひつめいづれもあがりさがりなし。又軒の左右に着座の時。かゝりに付候事。一番に左の軒。二に右の軒。三に左の軒の木こし。四に右の軒の木こし。五に左の軒の木こしあひかゝり。六に右の軒の木こしのあいかゝり。七に右の軒のむかひつめ。八に左の軒のむかひつめ。此上有之貴人の向ひつめあひ懸り心得入べし。圓座一方にしまる時も如斯心得べし。此立やう常によし。軒に付候はゞ。其次より間／＼に一人づゝ立ふさぐもよし。

一懸の上下は先二人賞翫也。其内にもなを軒の左の人一の賞翫たるべし。されば貴人相懸軒より左の方しんしやくといへり。

一懸により畏は。木と我があひだ三尺計。いさゝか外かどに。懸の方のひざ。懸の方の手を

つき候て可畏候。又貴人など相懸に御座候はゞ。其方のひざを可付候。難波にはいつも右の手ひざをつくといへり。

一懸に寂前も又いつも付候時は。一禮もせぬ事にて候。去ながら貴人など御座候御まへは一禮も有べし。

一外へおちたる鞠を取候て。懸のうちにころばかしいるゝ事有。若輩として行て懸へころばかし入たるを。いまだ人の取てけぬを。又よりて入たる同人取てけ上らるゝ事は不可然候。

一軒なき庭は松櫻上ると可心得。

一軒上候又とをらぬと言事。大方は如斯なれども。惣別は客人の亭主賞翫の心得にて。客人は軒をとをらず。亭主は軒をもとをりてもくるしからずといへり。

一貴人など其外の衆はや木につかれ候て。貴



人の木越にまいり候べし。あるに斟酌かと頻にと候はゞ。其時まいり候時は。貴人の御後をとをらぬ事にて候ほどに。其時は軒をとをり候ても不苦也。

一 鞠の人数八人よりおふく候てかはる事あれ。そろはではじめまじきか。されども自然或は七人或は六人などにてはじむる事あらば。其内の堪能の人などを二本の木の中に立てけべし。それも畏時は右の木のもとによりて可畏。六人懸にむかひ合候べく候。これ式々にはあるまじき事なれども。しぜんのために尋申て注し侍る也。六人にてけ候時は。軒に一人。軒むかひつめに一人立べく候。兩の脇に二人づゝ可立候。

一 懸の上下定まらず。貴人はあそばしよき所へ御座候間。いつも貴人御座候方をあがりと可心得。大方は軒左右上にて候とも可心

得。

一 圓座に付候時。手は何時も貴人の方又軒の方を大方付候。

一 圓座に居候はゞ。上座を見合候て。刀たゝふ昏を可納候。

一 圓座に付候時は。左右の敷う<sup>〔マ、〕</sup>ならば。一人づゝ、左右にかけて付候がよく候。能々可心得。一刀をよく我そばへ圓座の下に置事もあり。それは下座のかたへ可然候。

### 正二位

#### 鞠之一書

一 けかたの事。先木に立候時も。平生のごとく身なりなどもつくらず立候。去ながら左足少さし出候て。け足を少後にひきて立候也。いつも蹴足さき立候事わろし。それを立あしとてきらひ候。鞠け候時は。少腰をすへ。むねをいかほどもひきこみて。目づかひも

右のかたをそばめに見。鞠に落かゝるまで  
見くだし。足によく／＼落付てけべし。人  
のける間も鞠上候へば。其人の足まで見く  
だし候て。少も／＼無油斷やうにける事  
に候。つまさきにてけ候へば。鞠しやきり  
候てわろし。足のかうにおとし付。いかにも  
むくやかにけなし候がよく候。人體もしや  
きり。まりもしやきり候て色わろく仕候事。  
第一さひ候。いかにも／＼ゆう／＼と仕候。  
乍去又にぎ／＼と仕候がよく候。

一むね出候事又そり候事。又く／＼み候事。何れ  
もわろし。たゞいつもの立すがたよく候。  
一いかに鞠にあたり。おきつころびつ仕候て。  
しらぬものゝめには見事と申候へども。か  
たきのわろき鞠はまりにて有まじく候。い  
かに足たかく。しらぬものゝめにはわろく  
立候とも。かたきのよきまりは鞠たるべく

候。第一かたきを本にすべし。乍去其人によ  
りいかになをしてもなをるまじきくせある  
ものにて候。又すがたも有ものにて候。それ  
は無才覺候之間。其なりのまゝけさせべく  
候。如此の儀何も可用捨候。

一鞠に三徳と云事は。是もけかたより出候也。  
一手もちの事。身よりも少さきに出候やうに  
もちたるが能候。いかにも手のうちより鞠  
出候ごとく。身ちかくけなす。べきためにて  
候。手少さきに出候へば。をのづから鞠もち  
かくなり候。

一三びやうし肝要にて候。三びやうしは右左  
右とふむ也。なを／＼口傳く。

一いつもけ渡しをたしなむべし。  
一三段三足之事。右一卷に在。能々可分別。又  
人の鞠けはなしかぬる事あり。それはそば  
よりこい候て可仕候。

一かさねごゑは我まり人よりけられ候時かくる事にて候。又面白き時は静にかくべし。ばいそくの時ははやくこひ候べく候。

一きよくあもしろがらせて。身なりをくづしける事わろし。殊にうつぼながしなど。け候て。めをそともひき事も。其鞠はけぬうちよりとり候。能々可心得。殊に平生もかたこしをくずしける事わろし。

一貴人の御身に鞠をけあて候ても。又御身にあたりたる鞠など仕候ても。け候て後ひぎを少付候。

〔平賀〕

一鞠請取候てけ候鞠は。我まへゝまるやうに仕候て。分のまりいかにも色よくけまはして有やうに蹴上。又はなつ鞠をば外にまいるやうにけあぐべし。但心にまかすべからざるか。されば分足三足とは。請取候て一足の分のまり一そく。けはなつまり一足。以上三

足なり。三足の外人のこひ候は。いかに我鞠なりとてもすて候べし。

一ける人のむかひつめのつむる時。相懸の人もおもはゞ。半分ばかりまでつむる事也。尙八境にしるされ候。

一鞠をつめてもひらけ。ひらきてものけ。はなしてものけ。我立所へ歸る時。うしろしざりにはかへらぬ事にて候。左右にかへり候べく候。

一懸にわがけ上たる鞠はいまだ我鞠也。つめてけべきか。但け上やうによるべし。木の左右の後へゆかんは是非に及ばず。能々可心得。

一鞠をこふ事。ありやと云は春のこゝろ。但うけとりはじめはこはず。おふと云は夏のこゝろ。有と云は秋の心也。分鞠をあふとこふ也。切こゑといふは。まりなどのけふなる

を。ありく／＼とこふをいふ也。おうと云はけはなつ時の心也。但たか／＼蹴上て。こゑをひきて。おうとも我懸にけ上て。又軒にけかけての時は。必々おうのこゑ成べし。ありとはこふべからず。乍去又おうのこゑはそこつに有べからざる儀也。今は飛鳥井殿などの外いかにもこふべからず事也。

一段三足と云事又あり。右の一卷にもしるし候也。尙こま／＼の事在。けあげを一段といふは。け上て其足にてふむ足まで也。□而其足を後へふむ一足。さて左の足をささへふみて鞠を待。是一足。三足之儀也。可秘く。

一花のもと鞠はしんしやくすべし。仕候とも心得可入也。

一風吹のまりは風吹候方へきふく仕候也。其内こうしやを風下に可立。

一雨の後のまりは。はかまのく／＼りをつよくゆい。身ごしらへをいかにもよく仕候事候べく候。何も／＼可心得入なり。

### 鞠之一書

一御前の鞠は久敷仕候はぬ事にて候。惣而かはりてのおほく候は。平生も早々かはり候事にて候。それも上座より次第／＼にかはるべし。御前のまりもかはる衆あらばの事にて候。かはる衆なくば。いか程も可仕候く。かはりて可仕候時は。賞翫の人御立候つる所も不苦可立。けられ候人かはらなために着座候へば。やかて立候鞠衆。いか程もあれ。上座の人左右より四人づゝ先けられ候。四人の下□□□上座より次第にかはるべし。

一鞠垣つゐぢゑんなどよりころびをち候鞠は。何時もひざをつき候て可仕候。殊ゑんな



どより落候まりは。むかひてけ候へば。鞠内へ入事候。初心の人はそばむき候てけいさるべく候。軒よりもえんよりころび落候はずば。さほにておとし候べく候。又手にてころばかしいだしたるがよく候。えんに上たるは。立ながらあつかぬ事にて候。すこし腰をかゝめ候べし。

一 軒にあがりておち候鞠は。是非に何時も軒の下に入候て。(左敷)ゐをり合候てけ候べし。軒にあがり候て落候時。はやくなをり候へばわろく候。軒のとをりにころび落る時直りあふがよし。

一 鞠たけの事。先三足の内。序の時は前をほそく。後二足を大にけべし。急は後をほそく可仕候。猶右一卷にあり。

一 さくらの花などは。いかにもけちらさぬやうにけべし。楓松などのしきりて。(け敷)かゝりた

る鞠のみへぬ事あり。さ様なるをば葉がりの鞠とてけにくきもの也。又葉がりの鞠常葉木のもと遠く見よと云。木にけかけたる鞠。色々けうに落。けうになる所をけなをして。靜に人にわたすべき心有べし。是又鞠のやうによるべき也。葉がりのまり常葉木のもと遠く見よといふは。ちかくよれば見えぬほどに。遠くより見るべきなり。

一 軒のむかひつめの人。軒にけあげたる鞠をば。軒に立たる所のむかひつめの人。ころび出る所をけ出す也。軒のうへをころびまはりて。遠くよ所へ落るは。其さわに立たる人の鞠なるべし。定まるべからず。又軒にけ上たる人も。鞠の軒より遠くころび落候へば。むかひつめのけべき事も在。軒にあがるまりは必軒の人のなれども。遠くをちば其軒のむかひつめの鞠なり。むかひつめの人油

すまじき也。

猶可有略味

一むかひつめの人につきて。とをく外へ出たる時は。むかひつめに付てつむるなり。猶もやうによりて二足三足程は出もすべき也。先木のとをりより外へはさうなく出間敷事也。若懸の外に遠く出候時は。遠き鞠をのべ候てはくるしからず。此時はさうなく軒につめてけまじきと覺たり。されば軒にけあげたる鞠は。軒の下の人<sup>は</sup>むかひの人のかほをみると云儀あり。

一つむる人むかひの懸に外に遠くつめて出たるに。其鞠よの人のけ入られて後に。つめたる人ける時は有べし。さやうならねども。遠く出たる時は。懸のうちをばかへらで。すどをりとて。かゝりの外をまはりて立所へかへるべし。其時も軒の方は可有心得。又其時懸の外まはりて行時も。人のける鞠に心を

かけ目をはなさず見候てまはるが。無油斷可見能候。よく／＼可心得事也。

一袖越とて。左の手を身にそへ候て。手の外にてけるを云也。このまぬ事なり。

一鞠そとへ出たる時入事。ころばかし入るは。木のもと三尺ほどをき候て。手をつきてころばかし入る也。是は見物する人。又はまり衆かはり候はんずるためにのき候人の事たるべく候。け衆はとりたる人やがてあげまりすべき間沙汰に不及也。

一汗のごふ事。かはり衆あらば。圓座につき候て。そとかげむきてのごひ候べく候。又かはり衆なくば。かゝり三尺ほどのき候て。かけにむきてのごひ候べく候。

一すあふのひも。懸四尺ほどのき候てつかひ候べく候。とけたらんずる時の事也。

一はなかむ事。是又同座にてそとかげにむき

てかむがよく候。

一鞠を請取渡候事。枝の儀は右一卷に。いつも渡候は。庭に直候やうに。かゝへて出候て渡候時。こし革を左の手にすへ。右の手をふくらにそへて。取革上になしさし上候。さてうけとり人は右にて取革をとり。左を下へそへ候て。其まゝかゝへて取べし。

(右敷)

一鞠人に見せ申時。持て出わたす事は大のごとく。うけ取人も右のごとく請取也。先こしかはをみまはし。さて左にすへ。右の手にてふくらを二度うち。又右にすへ候て。左にてふくら一方を三度ばかり打うち候て。近來見事の鞠といひて。本のごとく指出し候。惣じて鞠はこのふた能候。こし革を見まはし候は。先わが前の方を見候て。さきをのちに見るべし。

一主人の御目につけ候時は。まりはこのふた

などにいれて見せ申候べく候。自然手づから掛御目候時は。右申ごとく仕候て。手をかにも地に付て。さし上候てみせ申べく候也。

### 鞠一書

一野臥の事。堪能の人たるべく候。其衆はかり衆圓座にあるときも。さるゝ鞠を立てけれらるゝも野ふし也。三段にけいれらるべし。此時の三段とは三曲の事也。三段にけいゝほどの堪能ならずとも。かわりたる人數のうち。圓座にあらばけいゝるべし。先のぶしと云は。八人のけてのうち。よはさけ手の後へ立て。よはさけての合力にするをいふ也。可立ほどらひは一間ばかり後に可然。但そのよりのきによるべし。着座の時もさるゝ鞠をけいゝるゝは只見物者の心得也。只一足にてけいゝるゝは是非に及ばず。必三曲

のうち一曲もけべき也。内裏にて御鞠の有けるに。三條の内府人數にてはなくて見物ありけるに。外へさるゝ鞠をつゝと立てけいれらるゝに。有とこはれ候。飛鳥井の分の鞠なるを。こはれ候事不可然とありけるを。内府ことの外なる着座にて。りようしやう有けるとの事。尤可秘く。かはり衆の着座の人にてあれ。又見物衆にてもあれ。さるゝまりをける時聲をかけぬ事也。又八人の衆のうち。よはさけての後に立野ぶしの人も。常には聲をかける也。されどもとをくゆきたる鞠のときはかけもすべし。着座衆のける鞠は。いまだ八人のけての鞠なれば聲をかけぬ也。

一圓座に着座の時。貴人役などもめし候へ。又最前木に御付候時は。各座よりをり一禮すべし。木に御着候てより又圓座に居候べく

候。

一懸は何れも相生たるべし。其内二本立の木二本もあればむかひあふべし。いづれも相生なれば是非に及ばず。同木相生二本あらばむかひ合へし。さて残る二本別々の木にてもあれ。又同木にてもあれよし。松櫻柳楓の時は。有時に相生をむかひ合せずともうへべし。

一露はらひと云ふ事。禁裏。仙洞などにて賀茂人はじめ候を云。懸の露をあとすべきため也。常には初心の衆も仕候。露はらひとはおもてむきの申事也。内儀は又色々にふるまひ候。懸の枝候へば。彼枝にあたりて行鞠のやう見候はんために仕候。露はらひのときばかり。木などにあらけなく仕かけ候也。平生は無其儀候。賀茂人とはかもの社人也。



一鞠高く候へば。ひきごゑに傳かけ候。ひき候時は切こゑたるべし。

一並木は庭のひろき方にならべてうへ候べく候。高さ二丈ばかり也。庭のひろき方に植べしと云はいつもの植木也。おひ懸りの方。かまへざるかたの事。

一ふすべ鞠は春夏秋冬にかはると申候へども。中にも雪花の時用る也。但ふすべ鞠はひめむすに不斷用る也。其故は日月にたとへ仕候時ある間。必又雪花にもかざるべからず。

一鞠庭は一尺あまりにほり候て。土をふるひ。すなをふるひ候て作る也。

一人に當座にて鞠あそばせなどゝ云事。一足あそばせなどゝいはぬ事にて候。鞠そとあそばせと云がよく候。遠く文などにて鞠仕度などゝ云時は。一足參會仕度などゝいふ

てもよし。

一鞠ほす事。さうさなく木に付候てほす事わろく候。鞠箱のふたなどに入候てほし候べく候。鞠箱のふたに入べきが必可然。ほし所まり庭のうちは何たる所も不苦。懸四本の内外。またつゐぢのうへなどもよし。只の庭なればはしちかくほしたるはわろく候。鞠箱のふたにもいれず。たゞものにかけたりなどしてほさば。物かげに可然。又くかいにほすとも。鞠の置やうなどさのみ有がたし。懸の内外などならば。けるとき置やうにしるべし。

一こしはさみは内は鞠のほどらひたるべし。内より外のあい廣さ一寸八分。あつき貳歩斗也。八角にも六角にもよし。

一庭をはく事のさのみ口傳有べからざるもの也。乍去口傳も有か。足かたもなきやうに。

うしろしざりにはくべし。いくたりにてもはくべし。懸四本のうち又軒なども通りてくるしからずはくべき也。はくべき人いか體の者のやうなどいふこともなし。鞠あるべきとかくごすればはやくはきてよし。ふとの時は其刻もはくべし。

一圓座はさぬき圓座たるべし。今はたゞ竹のかはもよし。ぬもよし。いづれも可用。廣さは一尺七寸ばかり也。芋のかたうしろたるべし。廣さの寸肝要也。芋はかけて置やうに付べし。なかをあけず□□もよし。ゆひとめに緒は付べし。

### 二三曲の事

一のべ。一歸あし。一身にそふ鞠也。すりをひ又こむる足といふも。うつぼながしびんずりなどいふも。ことなる身にそふ鞠のうち也。

一かへし足と云は。立足なるとき。ふとくる鞠を。けあしを後にひきて。土をふまで其まける足也。例式はけ足を左の足よりそとひつこみて。後にふみてまちてける也。

一歸り足はおひ鞠の事也。惣じておひまりすりおひなどいふ事有べからず。

一うつぼながしはをのづから身にそへころばかし。足までころばかしくだし候へば。やがてくむかふのまりたるべし。

一こむる足といふは口傳在。

### 一曲足の名の事

一のべかへり 一軒がへり 一くゝり入足

一うつぼながし 一右歸り 一左歸り

一左右の歸り足 一ひざをつきて歸足

一木をふむ足 一はね足 一しりおとり

一秋津島歸り

一さらひ足の事

一竹ふみ 一千鳥足 一くつくだり

一本をのべきるあし 一みすの鞠

これら能々可分別。

一のべかへりと云は。とをき鞠を延候て。其鞠遠くはいかで。やがてうしろへ落るを。其まゝのべながらなをり合て又のぶる鞠なり。

一軒歸りは軒にけ上候て。軒の下に入候て。なをり合てけるを云也。

一くゝりいり足は。一足けて。さのみたかくはなき鞠を。下にくゝり入候て。又なをり候てける事。

一うつぼながしは。右に申ごとく。いかにも身をちかくすらせける也。

一左がへりは。一足け上候て。いかにもくるくゝとめぐり鞠にめぐりける鞠を身ちかく可仕候。左に歸る事也。

一右がへり足は。一足け上候て右に歸り。いか

にもくるくゝとめぐり候てけるをいふ。

一左右のかへり足は。一足け上候て。一足の内にて左右に歸してける也。

一ひざ付歸りは。一足ひざ付て歸りて後にちかく行を。又歸りてひざつき候てけるをいふ。

一はね足は。鞠ふところびくるを。足をひき。もろあしともにはねてけるを云。

一本をふむ足は。木に懸すりてくだる木に。足をつけてけ上るを云。

一のべ足は。左を敷。いかにもとをきをのぶる也。

一しりおどりは。延候様に又のべにてはなくて。つまさきを立敷候て。いくたびもいながらをどりよりくゝける也。

一あきつとり歸り。そばへ行を。ひきかへるやうに仕候。猶口傳。

一懸四本可植事。

八本十六本などもあり。是は 内裏。仙洞などの事。皆松皆柳など。同木四本植る事。是は皆木と云。いづれの庭にてもくるしからずといへども。但ところによるべきか。皆木も兩木の間か。

一木を植事

右の御一卷にあり。雖然色々の儀也。木と木の間二丈にも。又二丈二三尺にも。そのういかほどもつゝめて。猶もせばき庭ならば其心得可有候。軒と木の間も懸におうじ候べく候。二丈二三尺などは常の庭にはひろし。多分二丈がよし。庭せばくばいかほどもつゝめ候べし。

一なをもせばき庭には。家の軒を軒の懸に用て。むかひに木二本植る事もあり。柱と軒の懸の間も庭によるべし。木のたけ不定。さり

ながら大方定候。いかにも大なる木をも用ひ候なり。おも柱のとをりにはからひて可植也。但尙口傳。家の軒を軒のかゝりに用ひて。むかひの木二本植る時。一色の木も不苦。皆木の沙汰なし。木の高さ庭いかにひろくとも。一丈五尺には過ぎく候。せばき庭には。猶もひきく可然。庭におうじ其心得有べし。おも柱のとをりにはからひて。木を植る事も庭の體によるべし。せばくば沙汰に不及。

一切立の事。雑木は右御一卷に有。但いづれにてもしなくとしたる木可然候。梅などはしやちけてわろし。又はそこつに不植木なり。屋形又は飛鳥井殿に有べく候。

一いづれにても當座のために切て立たるをば切立と云べし。

一竹を立たるを竹切立といふ也。



一皆松皆木などはそこつに不植候間。松三本の時は竹植ますべく候。其内柳一本もあれば子細なし。たらぬ時の儀なり。竹を三本も植也。三本植れば。三すみになるやうに。一のかどを外かどになして植る也。竹は切立の時ばかり也。木のごとくしかと植る事なし。木三所竹一所にもあらば。竹は必軒のむかひたるべし。左右の間いづ方も可然。木二所にもあらばむかひあふてよし。但二本の木によるべし。二本同木ならばむかひ合すべし。木により有所にたてむかひ合候よし。しからずば竹一方に有ても不苦。竹斗四所にて立候。ばかり立ても。皆木のさたなし。くるしからず。

一二本竹を植る事も有べし。能々可心得。

木 ●●● 竹三本の時は如斯植るべし

木 木

木 ●● 竹二本の時は如斯枝を左右になすべく候如斯本うゆれば二本立の木とて心得

木 木

一四本懸とは柳櫻楓松をいふべし。

一同木を二本。又別の同木を二本植もす。又同木三本。別の木を一本と植たるは。何れも木を二色也。是は二本懸と云べし。

一同木二本。別々の木二本植たるは三色也。是は三本懸りと云べし。かやうなるを又必三本懸りと云にはあらず。又壹本懸二本懸とて。いたつてせば庭に。軒を一方の懸りになして。二本植る事も有。立様つめひらき替也。秘事也。植様もあり。四本も二色なるは二本懸と云。又四本三色ならんも三本懸と

云。只木を三本植ることはいかゞ。但あるが軒を軒の懸に用ひ。むかひに木二本植候時。立様。軒の方より木にむかふて四人。木の方

より軒にむかひて四人立也。つめは其むかひくも也。六人の時は木二本のあはひに二人。軒に左右に二人。軒と木のあはひに一人づゝ二人立べし。是も軒の方よりは木にむき。木の方よりは軒にむき。其むかひくもつめべし。そばの人は又其むかひにつめべし。是は略儀なれば圓座の沙汰などなし。あげまりは軒のむかひつめよりいつもごとくたるべし。如斯二本植る時は何木もよく候。右一卷にしるされ候。雜木ののくるしからず。又同木を三本うゆることはこのみて無用也。事かけてはちからなし。切立の時はくるしからず。

一同本二本又同本二本植る時は。同木を向合

に可植候。切立のとき二本立のいかさま木あるべし。竹も二本立の切立の木にむかひに。竹二本可植事也。

一おい懸と世間にいふをばにげ木と云。軒なくて鞠のされべき方に植るといへり。一本も植。二本ばかりも植る也。本懸の木のとり可植。間も大略同。軒のころへかにげ木四本のうちならずば雜木たるべし。是もしやちけて見ぐるしき木はわろし。殊に梅などこのまず。にげ木は本懸の木のとりをりに二本植て。其二本のあはひに一本植。以上三本もよし。本懸とにげ木のあはひは。軒と懸との間ほどたるべし。懸四本のうちの木は植まじき也。懸皆雜木ならば。櫻柳楓くるしからず候。如斯木植たる時はわけ木といふ。植たる時はおい懸といふ。

一四色なるをば四本懸と云。四本一色なるを

ば皆木といふ。皆木は 内裏。仙洞。飛鳥井  
どのに有。四本は四天王の心也。されば寺社  
などに可植也。

一 軒の木を必面柱のとをりと云はなんばか。  
一 妻戸の落の間のとをりに懸を植る事はいか  
ゝ。人の出入あるによりて也。惣而右の一巻  
にしるし候ごとく。軒などのあながちとを  
らぬとは申まじく候。主人の御後をとをら  
ぬ時。又堪能の人などは何時もくるしから  
ずと申侍る也。

一 竹を二本にても候へ。三本にても候へ。立そ  
へばさし合候枝二三ばかりおとし候。丈數  
も植木に同かるべし。

一 切立にも植木にも。みのなり候木をば。みを  
おとし候て可仕候。

一 鞠仕候間。懸にかりそめにも手をかけず。又  
はあらけなくあたらぬものなり。惣而四天

王と何もくわんねんすべし。無聊爾者  
也。

### 正三位

一 鞠のおこりの事。抑鞠の初まりの事。天まつ  
り地をまつりあそばされ候事。〔讀歌〕皇帝の御時  
よりの儀也。其後日本にて天智天皇被遊候。  
さればけあぐるを天。おつるを地とがうす。  
白鞠を月。あか鞠を日と號。同白鞠を陰。ふ  
すべ鞠を陽とがうす。されば足にて仕候物  
とて。少も聊爾にすべからず義也。猶口傳あ  
り。あか鞠といふもふすべ鞠の事也。ふすべ  
やうはこしがはを紙にてはりてふすぶる  
也。ましこひたひにちとかゝるやうにはり  
候也。此ほか皆ふすぶるなり。うすふすべな  
るべし。

一 飛鳥井りうと云事。天智天皇より此方之儀  
也。

一木を植る事日本にて始候事。大唐にてはな  
きよし申傳也。

一ふすべ鞠は春夏。白鞠は秋冬可用也。これ大  
方陰陽を表する儀也。ふすべ鞠は春夏。白鞠  
は秋冬と申せども。雪花の時ふすべ鞠にて  
しとらざるゆへ也。いづれもくるしからず。  
一佛も鞠は被遊候事あり。それは佛法の方よ  
り他心有まじき心得候。されば鞠仕候間。他  
心わろき事也。他心あらんずる人。其人數に  
くはふべからず。さればしやうとくふもん  
にて。足にて落たる鞠はけるにならず候。鞠  
に心を入ず。油斷にて心にて落したる鞠を  
けるなるべしと被仰聞候。能々可心得事也。  
一懸は四天王のかたち也。是又れうじにすべ  
からず。右一卷にしるし侍るもの也。  
一沓。くずばかまのたちあけ。つゆの革上下の  
事。一番無紋のふすべ革。二番紋の有ふすべ

革。其次無紋の紫革。其次紋ある紫革。其次  
錦革。其次紋のあるにしき革也。錦革とは甲  
斐國革の事を申也。是は御ゆるしなく候て  
は付べからず。人々へ今被下候。又付て  
はき候は藍白地又は青き革のすぢ。又黄革  
の紋のある革也。何も如斯次第。御ゆるしな  
くして。ふすべ革あか革むらさきのあいだ。  
かりそめにもすあふのひにも付候まじき  
事也。よく可心得。

一鞠のみちゆるされ候事は。扇をゆるさるゝ  
といへり。此時のあふぎは。十ほねにしろほ  
ね黒ほねの間にねこましてさしほねに仕  
候。書のかさやうさしやう右一卷にあり。黒  
ほねは一賞翫也。十ほねとは鞠扇と可心得。  
猶口傳。

一鞠しやうぞく革も事ある革わろし。是又右  
一卷に在。



一懸植事右御一卷にあり。さりながらみのなり候木をば。何れもみをおとし候て立候べく候。是は雜木を切立又植候時の事也。

一鞠箱の作様。まり一ツもいるやうに仕候。又二ツもいるやうに可仕候。二ツ入はながくさして。中にへだてを仕候。一ツ入。其まゝ一ツ入やうにさして。上は黒も仕候てぬりなどしたるがよく候。内のこしらへやう寸法などの事口傳に有。鞠の入ほどにひろさもふかさもすべし。ふたのふかさなどとかくの儀なし。しふはりにして黒くしたるがよし。内は鞠のそこにあたらぬやうに。こし草のなりにしあわせて板をはむる也。扱うちは皆紙にてはるべし。惣而鞠にしあはするまで也。別に寸法などなし。緒の付やうたなどことなる儀なし。たゞ鞠入る用計也。緒の草はことなるかは、無用也。紋ある赤

革黄革などに繪を書てよし。すぢのある黒革などもよし。

一鞠はさみの事。こしはさみと云なり。あつさ二分。廣さ二寸八分斗に仕候。兩をみがきて柳などにもかき候。又うちくもりなどにてはりてもよく候。又しろくも仕候。黒漆にして蒔繪にも仕候。うちのふとさ鞠(さ殿)にあい候やうに仕候。緒のながき三尺ばかり也。是は紫革何もよく候。八角にもすべし。六角にもすべし。緒はもん有革赤革よし。紫かは、無用たるべし。こしはさみは内儀のものなるほどに。又何にてもくるしからず。うちくもりにてはりたる時は。青き方うへになすべし。鞠はさむ時は。とり革を上になすべし。こしはさみ。上のかたはすみちがへにし。おもてにてとむべし。とりやう二むすびくゝて切也。ちがひ目は上下ともに左の方上に

成やうにちがゆるなり。下のとぢめはすみちがへにして。上下よこにとをすべし。緒は三尺なるを。二重に取候て。とぢめにてむすび。又さきにむすぶべし。下のとぢめは一の下にてとむべし。かけておく時は。一むすびくゝて二重に取てよし。かやうにあれば以上四重也。

一鞠庭に敷たゝみの事。御本所などはあかり成べし。院など鞠あそびして着座候はゞ疊しくべし。

一鞠遠國へ遣候時は。鞠箱に入遣候が能候。又ちかく候へば。やなひばこ（きん）に付て遣すがよく候。鞠箱のうけ取わたしやう無物也。

一柳宮の寸法の事。其物々によりて廣さ不定候。長サは大方一尺二三寸ばかり也。あしは一寸八ふ計也。上の木は柳たるべし。しろく三角にけづり。紙よりにてくみ候。くみやう

口傳有。足は下をばかどをたつるやうにしてまろめて。上の木のあたふ所はひし／＼けり候。鞠付候やう右一卷に有。是又口傳たんざくなどすゆる事も有。是も同前。

一鞠庭に敷革敷事はいつものごとく。毛の方を上になして敷也。圓座同前也。弓方のごとくたるべし。

一鞠と云字はまつるともよむ。よろこぶともよむ。納ともよむ也。是は子細ある義也。大方は先口書の心得候。口傳よみの子細は。天をまつり地をまつり。皇帝のあそびし出され候に付てまつるとよむ。又しゆうといふ鬼をたいらげ。かしらを切て。鞠とかうしてけられ。天下をおさめられ候に付て。よろこぶともおさむるともよむなり。

#### 蹴鞠條々

一數とる事。五十までは心のうちにてとり。五

拾のとき。かずといかにもずの字をながく云べし。それよりは六十七十。其上あがり次第いか程もとるべし。百十の時百じうと申也。二百十のとき二百じうと申也。惣而いづも百のうへの十の時はじうと申べく候也。それよりは五百も千もあがり次第に能候。三百六十の時。數三百六十と申也。そくをばいはぬ也。數三百六十と云事は。三百六十と定りたる鞠の時也。さなければ三百五十よりいひつけて。三百六十。三百七十といふべし。大がい年頭には三百六十にておさまるべし。惣而御數といはざる事也。何時も御の字をいわずして。かずと斗いふべし。なんそくともいふまじき也。又鞠は八人にあまり候はゞ。數もまり衆のうちの人数取べし。八人までならば別人とるべし。

一鞠さほの事。一丈五尺ばかり也。枝をばいか

にもうつくしくおとし。うらほそき竹のさのみ大にも又さのみほそくもなく。能ほどの竹を用る也。末はふしの上四分計にきり。いかにもうつくしくかどをまろめて切也。もとはふしより下三分計をき。一もんじに切。いかにもかどをたて。かためをあらせて切也。ふし數は不定。つねにはもと末を紙一枚にてふたつにちりつゝみてよし。つゝみやう。足つゝむごとく。紙一枚をたてざまに二に折。それをよこざまに又二に折。そのまゝさきにきせ。ふしのきはを紙よりにてゆひ候。ふしはゆひめのうちになし。二重にゆひ候。一方はわな。一方は兩のさをそろへて切べし。わなは左になすべし。もとうら同前也。惣而不斷如斯つゝみてをくがよし。御本所など鞠庭にもたせられ候時までも。つゝませられ候由候。庭に出候時。とかせたる

がよし。もとうらの寸をみせまじさがためか。

一さをあつかふ事。惣別は役者さだまるといへども。いまはかはり。圓座にあらば。其衆によりつかまつり候事。能々先懸に鞠留候へば。さほをとり軒をうしろになさて持て。何時も座をまへになしあつかふべし。左候間左の手さきに成時も有べく候。又右の手さきになる時も有べし。立ながらいかにも静におとし候べく候。鞠とゞまり候枝を。鞠にはそともいろはで枝をおす也。それにてもちらずば。つきもおとし候べく候。又庭の内にてはなをさぬ事也。自然人のかほなどにあたる事もあり。庭の外へ出るく。何となくなをしたるがよく候也。右にしるすごとく。役者は鞠衆内たるべし。又見物の人もする也。鞠衆八人のうへ有之。着座の人あら

ば其人の役たるべし。不然ば鞠衆のうちたるべし。着座の人もそこもの時宜あしくば無用也。蹴衆の近邊にあらば。け衆の内からおとすべし。懸にとまりたらば。立ながらおとして。其後さほのさを地につけて。こしをそとすへ候てかへるべし。懸よりも其便宜次第におとすべし。又えんなどにとまりたるは。はじめからひさきつきたるがよし。此時はさほさを地に付ずとも也。

一さは置候はんずる所の事。何時も軒の方に貴人口左の時さをなして置也。又さやうにもをかれぬ所は。みはからひて置べし。

一かきとりとて。さほ取のごとく。竹のさきにちいさきかまをつけて。鞠のかゝりたる枝をそとさりおとす也。但かきとりは今用ざる也。以前難波流などには。さほとりて。一人着座して有つるよし也。



一 鞠を一足二足とはいはぬ也。一ツ一ツと云〔二貳〕が能候也。又ふみは一顆二顆と書べし。三顆まではよし。四になれば四つと書べし。去ながらことばには顆とも又そくともいひたるは耳にたちてわろし。何となく一ツ二ツといふべし。

一枝の事。春夏秋冬にかはる事。春櫻。夏柳。秋楓。冬松にて候へども。いつも松よく候。其ゆへは何もかはらぬものにて候間よし。彼枝のこしらへやう。先上に枝を四ツ置也。しんとともに五ツ也。又下に大枝一ツ有べし。以上枝五ツ也。彼下の枝よりしも一尺五寸也。又一尺二寸にもよし。又下の枝のとをりをそぐ也。枝の下一尺五寸の時。そぎぐち一寸五分也。又一尺二寸の時は一寸貳ぶ也。上のは一所より四ツさし出候がよく候。枝の體別の一巻にこまかにしるす也。

一 鞠を枝に付る事。紙よりをいかにもうつくしく。上にのりをひきたるが能候。付るやうは。下の枝と上の枝とのあはひに。鞠をおしはさみ。とり革に紙よりをとをし。四つの枝のうちに引とをして。しんにかけてうらにてとむる也。とめやうはたぐひとへにかたわなによし。わなのかたを松の梢になし。くちの方をもとになす也。

一 とく日の時節。とかぬ日の時節と云事あり。鞠を枝に付てをく時。その日鞠有べき時は。紙よりのかたへ地をながくしておく也。又其日有まじき時は。紙よりのくちをそろへておく也。よそにて見るべき時も此心得にて。其日の鞠の有なしをしるべし。可秘く。又紙よりながき方はとく方也。とく方は五分ばかりながくすべし。

一 こしはさみは大方略儀也。鞠を〔せ敷〕そんなじが

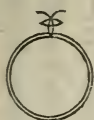
ため也。かけてをくも。かみよりをほそくこゆびほどにして。されぬやうになるを水ひきにして。上をふくさにしかとよりてながくして。まんなかを取。二人にしてつばを取革をとをし引しめて。又あはひをくぎ一むすびくして。其上を兩方つばに成やうに。たとへばいつもあびをむすぶがごとくして。さてかけておくがよく候。又人の方へつかはし候時も。其まゝくるしからざる也。あまたかけても置也。又其中に其けるべき鞠は。紙よりの一方のさを長くすべし。枝のごとし。ゆひやうはこしがわのさわを二重まはして。取革のもとにてしるしつけにする也。かみよりを一重とりかはにはとをす也。中にもあれ。さにてもあれ。たゞ一重とをす也。

一鞠を人のかたへ遣候時は。木に付遣事も有

べし。竹に付るとも云。是は尤秘する事也。又時として雑木にも付べし。木のこしらへやう。何も枝に同前。又四さにかはる事も有。春夏秋冬四本懸の木のごとし。去ながら是も何時も松よく候。又花の時は櫻などもよし。付やう。いつものごとく紙よりふくさなればさるゝ事有。間中を水引にして。うへにふくさなるがよし。是は故實也。又木に鞠を二ツもつくる事あり。其時はあなたこなたへうちちがへて付候べし。付るやうはまへに同じ體也。又自然下の枝にしたふづをつくる事も有べし。其時は一足を取合。一方つばに成やうにして。一むすび結びて。一の下の枝にうけかくる也。若おつる事あらば。一まきもまきつくる也。能々可心得也。又枝にしたふづは楚忽には付べからず。竹に鞠を付る事は。本の木の枝を秘する事。竹はえ

だの體廿本の枝のごとく。式々になくともくるしからず。下のもたする枝計はをきてもよし。付るやうは木に同前也。また雜木に付候はゞ。かゝりに植る木たるべし。又鞠木に付てよそへ遣候は。いかにも賞翫の方などに有べき也。又したふづを枝に付る事は。公家などの義たるべし。

一御前の鞠は必三顆一枝につけられ候といふ儀也。それも右に申ごとく。あなたこなたへ打ちがへく付るなるべし。一の下の枝に付候は。上の衆のあそばされ候べく候。二三ツかなるに。かならずふすべ鞠一ツ有べし。其内にてもとかぬ日とく日のさた有べし。能々可有分別也。



これまに申鞠をわけて  
をくかまの有り也

一下着用の事。さむく候へばきる物を。一ツのうへを白かたびらにてつゝみて能候。何時も下着は白かたびらよく候。冬は必小袖を白かたびらにてつゝむべき也。何時も白かたびら也。

一枝に鞠を付候て人に渡す事。早晚庭にいだし候時のごとく。もち出渡し候時。木末をなをして可渡候。請取人其まゝ請取也。わたし候人枝を取なをさずば。請取からとりなをすべし。

一柳筥に鞠すゆる事も。かみよりにてあしのかたをさきになして。とり革をとをし。是もかたわなに。わなのかたをさきになすべし。くちの方はまへたるべし。柳筥の寸法はひろさはそのおきものもかはるべし。長さ一尺二三寸ばかり也。柳箱にすゆる事は。人に遣候時の儀也。けられ候時の義にあらず候。

枝につき候ごとく。取革ばかりをとをす也。

柳筥の木ふとくば一ツにつけべし。ほそくば二ツに付べし。枝に付るごとく付べし。紙よりのさはそろへて切べし。渡しやうはわなの方をさきになして持て。其まゝ渡すべし。請取人請取て取直すべし。又渡す人取直しても渡すべし。柳筥まりすゆるは四角なるがごとし。

一圓座の寸法。大方一尺七寸ばかりによし。さぬき圓座本たるべし。

一あたらしき鞠を。文などには新鞠と如此かく也。よみはしんきとよむ也。

### 鞠之一書

一足かためはさゆつけと大方可心得也。去ながら又定るべからず。足かためとは。鞠有べきまへに物をまいり候事也。常の體也。別にことなる義なし。鞠庭にはなし。内にての事

也。

一鞠座にて御酒すゝめられ候事。是は子細ある事也。鞠はて候て。各圓座に被付候て。さかなはわりごなどよし。又おり候やうにも仕候。もり物は色々の菓子等を用る也。中にももちいなどよく候よし申候。わりごの鞠と申時。圓座にてわりごをめんくすへ候。又其時のわりごは扇なりに能候。又いつも何となく仕候へば。折を二ツこしらへ。左右の上座になをし置也。それは彼貴人堪能の人兩人計きこしめして。其まゝをかるゝ事もあり。又各はさみ候てまいらせられ候ても能候。それは其時の依體はからふべし。さて其後てうし持出る也。人數おほくて圓座兩方なる時は。兩人めしつかはれ候べし。くはへの衆も兩人たるべし。貴人など御座候ときは。くさやうに盃をすへて。貴人の御前



にまゐりて。同座に目禮までにて。御酒きこしめし候て。其盃をてうしの口に御すへ候て。くきやうをそばへ直しをかるゝ也。それよりはいづれも給ひ候て。から銚子の口にすへらるべし。貴人御座なき時は。最前より盃は銚子の口にすへ出すべし。しやく取は

兩人たるべく候。如斯酒すゝめられ候事は。勝負の鞠年頭七夕などの義也。惣じて作法の鞠の時たるべし。肴を兩方の上座に置候は。折にてもくきやうにても。いづれも可然。惣て御酒をたべ。しやくなどし。肴を持て出てはさむ事も常のごとく也。鞠はて候て。御酒はまいり候間。いづれも刀をさし候。扇は手にもちて酒のみ候とき。何となく下に可置。給仕候人も刀さし候。酒は只一ぺんにて候。くわへ候はず候。ほしき人は我々のこのみ也。一献ときり候はゞ。しやくは其ま

ゝ立べし。又肴をはさみ人にまいらせ候ても。そのまゝ持て可立。

一庭にて御酒給候事。只目禮までにて。二ツも三ツもほしきほどたべ候べく候。さてやがて銚子の口に土器を置也。又貴人の盃は圓座より下て給るべし。

一めしつかはれ候事。もろひざをつきて。銚子に酒をつはとつぎ候て。いかほども有次第につぎ候べし。細々はくわへぬ事也。銚子になくばやがてくわゆべし。其まゝ一ぺんたるべし。わりごは色々に奔走すべき事也。酌は必もろひざをつくべし。

一椿もちいは黄にそめてもよし。又いつものもちいを椿の葉に付てもする也。折などにつみてもよし。

一枝鞠を庭に出し□□□先各圓座には着て。枝鞠を鞠衆を外の人中門の口まで持てよる

也。さて其衆中より役者定而。彼枝を請取。庭を前になして枝をもち。左の手さきに成時も有べし。それは庭の前になるやうに仕候間定るべからず。扱軒の右の方か左の方に置也。それは後の役者左圓座にあらば軒の右に置也。後の役者右の軒にあらば左の方の軒のそばへたてかけて置べし。歸るとき貴人の方を後にならぬやうに可歸。中門まで持ていづるやう。左の手にて鞠の付たる所をかゝへ。右にて枝のものとさきを手を下さまにむけて取。左の手をかたのとりにあるやうにさしのべ。右を乳の下あたりには有ほどにひつつけてもつ也。軒左右いづかたにをかれ候とも。左をさきになして持。我もとむくやうにして。左のひざをつきつかずにして畏候。鞠を軒の左にをかるべきにて候はゞ。其まゝわたすべし。右に

をかるべきならば。枝のもとを地につけて。右にて鞠の付たる所を取。左にてもとを取て渡すべし。さて其もとひろくばしざり。せばくば其まゝも有之。後の役者枝をわたさるべきまで堪忍すべし。又請取人は座より立てより。左の軒にも置候へ。右の軒にも置候へ。左のひざを必つくべし。左の方に鞠を置て。右の手をさきになし。鞠付たる所をかゝへ。左にて枝のものとそぎ口を。手を下さまにむけて取て。扱軒のものとて右のひざをつき。持たるまゝ枝をおくべし。座になをり候時。最前なをり候ごとく。圓座のものとて手をつき置候。右の方にをき候はゞ。左の手を鞠のつきたる所にやり。右にてそぎ口を手を下さまにむけて取べし。軒のもとにて。左のひざをつき。其まゝなをるべき也。右の軒に鞠を置べき時。中門まで持て出た

る人。枝を取なをさず候はゞ。請取てより取直すべし。取直すやう。もちて出たる人のとり直すごとくたるべし。請取て軒のもとに持てよるべし。手持も最前の人もち出たる様體たるべし。又鞠をときて庭中に置。役者左右いづ方よりにても可然請取て。軒のもとにをく。役者左右にいづ方よりといふ儀もなし。こなたよりもくるしからず。軒に置。左右の間と後の役者左右の間の事ばかり也。

一後の役者の事。貴人か堪能の人などの役也。先圓座より立て。彼枝のある所へ行枝を取。いつものごとく持て。軒の向の木本より枝の本を土につかせ。枝をうつむけに鞠の方を下になして。まりをとき。左にて木をとらへ。右にて紙よりをニツ三ツにをりて。ふところに入。扱枝を木に立かけて。鞠をいつも

のごとくかゝへて庭中におく也。さて歸りてひざを付枝をとり。左にて本をとり。右にてやがて右の脇の下へひきたはめ中門まで出る也。其後はじめ鞠中門まで持てより候入さしより彼枝を請取。やがてもろひざつき。兩の手にて請取。もと木さきになして。右の手にてひつさげて歸るべきなり。其後の役者は座に直るべし。其後各一人づゝ木につかるべし。枝の鞠軒の左右いづ方にもあれ。請取手なをしたる人のごとく。もちやうひざのつきやう有べし。左にあらば右の手をさきになし。左の手にてもとを取。右のひざをつきてとるべし。持て立たる時は。かいりうしろに成べし。軒の向の左の懸の本により。右のひざを付。枝のもとを地につけうつぶけて。左にて鞠の付たる所をとり。右にてときたる紙よりをふところに入。枝を

木に立かけ。鞠を庭中に置。かへりて枝を取。左さまに立なをり。中門にてわたす也。後時左の手は其まゝにて。右の脇へひきたはめたるをさし出して。兩の手ながら下さまにむけてわたす也。主人なれば立ながらわたし候。鞠右の方にあらば。左の手にてさきを取。右にて枝のもとを取。左のひざをつきて取べし。是も立たる時は懸はうしろに成べし。やがて軒の向の右のかゝりの中より。左のひざつき。枝のもとを地につけうつぶけて。左の手をはじめ取たるまゝにて。右にてとき。紙よりふところに入て。枝を木にたてかけ。鞠を庭中になをし。木のもとにより。左のひざをつき。枝の本を左にてとり。右の脇の下へ引たはめ。右さまに立なをり渡也。是も渡しやう。左ははじめのまゝにて。右の脇へ引たはめたるをさし出し。兩の

手ながく下さまにむけてとりて渡候。請取人はわたし候人の手二ツのあはひに。兩の手をうへさまにむけてとりかへるべし。もろひざを必つくべし。渡候人同輩にてももろひざたるべし。左さまにかへるべし。又鞠を軒の本になをし候時も。又ときて庭中におかんずる役者。軒のもとによりてとる時も。左右ともにかゝりの方さまに直りながら。主人貴人座に御座候はゞ。懸を後になすとも。貴人の方へ直るべし。庭中に鞠を置ては。左さまに直るべし。是も貴人御座候はゞ。其方へなをるべし。

一あたらしき鞠は。新鞠と文などには書べし。一くずばかま着次第の事。先左より足を入て右を入。先くゝりを右よりひざの下のおり目の方にていかにも留。さて左のかたを留。さてまへこしをあてむすび。又後腰をあ



て。まへこしをしかとほさみ。後腰もはさまず。兩方わなにしてはさまず。其まゝ置也。ぬぐ時は左よりぬぐべし。又武士の人まへこしうしろこしともにほさむ人も有。子細なし。

一沓をはき候時は右よりはき。ぬぐ時は左よりぬぐべし。緒はつぶゞしのもとにて。かたむすびにわなのかたをさきになし。一ツ口の方をあとの方になしてむすび。いかにもとけぬ様にしかと留候べし。是もぬぐ時は左よりぬぐべし。何もしたふづも如斯。たびはく事も沓はくごとくたるべく候。をゝとりこのふしのもとにて留て。兩方のさきをと。とりあはせ。さきさまにひねり。むすびめよりあとの方に。下より上さまにおしはさみ候。うへの方よりはゝさみ候。少見へてもくるしからず。下よりさきの見へざるや

うに能々はさむべし。左右同前也。又緒の長さハは兩方わなにして。其まゝ一方づゝひねり。さきのゆひめよりさきにはさむべし。あとのゆひめよりあとにはさむべし。あともさきも緒のさき少も見へぬやうにはさむべし。中はみえても不苦。是も下より上さまにはさむべし。又緒の長さいかほどゝいふことなし。幾重卷などゝいふことなし。とめやうまで也。又たびの革あひしらい。もんあかさかと黒きすぢ革たるべし。あいしらゝいは。白革に繪を書たるをいふ。さゝのはをもたかなどよし。ちもんがよし。又ひろ革にて沓のごとくぬい。たちあげをたちつけにして。自由にはよし。公男はつくり革本たるべし。たちあげをたちつけにしたるは。うすくあかうるしにぬりてよし。是には繪かきてはわろし。公男にはくまじき歟。かもくつに

似たるべし。

一沓のさんはたちあげともいふ。したふづとも申也。

### 蹴鞠條々

一わりごの鞠の事。わりごは扇なりにも。又おりにくさやうにも仕て。えん座の衆めんくはすへて。御酒まいらせらるゝ儀也。もり物は何にてもあれ能候。猶口傳あり。もり物は何にてもあれよし。精進たるべし。魚類は出まじく候歟。但俗衆ばかりならば出すべき歟。

一雪の朝に鞠をける事。余の木の雪をばゝかせて。松の雪をのこしてけるべし。又しぜん松などかるゝ事あり。其時は枯木の雪をば不用也。雪の朝にける鞠を。雪土の鞠。又雪の庭にけるなどいふ。

一扇鬨の鞠の事。せうぶなどの時も仕候。左右

の衆を定る時。鬨をかきあふぎにはさみとらする也。又くじは硯箱のふたなどにも入てとらするがよし。人數皆の扇を取あつめ。左右のくじを骨にはさみとらせ候。鬨の紙のひろさは高さ二寸ほど。よこへ一寸ほどたるべし。これをよこさまに二ツにをり。又二ツにおりてはさみ候。扇にはさみ候は。とらせ候ときは。おりたるをたゞ一ひねりひねるべし。くじばかりの時は。硯箱のふたなどに可入。扇鬨ならばそれに鬨あゝじたる入物たるべし。鞠衆各一座にあらば。扇にはさまずともとらすべし。別々の所にあらば扇にはさむべし。とりやうは我々の扇みしりてとるべき也。かやうにくじをとるは。鞠なき以前同にてのこと也。庭にてはあるまじき事也。

一勝負の鞠の事。先鞠なきまへに。座敷にて鞠

衆をば十六人定め。左八人右八人のくじを書てとらせ候。其圖を以て左右をわけ。扱圓座の左右にいつものごとく付べし。くじは左と云字八。右と云ふ字八也。又上鞠何度と定め。先左衆仕候。其數日記を右衆より付候。そとも地にをちばのぞくべし。左衆の鞠はて候は。右衆よりつかまつり候。又數も日記も左衆つけきて。上鞠はてゝ左右の日記合て。かちまけをさたすべし。日記の付やう口傳。

一勝負の鞠のけやうは。いかにも鞠たけひかへて。靜に可仕候。曲なども又ほりまりすくひ鞠などはつかまつらず候。よくく可心得。そとも土にをちたらん鞠つかまつらざる也。鞠たけをひさくける也。はじめより如斯たるべし。勝負の時にかぎり。序破急の沙汰なき也。又貴人の身などにあたりたるを

も始よりけべき也。鞠たけをひかゆるとは。ひさくけるを云也。

一三時の鞠の事。一日に三度ける鞠也。それは一日の遊山を專にす。先朝六ツ時より一時仕候。やがてはてゝ其間に御したてあり。又八時分より一時計仕候て。やがてはてゝ。又其間に種々の御肴もて御酒有べし。又御ゆづけなどもよし。其後はいつものごとく晩景にけらるべし。あしたにはいかにも早々出て。したくなどさのみきれいになくともけらるべし。くるしからず。八時分より次第くゝに晩景までは。いかにもくきれいにしたくすべし。いしやう度々にしかへ。びんなどもそゝけぬやうにたゞしうしてけらるべし。一日の遊事なれば。がいぶん色々の儀をもよふしてしかるべし。三時の鞠といふ(四時終)ももなる義なし。只遊山事也。勝負などによ

し。いかほども人数おほくてよし。三番四番にも御けてけべきが可然也。

一年始のまりは松の枝に付て。數三百六十可然候。必三百六十たるべし。三百六十の時けおとして。其まゝをくまで也。其後酒など有之。後けべきならば如常いかほどもけべし。人数あらばかはりてけべし。

一祈禱神前などの鞠はしやうさくの心得也。乍去しやうさくはさうなくつかまつらぬ事にて候か。先常には一日しやうじんにて。鞠を松の枝に付てけべし。又神前にいかさゆひしめを引。幣棚をかき幣を置。はらひをする也。けてのはらひをして庭にいづるは。先いつものごとく中門より一人づゝ出て。彼たなのもとにて幣をとり。左一度右一度はらひて。圓座にいつものごとくつく事。いかさは軒に鞠かさをゆひしめを引也。軒より

もかさを高くゆひあげ候。勝負にもける也。あげまりも七度十二度がよし。勝負の時は左右の數を合。後日日記一ツに何一日何十法樂と書候。一たてにける時も。幾度にいかほど勝負のごとく日記に付て法樂と書候。かやうにして寶殿にこむる也。寶殿に鞠をけあてぬやうにけ候べし。此外いろ／＼の儀有。又常に何となくけるときも。この心得候て可然候也。

一むことり嫁とりの鞠は。あげまりをてう／＼にして。いかにも□□祝てけるべし。又鞠を定る時は百二十か百八十かよかるべし。わたましなどにもあげ鞠は十二度がよし。祝てけるべきまでなり。別にことなる儀なし。あげ鞠幾度と定る時は十二度たるべし。數はいかほども定られ候はゞ。百二十か百八十かよかるべし。かやうにけて後けた



く候はゞ。いつものごとくたるべし。

一七夕の鞠の事。公家武家ともに七くさの遊物にて候。朝も晩景もよし。七度のあげ鞠にて。まりはてゝ後に。雲入のとて。冬木に付て。其中堪能の人立留。軒にむかひ。二丈ばかりにたゞ一足蹴候べく候。枝もかぢ葉などゝ申候へども。いつも松よく候。雲入の足と云は。星にたむくる觀念也。是を蹴べき人は。最前木に付候時。軒のむかひの懸二本のうち。又は其木こし四所の間に立べし。かの役者座の事。左右いづ方もくるしからず。左とも右とも不定。七度あげ鞠の後。おち次第にそのまゝ蹴衆木に付畏候。鞠ちかき人中にころばかし入て畏べし。後役者も畏て又立て只一足ける也。鞠を取てけるやう。いつものけあげのごとくたるべし。是まで也。又左右よりひとりづゝかけて木に付候はゞ。

雲入のあしの役者。つねに可立所へ可付。其次に付べき人左右どなたへも付べし。あげ鞠すべき所に彼役者立候はゞ。そばの人あげまりすべし。

一てうふくの鞠。昔はありしよし申。今はなきよし申。さりながらあるものゝなきものゝよし。

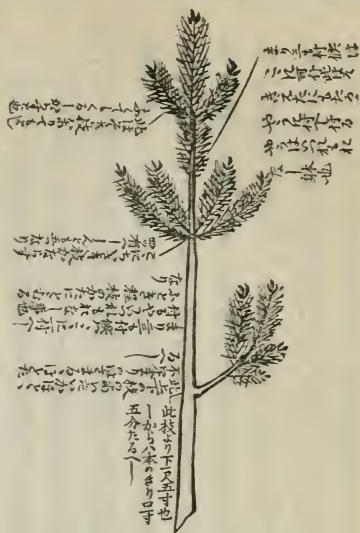
一しうたんの鞠の事。枝竹に付候こしらへやう。いつものえだ同前。鞠もくろ革しやうぞく也。すはう又葛ばかまつゆなどもくろ革なるべし。けやうも心もちをのづからうれへ心にて。まりもすこゝとけなして上鞠しかるべし。

一陣中のまりの事。先てき陣のかたへ。あみのごとくまくをはしらして。上鞠も一足もしざらず。むかふに蹴かけべく候。惣じてうしろへしざるあしきらふべし。鞠はてゝ後に。

てき陣のかたへ一足けおとして。そのまゝはたし候べし。又枝はそれも松がよし。又太刀などに付る事も有べし。

一 神前の鞠の時。幣棚のひろさ二尺。高さ三尺五寸也。長さ三尺なり。枝にてさしてよし。幣串の長さ二尺二寸。幣は二くだりによし。又上鞠さだめ候へばてうくによし。又數定て仕候へば。三百六十か百八十か五百六十か。いづれもよし。是もうしろあし一足もひかぬなり。いかにもくすなをにける也。一 太刀に鞠付る事。是又陣中の儀也。人に鞠をまいらせるゝ時の事也。付るやう。はなしもと太刀のひらにさし。花のかたを太刀のさきになし。紙よりにて鞠を太刀のむねのかたへ付。はの方にてとゞめ。是もかたむすびに。わなの方を太刀のつかの方になし。足のまゝとゞくやうによる也。付る所は足の中

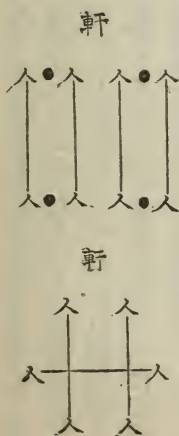
ほどよりそとのつかの方によせて付る也。鞠は必ふすべ鞠たるべし。請取わなはいつも太刀同前たるべし。猶口傳可秘く。花は草花たるべし。おもてのひらに付候。おびとりむすびたるうちを花とをし候。おびとりは鞠よりおもての方になすべし。鞠付やうは。取革のちがひめを紙よりとをして。むねの方にまりを付。はのかたに留候。枝に付るごとく也。おびとりのむすびめよりつかの方に付べし。花も太刀に鞠付る。紙よりにてゆひそへ候。



一かたあなは五七九にぬいたるがよき也。一方はさしかはの方よりさきさまにぬひ。一方はさきよりこしかわのかたへぬいたるがよし。ぬいはじめはさきをむすびて。内より

とをして。次第／＼に内より外さまへとをす也。とむる所は。ぬいたるかは一ツにひとへかけて。内に出し入べし。上手はかたあな一にてもつくり候。本儀は二ツなり。かたあなぬい候かはも取革も白革に紋あるがよし。べになどにていろ取てよし。白鞠もふすべ鞠も同前也。

一とりかはのながさ二ツふせ。扱一文字なり。入ちがへたるさきはしかと付るなり。とりかは付る所は。こしかわのおりかへしめたるべし。乍去かたあな二ツの中程たるべし。一鞠のまへうしろと云事なし。



一勝負之鞠數

一番 勝 かつと云字は後に左右の日記を合て書也。

一番二番と書所に左右とも書也。

左衆の日記は右衆より付候。右之日記は左衆より付る也。

なんどの上鞠も定一度ツ、の分如斯いか程と書也。五度七度十度常にはよし。

以上いか程とこゝに書。

硯紙常のごとく文臺取合可出。もちて出る人は鞠衆の外也。付手は如鞠衆也。着座候て刀などをかけ候へば。やがて出る也。付手下のさたなし。其中可然人體たるべし。貴人などにては有まじき也。此外人數おほくて。四度にもあれば四たるべし。それは一番二番三番四番と分候べし。一ばん二ばんは合畢。三ばん四番は合畢。かみ一重折て可書。

此一冊加一見。存分少々注なり。

享祿四年六月日

左金吾判

宸公蘭若主行譽(花押)



續群書類從卷第五百四十一

總檢校保己一集

男源忠寶校

鷹部一

鷹經辨疑論上

夫鷹ハ瑤光星ノ精氣ナリ。サレバ衆鳥ニ異ナリ五常ヲ備タリ。タトヘバ春鳩トナルハ是仁ナリ。秋鸞ヲ行ハ義也。食スルニ先ヲワスルヌハ敬ナリ。誅スルニ強ヲサラザルハ勇也。遠ク物ヲミルコトハ智也。蓋聞。鷹ヲ放シハジメシコトハ。天竺江南國ノ王雪山ノ麓ニテ放始タルナリ。十一月三日申ノ時ニ。大善道ト云野ニ出給ケルニ。白文ナル鷹ノ羽疾ヲ得タリ。其相形云。眼ハ明星ノ如ク。頭ハセイ／＼トノ秋月ニ似

タリ。背ハタン／＼トシテ鷲ノ山ヲイタバイタルニ異ナラズ。肩ハハン／＼トノ海中ニ二石サシ出タルガ如シ。足ハ側ヨリ見ルニ吳竹ノ節ヲ並タルガ如シ。背ハ難山ノ流タルニ似タリ。是鷹ノ王也。長瑞ト云モノ紅梅ノ輔紅ノ卷上ノ糸ニテ鈴着テ田ニ出タル也。又摩訶陀國ニテ盛戒大聖世尊。衆生ノ心散亂不同ナレバ。好ニ應ン當サニ得サシメンガ爲ナリ。此道ヲ學バン人ハ。造次ニモ諸行ハ無常ナリ。是生滅法。煩惱菩提。生死即涅槃也ト觀ズレバ。標月ノ指邪正一如ナル時節アリ。叢薛タル峯ニ

至テ。鷹ヲ臂ニシテ風度起鳥ニ抛時。南泉猫ヲ斬モコヽニアラズヤ。又諷方大明神ハ業盡有情。雖放不生。故宿人中。同燈佛果ノコハリヲ以テ鷹ヲ翫玉フ。仲尼謂事アリ。釣スレモ網セズ。ヨクスレモ宿鳥ヲ射ズ。又湯王ハ三方ノ網ヲヒラキシゾカシ。如此ノ理ヲシルヲ此道ノ上智ト云。サレバ和漢鷹ノ術ヲ學ブ人多シト云。後周ノ魏收宿其名ヲ得タリ。吾朝ヘハ神代ニモ一度ワタル。人皇十二代景行天皇ノ御宇ニモワタル。シカレモ術ヲシラズノ鳥ヲトラズ。爰ニ十七代仁德天皇ノ御宇。始テ鷹術ヲ傳シヨリ以來。代々聖主是ヲ賞シ給ヒテ。禁野片野ノ御狩。宇多芹川ノ逍遙タユルコナシ。然ルヲ今鷹政廢リ其術ヲ亡シテ。異端ノ說繁多也。是ヲ以或問ヲタテ得失ヲ記シ。掌飼ノ奥旨ヲ述テ鷹經辨疑論ト號ス。

世云。仁德天皇十六年ニ摩訶陀國ヨリ越前

國敦賀ノ津ニ着。其名ヲ駿王鳥ト號ス。鳥飼勾陣又名采毛ト云。姿ハ僧ノ如ノ。大霰ノ紋付タル赤キモノヲ着テ。下ニモ黒キサシヌキヲ着タリ。帽子ヲス時ニ。公卿僉議アリテ其人ヲ選ミ。藏人政賴勅ヲ奉テ彼津ヘ行向トアルモノハ不ニ相應歟。

或問。鷹ハ良相ヲ先トセンヤ。其術ヲ先トセンヤ。

答云。良相ヲ先トスベキ說モアリ。又其術ヲ先トセヨト云義モアリ。故ニ鷹經ニ仲尼ノ語ヲ取テ云。以言信行失之宰予。以貌度性失之子羽。見タリ。タトヘバカタチヨキ物ノ其心アシキモノアリ。カタチアシクシテ其心ヨキモノアリ。シカレモ識量ノ及ベキニアラズ。其掌飼熟手心術ヲ試テ好惡ヲカルベキ歟

又問。鷹ヲ相スル法イカバアルベキヤ。

答云。先タカハ其體大キナルヲ良トスベキヤ。經云。體ハ魁岩ナルヲ得ント欲セヨト云リ。大ナルトキハ威勢ヲ以テ鳥ヲシノギ。小時ハ鳥鷹ヲシノグナリ。然バ魁岩トシテ岩ノ大ナルヲミルガ如クナリ。

或問。前ニテミレバ胸腹アリテ羽翼ナシ。ソレ<sup>魁</sup>ルコト軒ノ如シト云。如何アルベキゾヤ。

答云。此文ハ鷹經ノ言也。胸ヒロクメムナソリタルヲ本トス。胸ヒロケレバ前ヨリ後ミエズ。軒ノ如シト云ハ。漢土ニ大夫ノ乗車ハ軒高シテ上ソリタリ。タトヘバエガケル鳳凰ノ胸ノ如クナルベシ。羽毛ハウスク骨太カルベキナリ。

或問。鷹翥上ニ向タルヲ良ト云人アリ。又下向ヲホムル人モアリ。如何ヲキマフベキヤ。

答云。經ノ文ノ如ク輔ヨリ上時鷹翥上ニ向フヲ佳トストミヘタリ。下ニ向トキハ肩サ

キヲ以タカノ首スリテ拙トス。嫌タルナリ。經ノ說ニヨルベキ歟。

或問。軒羽ウツト云コトハ如何アルベキゾヤ。答云。軒羽ウツト云ハ。鷹翥アガルヲ云ナリ。人手ヨリ飛退ントスルコトナリ。三條院ノ御鷹飼忠兼北山ノ邊ニ妻ヲ思ヒ懇ニカタラヒケルガ。思ヒスサメテ後。彼女ノ許ニ餌袋ヲ忘ケルヲトリニヤリケレバ彼女云。

軒羽ウツマシロノタカノ餌。ブクロニヲキエモサ、デカヘシツルカナト詠メ返シケレドモ終ニ行ザリケル。此哥ノコ、ロモ。思ヒノク鷹ト知タラバ。ヲキ餌ヲモチテナツケン物ヲトナリ。眉白ノ鷹ト云ハ。惣ジテウツクシキコトニ云付タリ。忠兼ヲ鷹ニナヅラヘタル哥ナリ。其時ヨリ置餌サ、ズ餌袋ヲ思妻ト名付テフカク忌コト也。軒翥ト書テ軒羽ウツトヨムナリ。又アガリ羽フルトモ

ヨムナリ。文選ニ子虛ガ賦ニモ軒ノ字ヲア  
ガルトヨムコト常ノコトナリ。鷹經ニモ軒  
翥ト書タリ。又云。西園寺相國ノ御哥ニ。餌  
袋ニカレカハキタル古置餌サシテ用ナキ身  
ヲゾ捨エヌトアリ。此心ヲモ置餌モサ、ヌ  
餌袋ヲ忌コトナレバ。古ル置餌ナレドモ捨  
ズシテサシ置クトナリ。又云。キノフマデ野  
心アリシツミ<sup>ハシイ</sup>タカノイツシカケフハ軒羽ウ  
ツナリトアリ。是ハ掌飼ノ家ニ狩場ヨリカ  
ヘルトキ。呼カケテカヘルニ。家ノ軒ヲ入ト  
テ。軒ヲスリテカケルヲ云。人ニナレタルタ  
カナリ。又云。異說ニ野際ウツトモ意得タ  
リ。

或問。鷹ヲ毎ニ飽<sup>ノ</sup>ヨキ歟。飢<sup>ノ</sup>ヨシトスヤ。  
答云。毎ニ上肉ヲバ其中ヲハカルベキナリ。  
白氏文集ニ樂天云。鷹ノ性ヲ制スルコト飢  
飽ノトキニアリ。飢スルトキハ力タラズ。飽

タルトキハ人ヲソムクト云。又云。魏文帝曹  
太祖謂陳登曰。吾呂南布ヲ畜フ事鷹ヲカフ  
ガ如シ。飢スル則用ナシ。飽スル則揚去トア  
リ。長飢長飽コトヲ嫌ナリ。又文選云。飢タ  
ル鷹ハ吻<sup>キ</sup>濡。寒タル鷗ハ雛ヲ赫トアリ。

或問。良相ヲ委別ルハ如何ヤウナルゾヤ。

答云。鷹經ノ如バ三段ノ鷹トテ。頭アヲノキ  
體ウツブキ腰タレタリト云トモ弱カラズ。  
此外ノ相形ハ他ノ良相ニ同ジ。蔓菁ナリノ  
鷹トハ上下毛羽トモニ短ク。剪ツメタルガ  
如クナルハ。鳥チカク起バ則トリ。遠ク逐フ  
コトカナハズト云。鳬居ノ鷹ト云ハ。髀ト脰  
ト、モニ短ク。肘ノ骨カバマリ。腰ツヨシ。  
古人是ヲ良トス。今ハ不可ナリ。但其人ノ好  
ニヨルベシ。凡良鷹ト云ハ。カシラ大ニシテ。  
頂平ニ中高ク。口ト頷トモニ大ナルハ良ナ  
リ。眼ハ觜ヲハナレテ後ニ近。是ヲ鶩顏ト云



也。眼ノ光清ク利ク。明星ノ如ク閑ニシテ動ジ。物ヲ見テ向ガ如シ。鼻ノ後眼ノ前溝ノカク畝タカク軒廣シ。カヤウナルハ大物ヲ捉テ壽ノ相ト云也。幽明錄ニ云。楚王ノ鷹ハ頭ヲ軒眼ヲ澄テ遠ク雲際ノ鵬ノ雛ヲ下スト云リ。是ハ眼ノ光ノタビシキヲ云ガ爲也。鵬トハ金翅鳥ノコト、モ云。又金翅鳥ニ似タル鳥ナリト云説モアリ。威勢ノ大ナルコトヲ比シテ云リ。鼻ハ穴大ナルヲ良トス。鼻ハ息ノ出ル處ナレバ。トヲク飛トキハ。息ナガキニヨリテ良トス。愁毛ハ立ザルベシ。鳴聲ハ響タカキヲ良トス。觜ハ本體末細ク黒シテ潤ヲ良トス。上觜ハ鸚鵡ノ觜ノ如ク。上ハ狹ク下大ナルモノ、。下觜直ニシテ廣ク開テ見ルニ善ト云リ。頸ハ禮シテ長サ短サハ其タカノ體ニ相カナヒ。上頸ハタカフシテ鳥ノ卵ノ如クシ。又頸長スギタルハ樹ノシゲ

リタル中ヲ通飛コトヲ得ズ。短ハ又眞ノタカニアラズトソシレリ。肩ハ剛厚ク。二ノ翼節ハ薄クタレタルヲ佳トス。骨ハ大ニ長カルベシ。筋モ同ジ。ハラハ竈トテ器ノ中ノ如クウツケタルヲ良トス。腹大ナルハ壽ノ相ト云リ。腹大ニ骨筋短キハ飢易ク勞易ケレバトモニ短命ナリ。背ハ溝アルヲ良トス。翼羽長シテ直ニ。鳩ノ羽ノ側タルガ如ク。尾ノ上ニ置タルヲ良トス。腋羽覆羽重錢羽ハ皆薄クシテ覆ヘルコトツ、メ着タルガ如シ。羽葉ハ厚剛カルベシ。羽幹ハ甲ノ如ク又方ニシテ。羽次キビシキヲ良トス。凌風ノ羽ハ正ク翼ニ付ルガ如クナルベシ。尾ハ本末正ニ禮カルベシ。承尾ハ柔ニシテ細ク白綿ノ如ク。尾魁太カルベシ。尾ハ班文箭像町像ナルヲバ古人是レヲ吉凶ニ關スト云リ。箭像尾ヲ凶トアレドモ。今按ズレバ吉也。譬ノ穴

大ナルヲ良トス。矢ヲツグトキ。漸ク尾ヲ舉  
テナルヒ動テ頭ヲ低遠ク放也。是聲ノ穴ノ  
ヒロキ故也。股ハナガクシテ外隆シニオコ  
リ甲ノ如ク。手ヲ以テサグリミレバ。肉ハス  
クナクスジ多ク肉タヒラカナルベシ。蔞藜  
ノホネハ背大ニ。肘ノ毛ハ後ニナビクベシ。  
脛ハ襪クミジカク。傍ヨリミレバヒロク。前  
ヨリミレバ細ガ如ク。肌皮鱗次イロコノ如  
クナルベシ。足ハ孫楚ガ鷹賦云。足ハ雙枯ノ  
如シト云テ。枯木ヲ二ツ並ベタルガ如シ。踝  
節大跌平ニシテ。若肉オホクシテ色ノ地黃  
ノ如クナルハ腫ヤスシ。指ハ節ヲ放テ大ニ  
間開テ十字ノ如クナルベシ。大指ハ前ニシ  
テウチ、ガヘヨ。爪ハ本フトク末細ク。上高  
ク下平ナルベシ。

右良相ハ鷹經ノ說ナリ。今按。此文ニ違ズバ  
最是ヲ良トス。但カシラ眼鷹經ニタガハズ

バ。餘ノ相形ヲバ云ベカラズトナリ。  
或問。惡鷹ハイカヤウナルゾヤ。

答云。惡鷹ハ醜鷹ト云ナリ。其形ハ頭ハ少シ  
テトガリ。眼小ニシテ露ノゴトク。(四字イ无)眼ノ後ハ  
溝穴ニシテ頂ニ近ク。鼻ノ穴窄シテ鳴聲美  
ナラズ。觜ハ小シテ仰ギ。頂細シテ撓。或ハ  
曲鉤ノゴトク。一ノ翼節骨ハ小ク。翼羽ハ短  
ク曲レリ。翼曲タルヲバ鈍羽ト云テアシキ  
也。腋羽覆羽ハ亂オコリ出テ。腰細ク尾ハ本  
細シテ末ヒロク。脾ハ短ク脛ナガク。兩ノ肘  
ウスク。兩ノ脚ハナレカマレルハ醜鷹ナ  
ルベシ。

或問。巢鷹羅鷹ヲ分別スルコトハ如何。

答云。巢鷹ハ鳥ヲ捉テ毛ヲ立人ヲフセギ。羽  
ヲ以テトリヲカクシ。人ノ手ヲトリ鳥シタ  
ルシ恒ニ鳴聲シゲシ。毛羽ニウルヲヒナシ。  
眼色足ノ鱗次ノ色カハレリ。羅鷹ハ毛羽ウ

ルヲシク。サレタルガ如クニシテ鳴聲少シ。  
 經ニハマレナリトイヘドモ。今按ズレバ。羅  
 鷹モ手馴。又ハ巢鷹ニ繫並タレバ。聞ナラヒ  
 テ鳴コトアリ。又年ヲ經テモ毛羽ノ班文變  
 ゼズ。少鷹ノ如シ。又眼色脚鱗次古クナラ  
 ズ。

或問。巢鷹放ヨキヤ。羅鷹放ヨキヤ。

答云。巢鷹ノ性不同也。天性羅鷹ナレドモ快  
 モアリ。巢鷹ナレドモ惡モアリ。今按。掌飼  
 ノ上手ナルニヨルベシ。羅鷹ハ病付クコト  
 シゲシ。飛アガリ面白キ羽ハ羅鷹ナルベシ。

〔原本此處ニ次ノ三挿圖アリ〕

或問。昔天子ノ御狩ハ其列次第アリヤ。

答云。仁德天皇百舌鳥野ノ行幸ヨリ以來。代  
 々宇多芹川所々行幸。其行列左ニ記ス。

### 行幸次第

狩子ヲ先ニ立。犬飼ヲ次ニス。



犬飼。右ニ犬ヲ牽。左ニ白木杖。  
鷹飼。鵠ヲ居。近衛次將列。

狩子。  
鷹飼。鵠ヲ居。近衛次將列。

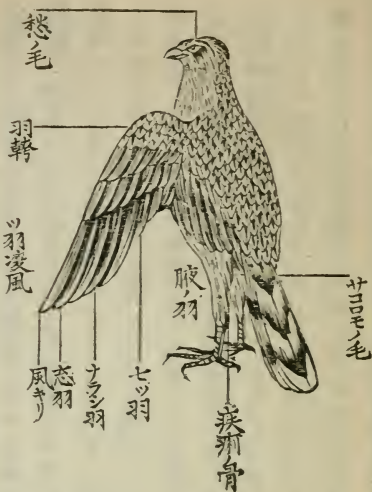
犬飼。道ニテ鷹ヲ居。  
鷹飼。鵠ヲ居。近衛次將列。

殿上人童部餅袋ヲ付。馬ノ跡輿殿上人。  
鷹飼。鵠ヲ居。近衛次將列。

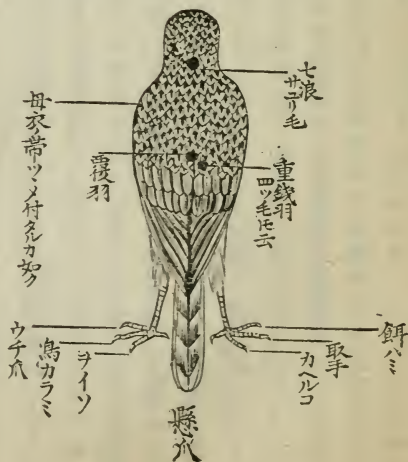
狩子。  
鷹飼。鵠ヲ居。近衛次將列。

犬飼。右ニ犬ヲ牽。左ニ白木杖。  
鷹飼。鵠ヲ居。近衛次將列。

御輿ノ後ヘニ中一行ハ公卿殿上人供奉也。



童部ノ裝束ハ狩衣大口ニ餌袋ヲ着也。隨身ハ錦ノ帽子ヲ折烏帽子ノ上ニ着也。水干ニ下濃ノ袴。烏頸ノ太刀ヲ帶シ。猪ノ皮ノ尻鞘ヲ入。赤漆ノ餌袋ヲ着ル。何レノ色モクルシカラズ。韃ハ青色也。條ハス芳綖也。殿上人ハ冠纓ヲ卷テ。青キ狩衣ニ腰アテヲ帶ルナリ。





石ノ野太刀ヲ帶シ豹ノ皮ノ尻鞆ヲ入。トラノ皮ヲモ用。赤ヌリノ餌袋ヲ着。條ハスハウ綵。鞆ハ青色也。山へ入ルトキハ左ノ鷹飼先ニノボル也。

右ノ鷹飼モ狩ニイリテ後ハ左ニ鷹擎ベキ也。源氏云。ミコタチカンタチメナドモ鷹ニカ

カヅラヒタマヘリ。珍シキ狩ノ御ヨソヲヒ

ドモヲマウケタリト。李部王ノ記云。鷹飼親王公卿地摺ノ布衣及袴ヲ着シ。或紫木蘭地色綾ノハカマヲ用。

小襖子ニ餌袋ヲ着トナリ。今按。是ハ王卿ノ鷹飼ノ裝束ナリ。布カリギヌノ摺ノ文アル

ヲ着ズ。ハカマモ用之。或ムラサキ木ラン地ノキヌノサシヌキヲモ着ハヨシトミヘタ

リ。襖子ハ下ニ重タル衣ノコトナリ。餌袋ヲ付ベシ。冠ハ纓ヲ卷也。又伊勢物語ニ云。昔

仁和御門芹川ニ行幸シ給ケルトキ。今ハサルコトニゲナク思ヒケレド。モトヅキタル

コトナケレバ。大鷹ノタカ、イニテサフラ

ハセ給ケル。鶴ヲ付タル摺狩衣ノ袂ニカキ付タル。

翁サビ人ナトガメソ狩衣今日バカリトゾ

田鶴モ鳴ナル。若カラヌ人ハ聞ヲイケルト

ナリ。行平ノ詠ナリ。又源氏云。ソヘノ鷹飼

ドモハ。マシテ世ニ目ナレヌ摺衣ヲ亂キツ

ハ。イト氣色異ト見ヘタリ。又昌泰元年十月

片野ノ行幸ニ。左ノ方ノ鵠飼赤白ノ橡ノ地

色ノ摺衣ヲ着ス。右ノ方ノ鵠飼青白ノ橡ノ

地色ノ摺衣ヲ着ストナリ。又西宮抄云。鷹飼。

地摺ノ狩衣。綺ノハカマ。玉帶。鵠飼ハ青白

ノ橡ノ袍。綺ノハカマ。玉帶。冠卷纓。下襲ヲ

着シ劔ハ尻鞆アリ。王卿ノ鷹飼野ニ入テ後

行騰ニ餌袋ヲ着ク。承保三年大井川ノ行幸

ニ。鵠飼兩人皆雲客也。卷纓色々ノ狩衣ニ。

ハカマハ錦。タカ、ヒ隨身四人錦帽子。狩衣

ハカマ餌袋ヲ着ク。各犬カヒ帽子ヲ着ス。今

按。諸衛ノ鷹飼ノ裝束先例イササカ不同也。又鷄飼ト鷹飼トノ狩衣不同。又云。昌泰記ノ赤白ノ橡ト云ハアカ色ノコトナリ。黃檯ト茜トニテ染タル狩衣也。青白ノ橡ト云ハ青色ノコト也。刈安ト紫トニテ染タル狩衣ナリ。ハカマハ綺ノサシヌキ。玉帶。卷纓ノ冠。劔ハシリサヤアリ。此外ニカラニシキノ攝腰鞆ハ承保ノ記ニ見エタリ。諸衛トハ六府ノスケ以下ナリ。源氏云。御サウゾクドモ皆直衣冠ノヨソヲイナドニ改給タルホドト、見タリ。

西宮鈔云。天皇白橡ノ御衣。注ニ延喜ノ御トキ。右近ノ馬場ニテ直衣改給フト見タリ。又云。昌泰元年片野行幸ニ赤白橡ノ唐綾ノ御衣ヲ着。御野ニ入テ後ハ狩衣ヲ着ル。今按。野ニ入セ給テ後。主上ノ御服ヲ御直衣ニ改ラレシ例モアリ。又狩衣ヲ召レシコトモア

リ。

或問。武家ノ狩裝束ハ如何ヤウナルゾヤ。

答云。武家ニヲヒテモ將軍家ノ御事ハ殿上人ニ准ズベシ。但トキノ位ニヨルベシ。其外地下ノ武士ナドハ其例慥ナラズ。隨身ニ准ズベシ。官位ニモヨルベキ歟。又無官武士ハ狩衣以下其例ナケレバ記スルニアタハズ。又犬カヒノ形ハ中卷犬ノ部ニ出タリ。又神家ニ云。鷹カヒノ裝束ハフシク、リノ水干ニ。大目結ノ赤根染ノ衣ニ。末濃ノハカマ帽子ヲ着ル。黑色。腰蓑ヲアテ、毛沓ヲハク。餌袋ニハ雉ヲサシ。下毛ヲミセヨ。

或問。請取禮イカバアルゾヤ。

答云。先鞆ヲフトコロニ入テ出テ。右ノヒザヲツキ。タカヲ擎タル人ニ向テ。羽色息アイヲ暫ク見定メテ後。身ヲヒラキ袋鞆ヲサス。口傳アリ。サテ開キ直テムカヘル人ノ右ノヒザノ

トヲリニ我身ヲ寄。右ノヒザヲ地ニツキ餌袋ヲ請取。身ヲヒラヒテ腰ニツケヨ。又下ニモ置。口傳アリ。次鞭ヲ請取テ腰ニサス。下ニモ置ク。次ニ右ノ手ニ條ノ末ノ人ノ手ヨリ餘リタルハシヲ取旋テ。左ノ手ニ條ヲ取テ足緒ノ際ヘセメヨセヨ。急ニ用足ヲフミコシテ吾拳ニヲクベシ。サテ本ノ如クヒラキテ條ヲカラミ訖テ。ムチヲ以テ掌前身寄ノ羽並ニ尾ヲナヲシテ禮ヲナシテ。口傳アリ。ヒダリヘ開テ立。又云。神家ニ云。餌袋鞭條何モ先ノ如シ。何モ貴賤ニ付テ上手下手。前ノ如クウケトリ訖テ。其マ、ムカヘル人ノ左ヘ通シテ。人ヲ吾右ノ側ニナシテ。條ヲ卷終テ鞭ヲ以テ前ノ如ク禮ヲナシテ。右ノ身ヲ開テ立ナリ。口傳アリ。

或問。渡ス禮如何アルゾヤ。

答云。先右ノヒザヲツキ。餌袋ノ緒ヲトキ出ス。口傳アリ。次鞭ヲ以テ羽ヲ前ノ如ク直テ。ム

チヲトリナヲシテ渡ス。貴賤ノ禮アリ。後ニ大緒ヲ解テ末ヲ指ニ纏。上下差別。サテタカノ方ヲ出スベシ。右ノ手ハ予ガ右ノヒザノクチニヒカヘヨ。渡シ畢テハ則遠クシリゾケ。但座敷ニヨルベシ。

或問。架ニツナグコト定レル様アリヤ。

答云。定ル様アリト云ハ。タカヲ居ル人先右ニ身ヲソバメテ。格ニ近キ右ノ手ニナガキ絆ノ兩ノ頭ヲトリテ。左右ノ手ハ格ニ及サズシテ三尺バカリ有テタカヲ放ヤレ。飛ニ隨テ拳ユルメヤリテ。旋子ヲ通行ノタカノ架ニ集ル比ニ。左ノ手ヲ以テ格ニ支ヘ。右ノ手ヲ以テナガキ絆ヲトキ。則右ノ手ヲ以テナガキ絆ノ片端ヲ格ノ上ヨリトリトヲシテ。兩ノ手ヲ以テ共ニ帳ノ前ニツナギ付ヨ。若タカ遙ヨリ格ニ望テトビ向ヘバ。再三牽トバコヲツテ後ニ放ヤルベシ。若飛向コト

ナクバ直ニ格ニイサシメヨト見ヘタリ。

或問。タカヲ格ヨリ下スヤウイカバアルゾヤ。  
答云。先トラント擬スル人ハ。身體ヲシヅカ  
ニシテ。右ニ身ヲソバメテ漸々ニス、ミ。肩  
ヲ格ニ近ヅケ。絆ヲトキテ右ノ中指ヲ以テ  
絆ノ片頭ヲ一纏ノ。左ノ手ヲ以テ脚絆ヲ引  
貫テ。脚ヘ逼テ右ノ手ト牀ニ攀。高クサ、ゲ  
テ格ヲ急ニサレ。若脚絆ヲ牽逼ザレバ鷹軒  
翫テ格觸テ惡シ。

右鷹經ノ語也。

或問。タカヲ放ツニ定ルヤウアリヤ。

答云。鷹經ノ如キハ其趣アリ。田ニ入テトリ  
ヲ捉ンナラバ。峯ニタカヲ放テ後ニ。靜ニ馬  
ヲトバメテタカヲ送リミテ。目シルシ訖テ  
ノチ。鞭ヲウツテ馳ヨ。未數歩ニイタラズ。  
轡ヲ案ジテ漸々ニ迫ヨ。タカノ草ヲ出テ起  
バスナハチ犬ヲ走ラシメテ嗅セヨ。若艸深

ノタカイマダ立ズバ。馬ヨリ下テ呼上テ後  
ニ犬ヲ縱ニヤレ。タカ早ク艸ヲ出テ木ニ集  
バ。即タカノ眼ノ向處ヲ明ニミテ犬ヲヤリ。  
嶮ヲ越エ鳥ヲ尋行バ。峯ニ立テ遙ニ聲ヲ揚  
テタカヲ呼ベシ。犬ヲ還呼ブニ。鷹或ハ呼ヲ  
待ズシテ犬ニ隨テ飛來ルハ堵此間以經者入「コトヲ用ヒ  
ザル者也。犬ト年ヲ經テ」調ヘ習ヘルガ致ス  
トコロ也。如此ノタカハ先林木ノ中ニ放テ  
後ニ。犬ヲ走シテ鳥ヲ聞シムト云リ。今按ル  
ニ。文ノ如クニシテヨシ。若鳥疲頓ニ犬ニ噬  
ルベクバ。犬ヲヒカヘテ疲タル鳥ヲ起テ延  
テ放ツベキ也。若早キトキハ犬ニアヤマタ  
ル也。

鷹經ノ語也。

或問。タカヲ水鳥ニ放ツハ如何アルベキゾヤ。

答云。經ニ云。水鳥ニ放タント思バ。岸畔ノ  
陰ヨリ身ヲ跼鎮テ近ク倚テ。忽然トノ聲ヲ



揚ゲテ鳥起バ。即放テ遠近ニ替アリ。鳥ヲ獲テハ背ノ肉ヲ啄シムトナリ。今按。如文最也。畔ノ陰ヨリ聲バカリヲ揚テ鳥ヲ起ル也。鳥人ノ聲ヲウカバヒテ人ノ上ヘ飛向ナリ。平場ノモノ何レモ其掌飼ノ心ヲ本トス。或問。鳥ヲ獲テハ何モ同ジ處ヲ與フベキヤ。

答云。如經。雞雉ヲ得テハ先鞭ヲ腰ニ挾テタカラ取り。清水ノ上ニ往テ安座シ。左ノ手ヲ伸ベ鳥ノクビヲバツバサノ中ニツミ加ヘ取テ。鳥ヲ側ヲイテ鷹ヲ上ニ集サシメテ。刀子ヲ以テ胸ノ肉ヲ擺テ水ヲ灑テ啄シムルナリ。今按。文ノ如ヨシ。但數ヲ得テ捉トナラバ。鳥ノ丸ヲ拔テ百口啄セヨ。吻ヲスラセ手振ヲサセテ。息ヲ能ツカセテ又放ベキ也。肥タルタカニハ翼裏ノ肉ヲ少ヅ、啄セテ行ベシ。血氣淺ノ肉トナラハ。(ス鷹)雌ヲ得テハ右ノ胸ヲ啄セヨ。雄ヲ得テハ左ノ胸ヲアタヘヨ。鵠

ヨリ已下ノ鷹ハ皆小鳥ノ腦ヲアタヘテ狩ニ行ベシ。又鴨ヲ得テハ翼裏ノ肉ヲアタヘテヨシ。鴨ハ脂濃シテ血氣多シテ肉トナルナリ。又丸ヲ飼事ヲクハセスルト云ナリ。西園寺相國ノ御歌ニ云。

起鳥ヲ艸トルタカニクハセシテ觜スラセツ、又ゾ狩行トアリ。丸ヲカクルトキモ。必水ヲソ、ギテアタヘヨ。又云。

結ブベキ谷水モナク凍井又雪(ツ鷹)ヲクダキテタカヤカハマシトアリ。冬ナリトモ水ヲヨク飼ベキニコソ。

或問。タカラ常ニ擎ベキコト如何ヤウナルゾヤ。

答云。羅鷹集鷹ノヤウハ前ニ委ク起シ了ヌ。惣ジテ採繫ベキヤウアリ。古人云。鷹ヲ擎ント思バ睡眠シテハ先手ヲ洗也。酒ニ酔フコトナカレ。朝擎ヲセントスルトキハ。闇屋ニ

入テ架ニ倚テ鷹ヲ驚セ。若タカイマダ寢タ  
ラバ。ゼンノニ靜ニ驚カシテ。先明白ナル  
處ヘ出サズシテ。屋ノ裏ノコモリタル處ニ  
聲居テ。聲ヲ少開テ。夜ヲ明ルヲ見テ後ニ野

ニ出ヨ。暗夜ヨリ俄ニ明白ナル處ニイヅレ  
バ。鷹ノ勢ヲ失シテ魂ヲ亡スル也。魂ヲ亡ス  
ルニ依テ鳥ヲ取コト鈍キナリ。又云。夜明白  
ヘ出テ後ニ暗處ヘ俄ニ聲入コトモ亦勢ヲ失  
スルナリ。架ニヨルコトモ。野鷹ヲ取心ヲ以  
テ聲ヨリテ。朝日ニ向テ已ト羽毛ヲソロヘ  
テ。手振シテ後ニ外架ニ繫グベシ。只拳ニテ  
日ヲ暮シ夜ヲ明スト。タカニ知セント思フ  
ベシ。常ニ架ニアルトキハ置餌ヲミスルコ  
トナカレ。又生トリヲ見スルコトナカレ。毎  
ニ呼テ甘餌ヲ少ヅ、拳ニテカヘ。古人云。手  
骨ヲ飼ト云リ。手ノ内ニ食物アリト知セテ。  
人ノ拳ヲミテハ鷹ノ來ルヤウニセヨトナ

リ。又云。架拳ト云モ。動かサズノ架ノ如ニ  
臂ヲ可持ナリ。又朽木ヨリ枝ノサシ出タル  
ヤウニ臂ヲ持ベキ也ト云リ。

或問。鷹ニ禁忌アリヤ。

答云。經ニハ十一ノ禁忌出タリ。一云。悲ノ  
本タル凶喪ノ家ナリトアリ。今按ニ。人ノ悲  
歎喪ノ人家ニ鷹ヲ聲テ行ベキニアラズ。古  
人獵ヲ止テ執聲コトナカレト云リ。二云。格  
帳ヲカケザルニ暫モ繫ガズトナリ。架格ニ  
觸テ傷ヲナス。三云。目病瘵血痢ノ鷹ト〔平  
以經書人  
鷹ト〕格ヲ同スベカラズ。鷹ト〕鵠ト同ジ架ニ  
ツナグコトモ亦禁ム。大小ヲ害スル心アラ  
ンガタメナリ。四云。喧塵燎煙燼徹戲諠ノ屋  
ヲ忌ム也。五云。鷹ヲ放トキ前ニアル物ヲ候  
ベシ。韃ヲ離テアタルニ依テ忌ナリ。六云。  
哺養ノ道ニ毛ヲ吐ヲ要トス。未ダ毛ヲ吐ザ  
ルニ早ク肉ヲアタフルハ。積漸ノ後終ニ腠

ヲヤブルナリ。七云。髻ヲ拭ニハタカノ進止ニ任セヨ。強ニ拭テアゲザレバ。髻ノ傍ノ毛脱テミニクキナリ。八云。タカヲ擎テ馬ヲ走スルコトナカレ。又驚懼スルコトナカレ。九云。穢タル器ヲ禁ズ。鹹臍物ヲ忌。十云。汗膩タルモノヲイム。哺養ノトキハ手ヲ能洗ベシ。十一云。酒ノ毒熱ヲ禁ズ。最淵酔ノ人タカヲ擎ルコトナカレ。今按。條々不愼有ベカラズ。古人云。欲心ノ鷹飼ト不數奇ノ人ヲ嫌ト云リ。鳥ヲ得テ食フニ。道ハ如何ヤウナリトモ。又タカハ後ニ害アリ。我物ナレバ人尤ベキニ非ズト云ホドノ人ナラバ。無益ノコトナルベシ。

或問。鳥ヲ得タルニ首ヲ左ニスルコトハ便アルヤ。

答云。子細アリ。禮記曲禮云。禽ヲ執者首ヲ左ニストアリ。是ヲ以首ヲ左ニスルナリ。

或問。タカニ水ヲ浴スルコトハ如何哉。

答云。毎ニ水ヲ浴スルヲ良トス。シカレ。鷹云。鷹ノ慾否ニマカセヨト云リ。水邊ニ擎ヨリテ見テ浴セントセバ浴セヨ。但タカノケガレタルトキハ。強ニ浴ヲ良ト見タリ。今按。鷹經ノ語最宜シ。但シ肥タルタカニハ冬ノ日モ浴スルコトヨキナリ。ヤセタカニハ寒日ニ浴スレバ餌ヲ持コシテ肉ヒクナリ。冬ノ日ニ鷹ヌルレバヨク／＼アタ／＼メヨ。

或問。タカニ水ヲ吹コト如何哉。

答云。水ヲ吹コト經ニハ不見。古人用之タリ。今按。是ヲ試ムルニ。肥タルタカノ肉タカキトキニ。先口ヲシゲク漱テ。タカノヨクヌル／＼ホド吹ベキナリ。ツカフトキハ湯ヲフクナリ。サテ外架ニツナギテ朝日ニムカヘヨ。油引ヲセバ野心モウセ肉モヨクナルナリ。又瘦鷹ニハ嫌フ。

或問。タカニ夜アラシヲカフヲ如何哉。

答云。古人モ萬病一藥トホメタリ。然バ常ニ夜嵐ヲカフベキナリ。今按。心アシキタカニハ飼コトナカレ。巢タカニハ心ヨキナリ。羽筋モツヨク觜爪モ潤澤ニシテ誠萬病一藥ノ證アリ。爰ニ古人云。羅鷹山回ナドノ心アシキニ夜アラシヲカヘバ。醉狂人ニ酒ヲス、ムガ如シト云リ。何ゾヨカラシヤ。

或問。常ニ擎ヲヨシトスルヤ。又架ニツナイデヨシトスルヤ。

答云。タカハ常ニ擎コトヲ良トス。古人云。愛ノ其惡ヲシリ。惡テ其善ヲ知ルト云リ。今按。タカヲ擎ルヲ良ト云ヘドモ用捨アリ。心フカキタカハ常ニ擎ベキナリ。常ニ味ヨキ口餌ヲカフベシ。人吾ヲ愛ノアハレムトシラセヨ。掌飼モ朝夕擎テコソ鷹ノ性ヲバ善トモ惡トモ可知コトナレ。コトニ鵲已下ハ

朝夕擎レバナツケ藥トナルコトナリ。

或問。火ニ近ヅクルコト如何アルゾヤ。

答云。瘦鷹又ハ小タカナドハ寒夜ニ繫ヲケバ。寒クシテ餌ヲ持越テ惡シ。架ノ下ニホノカニ火ヲ置テ終夜ヲクベシ。又火邊ニ居テヨイノホドナルコトモアリ。又曉スベテ火ノ邊ニ居ナリ。但古人ハ荻ノタキ火ヲバ七間ヘダツト云リ。今按ニ面ヲ火ニ向フルコトナカレ。

或問。夏養ノ鷹ノ出入ノ比アリヤ。

答云。經ニモ羽毛初テヲツルトキ入ヨトアリ。四月下旬五月上旬也ト云リ。又四月八日。十三日。廿五日良辰ヲ撰デ。狩場ニテ北ヘ起ツ雌ニ合。取飼テ鳥屋ニ籠ナリ。是ヲ忘飼ト云ナリ。又云。五月五日ニ鳥屋ニコメテ九月九日ニ出スコトアリ。又云。鳥屋ヲ出スニハ。七月十五日ノ靈供ノ箸ヲ。タカヌシ生



氣ノ方七軒ノ家ノ箸ヲ取テ燈テ。戌ノ日戌ノトキ出ス也。或ソト婆ヲモ燈也。鳥屋出ノタカラ捉飼ニハ。南へ起飼ニ放テ取飼也。是ヲ初鳥狩ト云ナリ。十月ニ鳥屋ヲ出スコトモアリ。巢鷹ノ毛モロキハ四月ヨリ入テ七月ニ出ノヨシ。羅鷹山回ノ毛カタキハ五月五日ニ入テヨシ。六月ニ入テ十月ニ出ストキハ。秋風ニアタリテ毛羽ヨク落ルコトアリ。然バ白氏文集ニ十月ニ鷹籠ヲ出ヅト見タルモ此意ナルベシ。

或問。タカノ歳ニヨリテ文字替ルコトアリヤ。答云。先周禮ノ說ニヨラバ。一云題肩。ニ云往鳥ト云也。陸佃云。一歳ヲ黃鷹ト云。二歳ヲ鵠鷹ト云。三歳ヲ鵠鷹ト云。今通ノ是ヲ角鷹ト云也。其故ハ頂ニ角ノ如ナル毛アリ。シカレバ角鷹ト號ス也。タバシ近クマタカニ用ナリ。又云。左傳ニ云。爽鳩トハ鷹ノ名ナリ。

又云。毛詩云。本ハ雁ニ作ル。後人鳥ノ字ヲ加ルナリ。今按ニ。黃鷹ヲ若鷹トヨミ。鵠鷹ヲ片カヘリトヨミ。鵠鷹ヲモロカヘリトヨム。尤タバシキ說ナリ。野曝ト云ハ今年ノタカラ冬取タルヲ云。山回ト云ハ年ヲ越テ毛ヲ山ニテカヘタルヲ云。小山回ト云。若鷹ノ歳ヲ越テ二才ニナレドモ。毛ヲイマダカヘザルヲ云儀也。タカノ字ハ大タカトヨミ。兄鷹ト書テハ少トヨミ。隼鵠ノ二字ハ、ヤブサナリ。又花隼云。隼ヲバ大小ト云也。又鵠ノ字ヲ大タカトヨム也。又鵠ハハイタカ也。又兄鵠ハコノリ也。雀鵠ハツミ也。鵠ハサシバ也。又差羽トモ書也。零鳥鵠ハエツサイ也。兄又鵠モエツサイトヨム也。又俗ニハ悅哉ト云也。兄又鵠ヨリ細クチイサキタカヲ木ノ葉鷹ト云也。カヘリタルハ木ノ葉カヘリト云ベキカ。雄ヲ兄鷹ト書コトハ。巢ニテ

鵲ヨリ早ク大ニナルニヨリテアニ鷹ト書也。又佐保姫鷹トハ黃鷹ヲ春トリタルヲ云也。昔奈良ノ京ノトキ。佐保山ハ都ヨリ東ニアタレリ。春ハ東ヨリ來也。然バ春得タルタカヲ佐保姫鷹トハ云也。

或問。代々ノ奇鷹アルニヤ。

答云。唐轡ト云ハ甲斐國ノ山中ト云所ノ巢也。古宇治ノ寶藏ニ唐轡ヲ曝涼セルヲ野鷹來リテ捉去ス。其後彼山中ノ本巢ニ此轡アリ。シカレバ唐轡ト號スル也。又云。韓卷ハ唐國ノ鷹也。小一條院ノ御鷹也。小一條院ト申ハ三條院ノ御子。諱敦明。即但シ給ハズ。寛弘八年十月五日親王トナリ三品ニ叙。寛仁元年八月九日號ニ小一條院。鷹政ヲコト、シタマヘリ。藤澤。藤花。山娥ナドモ此御時ノ奇鷹也。又云。入皇六十六代一條院御諱懷仁。即位七才。此御時ハ鳩屋。出羽國平賀。赤目。鰯腹。經丸ナリ。

如此名鷹アリ。鳩屋トハ廿鳥屋ト書タルモアリ。此タカ兄鷹ヲ驚ニ捉ラレテ。思イキドヨリテ一夜ニ紅文トナリ。後ニハ八幡ノ寶前ニ鳩トヒトシクコモリテ。ツイニ神力ヲ以テ彼驚ヲ捉タリ。是ヨリシテ兄鷹鳥屋ト又驚取トモ云。又紅文トモ云也。クレナイフト云コトハ。此タカニカギリタルコトナレバ。今ノ世ニアルコトナシヤ。夫木集云。

カクモコソ鳩屋ト名ヲモイハザラメ八幡ノ宮ニ鈴奉ルト。僧正公朝モヨミタリ。又二條攝政ノ連哥ニ云。

ケシキハイカニ紅ノタカトアリ。

又云。鰯腹ト云ハ鰯ト、ツギテ生タル鷹ナリ。神泉苑ノ池ニテ鯉ヲ取テヨリ鯉九トモ號スル也。又此トキニ鰯九トテ鰯ト、ツギタル犬ヲ奉ケル。江州大津ヨリ出タリト。哥

云。

アライソノ鰯ノ巢タカトリカヒテ鰯ノ子  
姪ム犬ヲ尋テ

又云。野守ノ鏡ト云コトハ。昔雄略天皇ノ御  
時。春日野ニテ御狩シ給トキ。御鷹ミヘザリ  
ケルニ。或翁タマリ水ヲミテ。御タカ是ニア  
リト申スニ。ヲボツカナク思給ケレバ。上ノ  
木ニ御タカアリテ。其形水ニウツリテ見タ  
リ。

或說ニ。唐ニ箸鷹野ト云所ニ鬼有リテ。往  
來ノ人ヲ取食故ニ。四方ヨリ火ヲ放テ燒  
トキニ鬼ガ云。我君ヲ守ラント誓テ。マス  
鏡ヲ出シタルニ依テ也ト。是ハ鷹ニハ用  
ヒザル也。

或問。葱文ト云ハ何トキリタル文ゾヤ。

答云。葱文ト云ハ尾ノ文ニキルナリ。葱艸ノ  
文ノ如キナリ。



是ハ今ノ世ニ葱ト云ハ古ノ忘艸也。今ノ忘  
艸ト云ハ古ノ葱艸也。故ニ今ノ忘艸ニ似タ  
ルヲ葱文ト云也。伊勢物語ニハ萱艸ヲ忘艸  
ト云。又萬葉集ニ葱艸ヲ紫苑ト云。又鬼ノシ  
コ艸凡ヨメル也。又說ニハ葱艸ト云ハ一艸  
ニノ二名アリト云リ。又詩ニハ忘憂艸ヲ用  
タリ。

或問。箭像尾ト云ハ如何ヤウナルゾヤ。

答云。箭カタオト云ハ箭ノ像ニ似タルヲ云  
ナリ。鷹經ニタシカナリ。菅文トモ云。



又云。屋像尾トモイヘル也。鷹經ニハ差ト云

凡。代々ノ哥人モ屋ノ像ニヨミナセル上ハ。  
何ゾ捨ベキニアラズ。シカレバニツナガラ  
用タリ。新拾遺集云。

ミシマノヤクルレバ結ブ屋像尾ノタカモ  
眉白ニ雪ハフリツ、ト。前大納言爲家ノヨ  
ミタマヘル也。

又左ノ如クナルヲマ子屋ト云ナリ。



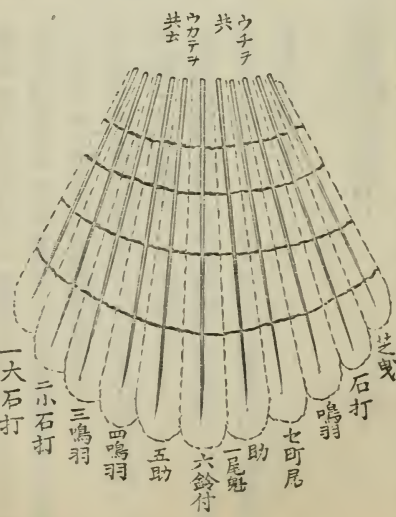
或問。町像尾ト云ハ如何ヤウナルゾヤ。

答云。町像尾トハ田ノ町ノ如クキリタル文  
ナリ。鷹經ニ慥ナリ。



如此一文字ニキルナリ。又タガイチガイニ

キル如左ナルモ云ベシ。



或問。白タカニハ見所アルコトニヤ。

答云。白タカトイフハ見所アリ。毛羽ノミナ  
白キヲ雪ト云リ。背青ノ鼻ノ毛白ク。七ツ羽



ノ端ノ白深ク。重錢ノ毛七浪ニイタルマデ。毛サキノ白ミ深キヲ青白ト云リ。

又云。白キトコロイヅレモウスアカキヲバシボト云也。夕顔ノ花ノ白ミ深クウスカキノ色ナルハシボナリ。尙ウスキヲ小シボト云フト。シカラザルハ大シボト云ベシ。

又云。先雪白ト申ハ。永和ノ頃一條關白良基公ノ白鷹ノ記ニ委ク見タリ。其語云。爰ニ甲斐國武田伊豆守信春奉ル所ノ白鷹。其相鷹經ニ叶ヘルノミナラズ。其毛雪白ト云ツベシ。誠楚王鵬ヲオトセル良鷹ニコトナラズ。

首頸ハ白綿ヲカブレルガ如シ。羽毛ハ班綾ヲ着セタルニ似タリ。首尾三尺ニヲヨベリ。遠クシテハ羽毛多ク。近クシテハ羽毛少ク。前ニムカヘバ腹ノミアリテ羽翼見ヘズ。ソレルコト軒ノ如シ。項平ニシテ中高ク目光明星ニ似タリ。眼ウ、ゴカズノ人ニ對セリ。亂

鼻愁毛白糸ノ如シ。目前ニ溝隴タカク櫓ヒロシ。鼻ノ孔廣ク大ニ。嘴クロク潤ヘリ。頸アツクヌケ出テ鳥ノ卵ノ如シトナリ。雪白ト云ハ觜爪ハ黒シテ全體ハ白キナルベシ。又云。白タカラシラ毛トモ云也。惣ジテ文ガハリトモ云ベシ。千載集云。

ヤカタ尾ノ白毛ノタカラヒキ居テ鳥タチノ柴ヲカリ暮ツ、ト顯仲モヨメリ。

又云。羽筋白クシテ夕顔ノ花ノ白ミフカク。四方フクリンノ如ク白シ。觜根白ク羽裏ニシルシアリ。

### 鷹經辨疑論中

或問。田ニ入テ鳥ヲ捉コト多少何ヲ好トスルヤ。

答云。經ニハ田ニ入テ鳥ヲ捉ニ。或多或少。少ヲ好トキハ上カ朱分經ニ弊在慣常見リ「快コト常ニアリ。」故殿後チ

ニ流利ニアラス。多ヲ好ム則ツカレ繁ヲ厭フ。終ニ快キ理ナシ。故ニ多ト少ト時ニシタガツテ中ヲ折ベシトアリ。今按。古人云。一日ハ一ツ。二日ハ二ツ。三日ハ三ツ。四日ハ一ツ。五日ハ五ツ。六日ハ一ツ。七日ハ二ツ。八日ハ二ツ。九日ハ三ツ。十日ハ一ツ。又五ツヲ捉飼ト云ヘル。五日ヨリ多ハ嫌ヘルナリ。然バ中ヲ折ベキヲ善ト云ナリ。爰ニ楚ノ使ニ子虛ヲ齊ニツカハス。齊王事々シク車騎ヲ發シテ使者ト出テ敗ス。田罷テ子虛烏有先生ニ語ル。時ニ烏有先生問云。今日ノ敗タノシカリキヤ。子虛云。樂シカリキ。獲多ヤ。云。少カリツ。シカレバ何ゾ樂シカリツル。云。齊王僕ガ爲ニ車騎ノ衆キヲ以テ而モ對スルニ雲夢ノコトヲ以テ事トシツルヲ樂ムト云リ。其エモノ多ヲ思ハズ。其敗ノヨソホイ嚴重ナル趣ヲ舉タリ。

又云。寬平ノ宮瀧ノ御幸ノ儀式ニハ。都ヨリ出御ノ日ハ先栗栖野ニテ小鷹狩アリ。左右鷹飼九人ヅ、ナリ。左ノ方ハ小鳥ノ數九十四トウサギ一ツトル。右ノ方ハ小鳥九十一ト鶉一ツヲトル。コノ時兎ハ小鷹ノ獲ニアラズ。鶉一ツハ小鳥五ツニアタルトテ。右ノ方勝ニ定ラレテ勅祿ニ預ル。如此勝負ナラバ多ヲ厭コトナシ。是モ小鷹ノコトナルベシ。此儀式ハ北野天神紀。長谷雄卿ノ記シ給テ末代ノ龜鑑タルモノナリ。

又白氏文集ニ百ニ擲テ一ツモ遺スコトナシト云ルハ。タカノ心術ヲ美稱シテイヘルナリ。アナガチニ放テ捉コトニハ非ズ。然バ上卷ニ禁忌ヲ立タルニモ慾心ノ鷹飼ヲ出タリ。可愼者也。

又云。兄鶉ニ百寄ト云コトハ。子リヒバリノ時分放テ捉セラル。又春ハエリヒバリト云

ベシ。其故ハ巢立シタル雛ノ羽弱ナルヲ撰  
テ放スレバ撰雲雀ト云也。

或間。脚絆ヲ着ル法アリヤ。

答云。定レル法ハナシ。然ドモ經云。先正ク

鷹ヲ擎テ背ヨリ傳之。鷹經ニ舊絆ノ上ニツク也。扶ヲ以テ革

ノ表ヨリ扶。脚纏ノ本ノ孔ヲヨク扶リテ。脚

纏ノ末ニ指入テ紙針ヲ牽通シテ。次ニ杖ヲ

以テ脚纏ノ末ノ穴ヲ扶リテ。繫把ノ末ヲ指

入テ逼來。若溢バ鑢筋ヲ用フ。洗革ノ和ヲカナルヲ以テ

繫把ノ末ニ蠟ヲツケヨ。革ヲ裁コトハ。礎ノ

上ニ革ヲ置テ。一寸五分刀子ニテ脚纏ノ

本ヲ割開テ。剪裁テ山形ハ椿ノ葉ノ如ニス。

長短ハ鷹ノ脚頭イ大小ニシタガフベシ。脚纏ノ

末ノ穴ヨリ以三分。鶴ハ二分也。今按。經ノ

如クナルヲ用ベシ。然レドモ其掌飼ノ流ニ

聊不同アリ。經ニモ長短ハ鷹ノ大小ニヨル

ト云ヘリ。

又云。足緒ノ革ハ薰草。洗革。色革。若鷹ニ用之。藍

革。若鷹鳥出用之。表ヲ裏ニナスコト也。鷹ハ脚纏ノ廣サ一寸五分。

長サ二寸。〔一寸説誤〕繫把ノ長サ七寸五分。鶴ハ廣サ八

分。長サ五分。〔一寸説誤〕繫把六寸五分。經ノ説。又云。六寸

二分。家説。又云。五寸五分。鷹ハ八寸二分。家説

也。兄鷹ハ七寸五分。家説。短ハ脚腫ルナリ。

又云。白鷹ノ脚絆ハミナ白革ナルベシ。赤革

黑革ヲ用ベカラズ。

脚纏之形。椿ノ葉ノ如ク用也。



彌津神平貞直流

又云。鍛脚<sup>ツマリアシ</sup>ト云テ。脚纏ヲ錦金爛綾ナド重テ縫物ニシテ。引緒ヲバ綵色ノ革ヲ以テ常ノ如クスルナリ。



或問。鈴着ルコトハ如何様ナルゾヤ。

答云。經ニ云。タカヲ捉俯テ着ント擬スル人。左ノ手ヲ以テ。右ノ手ニ錐ヲ持テ尾魁ヲ救拂<sup>〔扶掖〕</sup>テ。水ヲ蠶ニ着テ撫デフセヨ。若不伏トキハ切去テ葉ヲ鈴繫ノ尾ノ上ニ挾ム。葉ト云ハ大鰯樹ノ葉ヲ煮テ陰乾ニシテ鈴持ニ作ル。凡剪葉廣方二寸。鰯ハ一寸五分。今按ニ。鰯樹ノ葉得ガタキニヨリテ吾朝ニ用ヒ

ズ。漢土ニ是アリ。方二寸ニキルト云ハ大ナリ。鷹ニ似合テ少ツ、ムベシ。

又云。越前ツルガノ津ニ着ケルニハ鷹兄鷹バカリナリ。其トキノ葉ノヤウハ。尾魁ノ長サニ鈴持ヲ用タリ。表ハ五面革。ウラハ黑革ヲ合セテ蠟ヲ以テ重タリ。今世ノ笠袋ノミセカハノ如ナリ。鈴ツケノ糸ハ紅ノ卷上ノ糸也。九ツ組ナリ。總ハ尾ノ中ノ文ト同ジカリシヲ。飛ニサハリアリケレバ。漢土ニテ和戒傳ト云人切約シヨリ切裝束ト云。又燕ニ像シヨリ燕裝束トモ云。鼠緒ノハサミテサケタルヤウニスル也。<sup>經ノ</sup>長ハ二ノ斑文ニヲヨボストナリ。是ハ半裝束トモ又和戒傳裝束トモ小革裝束トモ云也。

又云。鼠緒ハ鷹ハ一寸八分ナリ。

又云。鷹裝束ト云ハ鈴トヲシ計也。小裝束トモ裸裝束トモ小革裝束トモ云ナリ。



又云。鈴サシトモ鼠尾トモ鈴トヲシトモ云也。

又云。經ニ草ヲ裁ハ圭頭ニソ本ノ頭ヲ殺ト云リ。彩色草ノ柔軟ナルヲ以テスルナリ。マヅ右ノ草ヲ截。左ニカタナヲ側テ外ノ編ヲ剪。刀ヲ正クシテ内ノ編ヲキル。穴ヨリ端二分。鷗ハ一分トミヘタリ。今按。タカニ色草ヲ用ルハ此故ナリ。

又云。古人云。鼠緒二寸五分鷹ナリ。又人サシ指ノ長サトモミヘタリ。兄鷹ハ二寸二分也。經云。鳥莖ヲ造ラバタカノ第二三ノ羽根ヲ用ユ。長サハ一寸四分。鷗ハ鴨ノ第一二三ノ羽根ヲ用ユ。長一寸。今按。一寸四分ハ長シ。ツバメテ八分バカリニ用ユ。鷹ニモ鴨ノ羽ノ莖ヲ用。

右條々記ストイヘドモ。其詮ヲトラバ切裝束ヲ用テ寸尺ヲ定メズ。鷹鷗ノ大小ニ

隨テ長短ヲ以テ似合テ用ベキ也。特ニ鷗已下ニハ定ル法ナシ。トキニ依テ掌飼ノ心ニ任ベキナリ。

### 裝束ノ次第

小鳥裝束ト云ハ。月卿雲客ノ小鷹ナドニ金ラン錦綾ナドヲ以テ小鳥ノ毛ヲカサネ鈴持ヲセラレシナリ。

野小鳥裝束ト云ハ。野小鳥ノ領ノ皮ヲハギテ鈴シキニ用ヒ。下ニハ角ヲ重ヌベシ。鼠緒ハウス紅ノ糸ナルベシ。

舶裝束ト云ハ。鈴シキ綾織物ヲオモテニ用テ。ウラハ柳色青地ノ錦ヲ以テスヘテ。鈴ツケハ紅ノ卷上ナリ。

子飼裝束ト云ハ。鈴着ノ緒ハクスベ草或洗草。鈴持ハ表錦草ウラハ五面草。ミナウラハ白草也。

蓮雀裝束ト云ハ。鈴着ノ緒ハ赤草。鈴持ハ連

雀ノ尾ノ前ノ赤キヲ蠟ヲ以テ並ベテ。上ニ  
檜鳥ノ肩サキノ青キヲ重ル也。

トツサカ装束ト云ハ。雉ノ面皮ヲハギテ着  
ケ。小サキ毛ヲモハギ付ヨ。スバツケハ藍革  
ナルベシ。

檜鳥装束ト云ハ。檜鳥ノヒウチ羽ヲ取テ重  
テ鈴持ニシテ。鈴着ハ色々ノ糸ヲ組テ用ユ。  
是ハ若殿上人ノツカヘルナルベシ。

或問。鞭ノ寸尺定レルヤ。

答云。鷹經ニ定レル法ハ出ズ。鷹ヲ擎テ鞭ヲ  
モツコトハミヘタリ。今按。古人云。鞭ハ

或人  
説也。

二尺八寸。二尺五寸五分。鶴ハ二尺。鶴ナドハ  
掌飼ノ心

ニマカ  
スベシ。本ヲ一文字ニ四方ヨリ切テ小角ヲト

ルベシ。前ヲ扣クベシ。漢土ニハ甘艸ヲ以テ  
作テ用ユ。則藥トナル也。

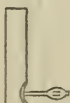
又云。寸ヲ秘シテ本ヲ五分ソギタルモアリ。  
私ニテ子細ハナシ。鄙語ナリ。

又古人云。鞭ノ寸ハ不定也。鷹飼ノ矢束ニク  
ラベテ切テ。黒皮ヲ去ラズシテ前ヲソギテ。  
本ヲ一文字ニ四方ヨリ切ナリ。是ヲ神平貞  
直秘シタリ。餌ジミヲ洗フニハ。鳥ノ羽ヲト  
リアツメ。篋竹ノ如クナル竹ニ入テ。鳥ノ羽  
ノ長サ一寸バカリ出シテ。柄ヲバ一尺ホド  
ニ切テ。餌袋ノ側ニ指シ入テ。ケガレタルヲ  
洗フナリ。

又家説ニ。鶴ノ鞭長二尺五寸。一尺三寸。三  
尺四五寸。一尺七寸。或八寸ニ用ユ。

又云。鞭ニ緒ヲ付ルハ。本六寸ヲキテ穴ヲア  
ケテ。韋ヲ引トヲシテ。革ヲ一ツニ破リ。輪  
ニナシテ捻ノ代ニ用ユ。羅鷹又ハ心フカキ  
鷹ニ用ユ。

田物ナドニ用ヒテ佳也



亦云。捻ノ代ニ左ノ如ク切革ヲ以テ輪ニス。



鶉ノ頸ノ入ホドニ用。

或問。捻ト云ハ何トコシラヘテ良ゾヤ。

答云。捻ト云コトハ經ニハミヘザルナリ。吾朝ニテ鶉已下ヲ馬上ニテ放トキ。直ニ馬上ニ擎取ンタメニ作り出スモノナリ。尤便アルコトナリ。タトヘバ後ニ記スガ如シ。又上木トモ云也。

鶉ノ頸ノ入ホドナリ。



鑑ヲ以テ作也。ワタリノ寸一尺ニウチテ。四寸ヲバ鑑ノ中ヘ入ヨ。  
又云。大ホウ捻ト云ハ。



ワタリノ寸前ニ同。上ノ糸ハ馬ノ尾ヲ捻合テ鶉ノ頸ノカ、ルホドニ用ル。  
中ヲウツボニクリテ。  
中ヨリ馬尾ヲ引通也。



又云。拔出スヤウニツクル也。

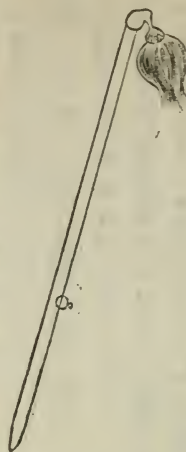


又云。竹ヲ以テ左ノ如クスルナリ。俄ニ野ナドニテコシラヘテヨシ。常ニモ用ナリ。



右何モ鐵ノ七尺五寸ナリ。或五尺七寸用之。

又云。才拔ト云ハ。巢鵲ノ鳥ヲ從テ馬ニツケ上ルヤウニオシヘ習スルナリ。長サハ鞭ニ同ジ。銅ヲ以テ鑲ヲスル也。オイマダ熟セザルトキ。ヘヲハ引トシテ拳ヘ上テ調ルクワンナリ。



右條々漢土ヨリ渡タル法ニアラズ。吾朝ニテ作り出ス者也。掌飼ノ心ニヨリテ可用次第アルベキ歟。

或問。條ノ尺ハ如何ホドナルゾヤ。

答云。經ニハミヘズ。御狩記ニミヘタルハ。色ハ蘇芳綵。左右ニ捻合テスヘホソカルベシ。爰ニ上古帝皇ノ御衣ノ袖ノヘリナル糸

ヲ取テ鷹ヲ繫初給シヨリ如此用ヒタリ。此糸ノ糸ト云。又絆（鵲也）トモ書タリ。「旋子バカリニ限リテモトヲシト云ベキニ非ズト云リ。」スバシノ糸ナルベキナリ。長サ鷹ハ五尺二寸。又六尺六寸。異說云。五尺五寸八分。兄鷹ハ四尺五寸。鵲ハ三尺五寸。或ハ八寸。

又云。カブリ革四寸二分。又シグクダイチトモ云也。

又云。ヒコノ緒四寸。又コツチノ緒トモ云ナリ。彦ノ緒ノ輪ノ寸二寸二分ナリ。

或問。格定ル法アリヤ。

答云。經ニハ出ズトイヘドモ其法度アリ。家人々代々用ヒタマヘルハ。居架ノ高サ四尺二寸。横木六尺二寸。柱ノ外五寸也。櫪杉ヲ用ユ。架布ハ淺黄ニ犬ノ足跡ヲ白ク付ベシ。タカニ用ユ。

神家ノ說。高サ四尺一寸。横七尺。柱ノ外三



寸八分。

又云。格布ハ四尺八寸。或ハ横布三幅。或ハ廣サ三尺タテ布ナリ。

又云。ニツ架ノ長サ一丈七尺。<sup>ニイ</sup>木口三寸。木ノ本ヲイヅレモ掌崎ニ立ベシ。本ニ鷹ヲツナギ。末ニ兄鷹ヲツナグナリ。ツナギヤウ常ノ如シ。又本ニ兄鷹ヲツナギ末ニ鷹ヲツナグベキ也。

又云。條ヲ鷹ハ右寄ノ格横ニ末ヲ結付ルナリ。兄鷹ハ左ナルベシ。

又云。鷹ノ鞭餌袋ヲカケルコトハ。餌袋ヲ掌崎ヲ架ノ前ニカケヨ。口ヲ前ヘナス。鞭韉ハ身寄ヲ架前ニカケヨ。韉架前ニ入テヲクベシ。

又云。兄鷹ノ餌袋ハ身寄。鞭韉ハ掌崎ナリ。鶴ノ架高サ二尺五寸。横木五尺五寸。柱ノ外二寸五分。<sup>一方</sup>木口一寸三分。<sup>ニイ</sup>架布四尺二

寸。横布ナルベシ。

異説ニ架布ヲ末濃ニ用コトアリ。

又云。鷹ノ格帳ハ眞薦ヲ編テ用ユ。三文五文歟。格衣トモ云也。古ヘ主上御衣ノ袖ヲ解テ格帳ニシ給シヨリ格衣ト云ベキナリ。

又云。拵架ト云テ差羽ナドヲツナグニハ。高サ一尺二寸。横木一尺二寸。中ニ柱タツ。廻ルヤウニコシラフルナリ。臺ニ鑲ヲシテ臺ニツナグベキナリ。

式架ト云ハ。檜木ヲ圓ニ削テ。クロスリニシテ錦ニテ包ベシ。又綿ニテモ包ナリ。架タレニハ豹ト虎ノ皮二枚合テ兩面ニシテ。唐糸ニテ五處ツルベシ。錦ニテモ絹ニテモ皮ノ上ニカケテ。絹ノスソニ銀ノ岩ヲ網ノ岩ノ如ニシテ。一方ニ十二ヅ、ウラ表廿四ツケヨ。糸ニテ五處ツルベシ。

或問。鷹飼ノ杖如何ホドナルゾヤ。

答云。經ニハ長短出ズ。神家ノ説云。長サ三尺五寸。

又云。乳ノ通りニクラベヨ。杭指ノ下六寸。杭指ノ長サ一束ナリ。又カツ杖トモ云ベキ也。

又云。犬飼ノ杖ハ七尺五寸。或六七寸。又笠ノ端ニナゾラヘテ切ルベキナリ。杭指ノ下六寸。杭サシノ長サ一寸。或手一束ナリ。木ハ梅ナルベシ。

或問。犬飼ノ作法次第アリヤ。

答云。犬ヲ放チャルニハ。山口ニテ草ヲ扣キテヤルベキナリ。童子杖トイフ。犬ヲ草ニ入ルトモヤルトモ云ベシ。

堀川ノ後百首ニ。

イトバシクヲノガアリカヘヤル犬ノコハ  
ロアリヤト、リノナクラシトセイ俊頼ノヨメ  
リ。爰ニ犬ノ吾朝ヘ渡リシハ。神光ト云人黒

駿ナル犬ヲ牽テ敦賀ノ津ニツキタリ。名ハトマホコト云。勞リテハイサ、カモ草ヲ踏シダクコトアルベカラズ。犬ノハナヲアヤマタザルヲヨシトス。新葉集ニ云。

箸タカノ狩バノ雉子ノ落草ヲ吹ナミダリソノベノ夕風ト申納言爲忠ノヨメリ。風ヲサヘ吹ナミダリソトイトヒケレバ。イカデカ艸ニアラクフミ入ベキヤ。又嗅捨ル犬ハ必身振ヒヲスル也。是ヲ以テ捨ルト捨ザルトヲ可弁也。西園寺百首ニ云。

寒キコト我ニヤ似タル嗅ササム犬サヘモ又身ブルイヲスルト相國ノ御詠ナリ。又鳥跡ニアタラヌホドハヤリ聲ヲセザルベシ。

又云。山ニ入テハ一町ニ一度艸ヲ打入ベシ。

犬鼻ヲ付ルトキオモヒ掛聲ヲ揚ルナリ。エイホウヲダリト云。

鳥ノタツトキ。鳥サケビ三聲イカニモ高カルベシ。雉鷹トサケブナリ。鳥タツト云心ナリ。勞レニ

犬ヲ入ニハ。休テ息ヲツカセテ勞聲ヲヤレ。  
エイト云ナリ。鳥ヨト云心也。犬勞テ疎略ニ  
々々アラバ。行藤ノスソヲヤハラカニ扣テクエク  
エトヤ  
ルベヨシクヘト云心ナリ。又鳥ヲ見付テハ  
物ナシト云ベシ。タヤスク打トラエント云心ナリ。掌  
 飼タハ起ヨト云ベキナリ。但シ所ニヨルベ  
 シ。百首ニ。

ハフ鳥ヲ艸ニ見伏ルカリ人ノ物ナシテフ  
 ハ我家ノ中。此意我物ニシタルナルベシ。  
 又云。犬縹ヲツクルハ惡サスト云。犬ノアシ  
 キヤウナルトキ。縹ヲトリテヒキトバムル  
 ニヨリテナリ。是ハ鄙語也トイヘドモ。獵師  
 用ル所イハレアルニ依テ捨ザルベシ。

又云。犬縹ノ長サ八尺。根藤也。古犬ニハ犬  
 ノ長三長用ユ。

又云。サハキト云二尋。荒犬ハ三尋ナリ。  
 又云。鵠ノハ遣繩ト云。長七尺二寸。淺黄ナ

リ。アサギト白ヲウチマゼテ用ユ。又三尋片  
 脇。

異説ニ云。犬ノヤリ聲ハ平鳥々ト云。犬鳥ニ  
 アタラバ鳳々ト聲ヲ引テ云。其後ハ犬ノヤ  
 ウヲミテ。定ノモノゾ。走マハリタルモノゾ  
 ナド、色々ニ云ベキナリ。奥州ノ習也。

又云。勞ノトキハ。犬飼犬ヲ制シテ。鷹飼ヲ  
 待テ笠ヲヌイデ手ニ持テ、杖ヲ右ノ方ニツ  
 キ犬ヲイレヨ。草ヲ打テ犬ニヲシヘヨ。犬飼  
 ハ笠ヲ頸ニカケヨ。鷹ト犬ニ鈴ヲサシテ後  
 ニ笠ヲ着ルナリ。

又云。犬飼裝束ハ赤草ノ袖ニ。無文ノ身ニ薰  
 草ノ袴ヲ着シテク、リ結也。

又云。ウチカケハ主ニヨリテ長短アリトイ  
 ヘドモ。ワキノ廣サ五寸五分。袖口五  
寸ナリ。

又云。御狩ニハ隨身ノ若黨ナリ。赤帽子ニ紫  
 ノ狩衣。緋ノ袴。赤キ袴モヨシ。白ハカマ又

葛ハカマ。布ヲモ用タリ。

又云。鶴飼ノ犬飼ハ青地ノ帽子ニ裏赤シ。

又云。犬飼山神ヲマツルトキハ。先玉女ノ方

ニ向テ笠ヲ着テ春ハ雌ヲ用。金ノ羽ト云也。秋冬ハ雄

ヲ用。銀ノ羽ト云ナリ。

文云。

再拜々々。此郷里飼祝給布有情無情乃御神達。

吉日良辰乎以氏玉乃雄玉乃雌乎奉留者也。御鷹

乃聽安久志羽早久。御馬乃蹄平賀爾志氏。犬飼乃聽安

氏久志。犬乃鼻明鈴乃音乎誤須良。谷乎渡須良。峯乎越

須。玉乃雄乎百千數取世給止申須。春ハ金雌。秋

冬ハ銀雄。

異說。

再拜々々。今日玉姬社家乃御神達。黒妙乃雄。

白妙乃雌。百羽千羽取良佐世給得。一息ニ云ベシ。

又云。百首ニ。

笠ノ上ニ上毛下毛ヲタムケヲキテ今日ノ

カリ場ノ神マツリツ、

又云。犬ノクビ玉ト云ハ縊環ト書タリ。韓盧

ヨリ出タリ。毛詩五卷盧令三章ニ云。襄公好

田獵畢弋。注ニ云。網小ニシテ而長シ。畢ト

云ハ其形畢星ニ似タリ。弋ハ繳射ナリ。戰國

策ニ云。韓國ノ盧ハ天下ノ駿犬也。注ニ盧ハ

田犬也。纓ノ環ノ聲也。又云。盧ノ重鐔ハ。注

ニ鐔ハ一環ニ一ヲ貫也。釋ニ云。韓國ノ犬ヲ

獵ト云ハ田ノ犬也。是ヲ鷹犬ト云ナリ。今

按。赤滑革ヲ以テ頸タマトスル也。留所ハ鞭

結ナリ。

又云。ウチカイ袋ト云ハ。狩ノ犬鳥ヲ起タル

トキ。犬飼腰ニ。海邊ニアルクラト云艸ヲ編

テ。苞苴ニシテ食ヲイレ持テ飼也。然レバ搏

噬袋トモ搏噬苞苴トモ云ナリ。又餌袋ノ如

クニ作テツクルコトモアリ。

又云。狩ノ犬ニ獫狫驕ト云コトアリ。ハシノ



長ニ檢ト云。啄ノ短ヲ歇驕ト云ナリ。

又云。犬ヲ人ニ渡請取ベキコトハ定レル法ナシ。但禮記曲禮ノ說ニヨラバ。犬ヲ牽者左ニ犬ノクビタマヲトリ。右ノ手ニ縹ノ末ヲ取テ渡スベキナリ。犬ノ首ヲ左ニナスベシ。又請取人モ前ト同ジ。左ノ手ニテクビタマヲトリ。右ノ手ヲ以テ縹ノ卷目ヲ取テサシノケ請取ナリ。又柱ニテモアレ。如何ナル便ニテモツナギヲキタルヲ良トス。

或問。犬ノ毛ニ吉凶アリヤ。

答云。善惡アリ。假令如左。白犬ノ黒尾ハヨシ。白犬ノ尾長キハヨシ。白犬ノ胸黒。前足長キハヨシ。白犬ノ胸ノクロキハ善。白犬ノ口ヨリ眼ニ至マデ逆毛生タルハ善。白犬ノカシラ黄ナルハヨシ。白犬ノムネ黄ナルハアシ。白犬ノ尾ノ黄ナルハ惡。白犬ノ耳アカキハ大ニ惡。白犬ノカシラ黒ク背黄ナル

ハ惡シ。黒犬ノ前足白キハヨシ。黒犬ノムネノ白キハ大ニ善。黒犬ノカシラ白キハヨシ。黒犬ノ面白キハ大ニ善。黒犬ノ尾ノ白キハ善。黒犬ノ四足黄ナルハアシ。黒犬ノ四足白ハ善。黄犬ノ前足二白ハヨシ。黄犬ノ白文アルハ大ニ善。黄犬ノムネアカキハ惡シ。黄犬ノ後足白キハ惡。クロ犬ノ胸ノ黄ハヨシ。クロ犬ノ四足白キハ大キニヨシ。クロ犬ノ後足白キハ惡。

餌袋事

或問。餌袋ノ寸尺アリヤ。

答云。經ニハ出ズトイヘ<sub>ハ</sub>法度アリ。長サ五寸。口五寸。尻二寸二分ナリ。又云。長サ二寸。口六寸。尻三寸ナリ。

又云。餌袋ノ請緒ニ帽子頭ヲ結ブ。鳥頸トモ云。

又云。懸緒ニハ菟頭ヲ結ブ。長キ後ノ緒ハ雉

ノ尾羽ヲカタドル也。

神家ノ説ニハ。鶴ノ餌袋ニハ鳥ノ頭ヲツケテ。前ニハ革ヲタゝミテ着ルナリ。

### 鞆之臂

或問。鞆ト云ハ如何様ナルゾヤ。

答云。鞆ト云ハ。鷹ヲ撃ルトキ。腕ノ細キ所ヲ平ニシテフマセンタメニ鞆ノ上ニサスナリ。青色ヲ用ルコトモアリ。是ヲ縁ノ鞆ト云。寸法長四寸八分。廣二寸八分。縁ノヒロサ四分。但主ニヨルベシ。又云。長サ四寸五分。ヒロサ三寸三分。掌飼ノウデニヨルベシ。又云。袖ノ鞆ト云ハ貴人ノ爲ナリ。ナベテハ縁ノ鞆ヲ用ル也。錦ヲ以テ鞆ヲ作ルコトモアリ。然バ文集ニ云。錦ノ鞆ニ花隼ヲ臂ニストイヘリ。

### 鳥ヲ木枝ニ附ル事

或問。鳥ヲ木ノ枝ニ着ルト云ハ法度アリヤ。

答云。經ニハミヘズ。然ドモ上古ヨリ定メル

ヤウアリ。左ニ記ス。春ハ梅櫻柳。秋冬ハ鳥

柴。冬至ヨリ後ハ梅ヲ用タリ。木ノ長サ五尺

五寸ニ切テ枝ヲ三ツ殘シ。同葉ヲモ三ヅ、

ヲキテヨキヤウニスカシテ。本ヲ一刀ニソ

ギテ少角ヲトルナリ。本ノ枝ノ下五寸藤カ

ヅヲ以テ結付ルナリ。第一ノ枝ヲ踏ヤウ

ニ眞木ニ着ベシ。鳥ノ兩方ノ火打羽ノ三ツ

メヲ殘シ。葛ヲ以テ頸ト共ニ掛テ。シルシ付

ニ結付ルナリ。木ニ付ル所ハ二卷シテ片輪

ヲ殘スベシ。輪ハ鳥ノ右ノ方ニコスベシ。

明月記云。元仁二年二月八日。天晴。人々

物語之中。長衡朝臣等説。一日一上亭射小

弓。負態方雉一羽酒一瓶可進由示頼次。

習者只是依召繼事。頼次此事不心得之間。紅梅

大枝雄雉雌各十羽。如小鳥。大瓶入酒送之。

納受饗應云々。鳥柴。源氏河海云。普通ノ

柏木ヨリ葉セバクマロクシテ。ヲモテウ  
ラニ毛生タルヲ鳥付柴ト云ナリ。



前ニ云ガ如ク春ハ梅櫻柳ヲ用ナリ。又鳥柴  
ハ四季ニ用ベシ。春ハ雌ヲ上ニ着ベキナリ。



秋冬ハ雄ヲ上ニ用ベシ。又檜柏ニモ着ベキ  
ナリ。右ニシルス如シ。



一ツ着ルハ犬飼ノツケット云。如右。眞木ニ胸  
ヲ向ヘヨ。又木ハ檜柏又ハ櫨ナリ。木長三尺  
五寸。中ノ枝ニ山緒ノ結目ヲ水引ヲ以テ。人  
ノ髪結ガ如クニ結ナリ。片輪ニスルナリ。雌  
ニハ水引ヲ皆赤クシ。雄ハ半分赤ク半分白  
シ。

又云。人ニミスルトキハ。木ノ本ノ切口ヲ左

ノ手ノ中ニアテ、。右ノ手ヲ以テ少シ上ヲ取テ。肩ニ少シ引掛テ。左ノ膝ヲ突テミスルナリ。又左ニ取ナヲシ。右ノ膝ヲ突テ御目ニカクルナリ。其マ、左ヘ廻テ退出ス。其マ、御前ニヲクトキハ物ニ寄カケテヲクナリ。異説ナリトイヘドモカヤウニモ用ベキナリ。

又云。皇子御誕生ニハ殿上人松ニ着テ献ル也。イヅレモ第一第二ノ枝ヲ踏ヤウニ着ルナリ。

又云。交野ヨリ鳥一羽ウヱ鳥柴ニ着テ献ズルハ。イホリニ入テ鳥甲ヲ着タル狩子昇テ參ルナリ。

又云。梅ヲツクリ木ニシテ付タル例モアリ。伊勢物語ニ。昔オホキオホヒマウチキミトキコユルオハシケリ。ツカウマツル男。長月バカリニ梅ノツクリ枝ニ雉ヲ付テ献ルト

テ。

我タノム君ガ爲ニト折花ハトキシモワカヌ物ニゾアリケルト讀テ奉リケレバ。イトカシコクヲカシガリ給テ。ツカヒニ祿タマハリケルトミヘタリ。時ノ興アルニハ。貴人ノ仰ニヨリテ少モ面影アルコトハ用ベキナリ。

又云。結ヤウハ常ノ片輪ニ結ナリ。結タル端ハ五寸。輪ニ結ビタル所ハ三寸也。又結ビタル、端ハ其ノ鳥ノ一ノ羽ニクラベテ切ルベシ。前ニ云如ク懸テシルシ付ニ結ブ也。其マ、眞木ニ付ベシ。結目ヲトクトキハ。羽サキノ上ト四毛ノ上ノ結目ヲ。本ノ輪ヘ羽サキノ入テ。輪ヲ通シテ本ノ如クトリ。カケ緒ハ木ニ殘ルベシ。

ウサギヲ附ル事

或問。兎ヲ木ニ着ルヤ。

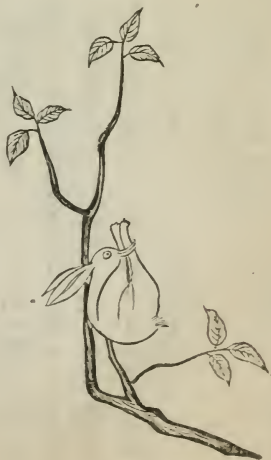


答云。尻足ヲ一ツニトリ。藤葛ヲ以テ二卷結テ。其末ヲ頸ニカケ項ヘ引通セ。頸ヲ二ノ足ノ中ヨリ尻ノ穴ニ領ヲ置也。鳥ノ如ク結テ付ルナリ。妻兎ハ前ノ足ヲ頸ノ如ク後足ノ間ヨリ引出テ着ヨ。前ノ足二ツニテ尻ノ穴ヲカクセ。背ヲ木ノ方ヘ向ヨ。後ニカケタル藤ノ二ツノ結目ノ末ハ。兎ノ足ノ長サニ一寸バカリアマシテ切ナリ。左ニシルス。



或問。小鳥ヲ着ル事アリヤ。

答云。其様アリ。萩ノ枝ニ付ルナリ。長サ五尺五寸ヨヲワリテ挾ム也。シルシ付ニ結ベシ。葉ヲバ本末ニ三殘スベシ。鶉ノ頸ト兩ノ羽ヲヒラニハサムベシ。藤葛ヲ以テ二纏シテ片ツワニ結ナリ。貴人ニミセ申トキハ。右ニ本ヲトリテ左ニ末ヲ持テ鳥ノ前ヲミセヨ。又片鶉ナラバ鳥ノ後ヲミセヨトナリ。爰ニ源氏云。小鳥シルシバカリ引付サセタル萩ノ枝ナリ。一説ニハ引付サセタルチ木ノ枝ト意得タリ。萩ノ枝ヨシト思ベシ。源氏



ノ注ニ。小鳥ノ數九ツ山菅又細キ葛ヲ以付也。枝ハ七ツ五ツニツトモニ挟ム也。鴨ヲ一ツ挟ムコトモアリ。



又云。權中納言藤原仲平ハ菊ノ枝ニ付テ。延喜七年十月十八日清涼殿ノ前ニ於テ奏舞奉ルトミヘタリ。

又云。雀ヲ竹ニ付ルコトアリ。トマリタル如クニ付ベシ。數ハイカホドモクルシカラズ。節ヲワリテハサムベシ。

或問。鷹ノ網ハ寸尺如何ホドナルゾヤ。

答云。經ニハ不見。諸ノ獵師ノ用ルハ。國々ニカハリタルナリ。シカレドモヒロサ一丈一尺。高サ八尺六寸。下五尺五寸也。網串三本口傳アリ。

或問。鯁鷹ノ驚ヲ擎ナツクルハイカヤウナルゾヤ。

答云。羅鷹ハ先聞處ニツナギテラクベシ。サテ夜ノ一更ニ初テ火ノ側ニ擎。終夜厭ハズ擎ヨ。明旦午刻ニ至テ更ニ復繫着ケ。夜ノ一更ニ擎コト如先。カヤウニスルコト三日三夜ナリ。其馴鹿ヲ候テ後ニ纔ニ餌ヲ飼テ。開



ノホトリニ擎ヨト經ニミヘタリ。但鷹ニ依テ五日六日擎ベキモアリ。一日二日ニ心折ルモアリ。鷹ノ性マチ／＼也。強ニ擎テ野心ヲ失フベキハ。鳥忘トラ生鳥ヲミテモ本取タルコト、モ覺ズ。又心深キ鷹ヲ一二夜スヘテヲクトキハ。野心失セズシテ揚去ナリ。野ニテ鳥ヲ捉ツル心ヲバ失ズ。人ニ馴ルヤウニ調ベキナリ。ヤウ／＼馴ルニ隨テ。食ヲ以テ延呼餌ヲアタヘヨ。如此數日ノ後ニ雉ヲ以テ抛テ與テ。後ニ野鷄ニ合テアタヘヨ。アラタカノ手放スル時分ハ。肉ヲソバメテ調ヘ。野鷄ニ捉飼テ後ニ。次第／＼ニ上肉ヲモ調テ。肥瘦ノ中ヲハカルベキナリ。爰ニ古人云。山回ヲ調ルニハ。先トリタル其日。微溫湯ヲ以テ鷹ヲ浴テ擎ヨ。羽ヌレテ後ニ闇處ニテ拳ニヨクスハルベシ。猶兎ヲバ目ヲ縫コトモアリ。是ハ不可也。夜ハ轆轤格ニ繫

テ。曉ヨリ拳ニ擎テウゴカサズシテ鷹ヲ快ク眠セ。其夜餌ヲ飼ニ。火ヲトモシテ口餌バカリヲ飼／＼シテ呼ベシ。次第／＼ニ早旦ヨリ野ニ擎テ出テ。日ノ出ルニ向靜飯。次第ニ人多中ニテ擎ヨ。早心ヲル、ナリ。其後内ニテ又當ノ餌ヲ飼テ。次ノ日雞ノイカキサカヲ切テ袋ノ如クナルニ。水銀ヲ大豆ホド入テ飼。一時アリテヲモト艸ヲ粉ニシテ飼。又姜ヲ少飼テ放ツ也。爰ニ常陸國人ノ説云。雌ノ頸骨ヲタ、キテ洗テ鳥ノ肉ニ包テ飼。上餌ニ桃ホドイカニモ好餌ヲ用ヨ。ナマヌルノ湯ニヒタシテ。湯ニ觜ノヒタルホドニシテ飼ナリ。擎ナツクルコトハ廿日ナルベシ。同人云。鹽ヲ調ト云テ。堅鹽ヲ細末シテ鳥ノ肉ニ包テ豆ホド。大鷹。七粒。兄鷹。五粒。飼テ。上餌ハ桃ホド其餘ハ前ニ同キナリ。同人云。干入様ト名テ。鷹餌ヲ絶與ヘズシテ。トキ

口餌ニ新餌ヲ桃ホド飼テ。只藥ヲアタヘヨ。サテ山ニ出ルナリ。藥ヲ第一トスルナリ。日數ハ鷹ノ肉ノヨキホドクハンヲ期トスル也。藥云。カジカ東ヨリ流ル、川ニ有テ用。古酒ニヒタシテ燒。五八生等分ニ合テ雀ノ胸一包ホド鷹ニ用。兄鷹ニ半包アタヘヨ。爰ニ直渡ト名テ山ヨリ取テ即合スルコトアリ。七葉ヲ與ヘヨ。サテトキ、スエテ。藥ヲ三日四日ツバケテ飼也。藥云。茯苓。生。天南星。生去毒。土豹。燒。ウク。白藥。燒。人ノサ。白馬ノ三日月骨。アシゲノ馬ノ下ア。雞雄イ爪。燒。鹿茸。生。フクロ。ナリ。雞雄イ爪。燒。鹿茸。生。フクロ。ナリ。

右七種等分ニ合テ鷹。七粒。兄鷹。五粒。豆ホド飼テ上餌ヲ如前カヘ。是ハナル、藥ナリ。又云。鰾鷹ノ肉調ルハ前ノ如シ。微溫湯ヲ以テ浴テ。後ニ闇處ニテ拳ニヲキテ。夜深ニ居テ二日アリテ鹽ヲ少シ加ヘテ。其後ニ七種ノ染藥ヲ日マセニ飼テ。野ワスレノ尿ヲツ

キテ田ニ出ヅ。染藥。牛膝。イノコツチノ根。何首烏。赤ウ。根ナリ。蓼葉ノ根。蘇芳。茶。好チ用。堅鹽。葉ブシ。

右等分ニ飴ノ如ク煎ジテ方一寸ニ切テ。兔ノ毛ニツ、ミテ飼。肥タルタカニハ梅バカリカヘ。瘦タルニハ染藥ヲ飼ズシテ。赤小豆ヲ人ノ食スルヨリ今少煮テ。其汁ヲ以テ餌ヲモミテ能シボリカフベシ。鷹チ伏テ。カフ。只カヘ。死セザル藥ナリ。其夕ニ赤荊ヲ煎ジテ。其シルヲ以テ餌ヲヒタシテ飼テ。其後ニ胡麻ノ油ヲ少シカヘ。スグレバ死ス。害アラバ鷹飼ノ小指ノ血ヲ出シテ飼。左チ朱イ。用。イヘザレバ鷲ノ羽ヲ燒テ米ヲ摺テ其ト細末シテ各一分飼フ。其ノチ常ノ餌ヲカヘ。又蓬萊ノ若根ヲツキシボリ。檀紙ニシメシテホシテ細ニキザミテ飼。七日ノ間ニ二三度はヲカヘ。餌ヲ與ル度々ニ呼飼ヨ。如此ナレバ五六日ニ呼餌ニツキテ懷



ナル。ナツク氣ヲシラント思バ。ヲキエニ  
シガミ付テ放サズシテシカモシタルシ。  
七日ト申ス日野ニ出テミレバ。空ヲミズ  
シテ艸ヲマモリテ。韞ヲツヨク踏テ。頻ニ  
主ノ腰ヲミル也。目前ニカタブキ。黒マナ

コ大ニナリテ白眼ワヅカニナル也。如此  
有トモ其日ニ放チガタクバ。生鳥ヲ以テ  
飼テ次ノ日放ツベシ。七日ニ放ツ鷹ニモ。  
卵ノトキ白藥ヲ飼テ。申ノ時ニ放ツベシ。

又云。九日ニ放ベキニハ。流ル水ノ上ニ竹ノ  
架ヲ結テ一夜繫テ。次ノ日ヨリ山アザミヲ  
飼。男ノ小兒ノ百日ヨリ内ノ尿ナリ。燒テ棗ホドニ大ニ四ツ小ニ  
三ツ飼。其後ニ當ノ餌ヲヨク洗テ呼飼ヲヲ  
トメズ。餘ハ前ノ如ク調ヨ。骨アルタカ。

骨ナキタカヲミテ藥ノ多少ヲカヘ。逃ザル  
藥也。内ヲスカシテ放ツベキ也。モシ日數過  
バ餌ヲカヘ。又七日ニ合スルニハ。早ク夜

捉。鹽ニヒンセウ少シ。粟粒ホド加ヨ。天地水ヲ以テ  
鹽ヲカタメテ。三丸鳥ノ肉ニ押合テ飼也。藥  
ヲコボサバ伏テカフコトモアリ。藥ノ勢ハ  
榎ノ實ホド。多少ハ鷹ニ依ベシ。ミドリノ架  
ニツナグベシ。

又云。前ノ如ク調テ。硫黃ヲ方寸ノ升ニ一升  
與ヨ。過タラバ小豆鳥ノ羽ヲ合セテ煎ジテ。  
其汁ヲ餌ニシメテカヘ。若大事ナラバ山ア  
ザミト但不燒之シテ干也。七才ノ兒ノ男女ノ爪ヲ取テ  
抹メ合。餌ニツハミテアタヘヨ。其ニモ叶ハ  
ズバ忍澤ノ水ヲ目ニヌレ。内ニモ飼ベシ。  
又云。隼ナドヲバ走架ニツナグベシ。鷹ニモ  
興アルナリ。

或問。巢鷹ヲ調コトハ何トアルゾヤ。

答云。鷹經ノ如キハ。毛羽漸々ニ調リ。繫聲  
ル時ニ及テ。肉ヲ以テ呼カフコト鰓鷹ニ同  
ジ。如此スルコト十日也。其後ニ雛ノ雛ヲ以

テ捉與ヨ。如此スルコト五六度シテ後ニ。田  
ニ出テ野雞ニ放テ雌雄ヲイハズ捉飼ベシ。  
如此シテ後ニ其肥瘦ニ隨テ飢飽ヲワキマフ  
ベシ。今按。經ノ如ク尤妙ナリ。但雛ニトリ  
カフコトハ。其時分ヲヨクハカルベキ也。早  
トキハ鳥ヲ捉心ナシ。ヲソキトキモ亦其氣  
ヲ失ナリ。然バタカノ學習ノ月ト云テ六月  
ヲ本トス。此月ニ及テ雞雛ノ雛ニ捉飼ベキ  
ナリ。但經ニ捉カフコト五六度ト云ヘリ。強  
ニ雛ノ弱キ鳥ヲカヘバ。野雞ノツヨキヲト  
ルコトナシ。初ハ弱雛ヲカヘドモ。次第々々  
ニツヨク飛鳥ニ捉飼テ。後ニ野雞ニ合ベキ  
ナリ。一寄ニ捉トキハシカリ。若艸ニ追落テ  
鷹艸ニ心ヲ付バ。兼テヨリ生雛ヲ以テ其勞  
ノ鳥ノ如モテナシテアタヘヨ。是ハツカレ  
ノトリナクンバ如此ナルベシ。トリヲトリ  
タル所ヘアラクヨルベカラス。

爰ニ古人云。巢鷹ヲ調入コトハ。糊毛ノ時ハ  
藁ヲ以テフゴヲ作り。蓬ヲ多敷テ巢ノヤウ  
ニシテナスベシ。新キ餌ヲ骨ヲ細ニシテタ  
ハキテアタヘヨ。糊毛牙花毛マデハ餌ヲ洗  
ズシテ飽マデカフ。但サノミアクトキハ。ヒ  
ジトツバサト曲テ醜シ。又毛村濃ニナリテ  
ハトキ々々洗テアタヘヨ。一日ニ一度二度  
カイ定ムベキ也。一ノ羽漸ク生定テ足緒ヲ  
着テ擎ヨ。糊毛ヨリ諸ノ物ヲミセ付ヨ。巢タ  
カハ後ニ羅鷹ヨリモ物駭ラスルコトアリ。  
足緒サシテ外架ニ常々繫テ。日ニ向ヘテ背  
ヲ炙ヨ。尾羽調テ水ヲ浴コト二日三日或毎  
日浴セヨ。手ヲ放サズ擎ベキナリ。次第々々  
ニ置繩ヲサシテ呼ベキナリ。巢タカノサノ  
ミ懷タルハ人シタルシ。シカラバトリヲ心  
ニ入ズ。少シアラキハ好ベキナリ。手放ノ日  
ハ何ニテモ得ルニマカセテ捉カフベキナ

リ。毛羽調テ後。鷄ノ赤女鳥ノ臂ヲ細ニタ、キテ。微溫湯ヲ多シテカフ。後ニ堅鹽ヲ少カフベシ。

或問。鳥屋出ノ鷹ヲ調コト如何。

答云。其說マチ／＼ナリトイヘドモ。掌飼ノ學得タルヤウニヨルベキカ。然バ古人ノ說法アリ。爰ニ鳥屋鷹ヲバ六日ノ内ニ放ト云ハ。鳥屋ノ内ニテ鷄ノ赤雌ノ胸ヲ穴ヲ細ニクダキテ。水ヲ多クシメテ飼テ。後ニ尿ノヤウヲ見テ。堅鹽ヲ少カフテ水ヲバノマセヨ。水ヲカフコト一日ニ三度ナルベシ。但スギテハクルシカラス。當ノ餌ヲ橘ノ大キナルホド與ヨ。或人云。堅鹽ヲカフテ其夕ベニ及テ。牛膝ノ根。鳥ノ羽。藤瘤三種ヲ末ニシテエヲヒキカフ也。湯ヲ常ニカフテ。其後常ニ夜捉澤ノ水ヲカヘ。六日ノ内ニ水ヲ三度アビセヨ。イヅレモ三日前ヨリエヲ洗テカヘ。

又ハ十日前ヨリ肉ヲ調テ出スベシ。次ノ日ハ心ヨク休ヨ。其後ニハ掌飼ニ心ヲ任。鷹鰓ノ思ヲナシ調ベキ也。呼聲ハウエイ／＼ト呼ベシ。出テ三日メニハ曉ヨリスヘテ。日ノ出ルニムカヘアテ、後ニツナグベシ。四日五日メノ兩夜ハ終夜ツナゲヨ。六日メニハツナガズシテ休ムベシ。七日八日兩夜ハ終夜通スベシ。九日メニハ當餌ヲ以テ延呼ベシ。何モ洗餌ヲカヘ。夜肇ノヤウモ其タカノ心ニヨルベキナレバ定ガタカルベシ。

條々藥ト云ハ其掌飼ノ心ニヨルベシ。醫ト云ハ其掌飼ノ心ヲ云ナリ。上智ト下愚ニヨルベシ。

或問。鳥屋ヲバ何トコシラユルゾヤ。

答云。經ニハヒロサ一丈余ト云リ。一方ノ中ニ石ヲオク也。是ハ大キナリ。常ニ用ルヨシ。

例式ノヲバ放鳥屋ト云也。

又云。ムシ鳥屋ト云テ。毛カタク鷹ナドニハ。イカニモ鳥屋ヲ細クツクリ。水ヲ入ズシテ。マハリノ内ニ檜ノ葉カラ蓬ナドヲカケテ。外ヨリ雨ノモラヌヤウニシテ。下ニ鳥<sup>馬イ</sup>ノ屎ヲアツクヲキテ。日ノアタルコトハ何モ同ジ。此鳥屋毎ニ人參散ヲアタヘヨ。  
或問。タカ一聰ト云ハイカホドゾヤ。

答云。數七ツノコトナリ。古ヘ巢一ツニ七ツ生タリ。其ヨリ一聰ト云也。一架トモ云ベシ。鈴一サシト云モ七ツノコト也。但一羽ニ用之。

又云。鷹一足ト云コトハ鄙語ナリ。又口傳コレ有。

又云。一羽二羽ト云ベキナリ。只一ツ二ツトモ云也。

又云。タカノ鈴ヲバサセトケト云ヒ。犬ノ鈴

ヲバカケヨハヅセヨトイフナリ。又高所ヨリ呼タルヲバヲキヲトスト云ベシ。平地亦河ナドヲ隔テヲキタルヲバ呼渡スト云也

又云。條ノアルトキハヤルヲバ。ヒツキラウトハヤルト云也。

又云。足緒バカリノトキハヤルヲバ。ヒツキテハヤルト云ベキナリ。時ハヤルヲバ此句ヨシ。ノ指ヤウ可尋也。時□ハヤルヲバ若如此ナリ。

或問。タカノヲキ聲ノヤウアリヤ。

答云。其シナアリ。家ニ云。ヨウ／＼エイエイヲウ／＼。聲ヲ引テ七聲半ニ呼ベシ。神家ニハトウ／＼／＼トウ／＼／＼トウ／＼ト聲ヲ引テ。是モ七聲半ニ呼ベシ。

又云。鳥屋出テ又ハ鰻鷹ナドノヲキ聲。ハウエイ／＼ト云ベキ歟。

或問。鳥又鶺鴒ナドヲバ何ト起タル。又何ト取タルト云ベキゾヤ。



答云。鷹ニハフツトタツ鳥。ハツト放テトウト取タルト云也。鶺鴒ヲバヒツトヒツタト合テ。チウト取セタルト云ベキナリ。

或問。カリ屋形ナドニテ。俄ニ架ナドヲバ何ト結テヨキゾヤ。

答云。定レルヤウナシトイヘドモ其法度アリ。先チイサキ柴ヲ甘バカリ切テ。本ヲソギツキ立テ。木ノ末ヲ引チガヘテ結テ。ホコハリニハ行滕ヲカケヨ。毛ヲ面ニナスベシ。當世ハヒツシキヲ用ヨ。



如此葛ヲ以テ三所ユフベシ。

或問。鷹ノ病ツキ色々知ベキコトアリヤ。

答云。先云ツクスト云ヘドモ其品粗シルセリ。壽長キ鷹ノ相形ハ。面ノ毛長ク脛ミジカク。毛ウスク毛スジフトシ。皮アツナルベシ。壽短キ相形ハ。面ノ毛短ク脛長ク。毛ムク／＼トシカモ繁ク生タルベキ也。

又云。兄鷹ノ相形ハ鷹ニ同ジ。サリナガラ頭眼コトニスグレテ大ナルベシ。

又云。鶺鴒ノ相形ハ瓶子ヲ立タルニ似タルベシト云ヘリ。又ヤセタル牛ニ板ヲ駄セタルガ如シトイヘリ。

又云。病ツクヲ辨ズルニハ。日比ヨリエヲツヨクハミ。又常ヨリモクハザルモ病ツクナリ。

又云。愁ノ毛ヲ立テ目ヲホソク見。頭ヲツネニフラバ。背ヲウチタルト辨フベキナリ。

又云。マメニ愁毛ヲ立テ胸餌ヲハマバ病ツ

クト知ベシ。又ヌスミハミヲ思出テモスル  
コトナリ。

又云。眼ヲ細クシテ毛ノ根ヲタテ。手振ヲシ  
カネバ胴ヲ打タルト辨フベキ也。又胴ヲ打  
タルニモ品多カルベシ。

又云。夜知毛シメラバ必病ツクベシ。サラサ  
ラトアラバ心ヨシト思ベシ。

又云。シルシノ毛ヲ立ハ快カト思ヘ。

又云。脚絆例ヨリクツロガバ足ハルハナリ。

又云。鷹ハ常ノ如ク肥テ鷯ヲヨハクバ。羽ヲ  
打タルト思ベシ。

又云。尾ヲ常ヨリモヒロゲテミヘバ。鳥尻ヲ  
ツキタルカト思ヘ。

又云。何ニテモヤマイツクタカハ熱氣有ベ  
シ。シカラバ朝外架へ出スニモ。素手ニテ鷹  
ノネツキヲミルベシ。

又云。熱氣ヲウラセント思ハバ。突金ノ根。

鳥尻ノ上ニ炙セヨ。〔灸點以下灸之〕ネツキサルベシ。

又云。ヤマイツキタルタカ。雜ノ小鳥ヲミテ  
ハヤリ。又水ヲミテハヤラバ必ズ死スベキ  
ナリ。

或問。鳥ヲ臺ニ居ヤウアリヤ。

答云。其様アリ。タトヘバ左ニ記ス如シ。

貴人ノ前右ノ膝ノ本ニヲク。





春ハ雌ヲ上ニ置。雄ヲ下ニヲクベシ。秋冬ハ雄ヲ上ニ置ベシ。折敷ノ角チガヒニ置ナリ。又云。鳥一ツ置トキモ如此角チガヒニ居ベシ。

### 鷹經辨疑論下

陶弘景ガ言ルコトアリ。曰。夫生民ノナス所。大ナル患ハ疾疹ヨリ急ナルハナシ。疹而モ治セザルハ。火ヲ救ニ水ヲ以テセザルガ如シ。人既ニ如此。物モ亦宜然。鷹ノ病ノ如キニ至テハイマダ前論アラズ。後周ノ魏收近シテ略述タリ。今又引テ是ヲ後ニ別ツ。

或問。鷹ノ病ト云ハ幾般カアル。

答云。經ニハ十三病ト記サレタリ。秦皇ノ論セルハ六十一病トシルセリ。近代ノ傳古人ノ語粗後ニ記ス。

經云。目ノ病ハ調養ノ精カラザルガ致所ナリ。ウカバヒ見ルニ。眼ヲ以テ肩ヲ摩ハ。眼ノ輪漸々腫。眼幕（モロ）オコリ出テ黑人湯ル。是ナリ。

藥云。黃連ヲ煮テ鳥ノ羽ヲ以テ屑ニヌルベシ。目ニ及テ驗アリ。又鹽ヲ研テ酢ニ和シテ塗ベシ。是ハ劣レリ。

又云。目翳トハ目ニマケ生ズルナリ。

藥云。龍膽ヲ採テ折レバ汁ノ出ルヲ塗ベシ。一方ニ數ノ蠅ノ首ヲ取テ。銅ヲ以テ研テ付ヨ。

右經ノ說。

又云。目クサト云ハ。眼ヲ初ハ閉テ肩ヲ摩リ

仰也。目ノ前腰ノ本ヲ合テ炙ス。油尾ノ上三寸ヲ炙ヒヨ。

藥云。丁香。生姜。是ヲ煎ジテ洗ベシ。

又云。打目ヲ治スル方。

驚ノ羽。黑燒。枳。粉。杏仁。粉。明礬。スキダウサ。唐墨。

右等分ニ合テ。タン中ノ水ヲ以テ解テ目ニヌル。

一方ニ龍腦。熊ノ膽。麝香。

右等分ニ合テマブタヲ引上テ入ヨ。

一方ニ鵝ノ羽。黑燒。朱。明礬。エン砂。麝香。

右粉ニシテ吹入ヨ。

一方ニ枳ヲ粉ニシテ吹入ヨ。

一方ニ唐墨ヲタン中ノ水ニトキテ入ヨ。  
イユ。

一方ニ紫金香ヲ入ヨ。

又云。目ノ惡ヲ治スル方。ソレヲ見ルニ。目ヲ引淚ヲタレ尾ヲサス也。目カシラヨリ淡立テ盲也。メシイル目ノ前ノ旋毛ニ炙ス。ツシケ

藥云。野老ヲ洗テ削テ熱湯ニ入。中へ溫ヲ通ス。ワサビヲオロシテ皆抹シテ。鵝ノ羽。黑燒。鷄羽。燒。唐墨。

右等分ニ合テ目ニ入ヨ。又粉ニシテ吹入ヨ。

又云。病ノ相。目ヲフサギ頭ヲタレ。餌ヲ食セズシテ毛ヲサシクツログルナリ。初ハ目ヲシゲクヒク也。

藥云。鴨ヲ餌ニカウ。同血ヲモカヘ。

一方ニ犬ノ尻ト云草ヲモミテ汁ヲ吹入ヨ。

一方ニ鳥ノ羽枳ヲ粉ニシテ入ヨ。

一方ニ貂ノ骨ヲコソゲテ木壺ノ水ニテ入ヨ。



一方ニ蝨ヲ煎ジテユデヨ。

一方ニ雨鳥屋ニツナグベシ。雨トヤト云ハ。上ニ小ザ、ヲ伏テ。其上ニ蓬ヲフケ。

檜葉ヲモ良トス。

一方ニ好檜脂ニ黃檗ヲ粉ニシテ合テ付ヨ。イユ。

一方ニ水銀ノ淡ヲ掌ニテツバキニマゼテ入ヨ。

又云。目ニヒノイリタルニハ。

藥云。葉甘艸。燒。ヒル。莖。燒。卵ノ木ノ白皮。燒。

右等分ニ合テカヘ。茗荷ノ汁ヲ入ヨ。又ツキタルニモヨシ。

又云。麻(マ)ツアラバサイカジノ汁又ツ、ジノ汁ヲ入テモヨシ。

或曰。鼻ノ塞ヲバ如何スベキヤ。

答云。種々ノ療治アリ。重キトキハ害アリ。

鼻氣ノ方。鼻ノ塞ル時ハ鳴聲美ナラズ。鵞ガ翥シノ後急ニ喘ギ鼻ノ孔鳴ルナリ。即鷹トウヲ鵞字以爲加フ偃臥アギトテ。紙針ヲ以テ清タル胡麻ノ油ヲ著アギトテ。齒ハノ孔ニヌリテ。鼻ノ孔ヨリ吸トリテ油氣ヲ去ベシ。其後藥ヲ入ヨ。

一方ニ口ヲ漱テ冷水ヲ含。タ、シク鼻ノ孔ニ吹入ヨ。愈ルヲ以テ限トス。但水ヲ吹コトハ昏ト曉ヲ用ル也。晝ハ吹ベカラズ。水ヲツノグニ習テ常ニ人ノ面ヲ恐ル也。一方ニ突金トツキンノ上。額ノ下毛陰毛作處ノ際ニ三炷灸セヨ。猶イヘズバ兩目ノ旋毛陰毛作處ヲ夾テ三炷灸セヨ。猶病重ク目ノ上ト口ノ中頷ノ下強ク腫ルモ。即亦鷹トウヲ偃テ刀針ヲ以テ割出セ。口腫レバ既ニコレヲ割テ。後ニ鈎カギヲ以テ是ヲサルベシ。其色ハ赤ク白ク凝ル。熊ノ脂ノ如シ。又腎ノ塞タルモ此候アリ。

右經ノ說。

一方ニ灸所ハ前ノ如シ。紙ヲタ、ミテ溫メ。紙ノ裏ノアタ、カニナルホド三炷アツベシ。但火ノ氣ヌルキ時ハキカズ。過レバ不可也。

藥云。檀。苦辛。<sup>苦イ</sup>百艸。

右煎ジテカヘ。ウスク煎ズベシ。灸スルニハ餅氷ヲ嚙テ平メテ。其上ヲ艾ニテ灸スベシ。アトツカヌヲ良トス。

一方ニ先紙ヨリヲ以テ孔ヲヒネリ通シテ。後ニ丁香ヲ粉ニシテ吹入ヨ。餌ヲバ榎ニ卷タル木通<sup>アケビノツルナリ</sup>ヲ煎ジテアラヒテカヘ。

一方ニ芹ノ白クキヲ以テ通ス。

一方ニ芹ノ根ヲ剉テ。一錢酢ニ清胡麻ノ生油ヲ等分ニ合テ浸テ。<sup>夏ハ三夜。冬ハ二夜。</sup>鼻ノ孔ヲヨクツキ通テ。<sup>アキト</sup>鴈ヲアケテネバリヲ取テ此藥ヲ入ヨ。又紫大根ヲ細クケヅリテサ

スベシ。

一方ニ口ヲアケテ上ノ髯ノヒサキノクボキ所ヲ夾テ。兩方ヲ火針ニテ燒ベシ。又目ノ前ヲ檀紙燒ニ灸スベシ。夏ハ常ニアメニアツベシ。胡麻ノ油ヲ鼻ニ入ヨ。

一方ニ辛薤<sup>ニラ</sup>ヲ粉ニシテ兄鷹ニ三九。鷹ニ五九。每朝七日飼ベシ。

一方ニ丁香。麝香。田ノ漚。

右等分ニ合テ餌ニ合テ飼ベシ。

一方ニ川芎。丁香。何モ粉ニシテ等分ニ合テカヘ。又鼻ニモ入ベシ。

一方ニ蛇ヲ餌ニツ、ミテ飼。

一方ニ人參。甘艸。干棗。

右煎ジテ能餌ヲ混ソカヘ。大事ナラバ偃テ紫大根ヲ細クケヅリ鼻ニ入。如何ニモヤハラカニ捻リ入テ。後ニ辛荳<sup>ニンニク</sup>ヲコンゲテ少鼻ニ入ヨ。

又云。鼻茸ヲ治スル方。鼻タケト云ハ孔ヨリ物ノ白ク生出ナリ。

藥云。七月七日ノ午ノ刻ヨリ前ニ蟬ヲ取テ。陰干ニシテ粉ニシタルト銅粉。何レモ木坪ノ水ニ解テカヘ。猶イヘズバ河薤ヲ細ニシテカヘ。鳥尾<sup>尾イ</sup>ノ上ヲ灸ス。

一方ニ沉香。銀ノ屑。朽タル梨子。

右等分ニ合テカヘ。

一方ニ朽タル梨ヲキザミ。小豆程ニ三

丸カヘ。多時ハ惡シ。

一方ニ熊膽。丁香。干姜。

右等分ニ合テ酢ニトキテ入ヨ。灸所ハ突

金ノ根ナリ。

一方ニ柑子ノ汁ヲ少入ヨ。又葵ヲ細クケ

ヅリテ。火ニ焙リテ鼻ノ孔ニ入ヨ。

一方ニ山モヽノ粉ヲ少シ孔ニ入ヨ。何レ

モ過レバ惡シ。

一方ニ丁子ヲ細クケヅリ。楊枝ノヤウニカミテ。鼻ノ孔ノソコヲハラフベシ。底ニハ鼻カタマリ有ベシ。取テ後ニ藥ヲ入ヨ。一方ニ頭ノツキメヲ並テ小指ヲフセテ隔テ兩方ニ三炷灸ス。サテ夜ハ外架ニツナギテ露嵐ニアテヨ。

右四ヶ條ハ鼻氣ニモ用ナリ。

一方ニ微溫湯ヲ以テ鼻ノ穴ヲ洗テ。楊枝ヲ以テ鼻クソヲ取テ。細大根ヲアナヨリクチヘヒネリ通シテ。後ニ丁香。菰木。米ノ酢ニトキテ穴ノ中ヘサスベシ。生姜ヲモ加ヘヨ。

或問。屎ヲツカズシテ面目腫ル、病ハ何ト云ヤ。

答云。是ハ惡キ餌ヲカフニ依テ。痢結シテ尻フサガル也。十死一生ノ病ナルベシ。

腎ノ塞ルヲ治スル方。尻ノフサガラント

スルトキハ。常ニ餌ヲ嗜。夥カラズシテ飽  
キ。後ニ尾ヲアゲテシバ、ウチツキ搖フナリ。其  
矢放難シ。頰ノ毛寒ク立テ目ノ輪及眥眼  
ノ間腫ルナリ。即鷹ヲフセテ紙鍼ヲ以テ  
清胡麻ノ油ヲヌリテ孔ノ中ニ入。病オモキ  
時ハ紙針  
ノ前ニ鹽ヲ付  
テ穴ニ入ヨ然後ニ好餌ヲ調テ與ヨ。其矢ノ  
カタキコト石ノ如シ。

### 右經ノ說。

今按。我此病ヲ見ルコト繁シ。其形ハ先架  
ノ上ニシテ眠テ頭ヲ低ル也。涎ヲゴボシ  
テ次第ニ腰タ、ズシテ。尾バカリヤウ  
ノ搖スナリ。前ノ如ク治シテ差ルコト  
ヲ得タリ。初ハ紙針ニ油ヲ付テ入テ。後ニ  
鹽ヲ少ツケテ入ルナリ。サテ孔ノ中ヲサ  
グレバ硬物アリ。其ヲ少ヅ、ホリ取テ鹽  
ヲ又サシ入ヨ。屎ツキ出スヲ見レバ石灰  
ノ如クナリ。又ウス黒シテクサシ。其後水

ノ如クシゲクツク時ニ。米ノ粉ヲ下氣ノ  
療治ノ如クシテ飼ベシ。鷹心ヅカバヨキ  
餌ヲ少ヅ、飼ノシテ平ナリキ。

藥云。犀角丸ヲ豆ホドニ餌ニマキテ哺ベ  
シ。此藥ニテ平ナリキ。

一方ニ解毒萬病圓ヲ飼テ平ナリキ。又ツ  
ラ腫レバ犬ノ尻ト云艸ヲモミテ汁ヲ面ニ  
吹ベシ。此病ハ惡キ餌ヲカフニヨレリ。

一方ニ大サゲサキ。五倍子。藍ノ葉。葉ヲンチ。  
銅。紫シ粗タンノ木。麝香。鹿茸。甘艸。大黃。

右粉ニシテ哺ベシ。

或問。足ノ腫ルコト其源何ニヨリテ發ゾヤ。

答云。アシ緒革ノフルキニヨリ。又生得鷹ノ  
指肉多クシテ色ノ黃ナルハ腫ル也。又架ノ  
上ニ久ク繫テヲクニ依テ腫ルナリ。

脚ノ腫ヲ治スル方。付股引  
又魚目先鷹ヲフセテ

針ヲ以テ周遍腫ノ上ヲ刺。悉ク滑液惡血



ヲ去テ。即銅ノ針ヲヤキテ針ノ孔ゴトニ  
二三度サシテ猶イヘズバ。火針ヲ數ナク  
焼ベシ。然ドモ重クテ治シガタキハ終其  
脚曲損ス。此病ハ羅鷹ニ稀ナリ。巢鷹ニ稍  
多シ。格ニツナグニハ。柔懷ナル物ニテ架  
ヲ卷テ繫ベシ。寒キ時ハ葦ノカハヲ用ユ。  
暖ナル時ハ薦ノ葦ヲ用ユルナリ。脚爪ト  
云ナリ。謂曰又爲病藥所誤而謂者詳讀前酢後之  
三字經ニナシ初兆時ハ鹽ヲ酢ニ和シテヌルベ  
シ。夕部ニヌリテ朝ニ洗ベシ。鷹鹽ヲ食テ  
害アリ。

右經ノ說。

今按。針ヲ用ルコトナカレ。藥ヲ塗テ鳥屋  
ニ放ベシ。

一方ニ猫ノ骨ノサレタルヲ粉ニシテ。上  
ヲツハミテ火ニアブルベシ。

一方ニ辛螺ノカラヲヌリテイユ。

一方ニユリノ根。卯ノ木ノ白皮。黏。不入油  
用之。

漆。辛螺ノ蛻。

右等分ニ合テツケヨ。酢ニテ付テ上ニ紙  
ヲモミテ付ヨ。

一方ニ滑海藻。サイカジノ實。伊豫砥屑。  
右等分ニ合テ古酒ニ銅ヲ出シテ其汁ニテ  
付ヨ。

一方ニ鳥貝ヲ繫ニテ上ヲツハミテ。土器  
ニ入テ焼テ米ノ酢ニテ付ヨ。

一方ニ爪ノサキヨリ血ヲ出シテ。指ノ頭  
ニ銅ノ燐ヲ以テ溫テ。雄黃ヲ酢ニテトキ  
テ付ヨ。

一方ニ猫ノ頭ヲ焼テ酢ニ合テ付ヨ。又ス  
ミレ艸ヲ酢ニテトキ付ケヨ。

一方ニ犬蓼ノ穗ヲ陰干ニシテ粉ニシテ塗  
ベシ。

一方ニ南星蜷ヲネヤシテ交テ付テ。上ニ  
紙ヲ付ヨ。

一方ニ鹽ヲ溫テ以テ能々ユデ。後ニ冷シテ菟ノ角ト鹽ト等分ニ合テ。阿膠ヲトキテ續飯ノヤウニ合テ塗テ紙ヲ切テ付ヨ。一方ニ雪ノ下草。燒。早稻藁<sup>燒節ナ</sup>用ユ。酢ニテトキテ付ヨ。

一方ニ栗ノ木ノ蟻ノ子ヲ取テ。檜脂ニテモ押マゼテ付ヨ。

一方ニ腫タル所ニ灸ラス。燒所クヅル、程燒ナリ。其後ニ蟪。藤瘤。粉。麝香。沉香。粉。朱。松茸ノ石ツキ。粉。用之。各等分ニ抹シテ阿膠ヲトキテネヤシ合テ付ヨ。其上ニ紙ヲモミテ付ヨ。又上ヲ麻ニテ卷テヌルデヲ付ヨ。但瘦タル鷹ニハ麝香ヲ不入也。藥ヲカキテ餌ニウトムコトアリ。

又云。足カラミト云ハ腫テ瘤ノヤウニ出ナリ。藤瘤ヲ煎ジヲ冷シテ。タライニ放チ入テユデヨ。サテ銀刀ヲ以テ足ノ裏ヲ刺ワリテ。

餅ノ粥ノ如ナル物ヲ去テ藥湯ニテ洗ベシ。

藥云。牛ノ皮。燒。鹿茸。粉。雪下草。燒。唐墨。天南星。粉。麻ノ根。燒。カラムシヲモ用ナリ。各等分ニ合テ阿膠ニテ解テ付ヨ。

一方ニ車前草。蓮ノ葉。藤瘤。是等ヲ煎ジシテユデ、後ニ。<sup>服支脂</sup>

藥云。南星。雪ノ下艸。唐ノ芋ノ根。丁香。牛ノ皮。燒。鹿茸。各等分ニシテ阿膠ニテトキ付ヨ。餅ソクイモ少入ヨ。

又云。魚ノ目ノ出タル方。黃檗ヲコク煎ジテユデ、。脫タラバ小麥藁ヲ黑燒ニシテ付ヨ。一方ニ銀針ヲ以テ彫取テ。芋ヲ燒テヌルデニテ合シテ跡ヘ入ヨ。銅ノ燭ヲ上ニアツベシ。

又云。足ニ物ノワキ出テ。瘤ノヤウナルヲ治スル方ハ。堅阿膠ヲトキテ續飯ヲ合テ付ヨ。其上ニ紙ヲ付テ置バイユ。

又云。井切ヲ治スル方。金毛ノ狗脊ノ毛ヲモミ付ヨ。

一方ニ百艸ノ霜。茶。等分ニ合テ糊ニ合テ付ベシ。何モノ、ツクリ足ヲ、サスナリ。一方ニハウクリ蘭ノコト。根丸ク角ノ前ノ如ナルヲ紙ニ包。ヌラシテアツキ灰ニ入テ。暫ク有テ取テ皮ヲ剝。布ニ包テシメ出シ。糊ノヤウニネヤシテ。蛇骨ヲ合テ等分ニシテ付ヨ。藥ノ上ヲ綿ニテ卷ベシ。其上ニモスルデヲ付ヨ。其上ニハ土器ノ粉ヲ付ヨ。一方ニ柿ノ核ヲ燒テ茶續飯ニ押合テ付ヨ。

又云。脛ノ折タルヲ繼グ方。カントコロ干。檀皮。燒。等分ニ合テ疵ニ付ヨ。井柳ヲケヅリテアミテ卷テ蓬ノ葉ヲ以テ卷ベシ。鳥屋ニ放ベシ。

一方ニ井柳ヲ削テアミテ卷テ。銅屑ヲ餌

ニマゼテ哺ベシ。

一方ニ王不留。行草ヲスリテ塗り。上ヲ井柳ヲ以テ卷ベシ。内藥田蕎麥ヲ燒テ酒ニテケシテ哺ベシ。リウゴ錢ヲ粉ニシテ加ヘヨ。又伏龍肝ヲモ加ヘヨ。

一方ニ前ノ如ク井柳ヲ以テ卷テ。苦菜。蛇。天南星。

右苦菜ヲスリテ殘ニ色ヲ粉ニシテ酢ニテ解テ付ヨ。チガヒ藥也。内藥ニハ疵ノ内藥ヲ哺ベシ。

又云。股ト蹇タルヲ治スル方。革毛ノ馬ノ血。カントコロノ干粉。右竹ノ切口ニタマリテアル水ヲ以テトキテ飼也。

一方ニ茯神。甘艸。沉香。藥師草。右等分ニ粒ニシテ井柳ヲ煎物ニテカヘ。チガヒ藥ヲ付ヨ。

一方ニ袋角。銅屑。伏龍肝。三種等分ニ合。

便々蟲一疋ヲ三度ニカヘ。堂宮ノ下ニホ  
リ入テ角ニツアル蟲ナリ。羽ヲカキタル  
ニモ良之。

又云。脚ノ疣ヲ治スル方。先鷹ヲ伏テ杏仁十  
枚ヲ研テ絹ヲ以テツヽミ付ヨ。再三付カヘ  
ヨ。愈ルヲカギリトス。

或問。股腹ノ毛ヲ嚙脫事ハ何ゾヤ。

答云。療治アリ。巴豆和莖一枚。中ヲサキ一片ヲ

取テ。其三分胡麻ノ油經云胡麻油二合更有三部藥其和之乃以水  
銀和藥子三枚隨頭之一合。水銀粟ノ子。三  
枚交テ是ヲカヘ。

一方ニ葵ノ莖ヲ日ナタニホシテ燒テ。湯  
ヲ以テ淋テ良之。

一方ニ雄黃ヲ酢ニ和シテ毛ヲ洗ヘ。但未  
試ナリ。

一方ニ鷹ヲ僵テ毛ヲヌラシテ。銀針ヲ以  
テ瘡ノ如ク赤キ所ヲ少ヅヽサシテ血ヲ出  
シテ。水銀ヲ掌ノ内ニ置テ丹ヲ合テ腹ニ

ヌルベシ。

又云。羽ヲ嚙脫ニハ熊ノ脂經云狗脂。苦瓜及瓜作茶ノワタヲ研  
テ和シテ塗ベシ。

一方ニ山茄子ヲアクニ燒テ。雄黃ヲ酢ニ  
合テ付ヨ。

又云。毛ヲカルニハ紅花ニシユイノ木リヤウフノコト也。燒。  
等分ニ合毛ヲヌラシテ塗ベシ。

或問。痒ト云ハ何ト療治スルゾヤ。

答云。經ニ云所ハ。痒ヲ治スルニハ。鷹ヲ伏  
テ先清水ヲ以テ洗テ。竹ノ筵經云竹筵ヲ以テ膚ノ上  
ヲ搔テ殆血氣ヲ出シテ。更ニ溫湯ヲ以テ清  
ク洗テ。水銀膏ヲ掌ノ上ニ置テ。唾ト混雜シ  
テ無名指ニスリテ塗之。

一方ニ酢ヲ以テ雄黃ヲ研テ瘡ニヌル。或  
脚付ヨ。或身體ニ付ヨ。毛ノ浮沉ニ隨テ奔  
行ナリ。大事ノ病ナリ。ツトメテ治スベ  
シ。



或問。血ヲ瀉スル鷹アリ。何ノ病ゾヤ。

答云。血ヲヒルコトハ經ニハ血痢ト曰。其病

ノ源ハ熱<sup>日ヲヘタル穴ナリ</sup>穴ヲ與ルニ依テヲコルナリ。然

ドモ俄ニヲコル事モアリ。諸ノ鷹ニ轉移

スルヲ見レバ人間ノ疫病ノ如シ。初テキ

ザス時ニ。生鳥ヲ以テ營哺テ肥スベシ。鷹

ニハ鵠ヲ與ヘ。鵠ニハ鶉雀ヲ與ヨ。十死ノ

病ナリ。古往今來治スル方ナシ。

或問。<sup>鷹云拾殺犬鷹鷹熱方トアリ此文可ナリ</sup>犬ニ噬レ鷹ニ探ル、疵ヲバ何ト療治ス

ルゾヤ。

答云。鷹ヲ僵テ疵ヲ露ニシテ。其中ノ毛ヲサ

リ燒テ。<sup>糲ニ屬テ作鳥司ナリ</sup>牛馬ノ脂ヲヌルベシ。又鵠ノ脂ヲ用

ユ。鵠ニハ鶉ノ脂ヲ用ルナリ。或ハ鵠ノ疾ノ

重キニハ牛ノ脂ヲ用ルナリ。凡此病ハ早ク

治スベキナリ。遲キ時ハ害アリ。

一方ニ山桃ノ皮ヲ削テ煎メ。コレヲ堅ク

チリテ付ヨ。

一方ニ犬ニクハレタルニハ。犬ノ毛ヲ黑  
燒ニシテ付ヨ。銅屑菟角ヲ餌ニツ、ミテ  
與ベシ。

又云。犬ノ牙ノ當タル療治。藤瘤。夜採タル  
楊ソクツ。胡葱。石菖蒲。各煎ジテ鹽ヲ少シ  
入テユデヨ。早ク洗ヘバヘラズ。一兩日過テ  
洗ベシ。サテ藥ヲ付ヨ。夜ハ鳥ノ脂ヲヌルベ  
シ。

一方ニ檜ヲ黑燒ニシテ付ヨ。

又云。犬ニクハレ木ニ當テヨリヲコル病ハ。

經ニハ內瘁ト云ナリ。<sup>左ニ屬アリ</sup>背ヨリ上頭ノ岐ノ下

左右ノ凹ナル處ヲ夾テ<sup>左ノ圖ニハ三條トアリ</sup>二炷。

一方ニ腰ニ三炷。又二ノ腋ノ下。五臟ノ穴

ニ各三炷灸ス。然後芒硝。虎珀。牛黃。龍

骨。四種等分ニ合テ。胡麻ノ油ニ和シテ。

豆子ノ如ニシテ。葦ノ管ヲ以テ口ニ入テ。

後二時バカリ有テ食ヲカヘ。但餌ヲ早ク

飼ベカラス。又短氣ナラバ頂上ヲ三炷燒。

又云。瘰ノ方。(金匱)白粉。カタバミ。人參。甘

艸。藤瘤。沉香。但犬ノ噬メニハ蚤虫ヲ除テ。

龍腦熊膽ヲ入ヨ。

一方ニ蚤虫。七。鼠糞。七。カタバミ。麝香。

白粉。人參。

右抹シテ等分ニ合テ與ヘヨ。

又云。餌ツ、ミ破タル方。先ヅ破タラバ人ノ

髮ノ毛ヲ以テ縫テ。瘰ニハキヤウリセンヲ



塗ベシ。内藥ニハ銅ノ屑ヲ與ヨ。

或問。胴茸ト云病ハ其形如何ヤウナルゾヤ。

答云。俗ニハ胴茸ト云。經ニハ肉癰ト云ナ

リ。人間ノ癰瘕積聚ノ如シ。調養ノ精シカラ

ズシテ此病ヲコルト云ヘリ。病ノ相ハ初兆

時ハ繁身振ヲシテ毛ヲタテオサム。或ハ振

ヒ中ニ振止リ。或時ハ毛ヲサシユルメテ亂

シ。或時ハ毛ヲツ、メテ斂。如此ナルコト重

シ。眸子寂寥トシテ黑眼チイサク。白眼大ニ

シテ遠物ヲ見時ノ眼ノ如シ。食ヲ哺フニ日

々ニ減ジテ。轉瘦癯テ食ヲ斷バ死。其害癰ヲ

披見バ或腫テ腹ノ下ニ着キ。或五臟ノ裏ニ

ツク。悉皆乾損スルナリ。腹ノ下ニ着者ハ刀

ヲ以テ披割テ。馬ノ尾ヲ以テ縫ト云ヘリ。未

試ナリ。凡此病ハ羅鷹ニ多得タリ。巢鷹ニハ

希ナリ。古往今來治スルニ方ナシ。

已上經ノ說。

爰ニ予此病ヲ試ニ。經ノ如ノ煩ハ第二三ノ骨ヨリ五倍子ノ如ナル物生出タリキ。又病ノ相ニ食ヲ例ヨリ哺コト日々減ジテ。身ヲスクメテ振コトナクシテ尾ヲ時々フリテ。暫アリテ身ウゴキノ時ハヲ<sup>罪</sup>ビヘ。少シ身ヨリヘカハリテ居タリ。其肉癰ハ第五六ノ骨ノ間ヨリ五倍子ノ如キナル物生出タリ。屎袋ニ生付タリ。經ニ云ル如ク。中ハ乾テ空ニテアリキ。哺餌ヲオスコトナカリキ。十死ナル病ナリ。灸治最妙ナリ。

藥云。家中ヨリ生タル笋干。大麥。

家ノ中ニ生タル

鼈甲。各抹シテ夜取澤ノ水ニ合テ。十七

八ノ月水。大ニ三小ニ二ツ哺ベシ。若シ瘡

ズバ初雪ノ降タルヲ竹ノ筒ニ入テ蓋ヲシ

テ。内ヘ水ノ入ヌヤウニシテ土ニ埋テ。六

月中旬ノ比ニ取テ。上ヲ洗テ廿日バカリ

乾テ取出セバ。朱ノ如ナルヲ鳥ノ羽ニテ

ハキテ鼈甲ト等分ニ合與ヨ。

一方ニ問藥曰。苧ノクズ。滑石。粉。苧ヲ引

ハリテ刀ヲ以テ刮テ屑ニシテ。滑石ノ粉

ト合テ。豆程ニ丸メ飼ヘ。生タル茸ヲツキ

トヲスナリ。然レバ食ヲ與テ治スベシ。ソ

バロニ打タラバ治スベカラズ。

一方ニ餌ヲオス藥ニハ。谷川ノ少蟹ヲタ

ハキテ細ニシテ。○ホドニシテ二丸バカ

リ哺ベシ。食ヲ押黏テ哺ベシ。

或問。胸氣ト云病ハ源ハ何ヨリ起ゾヤ。

答云。物ニフレテ血滯テオコルナリ。候見ニ

ハ脉アリ。脾骨サキト屎袋トノ間ニウゴキ

ヲトルベシ。指ヲ按ヘテ試ベシ。

藥云。人參。甘艸。生。地黃。茯苓。沉香。丁

香。四錢。鷹。藥師艸。右等分ニ合。麻ノ皮

ヲ剝テ卷合テ。黑燒ニシテ餌ニツミテ

哺ベシ。又鼻氣ニハ川芎ヲ粉ニシテ加入

ヨ。萬病圓ト號スルナリ。

一方ニ猫ノ頭。燒。人參。抹。甘艸。抹。麝。圓。燒。

藥師草。燒生。右等分ニ合テ哺ベシ。

一方ニ地黃。生。茯神。燒。人參。生。甘草。燒。

藥師草。燒。麻。燒。桂心。生。川芎。生。右等分ニ

合テ與ヨ。

一方ニ灸治方。三年ニナル茄子ノ香ノ物

ヲ熱湯ニ入テ鹽ヲ出シテ。紙ヲヌラシテ

毛ヲ分テ骨四ノ間ヲ灸ス。紙ノ上ニ香ノ

物ヲ重ヌベシ。七火灸ス。鳥ノ尻ツキタル

ニモ此灸良之。

人參散。人參。一兩。甘艸。一兩。巴豆。三粒。木

香。三兩。忌火。藿香。三兩。檳榔子。一兩。縮砂。一兩。

沉香。一兩。桂心。一兩。忌火。丁香。一兩。茯苓。一兩。

藥師草。一兩。麝香。一朱。野菊。一兩。

右粉ニシテ甘葛ニ合。勢ハ黍ホドニスベ

シ。大。五。小。三。鵲。二。雀。一。雀ノ胸ノ穴

ニツ、ミテ哺ベシ。ヤカラ瀉藥ヲ哺ハツ

ヨキ間。瘦鷹ニハ用捨アリ

神家。人參散。

人參。一錢。藥師藥。同。忌火。巴豆。三粒。去油。甘艸。

半錢。丁香。一字。銅屑。半錢。土龍。同。兎角。

一錢。蛇骨。半錢。麝香。同。沉香。同。右合テ

丸コト茱萸ノセイナリ。大三。小二。哺ベ

シ。

一方ニ麝香。甘艸。梨。柑子。兎角。松ノ根。

獐ノ居敷アルヲ用之。蛭。各等分ニ合。餌ニツ、ミ七ツ

、毎日七日哺ベシ。瘥スハ三七日良之。

一方ニ兎角。蛇細腸。黑燒。麝香。各合テ雀

ノ胸ノ穴ニツ、ミ三裏ニシテ哺。息氣ニ

モヨシ。萬病圓ト用之。

一方ニ人參。一兩。甘艸。一兩。茯苓。一兩。鹿

角。一兩。藥師艸。一兩。麒麟艸。一兩。虎肉。

二分。干麻。二分。沉香。二分。右此内干麻ト



虎肉トヲ半分入ベシ。何モ粉ニシテ餌ニツ、ミ哺ベシ。

又云。胴ヲ打タル方。藥師艸ノ青汁ヲ揉出シテ哺ベシ。餌ニツ、ミテ三丸與ヨ。□草ヲキザミテモ哺ベシ。

一方ニ堅鹽ヲ哺ベシ。ヤガテ水ヲ與ヨ。

又云。胴血ト云テ物ニ觸テ血腹ノ内ニ止テ喘ナリ。白鳥馬イノ夜眼ヲコソゲテ哺へ。惡血ヲ瀉ナリ。

一方ニ銅屑。竹茹。三ツ葉。卯木。青皮。雞腸草。粉。右合テ大ニ三丸。小ニ二丸。上餌桃餌ヲ哺。溫血ヲ忌。

又云。胸ヲ撲タル方。夏蟬。胡葱根。水澁。以絹人參。等分ニ合テ飼ベシ。

又云。身ヲ物ニ觸タル時。口ヨリ血ヲハキテ毛ノ根ヲ立テ目ヲ細クナスナリ。先ヅ例ノ鹽ヲ哺テ。後ニハ水澁ヲ三朝哺ナリ。鹽ノ過

タルニハ摺粉ヲ哺ベシ。

一方ニカヅラ草ヲ押モミテ青汁ヲ哺ベシ。藥師草ヲモ一藥用ルナリ。是ヲ神平ガ青藥ト名ナリ。

一方ニ生草ノ白根ヲ洗テツキシボリテ。其汁ニテ餌ヲヒタシテ哺ベシ。是ヲ萬病圓ト號ス。胴ヲ打タルニモ亦藥ノ過タルニモ良ナリ。

又云。頭ヲ撲タル方。川大黃。巴豆。赤鼠糞。各等分ニ合テ大ニ三丸。小ニ二丸哺ベシ。桃餌ヲ哺へ。

又云。身ヲ物ニテ打タルニハ屎ヲ弱クツクベシ。然ラバ木賊節。栗ノ木。朽タル澤蟹。細ニ金薄。少。合テ水ヲ以テ哺ナリ。一日ニ三丸□。

又云。聲ノカレタル方。架ホドニテ身ヲ打タルニ依テナリ。又ハ拳ノ下ニテ胴ヲ打タル

故ナリ。小兒ノ屎ヲ哺也。シクヤクト  
號スルナリ。

一方堅鹽ヲ常ノ如ク哺ベシ。

一方石伏ノ生ヒタシヲ扣テ。餌ニツヽミ  
テ三朝哺ベシ。

一方伏籠肝ヲ水ヲ以テ哺ベシ。

或問。大風ト云病ハ如何ヤウナルゾヤ。

答云。大風ト云ハ經ニハ見ヘズ。人間ノ中風  
ニ同ジ。先ヅ其病ハ拳ヲシメテ羽ヲアヲル  
ナリ。時々振ヒワナヽキテスクム病ナリ。灸  
所第一ナリ。桑ヲ煎ジテ湯ヲ哺ベシ。

一方桑ヲ燒テ水ヲ懸テ消炭ヲ哺ヨ。

一方銅ヲ出シテ一日ニ一度哺ベシ。

又云。中風ヲ治スルニハ。先青石ノ大ナルヲ

燒テ。其上水精。精イ鹽。麻。井柳。杉葉。車前

草。桑木。牛膝。蓬。各等分ニ石ノ上ニ置テ。

湯ヲ掛テ鷹ヲ伏テ蒸ベシ。起シテ蓬ヲ敷打

籠テ置ベシ。內藥云。烏頭。黑燒。香色。  
生。各粉。三種ニ

ナシテ棹櫂ノ粉ヲ入テ。大ニ二小ニ一與ヨ。

一方煎ジ物ノ方。ソクツ。大ハコ。藤瘤。

杉。雪ノ下草。桑。木瓜。桃。井柳。藿香。各

煎ジテ蒸ベシ。內藥云。船虫ト石龜ニ麝香

ヲ交テツヽミ哺ベシ。

一方。垣通。茯苓。麝香。等分ニ合哺ベシ。

或問。羽ヲカキタルニハ何ト治スルヤ。

答云。羽ヲ物ニ觸テ痛テ惡血滯テ後ニトブ

コトヲ得ザルナリ。ソノ惡血ヲ末オサメザ

ル時ニ。カキタル處ノ續目ノ小羽ヲ拔テ。銅

ノ針ヲ其羽ノ根ニ少サシテ血ヲ出シテ。艾

ヲ細ニシテ灸三炷スベシ。藥云。大薤。銅

粉。等分ニ哺テ闇所ニ繫ベシ。

一方。地黄。沉香。柚核。白馬ノ爪。車前草

ノ根。各等分ニ合テ黑燒ニシテ餌ニツヽ

ミテ哺ベシ。

一方。カキタル羽ノ節ヲ引直テ。後ニ眞弓

皮。燒。生ナガ。右餌ニツゝミテ哺テ。

荷葉。藤瘤ヲ煎ジテ蒸ベシ。

一方。蟲カハ。燒。繫。燒。人參。甘艸。藥師

艸。燒。麻。燒。柿核。燒。葛粉。茯苓。各等分

ニシテ黑燒ニシテ哺ベシ。

一方。リウコ錢。虎骨。古錦。燒。等分ニ合

テ哺ベシ。

一方。土器ヲ燒テ酒ニ入テ。繫ヲ揉テ包蒸

ベシ。

一方。穴ヲホリテ穴ノ底ニモ廻ニモ薦ヲ

敷テ口ヲ塞ナリ。但蓋ニ穴ヲ明ルナリ。餌

ヲ少切テ小毛ニ交テ哺。カキタル羽節ノ

毛ヲ拔テ小石ヲ燒テ蒸ベシ。今按。本文不分明也。彼堀タル穴ニ

小石ヲ燒テ入歟。

一方。リウコ錢七日飼テ闇所ニツナグベ

シ。

一方。蚤虫。五。眞弓皮。粉。合テ哺。但鷹ノ

大小ニ依テ虫ノ數ハカラヒテ哺ベシ。

一方。カブラ錢。一錢。白粉。古桶カハ。燒テ一錢。

蚤虫生ナガラ三ツバカリ。入テ哺ベシ。

一方。虎骨。錢屑。リウコ錢用之。古錦。燒。違タル

所ノ小羽ヲ拔テ。銅ノ鍼ヲ以テ少シ刺テ

血ヲ出シテ。表裏ヲ小艾ヲ以テ灸テ此藥

ヲ哺ベシ。田蕎麥ヲ燒テ酒ニテケスベシ。

リウコ錢。伏龍肝。等分ニ合テ哺ベシ。

一方。前ニ云如ク。土器ヲ燒テ酒ニ漬テ蒸

テ。井柳ソクツ煎ジテ銅ヲ哺テ鷹屋ニ籠

ベシ。二七日許コメヨ。

一方。蛭。粉。天南星。粉。苦菜ヲスリテ前

ノ二色ニ合テ。米ノ酢ニテ解テ遠タル所

ニ付ヨ。此藥ハ違藥ナリ。何ノ所ナリトモ

違タル所ニ付ヨ。

一方。柚ノ葉。榎木ノ甘皮。等分ニ合テ水

ニ出シテ餌ニ混ジテ哺。

一方。蛇細腸。蚤虫生ナガラ黏シテ合用ユ。虫ナクバ柚ノ葉ヲ粉ニシテ。リウコ錢等分ニ合テ餌ニ包テ與ヨ。

一方。芥根。苧薑根。藤瘤。筍。家ノ内ニ生シ紙タルヲ用ユ。カ

ウヅノ根。桑木。甘草。各煎ジテ餌ニコメ

テ與テ屋ニ入ヨ。脾ヲ引タルニモヨシ。違藥也。

或問。羽ノホロ／＼ト落事アリ。何ト云病ゾヤ。

答云。羽虫ト號ス。時トシテ尾羽ヲ落コトアリ。尤大事ナリ。藥ニ云。苦參。苦木。黃檗。胡桃根。皮。水銀。ナクバ不用。等分ニ合テ羽ノクキヲワリテ入ヨ。ツキタル兩ノ羽ニモ入ヨ。

一方。水銀ヲ檜脂ニトキテ羽クキヲワリテ入ヨ。

一方。羽クキヲワリ屎スル所ノ虫ヲ一羽ツニ二ツ入ヨ。

一方。目ハジキノ汁ヲ入ヨ。

一方。漆檜脂。香煙。煤。各合テ入ヨ。

一方。檜脂ヲネリテ鹽ヲ少入テクキニ入ヨ。

又云。ゴセト云病是ニ似タリ。

一方ニ。大根ヲオロシテ鹽ヲ加テ可塗。

一方ニ。麒麟草ニ草ニ鹽ヲ交テ揉テ。其汁ヲ羽莖ニ入ヨ。

一方。雌黃ノ灰ヲ解テ入ヨ。

一方ニ熊ノ脂。檜脂。雌黃。鹽。四種等分ニ

押交テ羽莖ヲワリテ中ヘ入ヨ。切タル口ニモ入ヨ。兩方ノ羽ニモワリテ入ヨ。

一方。熊膽。雌黃。麝香。南星。檜脂ヲトキ

テ上ノ四種ノ藥ヲネリ合テ羽莖ヲワリテ入ヨ。羽莖ノ殘タルニ檜ノ抗ヲ削テ藥ヲヌリテ指ベシ。

一方。ツキタル羽ヲ切テ檜脂ヲサスベシ。



又ウルシヲモサス。但漆ハ羽ノ生ズルコト止ルコトアリ。苦木ヲ煎ジテ洗ベシ。

一方。コシ油。一分。檜脂。二分。合テ。節近キ

菖蒲ノ根ヲケヅリテ。拔タル羽莖ホドニ

シテ。此藥ヲヒネリ入テ兩方ノ羽莖ニ塗

付ヨ。三十日バカリ有テ取ベシ。其傍ノ羽

ヲ一ヅ、クキヲワリテ入ベシ。黃礬白粉

ヲモ入ヨ。

又云。羽ミソ治方。羚羊角。硫黃。檳榔子。各

等分ニ合テ羽莖ニ入ヨ。上ニモ塗ベシ。

或問。卒ニ物ニ狂事アリ。如何心得ベキヤ。

答云。汗穢ニ依テ俄ニ狂スルト云説アリ。治

療更ニ古法ニ出デス。先ヅ架ヲ高く構テ。棟

ヨリ高キ所ニ上テ。幣ヲ以テ舞ヲマヘバ則

平愈スルナリ。

一方。鷹ニ衣ヲ着テ急ニ餌ヲ哺。其衣ヲ幣

ニ交テ四方ノ神ニ奉ルベシ。何モ是ハ諸

獵師ノ語也。用ベキコトハ其人ニ依ベシ。

藥云。蟬。蝶。銀竹ノ節ノタマリ水ニ合テ

哺ベシ。

一方灸治アリ。百會。三炷。肩ノ次目。左右三炷。

頤ノ下凹。一炷。藥云。荷ノ葉。金銀草。人參。

右湯ニ出シテ餌ヲヒタシテ哺。必平愈。

或問。虫ヲヒルコトアリ。何ノ病ゾヤ。

答云。腹ノ病トテ物ニアタリ鷹ニトラレ。鳥

ニモアラク當リタルニ依テヲコルナリ。灸

治妙ナリ。中骨ヲ中折ニクラベテ。小指ヲ側

テ一炷ヅ、焼入ベシ。藥云。垣通。燒。銅澁水。

右鷹飼ノ血ヲ以テ合テ哺ベシ。

或問。瀉氣ト云病ハ其源何ヨリ起ゾヤ。

答云。惡キ水鹽ナドヲ飼タルニヨリテナリ。

糲米ヲ白ク杵テ井華水ヲ以テヒタシ。夜ハ

水ニ入。晝ハ干テ。廿日經テ粉ニシテフルイ

テ。甘艸。人參。梨子。右合テ哺ベシ。上館ニ

溫血ヲカヘ。

一方。赤イバラノ果ノ上ノ皮ヲムキテ。米粉。甘艸。等分ニ合テ餌ニツヽミテ哺ベシ。

或問。息氣ト云ハ源何ヨリ起ゾヤ。

答云。胸氣ヨリ起コトアリ。大根。黑燒。耳カキニテ一ツ口ヘ入テ水ヲ哺ベシ。

一方。丁香。麝香。谷蟹。蟬。大根。燒。等分ニ合テ七日哺ベシ。

一方。茛<sup>チカヤ</sup>根。一把。一ハツノ根。三片。入テ煎ジテ哺ヘ。愈。

或問。虱ト云病ハ何ヨリ起ゾヤ。

答云。ヨゴレタル時水ヲアブセザルニヨリテナリ。硫黃。白粉。丁香。黃檗。等分ニ合テ苦木ヲ煎ジテ洗テ竹ノ管ニテ吹入ヨ。愈。

一方。苦木ヲ煎ジテ洗ナリ。又細末シテ酢ヲ以テ塗之。

一方。甘艸。棗。五倍子。硫黃。抹シテ塗之。

一方。土器ノ粉。口傳アリ。白粉入ヨ

一方。熊脂。體カ細ナリ白粉。硫黃。右等分ニ合テ。米ノ酢ニテ合テ。鷹ノ觜ノヨラヌ所ノ毛ノ根ニ付ベシ。

一方。丁香。抹。白粉。一錢。右好酢ニ合テ付ヨ。藥ヲ付ニハ頭ノ四毛ノ中ニ入ヨ。中日アリテ水ヲ浴ヨ。

一方。好綿ヲムシリテ鷹ヲフセテ衣ニ着テ置ベシ。ホメキテ綿ニウツルナリ。

或問。萬病治氣ノ病ト云如何ゾヤ。

答云。先病ノ相。腦ヲ垂テ涙ヲコボシ。羽ヲヒロゲテ架ニフス。大事也。

藥云。六月ニ蒔タル麻ノ根ヲ洗テ粉ニシテ。方寸ノ升ニ一升哺。一時ニ愈ズバ大事也。

一方。六月一日ニカ、リテ蒔タル大根ヲアラハズシテ。土ヲコンゲテ方寸ニ哺フ。一方。石艸藥<sup>イシヤク</sup>。水中藥<sup>スイジュ</sup>。野中藥<sup>ノチュウヤク</sup>。合テ哺。萬病ニ良ナリ。

一方。蛇細腸。燒。兎角。麝香。合テ哺へ。萬病ニ良ナリ。

或問。風ト云病ハ其相如何ヤウナルゾヤ。

答云。先頭ニ毛ナクシテ耳ノ穴アラハニナルナリ。鷹ヲフセテ生溫湯ヲ以テ浴シテ。槍ノ刀ニテコソゲテ捨ヨ。藥云。槍脂堅鹽ヲ合テ塗之。煤ヲ加ヘヨ。内藥ニハ小豆ヲ煎ジテ汁ヲ哺ヨ。

或問。野摺ト云病ハ如何ナルゾヤ。

答云。先餌ヲ食テ瘦毛。羽美色ニシテ荒鷹ノ如シ。架ニ繫バ旋子ヲ捉テイサマシゲナリ。藥云。女ノ尿壺ノ上ニ黒キ土ヲ取テ抹シテ哺。此病ニハスカシヲ哺ベシ。

一方。腰ノ次目油毛ノ上ヲ灸スベシ。秦皇ノ秘灸トス。

或問。アツキト云病ハ其相如何ゾヤ。

答云。倒ニナリテスクムナリ。藥云。鮎。薤ノ根。澤瀉。生草。芝。葛葉。叟藁。赤荆。各等分ニシテ澁田ノ水ニ銅ヲ合テ哺へ。垣通ノヲ取テ灰ニ燒テ合テ三九哺。

或問。羽タケト云病其相如何ナルゾヤ。

答云。尾羽ヒシゲクダクルナリ。藥云。鳥羽。燒。生枴。粉。等分ニ合テ目ニ入テ縫塞テ。三日アリテトクベシ。

一方。鼻毛ノ辻ヲ火針ニテ灸セヨ。藥ヲ飼ニハ木坪ノ水ニ合テ哺ベシ。

一方。井柳ヲ煎ジテ其汁ニテ目ヲ洗ベシ。

一方。血ヲアタ、カニシテ哺。

一方。井華水ヲ早朝ニ吹ベシ。上治ナリ。或問。フクシヤウト云病ハ其相如何ナルゾヤ。

答云。腹ノ色青ナルナリ。中骨ニクラベテ中ヲ折テ灸ス。指ヲ伏テ左右ヲ一炷ヅ、燒。藥云。垣通ヲヤキテ生姜ノ水ニ合テ與ヨ。

一方。生艸ノ白根ヲ土氣ナクシテ哺。藥ニマケタルニモ胴ヲ打タルニモ良ナリ。

羽ノ生ズルヲ留ヲ治方。赤子尿。夏蠶種合テ留タル穴ニ入テ。桑ノ枝ノ針ヲサスベシ。

一方。薰陸。粉。蠶ノ種ニ合テ用之。

毛ノ落ヲ治方。南天根。山宇津木。甘皮。牛膝。

赤松葉。四種煎ノ餌ヲモ混ジ鹽ニモ入ヨ。

〔五八種藥〕

一方。狐肝。尾長鳥。コハツノ肝ヲ與テ。ハシ鳥屋ニ水ヲ居スシテ入ヨ。

一方。夕顔ヲ燒テ上ノ皮ヲコソゲテ水ニヒタシテ。其汁ヲ混ジテ哺へ。

一方。土龍ヲ黑燒ニシテ哺。生タルヲモ哺。

羽落ルヲ治方。

スカシ藥方。

唐ノ白藥ヲ哺。ジャ香ナリ。鼠屎。髮垢。何モ餌ニ

ツ、ミテ哺へ。

一方。餌ヲ洗物早旦ノ尿ナリ。〔此「方」字アリヤス分明〕

一方。茯苓。袋角。何モ粉ニシテ等分ニ合テ。穴ニヨリテ哺ベシ。

一方。女ノ尿居タル所ニ黒クタマリタル土ヲ一重捉テ。ツカハント思ハン時。早餌ニツ、ミテ哺。其後水ヲカイト尿ヲツカセヨ。

一方。鹿角ヲ粉ニシテ二錢バカリ餌ニツ、ミテ與ヨ。

一方。赤イバラノ根。茺葢ノ根。二種コク煎ジテ檀紙ニ留テ。細ニキザミテ大豆程哺へ。放日ハ五九カへ。

萬病藥スカシニ用之。

赤蛙ノ肝。羚羊角。鼠ノ脾。〔鹽炙〕狐肝。鯉ノ脂。イ



蓬瘤。松ホド。鵝ノツ羽。各等分ニ合テ。夏ハ荒川ノ水ニホトバカシテ良。秋ハ芋ノ露ニホトバカス。冬ハヨク／＼ウガイシテ。温キ水ニホトバカシテ一日出テ。木ノ葉ニ置タル露ホドニ丸シテ與ヨ。サテ木通ノ實ヲ三ツ與フ。放タン日ハ三日ノ間三度ヅ、與ヨ。壽長シテ耳安シ。

ツクナウセン方是モスカ  
シナリ。

何首鳥鳥イノ根。荊萱ノ根。羚羊角。狐肝。鯉ノ脂。髮ノ垢。山女實。鵝ノツ羽。各粉ニシテモ與ヨ。煎ジテ餌ヲモ混ジテ哺ベシ。壽長シテ病ツカズ。肉上テ内スクナリ。耳安キ藥也。

小人參鯉鷹ノイラレ藥。  
主ナワスレヌ也。

人參。三兩。檳榔子。三兩。胡椒。半。巴豆。半。甘艸。三兩。丁香。半分。桂心。等分。縮砂。等分。各粉ニシテ丸スベシ。衣ニハ白粉。夏ハ茶

用之。勢ハ○大ニ五小ニ三ツマ、雀ノ胸ノ穴ニツ、ミテ可哺之。是亦スカシニヨシ。

骨ヲツク方

柚ノ核ヲ出テ。白荏ヲ四十九粒河水ニスリテ。餌ニツ、ミテ一日七粒哺ベシ。七日ニヨシ。

ナツケ藥

夜捉澤ノ水ヲ檀紙ニシゲク混ジテ。ハキ／＼ノキザミテ哺ベシ。又タンヲ常ニ哺。

土龍マル病ノ方

烏ノ血ヲ三日バカリ哺。其ニイエズバ谷ニ歌カコヲ哺フ。但餌ニマクベシ。猶愈ズバ庭柳ヲコク煎ジテ餌ヲ洗テ哺ヘ。

舌ヲ出ス病ノ方

薤ヲ哺。

一方。ツグミヲ三日與ヨ。

一方。硫黃ニテフスベヨ。内ハ銅屑ヲ哺

ベシ。

一方。舌ノサキヲ少サシテ血ヲ出テ。汁ニ堅鹽ヲ少シ合テ。舌ノサキニ付ヨ。

肉ノ損タル方

好梨ヲオロシテ檀紙ニ卷テ三九哺フ。サテ其夕部ニ飼ベキ藥ニハ。赤フチニ鳥ノ血ヲ出シテ哺。鳥トハ白鷄ノ雌ナリ。又篠竹ノ下葉ヲ哺ヘ。

追切テ鳥ヲ不捉方

鉛ヲ大ナル梅ホドニ丸メ。口ニ銜テ溫ニシテ餌ニ卷テ。其上ニ息ヲ吹カケテ可哺ナリ。ヤガテ鳥ヲ追ナリ。是ニテモ鳥ヲ捉ズバ下氣ト知ベシ。サアラバ長ニクラベテ中ヲ折テ。中ノ程ヲ一炷灸セヨ。モミ雀ヲ與ヨ。又此餌ヲ哺テ米ノ汁ヲ銅ノ入物ニテヌルメテ。餌ニ混ジテ與ヨ。

骨鉗ノ方

人ノ山ナドヲキム時ニ。常ヨリ鷹ノ振舞ヲヨク見ヨ。物數ヲセン爲ナリ。雌ノ頭ノ骨鷹ニハ三ツ。兄鷹ニハ二ツ。堅キ板ノ上ニアテ。刀ノムネニテ細ニタ、キテ油筋ヲトリ。布ニツ、ミテ溫湯ニテ洗テ。サテ好餌ヲ半ヨリ少サキヤウニ合テ。湯ヲヒタ／＼ニ入テ哺ベシ。サテ又次ノ日好餌ヲ脇餌ニカケテ心ヲナヲスベシ。其日ハ何ヨリモ鷹ノフリカハルナリ。

耳安放ル、方

鷹ニハ牛膝鳥ノ羽ヲ合テ煮出シテ其汁ヲ與ヨ。兄鷹ニハ鼬ノ血ト鳥ノ羽。是ヲ出ヌ四五日哺ベシ。

一方。楊ヲコク煎ジテ餌ヲ洗テ哺ベシ。

一方。干野老ヲ粉ニシテ哺ヘ。

一方。兄鷹ニハ鼬ノ尾ト鳥ノ血ヲ出シテ哺トモアリ。何レモヨシ。

尾味噌ヲ治方

鷹ヲ酒ニテ浴スルコトカ

右酒ヲ以テヨクユデ、後ニ。苦參。粉。熊  
ノ脂。檜脂。等分ニ合テ傳ヨ。

タケト云病方

口ヲアケテスダクナリ。木瓶ノ水ヲ哺。又水  
澁ヲ哺ベシ。薤ヲ粉ニシテ與ヨ。生タル小鳥  
ノ血ヲ哺ヘ。烏ノ血ヲ雜テ小鳥ノ血ヲ哺ベ  
シ。

山忘方

隼差羽ニ限タルコトナリ。

其腦。ツクノ眼。何モヨク干テ粉ニシ  
テ。一ツニ合テ水ヲ少シ入テ。其ニタツシテ  
烏ノ羽ヲ以テ口ニヌルベシ。

組藥

鷹ニ用之。

酒ノ傳干ノ波龍。五八草。各等分ニ合テ放  
ント思ハ、日中ホドニ哺ベシ。

惣藥方

山ニ赤キ土ノアルヲ取テ。繫ヲモミテ其汁

ニテコネテ。大ナル梅ホドニ丸シテ久燒テ  
粉ニシテ。又鮑ノ細腸等分ニ合テ用之。

黑藥法

人參。甘艸。生。川芎。地黃。茯苓。桂心。沉香。  
或ハ麻ヲ加エ。右七種各藥師草ヲ以テ上ヲ  
イカニモ多ク卷テ。其上ヲ麻ノ糸ニテ卷。土  
器ニ入ヲ燒ベシ。

同法

麻根。甘皮。女髮垢。同毛ニテモ良。荷葉。クヌ木。陰干。

右等分ニ黑燒ニシテ哺。胴ヲ打身ヲ物ニ打  
タルニモ妙ナリ。古血下ナリ虛掣シタ時ハ  
養性ニ哺ベシ。

三藥法

蕘骨。葛粉。上品用之。麻。黑燒。七月七日午ノ時取テ良。各等分ニ合

テ雀ノ胸ノ穴ニツ、ミテ哺ベシ。羽ヲカキ  
ヌルニモ。腦ヲ打タルニモ。骨ヲ打折タルニ  
モ良。何ニモ妙ナルベシ。

# 青藥法

藥師草ノ葉ヲ陰干ニシテ粉ニシテ哺ベシ。  
息氣ニモ。拳ニテ胸ヲ打タルニモ良。アヤマ  
チシタルトキハ。口ヲ引アケテ半錢許水ニ  
テ與ベシ。

通テ鳥ヲ捉ヌ藥方

寒野老ノ根ヲ方寸ノ升ニテ三升哺。又石灰  
五升哺ヘ。此藥ハ放時モ五日ニ一度哺ヘ。石  
灰。寒野老ノ根。等分ニ合テ常ニ哺ヘ。

鳥ヲ捉セヌ藥法

狸ノ油。煤。鳥ノ肝。右合テ哺。忽シラムナ  
リ。是ヲナヲス藥。北尻ニ流タル川ノ石伏。  
山菅。日ニモアタラ  
メ根ヲ用ユ。赤荊。是ヲ細ニ抹シテツハ  
ミテ哺ヘ。三日ノ内ニヨシ。又日ニモアタラ  
ヌ山菅ナクバ。鳥ノ羽。川ニ薶。髮ノイロコ。  
石灰。木坪ノ水。銅。右煎ジテ餌ヲ哺ベシ。  
抹シテモ哺。

隼ノ相合藥鰐鷹ニモ用ユ。  
本苑ナツケ藥ナリ。

茯苓。ツク眼。髮垢。赤蓼。鵝足。等分ニ合テ  
三日前ヨリ一晝哺ベシ。

隼ノ主不忘藥

ツク眼。ゴマメ。銅。各抹シテ雄ノ胸前ノ穴  
ニツハミテ與ヨ。餌ノ程ライハ橘ホドニシ  
テ。餌ヲオサバ雌ノ陰穴ノ穴ヲ口餌ニヒカ  
セヨ。二日與ヨ。

隼ノ手放藥

大犬ノ牙。人ノ足ノ爪。ナモミノ實。右等分  
ニ合テ中ノ大豆ホドニシテ與ヨ。

餌ヲウタスル藥

唐ノ白粉ヲ少シ哺。過レバ煩アリ。

一方。クツワヲハメテ闇キ處ニ繫ベキナ  
リ。悉フルナリ。能程ニシテ轡ヲ取ベシ。  
其後ニ澁田ノ水銅ヲ合テ哺テ。一時アリ  
テ鉛ヲ抹シテ哺ヘ。一町過レバ手振二三



度シテ。水屎ヲツキテ必鳥ヲ追ベキナリ。  
煎物方

垣通。ソクツ。大ハコ。三種ナリ。

山回ノ隼ノ住所ヘ飯藥

ツク眼。ゴマメ。銅。等分ニ合テ雄ノ胸前キ  
ノ肉ニツヽミテ與ヨ。住所ヘ歸ナリ。

一方。雌雄ヲ陰干ニシテ百日ノ能ク洗  
テ。鼠ノ血ト鷄ノ血ヲ合テ。乾鳥ノ穴ニヨ  
クヽ塗テ哺ベシ。キハメテ放ヌ鷹ニハ。  
柚ノ皮ヲ上品ノ絹ニツヽミテ汁ヲシポリ  
出テ。雀ノ内脾ノ肉ヲ犬ノ涙ニ合テ哺ベ  
シ。

山回鰓シテ不放藥

赤ハギノ根。硫黃。人ノ頤下垢。掌飼左右ノ  
睫。各等分ニ合テ小豆ホドニシテ二九哺ヘ。  
若ハ三九與ヨ。

餌ヲ振事

蛇ノ臍ヲ陰干ニシテ抹シテ纔ニ一分哺。過  
タラバ銅屑ヲ水澁ニテ哺ベシ。

一方。餌ニウトミタルニハ。餌ヲ三日七日  
見セズシテ置テスカシヲ哺テ。サテ鷹ノ  
ムキヲ窺テ生鳥ニテ哺ベシ。前ヨリ生鳥  
ニテ哺コトナカレト有也云々。

文龜三年七月十日

諫議大夫藤基春

右鷹經辨疑論三卷得某家藏書而謄寫焉。以  
爲帳中秘云。

安永七年戊戌清和幾望

藤原覃識(花押)

〔右鷹經辨疑論以帝國圖書館本校合〕

續群書類從卷第五百四十二

總檢校保己一集

男源忠寶校

鷹部二

小倉問答〔一名定家問答〕

夫鷹は世のまつりごと雲の上の翫び。上意をやはらげ民をたすけ。花實さうおうの遊興也。然ば和漢にも是を專とせり。西園寺此道を信ぜらるゝ。定家卿彼風をしたふによりて。芦原の代々にいたりて松の葉の散うせず。青柳の糸のたゆる事なし。ある時定家卿小倉山に一のいほしめて住給ひしに。爲家卿比は神無月廿日あまり。風さはがしく雲半天をちらす。爲家よき折からとおもひ立。彼言葉の山を尋申さんとして。面を時雨に

そばだて、彼閑室にわけ入。折節定家は時雨の哥吟味し給ふところに妻戸をたゝき給へば。みづから立てひらき給に。焼香ふかうして畫圖の屏風によこをれ。漸有て入給ふに。そのうち何となき物語。さて定家卿云。此寒風に山中に分入事あやし。爲家卿云。過し比より鷹一道に望ありきかまほしき實正をとひたてまつり。後生のためにもとこゝろざし侍ると有ければ。定家卿云。志無底江のどし。今は秘するにをよばずと云々。一鷹は日本に渡る事いつの御代にや。答云。人王十七代仁徳天皇の御宇に始て渡

りしなり。是鷹根本也。

一始而渡りし鷹の名は俊鷹と申也。大國にてあまたの中よりすぐれたる鷹也。紀州那智山にはなさるゝ。是西南の鷹の根本也。

一唐より鷹持渡之人はシュンク<sup>光</sup>ワウと云し也。和國三年住けるに鷹道不相傳。然時コチクと云美人を對してとはせし時。歸朝の時鷹書一卷コチクにあたへしなり。

一二番渡りし鷹は人王三十代欽明天皇の御時なり。鷹の名からくつわと申也。富士山にはなさるゝなり。今の富士の巢是なり。又一説に云。宇治の寶藏に唐の轡を納置けるに。七月七日寶藏を開。萬の物を風にあてるに彼轡も出たり。然を虚空に鷹來て取てゆく也。其後富士山の鷹の巢をちろす時。里人巢の内より彼轡を見つくるなり。さて其鷹の目に轡の十文字有也。是によつてからくつわ

と申也。

一三番に渡りし鷹は人王三十一代敏達天皇御時なり。からまくと云たか也。羽州羽黒山にはなさるゝ也。兩州の鷹の根本なり。

一白の鷹は日本の巢にありや。

答云。白はかうらいの國より渡るなり。日域に巢鷹なし。白は佛神の尊體なり。

一はし鷹と申事如何。

答云。鷹はもろこしにはしこくと云所より出來申に付而はし鷹と申也。然間鷹の惣名なり。又箸橋の兩説有。

一鷹をくちと申事如何。

答云。是は大國にて鷹の名なり。たかの異名あまたあり。

一野守のかぐみと申如何。

答云。野守の鏡に三説あり。一にはむかしゅうりやく天皇の御かりの時。おきなのあげ

たてまつる鏡なり。二にはたまり水。三にはからすなり。いづれも鷹の秘事なり。

一三本のむちと申事如何。

答云。一本はとふきの鞭といふなり。鷹のにげてまつ時。何木にてもとふきのむちとくはんねんして。手のひらに天と云字を書いて。大緒を居るどくにつまひて。彼むちにて天をさし地をさして。むちささを鷹のまふかたへまはして文を唱るなり。

ういくてんくと三度唱べし。又此歌を唱なり。

箸鷹の今も心のかはらねば立歸るらん有しこぶしに

一本はさゝやきの鞭とて。夜ふせにしたる鷹の方へ彼鞭をさしあてゝ歌を唱るなり。

くれは鳥かさねし夜はの朝よりふしぞ稀なるこちぐ一よね

鷹すゝをならさぬ間は。幾度も此歌をとなふべし。

一五の小鳥と申如何。

答云。せんにう。ほうあか。頭くろ。白小鳥。赤小鳥。是なり。

一三の小鳥と申如何。

答云。小鳥。こあかり。こはかまとて三なり。小鳥とは赤しとゞ。こはかまとはひばり。こあかりとはせんにうを申なり。

一鷹によりてをき聲のかはる事如何。

答云。鷹をよぶ事は大日のはじめ給ふ也。あはんうむの三字を含なり。おほ鷹はあ字。はい鷹はん字。はやふさはうんの字なり。いづれの鷹もみな佛體なり。

一なりひらのみよしおもかげと申事如何。

答云。業平春日のにへの勅使の時。仁明天皇よりつたへ給ふ。かるがゆへに業平鷹の上



手雲の上にすぐれたり。鷹に一代あやまりなし。是は秘傳あり。

一むこ鳥と申事如何。

答云。是山鷹の時もとよりめん鳥の有所へめん鳥の飛來るをむこ鳥と申也。陰陽を舍詞なり。

一よめ鳥と申事如何。

答云。右之道理に同也。皆鷹場の詞なり。

一源氏の三の生鳥と申事如何。

答云。鷹のつかひ方の秘事也。光源氏須磨の上野にて日々に御鷹がりなされ候へども。この三の生鳥を御心にたもち給ふゆへにより。かず御心のまゝなり。秘傳あり。

一柴やきと申事如何。

答云。昔かんばつの時。世上の民ども歎悲む。御門ちんがまつりとをろかなりとて。庭上に薪をつみ火烟となし。すでに飛入むと

おぼしめす時。俄に大雨ふり來て。めされける車をおしながし。さて世上をだやかにして民ゆたかなり。又其以來かんばつの世にはおほ鷹にて雉を取。御門に祭かひ給ふ。是を柴焼と申。車軸をながすといふ古事も此御代より也。

一三足の雉子と申如何。

答云。有時御門御なふなりし時。さう人うらなひ奉れば。かた野に三足ありし雉子。御狩ありておほ鷹にて彼三足の雉子とり給へば。すなはち御惱平給也。其後祭事に別の雉子の足を取。三足にむすび付。御祭事有けると云々。

一へをの一刀と申事如何。

答云。是は鷹にきり羽をよくをしふるを申也。鷹は切羽肝要也。

一虚空のへをと申事如何。

答云。在原行平に仁明天皇第三王子小松帝と申より傳給ふなり。かるがゆへに行平一代鷹をにかし給はぬと申なり。たとへばせうぶの狩などの時。鷹を自由につかひ。羽をとばせんとおもはば。三日前より鷹のしゝをあげ。つかふべきよひの口。したゝかに鷹にあたり餌をかふべし。さやうにいたし候へば。其日はへをゝとき候ても自由也。羽は一段とぶ物なり。是第一の鷹の心持なり。是を行平の虚空のへをといふなり。

一石のをき餌と申事如何。

答云。山鷹のとき。峯より鷹にしらせずして石をころばすに。鳥ぞと心得て鷹とばひかゝるなり。さて其日の鷹ふるまひ山口しるき也。

一なら尾。なら柴。尾にあらず羽にあらず。羽にあり。尾にあると申事如何。

答云。なら尾とはへをの事なり。なら柴とは鷹をしたてる野もせの事を云なり。是尾にあらず羽にあらず也。又尾にあるとは三めの尾をならおと申なり。又七羽の始をならしと申也。是尾にあり羽にあるなり。

一兄鷹のもとをり。鷗のすゑと申事如何。

答云。鷹に用心のふかき心なり。せうにははい鷹の鈴をさし。はいたかにはせうのもとをりをさゝんとの義なり。

一朝とがりゆふとがりと申事如何。

答云。朝とがりは四ツ以前。夕鳥がりは七ツより暮まで也。

一順の鳥逆の鳥と申事如何。

答云。朝とがりは北より南かしらにつかふなり。是南西へ立鳥順也。東北へ行鳥逆也。

夕鳥狩は南より北頭につかふなり。是は北(西順)東順。南は逆なり。

一遠植の取飼と申事如何。

答云。諸鷹共に木居にあがるをもろくをき取事上手のわざなり。たとへば木よりをきとり候へば。如何にもむまき口餌をふかふかと取飼て。そのまゝつかはずして家に歸るべし。是を遠植に取飼と云也。

一初春次尾。暮春次尾と申事如何。

答云。初春は雉子のめん鳥の引尾。暮春は白鳥のきみしらずを次也。

一みすをのかちと申事如何。

答云。鷹の祈念に。雉子のめん鳥の尾の上のあぶらを少あしをにくけ入る事を申也。

一鳥柴木につくべからずと申事如何。

答云。花鳥柴は春は梅櫻。松は四季共不苦なり。しかれども本木につけず枝に付る物なり。是を木に付べからずと也。付るやう有。一ふくら柴と申如何。

答云。小鳥を萩すゝきなどに付るを申也。

一はとの鶉と申事如何。

答云。八重羽の雉子のどくに。羽の八重有を申なり。鷹にのがるゝうづらなり。

一見ると申事如何。

答云。鷹のにげ候時のまじない也。竹のうすやうに。不動此文字を書いてをしまゐめて持也。此文字はたらかずとよむなり。其後鷹のにげゆくかたへ向て此歌を詠なり。

別しをいかでか鷹にまかすらんとめんと

めじは山のまに／＼

此歌を幾度もよむべき也。惣別如此の鷹には虎肉を少おろしかふべし。

一雪まろばしの事如何。

答云。鷹は三四月の比より巢ふして。七月は山をいづるによつて雪をしらぬなり。然間雪ををしへんために雪にて生鳥をかふな

り。是を雪まろばしといふなり。

一山をかけると申事如何。

答云。藤を以て鳥のくぼねと羽ぶしに懸てゆふを申也。

一山をさすと申事如何。

答云。山さすとはめん鳥おん鳥の口餌かひ候かたをし合て。其方のすねの中をかた足づゝ二重かけていぼにして。はしを一寸五分いだし切也。是山をさすと云也。

一田物さしと申は如何。

答云。是は雁鴨などを草なはにてゆふを申也。ゆひやうは如常也。

一菟結事如何。

答云。菟結事は秘する儀也。ゆひやうはとも足の節より下を左を上にして。藤を二重かけていぼにして。其末を腹のかたより引出し。菟のくぼねに二重かけて上にていぼ

にして。又三寸計置てかいるまたにゆひ。そのすゑを菟の耳のながさ二筋通して切也。又耳にくらべぬ時。手一束に切る事もあり。かり場よりもたせかへるには。別の藤にてくぼねの藤に入。木に付てもたせる也。木のささをばとものあしゆひ候間に入候也。餘所へ遣るには。木をばとり菟計取かひを上にしてつかふ也。

一菟の取飼やうの事如何。

答云。左の肩枝のつぎ候上を。小刀にて三ヶ月なりにまはしてそれをとるかふ也。但肩をば刀計あてべに毛を取飼。べにけとは首の耳かたの内みゝわきを取かふ也。是べに肉と云所也。

一手むき丸と申事如何。

答云。鷹のつぶ子を懷中にてはやしたる鷹を申也。いちもつするものなり。



一 木ぬけの鷹と申事如何。

答云。母鷹の巢に出入を申也。

一 鷹のすてかひと申事如何。

答云。巢の上より母たかゑをおとして。鷹にとりならはせんとの心也。

一 火をきの鷹と申事如何。

答云。是は暮つまりの鷹をひのあかりにてをき取事也。

一 鷹の心なさと申事如何。

答云。是は鷹の山を思ひ。何にてもおもひ事の有時鳴聲也。例ならぬ聲なり。

一 ぼの毛の鳥と申事如何。

答云。是は鳥の遠く飛たるを申也。

一 犬のさかとかへると申事如何。

是は犬鳥をかみうしなひて。幾度も跡へかへるを申也。其時犬かひは聲をしきりにかくる物也。

一 枯野の一羽と申事如何。

是ははい鷹をつかふに上手のわざ也。年中はしし鷹にてへをいさし詰つかふによつて飛たけ知ざる也。然を一日二日前の日鷹によくあたりて。へをいときてちとのび行。鶉に合みる也。かならず羽をいだしとぶべき也。さて春來て草にとぶ事山口しるき也。其時又如元しをあげへをいさし年中はつかひ。春に成てしを引へをいとき合るにいよくとぶもの也。是を枯野の一羽と云也。

一 見えみ見えずみの口餌と申如何。

答云。鷹に口餌をかひ候時。或は口えをみせ。或はみせずしてかふ物なり。其故は自然口餌などなき時。鷹を置取べきため也。手かへる事をしへ候時のかひやうなり。

一 長命短命の鷹見るやう如何。

答云。長命の鷹は毛羽ながく。とに皮あつ

く。毛はふとく。おひほうさうの毛ながし。

目はちいさくまびさし少かる。足くもてはおほき也。かやうの鷹はつかひにくきといへども命はながき也。短命の鷹は皮うすく毛みじかくほそし。目はおほきにしてまびさしあれ。くもてちいさくゆびほそし。かやうの鷹はつかひよしといへども短命也。

一鷹は目の内に善惡をあらはすと申は如何。

答云。諸鷹共に目の内に習ひ有。大目小目と云事あり。小目と云は黒目少有を云。大目と云は黒目おほきなるを云也。ましんと云は黒目とがりて扇のかなめのどくなるを云。是いちもつ也。目はひかるを肝要とする也。惣而黒目はすぎたる吉也。目はのきめ。はしりなしめなどやうなるよき也。目うすきを本とせり。但目いづれにかはりたるをもはら用る也。目には種々の儀あれども。まづ是

を本とするなり。あをくしろくみゆるは病鷹の時成べし。

一ふるきとすと申事如何。

答云。是は雉子のおん鳥を申也。わすれかひにはかはぬ鳥也。鳥さはまで取かふべし。

一こがねめん鳥と申事如何。

答云。春めん鳥のきなるゆへに申也。

一七岑の鈴と申事如何。

答云。此鈴七岑へだてきこえたる共申。又此鈴はひらかの鷹八幡へ進上申たるすゝ也。余情さまゝ有ける也。

一ね鳥がりと申事如何。

答云。かり場に鳥を取をくれて。暮にをし鳥に取かひ歸るを申也。

一角の柱にうへ物の大事と申事如何。

答云。是は鷹を合するに。うへ物の中に入鳥はみなすみの柱也。

一 小山歸と申如何。

答云。是は若鷹の春とれたるを云也。山歸の春とれたるは大山歸と申也。一段ゑすぎ物也。

一手はなしの日さだまると申事如何。

答云。鷹したてる事は日數さだまる物也。然間手はなしの日もさだまる也。然ども何と日次はさだまるとも。鷹鳥心なきにはたはなし如何。かるがゆへに手上は鷹のいてきたる日が手はなしの日のさだまると也。如其文字もこゝろみゆるすと書也。

一 鷹に始て生鳥を飼をまろばしと申事如何。

答云。始て生ものをとらする事也。然に鳥をとばせかひ候へば。自然鷹始て人の手にて取事なれば取かぬる事あり。是を鷹師の念にて鳥の羽をぬき。如何にもくよはくと鳥をころばしてかふ也。かるがゆへにま

ろばしと云字にはころばすと云字也。

一 鷹の毛所に自鏡と申事如何。

答云。是は鷹のうしろの切立の下の毛也。此毛をたつる時は煩有時也。又鳥をとらんとおもふ時には毛をつむる也。然ば此毛善惡を見しるによつてみづからのかぐみと書也。

一 ところ板と申事如何。

答云。是は鳥屋のゑたる。(廊下敷)

一 とゞろきと申如何。

答云。是多まないたの異名なり。なしの木にて作る也。

一 つゞり足緒と申如何。

答云。是は色ある衣を五色のいとにてこまかにして足皮にいだす也。足をいたはる心也。

一 ぬすみはみと申如何。

答云。は是持にげをする鷹にあり。鷹かひを  
とせずして鳥をくう。是をなをす事。ほそさ  
糸にて口をわりて。人の見ぬ所にて一時計  
をきてみれば。ぬすみはみのゑをふりすつ  
るなり。其後なまりをまめほどに切。ゑにつ  
ゝみかふなり。

一よかひの衣と申如何。

答云。鷹のふるまひの善惡を見る毛所也。青  
鶯の根に有毛也。

一ほこ羽つくと申如何。

答云。山鷹の谷より上に飛あがる羽也。鳥の  
落草を見んと。鷹のりこんなる心也。

一やかへりの羽と申如何。

答云。鳥を草にかけおとし。そのまゝ飛かへ  
る羽を申也。是も鳥の草に入陰を見んと也。  
一鷹の一連とかきて一もとゝよみ申事いか  
い。

答云。是は天子の御鷹十を一もとゝ云時は  
一連と書なり。其外の一もとには一居と書  
也。すれんの鷹共あり。

一木居取。木なとると申事如何。

答云。こいとるとは大物のことば。きなとる  
は小鷹を申也。

一山別の鷹と申如何。

答云。山別は七月廿五日に鷹雲上に飛あが  
る。父母にはなるゝと申也。

一鷹をつかふに。しとみ餌。あらひゑ。いづれ  
にてつかひたるよく候哉。

答云。しとみ餌は長命にてへをゝさす。あら  
ひゑは短命にてへをゝとく。されば此中道  
を心にかくべき也。

一さほ姫鷹と申如何。

答云。春三月の中にとりたる鷹を申也。春の  
山神也。



一葉かへりの鷹と申如何。

答云。是は里にて森林の中にて夏毛をいだしたるを申也。

一もみぢふの鷹と申如何。

答云。是は赤鷹を秋三月は紅葉ふの鷹と申也。

一くれなるの鷹と申如何。

答云。是はひらかの鷹内裏にて一夜に紅に成たるを申也。是余情有也。

一犬の分食と申事如何。

答云。是は山鷹に犬鷹をばのどき。鳥を食たるを申也。犬を能使入たるなり。

一鈴子さすと申事如何。

答云。しのびかりの時。かば櫻にてすゞ子をまきてつかふを申也。

一四節の架に鷹つなぎやうの事如何。

答云。是は四季のうつりゆくさまをつなぐ

也。

一四節によつて鷹を居と申事如何。

是も大緒の房に四季をよぞへて居る事也。但朝夕は常の儀也。

一あゝこ取の事如何。

答云。是は鷹一度に鳥を二ツ取たる也。是はくせ事也。然ばめ鳥お鳥なれば。如常左右のむねを取かひぬれば二度に取たる心也。扱又め鳥お鳥みへぬをば右左を取かふ也。又一説には。二ツの鳥をはなして本の鷹にて合。一ツ取たるばかり取かふと申儀あり。

一狩場の七草と申事如何。

答云。是山鷹の時なり。一にをしへ草。二にはしり草。三にうごき草。四にゆるぎ草。五におぼへ草。六にふし草。七にね草。以上七也。

一狩場の五音と申如何。

答云。一に鷹の鈴。二に犬の鈴。三に轡の音。四にとさけび。五に鳥の音。是五音也。

一も、口と申事如何。

答云。是は口餌の異名也。口餌はこくちに數をかふを肝要とするゆへ也。

一青羽染羽の鷹と申如何。

答云。是は鳥や鷹の新敷ちとしたるをば青羽と申。ふるき羽をば染羽と申也。

一鷹の毛に人毛と申如何。

答云。是は上の紫鷹にある事也。人の白色のどくに頭こくびまはりに有也。

一卵の花にへをゝさすと申如何。

答云。諸鷹共にうの花の咲時分は鷹はゑすき物也。かるがゆへに鷹にへをゝさすといへり。

一ゑふと申事如何。

答云。是は大國にて雨風のとさ鷹に入る物

也。

一からまぐらと申事如何。

答云。もろこしより遠路の旅にゑを入れるうつは物也。幾日をさてもくるしからざる物也。

一日次のかり。日つぎのかりと申事如何。

答云。日次のかりとは内裏へにゑを日々に上たてまつるかりなり。日つぎのかりとは天子の御位をつぎ。始ての御狩を申也。

一上手はとるに合。下手は鳥に合ると申如何。

答云。せうぶのかりの時。上手は取べき鳥に計合るなり。然間鷹もあやうからず。ゆへに鳥數有也。下手は鳥えらまず。ゆへに鷹しらみて後はとらぬものなり。

一すゝ船と申事如何。

答云。嶋山などへ鳥をやらじとて。船にすゝを付て沖をこがすると申也。

一 たがひほねと申如何。

答云。是は鷹のどう打藥。青鹿の角也。骨をも云也。惣別鷹にうたれたる鷹にもよき藥也。

一 ひさうかんあかた圓と申藥の事いかゞ。

答云。鷹の諸病の藥也。一あはびの赤わた。女鹿男鹿の目の玉。うさぎのみゝ。等分に合て餌につゝみかふ也。是をひさうかんあかな圓と云なり。

一 忍びの里の水如何。

答云。是は鷹鷹などにうたれ。又野山にて俄に死たる時。水もなく藥もなきとき。我藥指より血をいだししぼり鷹にかふ也。よみがへりの藥也。是を野中の水共云なり。

一 ひとよの水と申事如何。

答云。竹の本の一節にたまりたる水也。鷹の諸病の藥也。しゆ光こちくに是をつたふ也。

こちくてふの歌も是なり。てふの字秘傳あり。

一 鷹の藥は誰人つたへ申けるにや。

答云。仁徳天皇たかの藥もろこしへ御所望の時。吳の國よりくれ竹を始而渡し給ふ也。是鷹の一藥。一夜の水も又竹の青みもみな藥也。されば竹をば向涼草とて草共申也。

一 鷹の三藥と申は如何。

答云。竹の青み。卯木の青み。赤がねのすりくず。是也。諸病に用る藥也。

一 政頼の見付草と申如何。

答云。是はみづ草の事也。諸病に用る藥也。是をおとさり草共云也。

一 川な草と申如何。

答云。鷹の諸病の一藥也。是は古今の三草とて切紙の秘傳也。歌に云。

川な草は月になればおとこ山去にし命い

さける物を

一 おか玉の木と申如何。

答云。大日天竺より日本へなげ給ふ木也。今の筑波の男體女體是也。又天のせうぶの時用給ふ故に。鷹もせうぶを専とする故祭事に用るなり。此木なくしては神代よりも鷹はつかはれぬ物也。古今の一木とて秘密の切紙なり。歌に云。

おか玉の木を何木ぞと尋ぬればかた野に  
立るとしば成けり

一 鶉の足をひるふさと申事如何。

答云。是は天照大神のあまの岩戸へ引籠給ひし時の事也。文字に習有事也。秘傳有事也。

右此一巻者鷹一道之秘密之間答也。皆顯神說者也。故箱外不出之秘書也。堅莫他傳事。

清原 長作  
山田 如舟

〔右定家問答以帝國圖書館本校合〕

### 基成朝臣鷹狩記

鷹狩の事委もしらぬ事を。見及び聞得るまゝにかきあつむれば。定てひがどもおほからんか。好知人の見て難をもくはへんずらんと。後のみむ憚あれども。身にとりて粗はさまへ存ずる事計りしるしつゝ。又人のいまだ見ずしらぬともやあるらん。筋目かはりたる事どもを。案じ出すに隨て書つくれば。次第もしどけなく前後錯亂せんと。かたゞはぐかりある者なり。一所にかき付べき事所々別々にしるしぬ。但其筋目のか



はる所には朱にて點を引たるなり。

一狩の作法は行幸の御狩を本にする事也。上古には野の行幸といふ事常にあり。是は鷹狩を本とせり。今の世には誰も其子細しりたる人もあらじ。白河院の御位の時。承保三年十月廿四日 嵯峨野の行幸あり。其次に大井河の逍遙あり。其後は事絶たり。いにしへの事は日記も慥ならず。但宇多天皇御位をさらせあわしましてのゝち。醍醐天皇の昌泰元年十月に上皇宮瀧の御幸の事あり。大和國吉野縣京より御馬にめされたればゆゝしき見物なり。其時に北野天神の右大臣大將にて供奉せさせ給ひたる。其儀しき始終。天神と紀の長谷雄卿と日記を書給ふよしみえたり。先栗栖野よりはじめて交野へ成せられ。其より大和國の名所ども宇多野をはじめて。所々にて供奉の人々歌おほくよませらる。次

に攝津國布引の瀧を御覽ぜらる。(正規)已も京を出させ給ひて。十二日といふに還御なりぬ。是ぞ誠に鷹野の狩場の本にてあるべけれども。さのみの事鷹のふるまひまでくはしき事は所見なし。今に至りて宇多野交野嵯峨野をもて狩場とするは。行幸御幸の跡なるがゆへなり。今昔奈良の皇都なりし時。宇多野は御狩場なる故に。宇多野の御鷹飼と云て當時までもありき。是は近衛の舍人にて御隨身たりしを。宇多野に三人。交野に三人置る。此職は其所につきて徳分ある故に。當時までも御隨身どもが朝恩にしたる事也。さて六人の御鷹飼かはるゝ日次の供御に鳥奉る。一月に六人して廿四まいらす。六齋日をのどくが故に。人別に四羽にて廿四を奉る。今までもたえざりし。御鷹飼どもみなすけ鷹飼に御野を預置て。鷹をつかはせ。供

御の鳥をとらする事。御野にをきてゆゝしき態なり。さて日次の供御奉る時は。鷹をすへ犬を引て大路をうちてゆく。其ときいづくのいづれの莊よりとて。(も鷹)鳥を持て通るものあれば。おさへて是を取ならひなり。今も馬に乗て鷹つかふに助鷹飼をぐす。是は野にいづる時。鷹をすえさせ。又野山にて馬のあしだち惡しき所にて鷹をあはさせ。鳥をもとりかはせんがためなり。犬飼と同じ様に召具する也。いにしへ野の御幸ありし時は。鳳輦の左の角のはしらは立ざる也。是は主上の御鷹あわせたまふに。さわらざらんがためなり。小鷹をめされずといへども國柱を立てる御事也。しかれば當時にても御こしの左の角のはしらは取はなちの様なりと。又鳳輦の御綱を張事。常の行幸には御前へ二すぢ御後へ二すぢ張たるを。野の行

幸には御さきへはらずして。左右へ横ざまにはりたる。是大舍人の習なり。御綱のすげの馬打も。御こしの前へは出ずして。各そばさまへうちちりたり。是は鳥ふみ立べき用なり。御鷹飼は皮のぼうしに。水干の上にうちかけしたり。太刀は鳥頸のたち付たり。北山の亭の公卿の間の障子に。承保の行幸をかゝれたるは。うちかけせぬもあり。殊に沙汰を経て書たる繪なれば。さるべき事もあるらむ。具にはしり侍らす。犬飼も亦同じ。近衛の次將などの鷹すえたるは。冠老懸にてひやうもん色々の水干の狩衣。あをかみしもにいちひくゝりたり。此行幸に當家の先祖春宮大夫賴宣于時右中將にて鷹すへさせられたり。則此姿也。誠にめづらしくおもしき風情也。それよりして當家は鷹生の家なれども。其以後相續して此みちこのまるゝ

人もなかりき。西園寺入道以後又その沙汰

ありしなり。故常盤井入道殿は殊に鷹をよ

く手練し給ひけり。おもへば此條を自稱せ

させ給ひしを耳に聞しことなり。又大臣の

大饗に母屋とひさしの兩儀あり。母屋の大

饗は大儀なるによりて。今の世にはたえ

り。嘉應の比まではありし哉らん。其年の限

只今たしかに覺へず。いまはひさしの儀ば

かりなり。母屋の大饗には鷹かひわたる事

あり。犬飼同じく相ぐしたり。そのすがた野

の行幸のどし。又内々私の鷹がりには。本儀

いかなる姿にてあるべき哉。たゞしき口傳

才覺も有べき哉らん。慥にしるしがたし。但

知足院關白と申は手書の法性寺の殿下。寺

宇治左府等の父なり。後宇治殿とも普賢寺

殿ともいふ。其御若ざかりにはきはめたる

鷹このみにて。京極大閣にはさひあいの孫

也。祖父の禪閣に申させ給ひて云。鷹をつ

かはんと思ふの間。水干して給はらんと申

されければ。禪閣鷹は大たかゝ何鷹をつか

はんとおもふぞとたづねられけるに。小鷹

をつかはんと思ふよし申さしめければ。大

鷹をつかふ時には水干を着る也。袴は召使

所の便宜の近衛舍人などがさよみの袴をか

りてしたにきるべきなり。小鷹狩には秋は

萩の狩衣に。女郎花のすゝしの衣など。肩ぬ

きかけてつかふべきなりと仰られし。これ

は猶昔の事なれば。今の世には何とも有な

む。いか様にも袂あきたる物ならば。袂をと

ぢあはせて。そのくゝりあるべきか。ひたゝ

れなどは袖をうしろへつる事もあり。近く

文永の比帶刀左衛門入道といひしものある

も。實名聞しかど。さうなき名人也。萬の生物の

比はいろ／＼むしまでもかひしものなり。

むねとは無双の鷹生也。其子六郎左衛門尉成吉と云し者有ありしが鶴合せしには。すゑたる鷹の大緒を取て。左の袖に襷をかけたりき。大緒の二またを後へ分て。袖をゆひこめて。もろかぎに結て。その結目を右の肩のうへの少うしろの方へこしたれば。袖は左の脇の下の少前へまはりたるやうなり。結目を右のかたへ打こす事は。左にては鷹にさはらざらんため也。もろかぎにゆふも。大緒のさきをながくさはらせざらんために。かくすべきよしをいひしか。それを見ならひて。わかざかりの時。鷹つかひしける時。もさ様にせし也。鶴小鷹をつかふにはむねとは織なりと云。されどもそれは長さみじかさは人の心々にあり。十丈の織の内におひよりて鶉とるべきなれども。織のうちにては叶わず。猶追のべて取つべきには織の

しりをすつる也。是を織しりうつと名付たり。餘る織の長さは卷て掌の内にあますなり。十丈はよき程なり。但小鳥に合には。猶みじかくて事闕べからず。織さしたるはやぶにも草にもかゝりて。とるべき鳥をもにがすゆへに織をさゝず。さし放てあはする常の事なり。鶴狩以下をばおしこめて小鳥狩といふ也。かならずこのり。さし羽。つみ。ゑつさいなどにはかざらざるなり。箸鷹とははい鷹の事也。はい鷹と云字は鶴なり。鷹は大鷹の事なり。せうは大鷹と同じ事也。字には兄鷹と書なり。これは同じ巢にそだつなり。せうはおとゝなるがさきに成故也。大鷹はをそくそだつ故に兄とはかゝざる歟。されども萬鷹と同じ事なり。歌などには大鷹をはし鷹と讀たれども。眞實ははしたかははい鷹なり。昌泰の宮たきの御幸の記に



も。大鷹狩の日記には必鷹の字を書。鵠小鷹狩の記には鵠の字をかゝれたり。天神とはせおの卿のかゝれたる所見尤支證とすべきか。此差別すべて書たがへざるなり。宮瀧の御幸には。京を出御の日は。先くるす野にて小たかがりありしに。左右を分て鳥數を勝負にせられたり。左の方の鷹飼は小鳥九十四と兎一をとる。右の方の鷹飼は小鳥九十一とうづら一をとる。兎は獲の數とせず。鶉一を小鳥五にあつるが故に。右の方勝に定りて勅祿にあづかる。此等は興ある事也。彼時片野にて末代にはか様の事あるべからざるよし。天神申おこなはせ給ふ。されども其後承保までも行幸はありし。但天神の申させ給ふところは。はれの行幸にはあらで。か様のふよりの御遊の事を申給ひける哉らん。其旨趣はしらず。是等は繪の才覺に入べ

き事にあらざれども。昌泰の記にのする所分明なるに付て。鷹狩才學の次でに書つくるなり。鷹をつかふ時節は冬を本とす。田野無爲の隙に用るなり。其よし昌泰の記にもみえたり。小鷹狩は秋の物なり。歌の題にも鷹狩は冬の物にして。小鷹は秋のものなり。されども現在大鷹も小鷹も。夏の外は三季にわたりて皆つかふ也。鳥のおほき木はつゝじ。ひさ<sup>かき</sup>。少き<sup>むろ</sup>むろの木。小松。又何柴と云やらん。五節のたなのみのきを床につくるみのなるなり。草は一本すゝきなど。これら今しりたる中に鳥ある也。大鷹の狩場の所をかる也。但はみにつきて田畠薄荳。か様の所にあらねども。大略柴の中にある物なり。

一鷹狩の行幸の時。左大臣<sup>時平</sup>。右大臣<sup>菅家</sup>。左右の奉行につきて。午刻已前までは小鷹狩。そ

れより以後は大鷹がり。小鷹は廿よりのつゝは一の筆に付をしわけらるゝ。勝負に至りては鶉一は小鳥五にたち。雲雀は四に立。まだら鴨は三にたち。千鳥は小鳥の十にたつ。是ははいたかの大なるわざなり。もちあがりからさひのふるまひをもちて賞翫とす。又かた羽かけのうづら。もろ羽かけの鶉のむすびやうども口傳有也。

一ひねりのさほ 五尺二寸。

一鷹の装束のすがた。もろこしにかいてんといふ虫のすがたなり。

一あこめ装束と云は。鈴持はあや織物。うらはやなぎいろ又青地の錦をもてもすべし。ねず緒は紅の糸をうちて一寸八分なり。

一小鷹装束と云は。のこ鳥とて鶯のすこしくろき様なり。此鳥の頭の皮をはぎて。下には角を重ねてすべし。鈴持の長さ一寸五分。ひろ

さ一寸。うす紅のいとなり。

一小皮装束と云は。鈴持ふすべ皮洗革をもする。鈴持錦革。下重は五面革。うらは白革にて有べし。

一れんじやく装束といふ事は。鈴著の緒は赤革。鈴持はれんじやくの頭のかはをはぎておしあはせて。いとにてぬひてする也。

一鳥かひ装束と云事。きじの鳥のくび毛をはぎて付て鈴持にする也。長さつねのどし。但口傳在之。鈴の緒は藍華にて有べし。紅の糸をもする也。

一かし鳥装束とは。かしとりの火打羽を重ねて鈴持にするなり。すゞの緒は色々の絲なり。殿上人のつかはるゝ鷹なり。年廿にあまらば用ゆべからず。又むらさきのぬず緒足緒は山がへり鳥屋に用るにり。  
犬のくびたまは赤革なり。

一鷹の符之事。

鳴符。

鶉符。

雲雀符。

小鷹にあり。

鷺白。

青白。

口傳有之。

一うづらはひとつとたつ。 ひばりはひりく

とたつ。 しぎはしりくとたつ。

一さじはふろくくと立。

此立様不審。雌雄二羽音名目。於當家相替者也。

一鷹請取渡次第。三四の禮。うは手下手。口傳

あり。此三四の禮は家の秘事也。他の手に傳べからず。

一鷹をつなぎては。大緒のさはたなさきにむすぶなり。

一大鷹は七よりに七。是をはづさずとりたるをついにしるさる。

一犬をやるこゑはいくとかくる。犬物香してうたがへば。つうくとかけてゆく。ちかければ聲をかさねてかくる也。犬飼の出立は錦のぼうしに。赤革の袖ぐちに。ふすべ革

の袴に。いちひのはじきをする也。わらぐつの内に革をあてゝはくなり。

一狩杖は梅木の末にまたを置て。其人の目のとほりに尺を切。梅の木は皮をむがざる也。一隨身の御恩は御鷹の餌の所領を以て衆類をすぐすなり。又鳥をかくる次第。左はおんとり。但春は左女鳥。鳥柴にそふる次第口傳有之。

一ひと草の鶉と云事は。麥を刈あげて青草なる。鶉をとりかふて鳥屋へ入る也。是を一草の鶉といふ。

一鷹の鳥付る事。

鶉は萩につくる。 鳴は萩なり。

一かた羽かけは年の内。 もろ羽かけは春也。是はうづらの事也。

一日かへりの羽と云は口傳有之。

此一卷近曾應或人之覓記之者也。

永仁三年孟夏仲旬

左中將基成

(花押)

〔宮内省本云〕

一河内國於片野。政頼十卷の譜中肝要を拔書にする者也。五卷は代々御門の野の行幸の

繪なり。

本云

康應元年十月廿八日 藤原基規

〔右基成朝臣鷹狩記以宮内省圖書寮本校合〕



續群書類徒卷第五百四十三

總檢校保己一集

男源忠寶校

鷹部三

鷹口傳

一はしたかとは

鷹のそうみやうなり。

一はしたことは

大たかにてもあらず。又せうにてもなきを。

はしたこといふなり。

一ともかゞみとは

これはこしなゑはるゝ鷹などに。ほこをひきぐして。たらいに水入てほこの下におきて。たかにみする也。わが影をみて身をもちなをして。やすくなをるなり。是を友かゞみ

といふなり。

一くつをむすびておつるといふ事は

大鷹小たかにかぎらず。とりをちうにてとりむすびておつるをいふなり。

一たかぬきといふ事

大鷹にかぎるべし。たかをすゆるに。うでくびにぬきいるゝ物なり。かみよりのなかに。わらのしべを入てよりて。それをうつくしくあみて。かわをもてへりをととりて。うでにぬき入てたかをすゆるなり。其長さ三寸なり。是はうでくびをつよくにぎりて。みやく

などをにぎらせじがためなり。

一 山こゑといふ事

大小の鷹にかぎるべからず。あしをかはのきりめ。つねより少ひろくきりてすれば。とつてのめぐるを山こゑといふなり。

一 すてくれといふ事

是は四きにかぎらず。たかのよくふるまいたる時。取たる鳥をそのまゝすてゝかうなり。すてくればかならずつぎの日一日は鷹をやすむるなり。

一 わすれがひとふ事

是は春夏にかぎるべし。取たる鳥を其まゝくれて。とやへいるゝをいふなり。

一 たはなしといふ事

是は鷹をつかひはじむる事をいふなり。四き又大小の鷹にかぎるべからず。

一 山川といふ事

是はたかのさうぎやうをしる事につけていふと葉なり。うしろには山川をながすなどいふとばなり。

一 土こゑといふ事

是はまづ小鷹にかぎるべし。たかをつかふ時。大鷹などの土こゑをとるは。其日のふるまいわろきなり。又小鷹にはいかに土こゑをとらせておきたつるがよき物なり。よて小鷹にはかぎる事と葉此ゆへなり。

一 おもてしるといふ事

是はつねにすゑたる人にもなくて。はじめてすへてある人を見しりておつるをいふなり。

一 おぼえかくるといふ事

又おぼえつくともいふ。おぼえかくるともいふ。

是は鳥のちり分明ならぬ時。鳥のとびて行かたをそこどとおもひやりて。いぬなどを入るゝをいふなり。又鷹にもおぼえをかく

る事あり。それも此ふぜひ成べし。

一あしへ草といふ事

是はふかき草などに鳥のかくれたるを。鷹こゑをとりて。鳥のおち草を知ておしへむとて。草を鷹のおしすりてあがるをいふなり。

一ゆるぎ草といふ事

是は鳥のおち。草のゆるぐを見て。草の上にてたかみさごはをつかひて。鳥を見る時の事なり。

一すりたつるといふ事

是は草におちたる鳥を。鷹も其草にあたりて。鳥をたつるをいふなり。

一ぬす立といふ事

是は大小の鷹につかふと葉なり。つかれの鳥のおち草よりよそへはみぬけて立をいふなり。

一くぬなとぶといふ事又くぬな立ともいふ。

是は鳥の立つかれて。ひら／＼ととぶをいふなり。

一もくちといふ事

是は大鷹にかぎるべし。えをとりかう時。まるといふ物を一どにかわずして。百口にかうをいふなり。

一くわせといふ事又くちえともいふ。

是は大小鷹にかぎるべからず。よきえを少づゝくれて。おしもまでおくをいふなり。

一やりなはいふ事

是は少鷹の犬にかぎるべし。いぬにつくる縄の事なり。犬の草にあたりて鳥を立る時は手をすつるなり。

一はしりなはいふ事

是は大鷹の犬にかぎるべし。

一ながやるといふ事

是は犬の草にあたりて。しづかにかみてゆく時。犬かいても又しづかにやり。こゑをしづかにするを。ながやるといふなり。犬も人も遠くゆくによりて。ながやるとはいふなり。

一とさけびといふ事

是は犬飼の鳥のなきて立ときさけぶをいふなり。

一そかひといふ事

是は鳥の立むかいてくる時。鷹を身にひきかくして鳥になげ。かさねてあがらするをそかいといふなり。くつを結ぶなどいふと葉は此時の事なり。

一草かずとるといふ事

是は鷹のさうなく鳥をとりえずして。草にあまたゝびあたるを草数とるといふなり。とりをあまたゝびとる儀にあらず。

一ぬかゝりにするといふ事

是は犬のながやりて行時。鷹こいをとりかうてゆくをいふなり。

一はまりといふ事

是はつかれなどいふと葉同事なり。

一つかれといふ事

是は鳥をはめて置たるをいふなり。はまりといふは。鳥を草に見ふせて置たる事なり。

一木とりにあがるといふ事

是はつかれの鳥の犬にせめられて。木竹などにあがるをいふなり。

一物ありといふ事

是は大小の鷹にかぎるべからず。鳥のおほくある所をいふなり。

一たちはしるといふ事

是は鷹のいやうをしてあるをはなちたる時。鳥にはおちあはずして。よそへ立のくをいふなり。



一とをみ鷹といふ事

是は鳥におわたる時。鷹をとを見のみつけてよばわるをいふなり。

一山をさすとふい事

是は鷹のとりたる鳥をからくる事をいふ也。からくるにくでんあり。

一くぐりけといふ事

是は鷹の羽にしろさけのまじりたるをいふなり。

一わけくるといふ事

是はつかれの犬の。鷹のとりたる鳥を。たかのあしをあしのけてくうをいふなり。

一かりごろもといふ事

是は鷹じやうのきる物なり。

一かざながれといふ事

是は山にても野にても。風おもてにて鳥にあわするとき。鷹おのれと風にふかれて。犬

をつかひてゆくをいふなり。

一みい<sup>(へ)</sup>かたきといふ事

是は木むに居たるを。さうなくとれぬをいふなり。

一ひきとりといふ事

是はたかのとられぬ時。おきゑの鳥になわをつけて。木居の下をひきまわせば。かならずおちあふなり。

一火をなぐるといふ事<sup>秘事</sup>

是は大少の鷹にかぎらず。鷹のいけみづあまつゝみの上などにて。なにともせられぬ時。ちひさきたいまつに火をつけて。矢にゆひつけて。其あたりへいやれば。鷹おちて立あがるをさしてとるなり。矢にていねども。たゞ火どもなぐるなり。

一野きはうつといふ事

是は鳥をとりゑぬ羽をいふなり。

一もとおしといふ事

是は大少の鷹にかぎらず。鷹の大おにつくる物なり。

一ねずをかはといふ事

これは鷹のしやうぞくをする時。すゑをむすびとむるかはなり。又すゑもちともいふなり。

一あしをがは

そう名なり。はゞさがは。てとりがはともいふなり。

一夜とる水といふ事

是はひじなり。鷹のくすりかいの時の水なり。これはなんによてつぐとき of いんをとて鷹にかう事あり。大にひすべし。

一見すゑとりといふ事

又見とりともいふ。

是は鷹をすゑて行時。鳥のあるをあのれと鷹見つけてとばふをいふなり。

一したげといふ事

是は鷹のこしの上のけなり。したげにあたるなどいふと葉なり。のせをなどいふもあなじ事なり。

一すゑのこといふ事

又めさしのすゑともいふ。

春にかぎるべし。鳥にすゑの音をきかせじとて。目にさくらのかはをさすなり。たかとびて行時。ぬくるやうにさすなり。

一右羽左羽といふ事

是は鷹鳥などにもかぎらず。鷹つかふ時。山のなりによりて。鷹にても鳥にても。ひだりへゆきめぐるをばひだり羽。右へ行めぐるをばみぎり羽なり。是は山のなりによりてつかふと葉なり。

一ひとより二よりといふ事

是は鳥をひとりたるをば一より。二つとりたるをば二よりといふなり。以下いくより

もちなじ心なり。

一さかけといふ事

是は山ぎしなどにて。鳥はひきまはせども。鷹は上へあがりて。すゑにてとりに立あひてとるをいふなり。鷹のあがる時の羽をさかけといふなり。

一火うちとはいふ事

是は鷹の羽さきに別の羽のあるをいふなり。

一うさぎかしら鳥かしらなどいふ事

是はゑぶくろしやうぞくにあり。

一へをの事

甘いなるべし。小鷹にかぎるべし。

一あきなは

大鷹にかぎるべし。

一木居といふ事

まづは大鷹にかぎるべし。少鷹に土こゑと

あり。

一いりふすといふ事

是は犬につけてのと葉なり。ふるき逸物のいぬをいふなり。

一つまゑてすふるなどいふ事つまふともいふ。

是は少鷹にかぎるべし。

一十よりは大鷹。七よりはせう。百よりははひ鷹。

一ほこにつなぐ事

大おの事なり。

大鷹は七むすび。せうは五むすび。

はひ鷹五むすび。

少鷹三むすび。

一ひねりさほといふ事五尺二寸也。

是は鷹の鳥をとりにて草の上に居たるとき。むまをかけよせて。むまの上よりひねりさをにて。とりかはにても。又鳥のあしにて

もかけて。ひねりてするあぐる事也。少鷹にかざるべし。

一下鷹といふ事

是はほこにもとよりつなぎたる鷹のあるに。又はじめてたかつなく時。もとの鷹を下たかといふなり。

一ますかきの羽といふ事

是は山あひなどをもすぐにとぶ羽をいふなり。

一ゑこいといふ事

是は大鷹せうにかざるべし。

一百鳥やといふ事

是はつねになさ事なり。又はある事なり。山にても鳥屋にてもたがへるをいふなり。

一たか衣といふ事又はふせぎぬともいふ。

是はしやうぞくする時。鷹をふするにさする物なり。又はよそへやる鷹などに。羽をそ

んさかさじとてきするなり。

一ほこ衣といふ事

是は鷹をほこの上にてまはせじとて。ほこの下にぬのをさぐるなり。

一はつとがりといふ事

是は鷹のたはなしおなじ事なり。秋なり。

一おどろき立といふ事

是は人も鷹もしらねども。人のとをるにおどろきて。とりの立をいふなり。

一むことりよめ鳥といふ事

是はつかれのとりを見ふせて犬をいるゝに。見ふせたる鳥にてはなくて。そばの草より立鳥を。おん鳥の立をばむことりといひ。めんとりの立をばよめ鳥といふなり。

鷹諸名

おろたか  
白鷹。

みつきい  
雀鷃。

せう  
是鷹。

このり  
兄鷄。

はしたか  
箸鷹。

さしは  
刺羽。

つみ  
雀鵒。

はやよ  
隼。



白大鷹ましろ たか

黄鷹わかつかなり。撫鵲かたかへり鷹たかなり。鳥屋鵲とりやかへり

一鷹のとしばといふ事。

鷹のとりをくゝる柴の事なり。人のかたへたかの鳥をやる時。此しばのゑだにつけてやる也。木はたもの木也。あをつゞらにてゆひつくるなり。

一うづらなどは萩につけて人の方へやるなり。

一鷹の鳥木に付る事

付木は榊なり。一の枝より下を二尺五寸。下の枝より上三めの枝に付るなり。山をば紙よりにてうしろにかくるなり。春はめんとりを上の枝に。秋はおんとりを下の枝に付るなり。但山をながらかくる時は。おんとり一そく。めんとり三ふせにゆひて。ふくさのひとたけかみよりにてつくるなり。又めんとりはつゞらにてもかみよりの代に付るな

り。又女の方より遣鳥つくるは。めんとりをいつも上に付るなり。およそ木のふとさかり杖ほどなり。付る木の下のきりやうは。まゝ付る木のきりやうにおなじ。

一大鷹をきなわ三四十ひろ。但なかとりをす。たかぬき四寸八分なり。ゑ袋のうけをかけをのあい四寸。

一はい鷹の大を四尺九寸。ひこのを二寸二分。大くるみおなじ。ぶちの長さ大鷹は二尺五寸。はい鷹のぶちは三尺壹寸也。

一すゞもちの長さ壹寸七分。廣さ一寸三分。すゞさし壹寸七分。あしおはゞき七分。こより六寸。但しやうぞくは大鷹せうにしたがふべし。

一はい鷹のへを廿ひろ廿五ひろ。ひねりは多分弓のほこにおなじ。

一鷹をとりつなく時は。左のかたをよせて。手

をほこにやすめてとははせてとる。ほこにつなぐ時は。右のかたを先によせて一むすびして。我方へおしむけてつなぐ也。

〔舊本以下前卷所收基成朝臣鷹狩記之全文也故今從省略〕

〔右鷹口傳以宮内省圖書寮本校合〕

## 鷹聞書

### 鷹秘抄

ソレタカハ仁德天皇ノ御時百濟國ヨリ始テ渡ル。仁德天皇八十七年タモタセ給。四十六年ノ御年渡ル。タカノ名クリテウト云。十二卷文書ヲ相ソヘテ奉トイヘドモ。ヨム人カタシ。使ノアリサマ僧ニテ□□カタリホウシヲス。其後仁德ノ御門ニ傳マイラストイヘドモ。口傳猶クラシ。政頼ガ時カラノ鷹飼ツルガノ津ニワタル。セイライ彼人ニアヒテ。十二卷ノ書ヲヒラキテ。十八ノ秘事卅六卷ヲナライ。政頼カノヨロコビニ。コチクト云ハシタモノニ。長モチニカラ相ソヘテタブ。請取テ悦テ鷹生ノ装束。鈴。餌袋。カリ杖。ウチカイブクロマデ奉ル。政頼ノボル時ニ。サブライ政世ヲツカキニテコチクガ許

へ捻タルフミヲツカハス。

コチクテフコトカタラハハ笛竹ノ一ヨノ  
フシヲ人ニ知スナ

ト云ナリ。此歌彼夜ルトル澤ノ水ト云藥ノ  
心云々。ヨルトルサハノ水ノ事。皆人シル事  
也。但大方注者也。竹ノヨヲ兩ニフシヲコメ  
テ。トウスニ百日入テ。百日メニ取アゲ。キ  
リニテモミテ水ヲトリ。其水ニテ餌ヲアラ  
イカウ。大ナル秘事也。諸病ニヨシトイヘド  
モ。取分イキケ。ハナゲ。ヤブタカ。クダリ  
ケ。エウトミ。コヘノカルハ。カクシハノス  
リ。

一餌ヲ作事。新シキエナリトモ。キリメムザ  
ノトスレバワルキナリ。切目タビシクス  
ベキナリ。

一山ヲスレ藥トハ吉口餌也。口餌カウ時ニ山  
ヲ忘ルハトナリ。

一鷹ヲスヘナヅケテ仕入タルタカヲバ。アナ  
ガチニ隙ナクバ。朝ハ七時ヨリ外架ニツナ  
グベシ。サテエヲ飼テ後。クラキ所ニツナグ  
ベシ。餌ヲカウ時。イカニモチカクシテヲキ  
テ。ヲソクワタル事アラバ。立ノキテヲク  
ベシ。遠クヲキテ。ワタラヌトテヨル事アル  
ベカラズト云々。

一夏清水ニツケタル餌ヲ飼ヘバ鷹中風スルナ  
リ。少ヌルキ湯ナドニテアライテカウベシ。  
一スギタル鷹ヲバ朝夕ヨキクチエニテ居。コ  
ブシヲハナサズ。ヨキクチエニテアツカウ  
ベシ。如此過タルタカヲナヅクルト云ハ。朝  
七ノ時分ヨリ野ニスヘ出テ。四時マデ居ア  
ルクナリ。サテ歸リテクラキ所ニツナギテ。  
又晩景七ノ時分ヨリ六ノ時分スギマデ居ベ  
シ。スユル時ハ口餌ヲハナスベカラズ。タカ  
ヲナツクルナリ。

(口喰蔵)

一山ワスレ藥トハ吉餌也。口餌ヲカウ時。山ヲワスルハト云ナリ。別ノ口傳ナキナリ。

一ツカレヲシミスルヲバ。イソガシクトモ。ヲキヲトシタラバ。フカノト口餌ヲカウベシ。ツカレヲ惜ミ。耳カタキヲナヲスベキ事。エヲカウベキトキ。ナニ鳥ニテモトルマジキ物ニ合テ。取ズシテ木ニアガリタルヲ。ヲキヲトシテエヲカウベシ。四五度如此シタラバモヤスクナルベシ。

一足カハノナガサ七寸。一寸ハハバキノ分也。カハノ色ハ。フスベカハヲヨク酒ニテ洗テ。ヤハラゲテタツベシ。クロカハノ事ハ大臣ノ鷹ニ用ナリ。紫革ハヤウアル事也。錦革ハ帝皇ノ御鷹ニ用ナリ。又小鷹ハ紫革不苦也。只ノ人モ用ナリ。但其モ人ニヨルベキナリ。一ツバリ足緒事。ハバキツナギヲ別也。ハバキハヲリタル物。革ニヲカサネタル物ナリ。カ

ヌルニテ作也

サヌルニノ口傳有。ツナギヲハスバシノ糸也。クミ様口傳アリ。左ハ左ヨリ右ハ右ヨリニクミニヨルナリ常ハ只ノ足ヲナリ。又

本式ノアシヲハ切様サシヤウツネノモノナリ。アシヲニハカハルナリ。常ニサスアシヲハバモチリアシヲト云ナリ。

一本式ノ裝束ノ事ハ大タカノコトナリ。切革。シヤウゾク。半シヤウゾクモ同。但兄鷹ニハ大鷹ニカハル事口傳アリ。又シツクル様ニ口傳アリ。シヤウブカハ。ゴメンカハヲカサネテ。二ハリサシニ縫ベシ。ナガサ鷹ノ尾ノヒシヤク花ニトバクホド也。

一半シヤウゾクト申ハ。シキノシヤウゾクト同體ナリ。ソレハ尾ノ中程マデトバクナリ。一キリカハ裝束ト申ハ。ウヘノ鈴モチ斗ヲシタルヲ申ナリ。スバイタノカタチアルベシ。スバノナリアルベキナリ。ネズヲノナリ。如常切テ中ニテ引合テクケ



テ。サテ鳥クキヲカサネテユイツクベシ。小鷹同ネズヲナガサ一寸五分也。

一 小鷹ノシヤウゾクニハ。カシ鳥裝束。ノゴ鳥裝束。トサカシヤウゾク。フクサ裝束トテアリ。シキノ裝束ヲバセズ。紅ノ糸ニテネズヲ、ウツヲバ。マキアゲノネズヲト申ナリ。

一 カシ鳥シヤウゾクト申ハ。レンジャクノ尾ノアカキ分ヲイダシテ。ウヘニカシ鳥ノカタ。サギノウハゲノワキノ青キ小羽ヲ重テ。又其上ニ金ランヲカサネベキナリ。但キンランノウラニ。此カサネモノヲシテ。ソノアマリヲウチカヘシテ面ヘナスナリ。カサネニ口傳アリ。ヌルテニテツクル口傳ナリ。ノゴトリシヤウゾクハ。ノゴ鳥ノ喉ノ下ノ赤キ毛ヲカハトモニハギテ。エボシノヂヲスバモチノヤウニキリテヌリテ。ソノトニ此毛ヲスルナリ。

一 鳥<sup>トツ</sup>サカシヤウゾクニハ。キジノ鳥ノヤウニスルナリ。

一 フクサシヤウゾクトハ。何ニテモウツクシキ物ニテシタルヲ申ナリ。定マル物ハナシ。但大タカ小タカニスルシヤウゾクモ皆フクサ裝束也。

一 鞭ハ長サ二尺五寸。大小鷹共ニ同ト云々。但小鷹ノブチナガクスル事アリ。カリツエノ代ニ用子細アリ。甘草ヲブチニシテ。サキヲヨクタ、キテ。水ヲモツベキタメナリ。ナガサ一尺二寸斗也。是ニテ鷹ヲナブル事ヨキ也。

一 鳥屋事。ヒロサ四尺四方。高サ四尺五寸ナリ。ムネノトヲリ三方ヲカベニスルベシ。屋ネハ一方ヲ小麥ノワラ。一方ヲ檜ノ葉ニテフクベシ。マヘハサシコノゴトク。シノ竹ヲサスベシ。其上ニワラニテコモヲアミテカ

ケベシ。ウチニハクリ石ヲシクベシ。舟ニ水ヲ入テ日ニ一二度カヘベシ。ホコニハ何ニテモナマキヲサイ〜ニヌキカヘヲクベシ。藥ニナルキ可然也。同ハサンセウノ木可然也。ホコノ高サ地ヨリ一尺二寸斗ナルベシ。鳥屋ヲバ東向ニスベキ也。但所ニヨルベシ。此東向不審也。本書ニハ北向トアリ如何。ムクロモデノ黒燒。エニツ、ミ可飼也。

一鳥屋ニテ尾羽落サヌ鷹ニハ。ヒサゴウリノツルヲモミテ飼ベシ。又セミノヌケガラヲコニシテ甘草ノコ等分ニ合テ。エニマゼ細々飼ベキナリ。鳥屋ニテ餌惡ケレバ病鷹ニナルナリ。ヨクカヘバ命長也。

一ホコノ事。タカサ四尺。ホコヌノナガサ同。ホコ布ノコハキモワロシ。又ヌノハ自然ツメカ、リテ惡事アリ。サナカラン物可然也。アナガチナニヲトハ不定ナリ。

一カリホコノ事。木ノ本ヲ東ニ北ニアルベシ。不心鳥南向ノ時東本此分テ可斗南向ナラバ東ニ木ノ本アルベシ。如此方ヲ追テスベシ。

一鷹ヲホコニツナグ事。兄鷹ハ木ノ本ニ。太タカハ木ノスエニツナグベシ。セウハラン鳥ナル故ツナグトアリ。此說以外也。不可用。大鷹イラレテ兄鷹ヲトリタガル間。末ニ大タカヲツナクト云事ヲカシキ事也。木ノ本ニ大タカ。末ニ兄鷹アリ。

一ホコニツナグタカヲウシロサマニホコニスエテ。サテツナグ也。大タカハ七ツクサリテツナグ。兄鷹ニハ五ツクサリテツナグ。小鷹ニハ三ツクサリテツナグベシ。鳥ニ合スルヤウニ。鷹ヲホコヘヤル事アル事アルベカラズ。

一鷹ヲ人ニワタスベキ事。アラタカニテアラバ。ホコニツナギテ。ユカケトブチヲワタス

ベキナリ。シヤウゾクシタルタカヲバ。ユカケヲサシテ。餌袋ニ大タカナラバメントリ。兄ナラバヲントリヲサシテワタスベキナリ。マヅエブクロヲトキテワタシテ。サテタカヲワタシテ。後ニブチヲワタスベシ。小鷹同。小タカハエブクロニクチエニウヅヲ入ナリ。

一 マリノカヽリアル所ニカリホコヲイフ事。春ハ櫻ノ木ヲ一方ニシテイフベシ。カリツエヲ一方ノ柱ニモスルナリ。大鷹ナラバカリツエナリガタシ。何ニテモスルナリ。

一 ヤリ繩ノ事。ワラノスヘナフベシ。ナガサニ(七段下同)イロカタワキナリ。サワキヲモスルナリ。サワキトハ藤ヲ云。山ニテハ藤ヲツクルナリ。物ニカヽラサシ(マ)用也。七尺也。小鷹ニハ藤ヲバセヌモノナリ。ハシリトツネニ人ノユフコレナリ云々。

一 ヲキナハノ事。五十イロナリ。(七段)左繩ニナフナリ。アヲクソムベシ。

一 ヘヲノ事。廿尋ツネノコトナリ。又十五尋。是ハヲキタツルヘヲ歟。

一 鷹フカハリノ事。一目ノ色。二口箸ノ色。三足ノガンギノ色。四ツメノ色。五羽スヂ。六フクリン。七ハナゲ。此七種白クバシロナルベシ。七所ノ内六所白クトモ。ハナゲ黒クアラバ白ニアラズ。六所黒クトモ。ハナゲ白クバフガハリト可申也。此六所ノ色白クシテ。ハナゲ斗クロキ鷹ノアカキヲバアカタカト云。此六所クロケレドモ。ハナゲシロクテアカキハシホト云也。七所白クテアカキモ。大タカ小鷹皆白也。

一 尾ノ名ニカハリタル分。マチカタノ尾。セマチヲ。ヤカタヲ。シノブヲ。シトヽノヲ。此外如何様ニモアレ。皆メヅラシキ尾ノフヲバ

マチヲト云也。彼本ニ尾ノフノ圖ヲ不出。何  
タルヲ何尾ト云ト云ベキニヤ。但別ノ書ニ  
尾ノ圖ヲ出アリ。名ハ同者ナリ。此内マチカ  
タヲトアルヲ。マチカタノヲトノ文字ヲ入  
タリ。又シト、ノ尾トアリ。是モノ文字入ル  
如何。(ノ誤)

一狩杖ノ事。鷹生笠ノハトヲリ也。木ハ梅桐桑  
ノ木也。イバラヲシトテ。木ノマタ三寸斗ヲ  
クナリ。サキ五寸斗サキニスルナリ。革ヲシ  
トモ云。此本ニハナシ。他本草ヲシトモ云ナ  
リ。

一笠ハアミガサヲキルナリ。タカノ羽ノ用心  
ナリ云々。

一アラタカニ山忘草ト云ハ。ヨキクチエノ事  
ナリ。ヨキクチエクフ時。山ヲ忘ルトアリ。  
鷹ヲナツクルニ。ヨキクチエホドノ事ナキ  
ナリ。

一ラントリノ事。山ノラントリト云ハ。ウサギ  
山鳥ヲ云ナリ。田ノ物トハ鴈鴨也。其外鷺  
鶴。何ニテモアレトルヲバ田ノラントリト  
申也。

一巢ヨリヲロシタルヲバス鷹ト云。スハタヲ  
フミ枝ウツリナドスルヲ。コアミニテトリ  
タルヲバカレキツキト云一説アリ。巢ヨリ  
タチテ母タカニツキテマハルヲ。アミニテ  
ウチテ取タルヲ巢マハリト云。巢ノアイダ  
ハ夜ルハスニカエリトマルナリ。ス山チカ  
キ所ヲウチマハリテ。スニハトマリモセズ  
シテ。スノホトリヲマハルヲトリタルヲバ。  
ス山マハリトモ云説アリ。秋ノキニナリテ  
取タルヲバアカケト云ナリ。冬ノキニ成テ  
取タルヲバノサレト云ナリ。又年中如此ノ  
若タカハヤ春ニナリテ取タルヲサシホヒメ  
鷹ト云。是ハ此抄ニハ此分アレドモ。他ノ抄



物分ナラバサホヒメ歟。サシヒメ不審。夏ノ  
 キニ成テ取タルヲ小山ガヘリト云説也。但  
 春取タルヲ小山ガヘリト云説常ノ儀也。兩  
 説之儀也。夏ノキニハ鷹ヲウツ事ナシ。巢ニ  
 子ヲモツ故也。又云。ス山マハリノゴトクニ  
 近所ノ山ヲマハルヲスチカキトモ云。五六  
 月ノ事ナルベシ。此説モアリ。巢山マハリヲ  
 兩説ニ申儀ナリ。

一鷹ノフガハリノ事。白フノタカト云ハ白也。  
 又マ白ノ鷹ト云ハマユノ白キナリ。コトナ  
 ルコトナシ。

一大クロフ。小クロフ。是ハ白キ所ナクテ。ト  
 コロ<sup>ノ</sup>ニシノギゲノスチミナルヲ云ナ  
 リ。又ウヅラフ。フヂフ。シギフナド云フア  
 リ。

一スバノコヲサス。櫻ノカワニテツクル。作様  
 誰モシルナリ。鈴ノメサストモ云。犬ノスバ

ニモサスナリ。

一鷹トブ事ニフルマイドモアリ。

一マスカキ羽。是百首ニアリ。左羽右羽。カヘ  
 リ羽。アガル羽。ノボリ羽。ミサゴ羽。コモツ  
 チコエ。ヲシヘ草。ノキ羽ウツ。此ノキハウ  
 ツト云コト説アルコトナリ。

一万セイノタカトハ。マエヨリミレバアヲノ  
 キ。ウシロミレバウツブク様ナルヲ云也。  
 (ヨリ脱歇)

一カモイノ鷹トハ。扇ヲコシニサシタルヤウ  
 ニ。一文字ニキタルヲ云ナリ。

一サンダンミヲレノタカト云ハ。ドウハカモ  
 井ノゴトクニスクキテ。カシラウツブケル。  
 ヲニテコブシヲサスルナリ。如此ノ鷹逸物  
 ナリ。

此聞書可有用捨。不審事等多。

〔右鷹聞書以宮内省圖書寮本校合〕

續群書類從卷第五百四十四

鷹部四

鷹秘抄

夫鷹者仁德天皇自神武十七代御時。自百濟國始テ渡ル。而自始つかい給皇。

天智天皇。

自仁德二十七代二十二代歟。御鷹有。

嵯峨天皇。

自天智十四代十三代歟。勢羅ト云御鷹有。

醍醐天皇。

中納言在原行平。此時之鷹飼也。かちんのすひかんのたもとに鶴をぬいてきたる。おきなさび人なとがめそかり衣と云

一條院。

自醍醐七代。はとやと云御鷹有。小。又みさこ腹歌仕けり。

小一條院。

自一條四代。春宮ニテカクレ給。此御時鷹好事法ニスギタリ。

凡此道をはじめ學する者。下臈におゐてはその數有べからず。然ども指重代にあらず

總檢校保己一集

男源忠寶校

師にあはずといへども。相傳先達のあとをほのかにたづねて。このむをもつてとくとし。あいしる事を少々注。

一山歸を三日五日に合するやう。なまぬるなる湯にてよく洗おとしてすゑべし。如此あらひつれば。いかにあらき鷹も手に居事を得也。但極めてあらき鷹は猶いぬ事も有。それをば目をぬひてすへべし。さて夜に入ぬれば。ひきゝろくろほこにつなぎて。しばらくもやすむる事なかれ。ひまなくほこをまはして。はたらかしてねさせざれば。夜

半におよぶ程に。あまりねむたがるをねさせずして。束しらみほのく<sup>く</sup>と明る時にのぞみて手にすへて。はたらかさずしてねさすべし。さて夜明になれば一日野山をうちありくなり。その夜を見るに。ゑをはむ鷹をばやがて火をあかくともして置わたして。口ゑばかりをかい<sup>く</sup>して一夜の間置なり。あらくてゑをはまぬ鷹をば。先のごとくまはりほこにてよとるべし。夜あけなば又先のごとく野にすへ出て一日ありくべし。馬にのり野に出る心は。里にてかち人の手にいぬ鷹も。馬にてすへて野に出ぬれば。手にあるが故也。さて夜をかるゝ鷹をば。つぎの田野に出たる時置繩さして。おきなわのすゑを腰にはさみて。ふしき若は家の上岸の上などに捻すへて。さしとりては口ゑかい<sup>く</sup>して一日置べし。さて鷹いられて

見へば。朝に先赤鹽を飼べし。さて水を飼。當のゑかいて次の日。鵲カササギのいかきの様なるさかを切て。中は袋にてあるに。水がねを大豆ばかり入てとりのゑを捻入。口をふたぎて鷹に飼て一時ばかりあるをり。おもと草を粉にして。からはじかみばかりを互につゝみて飼て後に合するなり。但鷹によりて其日は合すべし。其日合せまじき鷹ならば。其日ゑをかはずして。其夜一夜おきて口ゑばかり飼て。次の日はすべし。委は口傳にあり。

一荒鷹をとりかはんには。鷹を持てぬくめ鳥をとりて。人のふところに入て。さまさずして持べし。其後荒鷹をば合するなり。そのゆへは鳥をはめたるを。かならずそのつかれをとりかはんとすれば。あしき事の有なり。そのゆへはひきゝ柴木居などにかけてゐた

るに。犬もちかくとをり。あらくもうちよれば立のく事もあり。又河や船戸にはめつれば。遠はしりぬけてたちつれば。なまさかしく落合て。其度は能もはめずして。とかくする程に久しくなりて惡也。さればたゞさきに鳥追つる所にてぬくめ鳥をかいつれば。追たりつる鳥をはみたりと思なり。努々不可疑。されば其ね鳥を飼に過たるとはなし。大方鷹は鳥を追つれば。手とらねどもゑをかいつれば其鳥と思也。さて次日はいりいりとするなり。さればとて一定取つべからん鳥をとらせずして。ね鳥を飼には不及。木居に高くかゝりて。つかれをにがしけもなく一定取つべからん鳥におきては。そのつかれを立てとらせて飼なり。

鷹置事はあかけをば構てすらせじと可置也。高所に鷹置て。ひさゝ所のすゑ遠きすぎ

たる所にゐておけばかならずくるなり。すゑのふたがりたる所に居て置べき也。里にては家などを後に居て置べし。野にては塚若は岸小山などを後にあて置べきなり。又巢鷹をばおきゑをすりて。すりをせさせんと置べき也。何をもたかたぬきを持ってをきつけて。あたらしき別足のつきめ。若は小鳥なんどのあたらしきを持。たかたぬきにてかいならはせべきなり。又火をともして夜置つくべき也。又鷹のいられたらん時は。鷹を谷に置。嶺にてよびあぐべし。さればとて鷹のそらくならん時はさ様には不可置構。鷹の心をたがふべからず。一度も心をたがへつれば。其によりてくせのつく事あるなり。一又常のしゝを調薬には。鹽にかみの垢をこまかにくだきて。垢を等分に合せ。但鷹も肥すぎて。今少はやさ薬を飼とおもはん時は。



七種の染藥をかふべきなり。

一染藥と云は。牛膝根。堅鹽。赤荊根。

はぶしく三子（みねばり）はの根。當歸。すわう。丁

子。

是を等分に合て。糖の様に煎て。方一寸に檀紙を切て。此煎じたるしるを染干く。檀紙のはだのみえぬまで染干ておきて。かはんと思はん時おしまるめて。うさぎの毛をうへにつゝみて三口かうべし。又ぬすみはみしたらん鷹にも是をかうべし。たゞしぬすみしたらんが。こゑたる鳥のあぶらをおほくくらしいたらんには。梅ぼうしのみばかりかふべし。

一鷹の病は百濟の本書のどくば十七と注せり。秦皇の秘書のどくば六十一病をあかせりといへども。其科やまひのおはりならずよりは見しらるゝ物なし。又悟がたし。然ど

も百千の藥の數をあかせりといへども其詮なし。うちまかせては毛のねのさきゆるぎてあゑぐやまひあり。常の説にはたけと云也。彼病には先鹽を可飼。次にひるを可飼。七つゝみ。兄鷹には四つゝみ。かたしほ飼事。ぐみのさねばかりにて大鷹には三。兄鷹には二也。大方の藥と云はしやくやくなり。しやくやくと云はあか子のくそなり。又鷹主のゆばりを女會したる日の中のをば飼べからず。但赤子のくそをばゑにつゝみて可飼。ゆばりをば一度の分のゑをぬらして飼也。又たにかこ三つゝみ。石の下のかに也。蟬三つゝみかふべし。三つゝみと云は鷹のくう程にして三つゝみなり。いづれもくゑにつゝみて可飼。又あさの根をはいに焼て三つゝみ飼べし。又ちやうじ一さぎみてかふべし。大鷹には一。兄鷹には半。是を常

にかふべし。鼻たけのはじめにも吉。はなたけとたけとのつきはじむるやうはそのすがた一也。あひかはらず。故に二の病の薬をかねてかふべきなり。此二の病には兩方かねたる薬を可飼。謂此二の病付はじむる時。口なめつくりをしてとばいて。時々いさあらくしてこくちをあくなり。これをもつてしるべし。

一常なる病のしかも療治しがたきは。野すりといふやまひなり。此病は毛のねかたくひきて。みめよく成て。あふのきて手ぶくろをひく也。人病としらず。但れいよりもみめよく成。又鳥をもおいきり。えをもはみおとらば此病としるべし。此病は次第にえをはみおとりて。漸々に疲つまりてしぬなり。薬には吉野鹽をくだきて。れいしきに飼やうにかふて。時々とりく餅を餌に包て可飼。せ

ひはぐみの實の程にて六可飼。時々主のゆばりを可飼。但ゆばりは餘に早薬也。然者つちにゆばりをしゝめて。その土を能々日にほしさらして。堅鹽を飼やうに。おほさも同様に可飼也。此薬と云は秦皇の秘密の薬也。又人に傳事なかれ。此病はいそぎ焼べき也。中骨をはさみて。あばらさもののしりかしらを焼べし。又あぶらをのつきめをやくべし。又腰のつきめを焼べし。

一はなたけには此野すりの病と同薬なり。やく所は口のあきのうち三方をやくべし。一羽の虫惡には能ひてをあめのやうに煎て。鹽を三分一入てつくづし。又こせと云病も是同薬也。但とや鷹などのよござしと思には。大根をおろして鹽を半分すりくして可付。ごまのあぶらを入るゝなり。

一羽をかきたる病をば。あなをほりて。あなの

そこめぐりにもこもをしきて口をふさぐべし。ふたの中にあなをすこしあけて。ゑかはん時あかりを少入よ。ゑをばつくりてちいさきけに入て可飼。まづかきたらん所のふしを水にぬらして。けをおしのけて。石のちいさくひらなるをやきて。紙をぬらしてつきめを能々むして。かのあなの中に入ておけばよくなるなり。

一くそたけと云病は。しりのかたまりて。くそをつかぬなり。それも鹽を飼て先の染藥を飼て。かのしゝのはらおらひのあぶらを可飼。めとりのあぶらにても可飼。

一みゝずをつく病あり。又ちいさきむしを(生獸)まゐる病あり。是も同藥をかふべし。但是にははらおらいのあぶらはかふべからず。

一とや出しの鷹のしゝの堅には。にはとりのかしわ鳥のひぼねのされたるをこそげて七

日かふべし。又もかりのこめのしるをかふべし。してこかはらけ三ばかりかふべきなり。しゝはいよくかた(行鷹)まれども。中もすき病の心も吉也。大方船にもゑい。又何にもゑいたらむ鷹にも。すりこをこまかなる物にてこして。はるのめとりのあぶらを等分にあはせていそぎ可飼。さて後ゑを五きれにすぎて不可飼。をすにしたがひて少能々可飼也。物にゑいたる鷹をしる様は。させる病とはみえねども。目ほそめてくせもなきゑをうちすつるなり。

一鷹の足にいちこ肉の様にて。しかも堅くこぶる様なる物のいづるには。天南星をねやして。かたにかわをときて合べし。こぶの上にぬりて。紙を切ておし付ておけば。はげてうするなり。

一とばふとて羽ぶしを打腫て。あまさへうみ

うつく事あらば。ほこ布こはき故なり。ほこ布にぬのをして。件のうみたる所能々洗て。其めぐりにひるを五六かいつればやがてなをるなり。

一もゝかりする鷹にも。其かるゝ毛の根にひるをかふべきなり。いづれも鷹をふせよ。もゝかりはつくろはざれば年どにかるゝ物なり。とやの時こぜにつくるがどくくすりをつくべし。

一めわくと云病は。とうしたるはまわたしのくろくてあつく見ゆるなり。いまだおいざるは涙をいだしあはをいだすなり。薬には鳥の羽にても鶺鴒の羽にてもはいに焼て。なまところ（を照）にねやし合て。吉酢のすみたるに。しほゝ人のくう程に入て。鷹のかたにぬりて後に。目にすりいれさすべし。まづかたにぬりてのちに目に付よ。

一鷹の足の腫たるれうちには。天南星をかたにかわに合て付て。上に紙をおほいておくべし。又にしのからみをねやして可付。若足のうらかへるほどにはれて治方なからんには。腫たる中を指わりて。へいしやうをすこしかうがいのさきにつけて入べし。若へいしやうすぎて足もくろみ。又すねもかるゝと思はゞ。とうしみをにいだして能々洗て。くぢらの油を可付。すこし付てたらずば又つけぐすべし。

一足のはれてこぶになりたるには。一なつはなちとやに入たるに過たるはなし。

一鷹のこゑかるゝには。ほこなんどにても筒を打たる也。然どもしやくやくをかへ。又しほもかふべし。又河にあるいしにしを三なましにてこまゝとたいきて。ゑにつゝみて三朝斗かへばよく成也。またかまの下の



土をこそげて水にたてゝかふべし。

一とや出し鷹には鹽を可飼。うちまかせてはぐみの實のやうに作て飼なり。さやうに作たるをこまかにくだきて。かみのあかを半分合て。ちうさうにてつゝみて。ゑにつゝみてかふべし。あかを半分に合する事は鷹によるべし。心も悪くしゝもたかからずと思心には。あかを三分が一あはすべし。其後水をのまんにしたがつて可飼。是はけふあはせんと思はん朝とく可飼。まへの日かひたるもよし。なひ鳥などにはもとまへの日可飼。夜中ばかりにかふ説もあるなり。

一とや出しの鷹のしゝをしるやうは。さしゑをはまずして。あらゑをばまん時をもつてそのどくしるなり。それをはまざらんかぎりは。いくかもたゞのゑをかふべからず。

一しりふくらをとりかうやうは。別足を可飼也。其ゆへはひな鳥は極てほねゑにてあるなり。然ども別足は吉所にて有をもちてこれをかふなり。

一鷹のもゝひぢなどをそんじたらんには。やはらかならん所につなぎて。構てはたらかすまじきなり。さて鹽を飼て水飼て。ゑにじねんとうをすりてまぜてかふべし。又釜の土をかふべし。

一鷹の羽のいとまりたる藥には。赤子のくそにかいこの夏このたねねりあはせひちくりて。かのとまりたるあなに入て。桑の木の枝のはりを作てさすべし。

一ゑつゝみをつきそんじたらんには。人のかみにてぬふべし。ゑにじねんとうをまぜて少づゝかふべし。

一ゑをも悪く飼。のみかけをもしたらんには。

口よりゆびを入れてとるべし。それはこゝろ  
うべし。

一犬にゆびつめなどのきはをくひきられてあ  
らむには。則水にて洗て。彼疵の口に犬の毛  
をはいに焼て付べし。うへを綿にてつゝむ  
べし。ゆにてとゞむべし。

一鷹の身にいづれにてもくいなんどのたてた  
るあとあらば。きやうりせんをつくべし。

一いきりのきれたらんには。つちはいさをし  
て。きれめにきんもうくじやくのけをつけ  
べし。きんもうくじやくとはたうじんもち  
たり。又おにわらびのけをもいふなり。

一ちんのゑといふは。もゝきくちをきりて。か  
らすみを粉にして。猪の油にひちくりて。も  
ゝさをくちのなかにひとはたいれてかふな  
り。大鷹には二。兄鷹には一かふべし。但し  
大しよくたんの鷹ならば大鷹には三も四も

かふべし。

一こきやゑこきやくいと云は。あかしほになまりをこそ  
げて。一字かなからをぐして可飼。赤鹽は常  
にかふほどなり。一字かなからと云は錢の  
文字の一が事也。たとへば錢の半分が一  
なり。

一たかの白虫のいできたらんには。いわうく  
すりをちきやうのねに付るなり。いわう薬  
と云は能水がねと。まじる物なきゆわうに  
すりとりてのち。猪のあぶらにてながれぬ  
ほどにとき合て付るなり。すり取と云は。し  
らちの鉢にまづゆわうを入れてすりくだきて  
後。水がねを入れてよく／＼すり合するなり。  
くわしくはくでんにあるべし。

一ゑのこ犬を引入る次第。鷹の邊に置いて常に  
鷹を見しらすべし。さて鷹をみしりたりげ  
にあれども。物さわがしくもあれば。忘てあ

やまちなどもすのは。たゞおもづらをはけ

(北條)

てかますべし。さてよくもあしくも二日に一度。三日に一度野へは具べし。其故は善惡も毎日に具すれば物くさくなりてわろきなり。おのづからそのとしはよけれども。つぎの年はうたがひなくわろきなり。努々不審あるべからず。

一新修鷹經者余病余灸所注。今秦皇文のどくば。一藥をもてあまたの病をれうぢ。さうしよのすくなきをもてそのせん有故に。その萬が一を記申。

一相經はめのまへのながきをもつてせんとなす。

已上 上卷畢。

此秘書及告文相傳畢。御判。

此一行名者攝政殿御自筆自判。直令書寫者也。

鷹文 十二卷秘事

此土鷹越初事。

仁德天皇御時。仁德天皇八十七年保世給。

四十六年の御歲。百濟國より日記をあひそへて鷹を奉。其使の有様僧ニ似帽子をす。鷹名はくりてうと云。文書をあい副て奉といへども。文書讀人かたし。其後せひりんの御門につたへらるゝといへども口傳なをくらし。正賴が時唐土の鷹飼つるがの津に渡る。唐人名は米光と云也。正賴彼人に合て文書を開て。十八の秘事三十六の口傳を習とむ。正賴かの悦にこちくと云はした物に長持相具て唐人にたぶ。給て地に臥して悦て。鷹飼の裝束。犬飼の裝束。鈴。ゑぶくろ。狩杖。うちかいぶくろ奉。正賴のぼる時。侍正世を使として。こちくがもといひねりたる文をつかはす。

こちくてふとかたらはゞふへたけの一夜  
のふしも人にしらすれ

一鷹本名

摩伽陀國にはくゆん王と云。けいたん國に  
はませんと云。新羅國にはこてうと云。百濟  
國にはくりてうと云。唐土には鷹如本しゆ  
てうと云。日本國には鷹と云。

一鷹の尾名

鈴付。

次尾。たすけ。

次尾。をはかり尾。

次尾。ならしば。

次尾。石打。

次尾。小石打。

一説には小石打をばしはひきと云。

一足の指爪名

後爪はかけ爪。

前爪はうち爪。一説には。ゑは  
みの爪とも云。

中指はとすゑ。一説鳥  
からみ。

外指はかへるこ。

一十八の秘事云は。

一らんひの毛とは鼻毛也。あいぬればそらくにてに  
ぐる事あり。鷹のちるま

へは神  
なり。

一ひげつけとは鼻穴也。てうこうのごとしと云。つ  
鼻廣かる  
べし。

一がもんとはあとがいの下也。かいをたてよと云  
はおとがひの下系  
れと云心なり。しやくしを指  
舉たるがごとしと云なり。

一くろもんとはまかくし也。ひさしをさせといふは  
出よといふ心なり。

一かあもんとは眼也。箱に入たる鏡のごとし。又明  
四毛トモ云

一てうせん羽は鈴をひしけと云。かさなりて尾の  
上をおせと云也。

一うんかいのくだれるはしゆんわうのどしと

云は。つばさをたれたるを云也。女犬如牙トモ  
云はつばさき

はとか  
れと也。

一しりくわんはつめのごとしと云は。尾のたゝめる  
は人のつめのごとしといふなり。



一 かくたいは雜馬をとをせといふは。足二が  
あひはひろかれといふなり。又てうなんし  
やうともや。〔也敷〕

一 うれへの毛と云は額毛也。心むつけて立毛  
なり。つねにみてさとるべし。

一 かねつけの毛といふは。あをはしの上の毛  
なり。心よきありはたつる毛なり。ひきたら  
んおりははたらかすべからず。よくくす  
ゑべし。

一 よき毛と云はもゝの上におふる毛なり。ね  
れたる様におぼえん時はつかふべからず。  
一 ひすいの毛と云はむねの毛也。きはめてな  
かるべし。

一 さごろもの毛と云はおすげ也。又はらんし  
とも云。おほかるべし。此毛れいよりもすく  
なく見えむ時は事ありとしれ。能々ゑを飼  
て一日つかはざれ。

一 くれは鳥の毛と云はかたのひらの毛なり。  
あやをたゝめといふこゝろなり。

一 ほうさやう毛と云は。ひぢの毛也。ながくしてしも  
かはることあらば。七日  
つゞけて能々を飼べし。

一 うけら毛と云は。かたささの毛なり。此毛きはめて  
こはく。毛さかいさわやかなれ。

十八の秘事とは是なり。

### 十二卷文内三十六の口傳事

一 三十六口傳と云は。鷹の病のつくは是皆鷹  
飼のとがなり。能々を飼よくすれば野に有  
鷹のどし。とりつなぐ時によくくおそれ  
て。荒鷹をとらんとするがどくに思ふべし。  
鷹になまめくあたれば。みるためもあしく  
一定そんずるなり。能々これをつゝしめ。  
一 鷹をつとめてどに手にすゑてみれば。れい  
にもに足あたゝかにおぼへば。病おこる  
とさとるべし。

一 れいならずとばいして後しづかならば。物

にあたりたりとさとるべし。能えをつゞけて三日可飼。

一愁の毛をたてば思事ありとさとるべし。

一日ごろより糸をもすくなくはみて。まみに思事有て口なめつくりをせば。たけのおこるかとさとれ。口なめつくりとはむな糸をはむといふなり。

一はなを常にひば。鼻たけのおこる。ひるのはなにあるとさとれ。

一まわたしをせばしりのかたまるか又めわくるとさとれ。又蛭のまなこに入たるか。ふせて見よ。

一日比より鳥をもをいきり。又おかんにもいくよりもおそくをかれば。事ありとさとるべし。

一鷹の足をのかわ。れいよりもくつろぐと見ば。足はるべしとしれ。薬をつけて二三日つ

かふべからず。

一身をすくみてあくびをせば。病のつきたるとさとるべし。

一愁の毛を立て月をほそくみて。頭を常になして身をはたらかさば。かしらを打たるとさとるべし。

一鷹をぐろにやする事あらば。米のしるにて糸をあらいて飼べし。又小鳥のちを飼へ。またこつぽの水にて糸をかへ。

一糸こりしたる鷹にはゐのしゝのあたらしきをかへ。又もみすぐめ小鳥の血をかへ。

一紅雪と云はくれなゐの雪なり。はつ雪をとりて置たる水なり。足のはれ目の前のはるゝくすりなり。

一さわのみくちと云は山しりながれぬ水也。

一夜取やなぎと云はゆやなぎなり。

一こつぽの水とは木のうつろの水なり。糸の

木。くわ。ゑんじゆ。是等能也。

一むなゑをはむと云はくちなめつりを云。なにの病にてもさだまりてするなり。

一山かへりは毛のこはき也。羽がいのしたの毛は殊にこはきなり。夜なども此毛をなぶりて山かへりとはしるべし。

一鷹のなにの病も付事は。くさきゑを飼。あしき水にてゑをあらひ。煙にあたりわろくする故なり。

一鷹に水をふく事は。能々くちをすゝぎてのちくちをふく。一度はうがい一度ふくなり。三度には過べからず。但小口にふくなり。

一若鷹の目きになす事は。あまとやにつなぎて蓬檜木葉をふけ。又すゝめの血小鳥の血常に飼。雀の血はつゞけてあまたゝびかいつれば悪事有。おゝゑを水にひたして一度かへ。

一鷹のゆびはながくてあいはたらかんと思ふ。

一鷹のとばふにやうによきイ吉さうは。空に向て羽音たかくとばふを。はい鷹とばいと云なづけて第一相なり。

一手の下にとばいおちて。つめをもちてたかたぬきをかきとばふは。つるべとばいと云て。みめあしけれども能相なり。

一羽骨はふとからんとおもへ。是ははやくとび。又とやまさりする相なり。

一鷹のかほのかわはうすかるべし。眞心につかはるゝころあるさうなり。

一秋とやを出さん時は。とやにてしゝをさけて。後鷹主の生氣の方にあたらん方の七家かへる木はしをとりてともしていだすべし。若生氣の法ふさがりにあたらば。天井福德の方も吉。さてしばしばよひあかつきに

すへよ。

一とや鷹のしゝを調て合事は。廿日よりとくあはせつかへばわろきなり。しゝをさけてとりかいて次第に飼上。こやしてつかふべし。

一荒鷹をこしらへつかふやう。よいあかつきにすゑべし。手にはかへりをさし。身むしりをして手袋をひきなどするなり。能えにてをふをたけ置はじめて。すこしづゝ遠くて置。おきなわを付てすてをさをせよ。をかれざらん時には。しゝて置事努々なかれ。耳かたくなる故也。よく／＼置たてゝ後。装束をして鈴さしてよひつき／＼置べし。さてまろばかしを飼て後。何鳥にてもはやらん鳥にあはせよ。努々ひかすな。

一鷹を鳥に合方。けふは一をかふ。次日二をかふ。次日三をかふ。又次日一をかふ。次日五

をかふ。又一をかふ。又二を飼。又一をかふ。又五をかふ。其後は努々五には過べからず。過は惡也。この定につかへば鷹も能なり。いのちもながし。是は此定にかりあふ事かたしといへども。かやうに心えてつかふべきなり。

一鷹に鳥をかふやう。水のあらん所にて。笠をぬぎてひざまづきて。犬をのけてかい。かたのほねの左をかきわりて。うへをひきて鷹を置わたして後。鷹のかほに水をうちてかへ。あはけ心おほねまろきをもかふべし。

あはけは惡く飼ねれば鷹の心かはる事あり。鷹の心に隨て可飼。

一荒鷹を初て執飼には座をさだむべからず。鳥をとりたらん所にて。やがて能々鷹にあづけてむしらせよ。鷹をこらす事なかれ。その夕さり家に歸て少ひかせよ。思かいをすべし。



一鷹の鼻をひて。鼻よりきなるしるたり。かゆ

がりてはしをすりまわせば。ふせて鷹のあ  
き口をごまの油をぬりて。はなをくゝみて  
すいとるべし。すいとりてはうがいして。又  
たびくゝすいとるべし。さて酢にて銅をい  
だして。かうひねりにてひねり入よ。おそく  
つくろへば目の前はれてわろきなり。

一鷹をにがしたらんには。朝には東をもとめ  
よ。夕には西をもとむべし。

一兄鷹の相大鷹と同。但かはる事あり。かしら  
まなこすぐれて大なるべし。かほのかはき  
はめてうすかるべし。

三十六の口傳是なり。

一この文は正頼鷹のすいさうを記文なり。十  
二巻が中のせんの巻なり。おぼろげにては  
人に傳べからず。實子なりといふとも。其道  
を好まざらんには傳べからず。他人といふ

ともこのむにはつたふべし。

一小一條院鷹このませ給。

御鷹飼二人。忠兼。信親。

御犬飼四人。峯任。平松。峯松。狩山。

本云

後醍醐天皇嘉暦三年二月廿三日書寫畢。

此鷹譜者自禪藏寺殿西郷殿參ル大巢殿御  
相傳自其寫畢。

右一狀者彼家之秘傳云々。雖然此内流布之抄  
也。文字誤無正體事多之。非用捨者不可用  
之。如本寫留者也。

永正十三年六月十九日

左金吾藤（花押）

續群書類從卷第五百四十五

鷹部五

養鷹秘抄

一山ことばの事

しもへをるゝはふみくだれといひてよし。  
山のこしをば必さもとゝ云べし。

一山へあがるをばふみのぼれと云べし。

一うちへかへるをばふみひらけと云べし。や  
まのそばにはをちた又は過たといふ事かた  
くいふべからず。

一山へ出るやうは。一さきへいぬやり。そのあ  
とへとを見。同たかじやう。其あとへせこの  
衆なり。又山より立歸ルには。さきへせこ。

總檢校保己一集

男源忠寶校

其あとへとを見。同たかじやう。其あとへ  
いぬかひ。かくのどく也。

一たかのをさかゑの事

大鷹は ほうくゝと四こゑ。

せうは おうくゝと五こゑ。

はやぶさは えひくゝと六こゑ。

はひたかは はうくゝと四こゑ。但つみ。ゑ  
つさい。このりは七こゑもくるしからず。

さしば。かつさいなどは きやうくゝと八  
こゑばかり。

一さしさほの長サ七尺の物也。但目つぶし壹

尺八寸。

一糸のつくりやうの事

大さいはひ。こさいはひ。ほねゑ。たしきゑ。  
いため。まさめ。こゝめゑ。さくらゑ。ゑのつ  
くりやうかくの分也。但口傳あり。

大さいはひとは三ツにつくりかくる物也。



こさいはひとは二ツにつくりかくる物也。



ほねゑとは。かはをむきて。かたなのむねを  
もつてみぢんにたしき。きりてかふべし。  
たしきゑとは。むくげをぬいて。かわともに

さんざんにたしきてかふべき也。

さいめとはよこにつくる事。

まさめとはたてにつくる事也。

こめゑとは米つぶほどにこまかにつくる事  
也。

同こゝめゑとはいかにもこまかにつくる事  
也。

さくらゑとは。かたなをふせて。うすくつる  
るもの也。

なにゑにても候へ。わるきゑをばさくらゑ  
につくりてかふべし。やがておしはらふ物  
也。

一よきゑをば。うちにもつやうに。大さいはひ  
につくりてかふべし。

一よろづやまひたかにかひ候やうは。こさい  
はひも吉。なまぬるにてさつとあらひてか  
ふべし。

一あらたかのおりふしは何ゑにても候へ。さ  
いめにつくりてかふべし。さいめとは□四  
かくに作りてかふべし。つねにゑのかひや

う。大鷹にはすゝめ十二。しやう。はやぶさには十。はひたかには六。つみ。あつさい。このりには四。かつさいには三ッ。此分にかふ物也。但時によるべし。

一田物のかけやうの事。なわを以てまへから兩のはの下へまわし。うしろにてひらむすびにむすびにむすび。(四字符鷹)二そくふたつぶせ。上をおとこむすびにむすびて。そろへて三ぶせにきるべし。



一山の鳥はわり藤をもつてまへにかくる也。



くわせとひだりもとむ物也

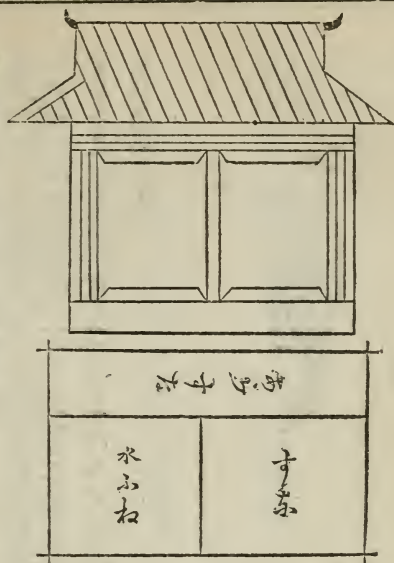


をんおむすが

一ねづの神平大事の鷹のだうぐの寸尺。とや。ひろさは四尺六寸の物也。高サは四尺のものなり。おくへは四尺二寸の物也。ほこ木の高サは六寸なり。もと木は鷹のたなさきへなせ。おなじくゑまどは一寸五分の物なり。但四はうたかくし。何町ももと木のかたにあぐる物也。中にはあらさすなをまくべし。



三分一程水ふね同ふだん水を入れておくものなり。二日一どづゝかつべし。<sup>(ゆ懸)</sup>



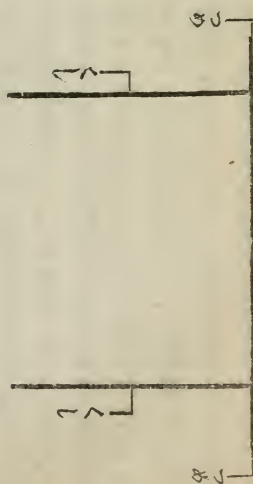
一瀬津神平とほこの寸尺の事

二間二尺のものなり。くしは四尺二寸。つめ

一尺。もと木はたかのたにさきの方へなす

べし。何時も藤ゆかけをばもと木にかくべ

し。



ほこたれの長サ二尺六寸のものなり。あみふは六ぶのものなり。口傳あり。わらにてすべし。

いづまひの事。とひるとはまつすぐつとたつてゐるを云。

一かもしとは。かしらをさげてをしあげたるを云。

一とつ手みる様の事。きなるは黄とつ手と云。あをきは青とつ手といふ。黒きはくろとつ手といふ。

一とつ手のきかうは身もなくてほそきをいふ。同あぶらとつ手と云は。きらめいて水をかけたるやうなり。

一もかたかろうとは。さひくゝに手ぶくろをひくを云。もやすかろうとは。とひゐにゐて。あくびをしげくするをいふ。

一かりつえの寸尺の事。四尺六寸。同とりかけ四寸。いばらさし二寸。鳥かけといばらさしのあい。一そ二ふせの物なり。



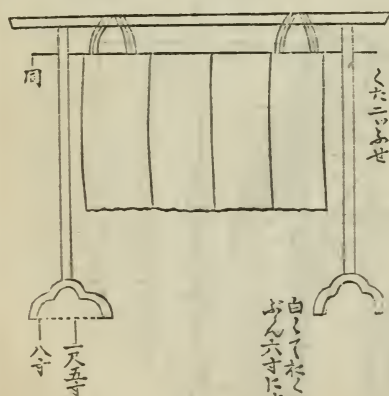
一神平秘書のだいほこだいのあつさ六寸。

くし三尺二寸。つめ六寸の物なり。ほこの木。ふとさもと木は八寸。木にはくぬ木を用ゆべし。但ひの木もくるしからず。あとささ

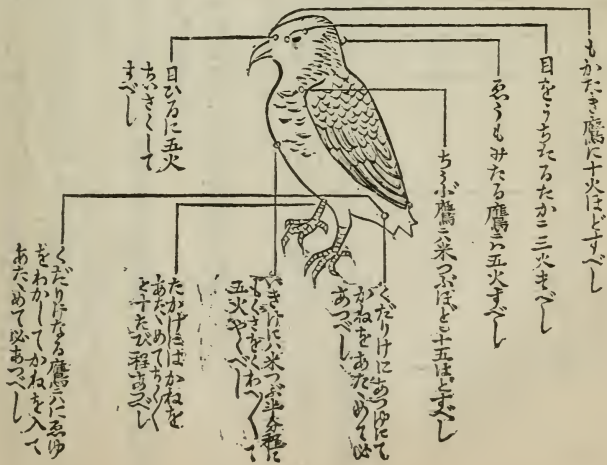
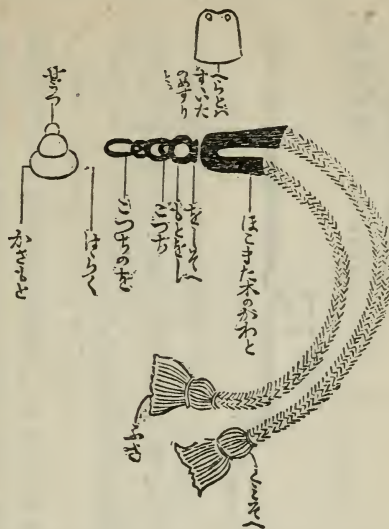
の木めをかちくもりを以てはる物なり。もと木のかたをばあをぢ。すへ木かたをばあかぢにてはるべし。可秘なり。

一同ほこたれにはぬのを水色にそめてよし。長サ三尺。同水うち六寸をばしろくてあくものなり。

ふさは手一そにきるべし。

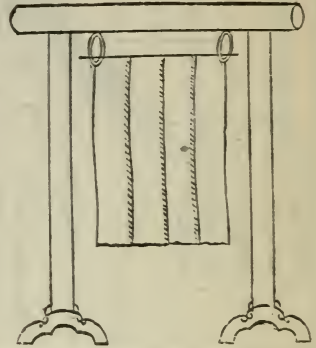


白くはやくべし  
おん六寸にすべし



事るくわぎなつをかた

もと木にはは  
いたか  
同何鷹にても  
小鷹  
同大鷹  
同はやぶさ  
同しやう  
ふちゆかは  
すゑ木に  
かくべし



ねを、こハニす

はく五分

つくとも五寸

ねきふわのす八廿五の物也

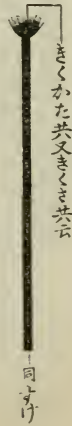
へをのす八三十ひろの物也

へをのす八三十ひろの物也

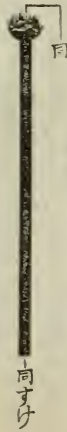
一大鷹のぶちの事。二尺三寸。



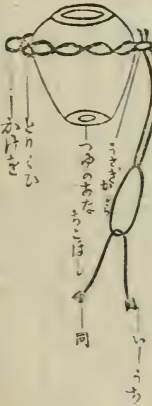
一しやう。はやぶさのぶち二尺六寸の物也。



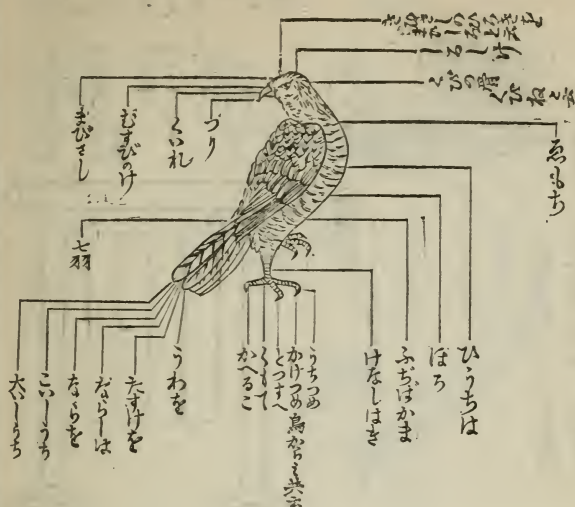
一小鷹のぶち。二尺八寸。



一あらしきぶちの寸尺事。四尺五寸の物也。







- 一 らんひの毛。鼻毛也。あひぬればそうくにて透る事有。鷹の燭也。
- 一 ひきつけ。鼻孔也。てうこうのごとしとはつか。穴の如しいふ事。鼻孔ひろかるべし。
- 一 がもん。おとがいの下也。具を立よと云。しやくしをさし上たるとし。
- 一 くろもん。まかくし也。ひさしさせ。よと云は出よと云事也。
- 一 てうせん羽。鈴をひしけと云。かさ。なりて尾を押せと云。
- 一 うんかいのくだれるは。しゅんわうの如しと云。しりくわんは。爪のごとし。尾のたらぬ。は人の爪のごとしと云。
- 一 かくたき。雛馬通せと云。足の間ひろかるべし。
- 一 うれへの毛。ひたいの毛也。
- 一 かねつけの毛。青はしの上の毛也。こゝろよき時はしる也。
- 一 よき毛。もゝの上の毛也。
- 一 ひすひの毛。むねの毛也。極めて長かるべし。
- 一 かあもん。眼なり。鏡の如し。
- 一 さごろもの毛。をすげなり。必多かるべし。
- 一 くれは鳥毛。かたびらの毛也。綾をたゝめと云なり。
- 一 ほうきやう毛。ひちの毛なり。長く下へくだるべし。
- 一 うはら毛。肩先の毛なり。極めてこはく毛さかいさはやかなれ。

以上十八。鷹匠の秘事也。

根津清來りうの大事の書の事

一なつけぐすりの事

いもりのうちのだうぐをとりすてゝ。三日  
かげぼしにして。身のきうに一夜つけてく  
ろやきにして。

ひすひのはらわたをとりすてゝ。野中のし  
水に一夜つけ。十日かげぼしにしてくろや  
き。むかでのあしをのけて。野中のし水に一  
夜つけ。かげぼしにしてくろやき。

きりんけつといふむしをかげぼしにして。  
野中のし水に一夜つけ。くろやきにして。

しかのふくろ角を野中のし水に一夜つけ。  
かげぼしくろやき。

ことくたみのねばかり。しろ水をもつてあ  
らひて。かげぼしにして。

草のわらしろ水に一夜つけ。かげぼしくろ  
やき。

しゆろのねを白水をもつてあらひくろや  
き。

せんきうをこにして。

よやうしをこにして。

なんによのあかを日にほしこにして。

右等分に合て。二兩の内へ水がねを二分く  
わへて又くろやきにして。大鷹にはこうが  
いのみゝかき(符懸)に三すくひばかり。しやう。は

やぶさには二すくひ。(ど懸)はひたか。又つみ。

ゑつさひ。このりには一すくひ。是をゑにつ

ゝみかふべし。日に二(ど懸)たづゝ七日飼べし。

是はしやう。大鷹。はやぶさの事也。同はい

たかは二日。つみ。ゑつさい。このり。かつさ

ひには一日に三度づゝかふべし。

是はせひらひりうの秘密の薬也。禰津りう

にははやありともいふ。又はせひらいりうにはなつつけくすりともいふ。いづれも最上の藥也。よくく可秘々々。何もくすり一しゆもちがひにてはかうべからず。こたかにもなをくよしさいじやう也。小鷹にはあしたとくしたのあかをとりにて。それにてねり合よ。○是羽ににくわんし。<sup>(マイン)</sup>三りうほどかいて。くらき所に一日ほどおくべし。最上可秘可秘。

せいらる秘書のすかしの事

いのこつちの根ばかり。白水を以てあらひてかげばし霜。やくしさうのね同こしらゆ。かきみ草の葉ばかり同。

いつたちのしのきといふ草の根かげばし霜。もつかうをくろやきにして。水等分に合。藥の分兩はまへのごとし。大鷹にはみゝかきに三すくひ。しやう。はやぶさも同前。

はいたかに二すくひ。小鷹に一すくひ。何もゑにつゝみかふべし。すかし也。たとひゑをかひても。此すかしをかひにてかならずうちを五つきつきたらば。しゝがあたりたとおもふべし。すかしおほしとは申ながら。天下一のすかし也。よく可秘也。

くみぐすりの事

さるのかしら又はきもにても。かげばしにして黒焼。くろねこのかしら同。

あしげ馬のこへをかげにおけば。かならず上にくさびら生る物なり。くさびらをとりにて。田水をもつてあらひ。日にほしてくろやき。

よきちん香をこにして。

右等分に合。藥の分兩まへのごとし。是はたかとりしらみ一羽<sup>(鷹)</sup>おひにては又あいきりて。鳥などゝゐならびてゐる時。此くすりを

かひ候へば必とりくむなり。

一つめだうのくすりの事

ちゑはりの葉ばかりかげぼしにして。野中のしみづに一夜つけて。かげぼしにしてくろやき。

とくさね葉共に同。

かんざうこにして。

わうこんこにして。

右等分に合て。藥の分兩はまへのどし。是はほこにてうち又は物にあたり大事なる時。此くすりをかひ候へば則よき物なり。最上可秘也。

一氣ぐすりの事

こうもりのはをさり。霜にして。

きじのあし同。

天なんしやう同。

川大わう同。

くゑゐのほね同。

ふとりらす同。  
〔か敷〕

おもとのね同。

もつかう同。

右おのく等分に合。藥分兩まへのどし。何

〔や敷〕なまいにても候へ。此藥最上なり。是はきぐ

すりと申にて。一段のひみつぐすりなり。

右せいらいりうのおくの五ヶ條の藥也。可

秘なり。

一羽をとめたるをいだす藥の事

ひきがへるのはらわたをとり。野中のしみ

づに十日ばかりつけてくろやき。

こうしのほそのをゝ。をんなのちゝに一夜

つけて。くろやきにして。  
〔百歳〕

くらげをかげぼしにしてくろやき。

とうさい子のすりおとしたるかみのち

霜。



右等分に合。藥のかいにうはまへのどし。日に三どづ、五日かふべし。(や飲)此くすりをかいにてはなにしても候へ。小鳥をさくらゑをつくりて。なまぬるゆをもつてあらひてかふべし。さくらゑはかたなをふせて。ふさちるほどにうすくつくるなり。

一 水すひくすりの事

あかにしのみを野中のし水に廿日つけて。かげぼしにして二兩。

くじらのひげ二兩。

をんじやく二兩。

かいつぶりの内をとりすて、二兩。

川おそのかしら。又はきもにてもかげぼし十兩。

しかのはらごもりのかしらかげぼし三兩。

右等分に合。めしわんに水十入て一ぱひにせんじ。きぬにてこし。十日日にほしくろや

きにしてこにして。三兩うちへ水がねを三分。又しやくだうをなり共。又こがねを成をくろやきにして。藥のかいやうは。みゝかきにすこしづゝかひ候へば。ゆき又はあられ。少々雨なこにもくるしからず。可秘也。(ど飲)

一 右此七ヶ條の藥大事の藥也。此りうは奥州の國しのぶの住みつ(人立秘)のせいらい秘々之書也。

一 五いこさきにつかれたる事。同せんやく。はぬもちのあまはだ。せんたのみ。(人立秘)ふちこぶ。

右是をとり合。日に三どづゝあらふべし。

一 付くすりの事

かうふしのつるかげぼしくろやき。

みやうがのはなかげぼしにして。つくるかねに一夜ひたし。くろやきにして。

くまたかのうちを日にほしてくろやき。

右當分に合。つくるかねを以てねり合て。日(等飲)

一どづゝ十日ほど付べし。藥を付候あいだは。つちゑをかふべからず。

一ねづのせいらいりうの藥かひの事。

一だうたけ見様の事。つねに身の氣をつめて。いきあひを内へばかりする物也。同藥の事。

田からしの根かげぼしくろやき。

むめぼしのあんになをくろやき。

右等分に合。大鷹にはかうがいのみゝかき  
に三すくひ。同しやう。はやぶさに二すく  
ひ。小鷹に一すくひ。但ゑつさいなどには  
みぢんほどかふべし。さいじやう也。可秘々  
々。

一たかけの見やうの事。つねにたぶるひをし  
て。いきあひをそとへばかり出す物也。同  
藥。

ころも草のすゝめかくれの時日にほし霜。  
うどのねをかげぼしにして。野中のし水に

一夜つけて。くろやきにして。  
ちやうじをこにして。

右等分に合て藥の分兩まへのどし。これは  
日に一どづゝ五日ほどかふべし。かいにて  
はつちゑをかふべからず。何にても小鳥を  
まじめにつくり。なまぬるをもつてさつと  
あらひかふべし。最上也。

一いきけの見やうの事。つねにまたゝきをし  
げくして。かしらをふる物也。同藥の事。

せきしやうのねを五月より内にとりてくろ  
やきにして。

もくれんじのかはをつくるかねに一夜浸  
霜。ウコロモチノコカ  
霜。とりう霜。

かんざうの粉。

右等分に合。かいやうはまへのどし。日に一  
どづゝ二日からべし。最上なり。

一はなけ見やうの事。つねにたぶるひをして。

かしらをつよくふる物也。同藥事。

みそはぎの根をかげぼし霜。

くろごま霜にして。

はしふとからす霜。

右等分に合て。藥のかいやうまへのどし。日に一どづゝかふべし。最上也。

一もゝひきの事。藥。

ゆふがほのさね。いかにもかげぼしにして霜。

けんこしのかはをむぎ。

右等分に合。くすりのかいやうまへのどし。日に一ど五日かふべし。

一なかじゝにあたりたるには。ほこ木にせきしやうをまき付ておくべし。五日程おく。内

藥事。

ぎぼうしのわかき葉をかげぼし霜にして。

せんさう粉にして。

右等分に合。藥分兩まへのどし。日に三どづゝ三日かふべし。

一羽みだれのみやうの事。身よりたゝさきに  
よらず。はさもちこぼす物也。同藥事。

五つはのつるをかげぼしくろやき。

いゐなもみのみをかげぼし同。

じゆずたまの同。  
(み脱麻)

右等分に合。二兩の内へかんざうを三分粉にして加へてかふべし。かいやうまへのどし。日に一どづゝ五日かふべし。

一はふといふやまいの事。身よりたゝさきに  
よらず。はなとをもちこぼす物也。又はそ  
うの身をもはらして毛をたつる物也。又はく  
ちよりあわをもふく物也。

同藥事

さねかづらのねをかげぼしくろやき。

すげのしろみばかり日にほし同。

きこくのさぬばかり同。

右等分。分兩まへのどし。

一 えうとみの事

ひるものねばかりかげぼしくろやき。

をぐるまのねばかり同同。

かんざうこにして。

右等分まへのどくかふべし。

一 わくものふきくすり

いちやうの葉。いかにも日にほしくろやき。

しこはうのねをいかにも同同。

ゆわうをこにして。

小のつちをこにして。あかつ  
ちの事。

右等分に合。みよりたなさきのはをふりわ

けてかけべし。日に一どづゝ三日ほどかふ

べしとあり。

一 あしのはれけのくすり

田つぼくろやき。

くさ木のむしくそくろやき。

はまぐりのからくろやきにして。

右をのく等分に合。つくるかぬを以てね

り合て。はれたる上に付べし。

一 いきれの付くすり

あんずのさねをくろやき。

田にあをしらみ草同。

あかにしのから霜。

右等分に合。ゑの油を以てねり合。日に一ど

づゝ五日付べし。

一 つめのぬけて出ざるを出すくすり

たぬきの丸をかげぼしにしてくろやき。

山せみのはをのけて同。

わらんべのほそのを同。

一 〔か敷〕うらたこのぬきぐすり

きりくすの内のだうぐをとりすてくろ

やき。



かたつぶりのいゑをのけて日にほし同。  
ろくしやをこにして。

右等分に合て。つくるかねをもつてぬり合。  
日に一どづゝ五日付べし。但からたこ上ば  
かりの事なり。

一ちかふ鷹の見やうの事。つねに身のけを(たぬ)に  
てゝふるう物也。但ほこにもたまらずして。  
つよくて手ぶくろをひく物也。同藥事。

川にあるかにの甲をのけてかげぼしくろや  
き。

つばめのはらわたをのけてかげぼしくろや  
き。

きりのみかげぼしくろやき。

右等分に合。分兩さへのだし。日に一どづゝ  
八日かふべし。

一はむしのくすりの事  
はゑのうるかをとりに日にほしくろやき。

にはもゝの木にあるやにとりて同。  
うしのひづめをこそけて同。

右等分に合。はぐきをわりて。其わりたる中  
へふくべし。二日に二どほど。

一はみその見やうの事。とくかくみよりたゝ  
さきのはをしめさる物なり。藥の事。

てんの皮。とり。霜。

うのそくろかげぼし霜。

ゆわうこにして。

右等分に合て。つくるかねを以てねばく  
とねり合。日に一どづゝ三日つけべし。

一しんき鷹の見やうの事。身よりたなさきに  
よらず。毛をかき切る物なり。同藥の事。

なめくじりのとちをとりますてゝ。同うちへ  
にんじん一分。同せんきう一分。同ちんかふ  
一分。

是を中へ入てくろやき(百勝)にして。くすりの

分兩まへのどし。日に一ど五日かふべし。

一はを（と藥）おこす藥の事

くち草の花をかげぼしにしてくろやさ。

くりの木のほや同同。

石ばいをやきて。

右等分に合。分兩まへのどし。是をかひ候へば羽をおとす物也。此くすりはたかをとやへ入るときかふ物也。さいじやう可秘也。

一もちをとる事

かうじのはをかげぼしくろやさ。

うるしのはを同同。

つばきのみをかわをむぎ。みばかりくろやさ。

右等分に合。つくるかねを以てぬり合て。もちのつきたる上に付べし。つけて一日ほどをさ候て。水を以てあらふべし。

一てんかう鷹の見やうの事

つねてそうの毛をたて。かしらをさげ。あはをかむ物なり。但まなこの内もあをくして。かしらをつよくふるものなり。

是はこいかつかりての病也。同藥事。

くろなまづ川の。かげぼしにして。野中のし水につけて。くやろさにしてもちゆ。

たこの八のあしを一寸かみきりて。かげぼしにしてくろやさ。

しちくの竹の子をくろやさにして。

くろねこのくろやさ。

右等分に合。藥かひやうまへのごとし。日に

一どづゝ五日かふべし。

一がんなどに目をうたれたる時の藥の事。

やまぶきの花をかげぼしにして。つくるかねに一夜つけてくろやさ。

せきしやうのはなをかげぼしくろやさ。

ゑびづるの中にある虫かげぼしくろやさ。

右等分に合。つくるかねをもつてねり合。日にほしてこにして。女のちゝを以てねり合。日に一どづゝ五日さすべし。同鳥のはをもつて付べし。

一つめのぬけたる藥の事

こいのいろこを日にほして。野中のし水に一夜つけて霜。

あしげ馬のつめをかげぼしくろやさ。

右等分に合。ごま<sup>(舒麻)</sup>の油を以てねり合。つめのぬけたるあとへ一どづゝ付べし。

一くそ鷹の見やうの事。常に糸をもかけても

やする物なり。但うち<sup>(か鷹)</sup>のいろはあるき物なり。これは一段わるきやまい也。同藥事。

さんせんくわのわかきはをいかにもほし

霜。

ぶだうのわか葉を同同。

けいしんこにして。

右等分に合。分兩まへのどし。日に一どづゝ五日かふべし。

一鷹の見やうの事。はをとばうするとは。羽たけみじかく。いかにもはくきかすを申也。

一つち糸のつくりやうの事。ひらりとさくら糸につくる物也。

かのしゝは いとめといふ物にほそくつくるべし。

いのしゝは まさめにつくるべし。  
なまづは かわをのけてこゝめ糸につくるべし。

ねこをば 大さいはいにつくるべし。

ねづみをば 小さいはいにつくるべし。  
いたちをば たゝき糸につくるべし。

てんをば さいめにつくるべし。

一鷹にかわぬ物には。

馬。うし。兎のさうの身。たぬき。さ

る。むくいぬ。

是をいかたくかふべからず。

一鳥のうちにかわぬ物には。

くひまき千鳥。あをしとゞ。みそさゞ

い。もず。るり。ひく鳥。ひたき。

是をかふべからず。

一わくものくすり

いくちのかわ。石つきをのぞき日にほして。

いばら。しやうびのねをこにして。

あかゞねのせんくずやきてこにして。

右等分に合。一日ほどかふべし。

一いされの薬の事

ひきがへるのだうぐをとりますてゝ。

かまきり。たうちう  
の事也。

たうごま。

右等分につくるかねにねり合付べし。

一せいらいうすかしの事

一すかし

やくしさうのねをつくるかねに一夜つけて霜。

くろがねのさびをやきて。

ゆわうくろやき。

せん大わう。

各等分。

右大鷹にもみゝかきに三すくひ。はやぶさに二すくひ。はいたかに一すくひ。つみ。ゑつさい。さしば。

このりにはみぢんほどゑにつゝみてかふべし。

是はしくあてしたる鷹にかふべからず。いかにもこゑたる鷹にかふべきすかし也。

一くみぐすりの事

さるのかしら野中のしみづに一夜つけて霜。



むかでのあしをのけてほして。

右等分に合。藥のかひやうまへのどし。

一山のだうぐさはきの事

根ぶちを二つにわりて。(サ鷹)長ケ七尺六寸の物

也。

はな(ク鷹)かへしのを一尺八寸の物也。二すじ合

て三尺六寸の物也。

ゑつゝみの事。大鷹のは六寸。あみふは六ぶ  
の物なり。

一しやうみこをなわになふて。あみふはを  
ゝあをく染て。

一いぬやりのつくりうちかひの事

すげをやわらかにうちて。三ツくりになふ  
て。長サ一尺貳寸にあむ物也。同あみふ十

二。ふつくるを二尺六寸。あわせて五尺貳  
寸。

一ゑまないたのはと一尺貳寸。長サ二尺。

一ゑかうしの事。ひら木をうちおくりて。上を  
くろうるしにぬりておく物也。長サ六寸廣  
サ四寸也。

一段さらふ物也。上へあがるゝをばふみあ  
がれ。ふみ上下へあるゝ事はふみくだれ。山  
の尾をばさむしろと云物也。上をばかなら  
ずかさと云物也。

一いぬの事。たかせうよりしていぬやりにつ  
かりをたてよといへば。さはきをはなして  
やる物也。いぬをとめうずるにはおさへよ  
と。せて衆につかわうずることはじかれと  
いわうするには。山をうてといふべし。また  
といわうずるには。ふみとめよといふべし。  
鳥のをちをば必つかれといふべし。

一す鷹をしたてべき事。三ふせばかりにみる  
れあしをゝさし。ほわをかのうちゆひて。少  
づゝもゝをひかせ。お羽とゝのへて。七日あ

りてかごより出し。やわらか成るほこに五日つなぎ。其うち少しゝをひきて。あすゝゑんけふ。ゆのかん心へてあびせ。もしあびずばだぶと鷹のぬるゝほどふくべし。大がひくちゑにつかん時分しやうぞくして。七日にとりかうべし。まるはしの事。あすつかわへけふ七時まるはしかふべし。もし心あさなくてとらすれば。かさねてつぎの日まるはしかふべし。まるはしは野へはてんあしたかひたるもよし。かやうにしたつるの。よきとりかひしほどは。草木のうごくにも。はいり馬のけあげのつちのあがるをみても。鳥かと心へて。こぶしにもたまらずはやるをよきとす。此時は善あく日をさらはず。鷹はしほのまだしき時分にあわする事也。たとをるさになる十分のしほをすこすもたとふる。よくゝ是をつへてしたつべし。す鷹

はいかにもしづかにすふるをよきこぶしといふ。こぶしあらはればもゝなへて。大なるとりにはほゝよれてあしきさうなり。すたかしたてべき次第大かた如此なり。

一山かへりをしたつる事。鷹をよくゝふせて。二時ばかりおきて。せんじ物にてたかをあらふ。せんじ物の事。

せさしやう。おはこ。ほしは。ねづみのふん。はこべ。

右よくせんじかんを心へて。小がしらばかりを出し。ふせながらゆにをしひてゝ。半時ばかりありて鷹をおこしてすへて見れば。まことに程をへてなつきたる鷹のどく。身の毛をさしゆるめて身せゝりをす。よきぞと心へ。すゞめをあしむき。たふゝと見せて口糸をかへば。なづけくすりをかふから。二三まいといふ薬を。みゝかき四ばかり三

つゝみ。すゝめのむねにつゝみてかふべし。  
 又おもと草のねをゆにいだして。むちに  
 さひくかふ。もし此くすりなくば黒ね  
 の黒やきをかふべし。又あるせつには。  
 鳥のかしは鳥のとつさを切りて。中の  
 へたくなるに。えんのみづがねを入て。口を  
 すゝめのたるはにてぬいかふべし。是にも  
 おもと草をさひくかふ。これ三いづれも  
 よきなづけ薬也。鷹をあらふ事兩三日なり。  
 内薬も三日かふべし。三日過てかへば鷹あ  
 しきとあり。かやうしたてゝくちゑにか  
 らば。うちにて少づゝおきたてゝ。さうゑな  
 くわたらば。人をのけて外にて二三どおき  
 たてべし。たかをおく事三ど七どには過べ  
 からず。大がい山かへりをしたてる次第如  
 斯なり。

一はいたかつかふ事。さひくざしきにてむ

ちあがりをする事。はい鷹つかふべきやう  
 是なり。又いき鳥をなげ出してとらせ。其時  
 すゝめをおしむきて。とりたる鳥をこぶし  
 にておしかくし。むちにてあぐれば。此くち  
 ゑをみて鳥をさげながらこぶしにあがる。  
 ふるくとかへばのちくはさうゑなくも  
 ちあがりをする。鶴をへをにてつかふ事。く  
 つわの水つきをにをる事。又まめの四方さ  
 れずしてとをる事。しんぺんふしぎ也。是に  
 つかひあたらん輩は。諸神のかげ成佛とく  
 だつともいへり。是を心がけん輩。老若いづ  
 れもつみあらず。

一はやぶさをかんにしたつる事。よひあかつ  
 きたちとや木つなぎ。同ゑをほこにてか  
 ふべし。ゑの事。烏たゝきゑにして。あした  
 のしやうべんを以てよくくほとぼし。是  
 をしためずして。あすつかわんとすけふ八

時ばかりにかいて。ゑをおさんめひだ少し  
すゑまはして又つなぐ。かふべきすかしの  
事。

いなどをちや一ぶくばかり。同けんこし廿  
つぶ。是みやつゝみにつゝみてかふべし。

一くみぐすりの事

りんす。（つ鷹）野草。ちや一ぶくほど。こふ子の死

たるしたを百日かげぼしにして。さめにて  
おろし。ちや一ぶくほど。あひつかわんとお  
もふこよひかふべし。此薬は何れも一薬也。

此うち上下あるべからず。二種共に合れば  
薬つよくしてあしき事あり。はやぶさにあ  
ひのゑといふ事あり。自然はけんい鷹よは  
くして鷹にはやらぬ事あり。其時すゑめを  
三ばかりつくりて。しのはにつゝみ。是をか  
いてすこしおせば。鷹にあはする。かならず  
くむ。はやぶさの二鷹つかふべき次第。一ほ

こに大小つなぐ。ゑをも一ゑからしほその  
をいゆにひたしてゑをあらひ。七日かふべ  
し。すかし同くみ薬の事は何も同く。はやぶ  
さのなづきかぬるに。あぶらをつかする事  
あり。一よき茶一ぶく。一おしろい半ぶく。

一かたしほ半ぶく。一うつ木のあまはだ薬  
一ぶく。此四を丸して。雀のみにつゝみてか  
ふべし。かふべきは分あした日出比にまな  
こうるゝと成て。さひゝゝたふるひをす。  
そのときたゝみのうら木つなぎ。びやうぶ  
をひきまわし。しづまりて見れば。口よりこ  
きあぶらをつきあげてのち。ゆをたびゝゝ  
かひて。三時ばかりありて。雀を毛ながらき  
ざみかふ。かやうにしたてゝつかへばにぐ  
るかたし。此時もしゝ□めてちかづく。しよ  
せんなし。はやぶさのねりつき薬是なり。  
一目にくの事。まなこよりあかさすじおひ出



る。たまにかゝればれう治かなひがたし。藥の事。

べに。よきちんこう。

右是をすに合て三日さす。いかにもめたき水にてまなこをあらふをやうじやうの本とす。

一目わくおこるを治する事。はじめはつめてめをふさぎかく。こうすればかたさきにて目をすりつぶす事あり。藥には。

大とち。わし霜。さわたのこ。ちんかう。

見を合て三日ふなこにふけばよし。くすりさんまへに。つめたき水をまなこにふけばよし。

糸をゆにてあらふ事あるべからず。此やうじやうひやすをもつぱらとす。灸所目のまへのつじ三火づゝやくべし。

一たとふる鷹をしたつる事。いのしゝにてしゝ（う鶯）をかひあげ（符鶯）けて。くらきとやに二七日つなぎ。そののちすへ出し。しゝをひてよきほどになれば。角鷹ならばにわとりのかしわ鳥をなげ出し見する。これはもとより吉なり。もしいまだ心なくば。其鳥をおしよせ。すゝめに二ツばかりかひて。それをおしはらはん時分。かふべき藥の事。

わらびのはな。せきれいのはい。りつすのはい。

右等分に合。すゝめにつゝみ。角鷹には三つゝみ。兄鷹には二つゝみ。是をかひて又うちこめてあかりも見せずつなく。あすあはせんよひ過がたに。すこしせうべんを二（と鷹）にはかりかふべし。かならず鳥にはやりの心あるべし。其時鳥は大小をさらはず。たとへらずといふとも。かならずひかずしてあわ

する。もしひきたらんは二どゝはいる事かたし。此心得をもつてたとふる鷹したつる。大がいかくのごとし。

一とりしらみたる鷹あわする事。廿日ばかりさきかひて。一向あかりをみせずつなぎ。そのうちすゑ出し。しゝをこしらへて。鳥を見る時分かふべき藥。

いたちのほね。の草に。五はつさうをみぢん程くわへて。兩三日此くすりをかひしめて。一兩度おきたてゝ。野に出る時分。人のゆびの血を一露ばかりゑにぬりて。口ゑにかひて。うちを三しりばかりつかせてそふ。田の水を一くちかひて。半時ばかりすゑまわして。物ごしに鳥のすがたをみせ。はやらばあはすべし。鳥に見するならひあり。しらむ鷹をさしむけて。ありのまゝ見すれば。鷹の心おかれてはやらぬ事あり。いかにも

ほのくゝと見するを肝要とす。はやらぬになげ出す事あるべからず。又ひく事もあるべからず。此心得をもつてしらくる事也。

一どうけを治する事。どうけはさひくゝ口な(めず)つくりをし。穴毛をさひくゝにたて。たぶるひをせんとみへて又ひきさす。是をどうけと心得て。もろくゝの藥かふべし。

二たん。人じん。金のせんくづ。すげのね霜。きつねのきも。あかいぬのきも。あまがいる霜。ふるおけのかわ霜。しかのまこごの霜。りつす霜。かんざう。よさちんかう。

右どうけの藥おほしといへども。此藥よき藥也。このもろくゝの藥をかふといへども。鷹をひやうたらんはかなひがたし。とはゝする事もひせつなり。鷹をはたらかぬを第一のやうじやうとす。此くすりはいづれも

一藥といへば。灸所はつぼうしにあり。いづれにても三色ばかり合てかふべし。ゑをかふ事。一度におほくかふ事あるべからず。ゑをあらふにも。よくくしぼりてかはくとしてかふべし。忽に水のこればどうけに最上のどくなり。

一どうたけの事。へいぜいは鷹に見ところなくして相違なし。とばひてしばらくいきあひあらし。又鳥にあわする時も。はじめより尾羽相違なく。とり二め三めより少づゝよわく。おふのちはけつくおひとまりて木に居てはおけ共。そこつにわたらず。是をどうけと心得て。先よきゑにてしくをくれあけ。しばらくやすめてかふべき薬の事。

金のせんくづ。 じゃかう。 よきけとくもくるしからず。じゃかうの事はよき薬といへども。しぜんわろくつゞきて。鷹あぢわひ

てゑうとみする事あり。是もゑをなましぼりにしてかひたらんは。此薬のしよせんあるべからず。灸所は左右の羽のおりめのふしぎわを火しん<sup>針</sup>にてひるをしき七火やくべし。二七日のあゐだに灸三どばかりすべし。三ど三どめをばさのみあつくやくべからず。此薬かわん間に。あらひるをこまかにさざみ。日び一どづゝ三七日かふべし。此やうぜうの間。鷹をはたらかすべからず。

一とやのおち薬の事

夕がほの中のさねのみ。 とりう霜。

右等分に合。つばめのむねのみをおし合。同つば<sup>(右鷹)</sup>はめにてつゝみてかふべし。此薬かふ時分。つきめのおちたる時分。七日目に一度づゝかふべし。しばらくありて又毛羽の半分おちたらん時分七日かふべし。はや大がいおちたらん時分七日かふべし。是三七日

より外にかいたらんは。かならず又おとし  
てあしき事あり。此藥をかいたらんは鷹に  
最上の藥たるべし。よつてせう／＼のやま  
ひはとやの中にてしそぎ。羽しやうもつよ  
く。尾羽の色もいかにもぬれ／＼とあるべ  
し。そうじて夕がほはたかの第一の藥なれ  
ば。必夕がほのあらんほとりに鳥屋をうつ  
といふ事。古人のいひおけるなり。

一 いさるを治する藥

あかいわしのわた。女のかみのおちの黒  
やき。さぢのめん鳥のとしりのあぶら。  
是を同ごまの油にてときつくる。鷹とはゝ  
する事あるべからず。又あるせつに。いのし  
ゝのあぶらにぜんまいの黒やきをねり合付  
る事あり。

一 ゑちがへを治する事。ゑちがへは藥なきと  
いへども。そうやくをかふべし。そうやくの

事。

人じん。かんざう。ちんかう。やくし  
さう。かつほぶし黒やき。

右是をよくし合て。わらびの花をねりて此  
藥を丸し。上にきんばくを衣にかくる。丸べ  
きせいまめほど。角鷹に三りう。兄鷹に二り  
うかふべし。此藥何やまひにもあたるによ  
つてさう藥とす。ゑちがひの鷹に此藥を加  
へて。古のせいしやうにたまりたる水を一  
どかふべし。あまりにつよきくすりなるに  
よつて二度とりわす。  
(か敷)

一 鹽をやくべき事。海なるかたしほをとり。い  
かにもよくこまかにすりて。はこべをこく  
もみて。此しるにて何十度もあへて。よくほ  
しすまして。なまたけのよに此鹽を入れて。同  
じく野草のされたるをうちくだき。このし  
ほにまぜて。七日火をけさずして。くぬ木の



なま木にてやく。火の少もきへぬやう。さへ  
たれば此藥さかず。此鹽をかふ事。山かへり  
のなづきかぬるにもよし。又うちのつまり  
て。くそをつきかぬるにも是をかふ。とりわ  
けどうけによし。但しほをかひて皮湯をか  
はざれば鷹くたびるゝ事あり。諸病に良藥  
也。度をかさねてかふ事あるべからず。おほ  
くは三度にすぐべからず。七日の内に兩三  
度かふべし。

後花園

本云。文安四年仲夏日。御所鷹飼波多野筑後  
守以自筆本寫之畢。

豐後守尙政在判

永祿元年六月三日。備好景大德筆寫之。

一色内藏助親行判

此書不知何人所著。後題云々。豐後守尙政。

内藏助親行。其人未勘。意室町氏近臣乎。古  
書之傳者。寫得於其時者乎。或其時成此書  
乎。未審。凡記事以假名字。寫手惡拙。應知訛  
謬之多焉。蓋聞鷹鶻之所產。絕域殊方。峻嶺  
深谷。人跡稀到之地矣。（素戔尊）此書所記。人爲難製  
之食。加之藥材調製。其初何人試其功驗有  
無。而後錄之以示後人。其事可疑。雖然造語  
頗古樸。可觀非後世僞古之比。若夫事之虛  
實。用之有無。臂蒼牽黃之人。能辨其是非。吾  
輩不其人。々々々々々。辛巳秋世恭識。

（素戔尊）

近衛東求院入道殿下鷹百注云々。（首脫勝）

鷹の名所多く記錄し。相形圖にて清來秘藏  
の書也。見る様。取様。鷹の能惡。大諸病灸所  
迄しるし置也。見る様取様の事は。秘密の條  
々をば清來養性之部とて。藥飼。肉むけ。餌  
飼。作る餌の次第。病の名見分様注之書。尤

重寶也。鷹の秘書不可如之。其上に口傳多之。此說此書にヤ、ニタリ。或ハ是ナランカ。可考。書ニ題號ミヘネドモ相形圖ト云ベシ。此百首跋并奥書アリ。跋ハ略シテ其奥書ヲコ、ニ抄錄ス。

右愚詠鷹百首者。秀吉公并家康公依懇望之染禿筆。外見雖令停止之。山岡主計頭深執心之上書寫者也。固鷹道悉相傳之而已。

于時慶長十年霜月日

龍山在御判

跋ノ奥書。天正十七年卯月仲旬龍山作トアリ。秀吉公ハ慶長三年八月十八日薨ジタマヘリ。後ノ奥書ハ此百首山岡主計頭ヘ書寫御免許ノ時再書ナシタマヘルナランカ。是ニテ年月相違ノ不審ナシ。

文龜鷹書云。ほつせの露とは。いぬの上にな

まる水なり。子つぼの水とは。五子のみとをよくらんこきに入て。なしをきりひて、いだして其しる取。どうけの藥をかふべし。ひつぼの水とは。あかつちをくり程に丸めて。四五日火にやきて。ちやわんにあつきゆを入て中へ入て。其しるを出して餌をかふべし。子つぼのあかすひの水とは。女の甘より内の月すいをいふ也。但はじめの月すいなり。よりとるさはの水とは。甘より内のをんなの蟠なり。

小笠原鷹書云。ふるさゝすとは雉子の男鳥を云。大海の中藥には。蛇の新敷を赤腸(ハゲ)を取て陰干にするを云。さりつぼの水とは。梨(ハゲ)に木の切目に溜りたる水也。こはほの水とは。榎の切目のくぼき處にたまりたる水也。紅の水とは月水也。忍ぶすの水とは。女の交合の水を云。石しやうとの名とは。五りんの中

に溜りたる水なり。

鷹の上毛とは左の羽。下毛とは右の羽なり。青羽とは新敷羽。染羽とは古き羽なり。さくらしい羽とは古き毛の残る也。屋形尾の鷹とは十三尾の鷹也。

夜飼の衣。鷹の毛所也。ねとり飼とは。鷹の鳥を差おはぬ時。死ニ鳥を取出し飼申を云也。もゝ口とは口餌の事也。志餌とも云。

人毛と申事。是は紫鷹に限有之也。すてかひ鳥とは。山にて餌を落しこふを云也。わすれ飼と云。鷹の鳥屋に入前に。取飼くはするを云也。

鷹の尾の三ッ目をなら尾と云。又へをの事をも云。四ッ目の尾ならしと云。又鷹に物をおしふるをも云。木な取(と鷹)は小鷹の木に居を云。大鷹をば木居鳥と申也。朝とがりは四ッより前。夕とがりは七ッより暮過迄也。

北より南頭に合するは順の鳥と云。南より北へ合するは逆の鳥と云。くひな飛とはこたちするを申也。切立鳥とは鳥の足音を聞て立上るを云。小鳥のこあがりは赤しと云。こははかまは雲雀也。田もの指とは水鳥をかけ留る也。泥板とは餌まな板を云也。とゞろきとは餌板を云也。鳥柴懸とは春は梅櫻。松は四角(季節)に用ふ。くら柴とは萩を云也。位の鳥とは五位を云也。犬のさかくりとは犬の鳥を失て跡に歸るゝを申也。やり繩とは馬上の犬引時の繩也。さはし繩とは犬引の引繩也。

續群書類從卷第五百四十六

鷹部 六

責鷹似鳩拙抄

持明院十卷書之中

鷹の名之事

まかだ國にては

すん大といふ。

さいたんこくにては

きせんといふ。

しんたんこくにては

こてうといふ。

はくさいこくにては

くちんといふ。

鷹物之具寸法之事

一鷹をつなぐやう。大鷹は七むすび。兄鷹は五

むすびなり。ほんしき此分なり。いまはたゞ

れいしきつなぐべき也。

一ほこのたかさ四尺一寸。きりくち三寸。ほこ

總檢校保己一集

男源忠寶校

の長さ七尺八寸<sup>五寸とも有</sup>

ふたつたかのほこ一丈二

尺。ほこのぬの四尺八寸。ひろさ三尺二寸。

ほこのもと鷹の右になるべし。

一かりつゑはぬしのたけにくらぶべし。いぬ

かいは我目のとおりにあてがいてきるべ

し。たかじやうは我かたとおなじくきるべ

し。

一ほこにたかつなぐ事

大鷹はほこのもとに。兄鷹はすゑにつなぐ

べし。

但ほこぎぬを付るつばがねをうたねば。



大鷹をうらに。兄鷹を本につなぐなり。故實なり。

一あしをの事

大鷹は六寸<sup>セ</sup>六分。兄鷹は五寸<sup>六イ</sup>五分。鵠五寸<sup>六イ</sup>。  
歟。

一鷹たぬきの事

ながさ四寸八分。ひろさくち二寸七分。へりのひろさ四分なり。たゞし大かたぬしのうてによるべし。

一大緒のくけがわの事

左右へ二寸五分。兄鷹は二寸一分なり。はい鷹一寸八分斗也。

一大をの事

大鷹は六尺六寸六分。兄鷹は五尺五寸五分。はい鷹は四尺八寸なり。いづれも二へにとりての事なり。其ほかちいさき鷹どもははからいてすべきなり。

一はい鷹のくけかわの事  
ひだりみぎへ二寸二分<sup>一イ</sup>なり。

一こつちのをの長さの事

大鷹は三寸一分。兄鷹は二寸七分也。はい鷹は二寸一分なり。

一みゝずかわの事

大鷹は二寸三分。兄鷹は二寸一分。はい鷹は一寸八鷹なり。

一むちのながさ三尺一寸。兄鷹は三尺。又いづれも二尺五寸。

一はい鷹のむち二尺八寸。

但此説ありといへどももちひず。小鷹はむまにてつかへばむちながし。大鷹はみじかし。はい鷹は三尺一寸。あるひは三尺二寸。大たかは二尺五寸又は二尺八寸と云々。又むちはかたかへりよりこそぐる也。鷹小鷹同前。

一ひねりはながさ七尺五寸。又五尺二寸。又は六尺五寸と有。

一うきぎの山をの事

藤にて四糸だをうしろあしをまへあしのあはいへ入て。左のあしのかたにてとむべし。かけやうは。二まきまきて。しぼりむすびにむすびて。うへをばそろへむすびにして。下を六寸に結すびて。うへを四寸にきるべし。

一おなじくくはせの事

もくときは左のべにしゝをかうべし。

一鳥の山をの事

おんとりは五寸。むすびめよりうへ一寸八分。めんとりは四寸。むすびめよりうへ八分。いづれもまるふちにてかけべし。かけやうは。まへにて二むすびむすびて。す糸はそろへむすびなり。めん鳥はおんなむすびに

むすぶべし。又おん鳥は六寸。むすびめのうへ二寸五分。めん鳥は五寸。むすびめのうへ二寸とあり。むすびやうはいづれもおなじ事也。

一田物にはなわにてうしろへかくべし。田物のときは田をといふ也。

一うづらはさむ竹の事

長さ五尺二寸。あひを三寸ばかりづゝのけてはさむべし。十づゝはさむ。又は七もはさむなり。是を一さほといふなり。とりよりした一尺五寸なり。竹のきりやうは。まりをつくる木のごとくきるなり。かみよりにてかたわなにむすぶなり。ふくさのかふみねなり。口傳なをいろくあり。とりかいたるうづらをば。さきのこりの鳥にむかはせてはさむなり。ことりほねをぬきてはさむ事も有。とらでむかはせつくるもくるしから

ず。

一 糸ぶくろのたかさ四寸六分。うちおなじ。

一 がんのくわせまるをかはす。つねのくはせ

よりはあげて。むなさきをかんだのせいほ

どまろくかふづし。鷹には田をいばかけず。

又田をいかけくわせをする事もあり。兩様

なり。

一 しぎのくわせはうけかひをかふ也。

一 しぎをばしりいとたつといふべし。

一 うづらをばひつとたつ。

一 ひばりをばひりいとあがるとも。又ひりひ

りともいふ。

一 きじのおんとりをばふつくとたつとい

ふ。めんとりをばほとくとたつといふ。

一 千鳥のくわせ秘事也。

〔此間數行闕〕

あらん所をあらふなり。是もこゑたるにか

きをきりてあらふべし。

一同藥。ゆわうとまつかうと等分に合て。しら

みのある所へ。筆のぢくにて。それにもうせ

ずば。ふせてあたゝかにして。あたらしきわ

たをむしりて。能よく包みておくなり。

一 打目藥の事

はこべをもみて。目に細々にぬるべし。其後

にいかのこうをあらして。筆のぢくにてふ

くべし。

一 いられ藥

よもぎのね。いばらのね。いのこつちのね。

是をせんじてかためて。あつき（a 略）半分程にか

ためてかふべし。

一 鷹を鳥屋へ入べき日の事

四月八日。四月十三日。五月五日也。又或説

四月一日とあり。其外に入は吉日を撰て入

べきなり。

一出す日の事

七月十六日。同廿日と云々。其外又吉日をえらぶべし。

一わすれかいといふ事

四月八日に南へ立めん鳥にとりかふて。鳥屋へ入をいふなり。

一荻に鶉を付事

二本のあはひにはさむ也。すゑのほをばさらずしてそのまゝおくなり。もとの鶉よりした一尺五寸。切やう竹のごとし。かうみねりにても。又かづらにてもゆふなり。かみよりはかたわなにむすふなり。かづらにてむすぶ時は。まむすびにして切なり。

一さじの山を、三寸斗に。おん鳥めん鳥ともにして。うへをばまむすびにして。ほどけぬ程にみじかくさる事もある也。又むすびめよりうへをおん鳥は左へ。めん鳥は右へな

びくやうにむすぶなり。是はむすびよりうへの二寸五分。二寸などと。前にかきたる山をの事なり。

一鷹のうちたる薬の事

へうたんのくろやき。ふるおけのかはのくろやき。りうこ錢をやすりにておろして。いづれもく等分に合て。かうがひのみゝかきに二すくひほど。

一鷹のふの名事

しぎふ。うづらふ。ふぢふ。ひばりふ。是は小鷹にあり。

一鷹のしろの見ところの事

らんひのねしろし。四毛にふくりんふかし。羽すぢしろし。ひしやくはなふかし。あしのがんぎこまかに。いろうづらのあしのごとし。目の色うすし。羽うら白し。

一白に色々あり。ゆきしろ。あをしろ。あか鷹。



しろみ同。す鷹にしろあるべからず。白ははくさい國の鷹なり。かうらい鷹なる故なり。

一鷹にねとりかうといふ事

野に出て鳥をとらせて。いたづらにかへる時。いき鳥をもちてかうをいふなり。

一ますかさの羽の事

谷わたしの羽におなじ。たゞし谷にてなけれども。もちより林へとびわたる時もあるべし。

一鷹の大緒の寸法。又一説五尺六寸二分。是をば四尺五寸二分なり。

一兄鷹は四尺六寸三分。是は三尺七寸。ふささばこの内へは不入候。

一かり杖の事。

主のみゝのひくにあてがふなり。梅木本なり。犬かひのかり杖は。主の目のとをりなり。せこは我たけなり。

一犬のはりなわ一尺五寸なり。

一さいとりさほのすん一丈五寸。

一人に鷹を見るやう。くちゑにかけて出るなり。をさなをして身よりを見せて。其後たなさをみせて。其後むちにて尾をすゑべし。くちゑにかくる事は小鷹の事なり。大鷹兄鷹などはくちゑにかけぬものなり。  
一足緒の寸。或説大鷹は五寸五分。小は四寸五分。

一山をのすおんとり六寸。うへ三ふせ。めん鳥五寸。

うへ二ふせ。まろ藤にてかくるなり。結めおん鳥は左へ成やうに。めん鳥は右へすべし。切様。そぎて刀を返なり。

一鳥のかけやう。春冬にかはるなり。春はめん鳥をささ。冬はおん鳥をささにかくるなり。一鷹をすへあぐると申事は。鳥をひきくたて

たるを。たかき所よりあはすを申なり。ほこよりすへあぐる。鳥屋よりすへあぐるなどゝ申べからず。

### 一尾の名の事

數十二枚なり。或説也。

一すゞつけ。ちから尾。わき尾とも。たすけ共。

一ならしは。ならはとも。なりぬうとも中。

一ゑひき。一すけち。

一いしうち。

一しのぶ尾。是はしのぶの鷹の事也。しのぶ尾はふの切やうたてさまなり。

一屋かたちと申もあり。ふの切やう別にしるす也。まねび尾などいふもあり。是はその物にあらざるをまねび尾と申なり。

一ひさわと申。鷹の尾さきのしろき尾なり。さ【毛藏】ごろもと申けかたに一とちりあり。くすはれと申毛あり。わきにあり。ふぢばかまと申

毛あり。

一夜をける鷹わきにあり。さゆるけ。是も同前なり。

一もちにげといふ事

鳥をとりにてかたかけへにぐる事をいふなり。

一はやぶさの取はねと申事あり。風にふかれてとりえぬを申也。風ながれとも申也。風ながれの事そうじて鷹にあり。

一山歸ののぼりはねと申はねあり。是は山へのぼりさまにはやくとぶを申也。逸物戌べし。

一ほしけと申毛あり。つねにはなし。

一かりつゑと申事はさりの木なり。ほんの物。

一もちふと申毛あり。鷹のそばにあり。

一はつかりと申事は。九月九日に鳥屋をいだして。南へたつちん鳥に取かふ事なり。

一山歸の鷹をあみにかけて候とも。ほそかけと申べからず。やまかへりと申也。

一うづらふしたふと小鷹にあり。

一或説。ほこのすん横七尺。くち三寸。高四尺一寸。

一或説云。足緒大六寸六分。小五寸五分。

一或説云。ひち三尺三寸。小二尺七寸。にんぢん。かんざう。てん。しろがね。(本ノマ、)六かくかんはるまつしち。

一雪しろの鷹と申事あり。尾をも羽をも雪にすぐれて候を申也。

一おきゑすりと申事は。鷹系をぬすみて。別に又うちあがるを申。かりばの事なり。

一そくそむると申事は。風にむかふ時を申。さてそめたるとは申なり。

一さるゝと申事あり。鷹のしぬるを申なり。

一草に見ふする鳥

ゆるぎぐさ。おぼえぐさ。くさほ鷹。そでぐさ。とりの下ぐさ。ふしぐさなど申事あり。けはなちらすといふ事もあり。是は毛をとりちらす事歟。

一鷹のふに。とふく。ふぢくろふと申。是は鷹のむねの邊にあり。

一鷹のもどり羽うつと申事あり。鳥に合する時。鷹とびちがひて候時。やがて鷹飛なおりて鳥をとる。それをもどり羽うつと申なり。是はつねにあるべからず。逸物なり。

一おきゑをひきそばめてといふ事は。あら鷹を取かふ時の事なり。

一鷹につらふと申事は。鷹をいたはりて。またみゝのかざりに。足をのものと色々のにしきしやきんをかさねてさす。それをつゞりと申也。

一とまりがりと申も。鳥山と申とおなじ心な

り。

一鷹の尾の名

鈴つけ。 たすけ。 せまち尾。 ならし

は。 石打。 小石打。

一説に。小石打をばしはひきと云なり。

一爪の名

うしろのつめをばかけつめ。まへの爪をば  
うちつめ。一説にはゑはみ  
の爪ともいふ。なかの爪をばとす  
へ。そとのつめをばかへるこ。

一鷹の目のくすりの事

ふぢを手一そくに切て。三ばかんざう少入  
てかうべし。ゑをあらいてもかうべし。しう  
せきとはかわらけにしとをし入て。火の上  
におきそいりつけて。此せんじ物を入れてか  
うべし。妙也。

一鷹のあを薬の事

やくし草とはこべをしほにまぜて。竹のつ

ゝに入てやくべし。其後こまかにまつして。  
にんじんかんざう少入合てかうべし。鷹の  
そうやくなり。

一鷹の薬の事

げんじのうす色と名付薬也。かんざう半せ  
ん。ししのふくろつの三せん。くろやき。い  
づれもくさいまつしてかうべし。

たぶるひせず。ゑうとみ。身をすくむるに能  
薬也。

一鷹の羽虫の薬の事

ひて。くまのゐ。かわにな。びんらうじ。  
此四色を等分に合て付べし。羽のねをわり  
ても入べし。

一鷹のほねおれいたむを治する事

あかぐねのせんくづをかうべし。のみむし  
をかふ。又ふるおけのかわをくろやきにし  
てかうべし。



一 どうけの血をくだす藥之事

かまのやけたる土。とくさのくろやき。はこべのくろやき。てんのくろやき。しろいもの。此五色を等分に合て。ゑにつゝみてかうべし。其後あを藥を飼べし。

一 いきけの藥之事

どうけにもよし。藤こぶ<sup>ニイ</sup>一分。にんじん二分。かんざう少。等分に合てゑにつゝみてかうべし。

一 ゑうとみの藥之事

かんじの木のを粉にしてかうべし。又ゐのしゝのあたらしきをかうべし。

一 鷹のしろくすりといふ事

あけびのみをほして。さねとかはとをのけて。

一 ゑこひのがるゝ藥之事

川にあるかにをかうべし。

一 ちうぶの藥之事

雨露にあたらぬさゝの葉をくろやきにして。桑のほやに合てかうべし。くわのほやもくろやきなり。

一 なづけ藥之事

あしげ馬のよめ。よるとるさはの水。千鳥。尾長鳥。かみのあか。あしげ馬のきば。いづれもくあらんにしたがひてかうべし。

一 尾羽をとむるをいだす藥之事

からすうりのねをこにして。くわのはりに付てさすべし。久しくなるをばそとさしわりて入べし。

一 五日七日になづけてつかふ事

おなが鳥をくろやきにして。ゑにつゝみてかうべし。それなくばくびたまちどりをもかうべし。妙也々々。

一鷹のぬすみはみなどしてゑもちたるを。當座にうたする藥之事。人のかみの虫をかうべし。

一どうけの藥之事

にんじん。かんざう。おもと草くろやきにして。あかねのこ少入て。此四色を合せてかうべし。

一ちがひ藥之事

なのはを能くもみて。しるをしぼり出し。そのしるにふぢこぶとゆやなぎをさざみ入て。能々せんじて。鷹をふせて能々ゆてべきなり。

一鷹のうち目の藥之事

まづはこべをもみて。しるを能々ぬるべし。其後いかのかうをすきたうさに等分に合て。筆のじくにてふくべし。

一つき目の事

あをはととちとをそくいにねやして。目の中へ入て。馬の尾にてぬひふさぎて。三日四日おきてとくべし。

一足けの藥の事

まづはるゝをば針にて血を取べし。其後よき時にかもしゝの角をおろして。よきすにあかねのどくを出して付べし。又それにわろく候はゞ。いぬたてをかげぼしにして。よきすにあはせてかうべし。

一どうけの藥之事

しゝの角をこそげと。てんなんしやうをかげぼしにして。ふくりやうと。此三色を等分にして合てかうべし。

一羽のおれたる藥

白き糸のみ。ゆのは。かみのいろこ。かぶらぜに。これをかげぼしにしてかうべし。

一なづけ藥

たけり草。よるとるさはの水。あふち。いもりのかげぼし。かもしゝのつの。是を等分にしてかうべし。

一 かけらぬくすりの事

まるすゝめを毛ながらたゝきてよひにかうなり。又あしたよりまへに五八さうを三くちかうべし。

一 雁にくませ薬

いなぐきと又すゝめのはしをくろやきにしてかうべし。

又田にあるみゝむしをかうべし。一くすり也。

一 いきりの薬

ねこのみゝのちをとりてさい／＼にぬるべし。

一 糸にわろき物ども。はと。もず。けらつゝき。いなかひたか。たぬき。さうなくか

ふべからず。には鳥もわろし。

一 よき物は。ねこ。ねづみ。しゝほしてもよし。いしかめ。どうがめをばかはず。

一 足のやうじやう。田にあるあかき水をとって。しほを入れて能々せんじて。さい／＼にぬるべし。

一 夜とるさはの水とは。竹をふしをこめて切て。わさわらにてうへをつゝみて。とうすの水に百日つけて。其後あげてたまりたる水にて薬を合かふ。是をかくいふ也。最上の秘薬也。

一 あしのはれてこぶになりたるをばわりて。あくちを能々さらへて。うるしのあぶら。ひさけたるしるに能々合て中へ入て。くらき所に置べし。

一 しりのふさがりたる薬。かみよりをして。あぶらをぬりてしりへさすべし。其後すかし

藥をさいさいにかうべし。

一鳥屋出す時。つちゑをさい／＼かふべし。

一鳥屋のゑによき物馬牛也。可秘なり。

一惣藥によきはむつけたる時しろがねをこそ  
げてかうべし。げどくそうじてよき物也。

一七月のせみをくろやきにしてかうべし。ど  
うけの藥也。

一土用のかつほぐさをとりにて。かげぼしにし  
てかう。どうけの藥なり。

一惣藥にはほらがいのわたをかげぼしにして  
かうべし。妙なる秘藥也。

一木つぼの水の事

ゑんじゆ。ゑの木。桑の木。是は木つぼの水  
也。又こつぼの水の事。竹のさりかぶの事  
也。しちくの水よきなり。又から竹の水はむ  
つけ鷹にかふ也。

一足をひきはらしたる時の藥。どくだみをす

りてよき酢に合て付べし。はれたる上をゆ  
やなぎのあまはだをあたいめてさするな  
り。

一羽をかきたる藥

しほをよくあたゝめて。ほそきぬのにつゝ  
みて。さい／＼にむすべし。

一羽うちたる藥

から竹をきりて。中にしほを入れて。わせわら  
をたきてせんじ。竹の口より出るいきをい  
たむ所にあてゝ。さい／＼にむすべし。

一かしらをやむ鷹は。うしろをみてはなより  
しるをたらす。それをばあをはしのねを三  
くさ必やくべし。

一大かぜをやむ鷹は尾をひろげてすくむな  
り。それはこしのうへを三くさやくべし。つ  
ぽは五所なり。●●●此ごとくなり。

一目をやむ鷹は。目をふさぎて。はなよりしる



をたらすなり。それをばちきやうのかどを  
三くさやくなり。

一腰をちがへたる鷹は。べつそくのねを三く  
さやくなり。兩をやくなり。

一どうけやむ鷹は。りやうの羽のねを三くさ  
やくべし。わきのした三くさ。…此ごとくに  
やく也。

一犬のはのあたり所には。かし鳥の血をとり  
てさいさいにぬるべし。

一内をすかす藥

よき茶にしほを少入てかうべし。又しろき  
米をよくかみて。そのしるをかうべし。又は  
なうちをすかすには。たかなのはをちぎり  
て。くちゑにつつみてかふべし。

一しらみの藥。にがきといふ物をせんじて。し  
らみのゑにつゝみてかうべし。

此ちいさき兎二つの山緒うしろ足の間へかし

らを  
入て。

くび

とあ

とあ

しと

を二

卷ま

きて。鳥のごとく上下ともにむすぶべし。まへ

足はうしろ足のそとになるべ

し。但しりをかくすとてうし

ろ足の間へ入るといへり。又

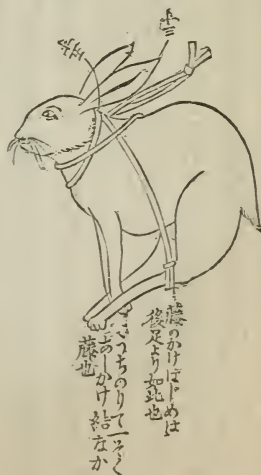
兄鷹の兎をば。鳥の如くむす

びめをかけて。大鷹のをは

くびぎはを縄ゆひむすびに

して。頭と足の間にむすび

めあるべし。又大概は前の



如くにて。後足のふし上ばかりをむすびて。く  
びにかけずしてもかくる也。又兩様あり。但他  
流なり。



そよかた尾



せきかた尾



やかた尾



しのふ尾



れと尾

此外かはりたる尾をばまね尾といふなり。

鷹之書此書も所持之抄也。旅宿のため拔書に注之。秘する抄物也。仍右之抄に閉加者也。

一神社俸幣(奉)のために鷹を奉には。架を社の左  
の方に。かぶきの木を社の方になしてつな  
ぐべし。つなぎやうは常のごとし。大緒のふ  
さを逆にする事を殊に禁べし。鞭餌袋は宮  
司に渡すをぐイべき也。常のごとし。又鷹の祈禱の  
ために參詣申つなぐ事有。つなぎ様は小鷹  
つなぎなるべし。

一架のたかさ四尺三寸一分ニイ。かぶき同。柱のふ  
とさは二寸三分。かぶき柱より外にあまる  
分四寸八分。惣の長サ六尺二寸。臺のたかさ  
五寸六分。おもてのひろさ六尺二寸。だいの  
たかさ五寸六分。おもてのひろさ六寸六分。  
おもての兩のはしをおとすべし。長サ二尺  
五寸二分。かぶきにつぼがね四ツ。はしらに  
一づゝうつべし。下のよこ木は臺の間にし  
て。はしを臺のうちにさしとむるなり。作木

なるべし。二架の長サ一丈一尺六寸。つぼがね五ツ。柱のつぼ同前。鷹は本。兄鷹は末につなぐべし。坪がねうたずば鷹末につなぐべし。架の木は檜杵をほんとする也。

一架布敷は柱の間にしたがつべし。堅様にして三尺三寸二分。上は竹にぬいぐみ。布のはしをうらになすべし。すそは少はづすべし。縫合は合縫にして。二とをりづぬうべし。すその方を三寸二分縫にしてきくとぢあり。くろ革にておもてのかたにむすびめあるべし。ぬいめより上はみじかく下長。惣長さ八分。上の竹のきわにとんぼうむすびあるべし。口は上になるべし。布あさぎにそむる也。むらさは掛酌者也。もんをつけば虎豹を付べし。とらは本木のかたにあるべし。かぶさと架布の間一寸八分。

一架のあみさぬ藁薦也。先藁に苧をまぜてな

わにして。わらのもとを繩にかけて引ありて。一に取て繩のきはにて編すべし。此なわ架布のたけに准ずべし。仍篋をも用也。編目五とをり也。一は繩のきわ。二は上の編目より一寸二分。三は二のあみめより三寸二分。四は五寸六分。五は六寸八分。かやうに間を置。苧繩を青くそめてあますべきなり。すそはやすべし。惣のたけ布に同じ。小鷹をばすこしみじかくすべし。布のごとく革にて坪に付べし。

一結架法式不定。おりにしたがつべき也。多分さしほこの寸法たるべし。かぶきは柱よりおもてに結べし。柱のかしらかぶきのうへに同。結目おもてにあるべし。なわをすみちがひに二重にかけて結べし。廣縁の合目のごとし。陣にての架。敵陣の方へ鷹の後を不成様に。陣所の左方に可結也。

一鷹野へ出る時祓をする様。南無山神。南無土神。南無水神。散供再拜と三べん唱て。たかを鞭にて打祓て出べし。但田物には水神を一番に唱べし。人の見ざるやうに勤べし。

一山中の事。此文を三反唱て。梅の直枝スベイを一直コシロて。草を茹たて横に七重にしきて。白餅コシロ七鰯コシロ一酒を備べし。残たるをば鷹匠犬飼迄食べし。女にいろはすべからず。鰯なくば鰯を用。是一年に一度始而野に出る時おこなふべし。寅申の日をよしとするなり。

一鰯ヘチ一がらの長廿尋。淺青柿染成べし。鰯ヘチしりを放てつかふをばへをしりうたするといふ。手に引とむるをばうたせぬといふ。豹尾ともかく。鰯に付る草を虎草コカヘといふ。豹筒長四二寸分。上の方にあなをあけて。下の方をほそく削なり。竹のかわ半分にのこすべし。一がらといふは一ツ。一しりとは三ツ又さ

れたるをつぐは口傳あり。

此の鰯事當流に相違なり。一がらと云は心を云とあり。廿尋の事多分如此。當流には廿一尋也。

一虎繩事

兄鷹大鷹の物也。竹には卷ざるなり。おき繩ともいふ。

又此事不審なり。おき繩四十尋とあり。こ革などの付様。鰯にいさゝか替也。返々こつなの事とあるは不審也。

一鷹請取わたす事

一番に鞭右の手にて太刀を人に遣す様に出すなり。手より末は賞翫。本は下とす。うけ取人その心得をなすべし。取てやがてさすべし。二番に餌袋うちをゝときて。口にゆびを入。緒を引出して。緒を手にかけてにぎりて。大指を口に入れて。一にとりて鳥がしらを



いだすべし。口は上になしてすこし左の手傾て出す也。鳥がしらを取は賞翫也。兩手にて尻のを拘て請取て。大ゆびを口に入れて腰に付べし。請取人は上を取ずして。手に一わけ取たる所をとらんとすべし。上下によりて渡すなり。うけ取人は條をとりて。やがて人さしゆびに一巻して。そのうち左の手をうつて條をとり。あしをのきはまてこきあげてうけとるなり。鷹こぶしにわたらば。左のかたへひらきて。大をへ手に巻べし。さて鞭をぬきもつて。鞭の本をつきて禮をして退也。もしつまらば右へもひらきて退て大をへ巻べし。三指の禮といふ事あり。上とす。口傳在之。

一鷹の鳥を木に付る事

春は梅椿。冬は松柳。秋は楓などに付也。一枝より切口まで一尺ある枝を用。鳥二付る

には春は雌上雄下に付べし。雌ばかりも雄ばかりも不付也。一付にはいづれも用也。時節にも不拘也。二付には木を隔て同方に向け付べし。一付るにはくはせの方を外になして。鳥の右を木にそへべし。二付るには上なる鳥をくはせを外になして。下なるをばくはせを木にそへべし。上をべ山をと羽と頭との間へ枝の切くいをさし入。山緒の上の結目をときて。一方をば羽の下へまわし。一方をば鎖（鎖）もへまわして木にゆひ付べし。結ばずしてよりて下より上方へねぢかふ也。下をば足二にかみより一づゝ付て。枝にゐたる様に結付べし。足のくもてのものに。後より紙よりをかけて。指三の俣より枝の下へまわして。足のおもてにてかたわぎに結べし。左右ともにわぎの方足の間になるべし。又云。鳶にても足を枝に巻付べし。本

木より巻はじめて。又本のかたへ巻返してとむるべし。わざ五分さき五分に切べし。ろしろはかけ爪をまたげて。紙よりまわすべし。口傳なくばしる事かたし。上の山緒に入枝なくば針をさすべし。是を鳥柴といふ也。

伊勢物語には梅の作花にも付ると見へたり。鳥柴をうけとりわたす事。大概弓に同。鳥を人に向て出すべし。又木に付ざる鳥を請取わたすには。左の手にくわせを上にしてすへて。右の手にて足をとりにて山を人に出す也。請取人山をいとらずして。左の手をとくさ毛の下へ入。右の手にて胸をかへ請取て。やがておしまはして。前に人のもちたる様に。左の手にすへて戴て退べし。但奏者はいたゞくべからず。鳥一の時は如是。あまたあらばたゞみの上にくはせを上にして。頭を人のかたへなしてならべ置て渡す

べし。此時も雌をば春は雄の前におくべし。冬は雄は前なるべし。當世は臺に居て送らるゝなり。此時も居様同かるべし。かやうに數多時は。手を鳥に付て其手をいたゞくべきなり。

一尾を曰尾にてつぐ事

春野のものなり。若物にかざるべきなり。一春うちたる鷹をば。若ものをも小山かへりと云。又野され佐保姫とも云也。茅藁にて。竹を巻て架にすべし。常に霜の水をかふべし。

一ゆがけの緒をとむるやう。まづ緒のさを

(結露)

一緒べし。如常外の方へ二巻して。上より下へおし入て。わさにとりて。末の緒めを一まとひして。わさの方を下より上へおしいる。委不能記。口傳すべし。又鷹を人にわたすに。ゆがけを渡す事なし。鷹を渡て後。やが

てゆがけをとりて懷に入べし。もし所望せば緒を右の手にて指にくるくると巻て。ゆがけの手掩の中へおし入て。左の手に指をささへして。手のかたちのごとくおゐて渡すべし。請取人ゆびをとらずして。左の手にて手掩の方をとりて。やがて左の掌に如前すへて右の手をつき禮をして可退。あいてによりいたゞく事。常のものにおなじ。

一鷹を人に見する次第。先おもて。次に身より。次にたなささ。次背也。左右の羽と尾にむちをそへ。刷よしにて見する也。三の鞭と云是なり。鷹渡す時。かくのごくして見せて後わたすべき也。

一鑑の事

こつちのをながさ大鷹は三寸二分。兄鷹は二寸八分。鶴は二寸三分。けしやう革大鷹は四寸二分。兄鷹三寸六分。はい鷹は三寸二

分。ささを釵形に切てくゝる也。こつちと同革なるべし。瓶子形をば瓶子鑑といふ。ぬためあるをば引切鑑といふ。角にてせめをい

一打抛飼裏之事

ウチカヒフクロ  
苧繩を細くして。長さ七寸につゞらおりにして五とをり編也。おり返しめのふさへ繩をとおして。くゝりつめてきわにてまむすびにして。その繩のあまりをこしに付るなり。柿ぞめにすべし。

一鷹のふの事

よこふは藤苻。豎苻の鳴ふ。ぢの赤は鶉ふ也。しほ赤鷹は同物也。私考。赤鷹しほ同物にや。此傳也。是等大事也。別ニ注。兄鶴をばにこのりと云。以上小鷹にかざるべし。又上毛四毛覆輪ふかくあるをば覆輪白と云。上から青さを青白と云。尾羽の生散て白さをば雪と云。鼻毛しろかる

べし。已上大小ともにおなじ。

一餌袋に鳥さす事

山緒を取て尾を出して。木賊毛人の身にそふやうにさすなり。惣て人に鷹を出す時は。別足にてもたゞ小どりにても入るゝ也。

一大鷹の鳥屋作事

横五尺三寸。竪六尺三寸。高さ六尺。はなし鳥屋も同事なり。小鷹はその次第に縮べし。

一ひねりの事

かねにてもする。また籠のさきにまたのあるを用てもするなり。又から竹のもかりを一節枝を二ツ立ながら一寸にきりて。よのふしをばうつくしくけづりて。籠にさかさまにさし入て。つぎめに針をさすべし。總長さ六尺に切て用べし。つけ心のある鷹に專用なり。大概くまでのごとくなり。

一田をの事

稲にてもわらの繩にてもかくべし。稲はほの方を結合て。とりの前にあてゝうしろに結べし。結目はいづれもおとこ結たるべし。鶴は七寸上の結をすべし。あまり三寸に切べし。其外の鳥はいづれも六寸二分たるべし。鷹には田をゝかけず丸をもとらず。左のむねさを毛下すこしあけて飼て。やがてかはを引さすべし。上より見へざるやうにするなり。菟丸をぬかずして。左の頬ささのかはをむきてかひて。又かはをさする也。一鷹の丸をとり。くわせをするには。田をゝかくる也。

一吉日事。寅申。凶日戊午未酉。此日は人にも不出。とりもせぬ日なり。一段とある事せざる也。本命午日。行年は未の日也。別而慎日なり。

私考。戊午。乙未。癸酉此日也。或秘抄にあ



りと云とも註付者也。

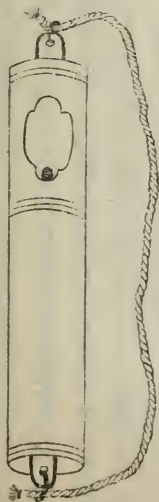
一小鷹のひねりの事

鐵にても銅にてもするなり。是も本あり。鶉のくびを入れて引あぐれば。たかも付てあがるものなり。混本は竹にてありし也。是も別に本あり。ながさ五尺七寸。又大法のひねりとて。銅にてする矢の筥の手かけのほそさをもつて二尺五寸にして。かねを能つめて入べし。又筥のいかほどなる竹を矢の筥のごとくにさきをして。長さ三尺二寸にして。かねのいりたる筥を入れて。本をとむるやうにして。はしらかして鷹をとる様にすべし。馬にてつかふ時の事なり。

一白の装束の事

チヌチ アシチ ユカケ モトナシ  
鼠尾。率。鞆已下鍔の装束までも白革にてすべし。條は白糸の組たるべし。大小共に同じ。

一水筒之事。ふとさ八寸。節三。長さ一尺四寸なり。上下の節の外に五六分斗に乳をいだして穴をして。くびにかくる繩をとをして所持すべきなり。中の節と本のふしの間六寸あり竹を用て。鷹に水かふ口をすべし。口のながさ節の間にしたかふべし。口のかた如此。⌋。中の節に油筒のごとくあなをあけて。水の出入をすべし。口に物をさすやうにすべし。竹のかわの外は皆うるしにてぬるべし。私に考。水筒之事諸抄に定而法なしとあり。



水つゝの寸法不定と諸抄にありといへど

も。有秘本にしるし置間書加之。大かた寸ばう等前に注分可可燃歟。可禁外見者也。

右抄者爲旅宿隨身。諸抄取合注付之。秘說等之條可禁外見。於于外題新作。汗顔々々。

永正三年春二月日 左金吾將軍藤(花押)

持明院十卷書九本者。吾子神村子所藏秘本也。其在世之日。邦也未皇而弗預聞焉。安永二年於遺書中終繕寫訖。

六月

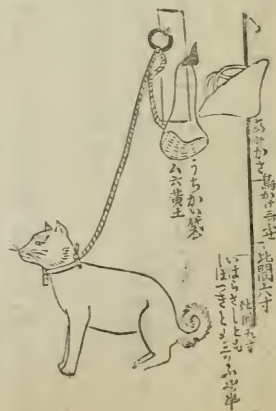
稻葉通邦

〔右責鷹似鳩拙抄以宮内省圖書寮本校合〕

# 齋藤朝倉兩家鷹書

一犬かいのかりつえはぬしの目のとをりにさ

る。四季にかはるべし。鷹師せこにはかるなり。



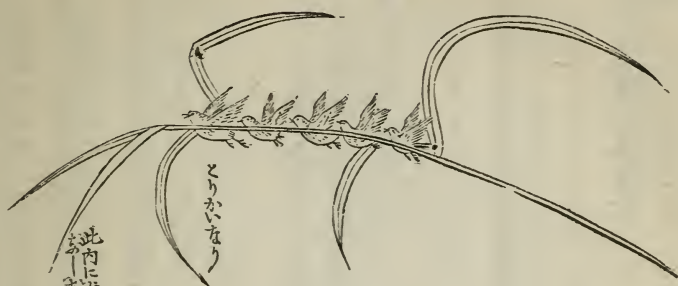
一犬のそうかう事

かくのごとくなる犬よし。色々口傳ある也。いぬいかにも目のまえをれて。尾をよくまげて。はしささながきは吉。又犬の尾をける事有。口傳有。ひすべし。

一鶉雲雀小鳥をはさむ事

野はさみといふは。からたけのよあひをひだりのかたよりそぎかけて。五ツ七ツ九ツ

雲雀



とりかいなり

此内に矢ひはりばさむ事  
ありあはすまい事

十一にても。又ひだりの方にてはさみおさ  
むるなり。しぎのはさみと云は如此。あし又  
はしの竹など云々。どれもかみえりにて二  
えにゆひて。おもてにてさるなり。

如此はさむなり。五ツの時は竹五尺。七ツの  
時は七尺なり。數にしたがふべし。うづらも  
同前也。

一竹の時はいづれもさきにはを二枚ばかりの  
こすなり。よしあし如此二本にてはさむな  
り。

一えぶくろの名の事

おきえきさゝざる時は。うつせみとも又も  
ぬけとも云なり。うけ取ぶくろとてべちの  
やう有。

一おきえの事

三色あるべし。其外はとりの名をそえて云  
べし。

朱墨

りまきかーら

こーのを

さかん

朱墨

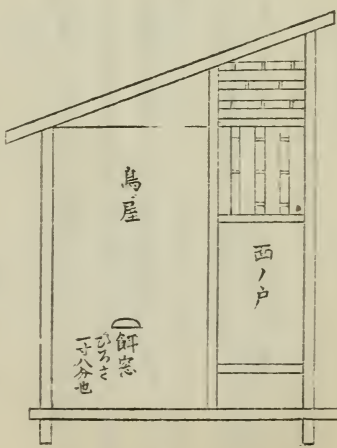
木きおのさーやうそ  
時のーだひなるへー  
ひしなり

つめ

### 一鳥屋の廣さの事

鷹によるべし。下にはくり石をしくべし。やねはとりおきたるべし。とやのたかさ三尺五寸。ひろさ三尺也。ほこの高サ七寸にも一尺二寸にもすべし。とやは束むきたるべし。ほこ木はゆやなぎをすべし。やねはこむぎわらびのきの葉をとり合てふくなり。又板

にてのしぶきにもすべし。但はなしとやとて一間四方にも二間四方にもする事。病鷹をくつろぐべき用也。ひじ也。常はすまじき也。



### 一としばに鳥つくる事

木はさだまらず。梅。櫻。松。しばの木。ならの木。ほうその木。ひの木色々なり。たゞし



何時もいちゐの木に付る事本儀なり。



犬はさみの鳥かけやう口傳在之。右の足の  
 ゆいやう。面にひねりかう也。種々口傳有。  
 足をいう事。藤をわり二えにゆひ。おもてに  
 てひねりかう也。同田物かけ也。一段秘すべ  
 し。つねにはかけまじきなり。

一犬はさみ鳥を如此かくるなり。たゞしつね  
 にはすまじき也。一段秘事たるべし。又水の  
 中にて取てぬれたるに口傳有。

一鴈をかくる事。つねはすまじき也。野かけと  
 てはらにかけずして。はしねとはとをかけ。  
 はしさきにくらべてさる也。

四季のかけやう如此なり。野かけ。初鴈。歸  
 鴈。何れもかけやう口傳有。同じくなわの先  
 をあぶらおにくらべ。かけむすび二ツにし  
 てさる也。同左なわさをまわしてかけべ  
 し。鶴同前也。



鴈



四季のかけやう如此なり。足をからめ。ふし  
ぎわより手一足をき。かみえりにてふたえ  
にして。ほこまたげのごとくいふべし。

一鶴かくる事。つねはかけべからず。足をから  
め。かみえりにてほこまたげのごとくゆふ  
なり。さを三ツかけむすびにすべし。はし  
にふたへにかけて。そのなわたさ(さき)をひだり  
のかたをひだりにつはし。うしろにむすぶ  
べし。これはまな鶴なり。黒鶴も如此かくる  
なり。はねは野かけとてくびと羽とをかけ  
べし。あをさぎかけたるごとくなり。しぎの  
かけ様一段ひじ也。をろそかにかくる事あ  
るべからず。但所望ならばかけて見せよ。一  
大事の秘事也。

五月より七月まで。その外にかけまじきな  
り。たか羽ぬたてむすびつねのごとくかく  
る事もあり。

### 鶴



### かさゝぎかけ

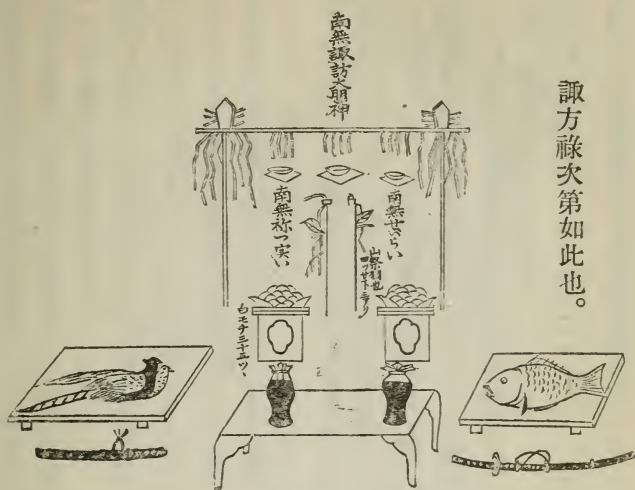


鳥屋へ鷹をいるゝ時。又出す時も。鷹にあし  
き事あらんにも。如此ら(たて)べて諫方を可祭。三  
盃にて諫方へ參時鷹かひ御しやくなり。又御  
盃鷹主へ參時鷹かひ御しやく。同犬かい御  
くわへ。鷹かい給ふ時犬かい御しやくな  
り。

### 諫方賛懸櫛

可懸あひことり。又にわとりのさるのごと  
くなるとりを鷹のとりたる時如此。諫方に

諏方祿次第如此也。



參候わねば鷹主同鷹かいあしかるべし。とりかいやうつねにはあらず。口傳有。諏方のにえかけといふは。きじにはかぎらず。うさぎもかくべし。たぬきも同前なり。



一すわのにえかけの事。色々口傳有。

鷹を遣ふ人は。諏方のにえかけをつねにかけてまいらせられずば。鷹遣冥加あるまじき也。七月廿六日七日にはとりわきて如此

に取かけて。すわをまつりをすべき事か  
やう也。能々すわ大明神をしんかう申べき  
なり。

一常のうさぎはかけやう如此。

但結様三所有べし。三所いづれもかはる  
べし。口傳有。



一常のうさぎをかくる事

前足を如此。ほこまた木のごとく。ふたえに  
ゆひてきり。うしろ足の中（か）のふしの上をふ  
たえに女むすびにして。前あしの中へひき  
とをしをして。手一足あきてかけむすびに  
してさる也。常たけまじき也。野かけとて何

となく四足をもゆふなり。とりがいめのこ  
とははうのごとくたるべし。そうじてはれ  
なる處にて。うさぎをとらする事むような  
り。いきなどよりちかゝりてとりたらば。  
何となくべにしゝを少かいておくべし。日  
くれてとりかい時にとりたらば。そうしう  
を如此かうべし。

一四ツ耳のうさぎかけやう如此。むすび目三  
所也。いづれも口傳有。



一四ツ耳のうさぎの事

うしろ足を左を上（か）にうちがえ。ふちにて  
ふたえにをんなむすびにして。うしろてに  
てくびをささませ。くびの上にてをんなむ



すびにして。手一足かけむすびにしてきるべし。當流の秘事也。かけやうの第一なり。おろそかには物語にもすまじきなり。秘すべし。

鷹飼の秘みつ。うさぎをかくるとは。七日しやうじんしてかくら(る鷹)といふ事有。



一四さのうさぎかけやう如此。むすび目四所也。いづれもかはるべし。一段は秘事(の鷹)の口傳有。秘すべし秘すべし。かいくちをぬふ事。藤をほそくわりてさきをむすび。かはらのかたより尾の方へぬふなり。同とりかいめの事。ひだりのそしゝを三日月なりにいり

てとりかうなり。べにしゝをはうさきの口のごとく三ツくちにわるなり。ぬいめのかず五ツわりなり。藤のさきを身とかわとのあいへをしいるゝなり。秘すべし。かいくちをぬふ事もつねはすまじき也。とりかいめもさのみひろくはあけまじきなり。(九鷹)べにしゝかになめは丁如此。ちやうといふ字のごとくに刀めをつくるなり。鷹にくひやぶりする事なく。能々とりかふべし。

一本の兎



うしろ足をふたえにをんなむすびにして。手一足をきて又をんなむすびにして。前足ををんなむすびにしてくびにかけ。又をんなむすびにして。そのさき手一足をきてか

けむすびにしてきる也。まゑ足にてくびを  
はさまするなり。むすびめ四所なり。いづれ  
も替べし。一段の秘事たるべし。種々口傳多  
し。

三ッうさぎの事。常のうさぎ。四ッみゝの  
うさぎ。しきのうさぎなり。以上いづれも  
一段秘事。中々書置にもかざりなき秘事な  
り。

右此卷物結方之奉書也。出羽國之住人齋  
藤助右衛門。朝倉太郎左衛門秘傳也。兩家  
之被究如此被注置也。實子タリ此道ヲ  
欲ザランニハ不可傳者也。

天羽

永正三年三月吉日

吉盛在判

續群書類從卷第五百四十七

鷹部七

根津家鷹書 一名根津松鷗軒記

〔右根津家鷹書與正編卷第三百五十七所收同書也故今  
從省略〕

續群書類從卷第五百四十八

總檢校保己一集

男源忠寶校

鷹部

荒井流鷹書

目錄

- 一 惣而鷹の相形見様の事
- 一 大鷹かをの見やうの事
- 一 鷹に陰陽と云事
- 一 鷹の本來の事
- 一 善鷹見様の事
- 一 人前にて鷹に禮有を鞭にて禮する事
- 一 鷹を人前にてしづかに居る事
- 一 鷹くるふ事
- 一 鷹を耳かたくす間敷事
- 一 新鷹仕入る事附爪背拵様の事
- 一 常に鷹を心に掛る事
- 一 鷹を朝夕すゆる事
- 一 新鷹を夜居する事
- 一 鷹拳を放間敷事附構に縻間敷事
- 一 餌のつもりの事
- 一 惣而の鷹を居次第の事
- 一 鷹をすへて人に見せ様並鞭當る事
- 一 鷹をすへてひとの方へゆく事
- 一 鷹匠を上へしやうづる事並鷹の様體見やうの事

一 出入に氣つかふべき事

一 鷹請取渡し之事並猪の目の事

一 鷹に添物有て鷹請取渡し之事

一 鷹を渡してはやくゆがけをぬく事

一 餌袋渡し事並鞭渡し事

一 新鷹請取様の事

一 伏鷹請取様の事附籠鷹の事

一 はた綱と云事

一 座敷にて鷹居様並内板持て出様の事

一 貴人兩人御坐候時鷹居て出様の事

一 貴人へ鷹渡し申事

一 座敷へ出す鷹縻様の事

一 人望共出す間敷鷹の事

一 鷹に丸箸飼様の事

一 鶴を丸はしに飼やうの事

一 あがけ山歸り取飼事

一 鷹やわせ様の事

一 鷹に經緒を指事

一 鶉鷹野に犬入様の事

一 犬に鈴付る時の事

一 犬引綱の長さの事

一 關の犬と云事並關の外の犬の事

一 雁菱喰取たる時の事

一 蒼鷹の鷹をうとむ事附萬鳥うとむ事

一 鷹鳥を不取して舞事

一 鷹大さ成ものを取て事後うとむ事

一 鷹鳥を取て放事附放し曲の事

一 思ひ返しの事

一 急ぎ鷹こしらへる時藥の事

一 つよき鷹一夜に拵る事

一 鷹拳初に取飼事同鷹に取飼様の事

一 人をおづる鷹の事並雪水をおづる事

一 なづきて新鷹の様成を使事

一 新鷹の氣こわくなづかぬ事



一 鳴取飼やう事

一 鶴白鳥惣じての鳥取飼様の事

一 青鷺夏くわせ様の事

一 黒鴨くわせ様の事

一 鷹のさげ曲なをす事

一 初て鳥取たる鷹の事

一 鷹ふきに逢て附取飼之野より歸る事

一 同取飼て大緒指事

一 貴人の御前にて鷹に鳥を取せたと云事

一 鳥心無鷹の事並取忘の鷹取飼事

一 鷹にかへり足緒と云事

一 鷹鳥を取たる時の事

一 鈴の指様の事同鈴あげ様の事

一 鈴板付様並鈴板の寸法の事

一 鷹草へ入かぬる事

一 心能鷹を鷹に取飼事

一 鷹に大物をとらせ度と思ふ事

一 鷹に肉當る事附餌つゝむる事

一 肉に當りたる鷹の事

一 肉色見様の事並肉をすかす事

一 鷹つよく肉引たる時餌おさぬ事

一 山わすれ藥の事

一 女鳥をこのむ鷹の事

一 鷹暮にかゝりて取飼事

一 鷹肉に當りたる時を見様の事

一 鶴をとるべき鷹のとらざる事

一 菱喰に組藥の事

一 ひとのあましたる鷹使様の事

一 蒼鷹の雉子に取入鷹を不取事

一 蒼鷹便に犬聲掛る事

一 せこつへ寸尺の事

一 同せこいへかたぬる事附山言葉の事

一 野へ出る鷹にゆがけと鞭置様の事

一 野すかしの事附足皮とく時の事

一 日ふさがりの事附嫌日の事

一 鷹にがしてしきふせやうの事

一 貴人の先へ鷹居てあゆむ事

一 鷹野にて貴人馬上御座に鷹上る事附 足皮斗の事

一 同馬上にて鷹請取事

一 鷹に口餌を飼事

一 鷹の置聲の沙汰の事

一 置餌を渡す事

一 主人へ餌袋付させ申御事

一 鷹客人の事附我鷹と客鷹の事

一 鷹あまた有時賞翫すべき鷹の事

一 構の陰陽の次第の事

一 架のゆひ目の事

一 構の裏表の事

一 若木の構の事附大鷹の架木の事

一 蒼鷹兄鷹縻べき事附縻やうの事

一 染分の事

一 構の寸尺の事附指架の寸尺の事

一 惣而鷹の大緒鎖數の事

一 大緒留る露の事並惣而鷹の大緒寸尺の事

一 惣而の架またぎの事

一 小つちむすび様の事

一 惣じて足皮の寸の事並切やう

一 糸装束の事

一 白鷹縻鞭置様並鞭の寸の事

一 泊り鷹縻様附通り鷹つなぎ様の事

一 祝言の鷹縻やうの事

一 構ひとつに鷹幾聯も有時縻様の事

一 鷹のくらゐにより構に縻様の事

一 夜つなぎの事

一 鷹の相かたちの事

一 鷹の六脈の事並無病の事附火を焼見事

一 羽のつぎ様の事

〔鷹様〕

一同羽痛たる見様附藥の事

一股引藥の事附疵くすりの事

一足氣の藥の事附羽虫の藥の事

一爪ぬけたる時の藥並かうかと云病の事

一尾羽生留りたるを出す藥の事

一煙ながしの藥の事

一口の内に出來物の藥の事附かうねつの病事

一さんなん一藥の事附くさり氣の事

一取草の事

一早風見様の事並藥の事

一小風見様の事並餌違見様附藥事

一鹽氣酒氣を喰たる鷹の事

一だうけの見様の事附藥の事

一鼻毛の事並うちたけの事

一せこと云病見様の事

一鷹の中風の事

一胴より出るあし氣の事

一毛かりと云病の事並藥の事

一わく毛と云病の事並藥の事

一ふわと云病の事並藥の事

一ふわけと云病の事

一目わけと云病の事並藥の事

一目わくと云病の事

一はしり火の病の事並藥の事

一胴打たる鷹の事

一そりと云病の事並藥の事

一身痛たる鷹構にすゆる事

一目の内の病の事附つき目の藥の事

一尾をしげくひろげる事

一鷹の蜘蛛手に病の有之事

一草替りといふ事

一鷹を舞せぬ藥の事

一胴氣の藥の事

一同息荒き事並胸餌を押事

一血虫の藥の事附から子さんと云事

一鷹の内見様の事並内をすかす藥の事

一古うちつかする事

一萬病一藥の事

一内もちつきたる時の藥の事

一骨續の藥の事並あざれの藥の事

一鷹に餌をうたする藥の事

一手さき打たる鷹の事並後打候鷹の事

一をへ物の有鷹見様の事

一身を打たる鷹見様の事

一餌をはやく押さする事

一けつしたる鷹の事

一いれ藥の事

一鷹にうたれたる鷹の事

一くそたけと云病の事並ふと云事

一鷹の尾羽留りたる事附尾羽ぬけ候時の藥事

一鷹のはちかをしげくする事

一胴内胴たけしげり氣に飼藥の事

一人參散の事並血下しの事

一餌生板の木並寸尺の事

一餌の作り様の次第の事

一骨餌を作る次第の事

一鞭水飼様の事並餌の洗様の事

一鷹に飼間敷餌の事並飼汁の事

一鷹よごす間敷事

一大鷹伏様の事並ふせ衣の事

一鶉伏様の事附ふせ衣寸法の事

一鷹を煩はせ間敷事

一鷹の病を見生死の大事見知事

一惣じて鷹に藥飼様の事

一鷹の五臟三腑の事

一鷹の灸所の事並名所の事

一鷺王神の御事

一神前に鷹をつなぐ事



一 神前に構ゆひ様の事

一 神馬鷹の事

一 鷹の鳥神へ御にへに上る事

一 鷹の鳥に綱掛やうの事

一 同鳥釘に掛様の事

一 同鶉雲雀申にはさみ様の事

一 鷹の鳥と云事

一 鷹構にて死たる時の事

一 鷹放時の事

一 替り鷹見様附尾羽の次第之事

一 鷹の尾繼様の事

一 十三尾の沙汰の事

一 鷹に三長三短の事

一 隼の七所の事附はんの鷹の事

一 兄鷹を貳つ鷹にいるゝ事

一 相子鳥の段の事

一 鞠のかゝりの事

一 まびがみ鷹を使間敷事

一 長命駁の見様の事並短命事

一 くびながと云事

一 鷹置たつる時の事

一 子鳥の内持やうの事

一 鷹の鳥屋入鳥屋出しの事

一 遠山毛と云事

一 相木並とひ相木見様の事

一 山忘れ八つの口傳の事

一 鷹に印迦取と云事

一 諏訪のきもんの事

一 水の異名の事

一 鷹犬に子あらさずする事

一 遊掛の緒をとめる事

一 餌ふごの緒をむすび様の事

一 大鷹の餌袋の事

一 鶉の餌袋の事

一 雀隼なづけ薬の事

一 隼に薬の事並隼に嫌言葉の事

一 主人より鷹拜領の次第の事

一 ゆがけと鞭と架にかけやうの事

一 あがけの鷹拵やうの事

一 巢鷹拵やうの事

一 胴氣の薬の事

一 鷹に虫のわく事

一 鼻氣なはいの薬の事

一 鷹餌うとむにくすりの事

一 羽かき鷹の事

一 惣而鷹の病見る事

一 餌袋に置餌を指事

一 鷹を取飼始る事

一 相木の構の事

一 諏訪の御前に鷹摩ぐ事

一 早中風の付たる鷹見様の事

一 惣薬の事

一 虫付うつ時飼薬の事

一 大風のくすりの事

一 身分の薬の事

一 餌うとむ薬の事

一 羽がきのくすりの事

一 寒夜の鷹のぬくめ鳥の事

一 大物に組する薬の事

一 毛かりと云事

一 鷹餌を押ぬを押さする薬の事

一 鶉野すかしの薬の事

一 鷹の足の裏の魚の目の薬の事

一 目わくの事

一 鷹使に主を忘れぬ薬の事

一 蒼鷹の餌袋に鳥を指事

一 弟鷹萬の鳥をうとむ事

一 あがけ山歸りを初心にて取飼時薬の事

- 一 鷹の大腰の事
- 一 疵ぐすりの事
- 一 鷹をさなき心有時の事
- 一 くれなるの水と云事
- 一 山中の藥の事
- 一 鷹の中風見様の事
- 一 胴打胴たけの藥の事
- 一 あがけ山歸りに常に可飼藥の事
- 一 下り氣の藥の事
- 一 鷹の烏喰様の事
- 一 萬病一藥の加減の事
- 一 鷹に胴氣と云事
- 一 鷹つめとをといふ事
- 一 胴たけの事
- 一 だうなりとて胸の内に聲有事
- 一 鼻氣と云病の事
- 一 はなやせと云事

一 しらみ落す藥の事

一 鷹の羽留りたるを三鳥草飼事

一 鷹に大禁物の事

一 日中居餌の事

一 弟切草の事

以上貳百七拾壹ヶ條

### 荒井流鷹之書

一 惣じて鷹の相形見様之事

鷹のはし丸く。黒髯短く。あをはしに肉有て。鼻の次せばく。くい入あさく。目の前あつし。亂地亂飛孝く。まびさし薄く頭丸く。目の前遠くうけがひくららず。首尾孝くかね付の毛ひねり上。首短くそり。ひ骨にしてひ骨薄く短し。羽前に寄て付き。七並に肉有て尾筒長く。尾性羽性やはらかにしてはゞ廣く羽筋細し。股ひさく付。かくたいせばく肘

より毛なし。はぎ長く骨太く。指短く爪大に。蜘蛛手に肉有てがなぎ荒し。取手は小取手の大取手也。目も小目の大目也。

一大鷲かをの鷹見様の事

此鷹必一曲有物也。藥には一芦毛馬の血。一芦毛馬の三ヶ月骨。一あいかけ。一大くち鴉頭。黒燒。等分にして半錢餌皮に包飼也。

一鷹に陰陽と云事

黒駿に骨太く毛厚く。亂地亂飛つよく。羽性能くい入深く鼻次廣く。まびさしかゝりたるを陰の鷹と云也。地白に赤駿。亂地亂飛よく。毛薄くくい入あさく。鼻次かいなく。ひ骨みぢかく。まびさしかゝらず。羽性かいなし。是を陽の鷹と云也。

一鷹の本來の事

鷹は是大日也。地藏菩薩化身共申也。鷹の姿は須彌の姿。再眼は日月。兩の羽節はこんた

い兩部の躰也。つむは七は七よりの星。十二の尾は十二神。尾の五の駿は地水火風空。亦五知の如來共がうす。二の足は不動毘沙門二天是也。四の指は地國多門增長廣目四天是也。惣じて毛の數に三世諸佛の御名有。歌云。

身寄より手なさき相の毛數社三世諸佛の御名は籠れり

去程に鷹は天を父とし地を母とす。女鳥をば右に縻。雄をば左に縻。故に蒼鷹をば末木に縻て。大緒を木先へ留る也。

一善鷹見様の事

黒背薄く。背にひ有之。青背に肉なし。鼻す廣。亂地亂飛薄く。くび入ふかく。まびさし深。かゝるさんめん深頭なりかどして。後頭ひらきてうけがいくり。首長毛うすにて。首高く付き。ひ骨長く同厚く。胸指出て羽後へ



(附歌)

寄て。付股高く付同太し。毛なし。鼻短指長。爪ちいさし。がんぎうつくしく。かつかうより蜘蛛手に肉なし。骨少細く。かくたい廣。小肘ひらきて尾筒詰り。尾性羽性毛性鶺鴒のごとし。尾助孝く亂し亂て。前後脇より見ても鷹孝く見へ。いづくにもかどのなきを吉とす。少も居のなりにゆくべし。頭にははんをいたゞき。亂地亂飛には銅の針を所々にすり立たるごとく岩穴におし。やうたいをつりたるがごとし。目の光村雲の中より明星の見ゆるがごとし。白目は水精の玉のごとし。前には小山をいだき。後には山川を流し。角舛には車を通し。亂しには糸を亂がごとし。目は髻先をまぼりほろ長く。七つ羽はつさを立たるがごとし。目は大目の小目也。取手は大取手の小取手也。是を善かたちとする也。

一人鷹に禮有を鞭にて禮を返す事

人禮有ば則馬手にて鞭をぬき。鞭車を使尾羽をかいつころう。是鷹よりの禮義也。亦坊主山伏禮するは向より手を出す也。能々心得べし。口傳有之。

一鷹を人前にてしづかに居事

鷹とはわせぬ様にあつかふべし。惣じて鷹を荒くあつかへば。主をうとみて肉かたく成故也。

一鷹狂事

拳を有程指出し。鷹に付てやり。鷹少たるみ候時。肘より引請て居る也。鶺鴒は四毛を先に目を付也。大鷹は取手に目を付べし。引様の心持はあい引にひかず。荒馬を鎖鋼にて磨たるごとく掛けて。懸とやる如也。

一耳かたくす問敷鷹の事

薬には一大鷹の頭。一女鶺鴒の羽。一からむし

の根。右黒焼等分にして餌皮に包て飼也。同方薬には一黒猫の頭。一鯨の骨。何もさめにておろす。一狐の尾先の毛。黒焼。是ハ鷹の様體によりきざミても。何も等分に合。日に半錢宛飼也。同方薬には一鶉の羽を黒焼にして。一甘草を合。ちしぜりの汁にて餌をしめし彼薬を飼也。

一新鷹仕入事附爪背拵事

先肉を高くし。扱なづけべきと思ふ時。白水をわかし。其中へふとからすの黒焼。茶半服程入煎じて。湯をぬるゝとして洗へし。上之人の不寄所にて。日に當身油をなでひきさすべし。其後雀を可飼。かい候て則構に繫べし。夜居の時迄すへ出べからず。夜居の時能口餌をかうべし。六七日も餌を不喰時もあり。一日餌を飼様。鷹少なづき脇を見たがる時可飼。又野鳥を見のぞきほしがる時口餌を可飼。常には飼べからず。鷹の機嫌次第

可飼。亦人を見牛馬犬などを見て狂そう成とき。能口餌をひかせゆきちがふべし。常に氣遣して鷹の心次第に飼べき事口傳有り。常に朝口餌に鴉の足を壹つ可飼。時によりて半分飼事有。置飼事あらば朝口餌を不飼。八つのさがりにぬ口を以置飼也。ぬ口と云は。生鳥をしめころさず。胸を明て血を鷹にねぶらせ。人に居させて一間二間の内にて置可飼。鷹の機嫌次第也。しめころし血のたらぬをばぬ口とは不言。血のたるを云也。扱爪背拵やうは。鷹なづき候て取飼候て。いかにもきれいに見能様にする也。新鷹の時指たる足皮をも其時又指かゆる也。爪拵やう口傳有。

一常に鷹を心に掛る事

肉高く共。鳥を見てほしがる時可合。若鳥なくば丸箸を可飼事肝要也。

# 一鷹を朝夕居事

我が朝夕居所にて。手の屈程に架を結て縻。立居に餌の口につかぬ様に水につけ。一切二切宛細々飼也。扱新心なくば能々吉日を見分。しやくの日を用て朝居夕居すべし。鷹なづきて装束をする也。其後人の出入しげき所にて。朝夕の事は不及申に。晝もしかと居也。夜を通す事有べからず。朝はくらきより居。夕居は其程をはからひて居也。夜晝共に飼を細々置。聲を掛可飼。鷹居なづかぬ間は。口餌を小節の近に見せ。とばいかゝらずばくれべからず。依其鷹心付次第に口餌にかゝる也。扱能かゝり候はゞ。脇よりほのかに見せて。掛り候時可飼。腰を見てかゝらば。其後口餌見せずして置。音を掛。袖斗うごかし。口餌を見す様にしかゝらせ口餌を飼也。其後は口飼斗にて脇へ出すやうにし

て。かゝる時は口餌を飼度に足皮を詰る也。又細々鞭水を飼也。扱取飼候間。髻爪をきよむる事本とす。若又しゝは引て鷹新くば。生鳥を飼事は本説也。其鳥を押しづめ切たて。ひやくと鷹の肉によりて飼也。鷹を三日延る也。必肉を引ば鷹荒く候。餌を夢々詰る事なし。此心持を第一にして取飼事本儀也。

## 一新鷹を夜居する事

鷹初而夜居の時は。必小豆の粥を出す也。口傳。

## 一鷹拳放間敷事附構に縻間敷事

新鷹をば餌を飼て架につなぐ事有べからず。餌をかい候てつなぎ候へば。鷹架心有て取飼ど野心付物也。故に餌を飼て押さる。先は構につなぐ事なし。外に居により病なし。歌に云く。

外にすゆる鷹に病はよもらじ薬はなき  
によき餌をぞかへ

### 一餌の積りの事

蒼鷹には雀七つ。雄には五つ。鶡には三つ。  
鶡雌鷹には貳つ。是は切かひの鷹の積り也。  
遺鷹に定べからず。是は片餌の飼様也。諸餌  
は右一倍也。つめ様は増川のごとく餌を可  
飼。ひらく鷹はひてりのゑかわのごとく可  
飼。口傳。

### 一總而の鷹を居次第の事

足皮をろくに爪を重るごとくに。時々足ぶ  
みをさせ鞭を持て居也。なりを直し尾をふ  
り直し。油斷なく尾のそゝげる所を鞭にて  
直べし。

### 一鷹をすへて人に見せ様並鞭當る事

先かほを見せ。手なさき身寄尾助を鞭をか  
い添見すべし。扱鞭當る事は蒼鷹には右の

肩崎より當初る也。雄には左の肩崎より當  
初る也。爪をも大鷹は右の打爪を上にするべ  
し。雄をば左の打爪を上にするべし。羽崎何れ  
の鷹も同前也。鞭の當數は口傳也。

### 一鷹は居て人の方へ行事

先門の地幅の本より鞭を手に持て門に入べ  
し。是は鷹の用心のため也。縁に上る時。鞭  
をば腰に指べし。縁の上にて鷹を能々かひ  
つくるひ居丸め伺公すべし。

### 一鷹匠を上へしやうずる事並鷹の容體見様の事

先内より鷹匠出て客鷹匠を座敷へしやう  
じ。請取には鷹の様體を能見定むべし。ゆが  
けをばさして影に持べし。必胸より尾助下  
りの毛。息にしたがつてはれ合くするは。  
病大事也と心得べし。兩の肩羽崎四毛へつと  
とく扣はずば。必知ぬ所に病有と心得べし。



能見定て鷹匠の前にいかにも靜に指寄。諸ひざをつき。一禮して少そばむき。ゆがけを指べし。其時鷹匠ゆがけより脚緒をほごし渡すべし。請取人右の手にて脚緒の先を請取定て。上下しきたい有べし。鷹の打爪の下へ人指ゆびを靜に指入て可請取。扱左の方へひらくべし。ひらきさまに左のひざを立て拳を持すべし。

一出入に氣つかふべき事

座敷に居所をも心を付。鷹の驚かざる様成所に居事肝要也。何時も狂度毎に立とゞまり鷹をひくべし。あゆみながら引事ふせつたり。又内をつきたる時立とゞまり。其内を見べし。見ざる事惡し。鷹匠は兵法遣と同じ如に万端氣を遣也。

一鷹請取渡し之事附猪の目の事

先鷹を渡さぬ以前に餌袋を請取。扱大緒を

請取。拳の下より居上。くるわぬ様にすべし。鞭をば鷹より後に請取也。御前に伺公して鷹を御目に懸る。左のひざをひらき。右をついて。鞭持候手を地に付て。細々鞭を當ず。御かを、時々見。御目の行所を引むけ引むけ御目に掛る也。御覽ぜられずば本のごとく居也。若口餌を飼候へと御説ならば可飼。左なくば飼事なかれ。いかにも意に入居事肝要也。扱擦げと有時。御前を立。構に向。本折の猪の目より小出緒を指出し見べし。よわきは引ぬきて逃る事有り。是に寄て猪の目なき本折にて擦べからず。

一鷹に添物有て鷹請取渡し之事

太刀其外何にても。鷹より先に請取可渡御狀扱は。鷹より後に可渡口傳有。

一鷹を渡してはやくゆがけをぬく事指掛ながら禮をする事無禮成べし。指掛ぬ

くべき隙なくば。指掛のたをひを返して禮をすべし。同鷹を請取。一禮して立べし。

一 餌袋を渡事附鞭渡事

先餌袋をば鷹に見せずして先に渡べし。餌袋へ入候鳥の頭を請取人の方へして渡也。鞭は鷹拳に有故後に渡す。渡様はひさ／＼はなを先へして渡也。請取て鷹の毛羽を直す也。當世は鞭當ず共くるしからず。いかにも靜にとばわせぬ様に居丸むべし。荒く當り候へば。おづるによりて耳かたく成也。心得べし。

一 新鷹請取様の事

則先新鷹の事。渡には脚緒を一筋打出す也。請取人指寄て。打出したる脚緒の先を取て。指掛の緒にとめて。扱殘の緒を禮敷し請取べし。但使鷹ならば打出したる脚緒を。後に請取人の心を見んがために。使鷹を新鷹に

渡す事も有。装束なくば新鷹と心得べし。装束有共取かわざる鷹かと問分て請取べし。

一 伏鷹請取様の事附籠鷹の事

伏鷹請取渡には居たる鷹のごとし。蒼鷹は我が右の方へ頭をして身寄を渡事も有り。雄をば左へ頭をして。手なさを渡す事も有。籠鷹をば貴人の御目に掛る時。籠に大子木あらば。大子を左の手にてきわを持。右の手にて末木を持。御目に掛べし。籠斗成共。居候鷹の様に籠をむけて御目に掛べし。

一 はた綱と云事

脚緒を一筋袖の内へ引入。はた帶に留る也。是は旅などにてころびたる時の用心也。馬上にても如斯常はなし。

一 座敷にて鷹居様并内板持て出様の事

御前にて鞭を常の如に不可遣。相うかゞひ遣べし。足ふみ杯も細々さすべからず。鷹を

第一に居丸ひべし。内板持様は鞭をぬき内板に持添。れきくの御前を通り。座敷の程を見むなあるべし。余り少片成は見ぐるし。座敷一ぱひに成様に居也。能心得べし。

一貴人兩人御座候時鷹居て出様の事

出ては鷹の頭を兩人の間へむけて御目に可掛。何れをわけがたく賞翫の心也。御一人の時は鷹をむかわせて御目に掛る。其後手なさを見する也。後をば御望により見せべし。鞭を當る事は前の方のごとく心得て。當ぬもくるしからず也。

一貴人へ鷹を渡し申事

貴人賞翫に思召。若大緒を先よりいんぎんに請取候はゞ。右の手に持候大緒を。貴人の御手の上を越て。我右の手にて貴人の御手を少指上る様にすべし。是は貴人の敬たる心也。

鷹敷座



一座敷へ出す鷹縻様の事  
人の所望あらば出すべき鷹つなぎ様。鎖たる大緒を架衣の後へ返して置也。かやうに縻たる鷹をば如斯心得べし。

一人望共出す間敷鷹の事  
鷹の縻様は。大緒をくさりて。構ぎぬのかけへいれて隠すべし。

一鷹に丸箸飼様の事

鴨杯をば物影よりなげ出し。いかにも近して先取飼べし。其にも心つかずば細々可飼。野鳥に取飼時。鳥をひやし。大鳥ならば雀三程。眞鴨ならば可取飼。若黒鴨ならばさしぬき血をひかせ。雀半分程可飼。其うちつき拂候以後土餌を可飼。又雁の丸箸を飼やう。いかにも羽たすき掛。羽動ぬ様に背をゆひ置。綱を付地をはゝせとらすべし。二度目に引上に可飼。能々肉を當。鷹のとりたる様に可飼也。どん成鷹には細々心付べし。りこん成鷹には細々かうべからず。雄隼このりに不寄。口傳に有之。

一鶴を丸ばしに飼様の事

背にくだを指。蜘蛛手に置綱を付。田にはわせて。功者成ものにひかせて。鷹合ぎわへ貳間斗に成たる時。眞鴨を指替へ。鶴の上にて可飼也。

飼也。

一あがけ山歸り取飼事

先新鷹の時口傳有。山歸に候とて。第一に爪ゆるす事大に嫌也。但短命の第一成べし。殊に内持をすかす事度々有べからず。つめ様は若鷹同前成べし。其いかんと云に。取分山がへりは十に入はつよくいれる物也。其故命よわき物也。然間若鷹よりも肉をかゝへて取飼也。いかにも取飼事本とす。扱雉子を一二合物也。鳥に取入ては。山歸に限て雁をうとむ事も有。然共鷹によりてすぐに雁に合事も有。

一鷹合様の事

自分の鷹ならば心次第に合べし。主人の鷹を預りては。主人の御拳を見。よわくばよわき様に。つよきはつよき様に。御拳の如に合也。貴人の御拳にて取候やうに仕入事肝要



也。

一鷹に經緒を指事

よわき鳥に合時。大鷹ならば置綱を指。鶇ならば太き經緒を指べし。大鷹はい鷹隼に不寄。野へ出る朝。ぬ口を可飼。其心少も不忘様に合すべし。

一鶇鷹野に犬入様の事

犬かい追鳥をなが聲にかけば。犬當りたると思ひ。聲をさざみ細にかけば。當らざると思ふべし。鷹匠寄鳥をたてよと聲を掛る也。又つかれの鳥をば。犬かい定のつかれと聲を掛ば。鳥見付たりと思ふべし。鷹匠手むき能ば立よと聲を掛べし。定の聲を掛けて鳥を立ざるは。犬かいのふかく也。歌に云く。

おう鳥もつかれもたつる犬飼のうちかい  
袋かろく見へけり

一犬の鈴付る時の事

九月九日より節分迄付る也。付事を掛ると云。又とる事をばはすと云。口傳也。

一犬の引綱の長さの事

馬上にて引綱は七ひろ也。歩行の時は此半分也。

一關の犬と云事並關の外の犬の事

關の犬と云は泊り犬也。關のとの犬と云はとまらぬ犬也。

一雁菱喰取たる時の事

はやく欠付羽組をすべし。是は鷹を打せ間敷ため也。鵠を取候時は。早く頭を後へ折て。羽組を組入べし。是は鷹をつかせざるため也。

一蒼鷹の雁をうとむ事附萬鳥うとむ事

弟鷹雁うとむは二目三目又は五日七目九目十六目也。是迄うとむ也。然間二目の鷹の事。是を能々つゝしむ也。扱鳥を能々えらみ

て合事也。初鴈をば其あへ能故に。前後をわ  
きまへず取也。然共二目の鴈をばこわきと  
思へども。にかたの鷹は必うとむ也。同取飼  
時はだへの毛を取るみく少宛取飼候へ  
ば。必鳥をうとまぬ物也。扱又油を取飼事嫌  
也。頓而居上床敷所あらば。毛吹て見分事本  
也。頓而かほへ水を吹居しづめ。鷹の振舞を  
見定。其養生をなす也。若又手をかへ候とて  
引切られ候て。鴈とび立候はゞ。鞭にて鴈を  
打とむる也。若鷹をくりて取事有ば其心  
得有べし。若其日取飼事なくば生鳥を飼也。  
生鳥なくば新敷鳥を作り。竹の筒を切て。上  
の皮を能けづり。其中へ餌を入。口をふさ  
ぎ。ふところに入させ飼也。自然鷹鴈に心を  
よせずば。なげ鳥をとらす事有り。其をと  
らずばくるま鴈たてゝ。田の高き所亦草な  
どはへ候所にてひかせ。細鶉杯を生て。鷹し

らぬ様に生鴈の様に飼也。扱次日合也。扱追  
立る鳥なくばとばせて見する也。若心有ば  
とらず共合て心づかせて。扱ちかき鴈を煮  
らび合事也。若亦内抔つかへ候て。鷹ねまり  
は心なき事も有べし。亦なづく様に見へて。  
荒く鳥心なきも可有。是を能々見分る也。

一鷹鳥を取ずして舞事

まわせぬ薬には一唐干米。一ひつじの米。一  
狸の黒焼。是等分にして半錢を三包にして  
飼也。其日舞事なし。同又薬には一かしわの  
鳥の風切羽黒焼にして。一芦毛馬の爪さめ  
にておろし。等分にして半錢飼也。同又薬に  
は一なまりを少粉にして飼也。

一鷹大き成物を取て其後うとむ事

薬に一ざぜん草根の黒焼。一鶯羽黒焼。等分  
に合調也。

一鷹鳥を取て放事附放し曲の事

急ぎ野より歸りて。大さいはい餌を飼也。藥には一うわふ黒燒。かしわの女鳥の肉に包半錢飼也。必取也。

一思返しの事

眞蛇の黒燒ナ飼也。亦藥に男女共に七日酒を禁じ。朝毎に檜の鉢に小便をさせて。其水そこに鹽の様にたまり候を取。甘草をさめておろし。是を合飼也。亦藥に一あいかけ。一まへびの肝。是合せ飼也。飼様は以前のどく也。

一急ぎ鷹を拵時の藥の事

芦毛馬の三ヶ月骨おろし。餌に包飼也。

一つよき鷹一夜に拵る事

一夜に拵とらする藥の事。一狐の骨。一猫のした。是を影干にしてさめておろし。等分にして半錢飼。大秘是也。

一鷹拳初に取飼事同鷹に取飼様の事

是は四佛を念じ。鳥を押しづめ。先三刀切立て三四取飼也。扱もぎながら爪をきよめ。同かほへ水を吹居しづる也。其後足をふみ又たぶるひをなす也。爰に大に口傳有り。

一人をおづる鷹の事並水雪をづる事

ひとをおちてとばしわんとせば。口餌をくわせ過さるべし。若口餌をも不喰ば。夜取る澤の水。こつぽの水を餌にしめし。金を少おろし。天南星是を餌に包かふ也。其後又餌を飼也。水雪をづるには。れいやうの爪を小便に一夜ひたし。其後取上。影干にしてさめておろし。常にかうべし。水をおづるは必餌かいを近く飼故也。又そゝろをふかざる鷹は必水をおづる也。又ひへたるも餌を飼候も水を嫌也。さりとつぽの水を野にて飼也。鵜の肝を影干にして常に飼也。雪をおづるは右藥飼は同前也。雪の上にて丸箸を取飼。雪

の上へひた物取組せて。そこにて心のまゝに六七度もくわすれば。おのれと雪をおぢぬ物也。口傳有り。

一 なつき候て新鷹の様成を使事

薬には一雉子の爪。同背を黒焼にして夕に飼て明日又飼也。夕鷹にげ候はゞ。夜の内に飼事也。大形なつき候はず共。一より二より迄は逃べからず。三寄とは合せぬ也

一新鷹の氣こわくなづかぬ事

左様の時はかみの虫を生ながら五つ餌かわに包かふ也。是大秘也。

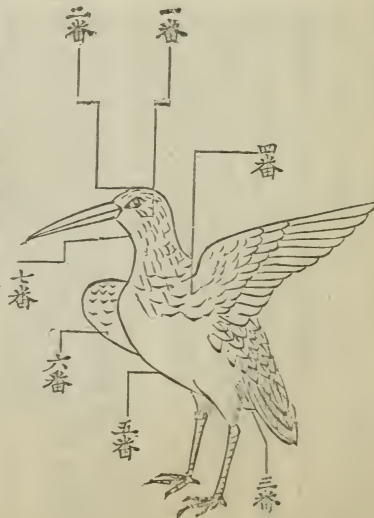
一 鳴取飼様の事

先一番目には左の目の下をかふべし。二目に取たるは右の目の下をかふべし。三目には左の股。四目に左の羽節の根。五目は右の股の根。六目は右の羽節。七目は頭と首の付ねを可飼。是は鷹に毒成によつて。油に鷹酔

候間。くわせ様大事と仕物也。  
鳴之飼様

一 青鷺夏くわせ様の事

雲雀三つ程切ぬき。つめたき水にて洗。油げなきやうにして。扱取たる青鷺の上にて可飼。丸などは少もかうべからず。糸をも押内をもつき洗たる時。常のごとくに常の餌を可飼也。





一 黒鴨くわせやうの事

余の鳥を指かへ取飼也。但余の鳥なくば。持候口餌を其上にて可飼。餌もなく新敷鳥もなくば。右の青鷺のごとく取飼也。青鷺よりも少飼也。

一 鷹のさげ曲なをす事

生鳥を持て三暮も四暮も能取飼也。

一 初て鳥取たる鷹の事

左様の時は鳥をしづめ羽組し。能々毛羽をひかせて。鷹に見せて取飼也。扱力餌をかふ也。薬はかしわ男鳥のひくの血を餌三切にしめしかふ也。必力つよくし。重而大物取てもあます事なし。

一 鷹ふきに逢事附取飼之野より歸る事

先食をさせ。其いさにて鷹をふかす心にして。薬にははこべのしんのはをもみて餌に包かふ也。

一同取飼て大緒指事

扱もがざる先に急ぎ大緒を指べし。其後もぎて居立べし。扱爪背を鞭にて拵。口をすゝがせ。たぶるいをさせ能々居丸むべし。野よりかへる事。大鷹には置綱を指て。ゆがけの緒にとめ。たもとに納べし。馬にても同事也。是は野より暮て歸る時の事他。

一 貴人の御前にて鷹に鳥をとらせたと云事  
何にてもとらせたと云言葉遣べからず。

御鷹取申たるとは申事也。

一 鳥心無鷹の事並取忘の鷹取飼事

黒猫の頭。にわ鳥男鳥の影干。何も粉にして等分に合飼也。亦取忘の薬。りろ村くもの黒焼。等分にしてかふ也。亦大鷹ならば男のうろ子。雄ならば女のうろ子を取て餌に包飼也。

一 鷹に歸り足緒と云事

是は足皮斗の鷹居て。鳥に合ざる時は。足かわを指に掛けて。足皮先を上へして手の内に持也。是も取逐間敷ため也。合時夢々さやうにすべからず。合時足皮先を引のべ。物にさわらぬ様に拵。拳よりするりとぬくる様にして可合也。

一鷹鳥を取たる時の事

鳥を取ながら鷹を居上。鷹匠に渡さば。先鳥の頭を取かへし。左の羽節を引のし。鳥の身をかへし。羽節の毛をひかせて。左の方を上にして。頭の方を鷹匠に渡すべし。

一鈴の指様の事同鈴あげ様の事

先鈴をば鷹に指と云。又はづす事をば上ると云。野にて鈴を指時は。大緒をとかぬ先に指也。上る事大緒を指て後上る也。

一鈴板付様並鈴板の寸法の事

上尾の鈴隠しの下に付る也。鈴板の寸法は

上の廣七分。脇の長一寸貳分。下の廣一寸一分。雄には一分おとりたるべし。鶉は此心得にて計べし。口傳。

一鷹草へ入かぬる事

薬には芦聲毛馬のあかを取て黒焼にして。露草のみ等分に合飼也。

一心能鷹を鷹に取飼事

先送り餌を飼。いかにもくらさ架に三日摩。幸はい餌を飼也。同組薬には芦毛馬の爪黒焼。銅をゝろし水添是を用也。是にて組事なくば。古き卒度婆をけづりて黒にして飼也。必是にて取。秘薬也。

一鷹に大物をとらせ度と思ふ事

薬には真蛭肝を影干にして。さめにておろし飼也。同飼様朝五つ比に餌をかへば七つ比に飼也。右の生肝取様は。頭と尾とをふまへ。腹をたゝせて。肝の上り下りを見て。腹

をかきさき取也。此藥を飼て。くらき構に  
縻。五つかい鷹のいれるを本と飼也。藥を飼  
て次の朝生雀を一口二口宛藥を飼間かふ  
也。黒鴨は鷹のために大に嫌也。内もつかゆ  
る。但五臓の腑に寄也。合せんとする時。鷹  
はうくとして可取氣色なくば。もみ雀を  
二口三口飼也。猶秘也。

一鷹に肉當る事附餌詰る事

先ひすいの毛を付。をい相の毛も付。目の前  
押こみえくけ太く成。鳥を見こむ時。縦口餌  
を見ても心に不入。鳥計情に入時。うき心と  
思ひ。經緒を指とき合べき也。

一肉色見様の事並内をすかす事

肉色黒紫色は惡し。つや能赤は吉。内をすか  
すには鹿のしだを影干にして。さめにてお  
ろし。一こもうつ木のめ。一かうじの葉を遠  
火に干。粉にして米程に丸し二粒かふべし。

亦法に夏角茯苓何も粉にして銅を少入合  
也。大鷹に耳かき三つ。雄に二つ。鴨に一つ  
可飼也。

一鷹つよく肉引たる時餌おさぬ事

藥には麻のみ粉にして。少甘草を入。耳かき  
一つ飼也。是にて必押也。又藥に白牡丹を餌  
皮に包飼也。同藥にはめうばんをふろし。耳  
かき二つ程飼也。かいて後は頓而口へ水を  
吹入る也。

一山忘藥の事

鷹によりて飼也。天南星の毒を取て影干に  
して。さめにてたろし。是を耳かき三つ餌皮  
に包飼也。扱毒の取やうは田水に入る也。

一女鳥を好鷹の事

男鳥を好ませ度ば。先男鳥見する事なし。扱  
め女計に向鳥をき鳥をへだてゝ。切はねの  
鳥是を本とす。能合場の鳥成共。引違て不取

様に合べき也。

一鷹暮にかゝりて取飼事

何の上にも有。左様の時は餌を夜中に押拂はせ度ば。鈴を上ずして其まゝ指べし。夜中に餌押拂て持越事なし。

一鷹肉に當りたる時を見様の事

鳥を能取たる時の肉を指にて能さぐり覺へ。又村をしたる時の肉積りを能々さぐり覺へて。村なき時の肉にする事專一也。

一鶴を取べき鷹のとらざる事

但あつかいに寄て取也。藥には土がまのはい。狐頭の黒焼。是を等分に合半錢飼也。但鷹の心をくせば。五はつ草。をけんこし。たんばん。等分に合飼也。

一菱喰に組藥の事

一鷹の眼。一生鯛の眼。一れい天かい。是を等分合飼也。必取也。餌をば夕に切餌に飼

也。同すかし餌には鴉を違餌に作り。雀一つ程先へかふ也。必内をつき拂也。つきて後は雲雀の黒焼飼也。

一人のあましたる鷹使やうの事

藥には夜取澤の水貳兩かい候て。其後大さいはいの餌を可飼也。一五はつ草。白物。れいやうの骨。是等分に合飼也。

一大鷹の雉子に取入鷹を不取事

三日の内に鷹に入る事は。先野折餌を雀七つ程飼事を本とす。一日一夜に肉上れば。其朝はからみ餌を作り飼事也。同ゑゆを細々飼也。同組藥。芦毛の馬の屎黒焼。鷹のすね。犬のべに肉。是等分に合飼也。若亦肉内はならば。なつなのみを粉にして。女のかみの毛黒焼。是を等分に合半錢飼也。

一蒼鷹使に犬聲掛る事

けふありやあう。此聲まぜく可掛。此聲



の心は鷹有鳥立。犬まわれと云心也。犬に掛聲大事是也。

一せこつへ寸尺の事

長五尺貳寸。又鷹匠の目通りに切べし。亦鷹匠の笠のはにも當がへ切也。春はきやうの木を本とす。山櫻の事也。狩つへは長三尺五寸に。木は椿也。

一同せこつへかたぬる事附山言葉の事

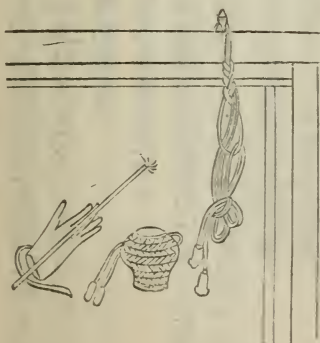
勢子つへかたぬる事。鷹のうせたる時かたぬる也。常に努々有べからず。山言葉と云は鷹の追たるをばつかれと云也。鷹の追はずに落たるをばまりと云。又落はまりとも云。又鷹匠せこ行つかずに立たるを留主立と云。男鳥落たる所へ。跡より女鳥の又落たるを娶鳥と云。女鳥の落し處へ男鳥の落たるを聳鳥と云。鷹鳥を草の中へ追込たるを。あなたこなたへ追廻すを草鳥と云。木に居掛

り候を木居を取と云。土にいたるを土鯉を助と云也。大せこの新鳥を追立候を半立と云。鳥をせこ見付ても。野にはなしと云を。扱は有と鷹匠心得べし。走り物かつら男といわば。うさぎと心得べし。唯走り物といはゞ狐の事也。澤下りにといはゞ狸としるべし。ほろくといはゞ雉子二つ有と知べし。

一野へ出る鷹にゆがけと鞭置様の事

ゆがけを縻たるたかの前に置。鞭を架なり

野出



に指掛の上に繪圖のごとく可置。如斯有ば  
其日野へ出ると心得べし。

一野すかしの事附足皮とく時事

藥にはかくれにしき黒焼。上野との粉。かみ  
のあか。うつ木のあまはだ。右等分に合。雀  
に包可飼。同藥に。春馬のたけりしたる下に  
生出るくさびら成共。又草成共取て黒焼に  
して。大黃。少女のかみのあか。是を合鳥の  
身に包。榎み程にして大鷹に五つ。雄に三  
つ。鶉に二つ。なる瀧の水にてしめし可飼  
也。並足皮とく時の歌の事。

歸り來む歸りこじとも云がたしさだめし  
事の定なければ

此歌は鷹の遡たる時。其鷹の大緒を持て歸  
り。遡たる鷹の架に大緒縻様に。歌を詠じて  
縻て置べし。必其鷹出る也。秘也。

一日ふさがりの事附嫌日の事

日ふさがりに野へ出ば。此歌を可詠也。

我が行にあきふさがりはなきものをわれ  
になびけよ日めぐりの神

鷹に嫌日の事と云は乙未。戊午。癸酉。此日  
鷹を人の方へも不出。我方へも不可取。野初  
にも嫌也。

一鷹にがしてしきふする事

人の上に何れ有共。其時は野より歸り。大緒  
にてきねの中程をくゝし鳥屋につるし。餌  
生板に餌ごうしをふせて。餌箸を置。扱心經  
を一巻よみ。同じゆもんを唱ふ。則じもんに  
云く。しゆ天てひたい釋。下には四大天王殊  
には諏訪住吉と七遍唱へ。其後山の神の歌  
を三遍よむ也。

うかふすのしめし折かけ干花はいくしほ  
たれて色をそむらん

是を大に可秘。能々口傳也。

一 貴人の先へ鷹居てあゆむ事

少拳を高くし。鷹の頭を我目の上へして。拳をだかせて抱へ。道一ぱいに居なす様にし。貴人を鷹の後にすべからず也。

一 鷹野にて貴人馬上御座に鷹上る事附足皮斗の事

貴人馬上にて脚緒とき給ふ間。脚緒の先馬の頭を打越て。右の鹽手の前にかんにんすべし。是は大緒とく時取はずす事有。大緒ながら直にあがり候へばからまる也。大切也。但貴人の儀に寄べし。足皮計にては脚皮短しとて。足皮の先を出す事尾籠なるべし。脚皮をえらさわへ取寄て。右の手にて足皮の先を小取返し間を渡すべし。人に寄上下の禮有べし。

一同馬上にて鷹請取事

弓の末筈を指出し置餌を置べし。其時鷹匠

置餌を弓の末筈の絃の間にはさみて。此置餌にて置可取。是は使鷹を鷹野にての事也。故に鷹野へは弓を持也。

一 鷹に口餌を飼事

すきたるにはきつたてを可飼。是は春可飼。冬うけかい下を可飼也。

一 鷹の置聲の沙汰の事

けう／＼と置也。聲數は雄大鷹の位に大小置分る也。間にありやと一聲置べし。さしはもけうの聲也。熊鷹わうの聲也。鶉けうの聲也。口傳。

一 置餌を渡事

又逃し取も置餌可指。然に置餌なくば餌袋の引緒をたがみて入請取渡べし。借し取にも如斯。是は昔せいらいしのび妻を持て。其宿に餌袋に置餌を指て置たりしを。夫のもうけのために彼置餌を肴に拵。夫を待所に。

夫不來してすぐに鷹野へ出るとて。餌袋取に人を遣し時。彼餌袋に一首の歌を書添ておくられけり。

軒端うつ眞白の鷹の餌袋に置餌もさゝて返しつるかな

此歌の心は我をのく心にてよらざりけるか。置餌をさゝて返す心くるしきと云心也。去程に置餌をさゝぬ餌袋をばしのび妻と申也。故に置餌なき餌袋は憚有事にて渡請取ぬ也。たかのつかれを捨て立のくをば軒端うつと云なり。其外鷹言葉は鷹百首條に有之。

一 貴人に餌袋付させ申事

後緒を一たかみ／＼て左に持て。鬼拳を右の手に持て。鞭のうで貫をおに小節の坪に指からみて可付也。

一 鷹客人の事附我が鷹と客鷹の事

鷹客人をば如何様成人居たり共。正座へ直するなり。我が鷹と人のたかとすへて座敷に居ならぶには。客人の鷹を我が鷹のたなさきの方に置すべし。

一 鷹あまた有時賞翫すべき鷹の事

先我が鷹を本木に縻て。人の鷹を末木に縻がせべし。乍去雄は本木たるべし。

一 構の陰陽の次第之事

架をゆふ事。半の月は半にゆふべし。調の月は調にゆふべし。半の月とは正三五七九霜月是也。調の月とは二四六八十極月是也。是陰陽也。

一 構のゆひ目の事

春夏は下へ秋冬は上に結び。つ敷を構衣に付るは。毛を面にすべし。毛先を木先へして可付。駿かわりの鷹には。毛を面にして。毛先を架に付て。さかさまに付べし。



一構の裏表の事

年の内は堅架より前に可結。春の初には堅架より外に結べし。是は春の初の事也。年を開心也。惣て内にゆふべし。

一若木の構の事附大鷹の架木の事

若木の架とは。鷹野にて春の初に末をきらずして結を若木と云也。笈木の架とは末を切て結ふべし。若木には若鷹。老木には鳥屋鷹可摩。口傳也。

一蒼鷹兄鷹摩べき事附鷹様の事

大鷹のくさはりは結て七下二合九。雄には詰て五下二合七。鸛鷹くさはり詰て三下二合五くさるゝ事。

一染分の事

大緒の鷹様。色々に五色に染分。春は赤く。夏は黄に。上やうに赤く。秋は白く。冬は黒し。是を上へからむべし。赤く青くは春秋は

赤を上にからむ也。若鷹は赤を本とすべし。一構寸尺の事附指架の寸尺の事

高四尺一寸。長七尺五寸。木はくぬ木を本とすべし。桐もくるしからず。余の木ならばわらにて竹の節に可結。々目は雄の架は半。蒼鷹のは調に。末木の方へ結目を下へしてゆふべし。折節何にても取あへず架にする事。末を手なささへすべし。架を手繩にてつゝむ事。大鷹の架をば右へまくべし。雄の架をば左へいかにも先へ巻べし。架の寸高三尺八寸八分。長六尺。だい架も如斯。雄には高三尺七寸七分也。又長九尺。高三尺八寸。雄には高四尺貳寸七分なり。

一大緒留る露の事並惣而鷹大緒寸尺事

春夏は下へ結留る也。秋冬は上へ留べし。大鷹の大緒は六尺八寸八分。雄は五尺七寸七分。左糸をふさの長短くするふさの長壹寸

五分たるべし。

一物而の架またぎの事

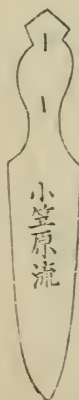
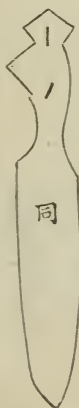
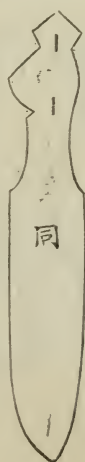
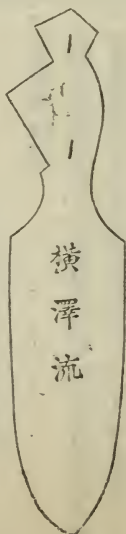
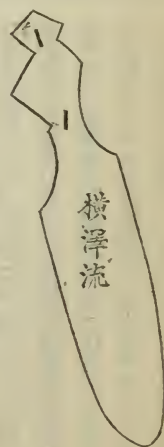
大鷹には三寸貳分。雄には二寸八分。打様は糸を七分に分て。毘沙門の眞言を打入る也。打様に口傳あり。

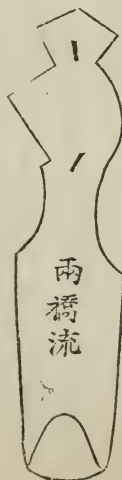
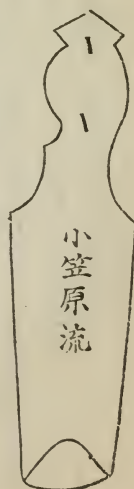
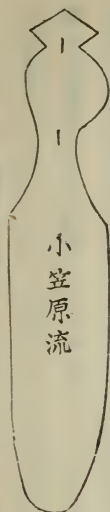
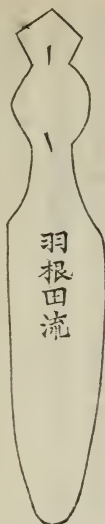
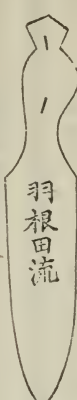
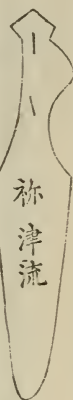
一小つちむすび様の事

大鷹のは手壹束一かけにする也。雄のは一束にする也。鶉のは是にて積也。結事は竹の節あわびむすびたるべし。

一惣而足皮の寸の事並切やう

大鷹の足皮八寸八分。はゞき一寸四分。但昔の寸は高しとて。二分をとりにする也。雄の足皮は以上七寸七分。はゞきは壹寸貳分。是も二分落しなり。使鷹はひいなかたのけて六寸六分。雄はひいなかたのけて五寸五分也。駁替の脚皮の縫やうは。常に五分高く可縫。紫皮を本とす。





一糸裝束の事

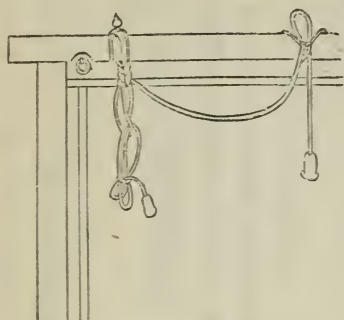
先を筆のごとくやにを以てかためべし。惣而先をはうちつめにすべし。若其鷹亂取をする事あらば。其時ねず緒の中を結て。鞭の先をそぎて。其上に蠟緒の先を當て切て亂すべし。蒼鷹に亂裝束は。亂取の鷹ならて有べからず。若人亂裝束を尋事あらば。鞭の先をそぎ目を見せべし。此上に亂裝束の鷹には。

鞭の先を一刀そぎて。そぎ目に横さまに刀目を一當して可持。口傳。但小鷹には亂裝束何時もくるしからず。

一白鷹縻鞭置様並鞭の寸の事

白鷹縻には大緒を一筋くさりさげべし。一筋をば本木に留べし。雄ならば末木に留べし。駁かわり赤鷹同事也。鷹縻て鞭を置事。

白鷹



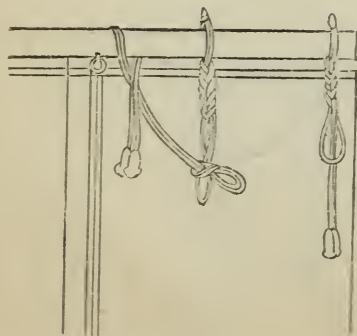
本木の方に架なりに。鞭の先を構なりに。末木の方へして可置也。鞭の寸尺は上分三尺八寸八分。中分貳尺八寸。下分一尺八寸八分。雄には壹寸壹分おとし也。小鷹鞭は三尺五寸也。

一泊鷹縻様並通り鷹縻様の事

宿にて泊らずして通るには。くさりたる坪

通り鷹

泊り鷹



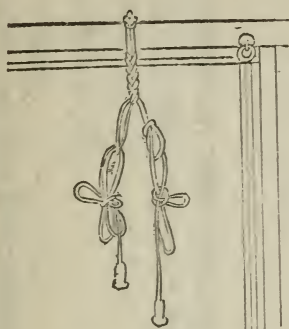


を引通し。大緒先を一つに結て置也。泊宿にてはつぽをとをさずして。大緒先を構に留る也。

一祝言の鷹縻様の事

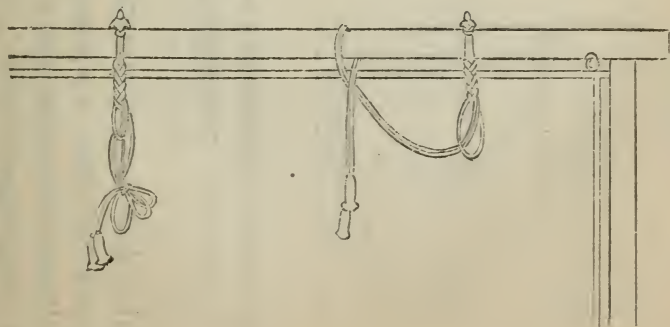
鷹つなぎて諸鎖の事。縻て架ぎわをばくき五鎖三くさりにも鎖て。大緒を二に分て。兩の手に持て別々留也。亦一にも留。是は客人兩人有時。鷹一を二に分て見する心也。

祝言



一構ひとつに鷹幾聰も有時縻様の事

境鷹

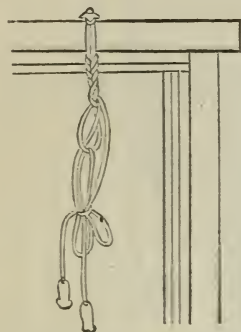


鷹をならべて。鷹匠餘して摩分のくには。我  
 摩たる鷹の本木の方に。大緒留る程のけて。  
 鞭の先を外へして可置。是は人のたかと我  
 が鷹の間を分る意也。

一鷹の位に寄構につなぎ様の事

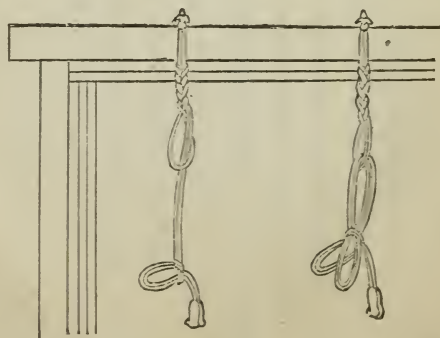
巢鷹は木先。あがけは本木に摩べし。烏屋鷹  
 は末木。山歸は本木。若鷹末木。烏屋鷹本木  
 に摩べし。但鷹のわざによつて有べし。此位  
 を能々心得て可摩者也。

巢鷹本

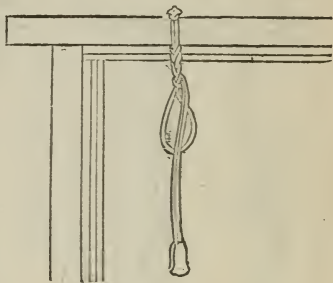


網掛鷹本

烏屋鷹本



山歸り鷹本



一 夜縻の事

構衣を取て。鷹をつなぎてくさりて。坪へ通さずして。二筋くさはなして可置。是は用心のため也。殊には外構に如斯也。

一 鷹の相かたちの事

黒背短くば目の前遠が吉也。背長ば目前近が吉。背も長目の前も遠ば使にくし。背短く目の前遠ければ。ましかをに似也。是も惡し。但心吉。又まびさしの掛り様。くいわれのもやうにより。うけがいくりたらば。へびかをに成。首長く付たる鷹は。ひ骨鷹の相應より少し短が吉。首短ばひ骨の長が吉。とつ尻詰り候が吉也。

一 鷹の六脉の事並無病の事附火を燈し見事

目の内毛の立様。内色。矢筈。内の持様。目の色。目よりの如くうれい毛を可立。是を六脉と云也。亦身の毛の立様は。夜水吹て片影よ

り忍て見。痛たる所をば色を遅く立べし。同付る事もおそかるべし。内色は替べし。痛たる鷹はたふるいなく。いかにも身引をすべし。無病成鷹の矢筈は。餌を持たる時は少開き。不持時はひらかず取覺へべし。又痛たる時は矢筈開き。亦たけのおとりたらば。やはすくいつめ少もあかず候へばたけと心得べし。又内の持様は無病成鷹はいかにもひ骨先に堅く高かるべし。身寄を痛候へば。手先へ寄て持べし。手先を痛候はゞ身寄へよせべし。かみのちち黒焼。栗木皮の黒焼。猪皮黒焼。熊の骨黒焼。人參。甘草。右何も等分に合飼時。朝に一包。晝五包。晩に三包。一包にくじら虫を生きながら一つづゝ入て可飼。能々念を入れて。鷹のしらざる様に可飼。同療治。いかにもやはらか成物を以て伏衣を縫。肩寄羽<sup>肩イ</sup>先のちがわぬやうに。羽裏にてぬい



合て。かやの中にはなし置也。其ふせ衣の上より青からしをすりて。火の中にむして。痛たる羽をそろく<sup>く</sup>とむすべし。二日に一度むす也。治候へばふせ衣を鷹くいやぶる也。其をあいづに伏衣をはづすべし。同療治に。土穴を三尺に堀て。一尺五寸にして五木をたき。吉酒を三ひさけ程掛。しきみの葉を是へ入て。彼ほのをゝ能ふかせて。あをのけに置いて引のべ。次目を直して一日ふせて置也。其暮につめ鳥屋を作りて。はたらかぬ様にして可飼。二七日過て取出すべし。五木とは桑。藤こぶ。桃。いな木。にわと子。是を云也。羽がき鷹にはぬり桶のかわをすみに焼。<sup>(心肝)</sup>甘草。桂肉。栴榔子。山すげのみ。藤こぶ。せりの根。み山笹。わうばこ。桑木。これ等を能々煎じ餌に付て可飼也。羽かきたるをば則引直し。三火あたゝめよ。同亦藥に猪皮

黒焼。古き桶皮と草の節七つ。栗木のはい。かきのから。鯨虫生ながら。右七色等分に合。其内がきから藥より一ばい入べし。七日に可飼。朝七つ。晝五つ。晩に三つ。同かため藥。熊の骨黒焼。人參。右二色等分。飼様如前。二日飼也。

一股引藥の事 附疵藥の事

股痛候鷹は。身寄を痛ば手なさき羽を少持こぼす也。藥には鼠屎。猪油。等分に合。緩々とときて。股の内のさわに付よ。同股しみの藥。かいとうりをすりてうるみ候處に付よ。藥上むすべし。同亦藥万病一藥。熊骨黒焼を三分一入。七五三に可飼。同付藥鼠屎猪油にて。是はあたゝかにして股ねへ付べし。同藥。熊骨黒焼。袖のさね黒焼。土龍黒焼。りうこ錢。何も等分。右能より合可飼。其時のみ虫を一つ宛入て可飼。餌のかいやう。羽がき

の如に七五三に飼也。同亦藥には山の芋を  
すりて。其中へなべすみを少入て。土りう黒  
焼少すり合。あたゝめて内股に付。其上杉原  
をもみて付る也。并疵藥。天南星。香附子。是  
二色等分にして。そくゐにてねやして。はこ  
べの汁にてゆるくときて。疵口に入よ。其  
上むす也。いさりの藥。土りうの黒焼。かも  
しゝの角の粉。鹿の角黒焼。あをさしゝの黒  
焼。是を杉のやにて等分にねり合付。其上  
に紙を張付て置べし。疵藥。しゝの角。かわ  
らけの中へ入て。こはこべの汁をもみ入べ  
し。七度入可焼。其へ土りうの黒焼三分一程  
入べし。

### 一足氣の藥の事附羽虫の藥の事

足の腫たるには。天南星水にかわにてとき  
て細々付べし。是にて治らずば。かきの黒  
焼。小豆の粉。釜の土のやけたると梅干の黒

焼。栗の木のすみ。ぢしばり草もみ出し。能  
酢にて合て。そくゐに押まぜ。右藥等分に合  
付。上を紙にてはる也。亦足腫候はゞ。鹽魚  
のときを指の股へさし。其上を灸して鳥屋  
へ入べし。并羽みその藥の事。さわたの粉。  
白物二朱。右二色合。いかにも羽をたてゝ。  
其上に藥をぬり。熊のゐにてとき付候て。其  
上を銅を焼。鷹の覺へる程やき。其上に藥を  
付べし。羽虫の藥。たんぱん少。ゆわう少。白  
物少。右三色熊のゐにてときてあたりへぬ  
り可付。是に朱少加る。根虫の療治。熊のゐ。  
夏子の屎。ふたん香の油。鹽。是等を合。羽み  
その見様。羽節の色赤く成。しるたり候は  
ゞ。うへの養生までにて吉。羽節の色かわら  
ず羽亂れ。羽虫のごとく肉の内より羽ぐさ  
をれ候はゞ。胴より出る羽みそ也。胴の内よ  
り藥飼べし。羽虫の藥の事。たくらくるみの

木の皮。桐皮。桃木皮。是を小便にひたして。羽の根へ四五日ぬる也。

一 爪ぬけたる時の藥并かうかと云病事

ぬけたる爪あらば指べし。それなくばつくり成共鴉成共爪を抜て指べし。此藥にはかたつぶりの黒燒。かもしゝの骨の粉。さりん血。虎の爪の黒燒。右等分杉のやにてとぎ付べし。其上をゆやなぎの皮にて包むべし。かうかと云病の事。眼の内より目のごとくうれい毛を立。餌持より上息荒く。鷹身をほそり。しゝ色赤く。肉かたく。内色はひの臓に病の有ごとく赤くあわ立。矢筈ひらき脉早し。内詰て持也。藥にはりうのふ。一朱。茯苓。一朱。くわつろうこん。朱中。ひつち米。朱中。ちんかう。一朱。のすり鹽。朱中。ふくりうかん。朱中。れいてんかい。一朱。金箔。一枚。右粉にして餌に包み。七五三に可飼。水には藥

水にて可飼也。

一 尾羽をい留りたるを出す藥の事

羽の留りたるを出には。かいこの紙にひり付たるを取て。羽ぐきのぬけ候處へ一つ入て。其上に紙を張付て。不出様にして置べし。羽ぐき落す藥。羽ぐきを切て。其中へかみのしらみを一つ二つ三つ死ぬ様にかみちちを入。其上に杉にても檜にてもつめを打べし。鷹の羽をい留り候には。夏子のたねを桑のわか生を三にわりて。子たねを一粒はさみ。檜木の釘にぬてを付て指べし。又尾羽を引ぬき候を頓て入る。藥しやれかうべを粉にして白物を合。かつほ草をもみ。其汁にて此藥をとき合。羽の根にぬり。木の穴へ入候て。糸にてゆひ付て可置也。

一 煙ながしの藥の事

目にあわ出。鼻より水のたる事有。ところを

さざみ。水にて出し。細々かほにふき。其後ひき餌をさせ。夏子のつばめの黒焼。人參をまぜおろし。等分に合。かうがいの耳二つ可飼。

一口の内に吹き物の藥の事附かうねつの病事口に出き物有ば。黃連おろし。めうばん少。人參少。右雀の血にて丸藥にして。榎み程にして衣に包。水ごきをせぬかみよりにて口を割。其に結付。一夜壓可置。餌もぎ候には不可飼。かうねつの病はむな餌をはみ。うれい毛を立。目の色うすく。内にはあわ立。いかにも息はやく矢筈ひらき。身の肉赤く内持やわらか也。

一三なん一藥の事附し(た餌)さり氣の事

三なんはいかにも赤き犬の頭。亦是きも尾別々に焼て三つにして。氣がいなき鷹には。頭と肝をすごして尾を少入て。鴉の渡らぬ

先に飼つかふべし。下り氣の藥。くるみのかうの中へはつ一粒宛入。黒焼にして能やけ候時分。こはこべの汁を能もみ入取上て。雀の身所に押丸めて可飼。

一取草の事

大はこべ。湯柳。いのこつち。にわとこの木。つるはこべ。杉の葉。ぐみの木。鹽俵。酒のかす。

一早風見様の事并藥の事

鷹ふるい。目の色うすく。うれい毛を立。眼泪ぐみかわき。身の毛を立。やはすひらき。内色青し。うちひらいてどうの内よわくつくべし。内よわく持いるゝ也。藥には檳榔子。萬病一藥。金箔。沉香。せみの黒焼。人參。甘草。右等分合。雀の身に包可飼也。

一小風見様の事并餌違見様附藥事



肉赤く。はしかわき。身の毛ちぢみ。ひすいの毛を立。目こく内をさげ。矢筈くいづめ息はやし。餌違の見様は。鷹かほはれ。よだれをたれ。腰拔息くさし。脉ひらきくろ内みだれ。持たる内手に當らず。薬には栴椰子のこ。かつほの黒焼。梨子さね黒焼。金

薄。みそはぎ黒焼にして。何も等分飼。水にはくれ水にて餌をしめし可飼。其中にも金薄をすぐすべし。かつほの子三分一入。亦人參も可入。そふ水にてせりをもみ出し。ふち水細々可飼。一薬に雀の身にて包。縦餌を打共。薬のほぐるゝ如くに包。細々可飼。亦鹽けを喰たる鷹も。餌違の見様も。鷹すくみて鼻よりたる水白くして鷹ふるふべし。酒氣も同事。右の薬。土くれ。鳩黒焼加ふべし。亦薬にくづ。あんにん。百草等分に合て。餌皮に包可飼。あんにんをばういすにして取上

て押合べし。亦薬。串鼠をさめにておろし。ほそのを粉にして。かうがいの耳三斗口へ入。みつなをもみ汁を口へしぼり入べし。惣身へも吹掛べし。砂の上へ水を打。其上に鷹を可置也。亦薬に干鰓黒焼。ほそのを。土りう黒焼。梨子のさね。鷹の頭の黒焼。茯苓。かんな生。をんじやくかう。ひやくし。栴椰子。何も飼。汁は三節の水。是は竹の切目の水也。亦薬に。七月佛に水を向たるみそはぎの花黒焼。一朱。干鰓黒焼。一朱。栴椰子。一朱。ありのみものさね黒焼。一朱。たうのわうの丸肝とは。人の尿の野にされたるを黒焼也。茯苓。一朱。せりの粉。一朱。萬病一薬。一朱。萬病一薬とは人の舌をぬき影干にして。さめにておろし薬に加へ。金薄。十枚。銀薄はいか程も可入也。口傳多し。餌違の見様。内をたらくゝとつき。腰ぬけかほ腫よだれたる也。又

目を見出したるは療治にかゝわらず。并餌水の事。田のくれ水を汲寄て。其中へ人參。甘草。枳椰子等分につきざみ入也。せりの汁をもみ入る也。餌を喰ずば。右の餌違の藥を鳥の身にて丸口をわり。其中へ右丸藥を入れて。かい汁を中へ絞り入也。鷹の置様は。土の上にかにもひゆる所に可置。夜も風の當る所に雨の當らぬ様に置べし。口傳。

一鹽氣酒氣を喰たる鷹の事

鹽氣酒氣を喰たる鷹すくみ。はし白成べし。豚は餌違のごとく也。

一だうけの見様の事附藥の事

だうけは矢筈くいつめ内さけ候て。持四毛を立。鷹指うつむき。餌押かいなく。色黒く内たけちかし。同だうけの見様。矢筈ひらき。内持やわらかに息少見へ。内色あしく打さしてうちたけちかし。同藥には人參。一

兩。甘草。一分。茯苓。一分。かんしつ。少。熊笹の葉。一葉。大ばこ。廿二葉。つばめの左の羽節。一ツ。同藥に人參。萬病一藥。きりん血。右等分に合七五三に。同藥。枳椰子。人參。きりん血。せりの粉。銅せんくづ。金薄。かき。甘草。右八色等分。其内人參金薄多く可入。亦銅せんくづ入口傳。

一鼻毛の事并うちたけの事

鼻たけの病。煙を喰故也。あかりしやうじ七重へだて。火をたくべしと云り。鼻たけの藥には大根の先を細くけづりて。はなの穴へ入。はなすをくるべし。芦のすを以鼻に當。中成のろを吹出すべし。夜々架に磨べし。又目の前まきめさらすべし。又鷹の口を明て見ば。内より外のすのとをり。さかひ貳つ有を。くわしんにてあたゝめて。たかなのはをもみ口へ入べし。丁子をも吹入べし。同

藥には丁子せきしやうの根粉にして等分。油を口から鼻の穴へ入。外の穴よりもかみの油を入べし。其後藥吹入べし。其後くはしく目の前の左右を可焼。鼻つまりたらば。も草にて七火八火可焼。同藥にんにくをすりて。朱の粉を衣にして小豆ほどに丸。日に三粒宛餌にまぜて可飼。蒼鷹には五粒可飼なり。并内たけの事見様。脉ひらき内持あがりやわらかに。持内たけちかく。うれい毛を立て鷹少そる也。

一 せこと云病見様事

見様は身の肉やせ落。指の肉こけ。色黒毛こわく成。矢筈くいつめ内持やわらかに鷹ふる也。

一 鷹の中風の事

俄に腰すくみて。腰なへ目の色うすく。矢筈くひつめ。内持さけて持内色青し。

一 胴より出る足氣の事

すねのうちかたに筋有べし。矢筈ひらき。内持かいなく持也。但歌に云く。

あふあしをこゝしをならずとがならず胴より出るむらさきの糸

一 毛かりと云病の事並藥の事

毛をかり落毛かれと云は。をのれと毛のしべかれ落。羽筋殘脉開きて鷹熱し内色青し。藥には熊のぬ。白物。大へきおろし。はこべの汁にてとき。くい切候羽ぐきをぬき捨。間々に打はりをして。右の藥細々可付也。同毛かはりの藥。生子のへその緒。へびの衣黒焼。せみのぬけがら黒焼にして。女のかみのおち黒にして。栗のいが黒にして等分に。だいならばかうがいの耳に七ツ。雄には女子のへそのを。(雄雌)第ならば男の吉也。

一 わく毛と云病の事并藥の事

わく毛は背黒髭にしてこふく成。藥に沈香。朱紙。白物少。右三色粉にして鷹のかほに當らぬ様にして煙に當べし。

一ふわと云病の事并藥の事

身と皮の間ふくれ。矢筈くいつめ内持やわらかに。目の色黒。目のさわこく成て。ひすいの毛を立るなり。亦見様。身の皮ふくれ。かいるの歌袋の様になる也。物縫針に糸を付て。糸にさわたの粉を付て可引通。

一ふわけと云病の事

身の肉はれ。つぶし候へばあわ出。ふわにはあわ出でず。風斗出る。ふわけはあわ黄色にして。つぶし候へば跡ひかず。目色うすく。うれい毛を立。たぶるいせず。矢筈ひらき内持開き鷹(か鷹)いそる也。内色青し。是はひへと可心掛。ふわは熱也。ふわくの藥。あせん藥。さわだ。熊のゐ。是こはこべの汁にとさつ

ぶして以後可付。はり口を張。

一目分けと云病の事并藥の事

口の内にけしの様成物出來。舌され息くさくうれい毛を立。息相しづかに。矢筈かたかた斗うごき。一方ははたらかず。鷹少けるわす。時々あくびをして。内色けぶりを喰たる如に肉かたく。朝はふるうべし。藥には人參。つばめ黒にして。甘草。板椰子。れい天がい。土りう黒にして。先土りうの黒を先にふさこみ。其後右の藥可飼也。

一目わくと云病の事

目の前腫。とばい候時。目の前より淡出て。時々さやくと云。矢筈ひらき内持やわらかに肉色黒し。是は烟を喰候鷹のごとく。肉色も同事。四毛を立て。たぶるいする様に身の毛を立たぶるひせず。藥にはなまところをさざみ。其中へせさしやう。りうのふ。少。



ぢやかう。少。右水に出し吹べし。又はぢかみをすりて。水氣のなき物にてときて。かたさにぬるべし。扱まばにあわふくれたらば。かたひるに鹽をつけてまばに可指。すきたうすも吉。

一はしり火の病の事并藥の事

目の前ふくれ。身の毛先ちゞみ。觜爪かわさ。身肉赤く成。矢筈常よりしづみてつく。うち黄にして。持内も手に當らず。そゝろを上る時。先さに水をあぐる也。藥には沉香。大黃。かんしつ。金薄。せりの粉。萬病一藥。右等分に合て。すゞめの身に包て可飼也。

一胸打たる鷹の事

手先を痛候へば。身寄へかたぎ矢筈手崎うごかず。内持も手崎をのけて。身寄へよせて持なり。身寄を痛たるも同事也。

一そりと云病の事并藥の事

鷹あをのき尾をそらし。内を前へ足にかゝるごとくにつき。矢筈手に當らずして。目の色こく成。うれい毛を立べし。

せりの粉。銀薄。一枚。萬病一藥。人參。きりん血。くわつろうこん。甘草。ふわう。かんうち。

右雀の身に包。七五三に可飼。

一身痛たる鷹構にすゆる事

身寄を痛たらば手崎の方をひびむべし。手崎を痛たらば身寄へひびむべし。別足は同事也。

一目の内の病の事附つきめの藥の事

目打藥には墓黒にして。大鷹ならば男子のむちにてときて。雄ならば女子のむちにてときて。痛鷹の羽つむしにぬるなり。又熊のゐをも同物にてときて可付也。つき目打日

の藥の事。はんせき。一兩。土りう黒にして。二分。ぢやかう。一朱。能々すり合。くだにて吹入べし。同目つきたる藥。りうのふ。少。熊のゐ。しやかう。少。女のちゝにてとき。羽つむしに付べし。同亦藥には鳥をこそげ。はづにねやして酢にてとき目に入よ。但少こがるゝ程加様にする也。

一尾をしげくひろげる事

是は鷹のと尻つきたる也と心得べし。

一鷹の蜘蛛に病の有事

蜘蛛の裏あたゝかなるは其方に病有。兩方のあたゝか成は内有と心得べし。同魚の目の事。魚の目を焼候て三日計過して。魚の目をぬき。其上を銅のくわしんにて少當べし。同疵藥には大根をおろして。汁にて疵を洗て。天南星をおろして。疵の上にひねりかけよ大事の疵ならば。伏候て鞭の先にて洗。是

も大根の汁にて洗也。扱藥付けべし。

一草替と云煩。背の根の毛を立て血尿を可立。藥は紫竹の節をこそげて。はじかみ。甘草。是を粉にして等分。大鷹に小豆ほど三粒。雄には二粒。また山鳥のかつを肉。蟬の影干。小鳥のかつほ肉粉にして等分飼。

一鷹を舞はせぬ藥の事

眞虫の生肝影干にして。もろこしの皮をむかずして。宵より酒にひたし。朝取上てかわかして粉にして餌に付可飼。大鷹には小豆程にして三粒也。雄には二粒。鵲には一粒半可飼。雀鷄には鵲程餌也。其後七日此藥かうまじき也。

一胸氣の藥。甘草。人參。茯苓。はこべ黒にして。をばこの黒。沉香。しゆく地黄。黒ぢやかう少加る。是を飼なり。

一鷹息荒き事并胸餌を押事

息の鷹には川芎。人參。夏角。是等分に  
して飼也。亦藥。舌を出し息荒き鷹に。生子の  
かに尿。あをかいに合飼也。亦息氣に白牡  
丹黑にして。柚のさね。川芎。てらつゝきの  
贅。是を等分に合。鳥の身に押合三包かうべ  
し。常に兩に當べし。亦桑の生木を燒。息に  
當てふかすべし。常々此養生すれば病おこ  
らず。并胸餌を重くはむ事も。心むづけたる  
と心得べし。

一血虫藥の事附から子さんの事

血虫の藥には栗木の黑にして。一兩。けんこ  
し。二分。白物。半錢。人參。一兩。甘草。一分。せん  
大黃。一分。是を調合して可飼也。并から子散  
と云藥。猿のうを取て板に付干。一兩。人  
參。一兩。甘草。三分。雀の黑。三分。さりん血。三  
分。虎肉。一分。鴉頭黑。一分。沉香。一分。ひつぢ  
米。二分。からす瓜根。一分。大黃。二朱。れい天

かい。三朱。せみの黑。二朱。有のみ黑。二朱。し  
やうべん。二朱。万病一藥。三朱。せりの粉。一  
朱。茯苓かん。二兩。たうき。朱中。土りう黑。一  
朱。かき黑。一朱。串柿さね。一分。金薄。五枚。銀  
薄。五枚。ほわう。一分。かんかち。三分。沉香黑。  
朱中。鯉黑。朱中。以上。

右いかにも粉にして。其以後能煎じ。こわう  
ゑん程にねりて。なづけべきと思ふ時に。口  
餌に細々可飼。居事惡し。能口餌の有時に。  
鷹の機嫌を見て。拳にまだい度と思ふ様に  
して擦べし。氣の重き鷹には五八草少。たう  
の王の生肝等分に合加へ可飼。餌かさを飼。  
外構に擦べし。大き成鳥を取たる時取飼様。  
ひ骨崎可飼。羽節の根は不可飼。又喰度と思  
ふ様は丸さきをかい。宿へ歸りて増餌をか  
い候様に。あちない様に可飼。三邊一ツ藥。  
いかにも赤き犬の肝をば肝。又頭をば頭。尾

をば尾と別々に焼て。物をとらすべきと思ふ鷹には。いかにも肉を當。大成物に合べきと思ふ朝。鴉の渡らぬ先に。雀の身にて可飼。たうの王の生肝加へて可飼。

一内の見様の事

此内吉也



此内は先胸を痛たる内とす。薬には万病一薬。金薄。人參。少。きりん血。少。せりの粉。少。是合可飼也。此内はたけのおへたる鷹つくべし。

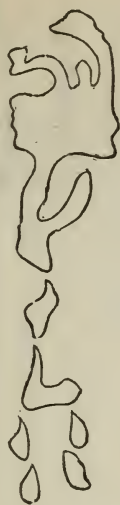


此内はたけのおへたる鷹つくなり。薬には澤蟹の影ぼし粉にして。かた鹽をぐみのさねと右合。またゝびのつるを煎じ。其汁にて餌をしめして飼べきなり。

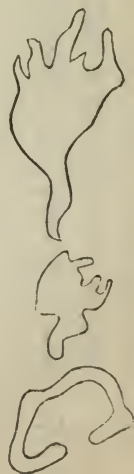




此内はひの臓の煩。又胴を打候鷹の内色如斯。藥には金薄。甘草。銅のせんくづ。柢榔子粉。かきの黒。人參。大黃合飼。



此内は煙を喰候内色。亦是惡餌を喰候内色如斯。藥には夏子のつばめ黒にして。金薄。柢榔子。等分飼。水田のそふ水にて可飼。



此内は惣の臓に煩有鷹如斯内つく也。藥には人參。甘草。りうちせん。銀のせんくづ。かろうち。右等分にして可飼。息荒くさうがう惡敷は藥不可飼。但見切事大事也。

併内をかすかす藥の事。源氏の薄霜。うつ木の青はだ。かみのあか。かうつけとのこ。少。さいかじの青はだ。茯苓。少。右等分に合可飼。併内をすかす藥の事。茯苓を能茶に合。餌に包飼也。

一古うちつかする事

荳の油を芦のすにて尻に吹いるゝ也。

一萬病一藥の事

少人の舌を切て能水にて洗。細くたちわり。人參。甘草。せり。くれ水にても出し。檳榔子入て此水に掛。七度ひたし。其後影干にして細にして。飼時人參甘草を加へ。見しらざる病に其まゝ飼也。同萬病一藥。雀かくれのあさ。芦毛馬の血にしめしほし候。又山澤架にも萬病藥也。

一内もちつきたる時の藥の事

茯苓かん。少。かんうち。少。金薄。さりん血。くわつろうこん。せりの粉。人參。甘草。右何も等分に可飼也。

一骨續の藥の事并あされの藥の事

先骨次には熊の骨黒にして。しゝの角のねさめにておろす。古桶かわ黒にして。かみのしらみ生て。右の四色雀の身に包。細々可

飼。かい水には女の指合の血あらわて可飼。をれ候上を湯柳の皮にてくつろがぬ様にし。てもしゝの角を粉にして細々可付。大形付たる時。取草にてゆて可洗。此取草此書物の内に記す者也。同骨續。りうこぜに。芦毛馬の爪。くわん草。是を粉にして合付。檜にてはさみ湯柳にて卷也。同骨續かた。貝がらを黒にして。熊のゐにをしませ。かいとをりをもみ。其にくるみて卷候上をも湯柳をもまく也。并あされの事。藥にはとつ手はれたるにはかんすい石。こもうつ木のもへ。からむしの根黒。猫の頭。是を黒にして能酢にて合付べし。酢無ばはこべの汁にても。又足氣にはたこのふをときて可付也。同亦天南星粉にして猪の油に押ませ付て。上にかねを少當よ。亦松やにゝ雉子の油を押合付る。是もかねを當よ。口傳。

## 一鷹に餌をうたする藥の事

馬の尾にて口をわりて置べし。亦せりの藥をもみても可飼。

## 一手さき打たる鷹の事并後打候鷹の事

手さき打候鷹は。架に縻見るに。幾度も打候方の手袋を引べし。又ふくら毛を立て。痛方へまかりていべし。或は打たる方の目をしげく見る也。料治にはそくせん穴を灸すべし。身寄の方も如斯也。亦後の筒を打たるは。尾たゝみをよわく。尾を重くあつかいて。鈴ふりをする也。又しとゞ毛を立へずして。頭を常にさげて。目をかけてねむる也。料治にはようせうの穴を灸すべし。

## 一をへ物の有鷹見様の事

構にいる時曲てゐる也。押直して見るに。又は磯はみなどして更にすぐにいざるはをへ物有と知べし。身寄の方に有はみよりへそ

ばみ。手崎に有は手さきへそばむ也。又内を持て知事有。是も口傳なくては心へがたけれ共大形記也。内に當りて見るに。ひ骨のはづれより四方へかたく平にして。板杯に當る様成はをへ物有としるべし。内をつくにねばりて幾度にもつきゝらば惡也。

## 一身を打たる鷹見様の事

そゝろに身の毛を立。肉は有ながら更に病たる鷹の様に見へて。目の見返しことにすぐれたり。又新鷹なれ共。俄靜に成とばう事なし。筒にても頭にても打て病所の毛を立る也。又身引をするに二の躰有。身を痛てする身引は俄にをどろく如し。又新鷹のつよくとばいて後にする身引は唯常の如し。心を能々靜て見べし。

## 一餌をはやく押さずる事

餌をはやく押さずる事。鷹の口に一せん許

入て。ぬるみ湯を可飼。亦餌に包ても可飼也。又藥。生成麻のそひを取。其下成皮を餌に包餌也。

一 けつしたる鷹の事

料治にはかみの油をくくみ。よしのすを以て吹入よ。余りつよく尻にふかぬ物也。卒度くく吹物也。

一 いれ藥の事

たかなの葉の錢の大さ成をあぶりもみて。舌をかき添。うすきえかわに包飼也。又まりこの葉をもみて一ぺん飼。つよくいれらかすには。かきの上の有すゝをかうがいの耳一斗飼也。是は生鳥用意なくば鷹の命有間敷候。生鳥を可持也。

一 鷹にうたれたる鷹の事

藥にはかいたうりをもみて。かわにたて頭に吹也。外架に糜也。同藥によて六のはをす

りて。上をこぼして。おりをかわに立て鷹に吹也。

一 くそたけと云病の事并ふと云事

屎たけは鴉の羽をはいに焼て。白物を等分に合。せうがのあふらにて可飼也。かみ油にてもとき。餌に包ても飼也。同料治に人參。甘草。つばめのかへし合□。鴉の羽黒にして。右合。此うちつばめの屎三分に。人參。甘草。鴉の羽の黒三分一也。并ふと云は。鷹を使に出る時。雨風のとき鷹を入る物也。

一 鷹のはちかをしげくする事

藥にはうし虫を餌に包て。大ならば一つ。ちいさくば二つ可飼也。

一 胴内胴たけしげり氣に飼藥の事

むさうかんとはあちひの木なるいた也。是を取影干にして可飼也。〔諸病に可飼藥の事。鮭のひずを影干にして可飼也。〕万病一



藥也。人參。甘草。茯苓等分に合。持藥に可飼。

一人參散之事

一沉香。一分。

一甘草。三分。

一槲榔子。二分。

一蚰骨。一分。

一土龍黑。一分。

一四十草。二朱。

一ひとて米。三分。

一蘆毛馬爪黑。一分。

一龍腦。少。

一紫檀。一分。

一銀薄。十枚。

右何も合蜜にて丸鷹に可飼也。此内源氏のうすずみ。一分。源氏の薄雪。一分。れい天かい。二分。源氏の薄雪とは小便の鹽の事。同う

一人參。一兩。

一麒麟血。二分。

一くわつろうこん。三分。ニイ

一金薄。十枚。

一太鴉の黒。二分。

一茯苓子。二朱。

一沉の黒。一分。

一虎肉黒。一分。

一虎舌。少。

一白檀。朱中。

一チャ香。一朱。

すゝみとはしやれかうべの黒燒也。右の人參に是を入べし。

一血下しの事

一はつさめにておろす。火を取。一大黃。一白物。

毒を取す  
なかへ。

右合○是程に丸。衣に金薄をする也。大鷹に三粒。雄に二粒飼也。そくい水には熊のゐを出してのべよ。

一餌生板之木并寸尺の事

梨子の木。榎も吉。廣八寸。長一尺貳寸也。

一餌の作り様の次第の事

肉を上べき時はいに作也。又ひかせべき時はいに作也。亦内をくるべき時は大ざいはいに作る也。とうしの餌の作様。かどを立て四角に鷹の口にはゝかる程に一切れ。大ざいはいの中へ可入。餌かさを飼。餌能しほらずしなりとして可飼也。

一 骨餌を作る次第の事

鷹にそゝり上させ度ば骨餌を可飼。左なくば羽鳥を拵かうべし。鳥の羽を能々細にきざみ。生鳥の血にしめしかきませかうべし。

一 鞭水飼様の事并餌の洗やうの事

直にぶち水をかふ事わろし。取たる鳥の頭の内へしぼり入て。それをすくわすべし。餌の洗様は使鷹には血の氣なき様にあたゝかにしてかうべし。二つは過たり。三はすくなしと云事。此洗飼の心也。

一 鷹に飼間敷餌の事并餌汁の事

鵒。鳶。赤つみ。男鳥。駒をい鳥。惣て又黄なる鳥は何も鷹の毒成と心得べし。餌水と云は。田のくれ水を汲よせて。其中へ人參。甘草。板椰子。等分にきざみ入て。せりの汁をもみ入る也。餌を食ず候はゞ。右の餌違の薬を鳥の身に丸口をわり。其中へ右の丸め薬

を入飼。汁を中へしぼり入べし。鷹の置様は土の上にかにもひゆる所に置べし。夜も風の當所に雨のあたられ様に置也。

一 鷹よごす間敷事

二日三日置に水をあびせべし。扱又ひろいを合時は必澁田有物也。左様の時は鷹必ひじに組によりよごるゝ也。能々水をあびせ。田澁を洗をとすべし。

一 大鷹伏様の事并ふせ衣の事

大鷹雄杯をば羽を一方宛つゝみ下をも巻也。別の紙にて包。其上をこよりにて女むすびに結べし。尾羽に板をはさむ事は駁かわり計の事也。白鷹をば紙をわちがへにして巻べし。伏衣の寸は肩の廣とちめ三寸。とちめより下六寸。長貳はゝにして三尺五寸。雄の伏衣は肩の廣貳寸貳分。本ゆひこよりより。とちめより下五寸。長二重にして三尺。

一 鶯伏様の事附ふせ衣寸法の事

一方宛包。上を結ず。又押からみ別の紙にて包。其上をこよりにて女結にゆふべし。伏衣二重にして。肩の方とち目二寸を本と云。こより房のとぢめより下四寸。長二尺五寸也。

一 鷹の病を見生死の大事を見知事

鷹の病は色々さまざま。其數多しといへども。根本身を打たるより病おこると見へたり。されば山野をかける時は。ちのれがまゝたるによりて。身を打事なければ。左右なくやむ事なくして長久成るが。人の手に渡り。あみにて打。或は架にて打。又すへ拳のちるか成にて打。痛を請るとみへたり。此病を見知にも口傳有り。餌を能喰物を取共病鷹有べし。是を兼て見知る事は内に當りて推察すべし。此内にあまたの品有といへども紙上に延がたし。乍去大形しるし置也。先よ

わき内は病鷹也。つよき内は無病鷹也。縦つよくても一方へよせて持ば。其方に痛有と知べし。心をしづめてさぐるに。指の腹につみわたなどの様に當るは。時日に移さず病付べし。亦さぐりさへとて。當様に覺へてよわくさゆる也。うせつ出さつするは内よう有と知るべし。亦内を上て持下て持は。何も本の所かへて持は病付と知べし。本の内にも堅く持べし。是は無病鷹と知べし。内をつぐに餘の品有。縦遠く内つぐ共。内の上にすみたる水のちり廻は惡也。やせたる鷹の内はよわくつぐ物なれ共。紫色にして内たけ近は下り氣の病付と心得べし。當座病鷹とはみへね共。内の不調ば十日廿日或は五十日百日過ても惡餌を喰。亦肉を引たる時俄に病付也。兼て治せずしては大切たるべ

し。生死は息をつくに隨て。十二の尾助をゆるがして。長光の毛を引立ば。何と煩共くるしからず。亦息相よわく共。十二の尾助をゆるがさずして。すくみたるごとくにさらりと立は悪かるべし。又さんさんの毛をゆるがさるも悪也。但鷹の様體わるく共。内さへ能ば料治すべし。能見分專一也。

一 惣而鷹に藥飼様の事

先藥不飼前に。吉餌を二切も三切もくわせて。扱藥入たる餌を後にかうべし。餌かわに藥を能包飼事肝要也。

一 鷹の五臟三腑の事

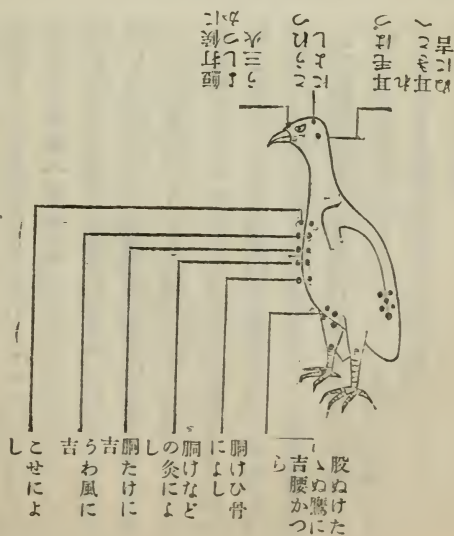
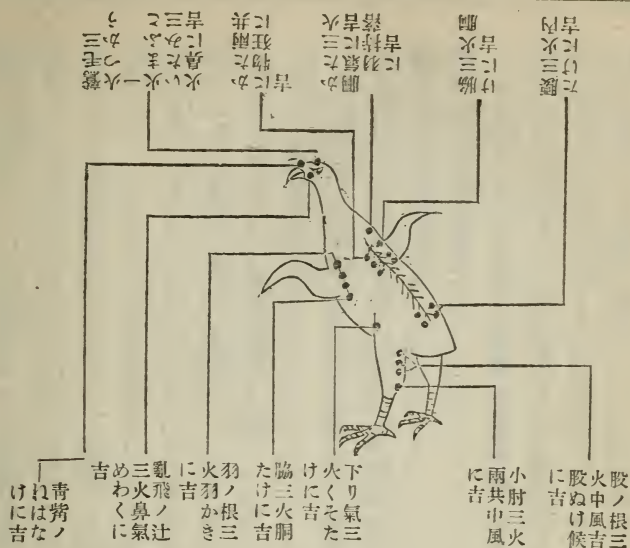
先肝の臟に付たる腑をば膽の腑と云。心の臟に付たる腑をば小腸の腑と云。肺臟に付たる腑をば大腸の腑と云。腎の臟に付たる腑をばうくわうの腑といふ。ひの臟に付たるをば膈の腑と云。ぼうくわうの腑と膈

の腑たらざる故に五臟三腑と申也。其故は腎の臟のぼうくわうと云字をいばり袋とよむ。脾の藏のいと云字を尿袋とよむ也。然ば鷹はもゝきなき故に。腹にふを持。腹よりきやして五臟へ渡す也。藥を與る時は。先下へ餌を飼て。上餌に藥を包可飼。餌を消に隨て藥を五臟皮肉へ道也。餌を未喰藥を飼は。内（通糞）うつけ彌肉やうする也。いばり袋なき故に。水を飲といへ共いばりせず。是により鹽氣をふかくいむ也。諸病に藥當る時。指出して味覺へる物を飼て秘傳有也。味の平成物。或は黒燒藥杯は。如何様に飼てもくるしからず。書まかせに藥をあたへても。其病不見知。くすり毒と成て也。能口傳。

一 鷹の灸所の事

蒼鷹後に四つやいとうの事。せわたをやかぬやうに可燒。せわたの積りはつくりをしめ







ころして引さき。せわたの有所を積りて置。  
切掛をしてせぼねより可積也。鶯は鳩の積  
也。このりはひよ鳥の積也。口傳有。

一 鷲王神之御事

夫鷹の病は此神のたゝりなり。能々是を祈  
念すべし。

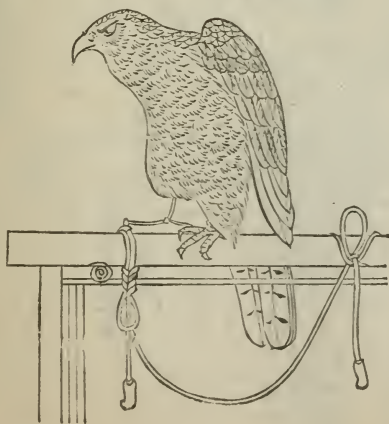
鷲王神敬白



一 神前に鷹摩事

架へ寄三度拜して可摩。大緒をくさりて。大

御に鷹



鷹ならば木崎へ一筋留るなり。一筋をば其  
まゝ置て鐘の緒と心得べし。鷹を申あろす  
時。彼大緒をかねのをとして申あろすなり。  
鷹斗の時は御に鷹と申也。  
一 神前に構ゆひ様の事  
神の左に可結。御前にも結也。

一 神馬鷹の事

鷹に馬を添て參らするを神馬鷹と云也。神の御目に掛る時は。馬引轡をならし。其時鷹匠と馬引と目合して。神に向紋を唱べし。其後鷹を架に縻。本木へ大緒を一筋留る。末木へ一筋留る。如斯兩方へ大緒を留て。本木の方へ三足後さまにあゆみ寄て。鞭を架なりに。ひさくはなを末木へして。本木の方に可置。鷹に鞭を當て押上て。構はつかせて立のくべし。其後申おろす時。本木の大緒をときて申おろすべし。扱末木の大緒をもときて居かゆる也。秘。能々口傳可有也。

一 鷹の鳥神へ御にへに上る事

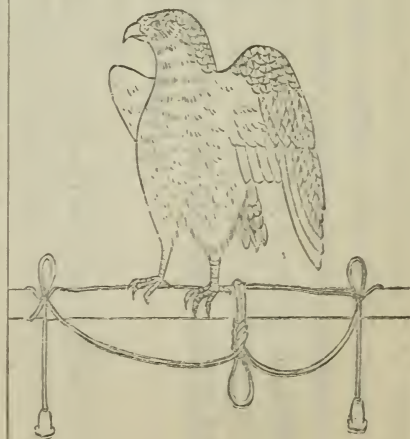
口餌の方を上へして。頭を神の前へ可置也。

一 鷹の鳥に綱掛様の事

是は口傳に有。

一 鷹の鳥釘に掛やうの事

神馬鷹



かいかたを見せて釘め可掛。

一 鷹の鶉雲雀串に挾様の事

秋冬は上り鶉とて上に上りさまに鐸也。雲雀はねりひばりとて鶉より下に。落雲雀と



て下に鑷也。臺につむ事も如斯。春夏は下り鶉とて下に鑷也。同雲雀は上に鑷也。羽節を引合立て。頭を上へむけて鑷也。加様に鑷て人の方へ分する也。亦鶉を人の方へ參らするに。人物はとつらにて作。あけびの筋を取て煮てかくべし。大さは定らず。鶉の數に寄べし。彼入物作らずば。餌袋にてもひけ子にても遣すべし。其上をとつらにてあわびむすびをして可置。但女鶉を口餌に飼たるを合て包ませて。女鶉をば右の足を。男鶉をば左の足をあつへて。とつらにてゆひて。八分のけて可切。數幾つ成共組鶉の上に置いて。其上にあわびむすびをして置べし。鳴の入物あらばあわびむすびむやく也。

一鷹によりて野にて鳥と云事

蒼鷹雄の前にては雉子の事也。鶉コウリ雌鷹の前にては鶉サシバの事也。雀鶉サシバ差隼の前にては雀

也。如斯心得べし。

一鷹構にて死たる時の事

縻ながら足皮をとき取也。といて取はいむ也。

一鷹放時の事

病鷹放には足皮をはぎのきわより切也。愁有て放には。足皮を中より縫目のきわを切て發也。

一替り鷹見様の事

雪白。白鷹。赤鷹。黑白。眞白。貝譜鷹。雲雀毛鷹。白鷹と云は前に駁なし。後も白してふく輪もなし。唯綿のごとく成べし。赤鷹と云は。前は大黒駁にて後も黒して。白ふくりんを掛たり。眞白と云は。鷹のいしはな毛。かを。首も。鶉の白尾つぐ事。くゞいのきみしらすにて繼也。付様大鷹と同。是も初春には雉子の女鳥にてつぐべし。繼様口傳。白尾は

二繼。紫鷹府毛しほとよむ也。紅葉鷹。一鳩。指鷹。蒼鷹。太鷗。鷗鷺。角鷹白也。取ては唯鷹也。ふく輪はなし。まねふ共長ちのす共云。口傳。貝駿の鷹と云は。貝を伏たる様に。二重に赤ふくりんを掛。鷹かほはなげ取ては大赤鷹也。雲雀毛の鷹と云は。前の毛は青白譜也。地は少白様なり。ふくりんを掛たり。かほはなげ取ては唯鷹也。其外大白。青白。黑白。ふち鷹。大赤鷹。鷗譜。ふぢふ。亦大鷹にもあらず。雄にもあらずをはしたかと云。又あいす共申也。亦鷗にもあらず。このりにもなきをいし鷹と申也。又はあいのすとも申也。扱雪白見様は九所有。鼻毛。目色。毛筋。面の毛。まわふ。ひしやくはな。とつて。七なみ。是別て白かるべし。青白。赤白。七所見所有り。しほ見様。目色青くうるむべし。前譜はふとくすはみふすぼりて有。尾

助は八文字に駿有。かをの毛は小頭より尾の<sup>「羽」</sup>だう迄。紫筋に黒かるべし。ひさはな有間敷也。本はつみ駿見所成べし。上本のかたは尾助。一方には八文字有り。下にはさけ駿斗有之也。赤鷹見様。凡白の見所也。取て。目の色。かをの毛はねり衣にからすみ掛たる様に上はひかるべし。うわかう迄如斯。尾筋羽筋しつの如し。ひさく鼻ふかく。かを白かるべし。前駿はほうくとして。えつゝまわりは赤しとゞの胸に似べし。鷹ちさく骨細りかいなかるべし。何も鷹の見所七所成べし。若尾に輪有ば伏てくれは鳥の毛を分て見べし。いろこの様成物うきて有べし。唯鷹には色々可有。鷗に此節有。羽鷺の鷹。鷗の羽の鷹と申事有。ねとひとはをとび鷗を能取也。鳩羽とははかしの様に羽をさのみひらかず。肩を作りもぢれて。よれかへりく

飛を云儀也。

一尾羽の次第の事附十三尾の沙汰の事

大鷹杯の尾の小鳥尾成をばまし尾と云也。

一文字成をば鳶尾と云。しとゞ尾とはしとゞの如く一文字也。ぼだい尾とはけんとうの尾の如く成。十三尾とは手崎にあまる鷹をば嶋と尾と云。身寄をば嶋をと云。鈴の上をば屋形尾と云。又くしの尾共云。ふさ尾共云。かぞへべき事口傳。

一鷹に三長三短の事

首長。ひ骨長。指長。是を三長とは云也。三短と云事。目の前ちかく。毛なしはぎ短く。尾詰り候を三短と云。是六所扣たるを三長三短の鷹と云也。じゆんの鷹と云は背より一二三迄ろくに切をばじゆんの鷹と云。其形とひこしく來るをばきれ／＼の鷹と云也。

一隼の七所の事附はんの鷹の事

隼七の能相とはそりひ骨吉。取手太く長く。大き成吉也。くしのをに駿のなき吉。うけがいに駿の有吉。青髭太き吉。鼻ず廣が吉。目の内平にちいさき吉。是七所候はゞ。大鷹菱喰成共のがす事不可有。目に何にてもあれ。目に一つ有をはんのはんと云。二つ有をはんの調と云。兩眼に貳つ宛有を調の調と云。片眼に一つ片眼に二つ有を調の半と云儀也。

一兄鷹を二つ鷹にいるゝ事

薬にはしゆくしや。山すげの根。すいかづらの根。是を等分にして其朝に半錢を二包にして可飼也。

一相子鳥の段の事

馬上にても歩にても合。兩鷹を取と見れば。脇にて目をはなつ。尤二つながら取かため候共。鷹の方へさわらぬ羽を見分。兩の手を

二つの羽節へかけ。弓手の方の鴈をくるわぬ様にひざにておさゆる也。扱初鴈の羽を組也。亦をさへたる鴈の羽をも組。押ならべて打違に毛ひかする也。若初て鷹を放事有ば。走り寄急ぎ鞭にて打とむむる也。扱前の如く間をすかさず。二つの鴈を引ならべ。毛をひかせ。其後初鴈の羽を直す也。亦一つの鴈をば以前の如く直すべし。其後我が身を清る也。水なくば草木の葉をくい切。一切草木皆是佛水と唱へて。九字護身法を高さ所にて如斯。同前にて扇か紙を敷。二つ鳥より四佛の鳥を拔也。先初鴈の鳥を二拔上。二つのつのに立る後。鳥の二つの羽をば下二つの角に指立てまつるべし。別ては普賢千手<sup>(百)</sup>觀音。不動毘沙門。惣而ははく西國<sup>(諸)</sup>。まかた國。大唐。扱我が朝の諸神諸佛に立。鞭を取脚緒を指。我則四佛と我を念じ。辰巳へ向て鴈

を直し。女鳥男鳥を見分。陰陽に左右を取飼也。若亦同鳥ならば。初鴈を左。後の鳥を右取飼。目をあげ切立。先陽の鳥を二口。陰の鳥を三口。二口の鳥を貳口宛七口取飼。扱二の取飼目を一つになれと押並。打違にあぐる程取飼也。扱初鴈の<sup>(二口)</sup>るを半分。後の鳥の丸を半分。二の丸残り候を一つになして取飼也。取かいながらもぎすへ上げ。かほへ水を打。足緒をふみ直させ。たぶるひもさする也。此時は爪足ををきよむる事なし。其後二の鳥の足を洗。毛羽を直して二の鳥を陰陽にくくり合。七尺五寸の木の中に掛。二人にかつがせべし。野より歸り。四佛のへいを五色に切て。五本のへいを我共に五佛也。四本のへいをば鳥屋の四方の角に立。取飼様の事。何も常の方を飼。女鳥はあをのけ。男鳥はうつむきに陰陽に取飼也。同掛る事。陰の



鳥をば手先に後向に。陽の鳥前むきに掛る也。余のあつかい共以前の如く也。何も陰陽の心得有といへ共。初の陰の取飼也。此段は陰の取かい也。此取飼を知らずして。いみけがれをつゝし。三七日の間さんそくをなし。合候鳥の外はび食をもすべからず。是大事の取飼也。もらし候へば則御罰と當事也。扱四本のへいをば四の角に。一本をば鷹麿候上に指か。同くゝりたる鳥をばほぐして。毛羽を直しはな毛緒を付。鳥屋の脇に陰の方をば打むきに。陽の方をば外へむけて掛る也。しめをはへ麿也。麿様兩方へつりしんのしんに麿也。同鷹を三七日切飼也。扱廿二日には野へ出合也。何鳥成共取飼は常の如也。此時爪鬚を清る也。扱其野歸りに麿事。眞草に結くさる也。口傳有。亦云。相子鳥の佛の御罰と當る事うたがいなし。此口傳な

くして相子鳥を合候へば。鷹鳥共に相捨宿に歸る物也。夢々不可有他見。

一鞠のかゝりに構を結事

末木をかゝりに持せ。座敷にむかわせて結ぶべし。かゝりに四節を結分る事。春は櫻。夏柳。秋楓。冬は松也。松は何もくるしからず。殊賞翫たるべし。結目を上に結て。はしをばみぢかく可切。其暮に鞠有べき時は。前に結目をひつとさに留也。かゝりの構をひつとさに結たるは。必其暮に鞠有と心得べし。

一まびかみ鷹使間敷日の事

正月。九日。二月。丑。三月。三日。四月。未。五月。卯。六月。戌。七月。酉。八月。十五日。九月。三十日。寅。十月。十五日。霜月。廿三日。極月。十二日。酉。子。寅。霜月。申。巳。右是口傳可秘也。

一長命駁の見様の事并短命事

長命駁は尾助に駁を切。四毛に駁なし。ひ骨崎とがりたる鷹陰の鷹也。短命の駁は四毛に駁を切。尾助に駁なし。ひ骨崎引こみたる鷹陽の鷹也。

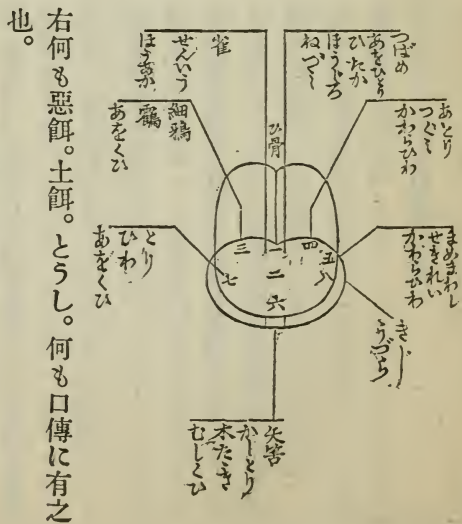
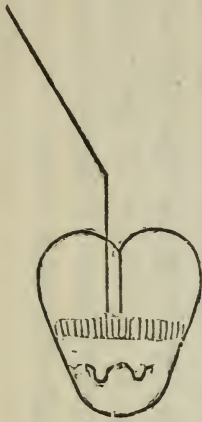
一 首長と云事

首長付たる鷹は。ひ骨鷹の相應より少短が吉。首短はひ骨の長が吉。戸尻詰り候が吉。

一 鷹置たつる時の事

取間敷鳥に合をさ。かひ餌を可飼。置餌と鷹の不知やうにすれば。合はなしても渡る也。一小鳥の内持様。

山鳥  
めゆき  
黒鴨  
ふとから  
すち餌  
鷹  
猫  
いよめ



一 鷹の鳥屋入鳥屋出しの事

口傳に有り。

一 遠山毛と云事

遠山毛といふは。鳥屋鷹に若毛残し候を。遠山に残したるを云也。

一 相木并明イとひ相木見様の事

時々さやくと云。鼻より水出。息荒く内持ひらく。矢筈引こみ少上げ。うちたけちかく打ぎれ有べし。といあいき目の色こく成。息音高。目より淡出。薬には萬病一薬。沉香黒にして。せみの黒。何も等分にしてかうがひの耳二つ程入て。日に七五三に可飼也。

一 山忘れ八つの口傳の事

第一近架にて鷹を麿事。鷹の心を荒く折間敷ため也。第二ほそむる事は。新鷹の心をうしのふべき故也。第三すかさず鷹を居腰餌を飼事。手うちをくつろげ。作はたらぬイまた置綱の緒しらせて。鳥心ををしへ立はしらぬがため也。第四飼がんの事は。鷹の肉あわいを知べきため也。第五装束をなし鼻毛を荊事。山を忘れさせなづけんがため也。第六鷹を詰める事。氣こわの鷹をも飼のべ。日をのべてなづ

くる事を本とす。むやき鷹をば日を詰餌を詰なづくるを本とす。第七忍立る事は成免の時を習る也。第八丸箸飼事は肉をかいゆる鷹のため也。亦内を拂ちから餌亦薬を飼。是は鷹の命を延餌也。但鷹の心に寄。此餌かわぬも吉。此八つの山忘を以て心得取飼を本とす。

一 鷹に印迦取と云事

鷹を印迦を取程使ては明ふさがり。又罪過何も又不可入也。扱取飼時は人音のなき所の鳥屋に麿。構のとをるを明になし。身の毛を指くつろげ。扱恠敷所又病の程。我身隠置て鷹に知られぬ様に。立居に見分事本とす也。扱恠敷所有ば如其養生をすべし。亦鷹無相違云告也。

一 諏訪のきもんの事

こうしんうちやうすいはうふしやうくしゆ

くに入れてんとうせうふつくわ。

一水の異名の事

野上の水とは芋の葉にいる水也。あいきやうの水とは付るかねの事也。夜取澤の水とは小便の事也。しのぶの里の水とは男女のいん也。切つぼの水とは芦を荳たる跡にたまりたるを云。こつぼの水とは榎梨子木えんじゆの木のかぼにたまりたる水也。しぶ田の水とはくれ水の事也。切坪は竹の切目水。しげり鼻竹どうけに用て吉。

一鷹犬に子あらさする事

薬にいの子つち。水。金。りる。是等分飯に能々つきませ。三日も五日も可飼也。

一指掛の緒を留る事

先大緒崎を一むすび結べし。常の如に外の方へ二まはして。上より下へ押入てわさに取て。裏のむすびめを一まといにして。わさ

の方を下より上へ押入る也。

一餌ふごの緒を結様の事

先鬼拳うさぎ耳を本とす。則緒に餌袋鈴袋是等付也。口傳。

一鶯の餌袋に付る道具の事

一番にうちかい袋。二番に鈴袋。三番に經緒。四番に生鳥袋是也。鈴袋の長さ一寸二分。口一寸也。

一雀隼なづけ薬の事

茯苓をかうがいの耳三斗飼也。同組薬。もずの草くきの黒にして。かうがいの耳一分飼也。氣こわくば夏角かう也。いかにも能薬をも飼也。

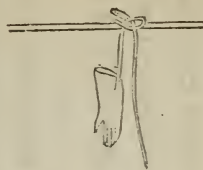
一隼の薬の事附隼に嫌言葉の事

薬にはとの子。なもみ。うつ木の青み。あざみ。白物。みやうがのみ。是等分餌包飼。嫌言葉はさがりたると云事。落たると云事。是大



に嫌。言葉さまざま有といへ共。覺へて所に  
てはやる様につかふべし。

一指掛と鞭と架に掛様の事



一あがけの鷹拵様の事

居なづけ候てなづかぬ間。いかにも能餌を  
かい候て。其後鹽を日に一たん宛可飼。扱む  
さけ立候はゞ鳥に可合也。亦獺の肝を影干  
にして。かうがいの耳五つ。粉にして餌に包  
可餌也。

一巢鷹拵やうの事

雉子の背と爪とをけづり。糸にまぜて可飼。

一胴氣の藥の事

藥には竹の青み。うつ木の青み。雀隠しの麻  
を芦毛馬に七日ふませ。其後粉にして茯苓  
と銅のすりくずを等分に合可飼。亦人參。甘  
草。甘草の黒にして。銅のすりくず。かまの  
中の土。何も粉にして等分にして可飼。亦胴  
を打たるには見様有。たらいに水を入れて内  
をつかせ候へば。胴氣はしづむ也。藥には蟬  
を干て粉にして餌に掛。紫の汁にて糸を洗  
かう也。相息にも吉。亦家内に有こけにおん  
しやくをおろし。甘草に雀の屎。是を取合か  
う也。亦人參。甘草。茯苓。大黃。夏角。川芎。  
是等分にして田澁の水にて丸可飼。亦芦毛  
馬のはらみ子。白朮。はこべの黒。かくれに  
しき。右梨子の汁にて丸。三包可飼。亦胴打  
候には麻を芦毛馬にふませ。人參とふなわ  
ら黒。かくれにしきを水出て。糸にかきませ

て可飼。

一鷹に虫のわく事

薬にはしやうぶの根をうすく切あぶる也。粉にしてゆわうを添て。鷹をふせてひねりかけよ。其後能天氣に外架につなぐ也。亦白物。ゆわう。くしん。三色粉にして毛を分けてひねりかけよ。亦からすおふぎのね。白物。りろ。何も粉にして酢にて緩々といぎ。羽ごとに可付。亦くしん。白物。丁子。ゆわう。しやうぶの根。此五味等分に合。鷹を伏て前後に首股の間。ひき物の間へ能々ひねり可入。しばらくふくさ物に包。しらみをあぐる也。同わくもならば七つ薬指べし。かわらけの粉と沉香可添。必常のしらみには似べからず。新敷かちんをぬらし。二時の内二度鷹を伏て置ば。かちんの香にわくもうつりて皆々ぬくる也。是秘所之料治也。

一鼻氣なの薬の事

薬にはしぶき。桂心。何も粉にして芦のすにてはなへ吹入よ。亦たうしみを焼て。かうぶし。何も粉にしてはなの中へ吹入る。亦川芎も吉。

一相木さうぎの構かまの事

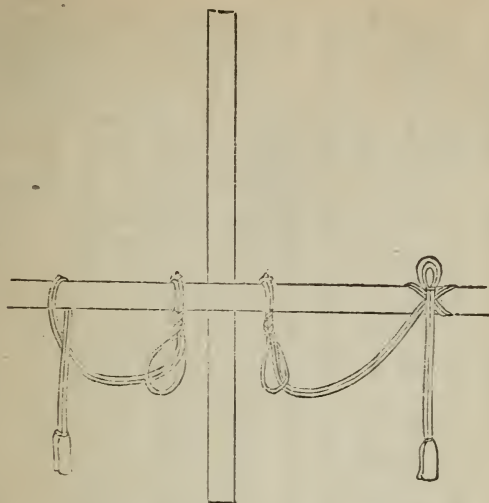
末を合て二間。高四尺一寸。二間の間に木なくば。木の合目に木を立べし。是は鷹客人兩人有る時。何も賞翫する時の架也。亦賞翫の人兩人ある時。我が鷹にても二鷹有ば合木の架に縻（也鷹）て可見せ。鷹の大緒をば兩の木の本に可留。亦くさりても置也。口傳。

一諏訪の御前に鷹を縻（也鷹）事

昔は白張装束にて鷹にもしてを切付て參らせたる也。當世は事新敷とてせぬ也。鷹を指上て居。鳥居の本にてすわのもんを七邊唱へ。亦縁のきわにて五邊。神前にて三邊つく

ぼうて可唱。鷹は神の方へ向て可居。鷹二つの時は。神の左右につくぼう也。何も神に向せべし。口傳。

相木の鷹



一早中風の付たる鷹見様事

いかにも靜成鷹俄に狂出。内たけちかく。内持やわらかして。矢筈時々うごき息くさく成。うれい毛を立。目の色青く成。鷹少も奉の内をしめず。

一惣藥の事

雀をはかりに掛て。其以後わたを抜て。其中へ初のはかり日程人參。甘草を雀一つに一朱入。せり少。さりん血。萬病一藥少。茯苓一分。かくれにしきにて包。かわらけに月水入て黒にして飼時は。一朱はんしん如同飼。右の人參は雀のわたのおもみ程入る也。

一虫つき打時飼藥の事

藥には枳榔子。一朱。肉果。一朱。白檀。朱中。天南星。同。銅のすりくず。少。ひはづ。少。さりん血。少。金薄。一枚。右何も取合餌に包可飼。一大風の藥の事

藥には萬病一藥。きりん血。虎皮黑。雀の頭黑。せりの粉。銀のやすりくず。右等分にして雀の身に包可飼。かい水にはまたゝびのつる。もくつう。何も等分に煎じありのみ入。若なくばさね成共可入。ひへたる鷹にはありのみ無用。

一身わけの藥の事

萬病一藥。黒しないの黒にして。芦毛馬の爪の黒。びんろうじ黒。人參。甘草。ふくろつの。何も合。雀の身に包可飼。

一餌うとむ藥の事

萬病一藥。ふくろ角。かもしかの角。うつ木の青はだ。人參。甘草。右雀の身にて包。かい水は子供のゝむ乳にてせりをもみ出し可飼。ねつ有ば外架に糜。あか月がた迄可置也。

一羽虫の藥の事

熊の油。つばめの夏子のくそ。きらんさうちしはり。是を能すり合せ。虫の上に可付也。

一寒夜の鷹のぬくめ鳥の事

さむき夜のとをのに鷹のぬくめとりをんをしらぬは人にこそあれ

一大物に組する藥の事

藥にはさいかちの枝。たうき鴉の羽。何も黒にして飼也。亦内土竈の墨。桑の黒水。金。少。何も餌に包て飼也。亦蛇のから黒。芦毛馬の三ヶ月骨に合て可飼。亦鴉の羽と麻白毛黒。丁子。少。添て可飼。亦山すげの黒。余手六の。もみの飼も吉。但一粒宛三粒也。亦是梨子の木の東へ指たる枝に。茯苓。蟬。是を黒にして等分に合飼。亦なんもつかう。沉。桂心。等分合飼。亦つばめ夏子の屎に。桐黒にして。鰯の肝。是等分にしても飼也。同藥には夏角。茯苓。ふなわら。是三種を等分に合飼。



秘。

一毛かりと云事

べにさらに下大文字の錢を伏て。其とをりのべにをとり。毛かる所へ可付。同毛かりとはをのれと毛を喰ぬく事有。藥には山鳥のかつほし。つばめの肝を干て。甘草。此三種等分にして飼也。亦つばめ影干にして飼。

一鷹飼を押ぬを押さする藥の事

はこべをしぼりて汁を可飼。亦銅のせんくづも可飼也。

一鶇のすかしの藥の事

鹿の角をこそげて。よいより水にひたし。あさ水をかわかつて餌に押合可飼。其後唯餌を可飼。其後山ぶきのずを細にきざみて。餌にまぜて可飼也。亦雄に内をすかす藥の事。雉子のくぼ手を一寸に切て。中のず内に白き油。是をわらのみこにて通せばとる也。能

たゝきてそゝろ氣を入。ゆのかんのあつくして飼也。大鷹はかんによいの如斯。同四の内にすかし様。つきの青葉多を糸に包てかうべし。口傳。

一鷹の足の裏に魚の目の藥事

内外へづばとはれて。物など持えすの當りただれてはれたるをば。かなげの針にて指べからず。さいかちの針にてたゞれたる間をそと二三針可指。いかにも血をしぼり出し。其跡にうす色を能々指べし。扱鐵のひばしにて焼べし。かげんは檜に當て見ればくろむくろまぬ程にかんを可指。魚の目の通に二三度も當て。架には竹の上皮をけずりはり架にして。はなし鳥屋に可入。かねのぬるきは魚の目ぬけず。つよきはゆび筋つまる。口傳すべし。二三度鳥やを出し養生すべし。きよつくろひをすべし。血を出して鹽付

いわしのわたを取てそくに押ませ。魚の目にも裏にもだぶくと可付。かけはきにしてゆびの間引出し。ゆびの間より引出して。缺爪の上にてゆい可付。亦取手もはれずいたいやうに有は安き也。鹽を等分に合。木わたを煎じ。かの子を可付。ゆびのはらにてよれば。きしはなれて外へぬけ上る也。毛ぬきにて卒度ぬくべき也。其中へ木わたの粉を能ひねり入べき也。如斯料治して七日やすむべし。八日目につかふべし。

### 一目わくめ事

目腫てあわ立て。目をする事重くせば。薬には鴉の羽黒にして能粉にして酢に入。錢を卅三文焼て入る。腫候方に鴉羽にて可付。をのづから目の内へすり入る也。大方目の前へめわくかゝらば。能々伏て頭をとりて。はこべの汁にて。きわたの粉。こよりのささに

て。目の間に銅の丸ひばしいたまぬ程に指べし。亦くもらばとちをおろして。うこん粉にして女のちゝに入可付。是はこくせきみんにはをとる不可。少年のめわくにはめはじきをすりて肩崎に可付。をのづからすり入るなり。

### 一鷹使に主をわすれぬ薬の事

甘草。なまみ。茯苓。等分に合可飼也。

### 一蒼鷹の餌袋に鳥を指様事

男鳥をば左の足を上へ出して。右の足を餌袋の内へ置べし。

一弟鷹の萬の鳥をうとむ薬。れいやうの爪黒にして。ときたうの肝。等分合半錢飼。但れいやう爪さめにておろし。

一あがけ山歸を初心にて取飼時此薬を飼也。鹿の角黒。根なしがづらのみ。等分合半錢かう也。

一鷹大腰の事

腰より股足。惣而胴より下ことくくくなへ目斗はたらく也。是を中風と云也。此煩を請てなをる事かたし。料治には土を七尺堀て。楠。庭床。湯柳。是三をたきて酒を三盃掛。檜の葉をこき入。其はい胴よりすそ斗能々むすべし。其後鹽をつよく煎て。はこべの葉に鹽を包。布をぬらし腰の廻り別足迄能むす也。灸は百多。腰の中。別足のつかい。鐵のくわしんにてかん能比にして當卒度宛灸すべし。扱内藥には萬病圓少程をあはせ。五八草米程一粒添也。大事の病也。能々むすべし。

一疵藥の事

疵藥。亦いたとりの根をたゝき。はこべの汁にてもみ合。疵に付也。

一鷹をさなき心有時の事

鷹をさなき心有ば。山犬のさばさめにてお

ろし。餌かけ飼。

一くれないの水と云事

くれないの水とは十八より内の女の月水なり。胴氣胴打に吉。

一山中の藥とは山澤かにを云也。萬病に可飼。胴氣に吉。

一鷹の中風見様の事

中風鷹の事見の毛をゆるし。泪をうる／＼と持也。黒目大きくして黄目すくなし。亦是羽たゝみよわく手袋ひかず。とぼう事なし。日面をばよけてくらき方へむく也。大病成時は羽も足も不立してころぶ也。料治にはうてうの穴。こうはくの穴。是を灸して後鷹を細々むすべし。いなりの上に棚をかきて。其下にななわを置いて釜をすへ。桑。そくづ。をばこ。大麥。はこべ。是を能々煎じて。鷹をかちんの布に包て。棚の上に置いてむす也。口へ

水をしげく可入。其後新敷餌を少喰て。押込たる時藥可餉。口傳有之也。

一 胴打胴たけの藥の事

戸草の節黒焼。との子。等分に合て。藥師草の葉をもみ。其汁にて可飼也。

一 あがけ山歸りに常に可飼藥の事

干栗。甘草。山澤かに影干粉にして。一度に茶二包斗つゝみて大に三。雄に二可飼也。

一 下り氣の藥の事

人參。わうそくの黒。干栗。是等分にして一度に茶貳包斗程可飼。胴打胴けにも大吉也。

一 鷹の鳥喰様の事

雉子鶉に不寄。燒鳥をば羽を取添いだき。扱々御鷹の鳥とほうびしてたぶる也。但賞翫の人有所にては。正客のほめ候後にほむる也。鶉をば御鷹の鶉とほめ。鷹も何鳥に不寄鳥の名を申てほむる物也。御鷹の鳥とは

雉子を云儀也。

一 萬病一藥に加減の事

相息には沉香の霜。蟬の霜。是を加る。餌違と見へば。金蒲。椶櫚子。鯉の霜を加飼。胴氣にはきりん血。茯苓。金薄。人參。甘草是也。胴たけには澤蟹粉。も草の粉是也。打たけにはれいてんかい。沉香。是を加る。

霧卷

一 鷹に胴氣と云事

縦ば人間には虫病の心にて鷹毎に有。善惡是成共。あやまちのためをのぞきて。鷹の煩は先胴氣の心。亦ははなたけ。是は大形鹽けならんや。鹽氣とらんと思ふには。そかうゆと云藥也。色うす白してねり藥の様成。一兩は代五六匁也。是を竹刀にて少取て。湯に出し。能とけ候時鞭にて飼也。鹽氣も取。胴の内の煩おしなべて治也。重藥にはいれいせん



能包てふるいにて餌に包可飼。日本にては  
さいしんと云草に似たり。知人多し。是にて  
治也。灸は頭の付根五つこして。六つの骨の  
間也。よもき候て三火也。にんにくを敷也。  
亦云。しはろ草を以あたゝむ。但胸氣と知べ  
きには。一には餌を喰得ざる也。目尻少白。  
日本あか有是也。たてるもつはを頼見そん  
ずる事うたがいなし。二には鷹内赤くして  
にほふも胸けと云。三には胸けならば内ね  
ばくして内たけつき得ずして。下りけにも  
なし。詰りけにもなし。におふ事限りなし。  
薬にはきわたこくしん一にして焼て。其に  
かいこうを入れる也。うみつぶ共云。日本の内  
にも有也。亦胸氣の鷹あくびしげくする事  
有之。第一の薬に琥珀を少粉にしてねりて  
こし。耳かき一つかへば一度下り。二度かへ  
ば二度下。三度は無用。胸の内の病に日本一

の妙也。胸氣は内色血をまぢへつく也。薬に  
はあせんやくも飼也。何病にてもあれ。唯一  
薬にて治そくすいし。能々粉にして。上皮を  
取て油取事はずにたがわず。是を粉にして  
一薬に飼。亦餌をうとむには。からすへびを  
にわとこのはに包て黒にして。しゆを少入  
焼てかう也。餌を喰諸病治未見聞。人我に傳  
へたる也。

一鷹つめとをと云事

あやまちのたぐい也。鴈にうたれ鶴にふま  
れ。いか成義にて。唯今死を可助薬には。た  
んにくを影干にして能かみしめして鷹に見  
すれば。口をあき鷹よろこびとばいかゝる  
也。其紙しめしたるたんにくを鷹の口に入  
れば則治する也。是は生物の肝也。

一胸たけの事

薬に梅花を紛にして。蓮の花のしんを粉に

して。にし死たる鷹のをへ物を取て。此藥を懸て見るに。必きへてうする也。

一 胸なりとて胸の内に聲有事

胸なりとて胸の内に聲有て。とばへる度にからくと云事有。是胸の内の腑共骨にしたがわず。こもくとして胸の内煩事專也。藥になつめを煎じさまし。とちうを右の煎汁にて可飼。とちうは唐の木皮也。猿の肝をさめにておろし。るいその黒焼と等分合て飼也。るいそ能鼠に似て。人のなん産を治す。鷹の胸の中病能治。

一 鼻毛と云病の事

鼻毛と云病臟より出る也。内藥にはしやせんしを粉にして。黃蓮少。等分合。餌に包飼也。

一 はなやせと云事

はなやせと云病有。たつ頭をさげ。羽をえま

せ。惣の毛を立。晝夜共に自鼻をかく事しげし。はなふさがるにあらず。はなの内にのうがこりて。目の下にて詰りて鷹息はやし。脂の臟よりの煩也。さうはくひを俄にとりて。土氣を洗煎じ飼て吉。はなみづにも吉。

一 しらみ落す藥の事

しらみを落藥。山桃の皮。こせう。丁子。ゆわう。えんせう。いしばい。是を粉にして毛を分ひねり掛る也。大小しらみ。わくも。もゝすゝも此藥にて吉。

一 鷹の羽留りたるを三鳥草飼事。

鴉の尾。雲雀の尾。つばめの尾。其羽の留候處をぬきてあたふ。三とりそと云草にてかう事三度也。鳥屋の時かへば羽出也。

一 鷹に大禁物の事

鳥をとらせ間敷と思ふには。猪の油爪にぬる也。壹年も不取也。殊餌に飼ては惡敷也。

凡此鷹之一卷者。荒井豐前守振秘書也。（綴）綴  
親子雖爲兄弟。必不可爲見者也。世間雖多荒  
井流。是秘中之秘藏所是也。

寛文三巳卯年二月吉日

荒井藤七郎  
横澤和泉守

享保廿乙卯年五月。借用奥州會津武士木本九  
郎兵衛勝成而寫之。

北畠具元（花押）

續群書類從卷第五百四十九

總檢校保己一集

男源忠寶校

鷹部九

龍山公鷹百首

東求院殿龍山公鷹百首

行幸せし御かりの野への昔にもとかへる鷹ぞ世々に絶せぬ

とかへるとは。鷹の毛をかへて。とやより出る事なり。鳥歸とかけり。山歸は山にて毛をするをいふ也。古哥に。はし鷹のとかへる山の椎柴のはかへはすとも君はわすれじ。此哥にてやま歸り聞えたり

名にめてゝ梅の花毛や匂ふらむ鷹の羽風も春寒き山

梅の花毛は鷹のめのまへにある毛也。

春寒み袖にも雪の残るか和白尾の鷹ぞ手かへりにける

白尾は白鳥の羽にて尾をつぐといひ傳る也。手歸るは鳥を取はづして。空よりすぐ手に歸るをいふなり。なづきたる鷹の體也。

雪かとも霞のうちに手放せる繼尾の鷹のほの見ゆるなり

又繼尾。春は霞にさだかに見んとおしるべに。尾を白尾につぐとの説もあり。白尾の事。春は巢山の心ありて。鷹うするにより。



また我身に雪残であるよと思はせんとの兩説なり。昔一條院御時。正親卿鷹功者にて。繼尾は工風をもて繼をめけるとなん。

はしりゆくと跡をとめてかむ犬の鈴の目させる春の鷹狩

と跡は鳥の跡也。かむ犬ははなつけて覺行事也。鈴のめさすとは。つゝじの枝にても。木の枝を折て鈴の目へさし入て。鈴のならぬ様にする事也。春山鳴鳥につかふ犬也。

もろ口のとまれる犬はすゞばかりさはきなしにやつかふ鷹山

さはきとは藤をたちてつくる也。もろ口とまり逸物の犬にはさはきに不及。鈴斗にてつかふ事也。小鷹犬にはやり繩といふ也。

おちばかりさはぎたてやるふるつかれち山はわかき犬をかはまし

さはきたてやるとは。はなちてやる事なり。

ふるつかれは年のよりたるをいふ也。より犬ともいへり。女犬をばえかたといふか。男犬をばおいぬつかれと申ならはし候也。地山とはかり行山の狩さき也。犬をかはましとはつかへと云事也。ふるつかれは。草臥によりて鳥のおち斗をつかへと云事也。惣別ふるつかれをば籠に入になわせて。落ばかりをつかふ事ある也。くたびるれば寄犬はかまぬにより。籠に入て足のおち斗をやる也。

鈴子さしわけのぼりたる山あひに聞すへ鳥のいづちぬすたつ

此鈴子は鷹の鈴子也。犬には鈴子とは云々からず。前に注てすゞのめさすと云也。聞すへたる鳥ぬすたつと也。人のしらぬ様に。羽音せず草の中を忍び立てかくるゝ鳥也。それをみつけたるをめをつきたると云か。

つかれつゝはしりて草にふす鳥を物もなしと  
は見すへたるなり

物なしとは鳥に油斷さする詞也。見つけて  
有といへば。必うするによりて。あるをなし  
と云也。

はし鷹の尾上をこゆる鈴の音につかれの鳥や  
草にふすらん

見えたる體也。つかれの鳥鈴の音にかゝみ  
たる也。

山ぎはに鷹ましかけてあはすれば野べの雉子  
ぞとびつかれたる

待かけとて。鳥の立行へき山に。鷹をまち鳥  
のくたびれてよわくなる時分にあはする事  
也。田舎にはまち鷹と云。他流の説也。鷹の  
むちを鷹なふりと云がむし。當流には不用  
之。但其家々に用來事も候か。諷方が家  
には。鷹の鳥のかけ様。山の鳥田ものうら表か

はる也。哥道にも當流とて二條家を用。又冷  
泉家一流有之。又は小笠原家弓馬の道を當  
流と云也。内藤家右之類成べし。什。大壺流有  
之。當流他流分別可有歟。其外他流の説其品  
おほし。たとふるに哥道に古注の説といへ  
る同前歟。又田舎の小笠原諷方事外かはり  
たる事數多あり。それも定て其家々の作法  
たるべきか。鷹を架につなぐ次第も。若鷹。  
片鳥屋。諸鳥屋。古鳥屋。野され。山がへり。  
弟鷹。兄鷹。半子。はしたい。白鷹以下。其外  
隼。小鷹。諷方流當流かわりめ有之。又他流  
多之。前に注すどく。他流とは哥道など古注  
の説と同じ。不用之。足革をも足緒とも云へ  
り。ねず緒をもひこの緒共云也。但ひこの緒  
昔は別に在之様にしるせり。秘事に云也。み  
だれ装束と云事小鷹にあり。大鷹にはなし。  
口傳に云。とりわき兒鷄鷄にする也。同かし

鳥装束とは。かし鳥の羽くさひに。くるるり色なる毛をとりて鈴付につくる也。又はしたいと云事。當流の秘事と云々。まちかけの事。昔禁野の雉八重羽にして。足も三ありと注之。合する鷹をとりころしける化鳥也。其時まちかけをたくみ出し。彼化鳥をとらせけるとなん。それよりまちかけ始て。あら鷹などのかたいりなるをとりかふには。待かけにあはすれば。やすくとるにより用之。雉の足を別足といひならはす事。禁野の雉よりおこれり。當時あながち足三ツなければ共。雉の足にかぎり今に別足と云也。同事ながら山鳥の足をば別足と云べからずと也。右の子細は高國朝臣彼諸木抄廿卷の聞書に見へたり。諸木抄は犬追物。笠懸。弓馬。軍陣。かちだち。御前の時宜。禮節仕付方。鷹の道諸道をしるしおかるゝ聞書也。可見之。彼

書に禁野の雉の事押紙に被注也。昔仁徳天皇御惱有時に相者云。彼雉のたゝりなりと。占ふに。保昌卿と云人渡唐して。鷹を習て日本へ歸り。此雉をあわするに。彼化鳥三足の別足にて鷹に向ふを。鵲といふ鷹。彼足の三有て羽も八重羽の雉を取かためたるといへり。其鷹はしたいと云也。鵲と書也。此名あまりに秘して。鵲はせうと云鷹也と注之。又云。鵲。ハツ。ハシタイ。共いへり。口傳あり。難注事也。鷹の根元は。天笠摩伽陀國清來と云者唐へ來りて。泰山道の麓にて仕始也。日本にては仁徳天皇の御時に保昌卿仕はじめ。待かけをもたくみ出し。彼化鳥をとらせけるとなん。禁野のさんの字も。近野と昔は書と云也。禁野かた野は同所也。日次の贅を奉るによりて。人の鷹仕事を禁制せられけるより。あらためて禁野とはかゝれしと也。清來も

西來ともかけり。又は政頼とも後には書也。  
子細秘事也。日本へもわたれる事。鷹の家に  
秘しおく口傳共あると也。付。禁野かた野の  
八重羽の雉をとらせられんとて。つき鷹と  
いへる鷹有。政頼が聲頼津神平が鷹と注之。  
付。放鷹記と云書に。鷹仕様被注之。鷹の起鷹  
經に見へたり。同相形圖放鷹記に注之。  
立鳥のつかれのかずをかり衣くゐなとびにも  
なりておちけり

水鶏とびとは。つかれをしげくうたせ。鳥の  
くたびれて。くゐなのどく。くびをながくな  
し。よはくくととび落るをいふ也。

うちいれて草とる鷹に雉子もや足鳥になる罫  
のべの暮

打入とは鳥を草へうちいるゝ也。草とると  
は草をもむとかたる事也。ほめたる鷹の振  
舞也。空とるといふ詞は空にてとる事也。此

草とるは。鳥を草へおひおとし。打入くす  
るにより。鳥足鳥になり。立あがらずはしり  
つかれて。鷹にとらるゝ事也。足鳥とははし  
る斗にてとびあがらざるを云也。

から衣あまた雉子の立山はとりまたけして鷹  
や追らむ

鳥またけとは。たつ鳥にあはせたる跡より。  
又鳥たつ事あり。まへの追鳥を捨て。後の鳥  
を追行を云なり。おん鳥にあはせて追行内  
に。めん鳥たちてめん鳥へ行鷹をばめん鳥  
すきをするといへり。鷹にぶ事也。但一度  
などはこれも鳥またけとも云べき歟。二度  
共めん鳥へ追行ば。めん鳥すき成べし。又山  
をかりまたくると云事あり。それは狩行跡  
より鳥のたつ事を云也。付。鳥またけ。他流に  
別の鳥にあはするをいふ説もあり。  
峯たかみきとすやたゝきこえぬらんほこ羽を



つきてあがるはし鷹

ほこ羽とは。鳥のたちこす山の尾かたを。跡より鷹おくれて追行。山をこゆるとて。一文字にあかりとびこす羽也。逸物の鷹心の聞たる體ほめたる羽也。鳥のたゝきこすと云は。山をすりすらずにこすを云也。鷹にはたゝきこすと云事なし。ほこ羽鳥になき事也。鳥の山遙に空をとぶ事あり。ひよりあかりととぶなどゝかたるなり。

しげる木の山のあわひはとさけびをしるべばかりに鷹やあはせん

鳥さけびは。鳥のたつを鳥よくと下狩の者共高聲に云事也。鳥の立を鷹は見ね共。山につかひ入。このいりたる鷹は。とさけびをすれば。心得てとび出くするを。手はなせば則鳥さけびをする所へ飛出鳥を追取也。惣別山をかる物共をせことおし出して云事

は。しゝけだ物の狩する者共の事なり。鷹狩の者共をば下狩衆と云べき事本義也。但鷹狩も近來せこ衆などと申付來候歟。是も諸木抄にしるしおかるゝ也。鹿猪を狩山をばかり場又は狩倉といふ也。鷹山のよきをば鷹場と云べき歟。鷹によきしろにてあはするなど云は田物の事也。山によきしろといふ事不可有。はい鷹などにも大わさとして鴛小鴨けりくなどあはせよるもしろなるべし。山を狩にも。しゝしやうにはかりこゑ鷹匠よりしそめて。鷹下の者共より次第くに云傳て。山の出入とて。山をあをのけてかる事。又山をうつぶけてかる事。鷹下をかりまはす時は。野ぎはをふまへ。野ぎはをまはしかる時は。鷹下をふまゆるなり。又野ぎはをさもとゝもいふ也。狩聲も四季に調子かはる也。放鷹記に委注之。ほうゑいとかる本

義也。ほうは鳥と云事也。鷹をくこゑもほう  
／＼と云は。鳥くとおく心也。をき聲も遠  
近に心もちあると也。遠く鷹をよびかけお  
く聲は。ほうといふ聲をながく引となり。近  
きは常のどし。下狩の者共草をうつ事。狩杖  
のゆきとつく程に。凡立ならびうつ也。狩様  
さだまる歟。放鷹記に注之。是は仁徳天皇御  
時鷹の作法を書たる書也。又鷹狩にも狩場  
の鳥などゝ哥にも讀也。鷹狩を鷹飼共。延喜  
御宇などの御時も専申たると聞えたり。伊  
勢物語にも見えたり。是も當流なり。重疊口  
傳多在之

とかしらを見うしなひてやはし鷹の木居より  
出てつきまはす空

鳥頭をとほ。鳥をみ失ふ事也。木居は木にゐ  
る鷹也。こゑを取といへり。つきまはすと  
は。木より上を高くとびまはる事也。他流に

輪をつくるといへり。但舞あがるにはあら  
ざりける也。

岡のべの水にうつろふ手放しの鷹や野守の鏡  
なるらむ

水にうつろふは。鷹のかげのうつる體也。野  
守の子細不及注之。但他流の説多しといへ  
ども。當流には不用之。當流之説には野中な  
る水をいふ也。昔雄略天皇鷹狩し給けるに  
御鷹うせけるを。野守をめして尋てまいら  
せよと勅諛ありければ。御鷹は彼木のうへ  
にありけると申ければ。いかでとて是を窺  
覽と。奥義抄にも委しるせり。鷹のうせる  
時。しぎをふせると云事あり。ふせ様おほし  
といへ共。野守ふせと云事ありとなん。野守  
しき共云歟。

大空に立まふ鷹のとび尾をば鵲尾になして見  
まくほしさよ

とび尾とは。とびの尾のどく。尾のさき一文  
字にして。殊に中ひくに有やうなるをとび  
尾といへり。まふ共いへり。それによりうし  
なふ也。見てもみぐるしき尾也。鵂尾とは。  
百舌のどく。上尾ながく次第くになすけ  
なら尾。ならし羽。大石うち。小石うちへみ  
じかく尾持のあるを。もず尾とはいふ也。是  
は鷹まふ事もまれにしてほめたる尾持也。  
され共しゝをへたにあつれば。何たる鷹も  
舞うしなふ者也。しゝよくて舞鷹まはぬ鷹  
のとに候歟。又くせにてまふとも候也。惣別  
是見所有るといひつたふる也。

飛出る羽風も袖にあら鷹のましろの雪は拂と  
もなし

ましろは眉白也。常の鷹より眉ふとく白を  
云也。あらさ羽風にも。眉白の雪は拂とも見  
へず白さと云心也。付。眞白と書てしろの鷹

をいふと他流に云也。眞白符は當流也。まし  
らふと云白鷹歟。ましろ眉白也。まぎれたる  
事也。

かり衣たてる鶺鴒に手放せる跡をさし羽の野べ  
の遠方

手放はうづらにさし羽をあはする體也。鶺  
はさしはの物也。

かり衣すそごのさし羽青差羽みどりこそふる  
野べの春草

すそごのさしはとて。尾のすそごなるあり。  
あをさしは青さ苺なり。又赤ささしはも有。  
さしはと云字差羽とかけり。又小隼とも書  
也。付。他流に字多し。

鷹とばふ羽風に野べの露ちりて分る袂にたつ  
鶺鴒かな

うづらのとこを小鷹のとばひ出る羽風に驚  
きたつ體也。野べの露散ては。小鷹狩の心な

るべし。

一よりも洩さぬ小鳥けふとにつみてふ鷹におもほえぬ暮

一よりももらさぬ小鳥とは。いくよりもはづさずとると云事也。けふとには毎日也。つみててふはつみと云ふ鷹によそへて云心也。すゝめ小鳥共おほくとらせ。罪になるべきも更におほぬと云體ばかり也。

鷹にさし犬にかけたる鈴の音ふりすてがたき鳥の落草

鷹には鈴をさすと云。犬には鈴をかくると云也。ふり捨てがたきは。鈴をふると云を縁にして。落草の鳥捨てがたく思ふ事也。自然鳥たゝねば落をうち置事をば落を捨てると云也。落をばいかによく犬をもやりまはして鳥をたてゝ。鷹にとらす様にする物也。

さだまれるとつきの山に待かけて手放かへる

たかの鈴聲

定まれる鳥付とは。鳥の立て必行方有物也。その山の模様を功者は分別して。その方に鷹を待と也。

鳥おとすもりのめぐりにもらさじと木居より出てからむはし鷹

鳥おつると云べき事ながら鳥落すと云も。鷹飼なるにより。初心の人のためにしるす也。又おつると云心とおとすと云心すこしかはる也。おつると云心は。鷹あひも遙に引ておつる心也。又鷹もつかぬ鳥の遠引ておつるも同前。落すは鷹きつく鳥を追落す也。分別すべき歟。木より出てからむとは。森のめぐりへ鳥はしりぬけ。盗たちぬけてはと鷹心得て。木居より立出く。いくたびも打まはりく。高木居に梢を拂ひあがり。木居下をさしまもり。鳥を心かくる鷹。すぐ



れて氣のきゝたる逸物也。

落草やとをみはづれの鳥ならむおぼえばかりの野べの犬かひ

落草たしかに見すへぬをおぼえといへり。とをみはづれは勿論とを見のなき所へ引まはしおつる鳥也。鳥つかれたる故。とをくは引まじきところ推量して犬をやる事也。其をおぼえと云也。

おひはむる小鷹の鳥のむばらくろこもつちこえの羽やつかふらむ

こもつちこえとは。いやしき者のこもをあむそのあみ様。たがへちがひにもぢりやるどく。鷹の羽をつかひ。むばらくろ草村を羽をやすめずはしり。とび出る鳥をとる羽也。勿論逸物ならではつかはぬ羽也。この羽大鷹小鷹によるまじき歟。但小鷹は羽きゝ身かろき故。こもつちこえめづらしからず候

と云説あれども。小鷹も逸物ならではつかはぬ羽也。然ば大鷹小鷹によるまじき歟。大鷹もとより一かどすぐれ逸物の羽也。

見鳥するとを山鷹の手放につけなきをして雉子たつ也

見とりとは。人は見つけね共鷹見る物也。とをく見てはやるを手放してやるに。鷹打いれとらんとする時に。つけなきをして立事也。つけなきとてちけんくと鳴聲を云也。犬にても又は物におどろきなく時のこゑ也。知犬と書也。

入あひて草とる鷹の小篋はらのちこをつける鳥の哀さ

入あふとは。鷹ひつつきて落草へ同じやうに鳥とひとつに入あふ也。草とるは草にてとる事也。のちこつくとは。とられてじいくくと鳴聲也。つけなきにはあらず。

追落すしげきの山の鷹の鳥むことりよめとり  
立かはりけり

むことりは。おんとりを追落すに。疲の鳥た  
ゝず。別のおんとり立かはるを云也。又よめ  
鳥はめん鳥也。

餌袋におき餌さゝてはいかならむ昔も鷹にい  
むところさけ

人に鷹をやるにも。餌袋におき餌入べき事  
なり。おき餌とは雉の事也。雉なければ鷺鳥  
小鴨鳩までもくるしからず候。それもあり  
合なくば。小口餌にても可入事也。小口餌と  
は小鳥の事也。おき餌をばさすと云也。本歌  
金葉集に入たり。證歌。のき羽うつ眉白の鷹の  
餌袋におきゑもさゝてかへしつる哉。此鷹  
の餌袋におきゑをさゝてつかはしけるに。  
その鷹そこねたる也。それよりふかくいむ  
也。鷹の死ぬるをばそこねたる共さかりた

る共云也。哥には讀候へ共。のきたるとはい  
はず候也。山にてさかると云詞をいむも。鷹  
の死ぬるをそんずる。さかるなど云心に  
付て忌也。下狩の者共山よりさがれと云詞  
をばふみありよと云也。かりそめに見てし  
とだつを立しのびかたのゝきじののきはう  
つ也。此哥如願法師哥也。此のき羽は立のく  
羽也。一樣にあらず。

春の野に巢臥て鳥のたゝぬ日はかざむけの毛  
をたつるはし鷹

巢臥とは。春の末つかたより。眞鳥巢をはな  
れ兼て立かぬるを巢臥といへり。まとりと  
は雉の事也。風向の毛は鷹のうしろかまち  
に白さけのまじりたる所にある毛也。腹を  
立る時の毛也。

とりかはぬ夕はいとどうれへの毛たつる物か  
らしためにぞなる

愁の毛。氣のわろき時立る毛也。下めになる  
とはしゝひくる事也。やすると云事也。やす  
るとは云まじきと也。但やせたるといひて  
もくるしからぬ詞。鷹ときによるか。やせ鷹  
を飼あぐるなどゝ云時にいへり。ひけ鷹と  
はいはず。ひけたる鷹とは云也。やせ鷹とは  
ひけつまりたる鷹の事也。ひけつまればや  
まひおこり煩故に。やせ鷹と云詞常には心  
持ともあるとなり。馬鷹は不淨まけとて。物  
あやかりをするにより。あしき詞をば忌也。  
口傳多之。

力餌や心をそへてかひもせん鷹の尾すけのか  
はる見ところ

力餌とは。つかふ鷹のよわくならず。肉たか  
ならず。よきしゝにて。終日つかはるゝ様に  
心をそへかふ餌也。山につかふ鷹よわきと  
見て。力餌更にたよりにならぬ者と云傳

へたり。扱こそ見所を能見て分別すべしと  
也。尾すけとは尾のうらに白き毛のあるを  
云也。尾すけのおほきをよき鷹の相に云り。  
つかふ鷹の見所。尾すけにも有と也。又尾す  
け斗にも限るべからず。多き事なればしる  
しがたし。

おほ空により羽ちかづく鷹のとり沓を結びて  
なぐるとぞみる

大空にて鳥をかけておつるを。沓を結びて  
なぐる様なりと。人にもかたる詞也。空にて  
とるを中にてとると云者おほし。比興の詞  
也。中にてかくる程なるは。鷹かけたると云  
也。高く空にてとりくむをば。大空にてかく  
ると云べき歟。

峯渡すますかきの羽にかりのこすいなばに落  
る鷹のおひ鳥

ますかきの羽は。谷へいらす一文字に渡す

羽也。逸物也。鳥にはなき羽也。鳥は谷へ入  
さて嶺をこゆる物也。鷹も鳥のとぶごとく。  
谷へ入跡に付て追をば。谷入するとて嫌事  
也。鷹心さかずわろき事也。

しとゝなき驚なき餌なきひしめかば心をそへ  
よ手放の鷹

しとゝなきとは。鷹ちり／＼としとゝのな  
く様に云也。驚なき。わしのなく様也。ひし  
めくとはあらき時のこゑ也。其品々を能習  
ひ見はからひて手はなせと云事也。

かけおつる遠山鳥の草がくれむしりて鷹のぬ  
すみはみする

ぬすみはみとは。人の行つかぬさきにぬす  
みはむを云也。必のち／＼には鷹こうゆけ  
ば。鈴を木の根岩根さしねなどにしきあて。  
鈴こゑのせぬ様に盗食也。其を鷹鈴をしき  
てぬすみはむなどゝ語る也。

若鷹の鳥屋出の胸の遠山毛はつとり狩にあは  
せてやらん

遠山毛とは。毛をかへたる中に。若鷹の毛所  
々に残したるを云也。見事なる物也。はつ鳥  
狩はとやを出し。はじめて山へあげて取飼  
也。

とや數をふませてつかふはし鷹の耳かたきを  
ばいかにしてまし

鳥屋かずをふまするとは。毎年毛のかずを  
かさねたる鷹なるべし。古鳥屋也。耳かたき  
とはおけ共わたらぬ事也。木居をふまゆる  
と人に語る詞也。惣別鳥屋數をふみふるく  
なれば。惡功ゆきて渡りかぬる物也。田物し  
ゝ結句さだまりたる様にあれ共。ゆき／＼  
て山鷹のしゝ大事と云り。其故はあさより  
肉能もやすく渡る様にあれば。夕よわくな  
り。ゆふべしゝよき様なれば。朝は木居をふ



まへ。其間に時刻うつりて物數ならず。昔せ  
いらいとて鷹の名人此餌飼を分別せり。あ  
したよりしよく。暮まで同じ肉心にして。  
鷹病もなく鳥を取事也。こちくと云女。夫婦  
の中に秘して不洩。四日の餌飼。付。七日の  
餌飼。みつ餌。かへるし。順逆の餌かひ。中  
餌。つめ餌。ひらく餌など大事に云事をも。  
彼女を心やすく思ひ。是をかくさず。殊に藥  
飼。灸所。鷹諸病の療治をも女に鷹をうけさ  
せ。朝夕とりあつかひしに哥を書てやる。こ  
ちくてふ事かたからば笛竹の一夜のふしも  
人にかたるな。こちくてふ又とかたにちぎ  
るとも一夜のふしも人にかたらじ。是を鷹  
の秘哥と云也。付。小壺の水の口傳。梨の木か  
ぶにたまりたる水。又竹のきりかぶ榎木。其  
外口傳。

む山ふみ歸る麓のくるゝ日に命のがれてなく

さゝすかな

む山ふむとは。鷹をつかふに仕合わろく。ひ  
とつもとらせてむなしく歸る事を云也。命  
のがれては。狩人の歸る跡に雉のなく體也。  
春山なるべし。

おさかふにえならぬ物は餌鳴して雲井をかけ  
る巢子の隼

置かふは。鷹を手はなち。餌を見せておきた  
つる事也。鷹よぶとはいはず。おくと云也。  
手に渡るをば勿論わたる又おきとると云  
也。雲井をかけるは。隼にかぎりかけらす  
とて。手にわたらむとする時に。おき餌をか  
くす時。其儘空へあがり雲井をかけりまは  
る事也。近來鳴鷹とて空へあげつくる也。  
隼にあてたとされて白鷺の淺澤水に羽ぶくあ  
はれさ

隼の鷺にあたるをばあておとすと云也。大

鷹はあたりおとすと云也。

隼のこくびをつきて肩をわりあをつ羽風にか  
りをこそとれ

こくびをつくとは。うなづきて鳥をみる事  
也。かたをわるとは。鳥をみてちく／＼とか  
たをひろぐる體なり。あをつとは。兩方の羽  
をひろげて。ひら／＼とあをつ事也。隼にか  
ざりたる詞也。大鷹にかたをわるとはなき  
詞也。鳥にとび出／＼するをばはやるとい  
ふなり。是は何れの鷹にも云詞也。

さき鷹のあておとしたる天津鷹あひとした  
るあとの隼

さき鷹はささへあはせやる隼也。二鷹につ  
かふ事也。

あはせみん冬田のかりにふたつ鷹ころとりを  
してあはぬ隼

ころ取。めん／＼にひとつづゝ鷹を取を云

なり。

むれてゐる田面のしろの天津雁あふことりす  
る鷹のかしこさ

むれてゐるは大むれ也。鷹詞にも大むれと  
かたる也。多くつれておりゐたる雁也。しろ  
とはよきあはせ所を云也。水もなきかり田  
の跡はたけなどの事なるべし。

春の日のながし／＼になる若鷹はかつほし／＼ま  
でとりやかかわまし

ながし／＼。ひけつまりたる事也。へたの物  
也。鷹ぞこねあやまち有事是多し。餌につめ  
ひらさと云事あり。其を分別すべし。かつほ  
し。鳥の胸のひつたれのし／＼に。一重かさ  
なりであるし／＼なり。惣別は飼残す肉也。

さほ姫のましろの鷹のかねつけ毛ほのかに見  
えて日も暮はとり

さほ姫かへり。春うち落したる鷹也。かねつ

け毛。くれはとり。何も鷹の毛の名也。眉白前に注之。眉の白き鷹也。

鷹山をこえ行鳥にあひあはせうちかさなりて追ぞあやうき

鳥一にあやまりて鷹二もとあはする事也。

軍にかはり。大鷹は二あはするとならぬ者也。とりあひ。つめいり。あやまちある事有物也。うちかさなりて追と云も鷹詞也。

しくたかに人や見るらむひくとりをうけおふ鷹の羽むけあやなし

うけ追とは心にいれずゆるくと追ふ事也。羽むけは。なまじゐに鳥の跡につきて行共。しくたかなればせんもなきと云事也。

鳥落る尾上の鷹の草とりにすゝはしらせて尋かねけり

鈴はしらするとは。鈴のおちうする事也。草とりは前に注ごとく草をもむ事也。

鳥たてばまづかりぐちをふまへよと犬かひばかりおちに行也

下狩共其儘狩口にふまへ待事也。犬飼ばかりおちにはしり行。いきとりにもせずば。犬にたてさせ鷹にとらせんと。犬飼は落へ行事也。いきとりとは行取也。たちのまゝとるを云也。立のまゝとる共語詞也。

ひだり山眞山にかりて鷹人のあをりかけにも草やうつらん

左山はひだりに狩事也。眞山は順にかかる事也。右山とはいはず。あをりかけとは。山のうらおもてを一度にかるを云也。馬の泥障にたとへたる狩様也。

狩入て出山に鳥の立ゆくを又あらはむる鷹のふるまい

出山とはおくへかり入。出さまに狩事也。あらはむるは。きつくつよく追はむる鷹の羽

ぶりと也。又しきはむると云はすこし心かはるか。是はまぢかく鳥を敷はむる事也。又木などのほそき枝に鷹の有をば。よわ木居に鷹あると云べし。よは木居をとるとは云まじきと也。

鷹あひはるかなれども野ぎはより立のぼる鳥をちかくとる山

たかあひ。鳥との間也。鳥あいとはいはず。野ぎは。さもとも云也。ふもとの事をいへり。立のぼり。鷹前へむかふ鳥をば。鷹ほしがりはやりとび出れ共。ひきすへく鳥よこめになる時。あはするにとりはずさず。まぢかく鳥をとらせたる體也。

するなれぬとや出の鷹の足ぶみにあしかはひきの羽風身にしむ

足ぶみをさする時。鳥屋出の鷹いまだすへなれず久しくとやの内にてあしかはをもさ

いぬにより。とやを出しさしたるにより。むづかしがり足革引をするを云なるべし。足革を引時は。必鷹の羽をひろげ羽風を立る體也。

箸鷹のとりしく鳥をほときかねわけくひをする犬やよくらむ

とりしくとは取かためたる鳥也。ほときかねとは。鳥を放て木居へあがる事也。わけくひは犬鷹を見しりてくはず。鳥をくふをわけくひと云也。かた口とまりたる犬也。付。もろ口とまりたる犬と云は。鷹も鳥もくわけを云也。

よびかけに木居ふるまひを巢鷹とやつかれの鳥のうするともなし

よびかけは。狩人の鳥のはしる方へ鷹をよびかけ。くれば木居をとりかへく高き梢にあがり。木居したをさしまりて。鳥を心



がくる鷹。逸物比類なきふるまひなるべし。  
付。巢鷹。鳥屋日向鷹なるべし。西國鷹奔走  
也。西國は大略巢鷹也。綱懸稀也。

のりまはし馬のうへより手放せば亂とりをす  
る鷹の鳥く

鳥によりあはする時は。鳥をまはす様にす  
るにより。馬上にすゑたる鷹を手放せば。あ  
れこれの鳥へかゝり取事也。其をらんとり  
といへり。

鈴をさし大緒をときつゝはし鷹を山にかさみ  
て鳥やかるらむ

たかを山へかさみあはする時。鈴をさして  
大緒をとく。大緒をときて鈴さす事有べか  
らざる次第也。

あら鷹も手袋引てくつろけはよつ毛のまはり  
見ゆるくい毛

手袋とは。とつてをにぎりて。腹の毛の中へ

さし入る事也。四色うしろの毛。くい毛。  
しろき毛。くつろけは見ゆる物也。鷺毛とも  
云也。

鷹もくさ鳥もはしりて大はかむみつ物たつと  
是をいふ也

見えたる體也。こつかれになり。鷹鳥犬一度  
に打入る草をみつ物たつと云也。口のとま  
りたる犬ならては。こつかれになりてはは  
なつべからず。こつかれとは鳥くたびれて。  
あし鳥になりはしる時をいふ也。

暮ぬれば鷹の追羽やわからしたらずかけし  
て山にゐかゝる

たらずかけとは。鳥をとらんとておひより。  
とつてを出すにとつがずして。鳥のにげの  
ぶるを云也。暮になればしゝもよはくな  
り。山をこす鳥につきかねて。山にゐかゝる  
なり。付。字には不足懸。居懸。

立のぼる深谷のきどすあはすればむかふかけ  
してあまるはし鷹

立のぼりてまへゝくる鳥をはやくあはすれ  
ば。鷹かけあまると也。鷹により力鷹はむか  
ふかけにかけとむる事もあり。むかふかけ  
にかけとめたるなどゝ人にも語る詞也。さ  
もとより鷹前へ立のぼる鳥をば。ひきてよ  
き時分にあはするにはづさぬものなり。前  
にも注之。山をつけまはす時は。いかにもは  
やくあはすべしと。功者ども申傳也。

ねりひばりとこはなれ行中空におひ羽のかろ  
くあがるすごもり

ねり雲雀は毛をするひばりの事也。六月土  
用の内より。七月盆の前後最中なる者也。ね  
り雲雀はこのりの者也。雪雀毛を如形して。  
後に尾を一度におとすもの也。それをばし  
んとう雲雀と云也。しんとうひばり少達者

なれ共。これも鷹にとらるゝ也。又尾羽そろ  
ひ。四季にかぎらずとふ雲雀はからひばり  
也。又八月へかゝり。ほじろ毛をする也。ね  
りしとゝ共ねり頬白共いふなり。尾羽かた  
め毛をかへぬは。からほじろと是も云也。別  
の小鳥にはからすゝめなどゝも更に不可申  
也。からひばり。からほじろと申外には。か  
らと云字そい候小鳥これなく候。からしと  
ゝ共不申候。冬のほじろをばあかしとゝゝ  
は申候歟。付。常にあかしとゝと云人あり。田  
舎には云歟。冬の云也。

立て行中に羽風やよはからし女鳥すきする鷹  
のならひは

めん鳥羽よはきにより。鷹よく見知取よき  
故に。めん鳥を取たがる者也。それによりめ  
ん鳥をとれば。いか程ももぎて。おんとりに  
とりかふ様にすると也。とりかふとは。雉の

左のかた胸をたくさんに飼事なり。但法量其日のしゝによるべし。かつほしゝとて飼。口の下に又別にかさなりたる肉あるを云也。鷹のとりとて人につかはす鳥をば。かつほしゝかはぬ者也。鷹の鳥いかにもうつくしく。尾羽をもぬけぬ様に。鳥さたなくなき様に飼事。鷹匠の故實也。鷹匠と云字三あり。處により心持有と云事秘事也。鷹匠。鷹將。鷹丞三様にかけり。口傳有之。付。又鷹師。是も匠同前歟。他流に數多在之。かり衣日をかさねてもかひぞなきまだあら鷹ののき羽うつみゆ

此のき羽はあら鷹の人におそれてたなささへのかく様にするを云也。たかにより見しらぬめづらしき鷹匠のすゆれば。かほをまもり候を。人にかたるには。たか面嫌をして。かほをのくるなどゝ云也。

空よりもあたりおとしてはし鷹の草とる鳥やのき羽うつらむ

あたりおとす。大鷹に云詞。隼にはあておとす。あつるなどゝ云也。前に注之。草取同前。右に注之也。此のき羽は死する時の羽也。鳥の鷹にとられて死ぬるをばのくと云也。人に語るにも。鳥ははやのきたるよなど云也。死にたるなどいはず。鳥ののき候をなをる共云人あり。前にも注之。古哥に。のき羽うつ眉白の鷹の餌袋におさえもさゝてかへしつる哉。鷹そこねたる也。兩説よく分別すべしとぞ。哥にものき羽うつましろの鷹とよみ候得共。鷹詞には鷹の死ぬるをば。そこねたる共さかる共云也。前に註之者也。

あつめたるあかけに野され山がへりもろかたがへり集鷹巢まはり

あかけは若鷹の事也。され共集鷹の若鷹な

どをあかけと云べからず。字には網懸と書。又黄毛とも書也。日向鷹の巢鷹若鷹をば日向巢の若鷹と云べきと也。野されには種々の説あれ共。かたかへりほどなるを云歟。山歸りは山にて毛をかへたる鷹也。山歸りにかた歸り。もろ歸り。もろかた歸り。もろく歸りなどいへり。巢鷹は子飼也。巢廻は巢立を云歟。西國たか東國鷹によらず。双半双こがんぎまざごりんせいと云事鷹の秘事。見所肝心としるし置と也。口傳在之。付。九脉。矢筈脉。とる脉見る脉の大事也。見所の口傳に付て注之也。

はし鷹のさほ姫がへり小山がへり春は色々の名にや立らむ

節分こえて春うちおとしたる鷹は。さほ姫がへり共。小山がへり共春のあらたかを云也。

まへうしろ赤符の中にあかきをばにこのりとながいひはそめけん

にこのりとは一かどすぐれてあかきを云也。はいたかにはなし。鵠のあかきをばしほといへり。字には紫鷹とも紫鵠共書たるがよきと云也。丹兒鵠と書てもにこのりと讀也。又このりと云字。兄鵠とも兒鵠共書也。おぼえ行犬のかしらに木居づたひつかれの鳥をおしむあか鷹

赤鷹はの符のあかき鷹也。大鷹にある也。あかけの時に云也。赤符とはいふまじきと也。惣別大鷹に赤符黒符の事當流に不用之。他流には申ならはすとみえたり。口傳。付。大黒符は各別也。ウケガイノ下に針ヲスリナラベタルヤウニテ。尾スケサキマデ。符ヲキリツメタルヲ大黒符ト云也。

鷹によりせまち町かたやかた尾にしとをま



じる鷺毛くい毛

せまち尾。まちかた尾。しとゝ尾。何れもみな尾の符の名也。鷺毛くい毛は白き毛の事也。付。尾の符に鷺すり尾よしと云もあり。しとゝ尾に尾よしは似たれ共。すこしかはる也。口傳。

雪じろのしらふましらふつまじろにあをじろほうじろ舌も白鷹

是はみな白の鷹の類也。首もいづくも常の鷹也共。舌の白き鷹白の内也。白鷹の符なり共。舌白くなくば白にては有まじきと云説あり。これは子細口傳有と也。きた山兄鷹さはめて舌しろきと也。是にて分別すべしとぞ。北山も館によるか。辨慶巢とて目にあざの有心歟。是も所により候と云り。付。初草セイロヲマナイタフチ鷹のよき館也。

鷹の符に黒符黄黒符赤符紫鶴さてはうづら符

又は紅葉符

是は鶴にある也。前に注すどく。紫鶴又は紫鷹何れをもしぼと讀也。他流之説雖多之。當流に用來る趣凡如此歟。付。藤符と云も有歟。鳴符と云もあり。鳴の符のどし。

はし鷹の梢をたかみくるゝまでわたらざりせばひき鳥やせん

引鳥とは。鳥に緒をつけて。わたらぬ鷹に間を遠く置いて引事也。ひき鳥にする事は。鷹にくせ出來て嫌事也。され共わたらねば。引鳥又はいけ鳥をもへ緒にて足をゆひてとばせ。なげ鳥などゝて。いけ鳥にかぎらず。口餌にてもなげ出せば。鷹必木居より出て。とりむしるをすゑあぐる也。鷹をすゑあぐる詞にはすゑ取共云也。さしとりと云は。草などへ鳥をしきはめ。小紫にも又は草にも。鷹鳥を心がけつかれをおしむを。靜により

てするをば。鷹をさしとると云也。する  
とる共。するあぐる共くるしからね共。大鷹  
をばさしとると云べし。するあぐると云は。  
鷹のうせたる時。するあぐると云によりて。  
少心持有べき事と。高國朝臣彼聞書に注し  
置れ候。するとるさしとる不有<sup>可無</sup>有巨難候歟。  
又あら鷹を野山にて鳥さし棹を持てさすを  
ばさしとすと云也。さしとるは誤也。人の  
鷹うしなひたるをひろひたると云は。鷹の  
家の口傳に申とぞ。又うせたるをそらすと  
云事。隼に云詞也。香川美作守書にも注之。小  
鷹にはさしはをそらすといへり。大鷹小鷹  
うせたるなるべし。隼さし羽いにたるをう  
せたるといはず。それたるそらしたると云  
事。子細有と注之。あまねく人の不知事とな  
ん。され共さゝいべとて隼相傳の家あり。其  
書にはそらしたる勿論。うしなひたるとも

申。其程の越度にはなるまじき歟。され共大  
鷹鶴などをそれたると云べからず候かと注  
之。又鷹に、がしたるにげたると云は。籠に  
入たる鷹。籠を出す時とりはなちたるを。に  
げたる共にがしたる共云。あらたかのいま  
だとりかはすなづかぬ。鷹ほこをもひかせ  
たる程のをにげたるにがしたる成べし。籠  
鷹あら鷹同前歟。又いにたると云詞は。あし  
かはなどかりときうするを云也。とやより  
にげたるは。とやをくゞりいにたる共にげ  
たる共云べし。

見鳥せば先犬とりてあはせなんとつたてゝゆ  
く方をしらねば

見鳥は前に注之。とつたつるとは。鷹の鳥の  
ある處を見て行とらんとする時。鳥にはづ  
されとりかためず。雉のそのまゝ立て行を  
跡につき行事也。跡へとつたて追もどらん

も。さきへ追ゆかんもしらねば。犬をとれと  
なん。

たてば鷹おつれば犬にたへかねてあがる木鳥  
ぞあはれなりける

見えたる體也。木鳥とは木に雉のあがるを  
云。鷹も犬も逸物なれば。よく鳥も心得て。  
功の入たるふるからはぬすたち。葉の茂き  
木にあがりかくれてあるを。犬はなつけて  
おぼえ。空を高はなにかくるを。犬飼心得て  
見つけて。うちたてとらする也。雉を鷹詞に  
もきじとはいわず。但鳥と云べし。おし出し  
て鳥と云は雉の事也。雉をまとりとは。時に  
より山にても云也。山鳥のたつ時。今のは山  
鳥。いまは眞鳥たちたるなど云也。

狩人のつゑうちぬればかみ捨て山おちしたる  
犬はあやなし

かみ捨てはかみやむ事也。時により犬心に

いれずそせんなるを。犬かひつゑにてやま  
する事を杖をうつと云也。杖にうたれ腹を  
立て。山より我方の家へ鈴をさはぎながら  
かけもどるを。山おちするといへり。付。犬に  
杖をさすと云事有。鳥の落を杖にてゆびさ  
しするどく犬におしゆる事也。逸物の犬は  
やがて得て走り行。鳥を追たつる也。但犬に  
よる也。まれなる事なり。むかひの山に鳥の  
落あるを。犬をよびつけて杖にておしゆる  
を。則おしへ杖といふ也。

あらはなる枯野の中に落はまる目つぎうづら  
や鷹にあはせん

めつぎうづらとは。鶉のふしたるところを見  
つけたるを云也。目つぎうづら鷹にあはす  
る事習ひありと注之。ならひをしらねば。必  
十文字になげちがふといふなり。小鷹の事  
也。

朝ごとに外架の鷹に水ふけば手ふるひをして尾そゝりをする

朝毎にとほこへ出し水をふけば。鷹の目の藥。其外心いさみてよきといへり。水をふくに子細あるといへり。秘事に申ならはし候歟。先水をふけば。手ふるひをして尾そゝりをする。手ふるひとは身ふるひ也。尾そゝりとは。尾をよこさまにゆる／＼とふる事也。手ふるひの事。すゑたる鷹の身ふるひを手ふるひといひ。ほこにつなぎたる鷹の身ふるひと云事本義也と云々。されども手ふるひと申付來候歟。たとへば鷹を一もと云事。是又ほこにつなぎたるを云也。一居一連何れをも一もと云ふべし。一居一すゑ共讀人あれ共。一もと云ふみたるがよきといへり。たとへば馬によつ白と云毛をゆきふみ共いふ人あり。同じ心歟。よつ白とは踏雪とかけ

り。他流の説多之。又籠鷹もすゑたるも一はねと云事本説也。一はねとは一羽と書也。一羽をひと羽と云説もあり。但近來此道不堪の人。何れをも一もと鷹なれば時によらず同じ様に云事如何。たとへば軍陣にて敵のまくをば引たると云。又うたせたと云は。敵にげちり。人數をうたせたと云心也。味方のまくをば。打たるまくをうてなど云。是九万八千の軍神を祝ひいさむる詞也。又船中のまくははしらするといふも。順風に舟をまほにかけはしらせよと。龍神をなだむるいわぬ詞也。處により時により。昔よりあひさだまれる詞をつとめずしては口惜事なるべしと。諸木抄に注之。又隼をば一二など云たるがよきと也。大鷹と云字も多し。角鷹ともかけり。箸鷹。是は他流に大鷹と讀歟。箸鷹。是は子細候て。鷹の惣名に申



と心得べし。箸鷹と云事は。組注之古注に。盆の聖

靈をまつりたるあさからの箸を取て置。鷹

を鳥屋より出す時。たいまつにともして。夜

出すによりはし鷹と云と也。ある鷹の書に。

四月八日に鷹を鳥やへ入。七月十五日に聖

靈のはしをたいまつにこしらへて。夜鳥屋

より出すと注之。不審の事也。鷹によりはや

く毛をして出るもあり。又おそく尾羽そろ

ひ。とやより出るもあり。不定なる者也。然

者必盆の十五日の夜。とやより出るにはさ

だまるべからざる歟。たい彼箸を取て置。鷹

のとやより出る時。たいまつにこしらへ出

すと心得べしと也。又説。天竺の箸國より鷹

出るによりはしたかと云。兩説也。西國日向

巢の大鷹は毛をはやくする物也。更にさだ

まるべからずと也。惣別はし鷹とは鷹の惣

名と注之。子細たとへば鶯を哥道に百千鳥

といへる心なるべし。百千鳥は小鳥の惣名  
にもいへり。古今集の哥にも。百千鳥さへづ  
る春は物ごとにあたらまれ共我ぞふりゆ  
く。此哥にて聞へたり。分別すべし。又はし  
鷹は鵠を云との説もあり。唯鷹の惣名と知  
るべし。

行まはり犬をやとらんつかれたる鳥はしげみ  
につぐ藪原

犬をやとらんとは。藪しげみなどにては。は  
なちやらでは犬もかまぬにより放ちやる  
を。とらへよと云事也。鷹も犬にくわせじと  
心がけ。又つかれの鳥鷹にとらせんと思ふ  
に。犬あさはさみてはとゆきまはりく。  
下かりの者共犬のかみ行さをとり心が  
け。犬ちかしと覺へたらむかみふりをよく  
見て。犬をとれと云事也。犬をとれと云は。  
さばきをとりひかへよと云義なるべし。

あらはなる小田のすゝきのかたうづらとをば  
まりして鷹にとらるゝ

遠くおひはめたるを。とをばまりとはいへ  
り。前に注之。大鷹小鷹にかぎらずといふべ  
きといふ歟。小鷹の小鳥うづらは勿論也。大  
鷹もさじ斗をばとをばまりと云ても。くる  
しかるまじきかと云説あり。大鷹さじをと  
おく追落たるは。とをつかれ又は遠くおひ  
つかれをおさめたるなどゝ云べきと也。大  
鷹にとをばまりおさながましき様なると。  
昔もせんさくありと聞えたり。され共越度  
程には有あじきかと云々。たとへば道かたの  
詞に。弓に箭をはげてと。常の人の詞也。あ  
やまり程にはなけれ共。弓に矢をはめたる  
と云たるが。同くはよきと。小笠原家の抄に  
も注置と也。此類ひなるべし。付。かけ鶉とは  
馬上よりあはせとるを云。

としくにとやまさりするはし鷹にたつ空も  
なき鳥の哀さ

鳥やまさりとは。鳥屋出に猶取乗逸物をす  
る事を云なり。

ひく鳥の端山の木居を取替て梢を拂ふ鷹のか  
しこさ

木しげき中を鳥の引おつるを。鷹つきてあ  
たりの木居をとりかへく。梢をはらひ高  
くあがりゐて。つかれの鳥を心がくる事也。  
木の高ければ鳥をうしなはずやすくとる  
也。逸物は心さゝかしこきと云事也。木居を  
とると云を。田舎他流には居木といへり。當  
流には不用之。又鷹のむちを鷹匠腰よりぬ  
きてもつ時。他流にはたゝきたるかたを跡  
へなし。とがりたるもとの方をささへなす  
事。當流に不用也。むちのたゝきたるさきの  
方を則ささへなし持也。當流他流のかはり

如多之。うけとり渡し。弟鷹兄鷹にあつるむち。足革斗の鷹。又はへをさしたる小鷹大鷹。おき縄同前歟。ふせ鷹。籠鷹。貴人同輩下臈其品多之。難注之と書物共にも見えたり。又哀傷に鷹をはなつ事習ひ有となん。又彼物語にも候歟。鷹の家に秘て。此鷹は服鷹と名をいへり。服鷹こゝに云がたし。いらざる様に有ども。古今集を始めて。廿一代集にも哀傷の哥いらでは不叶子細。和哥の道にいへり。哥には云難により。是も鷹の道に秘おくゆへに。いさゝか詞にしるせり。付。服鷹の足皮大緒色白。但足革は其儘也共。大緒は紙にてうつ也。

そことなく木がくれふかき鈴の音しるべばかりの鷹のおきこゑ

見えたる體也。鷹をば見つけね共。木しげさ中の鈴のこゑを聞て。其をしるべにおく事

也。

水鳥をかけおとしたるみなと川鴨居の鷹のつかふみさご羽

かもゐの鷹とは。鴨のゐずまひの様にたちのびず。よこ様に見ゆる鷹を云也。みさご羽とは魚をとるみさごの事也。そらにため羽をつかひてうちこみ魚をとるどく。鷹も鴨を水へかけおとし。空にみさご羽をつかひ。水より鴨のかしらを出すを見て。うち入とる羽也。

かけはづしかけほぐらかしはし鷹のとりしく鳥や丸をくまゝし

かけはづしはかけそこなひたる事也。かけほぐらかすは。かけもかれいさゝか手のあらき様な事歟。又かけつるゝなどゝいふは。かけてのためかたに鳥にくみしなひ様であつるを云歟。とりしくはとりかたむる

事也。丸をくまゝしとは。取たる鳥をおさへ。小刀にて鳥の左のわきをさして。丸をとり出し。鷹にかふ事也。丸とはきもの事也。丸をくむ共あぐる共云也。

たゞしくも覺えて見ゆる鳥跡かなさはきたてやる犬のかみふり

たゞしくもおぼえてとは。定と覺え行事也。前にも注之ごとく。さはきをはなちてやる事を。さはき立ると云也。犬のかみふり。かむ體也。鷹の羽ふりといへる心也。犬のかみふり無比類體也。

あら鷹を末野の原にわけいればこくびをつきて鳥やみるらむ

こくびをつくとは。鳥を見つけてうなづく様にして。鳥を見こうたる體也。見こうたるとは。鷹詞に云は。目をはなたず思ひ入て。鷹の鳥をほしがる事也。鳥を見て目をつけ

てまはすは見おくと云歟。鳥をほしがり  
とび出るをば。鳥にはやる共とび出る共か  
たるべし。見おくと云は。山にて眞鳥のた  
ちひくを見る時。すこししゝ高き時の體也。  
とをはやりと云は。田物などに鷹をあはせ  
んとてよる時に。とをくより鷹鳥をほしが  
り。とび出はやるを。とをはやりをするとい  
へり。鴨からすふぜいにても。又雁鶴こうに  
よらずとをはやり嫌事也。但初心なる鷹は  
とをはやりをする物也。田物につかひ入た  
る鷹は。後にはなをる物也。不器用なる鷹は  
何れもおそくなをる也。器用不器用は何れ  
の道にも有ならひ歟。遠はやり。大鷹にもか  
ぎらぬ詞。小鷹にも云歟。

うふたつる巢子の中にも巢がへり毛巢おとい  
ひにし鷹やまさらん

うふたつるはそだつる事也。巢歸り毛はこ



れは若鷹の毛の中に白き符あるを云。必逸物する也。巢おとゝひは鷹一巢の内のおとゝひの事也。

のり毛よりおろす巢鷹のきはりなば足緒をさしてかはん丸ばし

のり毛は白きわたげ也。わたげ共云歟。きはりとは尾羽かたまりそろふ事也。丸はしいけ鳥を鷹にとりならはする事也。丸はしと云子細は。巢鷹のはじめは鳥をとる事をしらぬによりて。からすにても又は鷺にても。鼻のあなへかうよりをとほし。した箸にてしかと口をあかぬ様にゆふて。とがりたるはしのさをまろくきりて。鷹にくひつかす。又つかぬ様にこしらへて鷹にとらす故也。但こしらへ様多し。難注。鷹鳥をとりにならふ始めに。くはれつかるればこるゝ故也。からすなどをば。つめをもとがりたる

さを一文字にきり取て。あはせても鷹につめのいらぬ様にこしらゆる事故實也。物香してのべ行跡もけちがへぬ庭だつ犬ぞさかとりにかむ

物香は鳥のはしりたる跡をはなつけたる事なり。のべ行ははしりたる鳥のごとく。あとをして行かむ犬なるべし。跡をして行と云も鷹詞也。けちがゆるはかみちがへたる事也。庭だつとは。久しくつかはで置たる犬なるにより。かみちがへたると云心也。さかとりははしりたる鳥のどくはかまで。さかさまにかみ行により鳥たゝぬと也。

程ふればもみいれしさへたとふるにかたいりなるはむべもなま鷹

もみいるゝ鷹と云はつかひいるゝ事也。他流田舎などにはせめいるゝと云也。馬をこそせめいるゝとはいへ。鷹には如何と彼諸

木抄に注之。其上に鷹など野さし羽に鳥を  
つよくをひ。雲雀などを空へまきあげ／＼  
するをば。時によりてたか鳥をせめたと  
云事。是も鷹詞也。鷹鳥をとるは。心いさみ  
て鳥をとりくはむと思ふ様に。しゝをあて  
つかふ物なれば。かた／＼せむると云事非  
本意也。もみいるゝと云詞當流也。たとふる  
とは鳥をとりのく事也。手の内をわするゝ  
鷹也。かたいりはしか／＼とつかひいれぬ  
鷹也。なまたかはむざととりかふしほをぬ  
かし。いたづら物になり。しか／＼鳥をとら  
ぬを云か。とりしらみたる鷹程にはあるま  
じきと也。とりしらむとはたととらぬ事  
也。あをさぎをば大鷹に春夏は青鷺のくわ  
せとてかひ所あるとなり。それをしらねば。  
鷹によりとりのく也。鷹青鷺にしらみたる  
などゝ語る詞也。鷹雁鶴にしらむは。うたれ

ふまれ。目などはかれいたみこるゝ故なり。  
青鷺にしらむはかひ所の故也。鷹の家の秘  
事にいへり。付。とりしらむ事を他流の説に  
され鷹共云也。

とつ鷹のくもてわかれのあをとつてまびさし  
あれてかほはつみがほ

とつ鷹は鳥をよくとる逸物の事也。取鷹也。  
鳥鷹にはあらず。常に人の二物といへる事  
越度誤也。逸物と云字。一物とかくと心得い  
へる歟と。高國朝臣申されしと也。二物と人  
の常に云は。しか／＼鳥をとらず。すぐれぬ  
鷹を云と聞えたり。にかたなるといふべし  
となん。青とつてはあをきとつての色なり。  
これをこのむ也。黄とつては嫌也。くもてわ  
かれとは。ゆびのまた／＼のわかれ様也。と  
つてにみのなきをこのむ。足のあひだをば  
毛なしはきといへり。ひちをばこひちとい

ふなり。こひちの毛をばほうしやうの毛と云也。ほうしやうの毛は長かれといひつたへたり。鷹の名所あまたおほし。難注之。相形圖とて政頼秘藏の書也。みる脉とる脉。鷹のよきあしき。又は諸病灸所までしるし置也。みる脉とる脉の事。秘密の條々をば政頼養性の部とて。藥飼。しゝむけ。餌飼つくる。餌の次第。病の名見わけ様注之書也。尤重寶也。但口傳多之。かほはつみがほと云事。大鷹のかほはつみと云小鷹のかほのどく。かしらのうへひらく。まびさしあれ。あをはしふとくて。くびこみふかく。うけかひひらき。こくびぬけあがりたるをこのむ也。うけかひとはしたはしのしたをとがひ也。おとがひとはいわぬ也。つみと云字雀鶴と書なり。ゑつさいとは菩提雀と書也。其外他流に字多之。

はし鷹のとれるうさぎのかひ所べにつけそしと丸にむちうち

うさぎの取飼所おほき事也。以上七ヶ所歟。秘事にいへり。鷹のとるうさぎのかけやうかはる也。惣別うさぎはむづかしきと也。つえのうさぎとて。下狩の者共杖のさきにて打とめたるにも。かけやうあるとなん。付。犬はさみのうさぎかけやう在之。

朝鷹に鳴鳥さゝて夏くればわすれかひしてとやへいれけり

朝鷹。春は鳴鳥をさゝふせてとらせて。夏四月の比よりわすれかひをして。鳥やへいれよとなんいへる事也。わすれかひとて。とやへいれんと思ふ前に。取飼には女鳥よきといへる子細。いさゝか秘事にいへり。されどもおろかなる鷹は。たゞいく度もおん鳥に取かふ事を用ふる也。わすれかひと云事。人

の不審する事也。わすれずかひにてあるべきと也。是は鳥屋前によく取かふ。鳥やへいるれば。鳥や出によくおぼえ。鳥をとる様にとの事あまりに秘して云と也。見つけたる鳥を物もなしといへる様の事歟。又わすれかひにめん鳥をかへと云説多之。先めん鳥は春夏あぢはひよきといへり。おん鳥は春夏味ひわろきにより。おん鳥のあしきあぢをたふくとかへば。其味をわすれず。とや出にしらみてはと。故實にてめん鳥にとりかふ。めん鳥にておん鳥のにがき味ひ。忘れかひと云子細有と也。又おん鳥は陽也。めん鳥は陰なるにより。陰におさめ陽にむかはんと。のいはひ事にて。鷹を鳥やへ入る日は寅申を用也。午未をいひなり。諫方明神へみきなどをそなへ。鳥屋をするくと事なしかひとつけ。千秋萬藏といはふ事。是鷹の

祈禱なり。付。忘飼の事。北へめん鳥をたつる様にして可取飼と也。口傳在之。

這一冊者。西園寺相國鷹百首。并中納言藤原定家卿鷹の哥よみ侍りける三百首を見て。わづかにおもひわきまふる事を百首の哥にあらはし書付けり。詠哥大概にも詞以舊可用とありけれど。古人の哥によみならはしける詞。よみならひ侍らぬ詞をもえらび侍らず。初心の人のためばかりにと。かたはし覺えける鷹詞。いさゝかしるし侍り。近代秀哥につゞかぬをつゞくとは。風ふり雪ふくうき風はつ雲などの様成事を見ぐるしとは申也と。定家卿の書おけるも。さながら此百首なるべし。殊更老耄管見のうへ。すべからく誤以下あるべし。博洽の人よく是をただすべきのみ。



尔時天正十七年卯月仲旬 御判

右鷹百首者。前關白太政大臣准后龍山公之御作也。太閤秀吉公并内大臣家康公依御懇望之。被染御筆畢。御下書者紹巴法眼申請之拜領。後代之重寶。名譽不可如之趣捧一札。予致在洛節遂伺候。鷹道數年執心之上。御本申出。以惡筆令書寫之。尤忤家之寶物秘藏云々。

天正十七年六月十七日 田原近江入道紹忍判

右之御本。一品式部卿。六宮。八條樣御所持被成候ヲ申請書寫申也。他見爲上。

右御本日下二部左衛門尉殿所持を書寫畢。尾州名護屋在住之時。寛永三年<sup>丙</sup>正月十三日寫之。

八木 德 溫 (花押)

〔右東求院殿龍山公鷹百首以宮内省圖書寮本校合〕

續群書類從卷第五百五十

鷹部十

後普光院殿鷹百韻連歌

二條關白殿

何路

佐保姫の鷹やあがけの山わすれ  
かすみわたれば野こそ廣けれ  
猶深き雪のしらたかはるさむし  
あすの狩場を扱いかにせん  
とりかふもまた荒鷹の心にて  
はるゝや霧の残る木のもと  
秋の末鷹の比にや成ぬらむ  
野にふく風ぞとに身にしむ  
鷹飼の山たちこめて降雪に

總檢校保己一集  
男源忠寶校

あしたかいまだくらき横ぐも  
鳥もはやとぶさの鷹を引そばめ  
とまり狩とやあすをまつらむ  
そこともしらぬ雄鷹のおしへ草  
交野のゆきの鳥のかたあと  
御幸する鷹場の夕歸りかね  
君が爲にと鳥柴をぞとる  
きり壺の水こそ鷹の藥なれ  
柳の糸をよりやとるらむ  
箸鷹のかざながれせし花散て  
くるゝぞおしき櫻がり人

鷹は猶こゝろをのこす思ひ妻

をきゑをさしてみゆる多袋

降はるゝ鷹場の雪の白兔

を聲かけてや犬はなつらむ

あはせつる鷹さへぬしにもとありて

あとはゆかしき鳥の立かた

つかれぬる雉子や鷹野にしらるらん

うき世にめぐるあはれいつまで

つながるゝ鷹のもとおしとにかくに

物おもふ身のとに夕暮

我ならず人もくるすの小鷹狩

露分こぼすすゝのしの原

たかばよりかへさの野路に月出て

心にいまはちかきふるさと

雲なれやをちとぶ鷹の山がへり

あられのみにてわたる村ざめ

雪ふれば鷹やしらふにまがふらん

葉をかくしたる草の冬がれ

末のこる鷹場の鳥の尋來て

七峯わたるけふのかり人

其すがたはとやの鷹の鈴ならし

戀しき心やはたぐひなさ

おりなれてまとはる鷹の藤ばかり

野守のかゝみ五月雨の空

又をちの鷹かひ人はたが子ぞや

またねり雲雀たちぞ兼ねる

こゑをせし鷹のみどりのうらぶれて

それとばかりの道の遠さよ

ましらふのたかさしとりて急ぐ野に

錦をみする鷹のすゝもち

みかり人ほうし姿に立出て

たか野の薄それやなかぞら

不二はまた霰のうへの朝朗

たかかほる毛も春はくもり日

吹かほる風にそうめの花散て  
けしきはいかに紅の鷹

陸奥の名にも忍ぶの忘れ草  
かりばの末の道のたてさま

霜をけば草に限りの葉の有て

毛もゆきすりの鷹のひとすへ

月寒き袖のさ衣夜を重ね

手なれてだにも鷹の野心

逢事も稀なる中をしたふ身は

おもふにも似ぬ鷹のふるまひ

山されば松にや鷹の残るらむ

たかもゆふべは霜のさゆる毛

雪に竹よるおれけなる音はして

木にはあらざる鷹のなら柴

飛鳥のゆく末暫しかくれせず

ぬすたつ鷹の心にくさよ

分過る野や白浪の花薄

羽は若鷹のおなじうづらふ

犬上やとこの山風秋ふけて

月も夜すゑの鷹のおき繩

戸ざしゝてゆるさぬ關をよも越じ

かたかへりにや鷹のあるらむ

松原のけしき青葉の花盛

しら尾の鷹のそれかあらぬか

山川や流るゝ音を聞すらむ

のりけの鷹のこゝろ淺さよ

武士の駒のあしなみかけうづら

いぬもふしみの野邊の鷹狩

百敷の日次のにえを終夜

たかえだならす山の下柴

露拂ふそでや柳のほろ衣

霧の木末の鷹のとほり羽

古郷は軒端も月の顯れて

たがすむとなき屋形尾の鷹



佗ぬるやこそすげの糸をたのむらん

そばみたかこそちかく見せけれわぐれ

染替て袖色々のかり衣

にれやまじろの鷹の逸物

雪よりもこの心の積り來て

あはする鷹のつみをしらばや

野も深しまだ見ぬ山の泊狩

あまたの鷹の名をや聞らむ

吹立る木葉斗ウイに風見えて

ちち草しるき鷹の左り羽

袖かざす乙女の姿たをやかに

諏訪を始の御代の鷹狩

此百員〔百員〕二條良基公也。梵阿之百員〔百員〕と四十

二ヶ條合て全録すべき也。

### 梵燈菴鷹詞百韻連歌

何木

箸鷹のはじめやわたるから枕 梵燈庵主

こちくる鷹ぞやがて手歸る

あら鷹ををしへてみよや夕月夜

雪まろばしのあとの鷹人

犬知らぬ鷹ばの鳥をふみたてゝ

風早のはしるはたゝく鷹匠

み山かぜあたるや鷹のさゝ衣

あられふりきて鷹のふるまひ

春鷹も繼尾の鈴の籠をさして

かばざくらをば折やたかかひ

かほる毛の鷹に残るや花衣

さほひめ鷹やあらけなるらん

月かすむ朝の鷹の遠はまり

山ふかたより鷹の左り羽

車より鷹を御狩のさがのはら

いぬや手つかれのぞくはし鷹

ふし艸をぬす立今日を鷹いみて

こぬけのたかは竹もくぐりつ

心せよあやしき鷹のとやくだけ

秋風ふけばうきぞはみ鷹

夜にかゝるひつぎの鷹は月出て

たかをすゑ野にけふ泊り山

はし鷹のねもせてさぞな思ひ妻

かたみにと見したかの餌袋

退羽打たかをまなぶや人ごゝろ

たかのうらみをしのぶ尾のたか

むかしよりしるきは鷹の白ふにて

尾羽うちからす雪摺の鷹

月うつるはよ鷹はうきさひしやく花

鷹は木ゐとるゆふ顔のかげ

巢まはりの鷹は尾をつくゑをうけて

そだてければやたか飼の山

不二風烈しき鷹のかさなられ

名も隼のとぶぞ聲なる

白鷺も黒符の鷹のそら取て

鵬のたかぞ洲崎にもすむ

魚を食鷹は淵にや望むらむ

河泊をも犬につかふ鷹人

紅のたかのはとりの引かへて

たかやこゝろをそめたまとり

月のよもはしやの鷹や飛ぬらん

かねはまくらにさゆる毛の鷹

ほこ羽つく鷹のさはるに花ちりて

まろの藤ふの鷹ぞいあがる

紫の大緒の鷹のみすゑ鳥

くさをさしつけかめる鷹犬

駒の足はまるに鷹を引すへて

鷹は身の毛をつむるものなり

一句脱

鷹場にもものむ菊のさかづき

鳥屋鷹の後もし口をくはせじと

まづほこつぼは鷹かひの道

一句脱

青さしばこそ春の色なれ

鷹に犬櫻の花毛のくすりあり

一句脱

たかの鳥すゝめがくれのむぎうづら

かすみのふとり鷹もみつけじ

つちかひの鷹は犬にもをそれぬに

鷹匠よりてまづあげよかし

ひをなげつ鷹のとりぬる朝ぼらけ

あどろにこもる鷹のもちわけ

野心の鷹も月みる夜据して

たけのうちなるたはなしの鷹

羽ならしのたかははやくとびぬらむ

つま心みよ行やはし鷹

まさるかたねたむは鷹の組合に

くろをむすぶに重ねはの鷹

はなをふむ鷹の取手のうらはしく

雪をしら尾のたかいたれかし

ひき鳥もみぬ鷹山の夕がすみ

耳かたきこそたかのくせなれ

やせたかは兎のとぶに落あひて

たがうさしきや波走るらむ

舟路にも鷹はのばゆに野は近し

須广のあそびぞ小鷹狩なる

へをたかの草はま柴にもとをれて

鷹のはかぜに動くいとほぎ

すゝもちか鷹のねずほの唐錦

つゞりあしをも鷹の装束

矢形尾やふき尾のは鷹さまゝに

なつくる鷹のきみをおもしろ

いとけなき鷹のそだちしこむきまる

かひこをとりし巢おろしの鷹

ふところに綿毛の鷹をあたくめて

春のよ鷹も寒さこのごろ

ふかはるの鷹のこゑはにおつれしに

こやまかへりのたかゞりのゆき

鷹を見て隠るゝ鳥のをしへ草

くれてぞ鷹のつかれたもろき

日ものこるひき野の月に鷹すへて

たかのそがひにくるや犬飼

鳥叫びの聲さく鷹の谷渡し

ますがきは飛米山のたか

しる鷹の向ひの花にうつりきて

野さればたかの小芝くさとり

永日もつき鷹あれば狩くらし

やしばの鷹ど名にとまりける

鷹のとく金の鳥もとまかひて

しのぶねがひも陸奥の鷹

## 箸鷹和歌文字抄

脚革の名は劔形に脛布やま

餌喰草分手とり械崎

架跨見鷹の大緒は五寸なり

一文字さりさして好まず

鶴の大緒は四尺五寸なり

つねは三尺五寸とぞさく

架またぎ四寸なるべし鶺鴒も

一文字さり見るもうるさし

萬鷹條の文字は大つなぎ

また鷹緒とも書て能なり

弟鷹は七曜まなぶ七くさり

または天神七代としれ

小鎖の五ツは五常兄鷹繫ぎ

または地神の五代としれ



小鎖は三つにもつなぐ鵲は

三世をまなぶものと知べし

埤出す鷹は一の羽落しより

四十二日目能ころとしれ

一の羽や二か目三ッめ四ッ五ッ

六ッめ折目とかこふ鷹の羽

鷹の尾は大石打に小石打

なら尾鳴ら羽たすけ鈴付

(し説巻)

幾年をふる山鵲見わけんは

打爪の根の節に顯わす

ひさご花年に隨ふやま鵲

白きところのかと増り行

一二埤上爪黒く底赤し

三埤は是にうら表あり

四五の埤上爪赤く底白く

白筋ありとかねて知べし

六七の埤は上爪黒くして

赤筋ありと思ひしるべし

八九埤爪のしらける物ぞかし

心をとめて見分べきなり

十十一底はくろくて上爪の

黄にこそ色の見へ渡るなれ

鵲の目瘤のあらばこゝろせよ

十に七ッはしけつきのもの

かわりぞと人の名付る鷹ならば

爪根石打こゝろして見よ

きみしらず石打爪根かわりなさ

幾年経てもたゞならぬ鷹

懸爪とまた鳥搦そのあいだ

五寸かにあわば弟のはやぶさ

鷹はたゞこめに光りの強くして

爪は小さく指は長かれ

能鷹はいつも毛薄ふ長ふして

餌つぼの廣きことを第一

胴丸く肩股ひろく骨ふとく

ひほねの長き鷹ぞゆゝしき

箸鷹の請貝よりも尾す毛まで

赤生はもみぢ大赤生なり

請貝や尾すげくこかの大黒生

茂生の鷹と是やいふらむ

箸鷹は先はよき餌に第二には

扱ひ人は灸てすりなり

橋鷹に切飼時の作り餌は

薄く廣かれ骨も荒かれ

箸鷹の餌は薄廣く骨あらく

作り飼べしそゝろ能との（も鰐）

はし鷹に細なる餌は好まずよ

若ひとかゝりあるもしられず

鷹に餌をひらかば聞け詰る日は

哀れ飼せぬものとしるべし

詰もせずひらさも得せぬ鷹ならば

長肉となるものとしるべし

瘦鷹の身の毛をつめる物ならば

ねつあるものと思ひしるべし

肉高き鷹の身の毛をゆるすこそ

ひへたるよとは兼てしるべし

内の冷外に熱をはし鷹は

そゝろを上げぬ物としるべし

洗餌を好て飼や世の中の

鷹に虫氣のなきは稀成

黄水をやともすればはし鷹の

あぐるはむし氣有としるべし

箸鷹の餌を打ことは餌違ひか

また胸に熱有ことしるべし（も鰐）

餌違ひの鷹と思はゞ羽を垂て

胸の毛こそは三段にたつ

餌違ひの鷹は腰ぬけ息喚か

黒うち亂れ羽杖つくなり

箸鷹のいどみ心に見へたらば

いそぎひき餌に又は活鳥

詰り氣の鷹は小うちに數有て

架や舉にかゝるとはしれ

箸鷹の虱わくものあるならば

餌かさ飼とも肉ひくとしれ

黒うちのとけて亂るゝ物ならば

匂ひもあらん胴熱の鷹

白狸の黄に色替る病ひ鷹

胴氣胴たけうたがひもなし

箸鷹の白狸とけて黒うちは

たゞよきころに亂れぬぞよき

うち持のひほねはづれに丸うして

猶かたよらば病なきたか

はきくもねひき増り行やみ鷹は

十死一生なるものとしれ

箸鷹の餌にこそよけれいつとても

籠しめになき雀なりせば

春夏の雲雀は鷹の餌にもよし

秋飼さうへほしきものなり

青しとゝ頭をさりて鷹の餌に

飼は能なり血熱さまして

頭高せつにも同じ鷹の餌に

能とおもひて悦びてかへ

ほう白やほう赤などの古き餌は

鷹にあたると氣を付て飼

木つゝきや鵲鵲鵲に小虫喰

虫氣の鷹の餌にやよからん

鷹の餌にむく鳥おけらまめ廻し

さして好めものとしるべし

連じやくやあかすひぬかに河原ひば

あととりもさして鷹に好まず

折としれ鷹餌違ひの有ものは

あととりほう白つゝみなりけり

ひよどりや赤はらつぐみ鷹の餌に

ふるくは曾て好まざらまし

鷹の餌に尾長かけずば好れじ

血の氣も薄く身こわくも有

鷹の餌に鳴や千鳥は好まれじ

ましてふるくはいらぬ物かは

にうないや阿鳥も同じ時として

鷹の餌違ひ有とこそさく

田雲雀や菊頂やくわつこ鳥

たかに飼なば若や餌違ふ

鷹の餌にさろふとはしれ何鳥の

おのがかたちは替る大小

肉高き鷹に鶉を捉飼は

たてに小刀あてゝ大され

肉瘦る鷹に捉飼うづらをば

横に小刀あてゝ小切に

鷹の餌に飼ふまじき物とうの鳩

めわくわうちわづらひとなる

雉子鳩は鷹にはさしてあたらねど

餌押甲斐なく狸たけもなし

白鳩は能餌とはせじむかし人

今は虫氣の鷹にきらへり

箸鷹の餌にこそよけれ細鳥

雀十二に積り置なり

鷹がねや白はら鷹も鷹の餌に

あしくはあらぬ其日一日

白鷹は鷹に捉飼ふ時までや

しげく餌にせば惡らん物

鷹の餌に小鴨はよきと思ひしれ

眞鴨ひ鳥はまして好まず

白鷺や五位青鷺のたぐひをば

丸をば鷹に喰せよとしれ

忘るなよ鷹にかにしほ時鳥

餌違ひせじを度々に見じ



とに角に魚くふ鳥は鷹の餌に

あしかりなるとかねてしるべし

常に能餌とはいふともはし鷹の

ふるく見へなば飼まじき物

箸鷹の折餌はかわじ品を替

異成やうに飼ふ物ぞかし

鷹の餌に土餌の能は白赤や

いづれなりとも年若き犬

白赤の毛色もわかぬ名なし犬

鷹の餌にせばあたるとはしれ

鷹の餌にあたる土餌を見分んは

ちかづくはよし付ざるはいめ

四つ眼こがらかせむしうちこめや

手負狗こそ鷹にあたる餌

箸鷹のむじなは毛をもみせざらめ

命ありても鈍に成とや

兎こそ鷹のうちすく能餌なれ

折かさなればこゝろ有べし

木火土金水五色や仁義禮智信

五常五味をも鷹に學べり

觀世音普賢不動に毘沙門は

鷹をさづくる四佛とはしれ

一つ鷹一居なれや二たつより

連文子おばもとゝ讀なり

忘るなよ手をもてせまし鷹鷲り

露にも濡てかわきかねたる

弟鷹は面嫌ひするものなれば

むかしはしゝを送りてぞみし

手を嫌ふ物と思はじ鶉の

毛を吹分て肉もこそみめ

埒鷹は呼渡すなり新鷹は

呼廻ども呼置るとも

〔立鷹〕

箸鷹の羽飛といへる文字には

鳩飛なれや羽翔とも書

若鷹は賞翫にせよ埒鷹は

一度なりともまり渡すべし

弟兄鷹を二度に人に渡しなば

跡はかならず弟鷹ぞかし

弟鷹に又鶯をさしそへて

渡さば先に眞鷹ぞかし

鷹の策尺にあはせて見る時は

ひさく華まで□すに入べし

水總を柄杓花とも書ぬべし

文字違ひてはいふなたる策

鷹熱條の總も非尺はな

尺にはいらぬ物ゆへぞかし

箸鷹の尾さきの白き所をば

拾華とは文字に書なり

箸鷹の亂れ脚結といふことは

縫はて其まゝさすを云なり

右百首當家の甚秘書たりといへども相傳する物也。末代に至り散亂無之様可心懸事也。

天正十三年十月三日

淺利兵庫助政義判

津田小八郎殿

以宮内省圖書寮所藏塙氏原本再校了  
芝葛盛

大正元年十二月十一日印刷  
 昭和元年十二月十五日發行  
 昭和二年八月十五日發行  
 昭和十五年十二月十七日發行

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八  
 續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

東京市淀橋區戸塚町二丁目一〇九

永島喜代次郎

東京市淀橋區戸塚町二丁目一〇九

新英社印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七 電話大塚七一八

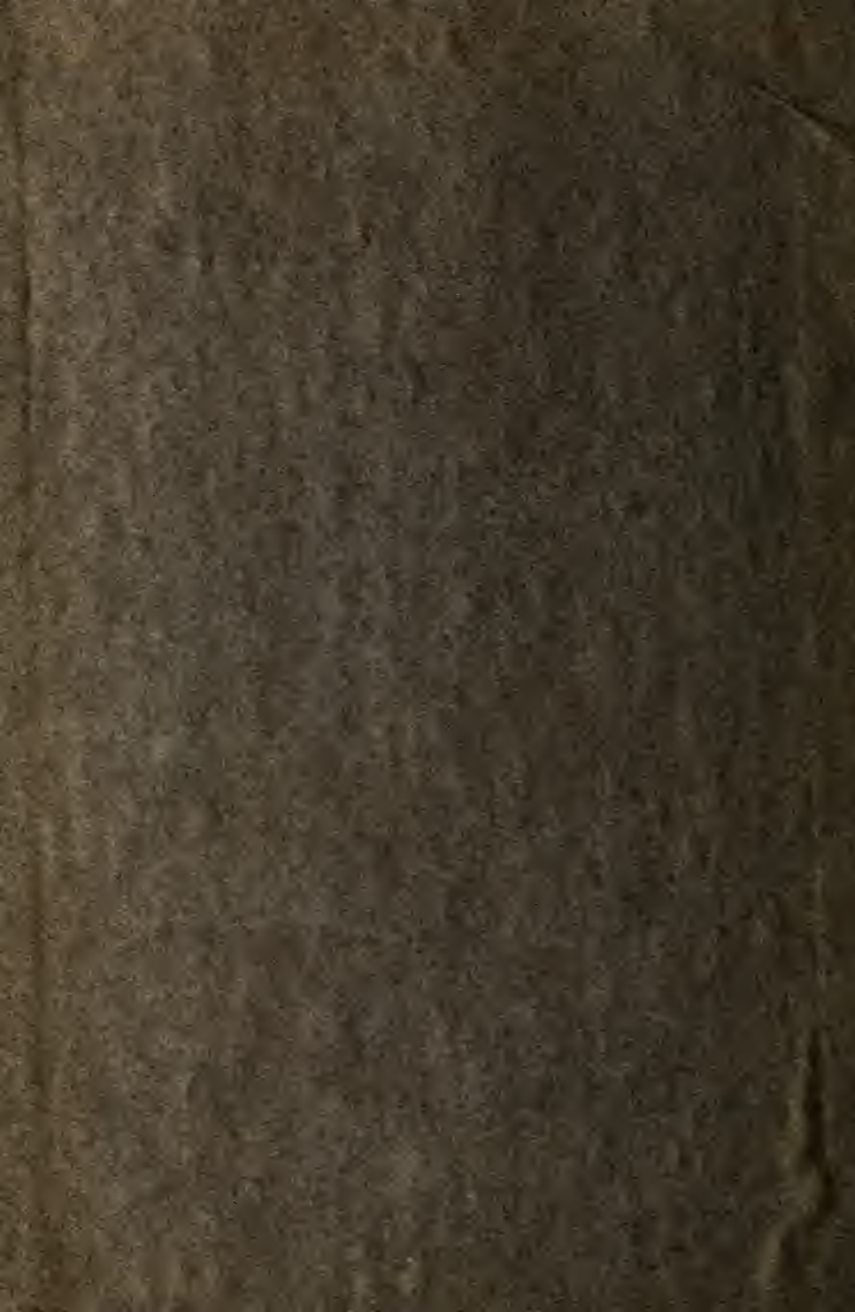
不許  
 複製













EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 3676